高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告第１冊

東山崎・水田遺跡

第１分冊

1992．11

香川県教育委員会
㈶香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告第１冊
「東山崎・水田遺跡」正誤表

頁	行	誤	正
232	33	691は角釘で，下端部を	691は角釘で，先端部を
345	30	レンズ状に堆積している下層は	レンズ状に堆積している。下層は
352	30	しているている。	している。
407	22	される香川氏は	される。香川氏は

遺跡全景　西より

140

473

140 銅製品皿　473 漆塗椀

序

香川県東部の幹線道路の一つとなる高松東道路の建設に伴い香川県教育委員会は，昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して，８遺跡の発掘調査を実施してまいりました。

その調査成果につきましては，今回「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊」として刊行いたします東山崎・水田遺跡より順次報告してまいる予定であります。

高松市東山崎町に所在します東山崎・水田遺跡の調査では，中世後半から近世初期の有力農民層のものと考えられる溝や濠によって囲まれた屋敷地が検出され，多数の国産陶磁器に混じって中国産陶磁器や木製品が出土し，当時の政治経済や流通などを考えるうえで，また一般庶民の生活の具体像を想像するうえで，貴重な資料が明らかとなりました。

本報告が，高松平野の中・近世史研究の資料として広く活用されると共に，埋蔵文化財に対する理解と関心が深められる一助となれば幸いであります。

最後になりましたが，発掘調査から出土品の整理・報告書の刊行に至るまでの間，建設省四国地方建設局及び関係諸機関並びに地元関係各位に多大な御協力，御指導をいただきました。ここに深く感謝いたしますとともに，今後とも御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成４年11月

香川県教育委員会

教育長　　松繁　壽義

例　　言

1．本報告書は，高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第１冊で，香川県高松市東山崎町に所在する東山崎・水田遺跡（ひがしやまさき・みずたいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は，香川県教育委員会が建設省四国地方建設局から委託され，香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は，試掘調査を香川県教育委員会事務局文化行政課が昭和63年６月20日～29日，７月11日～20日まで実施し，本調査を昭和63年10月１日～平成元年３月31日まで財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

試掘調査　　香川県教育委員会事務局文化行政課　安藤清和

本 調 査　　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　廣瀬直樹・牧野啓造・植松邦浩・鍋井一視・森下友子・蔵本晋司・秋山成人・吉原明美・矢野　徹

4．報告書の作成にあたっては，下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

水野正好（奈良大学），坪之内徹（奈良女子大学），三宅　寛（岡山理科大学），綾村　宏・寺崎保広・渡邊晃宏・松井　章（奈良国立文化財研究所），小野正敏（国立歴史民俗博物館），大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館），南洋一郎（福井県朝倉氏遺跡資料館），藤澤良祐・服部　郁・山下峰司（瀬戸市教育委員会），正岡睦夫・伊藤　晃・福田正継・岡本寛久・横山　定（岡山県古代吉備文化財センター），山本信夫（太宰府市教育委員会），佐戸政直（日本少林寺武道専門学校），笹川龍一（善通寺市教育委員会），唐木裕志（坂出市立金山小学校），千葉幸伸（香川県立志度商業高等学校），木村雅美（高松市立松島公民館），豊田　基（香川県東部林業事務所），野中寛文（香川県学事文書課），古市光信（香川県三木町立田中小学校），徳山久夫（香川県瀬戸内海歴史民俗資料館），国立公文書館，香川用水記念資料館，善通寺市教育委員会，大川町教育委員会，仲南町教育委員会，鎌田共済会郷土博物館

5．本遺跡の報告にあたっては，下記に鑑定を依頼し，玉稿をいただいた。

動物遺存体　　松井　章（奈良国立文化財研究所）

6．本報告書で用いる方位の北は，国土座標系第Ⅳ系の北であり，標高はＴ．Ｐ．を基準としている。

7．調査はＡ～Ｅ地区の５調査区に分けて行なった。また，各調査区の調査面を第○面とする。

8．遺構は下記の略号により表示しており，遺構番号は各調査区ごとの番号とした（第３表）。

ＳＡ　柵列	ＳＢ　掘立柱建物	ＳＤ　溝
ＳＥ　井戸・水溜め	ＳＫ　土坑	ＳＰ　柱穴・小穴

ＳＴ　墓　　ＳＸ　不明遺構　　ＳＹ　橋

9．遺物実測図は，断面の表示によって次のように分類した。

弥生土器・土師器・土師質土器・瓦器・瓦質土器　　白

須恵器・須恵質土器・陶磁器　　黒

また，陶磁器については，遺物番号の横に産地と種類を次のように表示した。

緑	緑釉陶器	唐灰	唐津灰釉	唐鉄絵	唐津鉄絵
唐鉄	唐津鉄釉	唐天	唐津天目	唐刷	唐津刷毛目
肥青	肥前青磁	肥白	肥前白磁	肥染	肥前染付
肥陶染	肥前陶胎染付	肥後鉄	肥後焼鉄釉	京	京焼風陶器
瀬灰	瀬戸・美濃灰釉	瀬鉄	瀬戸・美濃鉄釉	瀬錆	瀬戸・美濃錆釉
瀬天	瀬戸・美濃天目	瀬掛	瀬戸・美濃掛分	備	備前焼
常	常滑焼	国陶	国産陶器	中青	中国産青磁
中白	中国産白磁	中青白	中国産青白磁	中染	中国産染付
中褐	中国産褐釉	中天	中国産天目		

10．本報告書は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが作成した。

本書の執筆分担は下記のとおりである。編集は，森下・蔵本が担当した。

第１章第１節 …… 大山

第１章第２節，第３章第２節３・４・５，第６章…… 蔵本

第２章，第３章第１節・第２節１・２・３，第５章…… 森下

本　文　目　次

第１分冊

巻頭図版

序文

例言

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経過…… 1

第２節　調査の経過…… 3

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境…… 11

第２節　歴史的環境…… 35

第３章　調査の成果

第１節　土層…… 43

第２節　遺構・遺物

１．A地区…… 50

２．B地区…… 80

３．C地区…… 86

４．D地区…… 203

５．E地区…… 275

第４章　自然科学調査の成果

第１節　動物遺存体…… 352

第２節　木製品の樹種…… 358

第５章　まとめ

第１節　遺構…… 369

第２節　遺物…… 391

第６章　考察　香川県出土の中世後半期の輸入陶磁器について…… 398

遺物索引

第２分冊

写真図版

表　目　次

第 1 表　整理作業工程表…… 10
第 2 表　江戸時代の讃岐国絵図一覧表…… 17
第 3 表　東山崎・水田遺跡遺構一覧表…… 50
第 4 表　東山崎・水田遺跡出土動物遺存体…… 355
第 5 表　東山崎・水田遺跡出土木製品の樹種…… 367
第 6 表　C・D地区溝出土陶磁器…… 370
第 7 表　東山崎・水田遺跡の変遷…… 375
第 8 表　各器種の口径…… 392
第 9 表　C地区溝出土土器・陶磁器産地別，
　器種別の個体数…… 393
第 10 表　C地区溝出土土器・陶磁器産地別，
　器種別の割合…… 393
第 11 表　東山崎・水田遺跡出土の土器・陶磁器…… 394
第 12 表　東山崎・水田遺跡出土の陶磁器…… 396
第 13 表　香川県内出土輸入陶磁器一覧表…… 421
第 14 表　土器・陶磁器観察表…… 422
第 15 表　金属製品観察表…… 549
第 16 表　石製品観察表…… 556
第 17 表　木製品観察表…… 562

挿　図　目　次

第 1 図　東山崎・水田遺跡位置図…… 1
第 2 図　高松東道路路線図…… 2
第 3 図　調査区割り図…… 5•6
第 4 図　調査地周辺図…… 12
第 5 図　調査地付近の遺跡
　〈縄文時代から平安時代〉…… 13•14
第 6 図　調査地付近の遺跡
　〈鎌倉時代から江戸時代〉…… 15•16
第 7 図　寛永10年讃岐国絵図山田郡付近トレース図… 18
第 8 図　寛永10年讃岐国絵図　金比羅宮所蔵…… 19•20
第 9 図　山田郡全図　前男井間池土地改良区理事長
　香西憲吉氏夫人所蔵…… 21
第 10 図　山田郡全図トレース図…… 21
第 11 図　讃岐国絵図　鎌田共済会郷土博物館所蔵…… 22
第 12 図　讃岐国絵図　鎌田共済会郷土博物館所蔵
　トレース図…… 22
第 13 図　天保国絵図　国立公文書館所蔵…… 23
第 14 図　天保国絵図　国立公文書館所蔵
　山田郡付近トレース図…… 23
第 15 図　三木町付近新川・吉田川旧河道図…… 25
第 16 図　高松市北東部小字図…… 27•28
第 17 図　東山崎・水田遺跡付近用水路系統図…… 33•34
第 18 図　南壁土層断面模式図…… 44
第 19 図　南壁土層断面図…… 45•46
第 20 図　東山崎・水田遺跡遺構配置図…… 59•60
第 21 図　A－1区第1面上位層（橙緑灰色
　～緑灰色シルト層）出土遺物…… 62
第 22 図　A－1区第1面下位畑耕作土・第2面上位層
　（茶灰色シルト層）出土遺物…… 62
第 23 図　A－1区第2面下位層（緑灰色～
　淡茶褐色細砂から小礫層）出土遺物…… 62
第 24 図　A－1区第1面遺構配置図…… 63•64

第25図　A－1区第2面遺構配置図…… 65•66
第26図　A－2区第1面上位層
（濁橙灰色シルト層）出土遺物…… 68
第27図　A－2区SD02断面図…… 68
第28図　A－2区第1面遺構配置図
第1面よりも上位からの掘り込み…… 69•70
第29図　A－2区第1面遺構配置図…… 71•72
第30図　A－2区第2面遺構配置図…… 73•74
第31図　A－2区第3面遺構配置図…… 75•76
第32図　A－2区第1面西部畑耕作土層
（灰褐色細砂層）出土遺物…… 77
第33図　A－2区第1面東部畑耕作土層
（灰褐色シルト層）出土遺物…… 77
第34図　A－2区第3面下位層氾濫原
（褐灰色～青灰色粗砂から小礫層）出土遺物… 77
第35図　A－3区遺構配置図…… 79
第36図　A－3区第1面水田跡断面図…… 79
第37図　B－1区遺構配置図…… 81•82
第38図　B－1区SD02出土遺物…… 83
第39図　B－1区西部第1面下位層，第2面上位層
（淡黄灰色シルト層）出土遺物…… 84
第40図　B－2区遺構配置図…… 85
第41図　B－2区遺構面上位層
（灰色細砂混じり粘土層）出土遺物…… 85
第42図　B－2区西部遺構面下位層氾濫原（乳灰色・
茶灰色シルトから小礫層）出土遺物…… 85
第43図　C地区遺構配置図〔1〕…… 86
第44図　C地区遺構配置図〔2〕…… 87•88
第45図　C地区第1面畝溝出土遺物…… 89
第46図　C地区第1面SB01出土遺物…… 89
第47図　C地区第1面SB01平・断面図…… 90
第48図　C地区第1面SB02平・断面図…… 91
第49図　C地区第1面SB03平・断面図…… 93•94
第50図　C地区第1面SB03出土遺物…… 93•94
第51図　C地区第1面SB04平・断面図…… 95
第52図　C地区第1面SB05平・断面図…… 95
第53図　C地区第1面SB04出土遺物…… 96
第54図　C地区第1面SB06平・断面図…… 97•98
第55図　C地区第1面SB06出土遺物…… 97•98
第56図　C地区第1面SB07平・断面図…… 99
第57図　C地区第1面SB07出土遺物…… 100
第58図　C地区第1面SB08平・断面図…… 100
第59図　C地区第1面SB09平・断面図…… 101
第60図　C地区第1面SB10平・断面図…… 102
第61図　C地区第1面SB11平・断面図…… 102
第62図　C地区第1面SB12平・断面図…… 103•104
第63図　C地区第1面SB13平・断面図…… 106
第64図　C地区第1面SB14平・断面図…… 107
第65図　C地区第1面SB15出土遺物…… 107
第66図　C地区第1面SB15平・断面図…… 109•110
第67図　C地区第1面SY01平・断面図…… 111
第68図　C地区第1面SE01平・断面図，出土遺物… 112
第69図　C地区第1面SE02平・断面図…… 113
第70図　C地区第1面SE02出土遺物…… 114
第71図　C地区第1面SE03平・断面図…… 115
第72図　C地区第1面SE03出土遺物〔1〕…… 116
第73図　C地区第1面SE03出土遺物〔2〕…… 117
第74図　C地区第1面SE03出土遺物〔3〕…… 118
第75図　C地区第1面SE04・SK17平・断面図…… 119
第76図　C地区第1面SE04出土遺物…… 120
第77図　C地区第1面SK17出土遺物…… 121
第78図　C地区第1面SE05平・断面図…… 122
第79図　C地区第1面SE05出土遺物〔1〕…… 123
第80図　C地区第1面SE05出土遺物〔2〕…… 124
第81図　C地区第1面SE05出土遺物〔3〕…… 125
第82図　C地区第1面SE06平・断面図…… 126

第83図　C地区第1面SE06出土遺物…… 127
第84図　C地区第1面SK01平・断面図…… 128
第85図　C地区第1面SK07平・断面図，出土遺物… 129
第86図　C地区第1面SK08平・断面図，出土遺物… 129
第87図　C地区第1面SK09平・断面図，出土遺物… 130
第88図　C地区第1面SK10平・断面図，出土遺物… 131
第89図　C地区第1面SK11平・断面図，出土遺物… 132
第90図　C地区第1面SK12平・断面図，出土遺物… 132
第91図　C地区第1面SK13平・断面図，出土遺物… 133
第92図　C地区第1面SK14平・断面図，出土遺物… 133
第93図　C地区第1面SK15平・断面図，出土遺物… 134
第94図　C地区第1面SK16平・断面図，出土遺物… 134
第95図　C地区第1面SK18平・断面図，出土遺物… 136
第96図　C地区第1面SK20出土遺物…… 137
第97図　C地区第1面SK21平・断面図…… 137
第98図　C地区第1面SK22平・断面図…… 137
第99図　C地区第1面SK22出土遺物…… 138
第100図　C地区第1面SK24平・断面図…… 138
第101図　C地区第1面SK25平・断面図…… 138
第102図　C地区第1面SK26平・断面図…… 139
第103図　C地区第1面SK27平・断面図…… 139
第104図　C地区第1面SK27出土遺物…… 140
第105図　C地区第1面SP239
平・断面図，出土遺物…… 141
第106図　C地区第1面SP261
平・断面図，出土遺物…… 141
第107図　C地区第1面SP266
平・断面図，出土遺物…… 142
第108図　C地区第1面SP285 平・断面図…… 143
第109図　C地区第1面SP285 出土遺物…… 143
第110図　C地区第1面SP286
平・断面図，出土遺物…… 144
第111図　C地区第1面SP240 ～SP250 出土遺物… 145
第112図　C地区第1面SP251 ～SP275 出土遺物… 146
第113図　C地区第1面SP276 ～SP287 出土遺物… 147
第114図　C地区第1面SD02断面図，出土遺物…… 150
第115図　C地区第1面SD03
断面図，出土遺物〔1〕…… 151
第116図　C地区第1面SD03出土遺物〔2〕…… 152
第117図　C地区第1面SD04断面図…… 153
第118図　C地区第1面SD04堰状遺構平・断面図…… 153
第119図　C地区第1面SD04出土遺〔1〕…… 154
第120図　C地区第1面SD04出土遺物〔2〕…… 155
第121図　C地区第1面SD05・SK25断面図…… 157
第122図　C－2南拡張区第1面SD05遺物出土状況
…… 159•160
第123図　C地区第1面SD05出土遺物〔1〕…… 161
第124図　C地区第1面SD05出土遺物〔2〕…… 162
第125図　C地区第1面SD05出土遺物〔3〕…… 163
第126図　C地区第1面SD05出土遺物〔4〕…… 164
第127図　C地区第1面SD05出土遺物〔5〕…… 165
第128図　C地区第1面SD05出土遺物〔6〕…… 166
第129図　C地区第1面SD05出土遺物〔7〕…… 167
第130図　C地区第1面SD05出土遺物〔8〕…… 168
第131図　C地区第1面SD05出土遺物〔9〕…… 169
第132図　C地区第1面SD06断面図，出土遺物…… 170
第133図　C地区第1面SD07断面図…… 170
第134図　C地区第1面SD08断面図…… 170
第135図　C地区第1面SD09断面図…… 171
第136図　C地区第1面SD10断面図，出土遺物…… 171
第137図　C地区第1面SD11断面図…… 171
第138図　C地区第1面SD12断面図，出土遺物…… 171
第139図　C地区第1面SD13断面図…… 171
第140図　C地区第1面SD18断面図…… 171
第141図　C地区第1面SD19断面図…… 171
第142図　C地区第1面SD20断面図…… 172

第143図　Ｃ－２区北壁（ＳＤ20・21部分）土層図…… 173
第144図　Ｃ地区第１面ＳＤ20出土遺物〔１〕…… 174
第145図　Ｃ地区第１面ＳＤ20出土遺物〔２〕…… 175
第146図　Ｃ地区第１面ＳＤ20出土遺物〔３〕…… 176
第147図　Ｃ地区第１面ＳＤ20出土遺物〔４〕…… 177
第148図　Ｃ地区第１面ＳＤ20出土遺物〔５〕…… 178
第149図　Ｃ地区第１面ＳＤ21断面図…… 179
第150図　Ｃ地区第１面ＳＤ21遺物出土状況…… 180
第151図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔１〕…… 182
第152図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔２〕…… 183
第153図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔３〕…… 184
第154図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔４〕…… 185
第155図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔５〕…… 186
第156図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔６〕…… 187
第157図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔７〕…… 188
第158図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔８〕…… 189
第159図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔９〕…… 190
第160図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔10〕…… 191
第161図　Ｃ地区第１面ＳＤ22断面図…… 193
第162図　Ｃ地区第１面ＳＤ25断面図，出土遺物…… 193
第163図　Ｃ地区第１面ＳＤ35東部・西部断面図，
　　出土遺物…… 193
第164図　Ｃ地区第１面ＳＤ61断面図…… 194
第165図　Ｃ地区第１面ＳＤ62断面図，出土遺物…… 194
第166図　Ｃ地区第１面ＳＤ66断面図，出土遺物…… 195
第167図　Ｃ地区第１面ＳＤ67断面図，出土遺物…… 195
第168図　Ｃ地区第１面ＳＤ77断面図，出土遺物…… 196
第169図　Ｃ地区第１面ＳＸ01出土遺物…… 196
第170図　Ｃ地区第１面ＳＸ02平・断面図，出土遺物… 196
第171図　Ｃ－１南拡張区第２面遺構配置図…… 198
第172図　Ｃ－１南拡張区第３面遺構配置図…… 198
第173図　Ｃ－１南拡張区第４面遺構配置図…… 198
第174図　Ｃ地区第１面上位層出土遺物〔１〕…… 200
第175図　Ｃ地区第１面上位層出土遺物〔２〕…… 201
第176図　Ｃ－１区南壁土層断面…… 202
第177図　Ｃ－１区第１面下位，
　　第２面上位層出土遺物…… 202
第178図　Ｃ－１区第２面下位，
　　第３面上位層出土遺物…… 202
第179図　Ｃ－１区第４面下位層出土遺物…… 202
第180図　Ｃ－２区第１面下位層出土遺物…… 202
第181図　Ｄ地区第１面ＳＢ01
　　平・断面図，出土遺物…… 204
第182図　Ｄ地区第１・２面遺構配置図…… 205・206
第183図　Ｄ地区第１面ＳＢ02平・断面図…… 207
第184図　Ｄ地区第１面ＳＢ03平・断面図…… 208
第185図　Ｄ地区第１面ＳＢ04
　　平・断面図，出土遺物…… 209
第186図　Ｄ地区第１面ＳＢ05平・断面図…… 210
第187図　Ｄ地区第１面ＳＢ06
　　平・断面図，出土遺物…… 211
第188図　Ｄ地区第１面ＳＢ07平・断面図…… 212
第189図　Ｄ地区第１面ＳＢ08平・断面図…… 213
第190図　Ｄ地区第１面ＳＢ09平・断面図…… 214
第191図　Ｄ地区第１面ＳＢ10平・断面図…… 215
第192図　Ｄ地区第１面ＳＢ11平・断面図…… 215
第193図　Ｄ地区第１面ＳＥ01平・断面図…… 217
第194図　Ｄ地区第１面ＳＥ01出土遺物…… 217
第195図　Ｄ地区第１面ＳＥ02，ＳＥ03平・断面図…… 218
第196図　Ｄ地区第１面ＳＥ04平・断面図…… 219
第197図　Ｄ地区第１面ＳＥ04出土遺物〔１〕…… 220
第198図　Ｄ地区第１面ＳＥ04出土遺物〔２〕…… 221
第199図　Ｄ地区第１面ＳＫ01平・断面図，出土遺物… 222
第200図　Ｄ地区第１面ＳＫ02平・断面図…… 222
第201図　Ｄ地区第１面ＳＫ03平・断面図，出土遺物… 223
第202図　Ｄ地区第１面ＳＫ04平・断面図…… 223

第203図　D地区第１面ＳＫ05平・断面図，出土遺物… 223
第204図　D地区第１面ＳＫ06平・断面図，出土遺物… 224
第205図　D地区第１面ＳＫ07平・断面図，出土遺物… 224
第206図　D地区第１面ＳＫ08平・断面図，出土遺物… 225
第207図　D地区第１面ＳＫ10平・断面図，出土遺物… 225
第208図　D地区第１面ＳＫ11平・断面図…… 226
第209図　D地区第１面ＳＫ12，ＳＫ13平・断面図…… 226
第210図　D地区第１面ＳＫ14平・断面図，出土遺物… 227
第211図　D地区第１面ＳＫ18，ＳＫ19平・断面図…… 228
第212図　D地区第１面ＳＫ21出土遺物…… 228
第213図　D地区第１面ＳＫ22平・断面図…… 229
第214図　D地区第１面ＳＫ25平・断面図…… 229
第215図　D地区第１面ＳＫ25出土遺物…… 229
第216図　D地区第１面ＳＫ26平・断面図…… 230
第217図　D地区第１面ＳＫ27平・断面図…… 230
第218図　D地区第１面ＳＫ28出土遺物…… 230
第219図　D地区第１面柱穴出土遺物〔１〕…… 236
第220図　D地区第１面柱穴出土遺物〔２〕…… 237
第221図　D地区第１面ＳＤ01，ＳＤ02断面図…… 239
第222図　D地区第１面ＳＤ01下層遺物出土状況… 241・242
第223図　D地区第１面ＳＤ01上層出土遺物〔１〕…… 246
第224図　D地区第１面ＳＤ01上層出土遺物〔２〕…… 247
第225図　D地区第１面ＳＤ01上層出土遺物〔３〕…… 248
第226図　D地区第１面ＳＤ01上層出土遺物〔４〕…… 249
第227図　D地区第１面ＳＤ01上層出土遺物〔５〕…… 250
第228図　D地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔１〕…… 251
第229図　D地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔２〕…… 252
第230図　D地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔３〕…… 253
第231図　D地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔４〕…… 254
第232図　D地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔５〕…… 255
第233図　D地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔６〕…… 256
第234図　D地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔７〕…… 257
第235図　D地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔８〕…… 258
第236図　D地区第１面ＳＤ03断面図，出土遺物…… 259
第237図　D地区第１面ＳＤ05，ＳＤ07断面図…… 259
第238図　D地区第１面ＳＤ08断面図，出土遺物…… 260
第239図　D地区第１面ＳＤ09断面図…… 260
第240図　D地区第１面ＳＤ09出土遺物…… 260
第241図　D地区第１面ＳＤ10，ＳＤ11断面図…… 261
第242図　D地区第１面ＳＤ11出土遺物…… 262
第243図　D地区第１面ＳＤ12断面図，出土遺物…… 263
第244図　D地区第１面ＳＤ17断面図，出土遺物…… 264
第245図　D地区第１面ＳＤ18断面図，出土遺物…… 265
第246図　D地区第１面ＳＤ22断面図，出土遺物…… 265
第247図　D地区第１面ＳＤ24出土遺物…… 266
第248図　D地区第１面ＳＤ25断面図…… 266
第249図　D地区第１面ＳＤ25出土遺物…… 266
第250図　D地区第１面ＳＤ26断面図，出土遺物…… 267
第251図　D地区第１面ＳＤ29断面図…… 267
第252図　D地区第１面ＳＤ30，ＳＤ31断面図…… 268
第253図　D地区第１面ＳＤ30出土遺物…… 269
第254図　D地区第１面ＳＤ31出土遺物…… 270
第255図　D地区第１面ＳＤ34出土遺物…… 270
第256図　D地区第１面ＳＸ01平・断面図…… 270
第257図　D地区第１面ＳＸ01出土遺物…… 271
第258図　D地区第１面ＳＸ04出土遺物…… 271
第259図　D地区第１面ＳＸ04断面図…… 271
第260図　D地区第１面上位包含層出土遺物…… 272
第261図　D地区第２面ＳＤ50土層断面図…… 274
第262図　D地区遺構面下位層出土遺物…… 274
第263図　E地区第１面ＳＢ01平・断面図…… 276
第264図　E地区第１面ＳＢ01出土遺物…… 276
第265図　E地区第１面遺構配置図…… 277・278
第266図　E地区第１面ＳＢ02平・断面図…… 279
第267図　E地区第１面ＳＢ02出土遺物…… 279
第268図　E地区第１面ＳＢ03平・断面図…… 280

第269図　E地区第1面SB04平・断面図…… 280
第270図　E地区第1面SB05平・断面図…… 281
第271図　E地区第1面SB06平・断面図…… 282
第272図　E地区第1面SB07平・断面図…… 282
第273図　E地区第1面SB08平・断面図…… 283
第274図　E地区第1面SB09平・断面図…… 284
第275図　E地区第1面SB10平・断面図…… 284
第276図　E地区第1面SB11平・断面図，出土遺物… 285
第277図　E地区第1面SE01平・断面図…… 286
第278図　E地区第1面SE01上層出土遺物…… 287
第279図　E地区第1面SE01下層出土遺物…… 288
第280図　E地区第1面SE02平・断面図…… 290
第281図　E地区第1面SE02上層出土遺物〔1〕…… 291
第282図　E地区第1面SE02上層（23～26），
　　下層（27～34）出土遺物〔2〕…… 292
第283図　E地区第1面SE02下層出土遺物〔3〕…… 293
第284図　E地区第1面SE03平・断面図…… 294
第285図　E地区第1面SE03出土遺物〔1〕…… 295
第286図　E地区第1面SE03出土遺物〔2〕…… 296
第287図　E地区第1面SE04平・断面図…… 297
第288図　E地区第1面SE04出土遺物…… 298
第289図　E地区第1面SE05平・断面図…… 299
第290図　E地区第1面SE05出土遺物〔1〕…… 300
第291図　E地区第1面SE05出土遺物〔2〕…… 301
第292図　E地区第1面SE06平・断面図…… 302
第293図　E地区第1面SE06出土遺物…… 302
第294図　E地区第1面SE07平・断面図…… 303
第295図　E地区第1面SE07出土遺物〔1〕…… 303
第296図　E地区第1面SE07出土遺物〔2〕…… 304
第297図　E地区第1面SE07出土遺物〔3〕…… 305
第298図　E地区第1面SK02平・断面図…… 306
第299図　E地区第1面SK02出土遺物…… 306
第300図　E地区第1面SK03平・断面図…… 307
第301図　E地区第1面SK04平・断面図，出土遺物… 307
第302図　E地区第1面SK05平・断面図，出土遺物… 308
第303図　E地区第1面SK06平・断面図…… 308
第304図　E地区第1面SK07平・断面図…… 308
第305図　E地区第1面SK08平・断面図…… 309
第306図　E地区第1面SK08出土遺物〔1〕…… 309
第307図　E地区第1面SK08出土遺物〔2〕…… 310
第308図　E地区第1面SK10平・断面図，出土遺物… 311
第309図　E地区第1面SK11平・断面図，出土遺物… 312
第310図　E地区第1面SK13平・断面図…… 312
第311図　E地区第1面SK15平・断面図…… 313
第312図　E地区第1面SK16平・断面図，出土遺物… 313
第313図　E地区第1面SK19平・断面図，出土遺物… 314
第314図　E地区第1面SK20平・断面図…… 314
第315図　E地区第1面SK21平・断面図，出土遺物… 315
第316図　E地区第1面柱穴出土遺物…… 317
第317図　E地区第1面SD01断面図…… 318
第318図　E地区第1面SD01出土遺物…… 318
第319図　E地区第1面SD02断面図…… 319
第320図　E地区第1面SD02出土遺物…… 319
第321図　E地区第1面SD03断面図…… 320
第322図　E地区第1面SD03出土遺物…… 321
第323図　E地区第1面SD04断面図…… 322
第324図　E地区第1面SD04出土遺物…… 322
第325図　E地区第1面SD05断面図…… 323
第326図　E地区第1面SD05集石遺構検出状況…… 323
第327図　E地区第1面SD05出土遺物〔1〕…… 324
第328図　E地区第1面SD05出土遺物〔2〕…… 325
第329図　E地区第1面SD05出土遺物〔3〕…… 326
第330図　E地区第1面SD05出土遺物〔4〕…… 327
第331図　E地区第1面SD06断面図…… 328
第332図　E地区第1面SD06出土遺物…… 328
第333図　E地区第1面SD07断面図，出土遺物…… 329

第334図　E地区第１面ＳＤ08断面図…… 329
第335図　E地区第１面ＳＤ09断面図…… 329
第336図　E地区第１面ＳＤ09出土遺物〔１〕…… 330
第337図　E地区第１面ＳＤ09出土遺物〔２〕…… 331
第338図　E地区第１面ＳＤ10断面図…… 332
第339図　E地区第１面ＳＤ10平面図…… 333
第340図　E地区第１面ＳＤ10出土遺物〔１〕…… 334
第341図　E地区第１面ＳＤ10出土遺物〔２〕…… 335
第342図　E地区第１面ＳＤ11断面図…… 335
第343図　E地区第１面ＳＤ12断面図…… 335
第344図　E地区第１面ＳＤ13断面図，出土遺物…… 336
第345図　E地区第１面ＳＤ14断面図…… 336
第346図　E地区第１面ＳＤ15断面図…… 336
第347図　E地区第１面ＳＤ17平・断面図，出土遺物… 337
第348図　E地区第１面ＳＤ18断面図…… 338
第349図　E地区第１面ＳＤ19断面図…… 338
第350図　E地区第１面ＳＤ20，ＳＤ21断面図…… 338
第351図　E地区第１面ＳＸ01断面図…… 339
第352図　E地区第１面ＳＸ01出土遺物…… 339
第353図　E地区第１面ＳＸ02断面図，出土遺物…… 340
第354図　E地区第１面ＳＸ03断面図，出土遺物…… 340
第355図　E地区第１面ＳＸ05断面図，出土遺物…… 340
第356図　E地区第１面ＳＸ06断面図，出土遺物…… 341
第357図　E地区第１面ＳＴ01平・断面図…… 342
第358図　E地区第１面上位包含層出土遺物…… 342
第359図　E地区第２面遺構配置図…… 343・344
第360図　E地区第２面ＳＥ08平・断面図…… 346
第361図　E地区第２面ＳＥ08出土遺物…… 346
第362図　E地区第２面ＳＰ106 出土遺物…… 346
第363図　E地区第２面ＳＤ25断面図，出土遺物…… 347
第364図　E地区第２面ＳＤ26断面図…… 347
第365図　E地区第２面ＳＤ27断面図，出土遺物…… 348
第366図　E地区第２面ＳＤ28断面図，出土遺物…… 348
第367図　E地区第２面ＳＤ29断面図，出土遺物…… 349
第368図　E地区第２面ＳＤ30断面図…… 349
第369図　E地区第２面ＳＤ31断面図…… 349
第370図　E地区遺構面下位層出土遺物…… 350
第371図　東山崎・水田遺跡Ｃ～Ｅ地区の変遷…… 376
第372図　Ｃ地区第１面　集落の変遷…… 379
第373図　Ｄ地区第１面　集落の変遷…… 381
第374図　東山崎・水田遺跡…… 383
第375図　善通寺市上一坊遺跡…… 384
第376図　善通寺市上一坊遺跡…… 385
第377図　善通寺市中村遺跡…… 386
第378図　善通寺市中村遺跡…… 387
第379図　坂出市下川津遺跡…… 388
第380図　坂出市下川津遺跡…… 389
第381図　東山崎・水田遺跡の土地利用…… 390
第382図　香川県内輸入陶磁器出土遺跡分布図…… 399
第383図　香川県内輸入陶磁器実測図〔１〕…… 416
第384図　香川県内輸入陶磁器実測図〔２〕…… 417
第385図　香川県内輸入陶磁器実測図〔３〕…… 418
第386図　香川県内輸入陶磁器実測図〔４〕…… 419
第387図　香川県内輸入陶磁器実測図〔５〕…… 420

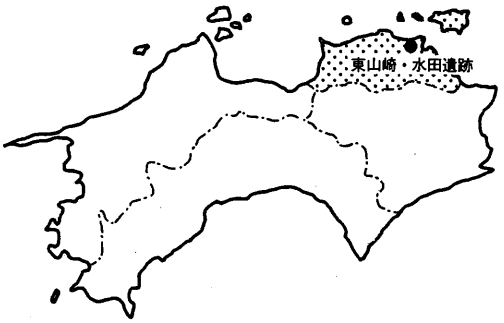
巻　頭　図　版　目　次

巻頭図版１　本遺跡全景
巻頭図版２　銅製品皿，漆塗椀

第1章　調査経緯

第１節　調査に至る経過

国道11号バイパス「高松東道路」の建設が昭和53年に都市計画決定されたことに伴い，工事に先立ち当該予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて，香川県教育委員会と建設省四国地方建設局香川工事事務所との間で協議がなされ，記録保存の方向が決定された。



第１図　東山崎・水田遺跡位置図

これを受けて，香川県教育委員会では当該用地内の遺跡範囲を確定する目的で，国庫補助事業として当該地の試掘調査を用地買収の進捗に合せて順次実施した。

第１次の試掘調査は，昭和61年12月17日から25日まで，高松市上天神町，三条町において実施し，上天神遺跡の範囲を確定した（註１）。

この結果，昭和62年11月には上天神遺跡の一部，約5,000㎡の範囲で本調査に着手した。

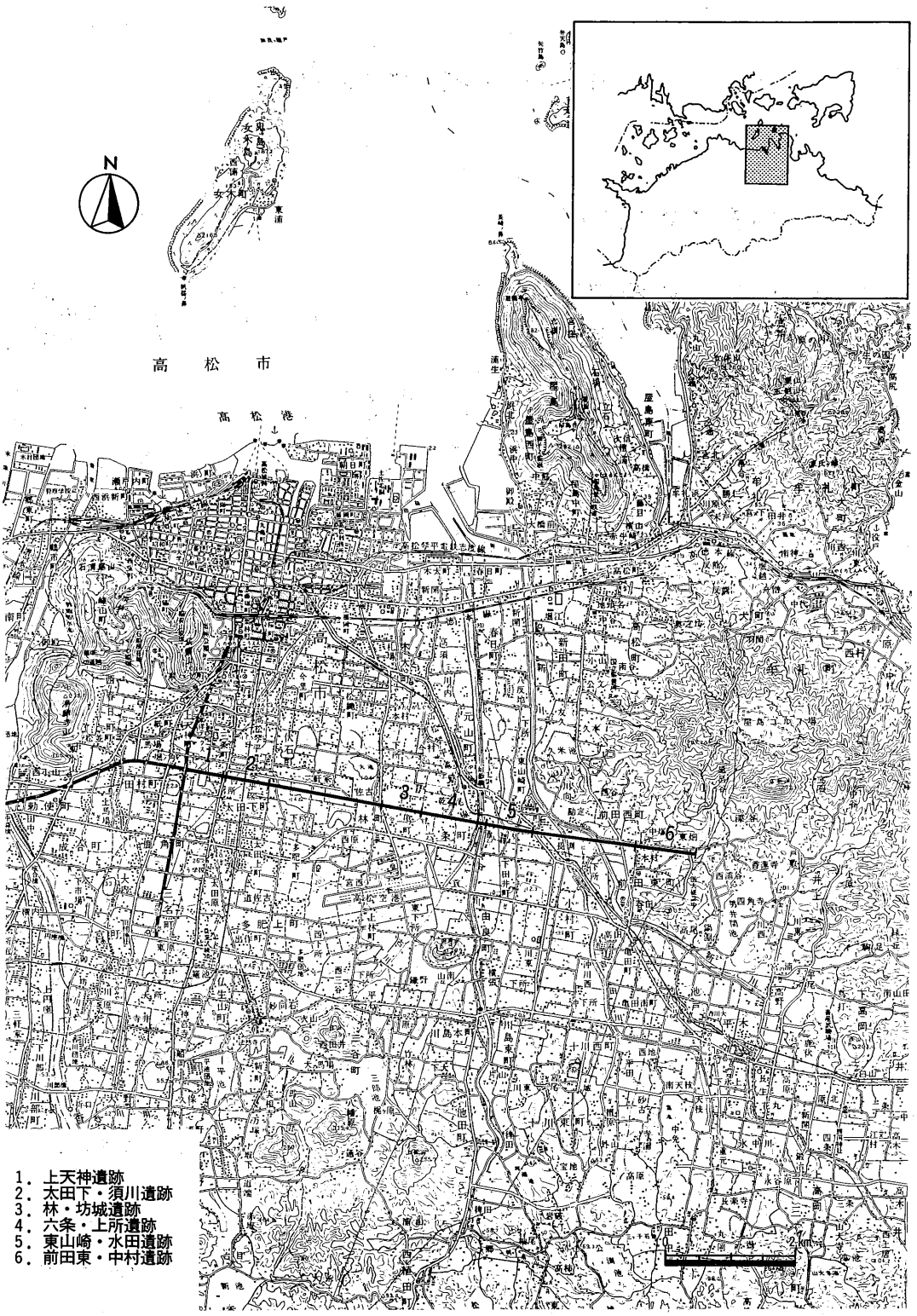
第２次の試掘調査は，昭和62年10月５日～31日の期間で，高松市林町，六条町において実施し，林・坊城遺跡，六条・上所遺跡の範囲を確定した（註２）。

第２次の試掘調査の結果を受けて，昭和62年11月13日に昭和63年度実施予定の国道バイパス埋蔵文化財発掘調査事業に係る調査計画及び予算について，建設省四国地方建設局香川工事事務所と香川県教育委員会事務局文化行政課とで協議が行なわれた。

これらの協議と平行して香川県教育委員会では，高松東道路，四国横断自動車道（高松～善通寺）等の大規模開発に伴う埋蔵文化財調査の円滑化を図る目的で，昭和62年11月１日付けで財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置し，昭和63年４月１日から調査を担当させるべく調査体制の整備に着手した。

昭和63年度からの本調査は，香川県教育委員会を調査主体として，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当として実施している。

香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターは，昭和63年４月１日付け「埋蔵文化財調査委託契約書」を締結し，前年度までに調査対象面積が確定していた上天神遺跡，林・坊城遺跡，六条・上所遺跡について調査を実施することになった。



第２図　高松東道路路線図（1/100,000）

本調査と並行して香川県教育委員会では，昭和63年6月20日～7月20日，平成元年1月19日～1月31日に第3次の試掘調査を高松市太田下町，東山崎町，前田東町において実施し，太田下・須川遺跡，東山崎・水田遺跡，前田東・中村遺跡の調査対象面積を確定した(註3)。

このうち，東山崎・水田遺跡，前田東・中村遺跡については，発掘調査を財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに追加委託することになり，昭和63年6月30日付け「埋蔵文化財調査委託契約書の一部を変更する契約書」を締結した。

上記の経緯により，昭和63年10月1日から平成元年3月31日の期間で，東山崎・水田遺跡の本調査が実施された。

第2節　調査の経過

1．発掘調査の経過

東山崎・水田遺跡は，高松市東山崎町に所在する。発掘調査は昭和63年10月1日に開始され，平成元年3月31日に終了した。

昭和63年度の調査体制は，以下のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	廣瀬和孝
	課長補佐	高木　尚
	副主幹	野網朝二郎（6.1 ～）
総務	係長	宮谷昌之（～5.31）
	主事	横田秀幸（6.1 ～）
	主事	水本久美子
埋蔵文化財係長		大山真充
	主任技師	安藤清和
	技師	國木健司

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	田丸秀明
	次長	小原克己
総務	主査(事務)	加藤正司
	主査(土木)	山地　修（6.1～）
	主任主事	近藤紀文
	参事	前田輝夫
調査	係長	廣瀬常雄
	文化財専門員	廣瀬直樹
	主任技師	牧野啓造
	主任技師	植松邦浩
	主任技師	鍋井一視
	技師	森下友子
	技師	蔵本晋司
	調査技術員	秋山成人
	調査技術員	矢野　徹
	調査技術員	吉原明美

調査区の設定は，複数の市道・私道が調査対象地を横切り，また用水路などの保守の必要が

あったため，南北方向は路線幅，東西方向は道路や用水路を境とするＡ～Ｅの調査区を設定した。さらに現地割りや調査面積を考慮して，各地区を１～３区の小区画に分けて調査を行なった（第３図）。

調査の基準となる杭は，国道建設予定地のセンターライン上に20m間隔で打設した。さらに，航空測量の際に同時に基準点測量を行い，国土座標との対応をはかった。

遺構番号は，調査時に設定した番号を破棄し，整理段階で調査区毎に新たに振り直した。また，遺構面が複数検出された調査区の遺構番号は遺構面の上位から通し番号を振った（第３表）。

以下に調査日誌抄を掲げて，調査の詳細について報告する。

調査日誌　（抄）

昭和63年

９月

６日から安全柵の杭を打設する。14日にＡ地区に現場事務所を設置し，調査準備を整える。

10月

７日よりＡ－２区の表土掘削を行なう。Ａ地区では，畝溝群や水田等の生産遺構を検出したが，出土遺物は乏しい。また，Ａ地区は旧河道の氾濫原上に位置しているが，土層断面の観察によって，洪水堆積層に挟まれた数枚の遺構面の存在を確認した。

18日からは，Ａ地区と並行してＣ～Ｅ地区の調査に着手した。Ｄ－２・Ｅ－２区より多数の溝・土坑・柱穴等が検出され，この地区を中心として中世から近世の集落域が広がることを確認した。月末頃より，Ｄ－２区ＳＤ01の掘削を開始する。

11月

上旬頃までにＡ地区では上層の畝溝群の調査を終了し，下層の河道の氾濫原の調査に着手した。月末にはＡ地区の調査はほぼ終了し，Ｂ地区の調査に着手した。

Ｄ－２区ではＳＤ01下層の調査に着手し，下駄や横櫛等の多数の木製品が出土し始める。

Ｅ－２区では，区画溝や柱穴群や曲物井戸等の遺構を検出した。さらに下層に遺構面の存在が確認されたため，第１面の調査を急ぎ，今月末までには第１面の遺構の掘削はほぼ終了した。

12月

寒いながらも晴天の日が続き，調査は順調に進んだ。

Ａ地区の調査はほぼ終了し，２日には完掘状況の航空写真を撮影した。

６日よりＢ地区の溝や土坑等の遺構掘削を開始し，適宜図面を作成した。14日には完掘状況の航空写真を撮影し，21日には調査を終了して現場事務所を撤去した。

第３図　調査区割り図（1/2,000）

C地区では包含層の掘削と遺構の検出作業を行った結果，C－2区の遺構密度が非常に高いことが判明した。

D－2区では中旬頃までにSD01の掘削を終了し，他の遺構の掘削を開始する。23日までには全ての遺構の掘削を終了し，航空測量を実施した。D－2区の調査はほぼ終了。

E－2区では初旬に航空写真を撮影して第1面の調査を終了した。第2面では，溝・柱穴・井戸等が検出された。

平成元年

1月

6日より調査を再開。月後半から寒さが一段と厳しくなり，また雨の影響によって調査はやや停滞気味となる。

C地区では遺構検出作業を終了した。方形区画溝に囲まれた柱穴群が検出され，中世末から近世初頭にかけての屋敷跡を確認した。28日までに遺構掘削を終了し航空測量を行なう。さらに区画溝南端の延長部分を確認するため，仮設道を撤去し調査区を南に拡張した。C－2区SD21より呪符木簡出土。

E－2区では月末までに第2面の遺構掘削を終了し，C－1区と共に航空測量を行った。

2月

上旬と中旬頃に雪や雨が数日間降った他は晴天が続く。今月は実測作業が多く，凍えながらの調査となった。

C地区ではC－1南拡張区とC－2区を中心に調査を進める。C地区下層にA地区同様数面の遺構面を確認した。下層の遺構面は畝溝群を中心としており，調査期間の関係から，C－1南拡張区のみ平面調査を行なうこととなった。月末までに第4面までの調査を終了した。

D地区ではD－1区およびD－3区の調査に着手する。D－1区では2枚の遺構面を確認した。遺構密度は低く，溝や井戸等の遺構を検出したのみであった。D－3区ではD－2区の屋敷地の延長が確認された。

E地区では上旬までにE－2区の調査を終了し，E－2区の埋め戻しを行いながらE－1区の表土掘削を開始する。E－1区では溝・土坑・井戸・柱穴等の多数の遺構を検出した。またE－2区第1面で検出していた溝の延長部分を確認し，屋敷地を囲む区画溝であることが判明した。

3月

C地区では上旬までにC－1区の調査が終了し，C－2区の調査に専念した。また，C－2区の調査終了間際に，B地区東端の未調査部分の宅地の立ち退きが完了したので，C－2区調査終了後直ちにB地区の調査に移る。

D地区でも，上旬までに航空測量を実施し，D－1・3区の調査はほぼ終了した。

Ｅ地区では最後に残ったＥ－１区を主に調査し，下旬までに全ての調査を終了した。

最後に埋め戻しや調査用具搬出，事務所撤去等現場の片付けが終わった後，実績報告等の作成を年度末までに行い，東山崎・水田遺跡の調査を終了した。

――発掘調査従事者――

井口　義行	石井　公一	石川　修二	入谷　　勇
岩田　　明	上田　政善	植田　三良	上原　米市
植松　和俊	岡　　章	樫村　光春	片山　政雄
加藤　直雄	亀井　正博	国宗　敏一	久保　茂雄
久保　秀志	窪田　　勇	倉内　雄司	黒川　　巌
見藤　信雄	小竹　　進	河野　敏文	佐々木英二
杉山　　悟	洲崎　梅雄	高木　繁夫	竹原　信一
土田　裕之	筒井　敏和	中西　信男	中西　勇二
中野　三郎	中村　　薫	長尾　政樹	原内　繁輝
東原　数一	平田　　弘	福田　　稔	藤井　　清
藤沢　　功	細川　敏好	松原　秀直	松本　照雄
宮井　　肇	三宅　健三	宮脇　満利	三好　俊二
森　　敏雄	山下　静雄	山地　秋雄	山本登美雄
吉峰　　茂	朝日　悦子	井口夫美子	出石真理子
上野キミ子	大川　玲子	大熊　智子	大島　恒子
大西　君子	大山　敏子	鎌野　公子	川田美代子
川西　鈴子	川東ミツ子	木村小百合	国方テル子
黒川　陽子	河野ミサエ	後藤代志子	佐々木由美子
柴原スミエ	柴野ゆりか	十河　恵子	十河　貞子
竹林　弘子	津村登志子	中川　幸子	中西　弥生
那須　幸子	二宮　照子	畑田　静江	華岡　利子
林　由紀子	平尾　文子	平田ツヤ子	平野理恵子
福家　美幸	藤井サヨ子	別枝由美子	前田　綾子
前田　洋子	松原　君江	松本　和子	松本　敏子
三澤　洋子	湊　トシミ	宮脇万基子	三好ちづる
村川　照美	森口すえの	森田　朱實	森本シゲ子
矢野　嵯峨	吉岡　明美	吉川　久枝	吉田　絹代
吉本みどり	米谷　昭子	渡辺　入子	和田　正子

2．整理作業の経過

整理作業は，平成3年4月1日より平成4年3月31日まで実施した。整理作業の実際は，森下がA・B地区とC－2区の遺構・遺物及びC－1区の遺物の整理と遺物観察表を，蔵本がC－1区の遺構とD・E地区の遺構・遺物の整理を分担して担当した。

平成3年度の整理体制は，以下のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	中村　仁
	主幹	菅原良弘
	課長補佐	小原克己（6.1 ～）
総務	係長	宮内憲生
	主任主事	横田秀幸（～5.31）
	主事	櫻木新士（6.1 ～）
	主事	石川恵三子
埋蔵文化財	係長	藤好史郎
	主任技師	岩橋　孝
	主任技師	北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	松本豊胤
	次長	安藤道雄
総務	係長	加藤正司（～5.31）
	係長	土井茂樹（6.1 ～）
	主任主事	黒田晃郎
国道担当	係長	大山真充
	技師	森下友子
	技師	蔵本晋司

――整理作業従事者――

石川ゆかり	市川　孝子	猪木原美恵子	大喜多　静
大西　美晴	尾方ひとみ	葛西　　薫	東條　俊子
冨家　孝子	長谷川郁子	三谷　和子	矢野日出子
山下登志子			

第１表　整理作業工程表

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
基礎整理												
遺物実測												
遺物実測図レイアウト												
遺物トレース												
遺構図レイアウト												
遺構図トレース												
観察表												
遺物写真撮影												
原稿執筆												
編集												

註１　『国道バイパス及び四国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財詳細分布・試掘調査概報』香川県教育委員会（1987）

２　『一般国道11号線高松東バイパス建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告』香川県教育委員会（1988）

３　『一般国道11号高松東バイパス建設及び県営圃場整備に伴う埋蔵文化財試掘調査報告Ⅱ』香川県教育委員会（1989）

第2章　立地と環境

第１節　地理的環境

１．位置

本遺跡は香川県のほぼ中央部，香川県高松市東山崎町に所在する。高松市の市街地から東に５kmほど離れており，周囲は水田が残る新興住宅地である。本遺跡は高松平野の東部，春日川と新川に挟まれた氾濫平野に立地し，現地表の標高は９～10mを測る。付近は大雨の際に浸水の被害をたびたび受けており，高松平野の中で最も水害を受け易い地域の一つである。

２．香東川の付け替えと高松平野

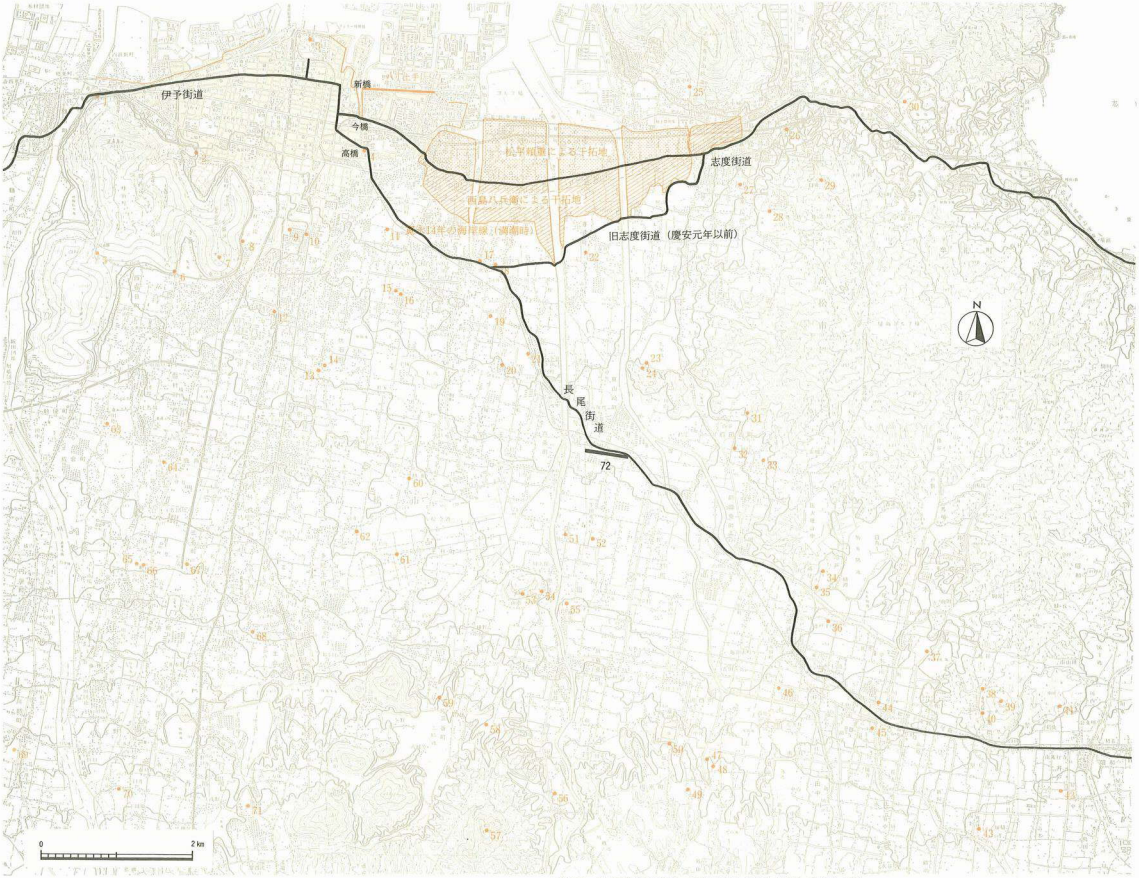
高松平野には香東川・春日川・新川など数本の河川が阿讃山脈に端を発して北流し，瀬戸内海に注いでいる。この中でも高松平野の西部を流れる香東川の流域では河川の堆積による扇状地が形成されている。

香東川は現在，石清尾山・浄願寺山の西側を北流するが，この流路は寛永２～16（1625～1639）年，高松藩主生駒高俊が高松城下の洪水を防ぐため，家臣の西島八兵衛に命じて流路を変更させたものである。これ以前の香東川の本流は高松市中心部の南側にある浄願寺山・石清尾山の東側を北東流して，高松城の東側で瀬戸内海に注いでいた。しかし，高松市川部町・寺井町付近で分流して浄願寺山・石清尾山の西側を通る現在の流れは新たに掘られたものではなく，もともとあった流れらしい(註1)。寛政３（1791）年に大野村（現在の香川郡香川町大野）の庄屋岡行昵の子岡行稚によって書かれた『大野録』にも「香渡川は，寛永の頃まて大野の郷の西より二タ沱にわかれて，一筋は一ノ宮・坂田の郷をへて室山の東をめぐり，石清尾山の下を流て，いとがはまの西に入けり。又，一筋は弦打山の西にそふて今のごとし。当邑の中州といへるは則両河の間也。寛永中，自然の河瀬深くなりて，東はあさくなりけれは，国守生駒公より堤を築きて，東の河筋を畑にひらかせたまひ，古河筋新開と号す。」(註2)とある。付け替え工事中に描かれた『寛永10年讃岐国絵図』(註3)（第７・８図）でも両方の流路が描かれており，石清尾山・浄願寺山の南側の大野郷行寺（現在の高松市寺井町字行寺）の西側で二股に分かれて流れていたことがわかる。享保４（1719）年香西成資によって書かれた『南海通記』の巻之廿にも「香河ノ流ト云ハ濱島ヨリ二里上デ河邊郷ヨリ川筋二川ニ分レ一ハ一宮坂田ニ流レ川末海ニ入ル，西ハ河邊郷ヨリ飯田山ニ附テ弦打山ニ添ヒ流ノ末大江ニ入ル」(註4)とあり，河邊郷付近で二股に分流してい

第４図　調査地周辺図（1/12,000）

1. 稲荷山姫塚古墳
2. 天満遺跡
3. 白山神社古墳
4. 小山古墳
5. 石塚古墳
6. 山下古墳
7. 山下廃寺
8. 岡山小古墳群
9. 岡山古墳群
10. 長尾古墳群
11. 南谷古墳
12. 大空遺跡
13. スベリ山南遺跡
14. 丸山古墳
15. 久本古墳
16. 大谷山古墳
17. 久米山東峰古墳
18. 久米山１号墳
19. 久米山２号墳
20. 久米山６号墳
21. 久米山４号墳
22. 久米山５号墳
23. 諏訪神社古墳
24. 久米池南遺跡
25. 高松茶臼山東古墳
26. 高松茶臼山南古墳
27. 高松浄茶臼山古墳
28. 高松茶臼山西古墳
29. 西茶臼山１号墳
30. 西茶臼山２号墳
31. 北山古墳
32. 滝本神社古墳
33. 田楽古墳
34. 金石山１号古墳
35. 金石山２号古墳
36. 平尾１号古墳
37. 平尾２号古墳
38. 平尾３号古墳
39. 平尾４号古墳
40. 山本古墳
41. 宝寿寺廃寺
42. 一字一石経塚
43. 前田東・中村遺跡
44. 権八原古墳群
45. 野倉１号墳
46. 上天神遺跡
47. 太田下・須川遺跡
48. 居石遺跡
49. 井手東Ⅰ遺跡
50. 浴・長池Ⅱ遺跡
51. 浴・長池遺跡
52. 浴・松ノ木遺跡
53. 林・坊城遺跡
54. 六条・上所遺跡
55. 東山崎・水田遺跡
56. 凹原遺跡
57. 多肥廃寺
58. 空港跡地遺跡
59. 拝師廃寺
60. 百相廃寺
61. 加摩羅神社古墳
62. 南山南遺跡・古墳
63. 平石上１号墳
64. 平石上２号墳
65. 瘤山１号墳
66. 瘤山２号墳
67. 犬の馬場遺跡
68. 矢野面古墳
69. 三谷三郎池遺跡（縄文）
70. 三谷三郎池西岸窯跡
71. 三谷三郎池遺跡
72. 高野丸山古墳
73. 高野南古墳群
74. 三谷五角古墳
75. 三谷通谷遺跡
76. 光専寺山遺跡
77. 川東１号墳
78. 川東２号墳
79. 松宇八幡馬場古墳
80. 西尾天神社古墳
81. 出之山南古墳
82. 香川大学農学部遺跡
83. 白山銅鐸出土地
84. 白山遺跡
85. 八王子古墳
86. 詫浦Ⅰ・２号墳
87. 緑ヶ丘古墳
88. 小倉東丘古墳

第５図　調査地付近の遺跡〈縄文時代から平安時代〉（1/50,000）

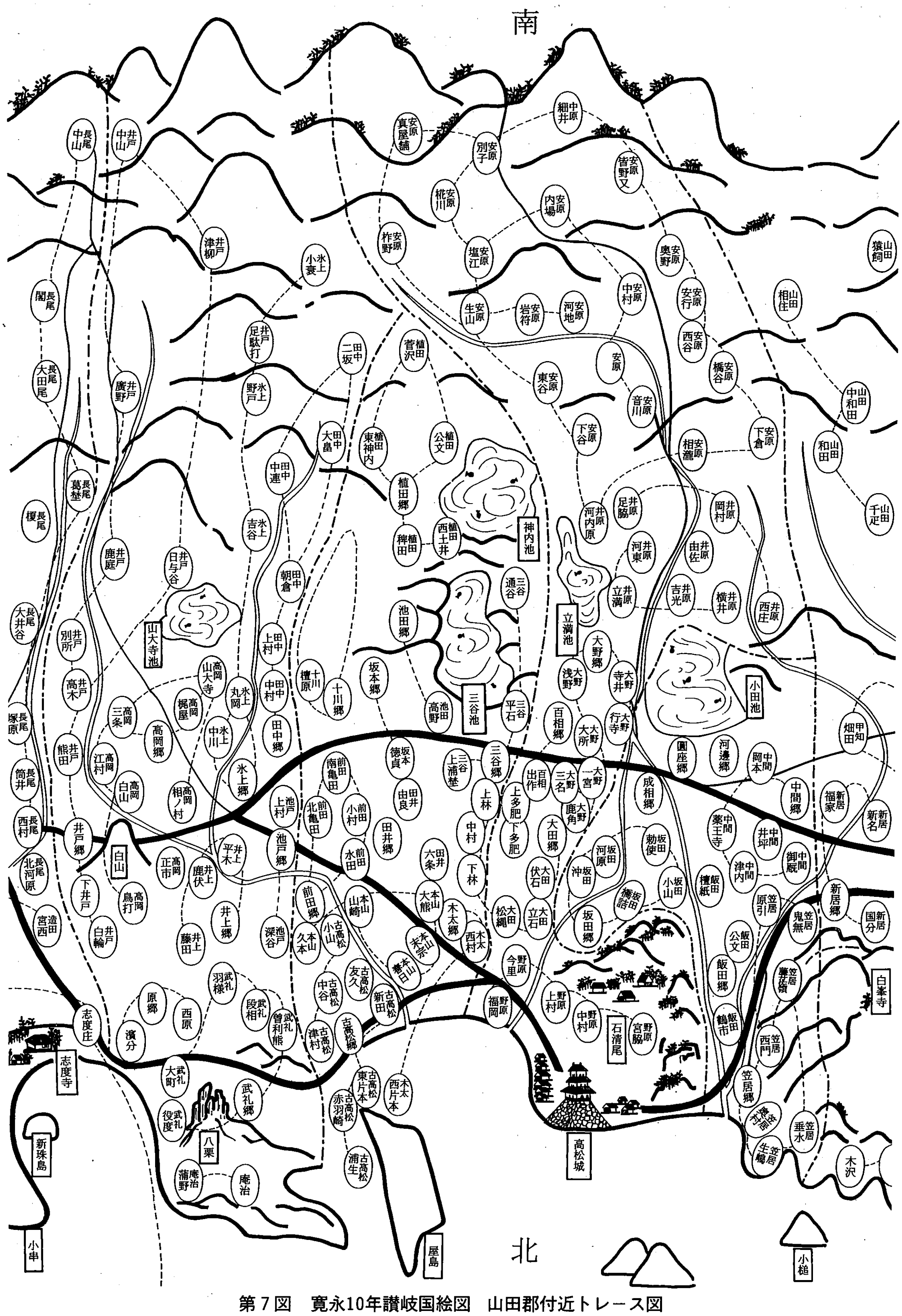


1. 松岸寺
2. 石清尾八幡神社
3. 高松城
4. 多賀神社
5. 片山城
6. 鶴尾神社
7. 峯山城
8. 観興寺
9. 妙見社
10. 上村城
11. 今里八幡宮
12. 妙楽寺
13. 立石・居石・伏石神社
14. 佐藤城
15. 熊野神社
16. 松縄城
17. 三十番神社
18. 蛭子神社
19. 神内向井城
20. 善立寺
21. 熊野神社
22. 春日神社
23. 久米石清水八幡宮
24. 久米寺
25. 大宮神社
26. 妙覚寺
27. 喜岡寺・喜岡城
28. 延命寺
29. 宝太郎坊
30. 田井城
31. 前田八幡神社
32. 前田城
33. 長妙寺
34. 大宮八幡神社
35. 恵徳寺跡
36. 池戸城
37. 高岡城
38. 長福城
39. 白山神社
40. 白山城
41. 鎌倉塚
42. 二条城
43. 鮮河神社
44. 妙徳寺
45. 串田城
46. 大塚城
47. 椙尾神社
48. 弸方寺
49. 称念寺・十河城
50. 鹿字神社
51. 八幡神社
52. 西楽寺
53. 由良山城
54. 清水神社
55. 蓮勝寺
56. 池田城
57. 王佐山城
58. 三谷城
59. 三谷八幡宮
60. 正大寺
61. 拝師神社
62. 桜井八幡宮
63. 高善寺
64. 法恩寺
65. 一宮寺
66. 田村神社・一宮城
67. 来光寺
68. 百相城
69. 佐久間荒神城
70. 石清水八幡神社
71. 浅野八幡神社
72. **東山崎・水田遺跡**

第６図　調査地付近の遺跡〈鎌倉時代から江戸時代〉（1/50,000）

第２表　江戸時代の讃岐国絵図一覧表

	製作年代	絵図名・所蔵	備考
1	寛永10(1633)年	讃岐国絵図：金刀比羅宮蔵	福家惣衛『香川県通史　古代・中世・近世編』(1965)にトレース図が掲載
2	寛永10(1633)年	讃岐国絵図 原本：琴陵光源氏蔵 昭和11年８月鎌田共済会調査部写	鎌田共済会絵図（讃岐）18 １を写したものか 石高の記載なし
3	寛永17(1640)年	讃岐国大絵図 原本：大川郡丹生村木村皓一氏蔵 昭和12年７月鎌田共済会調査部写	鎌田共済会絵図（讃岐）23 「寛永17年生駒家より琴比羅へ寄付」 １を写したものか
4	年代不詳	讃岐国絵図：丸亀京極子爵家蔵 大正14年12月７日模写神崎	鎌田共済会絵図（讃岐）２ １を写したもの 石高の記載同じ
5	年代不詳	讃岐国絵図 丸亀市立図書館蔵	１を写したもの
6	年代不詳	讃岐国之図 原本：林佐太郎氏蔵 昭和５年９月30日写	鎌田共済会絵図（讃岐）１ 屋島は島として描かれる 石高の記載なし　10と似る
7	宝暦12(1762)年	讃岐一円図：寒川町三浦家文書 香川県瀬戸内海歴史民俗資料館蔵	
8	寛政２(1790)年	讃岐国絵図 天保６年増補	鎌田共済会絵図（讃岐）33 香川県教育委員会『伊予「街道」調査報告書』(1990)に掲載
9	文化５(1808)年写	讃岐国大絵図 ：大川郡白鳥町青木貞夫氏蔵	「文化五年写　親賢」 ７と似る 白鳥町指定文化財
10	文政５(1822)年写	讃岐国之図 原本：大川郡丹生村木村皓一氏蔵 昭和14年４月鎌田共済会調査部写	鎌田共済会絵図（讃岐）25 「原本に文政５年仲夏日以渡辺吉寧家蔵之図ヲ模写ス」とあり ６と似る　石高の記載あり
11	天保５(1834)年	讃岐一円図：丸亀市立図書館蔵 寛並齊棹月日游信寛裕夫写	７と似る
12	天保５(1834)年	讃岐一円図：大正15年８月31日写 神崎	鎌田共済会絵図（讃岐）６ 「本紙者高松家中中村清左エ門方有之外舅久保正直取次ニテ借請　原田玉芝ニ　令而画之者也　天保４年冬　天保５龍次甲午年四月吉祥日写之寛量齊棹月日游信裕夫記之　印」 11を写したものか
13	天保９(1838)年	天保国絵図 国立公文書館蔵	
14	安政２卯 (1855) 年	原本：三豊郡豊浜町藤村猛氏蔵 昭和15年４月鎌田共済会調査部写	鎌田共済会絵図（讃岐）26
15	元治２ (1864)年４月	大内寒川三木香川阿野鵜足那珂郡之図　原本：香川県蔵 昭和７年６月中旬神崎写	鎌田共済会絵図（讃岐）５ 「此図元治２年４月従　　朝廷国図指出松平家…」 吉田川と新川は東山崎で合流
16	元治２ (1864)年	讃岐国図 昭和５年３月上旬神崎写	鎌田共済会絵図（讃岐）４ 15を写したものか 高松藩より朝廷へ差出したるもの
17	年代不詳	讃岐国絵図	鎌田共済会絵図（讃岐）10 村などはかなり略されている 吉田川と新川は東山崎で合流
18	年代不詳	讃岐国古図 原本：高松市明珍宗春氏蔵 昭和９年９月26日写	鎌田共済会絵図（讃岐）12 高松藩ヲ主トス　17を写したものか 村などかなり略されている　吉田川と新川は東山崎で合流
19	明治四辛未 立春写	讃岐国図 原本：明珍宗春氏蔵 昭和７年９月神崎写	鎌田共済会絵図（讃岐）３　「松村末子　　芦江写」 ７に似るが吉田川と新川は２本とも記載　東山崎で合流 郡名を書いた位置はほぼ同じ
20	年代不詳	讃岐国往環絵図 原本：丸亀市栄町福家惣衛氏蔵 昭和13年４月１日 鎌田共済会調査部写	鎌田共済会絵図（讃岐）22



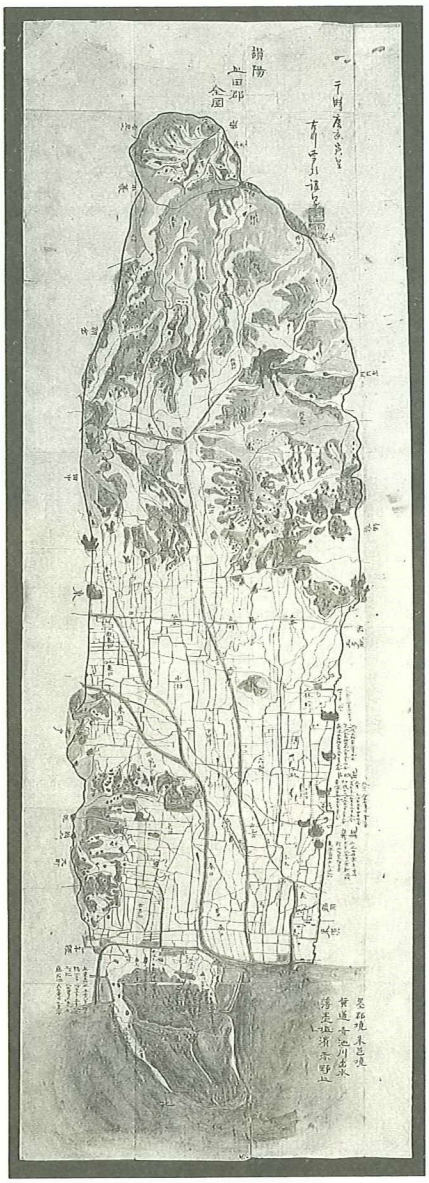
第７図　寛永10年讃岐国絵図　山田郡付近トレース図

讃岐國繪圖

寛永拾年四月日

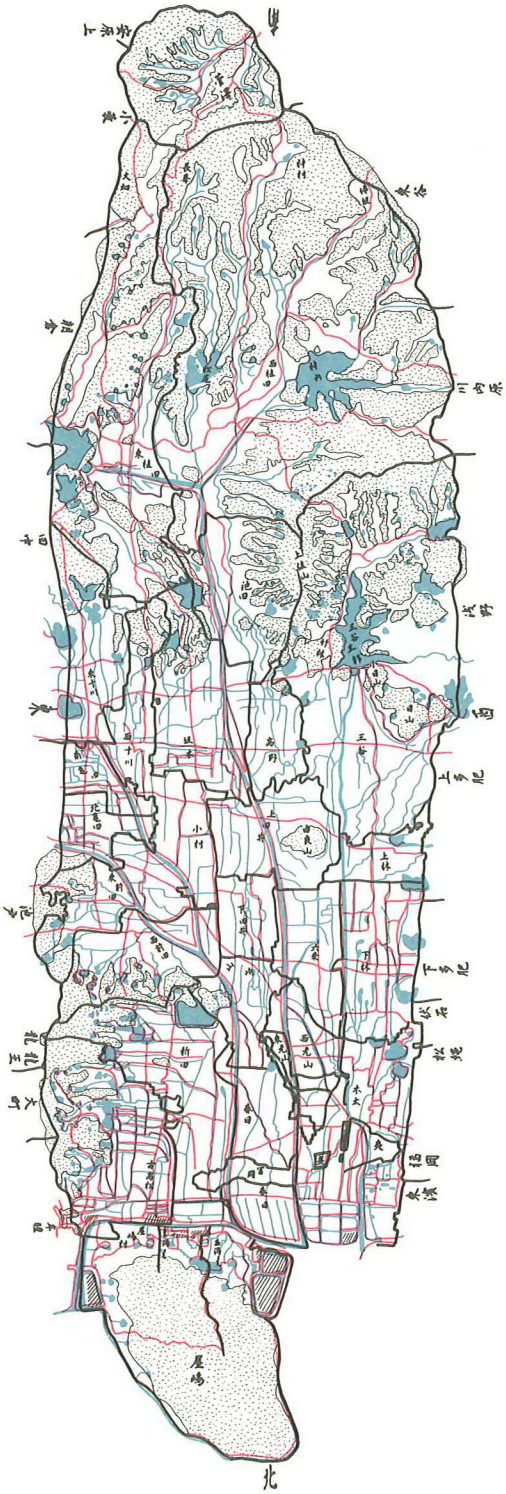
福家惣衛「香川県通史　古代・中世・近世編」(1965) より転載

第 8 図　寛永10年讃岐国絵図　金刀比羅宮所蔵

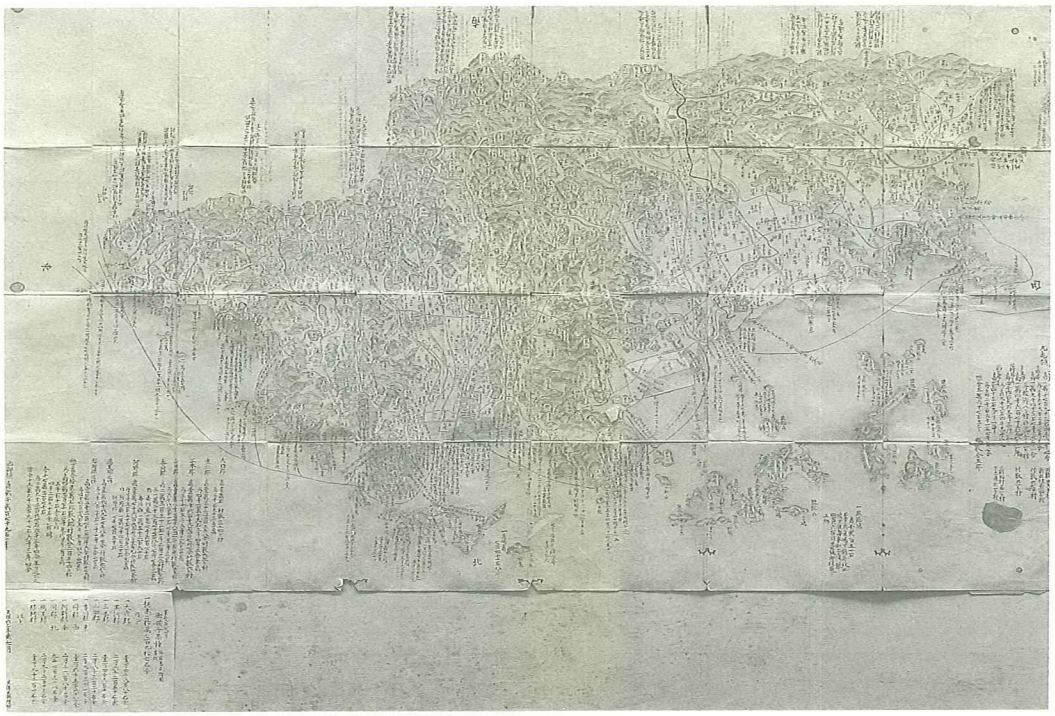


第９図　山田郡全図

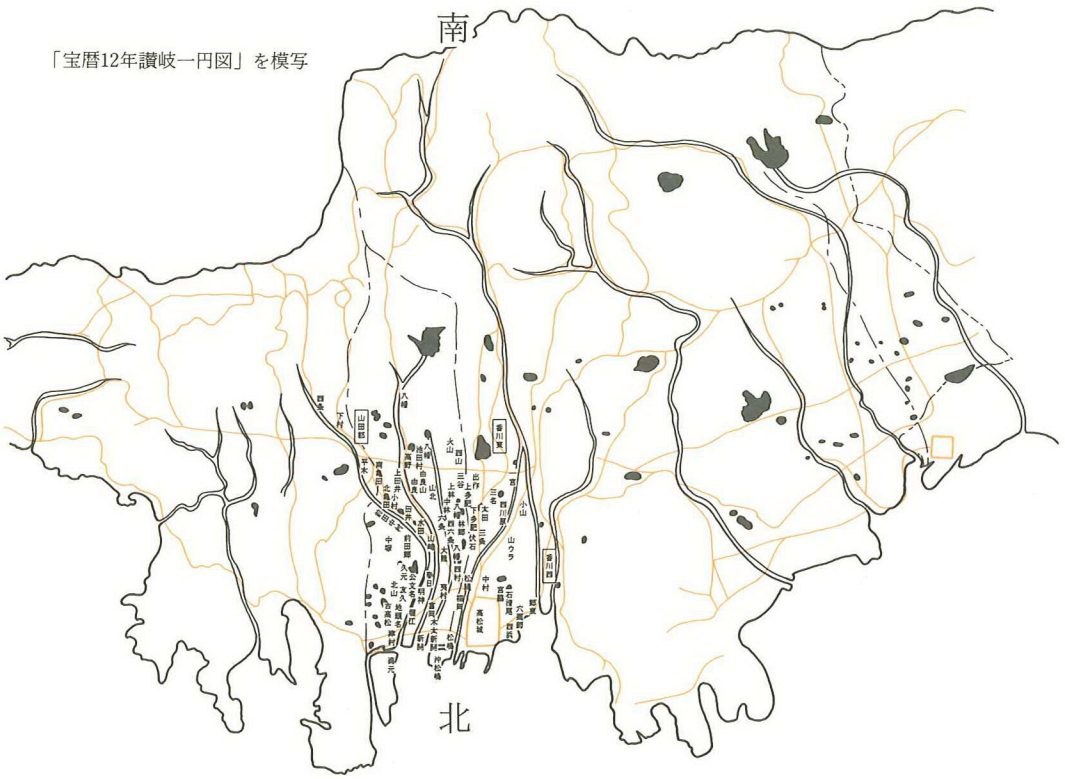
前男井間池土地改良区
理事長　香西憲吉氏夫人所蔵



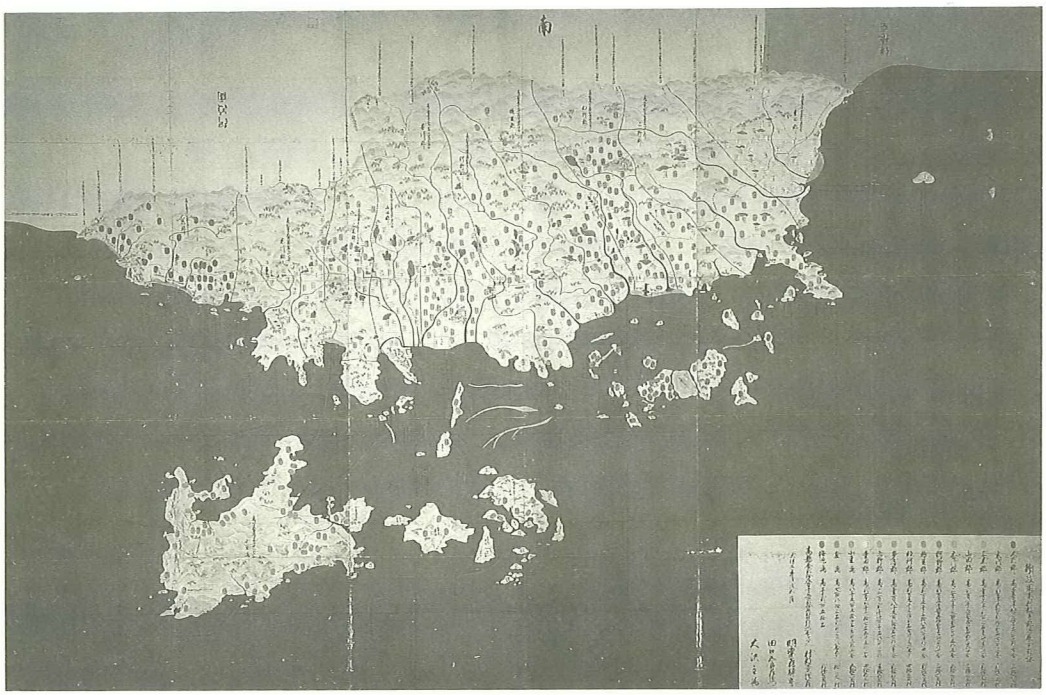
第10図　山田郡全図トレース図



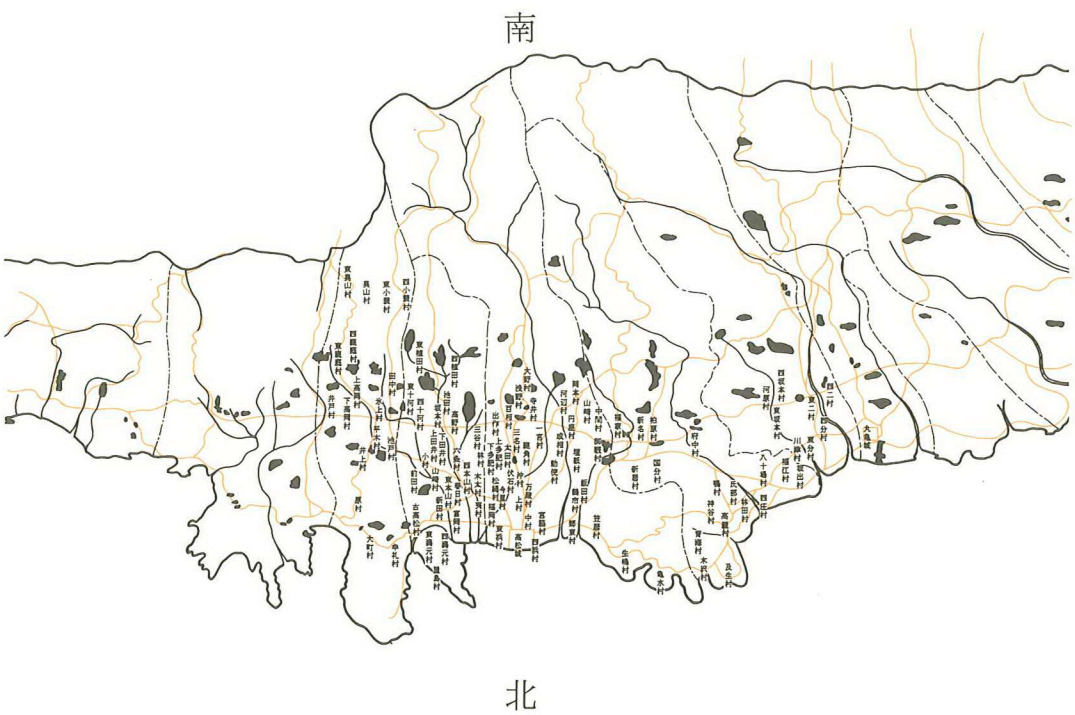
第11図　讃岐国絵図　鎌田共済会郷土博物館所蔵



第12図　讃岐国絵図　鎌田共済会郷土博物館所蔵　トレース図



第13図　天保国絵図　国立公文書館所蔵



第14図　天保国絵図　国立公文書館所蔵　山田郡付近トレース図

たことが記述されている。河邊郷は現在の高松市川部町で，寺井町字行寺は香東川を挟んだ対岸にあたる。

この香東川による扇状地は香川郡香川町川東付近を扇頂として北東方向に向かって緩やかな傾斜で広がる。この扇状地性の堆積は本遺跡の西側を流れる春日川の西岸近くまで広がる。しかし，春日川の東側に位置する本遺跡付近では春日川の西側とは全く様相が異なり，標高は1m程度低く，春日川，新川，吉田川によって形成された氾濫平野が広がる。

扇状地性の堆積で形成された高松平野には地形に平行してN－10°－Eの方向にいわゆる条里地割りが広がる。この条里地割りは高松平野の東部，春日川を越えたあたりにも広がり，本遺跡の南部に位置する高松市由良町では三十六，市の坪など条里地割りに関係する小字も残る。また，本遺跡付近より北方では遺跡の南方に広がるような規則的な地割りはみられず，地割りはかなり乱れている。おそらく本遺跡の北部は新川・吉田川の氾濫原であったためであろう。

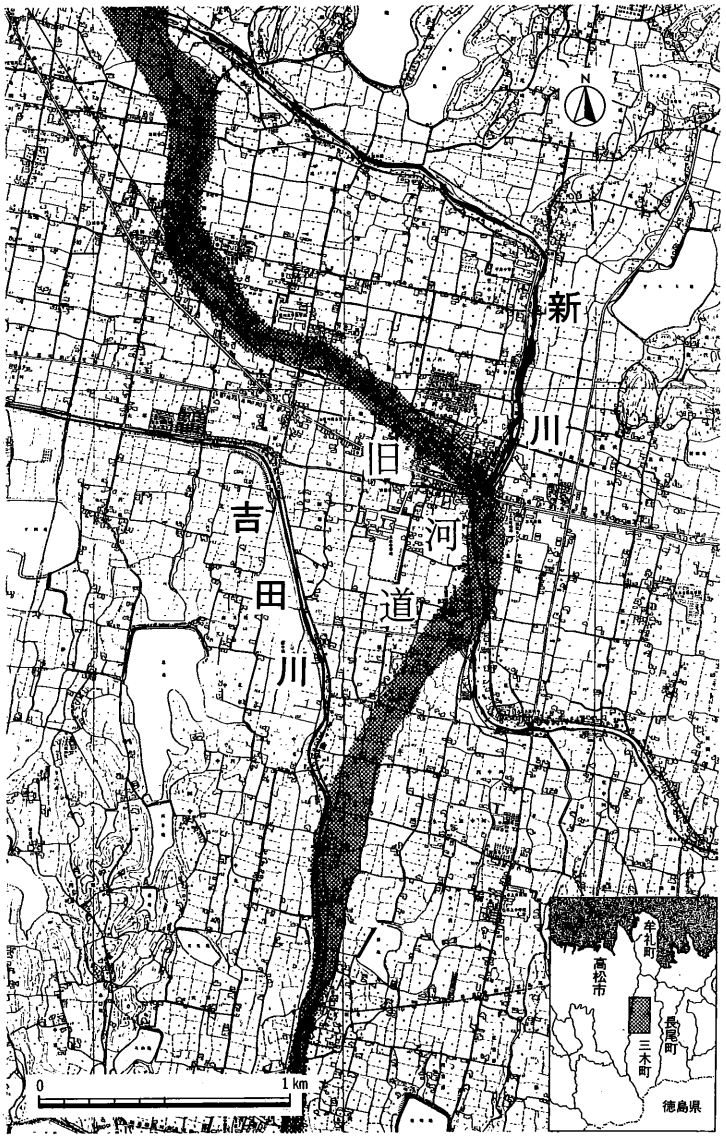
3．新川・吉田川の付け替え

高松平野には香東川のほかにも数本の河川が流れるが，本遺跡付近では春日川，新川，新川に注ぐ吉田川が北流する。これらの河川も香東川同様付け替え工事が比較的新しい時期に行なわれたことが現在の地形図から窺われる。本遺跡の西側を流れる春日川は高松市西植田町に端を発して北流し，本遺跡の東側を流れる新川は阿讃山脈に端を発し，北西に流れ，瀬戸内海に注ぐ。吉田川は現在，木田郡三木町小蓑付近から北流し，三木町池戸砂入付近で南から西にほぼ直角に折れ曲がって，現存条里地割りに平行して推定南海道（県道三木・国分寺線）沿いに西流し，十川西町付近で西から北に直角に流れを変えている。また，新川も三木町高野付近で西に折れ曲がり，吉田川と平行に三木町平木・池戸の集落を挟むようにして北西の方向に流れ，東山崎町の東部で吉田川と合流する。新川と吉田川は三木町付近で現存条里地割りに平行に流れるなど不自然な流れ方をしているため，人為的に付け替えられたものと従来から考えられてきた(註1)。おそらくこの付け替えは比較的新しい時期に行なわれたと考えられるが，文献などの記録は残存していない。しかし，旧流路と付け替えの時期については古絵図や現地形図に残る痕跡から次のように推定できる。

現存する讃岐国の絵図で最古のものは先述した江戸時代初頭の寛永10（1633）年に描かれたものである。他にも何種類か讃岐国絵図は現存する（第2表）が，山や河川がかなり正確に描かれ，村名なども漏れなく書いているものは前述した寛永10年，宝暦12（1762）年，天保9（1838）年の絵図と後世にこれらの絵図を模写したものの3種類である。『寛永10年讃岐国絵図』（第7・8図）をみると春日川は見当たらないが，吉田川と新川は描かれている。吉田川は小蓑の下流の大畠（現在の木田郡三木町朝倉大畑）付近より流れ出し，中川（現在の三木町氷上中川）と氷上の間を通って，井上郷平木（現在の三木町平木）・鹿伏（現在の三木町鹿伏）の間

で，高岡郷江村と井戸郷熊田の間を流れる新川と合流し，両河川は池戸郷（現在の三木町池戸）の北側を流れている。両河川は現在，東山崎町で合流するが，この絵図では東山崎町よりもかなり上流で合流していることから，付け替えられる以前の古い流れであることがわかる。『宝暦12年讃岐一円図』（註５）では新川と春日川は描かれているが，吉田川は描かれていないため，新川と吉田川の関係は不明で，付け替え以前に描かれたものか，以後のものかはわからない。幕府が命じて作成させた天保９（1838）年の『天保国絵図』（註６）（第13・14図）では新川，吉田川，春日川の３本とも描かれているが、この絵図では吉田川・新川は現在とほぼ同じ場所を流れており，両河川は山崎と前田の間で合流していることが明瞭にわかる。したがって，絵図の記載からは江戸時代前半から中頃である寛永10年以降，天保９年以前の間に吉田川・新川の付け替え工事が行なわれたものと考えられる。

なお，新川・吉田川の旧流路の場所については地形図にその痕跡を明瞭に残している。吉田川は三木町池戸砂入付近で直角に西に曲がる。この手前の右岸の三木町氷上重元・福万付近では新川のほうに向って地割りの乱れが連続するが，この地割りの乱れが吉田川の付け替え以前の流路であると考えられる。この乱れは氷上福万の連成寺付近で新川と合流するが，『寛永10年讃岐国絵図』の合流場所と矛盾ないことからも，ここが，付け替え以前の両河川の合流場所であると考えられる（第15図）。この両河川の下流には新川と県道高松・大内・長尾線が交差する平木郵便局付



第15図　三木町付近新川・吉田川旧河道図（1/30,000）

近から北西方向に走り，現在の平木・池戸の集落の中心を通る道がある。この道は地形図をみると自然堤防上を走ることがわかる。おそらくこの自然堤防はその位置から考えると，新川・吉田川の古い流れによって形成されたものであると思われる。このように古絵図と地形図の比較・検討から，新川・吉田川は江戸時代以前には三木町氷上付近で合流し，現在の平木・池戸の集落付近を流れていたことが推定できる。

4．高松平野の干拓

本遺跡の北方の新田町・春日町付近も比較的新しい時代に干拓されたらしく，現在の海岸線はかなり新しい時代の開発によるものであることが多数の文献資料より窺われる。寛永14（1637）年に生駒藩主生駒高俊の家臣である西島八兵衛は堤防を築き，この堤防より南側の潟の干拓を行なった。生駒氏の改易後，高松藩に入部した松平頼重の伝記である『英公外記』には「下往還より南手の新開ハ先代の時，西島八兵衛の築きし所なり」（註7）と記されている。「下往環」とは西島八兵衛の築いた堤防を慶安元(1648)年松平頼重が道にしたもので，後に志度街道と呼ばれるようになった道である。佐戸政直氏は志度街道が現在の県道牟礼・中新線にあたることから，西島八兵衛が築いた堤防は県道牟礼・中新線付近にあり，この南側を干拓したと考えられている（註8）。

また，『翁嫗夜話』には「同（寛永）十四年堤を築いて，海水をささえ田となす，福岡・木太・滑濱・富岡・新開これ也」（註9）と具体的に地名を記しており，福岡（現在の高松市福岡町・松福町）・木太（現在の高松市木太町）・滑濱（現在の高松市松島町・木太町）・富岡（現在の高松市春日町）・新開（現在の高松市木太町）が干拓されたことが窺われる。

江戸時代初めの大干拓を遡る資料で，この付近の旧地形が描かれたものとしては『寛永10年讃岐国絵図』が現存する。この絵図では西島八兵衛の築いた堤防である志度街道はまだない。屋島は独立した島となっており，福岡・春日・新田・古高松付近より北側は海で，この辺りの海岸線は湾状に描かれている。この絵図からも当時の海岸線がかなり内陸に入り込んでいたことがわかる。

また，この海岸線より南側には高松から志度に向かう道が描かれている。高松藩の志度街道は先述のように西島八兵衛の築いた塩止め堤防を松平頼重が道としたものであるが，この絵図に描かれた志度に向かう道は，松平頼重が作った志度街道以前のものである。したがって，この街道の場所を比定することにより，当時の海岸線を推定することが可能であると考えられる。絵図をみるとこの道は今里，木太郷西村付近で長尾街道から二股に分かれており，海岸線に沿い，新田・古高松を通って，志度に向っている。志度街道とともに長尾街道より分かれて志度に至る道は他の絵図では宝暦12年の『讃岐一円図』をもとに寛政2（1790）年に描かれた『讃岐国絵図』（註10），『天保国絵図』と江戸時代後半に描かれた『山田郡全図』（註11）（第9図）にも描かれてい

第16図　高松市北東部小字図（1/20,000）

る。『讃岐国絵図』では『寛永10年讃岐国絵図』と同様，今里・西村付近で長尾街道より分かれているが，江戸時代後半に描かれた『天保国絵図』『山田郡全図』では福岡・今里付近ではなく，もう少し東の夷付近で長尾街道より分かれている。『寛永10年讃岐国絵図』では夷付近は石高が記されているので，わざと字をさけて西寄りに描いた可能性もあるが，長尾街道と旧志度街道は福岡・今里付近より分かれていた可能性もある。しかし，寛政2年の『讃岐国絵図』をみると，ほぼ同様の場所で分岐していることから，字をさけて西寄りに描いたのではなく，当時はこのあたりで分岐しており，その後，分岐点は夷付近に変わったものと考えられる。なお，付近では詰田川が直角に曲がり，不自然な流れ方をしており，後世に付け替えられたと考えられる。おそらくこれと同時に長尾街道も付け替えたため，分岐点が変わったことも考えられる。

春日川以東の春日町・新田町付近ではいずれの絵図をみても志度に向かう道はほぼ同じ場所に描かれている。この中でも『山田郡全図』が最も詳細に描かれており，山田郡の村の境界や水路等がかなりよくわかる。『山田郡全図』では旧志度街道は木太町の夷神社付近で長尾街道から分かれて東に進み，春日町に入ると北東に進んで現在の新川南橋の方向に向かう（第10図）。『山田郡全図』ではここまでしか道の記載はないが，昭和6年発行の2万5千分の一地形図には新川以東にこの道の続きの道が記載されている。これによると新川南橋からは北東方向に進み，現在の高松市立古高松中学校付近を通り，前田から古高松に向かう道に合流する。このルートは道の形状や周囲の村との関係において『寛永10年讃岐国絵図』と矛盾はない。また，この道を歩いてみると古くからの農家が道沿いに数多くみられる。以上のようなことから，このルートが『寛永10年讃岐国絵図』に記載された旧志度街道であったものと考えられる（第6図）。

旧志度街道は前述のルートを通るものと考えられるが，当時の海岸線はこの道より北側であることは確実である。高松市の小字を調べてみると，高松市春日町には川尻・浜免・片田・川東などの小字が存在する（第16図）。これらの地名はその名称から旧地形を表しているものと考えられる。おそらく浜免付近は砂浜であり，片田付近は潟であったことによるのであろう。また，小字の境をよくみてみると，浜免と川尻の間で水田の畦畔の方向がかなり異なる。これらのことから，春日川と新川に挟まれた春日町においてはこの字の境界が干拓地との境であると考えられる。新川の東側では新田町堀江と春日町川東との間で地割りに差異がみられる。春日川の西側の高松市木太町においては東新開・西新開の字名があるが，字名より新たに開発された所であることは明らかである。東新開・西新開の南側は字夷村・川東・川西であるが，おそらくこの間が干拓地との境であったのであろう。詰田川を越えた西側は木太町三区・四区，松島町であるが小字は木太町三区では洲端道下（すべりみちした），木太町四区では洲端（すべり），松島町ではスベリである。この洲端の地名は中州の近くであったことを表しており，洲端道下の道下は志度街道が走っていたことから付けられた字名であると考えられる。これらのことから，寛永14（1637）年に西島八兵衛が干拓した新田は県道牟礼・中新線の南側に位置する春日町川東・浜免，木太町東

新開・西新開付近で，寛永14（1637）年以前の海岸線はかなり奥深く入り込んでいたことがわかる（第6図）。

生駒氏の改易後，高松藩に入部した松平頼重は西島八兵衛の干拓後，更に北に干拓を進めている。『英公外記』によると寛文7（1667）年に「此年，松島すべりの沖より潟元村之沖迄東西ニ堤を築き沖松島木太春日之潟新開成る」(註7)とあることから，松島すべり（現在の高松市松島町3丁目から木太町4区にかけてで，御坊川の南岸付近）の沖から潟元村（現在の高松市屋島西町）に堤防を築いて沖松島・木太・春日の干拓を行なったことがわかる。なお，『宝暦12年讃岐一円図』・『天保国絵図』，江戸時代後半に描かれたと考えられる『山田郡全図』にも志度街道の北側にこの干拓地は描かれている。これらの絵図をみると御坊川から屋島に至る海岸線は志度街道の少し北側付近で，東西に真っすぐ描かれている。佐戸政直氏はこの堤防は現在の琴平電鉄志度線の沖松島～潟元両駅間にあたると考えられている(註8)。おそらく，この時干拓されたところは現在の町名で福岡町，松島町，木太町西浜・中浜・東浜，春日町片田にあたる付近であると考えられる（第6図）。

さらに，これより50年前の海岸線を推定できる記述が香西成資の著した『南海通記』の中にみられる。『南海通記』は享保4（1719）年に成立した四国地方の軍記物である。これは讃岐香川郡香西の出身である香西成資が寛文3（1663）年に執筆し，その後，整理・増補を行なって出版した『南海治乱記』(註12)に資料を加えて補訂を行い，書名を改めたものである。香西成資は天正10（1582）年のこの辺りの様相を巻之十五に以下のように書き著わしている。「志度ノ浦ニ至リ補陀落寺房崎海人野ノ里ヲ遊覧アッテ引返シ，春日ノ里ニ至ル，此所ハ屋島山，石清尾山両山ノ間，入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル，遠干潟ナレバ春日里ト木太郷ノ間，海ノ中道アッテ通用ス。」また，巻之廿では16世紀中頃のことを以下のように書き記している。「其比マデハ高松ト笶原ノ間入海ニテ，春日ノ里ヨリ木太ノ郷ニ渉ル潮瀬ニ海ノ中道アリ」，「寛永ノ比今八十年ノ古迄ハ要害ノ躰モ残テ我見之也。先江東ノハナ穴薬師ト云々観音ノ口迄満潮サシ込，山ノ側ニ上リテ往来ス。干潮ノ時ハ潮地ヲ渡ル也。西濱椰ノ木邊ヨリ潮渡ニシテ満潮ノ時ハ山ノ根一円ニ広海ト成也。四月三日右馬頭臨時ノ祭ノ時，石清尾塔ノ下橋迄潮指込タルヲ我之ヲ見ル也。東濱ハ野方口迄潮サシ込，屋島ノ干潟い坂田中河原迄潮先来ル也。今ヲ以テ是ヲ見ル時ハ虚言ノ様ニ有ベキ也。屋島東濱ヨリ一里ノ所ナレ共，陸地ハ潮廻シテ行所ニ三里ト申習也。木太ノ郷ノ新開ヨリ春日村迄一筋ノ道有，道筋ニハ水溜テ是ヲ路印トス。水ノ外ヲ踏トキハ須賀ノ中ニ落入タルトカヤ其潮先山田郡小山ト云所迄サシ込タルトカヤ」(註4)。

このように『南海通記』には戦国時代の16世紀中頃では石清尾山山塊の西側では穴薬師（松岸寺，現在，高松市西宝町3丁目にある松岩寺），石清尾山山塊の東側では野方口（現在の高松市塩屋町・今新町・御坊町付近）から山田郡小山（現在の高松市新田町小山）付近までは湾状を呈した遠干潟で，御坊川を遡って坂田中河原（現在の高松市紙町）付近まで潮が入り，江戸時代初頭

の寛永年間からは想像もつかないぐらい内陸まで潮が入り込んでいたと記されている。また，16世紀末頃，屋島西側木太郷新開（現在の高松市木太町新開）より春日村（現在の高松市春日町）あたりは干潟で，干潮の際にはこの間に海の中道ができ，ここを往来していたことが著されている。だが，作者の香西成資は寛永年間の生まれで，ここに書き記したような高松平野の様相については実際にみているわけではない。おそらくこれは付近の古老の話によるものであろう。このため，この記述は多少大袈裟になっているものと考えられるが，寛永年間に比べると多少は内陸まで潮が入り込んできていたものと考えられる。

4．本遺跡周辺の水利

春日川と新川に挟まれた本遺跡付近は氾濫平野として，堆積作用を繰り返していた。第3章で後述するように，本遺跡付近が地形的にかなり安定したのは中世から近世頃であることが，本遺跡の土層断面の観察によって確認できた。

本遺跡の周辺の地形はこのような堆積作用のため，かなりの起伏が認められるが，この起伏を克服あるいは利用して，現在ではかなり整然とした用水路が巡らされている。第17図は本遺跡の周辺の用水路系統図である。この図から，現在の水田への取水源と取水手段，その取水単位が読み取れる。本遺跡の周辺の水田は用水路①によって潅漑されていることがわかる。用水路①は春日川を水源とし，本遺跡の4㎞南方の春日川を堰き止めた高松市池田町の井堰から取水する。用水路①は春日川沿いに南から北に走るが，高松市川島東町で春日川を離れて東に向きを変え，3本の用水路に分流する。これらの分水路は取水源から2.5㎞離れた高松市由良町の田畑で取水され，その北に位置する下田井町，東山崎町の水田を潤す。用水路①の中央の分水路は本遺跡のB地区付近に南北に伸びる自然堤防上を走り，東西の水田に潅漑する。旧長尾街道以北は宅地化されており、潅漑の状況は不明であるが、3本の分水路は東山崎町で旧長尾街道沿いを走る用水路⑧と交差するが，そのまま北に走り，新川に注ぐ。3本の分水路の潅漑範囲は東西800m，南北230mに及ぶ。本遺跡は東山崎町に所在するが，東山崎町もいくつかの小字に分かれ、A地区が字西原，B～D地区が字八反地，E地区が字水田である。字西原は用水路①の西寄りの分水路，字八反地・水田は用水路①の中央付近の分水路によって潅漑される。特に字水田は用水路①の分水路の末端に位置する。

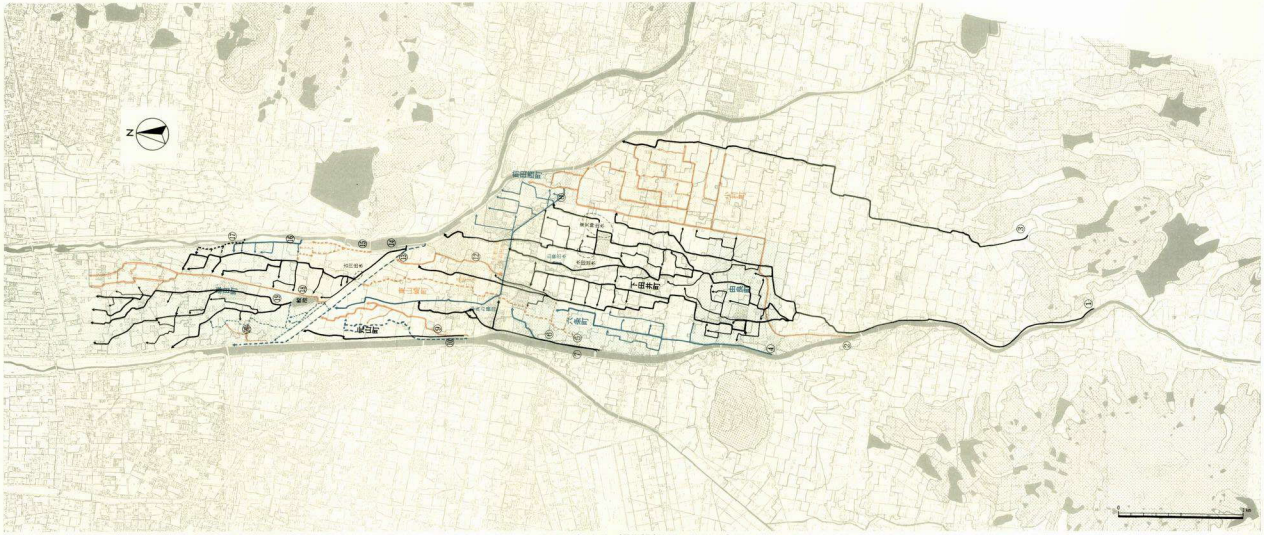
用水路⑧は高松市前田西町と東山崎町の境界付近から始まり，旧長尾街道に沿って北西に走り，用水路①・②・⑤・⑦の水を集める。集水後，東山崎町字西原付近で北に向きを変えて，東山崎町字佐古・本村・中所を潅漑する。東山崎町字西原付近ではこの用水路が東山崎町字中所付近を潅漑することから中所の掛出と呼んでいる。用水路⑧は東山崎町と元山町の北部を北西に走る旧放水路左岸を走る用水路⑬と鮫池に注ぐ。この放水路については築造年代は不明であるが，おそらく江戸時代以降のものと考えられる。

この放水路の北側には先述した鮫池がある。鮫池は放水路沿いの用水路⑬・⑭や，用水路⑧から取水する。鮫池からは用水路⑲が北に走る。高松市春日町字川尻，浜免，片田に導水する。浜免，片田は先述したように江戸時代初頭の干拓地で，この干拓地の西部は用水路⑲によって潅漑される。また，干拓地の東部は鮫池の東側を走り，用水路⑱によって潅漑される。用水路⑱は東山崎町を南北に走る用水路⑤からも取水するが，新川を水源とする用水路⑭からの水を貰い受けて，水量を増している。

また，用水路⑧はその取水のしかたから，用水路①・②に比べ時期的に後出する用水路であることがうかがわれる。用水路⑧は河川や出水などの水源をもたず，用水路①・②を斜めに交差して走り，2本の用水路の水を貰い受けて北に走る。潅漑範囲から用水路①・②の掘削以後，東山崎町の北部から春日町の水田を潤すために掘られたものであると考えられる。東山崎町の北部の開発の時期は不明であるが，用水路⑧は江戸時代初頭に開発された春日町の新田を潅漑する鮫池に注ぐことから，春日町の新田開発と同時に掘削されたものかもしれない。

江戸時代後期に成立した『池泉合符録』は高松藩領内の溜池，出水など水利施設の実態を調査したものである。宝暦5（1755）年の調査記録に基づき，寛政9（1797）年に再度調査し，その結果を文政元（1818）年にまとめたもので，山崎村の項に本遺跡の周辺の水利施設が記録されている。山崎村には「宮裏池・宮谷上池・同下池・山合谷池・水田出水・東天神出水・松若出水・孫助出水・古川出水」が記録されており(註13)，山崎村ではこれらの水利施設から取水したことがわかる。宮裏池・宮谷上池・同下池・山合谷池はその名称から山崎村の中でも新川を挟んだ東側に所在するものと考えられる。また，水田出水・東天神出水・松若出水・孫助出水・古川出水は先述した『山田郡全図』（第10図）の中に描かれていることから，おおよその場所は推定できる（第17図）。水田出水・東天神出水は『池泉合符録』では下田井村にあると記録されており，『山田郡全図』でも下田井村の北部にみられる。この2つの出水は用水路①の中央分水路の中に描かれており，山崎村の東部の水源となる。また，松若出水は現在八反地出水と呼ばれる出水と同位置のもので，用水路⑫の水源である。孫助出水は地図上では現在の香川県中央自動車学校付近にみられ，現在の用水路⑤の中にあったものと考えられる。古川出水は用水路⑭中にあったものらしい。また，『池泉合符録』にはこれらの出水の取水源が記録されており，水田出水・東天神出水・松若出水・孫助出水は神内池，古川出水は男井間池が取水源であることがわかる。神内池は第17図には掲載されていないが，本遺跡の南方8㎞の高松市西植田町に所在し，春日川の支流天満川を堰止めて築いた溜池である。築造年代は不明だが，生駒正俊が西島八兵衛に命じて，寛永12（1635）年に拡張工事を行なっていること(註1)から，江戸時代初頭にはすでに存在していたことは確実である。

『池泉合符録』に記録された出水の中で，現存するものは現在，八反地出水と呼ばれる松若出水だけである。『池泉合符録』に記録された出水は『山田郡全図』をみると，用水路の途中に設け



第17図　東山崎・水田遺跡付近用水路系統図（1／20,000）

られたものが多く，それ自身が水源となるものは少ない。おそらく河川からの取水が土木技術の発達した現代と比べるとかなり不安定であったので，安定した水量を確保するために出水が掘られたのであろう。このことから，現在出水があまり残っていないのは春日川の堤防や，井堰の構造や機能が充実し，江戸時代後期に比べると河川からの多量の取水が可能になったことに原因するのではないかと考えられる。このように土木技術の発達によって出水は機能を低下させていき，現在は松若出水が残るだけとなったのであろう。したがって，現在は江戸時代後期にみられた出水がないからといって，江戸時代とは取水のしかたが全く異なるとは考えられない。また，『山田郡絵図』に描かれた用水路はかなり略されてはいるが，これに描かれた用水路は現代の用水路と基本的には同じである。これらのことから，出水は現在では残っていないものが多いが，現在の水利は江戸時代後期のものとあまり変わっていないのではないかと考えられる。

また，水利と町名の境界とを比べてみると，町名の境界は水利の境界でもあることがよくわかる。第17図をみてみると由良町・下田井町・東山崎町の潅漑は用水路①によるが，その東隣りの小村町の潅漑は用水路②によることがわかる。また，春日川の右岸にも六条町や元山町がみられるが，六条町は用水路⑤・⑥，元山町は用水路⑨・⑩・⑪から潅漑されている。また，東山崎町字水田と，水田免と呼ばれた前田西町字長淵は同じように「水田」という地名が残る(註14)が，東山崎町側は用水路①によって，前田西町側は用水路②によって潅漑されている。

これらの町はいずれも春日川から取水しており，現在も四箇池水利組合という水利組合が新川と春日川に挟まれた地域にある。これは春日川の上流にある神内下池・神内上池・松尾池・公渕池・坂瀬池・城池という6つの池を管轄する組合である。四箇池という名称にもかかわらず，6つの池が含まれるが，これは2つの池があとから加わったもので，従来は4つの池を管理していたためである。これらの地域は神内下池・神内上池・松尾池・公渕池・坂瀬池・城池という6つの池を水源とする水利を中心として結びついていたことがうかがわれるが，四箇池水利組合の中でも，由良町・下田井町・東山崎町の3町は用水路①によって強く結びついていることが考えられる。また，それ以上に個々の集落の中では同じ用水路を共有するため，かなり強い結びつきをしていたことがうかがわれる。

第2節　歴史的環境

1．縄文時代から平安時代

本遺跡は高松平野の東部に位置する。高松平野の北東部は立石山を中心とする山塊によって画されている。この山塊の西麓には東山崎町・新田町付近で西に張り出して派生する丘陵がみられる。標高40～50mの久米山・茶臼山である。高松平野の南部には阿讃山脈が東西に走り，北側に

派生する低丘陵が高松平野の南部に伸びる。

高松平野の東部では久米山・茶臼山，立石山山塊の西麓・南麓に多数の遺跡が存在する。また，春日川西岸の香東川の扇状地では発掘調査によって数多くの遺跡が確認されている。しかし，本遺跡の立地する春日川・新川に挟まれた氾濫平野では遺跡は数少なく，東山崎・水田遺跡以外の遺跡は確認されていない。

旧石器時代の遺跡は高松平野の東部では検出されていない。縄文時代の遺跡は高松市東植田町の下司遺跡（前期～中期？）(註15)，高松市三谷町犬の馬場先遺跡（後期）など阿讃山脈から北に派生する丘陵の山麓に立地する。平野部では縄文時代晩期になると林・坊城遺跡(註16)，浴・長池遺跡(註17)など香東川の扇状地において遺跡が出現する。林・坊城遺跡は晩期末の遺跡で自然河川より凸帯文土器と木製農耕具が出土した。

林・坊城遺跡は弥生前期にも継続する。他にも弥生時代前期の遺跡は高松市松縄町の天満宮西遺跡(註17)，高松市林町浴・長池遺跡，三木町池戸の香川大学農学部遺跡(註18)などが平野部で検出されている。弥生時代中期に平野部において高松市前田東町の前田東・中村遺跡(註19)，林町の浴・長池遺跡，太田下町の太田下・須川遺跡(註20)などの遺跡がみられる。立石山山麓の南側に派生する白山（標高203m，三木町下高岡）には白山遺跡がある。この遺跡は丘陵上に立地しており，弥生時代中期後半の住居跡が検出された。白山の西麓では扁平鈕式銅鐸が出土している(註21)。弥生時代後期になると遺跡の数が増加する。平野部では前田東・中村遺跡，林・坊城遺跡，太田下・須川遺跡，高松市上天神町の上天神遺跡(註22)がみられる。また，立石山西麓の尾根上では高松市高松町の大空（スベリ山）遺跡(註23)，スベリ山南遺跡(註23)，南谷遺跡(註23)などの遺跡が出現し，茶臼山の尾根上にも久米池南遺跡がみられる(註24)。また，立石山の派生する尾根上には香川医科大学の建設に伴って，発掘調査を行なった三木町池戸の権八原古墳群がある。この遺跡では弥生時代後期の台状墓が検出された(註25)。

古墳時代に入ると高松平野周囲の山麓に古墳が築造され始める。茶臼山の頂部には高松市茶臼山古墳・高松茶臼山東古墳・高松茶臼山西古墳・西茶臼山1号墳・西茶臼山2号墳が築造される。高松市茶臼山古墳は全長60m余りの前方後円墳で，2つの竪穴式石室をもつ(註26)。立石山西麓には今はその姿を消しているが，北山古墳があった。この古墳は径20m余りの円墳で，前期古墳である。2基の粘土槨が検出されている(註27)。権八原古墳群では5世紀後半の径10～15mの円墳が15基検出されている(註25)。また，平野部においては高松市木太町の白山神社の境内で白山神社古墳が検出されている。この古墳は竪穴式石室をもつ円墳で，標高2.5mに立地する。5世紀代のものと考えられている(註28)。高松平野南部においては川島本町の高野丸山古墳がある。現在は地割にその痕跡を残すのみであるが，南から伸びる尾根を利用して築造された円墳で，周溝を巡らす。

古墳時代後期になると立石山の山麓に横穴式石室をもつ古墳が多数築造される。高松市新田町

の久本古墳・山下古墳・小山古墳の3基は大型の横穴式石室をもつ古墳である。久本古墳は香川県で唯一石棚をもつ古墳で，石室の長さは現存で10.7mを測る。玄室奥壁付近からは亀甲形陶棺が出土している(註21)。小山古墳は現在消滅している古墳であるが，複室構造の古墳であったらしい(註29)。この他新田町の岡山古墳群，高松町の長尾古墳群などいくつかの小規模な群集墳が存在する。

白鳳時代以降になると寺院が建立されるようになる。新田町の山下廃寺，前田東町の宝寿寺（前田廃寺），三木町井上の始覚寺跡がある。奈良時代の集落としては前田東・中村遺跡がある。この遺跡は平安時代まで連続する。

高松平野北部に位置する屋島は江戸時代以前は島であったが，『日本書記』天智天皇(667)年11月条に倭国高安城，対馬国金田城とともに讃岐国山田郡屋嶋城の築城が記載されている。現在全長90mの石塁が谷の斜面に残っているが，この石塁が屋島城の遺構と関連するのではないかと考えられている(註30)。平安時代末，都落ちした平氏が源氏と戦った屋島の合戦が行なわれた。この屋島の合戦は『平家物語』に詳しい。

また，奈良時代のこの辺りの村落・田畑の状況を描いているものとして『弘福寺領山田郡田図』(註31)がある。この田図は高松平野のほぼ中央の高松市林町付近に比定されており，この辺りに弘福寺領があったものと考えられている。なお，この田図に関しては近年，高松市教育委員会が比定地に関する発掘調査を連続的に行なっている(註32)。

2．鎌倉時代から江戸時代

鎌倉時代以降の集落は高松平野東部では本遺跡以外には検出されていない。讃岐国も鎌倉時代に入ると源氏の支配下に置かれるようになったが，本遺跡の含まれる山田郡において鎌倉幕府の地頭は高野山領坂下荘に補任されている(註33)。坂下荘は現在の高松市川島東町にあたる。周辺ではほかに妙法院門跡領林荘（現在の高松市林町）がある(註34)。これらの遺構については全く不明である。

室町時代に入ると讃岐国は守護細川氏が支配し，宇多津に守護所を設けたが，二人制の守護代を置いた。守護代には香川氏と安富氏がなり，東讃岐は安富氏が支配した。山田郡も安富氏の支配下に置かれていた。

本遺跡周辺では秋山氏が「水田」に所領をもっていたことが『秋山家文書』に記されている。秋山氏は鎌倉時代13世紀末，甲斐（現在の山梨県）より，香川県の西部，現在の三豊郡高瀬町・三野町である高瀬郷の地頭として赴任してきた武士である。「水田」の初見は文安2（1445）年の「秋山式部少輔泰弘譲状」で，「…同東本の水田…」(註35)と，記されており，秋山家の所領であることわかる。同東本というのは讃岐国の東本山郷を指すものと考えられる。しかし，文明6（1474）年秋山氏は東讃の武士である寒川氏に「所務緩怠」などを訴えられて罪を問われ，高瀬

郷内3分の1の替地として「水田」の3分の2は寒川氏のものとなったことが「秋山鶴法師言上状」に記されている(註35)。この後の「水田」については『秋山家文書』にも見られないため不明である。

また，この辺りを中心に活動した武士については香西成資によって著された『南海通記』(註4)に詳しいが，秋山氏についての記載はない。山田郡については『南海通記』の巻之五では享徳年間（1452～1454）「山田郡12郷ハ，三谷，神内，十河ヲ旗頭トシテ，植田氏世々相持テリ」とある。山田郡は12郷で，植田氏は三谷氏，神内氏，十河氏を旗頭として山田郡を支配していたことが窺われる。

山田郡の武将である三谷氏の居城王佐山城については巻之六『寒川氏讃州三谷合戦記』に詳細な記載がみられる。王佐山城跡は現在の高松市池田町の上佐山に比定されている。三方竪堀・塀が築かれ，出丸があったと記されているが，その遺構は現在は不明である。また，三谷氏は本遺跡と春日川を挟んだ対岸の由良山（高松市由良町）にも一時，居を構えていたことが記されている。

この他，山田郡内には管領細川政元の養子讃岐六郎澄元の居城，あるいは木太郷に真部氏，松縄に宮脇氏の居城があったらしい（巻之六）。木太郷は現在の高松市木太町，松縄は現在の高松市松縄町にあたる。真部（真鍋）氏の居城は『讃岐国名勝図絵』(註36)にも描かれており，現在木太町向井に比定されている。宮脇氏の居城は松縄町の熊野神社付近であると伝えられている。いずれの遺構もまだ明らかにされていない。十河氏の居城である十河城は高松市十川東町城の称念寺にその跡を残しており，堀切が残る。屋島には高松氏の居城である高松城（喜岡城）がある。現在その跡には喜岡寺と権現社がある。

室町時代から戦国時代にかけてこのあたりを支配した武将やその居住地は『南海通記』から詳細に窺われるが，『南海通記』の100年後の文政11(1828)年に中山城山が著した『全讃史』にも『古城志』としてこれらの古城の記録がある(註37)。付近の言い伝えや遺物の散布などで場所の比定は行なわれているが，付近での発掘調査が行なわれていない現在ではその遺構は明らかにされているものは少ない。

天正12(1584)年讃岐を平定した長宗我部元親は翌天正13(1585)年秀吉に降伏した。秀吉は讃岐を仙石秀久に与え，秀久は宇多津聖通寺城に入り，讃岐を統治した。だが，この支配は1年半で終わり，天正15(1587)年には尾藤知宣が讃岐の領主となった。しかし，これも4か月で終わり，生駒親正が入部する。生駒親正は香東郡の野原庄の海浜に城を築いた。高松城である。

関ケ原の戦いで勝利を得た徳川家康は江戸に幕府を開き，讃岐では生駒藩が成立した。だが，生駒藩は短命に終わり，寛永19(1642)年には松平頼重が入部し，高松藩が成立した。高松藩は生駒藩に引き続いて，丸亀街道・伊予街道・長尾街道・仏生山街道・志度街道・金比羅街道などの街道の整備を行なった。この中でも長尾街道は本遺跡の北側を走るが，『寛永10年讃岐国絵図』

(註3)・『宝暦12年讃岐一円図』(註5)・『天保国絵図』(註6)・『讃岐国往環絵図』(註36)をみると，高松城の南側にある常盤橋を起点とし，木太郷西村（現在の高松市木太町琴電林道駅付近），本山郷大熊（現在の高松市元山町），前田郷水田付近を通って，三木郡氷上郷（現在三木町氷上）付近で中筋大道（古代・中世の南海道）と合流している。現在，長尾街道と言えば県道高松・長尾・大内線のことを指すが，明治時代以降にところどころバイパスを作って道の付け替えを行なっているので，江戸時代の古道をそのまま踏襲しているわけではない。本遺跡の北側付近の県道高松・長尾・大内線も昭和初期に付け替えられたものである。付け替え以前には本遺跡の約100m北側を東西に走る市道が長尾に向かう長尾街道であった。長尾街道の成立時期については不明であるが，江戸時代には本遺跡の北側には長尾街道が走り，かなりの往来があったものと思われる。

3．周辺の地名の変遷

本遺跡は現在高松市東山崎町に所在するが，高松市に合併されたのは昭和31年で，それ以前は木田郡川添村であった。なお，木田郡という郡名は三木郡と山田郡が明治32年に合併してできた郡名で，現在の高松市東山崎町は明治32年以前は山田郡山崎村であった。平安時代承平年間(931～938)に源順によって編纂された『倭名類聚抄』では「山田郡」の名が記されており，明治時代まで当地の郡名であった山田郡の地名は古代から存在することがわかる。なお，『倭名類聚抄』の山田郡には殖田・池田・坂本・穎甲・三谷・拝師・田中・本山・高松・宮所・喜多の11郷がみられる。

室町時代享徳年間（1452～1455）には山田郡は12郷であるとの記載が『南海通記』にある。応永7（1400）年細川家文書の細川頼長寄進状にも「讃岐国山田郡十二郷」とある(註39)ことから，室町時代には山田郡は12郷あることは確実で，平安時代以降に新たに1郷入ったことがわかる。庵治町願成寺には至徳4(1387)年の大般若経奥書があるが，これには「讃州山田郡庵治郷」(註40)との記載がある。庵治郷は『倭名類聚抄』ではみられない地名であるので，新たに山田郡に入ったのは庵治郷であることがわかる。因みにこの庵治郷は江戸時代『寛永10年讃岐国絵図』では三木郡に入っており，山田郡は11郷にもどっている。

現在の東山崎町には本村・佐古・西原・八反地・水田・川向という6つの小字が残っている（第4図）。本調査区の中もいくつかの小字に分かれており，A地区は西原，B・C・D地区は八反地，E地区は水田である。遺跡名はE地区付近の小字名より採っている。水田は東山崎町の中でも最も地名度の高い字名で，本遺跡のA地区の北側には琴平電鉄の水田駅もある。もともと東山崎町の中でも西寄りの小字佐古・西原付近に山崎駅，東寄りの小字水田付近に水田駅があったが，昭和初期に山崎駅を廃止し，水田駅を少し西側に移転した。駅名が「水田」であることから，現在，駅前の銀行・団地・寮の名前に「水田」を使っているものは多い。しかし，これは小

字が「水田」である場所以外をも含めている場合が多い。

「水田」という地名は鎌倉時代に『秋山家文書』(註41)でみることができることから，鎌倉時代にはすでに存在したことがわかる。この頃の「水田」は東本山郷に属していたことは文書に記載されているが，絵図などが残っていないため，具体的な場所については不明である。この『秋山家文書』では文明6(1474)年以降では「水田」という地名はみられず，室町時代後半から桃山時代では「水田」あるいは「山崎」付近の地名等に関する資料は全く不明である。因みに山崎は江戸時代になるまで文献史料にはあらわれない。

江戸時代に入ると古地図や高松藩の高覚帳・小物成帳等で「水田」は「山崎」とともに散見することができる。『寛永10年讃岐国絵図』(註3)（第7・8図）によると山崎村は本山郷に，「水田」は前田郷に属し，長尾街道の北側に「山崎」，長尾街道付近より南側で「山崎」よりもやや東よりに「水田」が記されている。おそらくこの絵図の「水田」は現在の小字水田付近とほぼ同じ場所で，「山崎」は小字本村付近であると思われる。『宝暦12年讃岐一円図』(註5)は「水田」と「山崎」という村名のみで，郷名は記されていない。この絵図は高松平野の東側では南北に比べて東西が少し狭く描かれており，実際より少し縦長の図になっている。「山崎」は長尾街道の北側に書かれており，これは現在の小字西原・佐古・本村付近にあたる。「水田」の字は長尾街道の少し南側に書かれている。長尾街道付近はすぐ北に「山崎」の字があるため書くスペースがないことから，少し南側に書いたものかもしれない。『天保国絵図』(註6)（第13・14図）では「水田」はみられず，「山崎」は長尾街道の真上で春日川と新川の間やや西寄りに書かれている。「水田」は書かれていないことから，おそらく「山崎」は「水田」を含んでいたものと考えられる。

これらの江戸時代の絵図を見ると江戸時代の「水田」は現在の小字水田付近，「山崎」は小字本村・佐古・西原付近に所在することがわかる。また，絵図を年代順に比べると本遺跡の周辺では江戸時代初頭には「山崎」と「水田」という地名が記載されているが，江戸時代の後半になると「山崎」だけしか記載されていないことがわかる。

次に，高覚帳や小物成帳の村名を比べてみると，寛永17（1640）年の『生駒高俊公御領分讃州郡村村並惣高覚帳』では山田郡に「水田・山崎　高1262石6斗7升2合」(註42)とあり，「水田」と「山崎」は一応別の村であるが，実態は同じ村として扱われていたことがわかる。寛永19（1642）年，松平頼重は旧生駒藩を引継ぐが，この時の『高松藩領御引渡覚』では山田郡に「山崎村」があるが，「水田」の地名は見当らない(註9)。しかし，同年の『讃岐国小物成帳』では「水田・山崎　綿249匁」(註43)と「水田」がみられる。貞享元（1684）年になると『讃岐国御領分中高辻帳』に「山崎村　高1206石余」とあるだけで「水田」の地名は記載されていない(註44)。天保5（1834）年の天保郷帳でも「山崎村」はみられるが，「水田」はみられない(註45)。天保9（1838）年『御巡見一条万覚書』では山崎村は戸数159，人数699とある(註29)が，同様に「水田」の地名はみられない。宝暦5（1755）年，寛政9（1797）年に調査され，文政元（1818）年にま

とめられた『池泉合符録』(註13)では「山崎村」がみられるが，この「山崎村」の中に「水田出水」が記されており，水田は山崎村に含まれていることがわかる。江戸時代後半に描かれた『山田郡全図』(註11)でも同様に「山崎」の村名は記されているが，「水田」はみられない。

江戸時代後期に書かれた『東讃郡村免名録』では山崎村九木免の小字として水田が，西前田村では水田免長淵がみられる(註46)ことから，「水田」は小字となり，「水田」と呼ばれた地区は山崎村だけではなく，一部は前田村にも含まれていたことがわかる。以上のことから，江戸時代初頭までは「水田」は前田郷に属す一つの村であったが，寛永年間以降には行政的には水田村はなくなり，山崎村に大部分が編入されたものと考えられる。しかし，実態としては「水田」という村は残っており，現在の小字に引き継がれていったことが窺われる。また，「水田」の一部は西前田村にも編入されたものと考えられる。

明治時代に入ると山崎村は山田郡山崎村となったが，明治23（1890）年には西元山村・東元山村・下田井村・山崎村が合併して川添村になり，山崎は川添村の大字になった。明治32（1899）年には山田郡と三木郡が合併して木田郡ができ，山崎村は木田郡川添村山崎になった。さらに，昭和31（1956）年には川添村は高松市に編入され，現在では旧山崎村は高松市東山崎町になっている。なお，高松市の西部に西山崎町という地名があるが，この西山崎町と区別するために旧木田郡の山崎は東を付けて東山崎町になった。

註1　川野正雄・武田明監修『香川県の地名』日本歴史地名大系38（1989）
2　岡行稚「大野録」『香川叢書　第三』（1972）
3　香川県仲多度郡琴平町金刀比羅宮所蔵　福家惣衛『香川県通史　古代・中世・近世編』（1965）にトレース図掲載（第2表1）
4　香西成資「南海通記」『南海通記・四国軍記』（1976）
5　『三浦家文書』　香川県瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵（第2表7）
6　国立公文書館内閣文庫所蔵（第2表13）
7　松浦文庫　香川県瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵
8　佐戸政直「新田の開発と水利」『香川県史3　近世Ⅰ』（1989）
9　松浦正一『松平頼重伝』（1964）
10　鎌田共済会郷土博物館所蔵（第2表8）
11　前男井間池土地改良区理事長香西憲吉氏夫人所蔵
12　香西成資著，伊井春樹訳『南海治乱記』（1981）
13　「池泉合符録」『香川県史10　近世史料II』（1987）
14　『角川日本地名大辞典37　香川県』（1985）
15　『考古資料収蔵目録1　縄文時代編・図版解説付』香川県瀬戸内海歴史民俗資料館（1978）
16　『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　1988年度』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（1989）
17　『香川県埋蔵文化財調査年報　平成元年度』香川県教育委員会（1990）

18　六車恵一・広峰義昭・溝渕茂樹「香川大学農学部構内出土の遠賀川式の新資料について」『香川県文化財協会報特別号9』(1969)
19　『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成2年度』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター(1991)
20　『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成元年度』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター(1990)
21　『新編　香川叢書　考古編』香川県教育委員会(1983)
22　『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　1988年度』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター(1989)・『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度～昭和62年度』香川県教育委員会(1988)
23　「すべり山遺跡」『新編香川叢書　考古編』香川県教育委員会(1983)
24　『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会(1989)
25　『権八原古墳群発掘調査概報』香川県教育委員会(1975)
26　『高松市茶臼山古墳緊急発掘調査概報』香川県教育委員会(1970)
27　岩田隆・西谷れい子「高松市北山古墳発掘調査概報」『文化財協会報特別号11』香川県文化財保護協会(1969)
28　丹羽佑一・藤井雄三『高松の古代文化』(1988)
29　山田弥三吉編『木田郡誌』(1940)
30　廣瀬常雄「“讃吉国屋嶋城”とその遺構について」『考古学と古代史』(1982)
31　多和文庫所蔵
32　『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報』高松市教育委員会(1987)
『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅰ』高松市教育委員会(1988)
『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報II』高松市教育委員会(1989)
33　『高野山文書』大日本古文書　東京大学史料編纂所編(1979)
34　『妙法院史料』(1976～1982)
35　「秋山家文書」『香川県史8　古代・中世資料』(1986)
36　香川県立図書館所蔵
37　中山城山著・桑田明訳『口訳全讃史』(1991)
38　鎌田共済会郷土博物館所蔵
39　「細川家文書」『香川県史8　古代・中世史料』(1986)
40　『新修香川県史』香川県教育委員会(1953)
41　「秋山家文書」『新編　香川叢書　史料篇(二)』香川県教育委員会(1981)
42　「生駒高俊公御領分讃州郡村村竝惣高覚帳」『香川叢書　第二』(1972)
43　「讃岐国小物成帳」『香川県史9　近世史料Ⅰ』(1982)
44　写本　豊浜町教育委員会所蔵
45　国立公文書館所蔵
46　高松市立図書館所蔵,『角川日本地名大辞典37　香川県』(1985)

第3章　調査の成果

第１節　土層

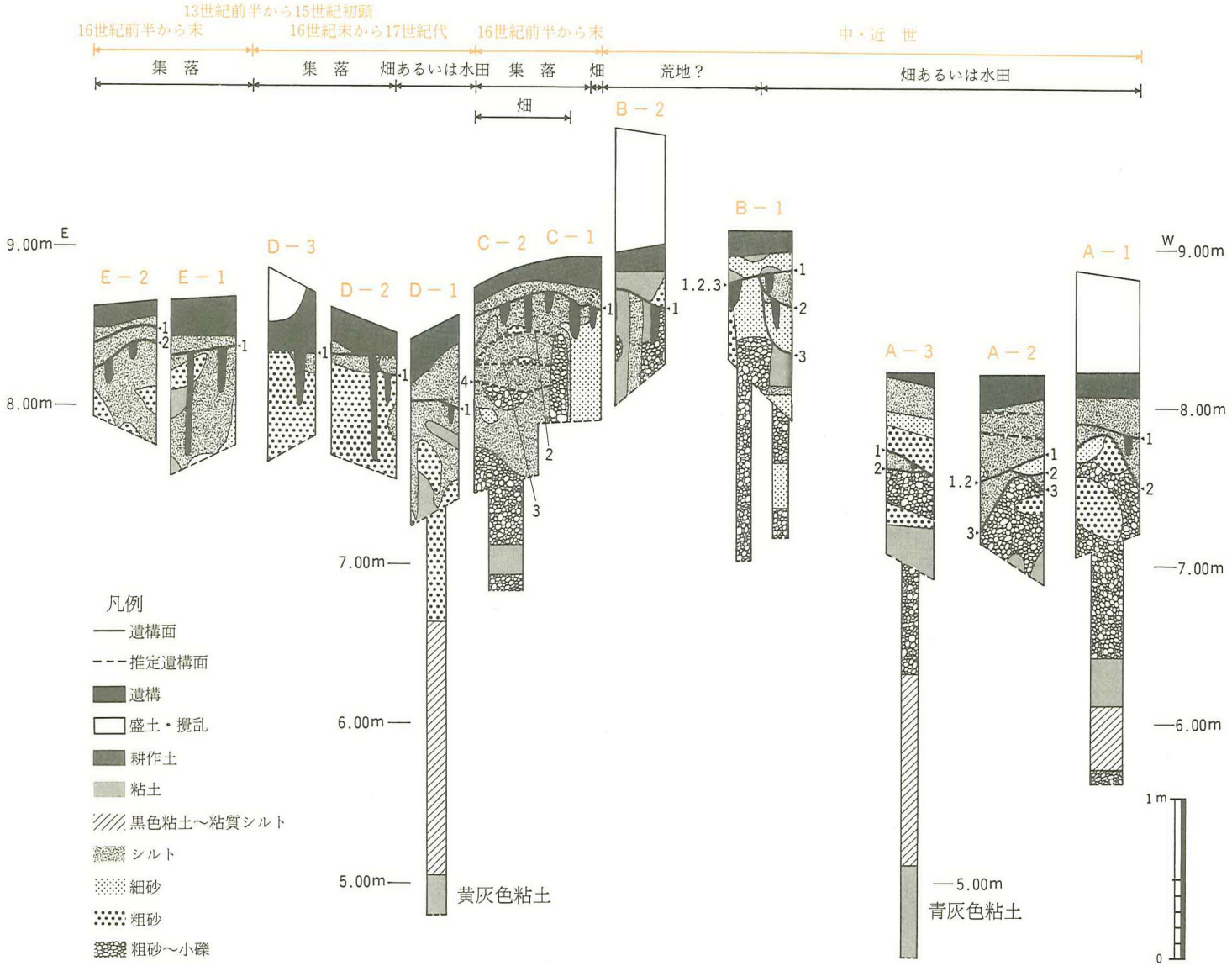
本遺跡は高松平野の中でも氾濫平野に立地する(註1)。本遺跡の土層断面の観察と記録は基本的に調査区の四壁すべてについて行なった。その中でも本遺跡の長辺にあたる南壁については遺構掘削終了後，壁沿いに深掘りトレンチを掘削し，遺構面以下をも含めた土層断面図を作成した。また，一部の調査区では埋め戻し直前に調査区中央付近で機械による深掘りを行い，土層柱状図を作成した。土層図の整理は南壁を中心として行ない（第19図，図版３～５），南壁の土層断面図に埋め戻し前の深掘りの土層柱状図を加えて，土層断面模式図を作成した（第18図）。

本遺跡では深掘り部分を含めると，現地表下２～３ｍまで調査を行なった。東西の調査地の長さは500ｍに及ぶ。このため，土層堆積は各調査区で異なり，複雑である。また，各調査区は市道や用水路によって隔てられているため，土層のつながりや各調査区の遺構面の対応については不明であるところが多い。そのため，土層についての説明は各調査区ごとに行なう。

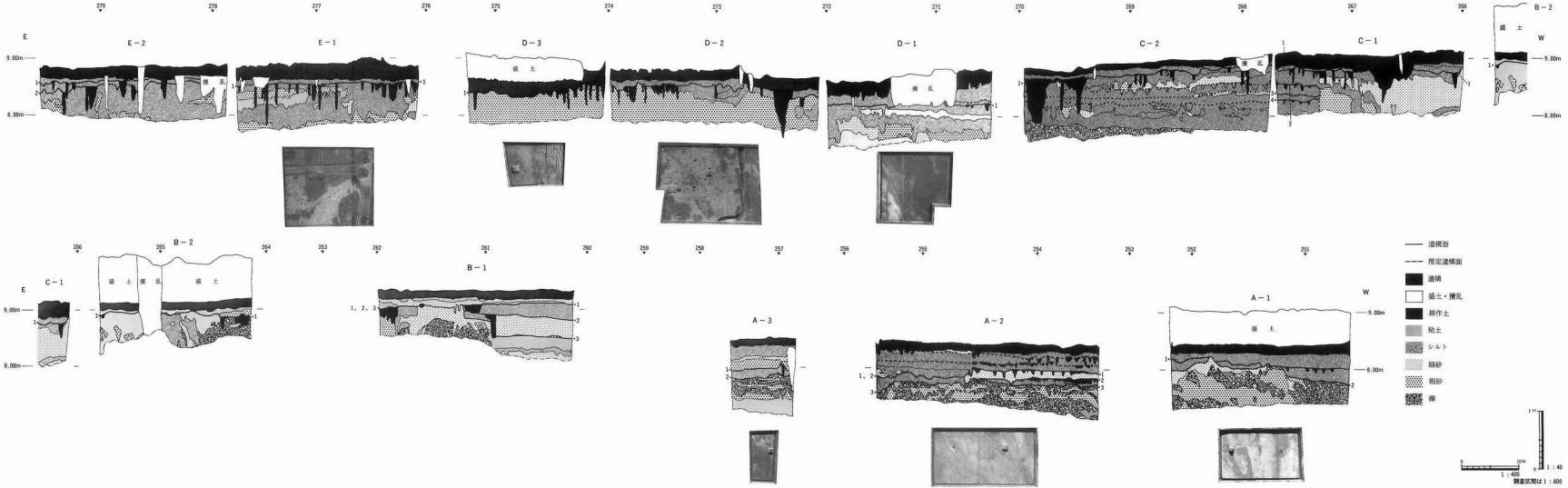
本遺跡の現地表面はかなり起伏がみられ，標高8.4～10.0ｍを測る。盛土部分を含めず旧耕作土の高さを比べると最も高いのはＢ－１区で9.3ｍ，最も低いのはＢ－１区の西側に位置するＡ地区で8.4ｍ，その比高差は0.9ｍを測る。Ｂ－１区の東側では緩やかに下がっており，Ｄ－１区の東部が最も低く，標高8.6ｍである。Ｂ－１区との比高差は0.7ｍを測る。

各調査区の遺構面は現地表から比較的浅く，深さ0.1～0.8ｍで，標高は7.6～9.1ｍを測る。Ａ地区は本遺跡の中でも現地表の標高が最も低い。調査以前は水田や宅地として利用されていた。この調査区では数枚の遺構面が存在し，洪水堆積物の細砂層に覆われた中・近世の水田・畑を検出した。水田・畑の耕作土は比較的水はけの良いシルトから細砂で，酸化鉄・マンガン斑が全体に薄く広がる。畑・水田層の下層は氾濫原であったらしく，Ａ－１区では標高7.8～8.1ｍ以下，Ａ－２区では標高7.7～7.9ｍ以下，Ａ－３区では標高7.8ｍ以下は小礫・粗砂・粘土層がラミナー状に堆積する。Ａ－１区のラミナー堆積は第２面（氾濫原上面）の平面観察では南から北に向かって走るが，Ａ－２・Ａ－３区ではＡ－１区とラミナー堆積の方向は少し異なり，南東方向から北西方向に走る。なお，埋め戻し前に機械による深掘りをＡ－１区とＡ－３区で行なった。小礫から粘土のラミナー堆積は1.2～1.4ｍの厚さで，標高6.6ｍ付近まで続き，この下には青灰色粘土や黒色粘土が厚く堆積することが観察できた。

Ｂ－１区は調査前は畑として利用されており，現地表はほぼ水平であった。しかし，旧地形は



第18図　南壁土層断面模式図（縦1/40）



第19図　南壁土層断面図（縦 1／40，横 1／400）

東部と西部でかなりの高低差があり，西部は急激に低くなっていた。東部では１枚，西部では３枚の遺構面が存在する。東部の遺構面は細砂・粗砂からなり，西部では畑あるいは水田耕作土層と考えられる細砂・シルト・粘土層の水平堆積層が数枚みられる。この水平堆積層には酸化鉄・マンガン斑が薄くひろがる。機械による深掘りは西部では現地表面より２mの深さまで行ない，水平堆積層の下はシルト・細砂・粗砂がラミナー堆積することを確認した。また，東部でも深掘りを行なったところ，遺構面以下にみられる細砂から粗砂層のラミナー堆積は深さ1.8m以上続くことを確認した。

Ｂ－２区は宅地跡で地上げをしており，盛土が0.7～0.9mと厚く堆積する。遺構面は１枚で，旧耕作土の上面より深さ0.2～0.4mで，江戸時代の遺構を検出した。遺構面は西部では礫が堆積し，東部ではシルトから粗砂がラミナー状に堆積していたことから，江戸時代以前は氾濫原であったものと考えられる。

Ｃ地区は調査前は水田として利用されていた。ここでは３枚の遺構面を調査した。しかし，第２～４面の平面的な調査を行なったのはＣ－１南拡張区だけで，それ以外の調査区では土層観察のみで調査をとどめた。第１面は標高8.8～8.9mを測る。この遺構面では16世紀後半の集落跡と畑を検出した。第２～４面はＣ－１区の東部からＣ－２区全面に広がる。Ｃ－１南拡張区では第２面の標高は8.6m，第３面の標高は8.4m，第４面の標高は8.3mであった。この３枚の遺構面からはシルト層を耕作土とする畑を検出した。畑の耕作土の上部は上層の耕作により削平されていたが，畑の畝溝などの凹部には洪水砂が堆積していた。第１～４面はシルト層を主体とする堆積であるが，この下層には厚さ1.5mの粘土～粗砂・小礫のラミナー堆積層，黒色粘土層が堆積する。Ｃ－１区の西部は第２面より下では遺構はなく，第１面下0.1mで厚さ0.7m以上の細砂・粗砂のラミナー堆積がみられた。

調査前のＤ－１・Ｄ－２区は水田，Ｄ－３区は宅地として利用されていた。Ｄ－１区では土層断面では２面の遺構面を確認したが，これらの面は５cmの差があるだけで遺構数も微量であるため，上層では平面的に調査を行なわず，下層の面で同時に遺構を検出した。この面はシルト層を主体とする層で，標高8.2mを測る。遺構面以下は氾濫原で，ラミナー堆積が観察された。遺構面付近のラミナー堆積は平面的には南東から北西の方向に走る。また，遺構面より0.2～0.4m下の標高7.7～7.9m付近では粗砂層が検出された。この調査区では埋め戻し前に機械による深掘りを現地表から深さ3.6m，標高５m付近まで行なったところ，この粗砂層は厚さ１mを測ることがわかった。また，この下には厚さ1.6mの黒色粘土・粘質シルト層，その下には黄灰色粘土層の堆積がみられた。

Ｄ－２区では土層断面の観察により，調査区の東部では１枚，西部では２枚の遺構面を確認したが，差は10cmほどであるため，下層の面まで掘り下げて，２面同時に平面的な調査を行なった。このＤ－２区の遺構面はＤ－３区に連続し，標高8.4～8.5mを測る。この面では13世紀代と16世

紀末から17世紀前半の集落を検出したが，この面より下は氾濫原で，Ｄ－２区～Ｄ－３区の西部ではシルトを中心とするラミナー堆積，Ｄ－３区の東部では粗砂を中心とするラミナー堆積を確認した。Ｄ－３区東部の粗砂層はＤ－２区ではシルト層の下に潜る。また，このシルト・粗砂のラミナー堆積は両調査区の遺構面では南東から北西の方向に走る。

Ｅ地区は調査前は水田であった。Ｅ－１区では１枚の遺構面，Ｅ－２区では２枚の遺構面を確認した。この２面からは13世紀前半から15世紀初頭の遺構を検出した。Ｅ－１区の遺構面は現地表下0.4m，標高8.5mを測る。Ｅ－２区では第１面は標高8.6～8.7m，第２面は標高8.4～8.6mを測る。Ｅ－２区では第１面・第２面ともに東部に比べ西部のほうが0.1～0.2mほど高い。遺構面はシルト層で，この層は厚さ0.6m以上を測り，ラミナー堆積する。このラミナーは平面的にはＥ－１区の西部では南西から北東の方向に，Ｅ－１区の東部では南から北方向に走る。

本遺跡では以上のような土層堆積が，みられたが，土層の堆積状況と検出遺構の時期から本遺跡が営まれる中世～近世以前は氾濫原で，河川の氾濫が頻繁におこり，自然環境はかなり不安定であったことが確認された。この氾濫原のラミナーの平面的な方向は基本的に南から北であるが，方向にはかなり幅をもち，土砂の供給は一方向からのものではなく，様々な方向の流れにより堆積したラミナーであることがわかる。堆積の時期については，場所によりかなり差異がみられる。しかし，深掘りを行なった際にいずれの地区からも遺構面下のラミナー堆積の砂層中から中世のものと考えられる土師質土器皿などが出土していることから，少なくとも中世まで頻繁に堆積作用を繰り返していたものと考えられる。

これらの様々な流れによる土砂の堆積のまとまりをみつけるには土層断面を観察し，粗粒から細粒のラミナー堆積の１サイクルや斜交層理を観察し，その大きなまとまりをみつけなければならない。また，このまとまりの平面的な方向を観察することにより，堆積土砂の原因となる流れの方向が認識できる。しかし，本遺跡の調査においては土層断面の観察をラミナーの１サイクルを把握するほどの細かな観察は発掘調査中に行なっていない。また，一部分の調査区においてしか深掘りを行なっていないため，ラミナー堆積がどこまで下層に続いていくか不明であり，流れの大きなまとまりも把握できにくい。しかし，平面的なラミナーの方向については遺構面の航空写真（第19図）を観察することにより，遺構面付近の土砂堆積の原因となる流れの方向についてはある程度推察することができる。また，その流れの時期についてもラミナー中の出土遺物からある程度は推察可能である。

本調査地の中で遺構面が最も高い調査区はＢ－１区である。地形図や航空写真をみると，このＢ－１区付近では地割りが乱れていることがわかる。この乱れは蛇行しながら南北に連続しており，本調査地の南方にあたる川島東町の川島橋付近で春日川と合流する。この地割りの乱れは川島東町付近では周囲に比べて低く凹地になっているためであり，由良町・下田井町・東山崎町付近では周囲に比べて高く凸地になっているためである。おそらく，この筋状の凹凸の連続は川島

橋付近で春日川から東に分流する旧河道の侵食作用と堆積作用によるものであろう。B－1区はこの旧河道の堆積作用によって形成された自然堤防に立地するため周囲に比べて高くなっているものと考えられる。また，この旧河道の時期については不明であるが，自然堤防上より江戸時代の遺構が検出されていることなどから，江戸時代以前であることはまちがいない。上限については不明であるが，B－1区西部の遺構面下のシルトから小礫のラミナー堆積層より中世の土師質土器皿が出土していることから，おそらく中世までは機能していたものと考えられる。

また，B－1区の西側に位置するA－2・A－3区では南東から北西に向かうラミナー堆積が遺構面でみられたが，これはA－2・A－3区の南東方向から砂が供給されたことを示している。おそらくB－1区付近に自然堤防を形成した旧河道から供給されものであろう。

D・E地区においてはD－3区の東部の遺構面は粗砂で，この両隣りに位置するD－3区西部からD－1区，E－1・E－2区の遺構面はシルトで，その下に粗砂が堆積する。深掘りを行なっていないので，粗砂堆積の下部の断面形状については不明であるが，この粗砂の盛り上がりは旧河道によって形成された自然堤防であろう。また，D－3区の遺構面のラミナーは平面的には南東から北西方向に走り，農道を隔てた東側のE－1区の西部ではラミナーは南西から北東の方向に走る。このラミナーの方向からもD－3区を中心とする旧河道は南から北に流れていたことがわかる。D－3区では耕作による攪乱を受けているため，遺構面の高さを比べるわけにはいかないが，遺構面下の粗砂が盛り上がって堆積することやラミナーの方向より，D－3区の東部からD－3区とE－1区の間の農道付近は自然堤防であったものと考えられる。

この自然堤防を形成した流れの時期はD－2区の遺構面下の細砂層のラミナーの中から13世紀代の和泉型瓦器埦（984）が出土していることから，少なくとも鎌倉時代以降のものであると考えられる。なお，この2つの自然堤防の間に挟まれた後背湿地にあたるD－1区では現地表下2mで粗砂層がみられ，この下に黒色粘土から粘質シルト層が1.5mの厚さで堆積することが深掘りで確認された。この黒色粘土から粘質シルトを機械によって掘削したところ，この土層中には弥生土器片・土師質土器片が数点含まれることがわかった。いずれも実測不可能であったが，弥生土器は高松平野特有の土器で，雲母と角閃石を多量に含むいわゆる雲母土器の破片である。土師質土器は数点みられるが，この中には古代から中世のものと考えられる坏または皿の破片がみられた。これらの土器は黒色粘土から粘質シルトのどのあたりに含まれていたのかは不明であるが，現地表下3m，標高6.0m付近より古代から中世の土器が出土したことにより，春日川と新川に挟まれた本調査地付近はかなり新しい時期まで土砂の堆積作用がみられたことがうかがわれる。

以上のように，土層断面の観察から，中世頃まで本調査地付近では堆積作用を繰り返しており，地形的に安定したのは本調査地に集落が営まれる直前であることがわかった。E地区では13世紀前半から15世紀初頭の集落が検出されていることから，この付近ではすでに13世紀前半には

安定したことがわかる。また，集落が検出されたＥ地区は粗砂の堆積する自然堤防ではなく，少し下がった自然堤防の縁辺に位置する。これはＣ地区・Ｄ地区についても同様のことで，16～17世紀の集落が自然堤防から少し下がったところで検出された。また，自然堤防に挟まれた後背湿地にあたるＤ地区では水田あるいは畑として利用されていたことが確認できた。

第２節　遺構・遺物

本遺跡においてはＡ～Ｅ地区の５調査区に分けて25,400㎡の調査を行い，中・近世の水田・畑６枚，掘立柱建物37棟，柵列12，橋１基，井戸・水溜め18基，土坑81基，柱穴・小穴約1,000個，溝171条，不明遺構20の遺構を検出した（第20図，第３表）。遺物は土器・陶磁器・金属製品・石製品・木製品・動物遺存体が整理用コンテナ260箱出土した。

これらの遺構は中世から近世の生産遺構である田畑と，集落を構成するものに分けられる。田畑はＡ・Ｂ地区で，集落についてはＣ～Ｅ地区で検出された。また，これらの集落は同時期のものではなく，おおよそ３時期に分けられ，13世紀前半から15世紀初頭の集落がＤ・Ｅ地区で，16世紀前半から末の集落がＣ・Ｅ地区で，16世紀末から17世紀前半の集落がＤ地区で検出された。

第３表　東山崎・水田遺跡遺構一覧表

地　区	小調査区	遺構面	遺構の種類	遺　構　名	報告書掲載	備　　考
Ａ	Ａ－１区	第１面	畝溝		○	
		第２面			○	
	Ａ－２区	第１面	畝溝		○	
			耕作痕		○	
			溝	ＳＤ01 ＳＤ02	○ ○	
		第２面	畝溝		○	
		第３面			○	
	Ａ－３区	第１面	水田		○	
			溝	ＳＤ03	○	
		第２面			○	
Ｂ	Ｂ－１区	第１面	土坑	ＳＫ01	○	
			溝	ＳＤ01 ＳＤ02 ＳＤ03 ＳＤ04	○ ○ ○ ○	
			不明遺構	ＳＸ01	○	
		第２面	溝	ＳＤ05	○	

地　区	小調査区	遺構面	遺構の種類	遺　構　名	報告書掲載	備　　考
B	B－1区	第2面	不明遺構	SX02	×	畑，水田？
		第3面	不明遺構	SX03	×	畑，水田？
	B－2区	第1面	土坑	SK02	○	
				SK03	○	
			溝	SD06	○	
				SD07	○	
				SD08	○	
				SD09	○	
			不明遺構	SX04	○	
				SX05	×	
C		第1面	掘立柱建物	SB01	○	
				SB02	○	
				SB03	○	
				SB04	○	
				SB05	○	
				SB06	○	
				SB07	○	
				SB08	○	
				SB09	○	
				SB10	○	
				SB11	○	
				SB12	○	
				SB13	○	
				SB14	○	
				SB15	○	
			柵列	SA01	○	
				SA02	○	
				SA03	○	
				SA04	○	
				SA05	○	
				SA06	○	
				SA07	○	
				SA08	○	
			橋	SY01	○	
			井戸・水溜め	SE01	○	
				SE02	○	
				SE03	○	
				SE04	○	
				SE05	○	
				SE06	○	
			土坑	SK01	○	
				SK02	○	
				SK03	○	
				SK04	○	
				SK05	○	
				SK06	○	
				SK07	○	
				SK08	○	
				SK09	○	
				SK10	○	
				SK11	○	
				SK12	○	
				SK13	○	
				SK14	○	
				SK15	○	
				SK16	○	
				SK17	○	SE04関連遺構，SE04と同時に報告
				SK18	○	
				SK19	○	
				SK20	○	
				SK22	○	

地　区	小調査区	遺構面	遺構の種類	遺　構　名	報告書掲載	備　　考
C		第1面	土坑	SK23	○	
				SK24	○	
				SK25	○	
				SK26	○	
				SK27	○	
			柱穴・小穴	SP01～238	○	掘立柱建物・柵・橋
				SP239	○	
				SP240	○	
				SP241	○	
				SP242	○	
				SP243	○	
				SP244	○	
				SP245	○	
				SP246	○	
				SP247	○	
				SP248	○	
				SP249	○	
				SP250	○	
				SP251	○	
				SP252	○	
				SP253	○	
				SP254	○	
				SP255	○	
				SP256	○	
				SP257	○	
				SP258	○	
				SP259	○	
				SP260	○	
				SP261	○	
				SP262	○	
				SP263	○	
				SP264	○	
				SP265	○	
				SP266	○	
				SP267	○	
				SP268	○	
				SP269	○	
				SP270	○	
				SP271	○	
				SP272	○	
				SP273	○	
				SP274	○	
				SP275	○	
				SP276	○	
				SP277	○	
				SP278	○	
				SP279	○	
				SP280	○	
				SP281	○	
				SP282	○	
				SP283	○	
				SP284	○	
				SP285	○	
				SP286	○	
				SP287	○	
				SP288	○	
			溝	SD01	○	
				SD02	○	
				SD03	○	大溝
				SD04	○	大溝
				SD05	○	大溝
				SD06	○	
				SD07	○	
				SD08	○	
				SD09	○	
				SD10	○	
				SD11	○	
				SD12	○	

地　区	小調査区	遺構面	遺構の種類	遺　構　名	報告書掲載	備　　考
C		第1面	溝	SD13	○	
				SD14	×	
				SD15	×	
				SD16	×	
				SD17	×	
				SD18	○	
				SD19	○	
				SD20	○	大溝
				SD21	○	大溝
				SD22	○	
				SD23	×	
				SD24	×	
				SD25	○	
				SD26	×	
				SD27	×	
				SD28	×	
				SD29	×	
				SD30	×	
				SD31	○	SB03関連溝
				SD32	○	SB07関連溝
				SD33	○	SB07関連溝
				SD34	×	
				SD35	○	
				SD36	○	
				SD37	○	
				SD38	○	
				SD39	×	
				SD40	×	
				SD41	×	
				SD42	○	SB05関連溝
				SD43	×	
				SD44	○	一部SB08関連溝
				SD45	○	SB08関連溝
				SD46	×	
				SD47	×	
				SD48	×	
				SD49	×	
				SD50	×	
				SD51	×	
				SD52	×	
				SD53	×	
				SD54	×	
				SD55	×	
				SD56	×	
				SD57	×	
				SD58	×	
				SD59	×	
				SD60	×	
				SD61	○	
				SD62	○	
				SD63	×	
				SD64	×	
				SD65	×	
				SD66	○	
				SD67	○	
				SD68	○	SB12関連溝
				SD69	○	SB13関連溝
				SD70	○	SB15関連溝
				SD71	×	
				SD72	×	
				SD73	×	
				SD74	×	
				SD75	○	SY01関連遺構
				SD76	○	
				SD77	○	
			不明遺構	SX01	○	
				SX02	○	
				SX03	×	

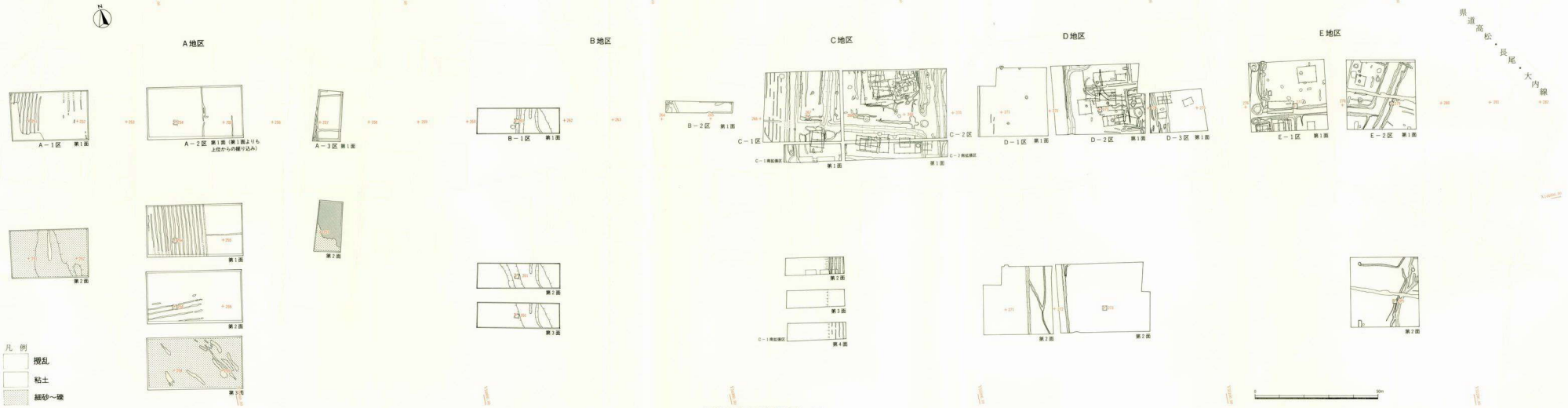
地　区	小調査区	遺構面	遺構の種類	遺　構　名	報告書掲載	備　　考
C		第2面	畝溝		○	
		第3面	畑・田		○	
		第4面	畝溝		○	
D		第1面	掘立柱建物	SB01	○	
				SB02	○	
				SB03	○	
				SB04	○	
				SB05	○	
				SB06	○	
				SB07	○	
				SB08	○	
				SB09	○	
				SB10	○	
				SB11	○	
			柵列	SA01	○	
				SA02	○	
			井戸	SE01	○	
				SE02	○	
				SE03	○	
				SE04	○	
			土坑	SK01	○	
				SK02	○	
				SK03	○	
				SK04	○	
				SK05	○	
				SK06	○	
				SK07	○	
				SK08	○	
				SK09	○	
				SK10	○	
				SK11	○	
				SK12	○	
				SK13	○	
				SK14	○	
				SK15	×	
				SK16	○	
				SK17	○	
				SK18	○	
				SK19	○	
				SK20	○	
				SK21	○	
				SK22	○	
				SK23	○	
				SK24	○	
				SK25	○	
				SK26	○	
				SK27	○	
				SK28	○	
			柱穴・小穴	SP 1～99	○	掘立柱建物・柵
				SP100	○	
				SP101 ～108	○	掘立柱建物・柵
				SP109	○	
				SP110 ～141	○	掘立柱建物・柵
				SP142	○	
				SP143	○	
				SP144	○	
				SP146	○	
				SP147	○	
				SP148	○	
				SP149	○	
				SP150	○	
				SP151	○	
				SP152	○	

地　区	小調査区	遺構面	遺構の種類	遺　構　名	報告書掲載	備　　考
D		第1面	柱穴・小穴	S P 153	○	
				S P 154	○	
				S P 155	○	
				S P 156	○	
				S P 157	○	
				S P 158	○	
				S P 159	○	
				S P 160	○	
				S P 161	○	
				S P 162	○	
				S P 163	○	
				S P 164	○	
				S P 165	○	
				S P 166	○	
				S P 167	○	
				S P 168	○	
				S P 169	○	
				S P 170	○	
				S P 171	○	
				S P 172	○	
				S P 173	○	
				S P 174	○	
				S P 175	○	
				S P 176	○	
				S P 177	○	
				S P 178	○	
				S P 179	○	
				S P 180	○	
				S P 181	○	
				S P 182	○	
				S P 183	○	
				S P 184	○	
				S P 185	○	
				S P 186	○	
				S P 187	○	
				S P 188	○	
				S P 189	○	
				S P 190	○	
				S P 191	○	
				S P 192	○	
				S P 193	○	
				S P 194	○	
				S P 195	○	
				S P 196	○	
				S P 197	○	
				S P 198	○	
				S P 199	○	
				S P 200	○	
			溝	S D 01	○	大溝
				S D 02	○	
				S D 03	○	
				S D 04	○	
				S D 05	○	
				S D 06	×	
				S D 07	○	
				S D 08	○	
				S D 09	○	
				S D 10	○	
				S D 11	○	
				S D 12	○	
				S D 13	○	
				S D 14	○	
				S D 15	○	
				S D 16	○	
				S D 17	○	
				S D 18	○	
				S D 19	○	
				S D 20	○	
				S D 21	○	

地　区	小調査区	遺構面	遺構の種類	遺　構　名	報告書掲載	備　　考
D		第1面	溝	SD22	○	
				SD23	○	
				SD24	○	
				SD25	○	
				SD26	○	
				SD27	○	
				SD28	○	
				SD29	○	
				SD30	○	
				SD31	○	
				SD32	○	
				SD33	○	
				SD34	○	
				SD35	×	
				SD36	×	
				SD37	×	
				SD38	×	
				SD39	×	
				SD40	×	
				SD41	×	
				SD42	×	
				SD43	×	
				SD44	×	
				SD45	×	
				SD46	×	
			不明遺構	SX01	○	
				SX02	×	
				SX03	×	
				SX04	○	
				SX05	×	
				SX06	○	
			畝溝		○	
		第2面	溝	SD47	○	
				SD48	○	
				SD49	○	
				SD50	○	
				SD51	○	
E		第1面	掘立柱建物	SB01	○	
				SB02	○	
				SB03	○	
				SB04	○	
				SB05	○	
				SB06	○	
				SB07	○	
				SB08	○	
				SB09	○	
				SB10	○	
				SB11	○	
			柵列	SA01	○	
				SA02	○	
			井戸	SE01	○	
				SE02	○	
				SE03	○	
				SE04	○	
				SE05	○	
				SE06	○	
				SE07	○	
			土坑	SK01	○	
				SK02	○	
				SK03	○	
				SK04	○	
				SK05	○	
				SK06	○	

地　区	小調査区	遺構面	遺構の種類	遺　構　名	報告書掲載	備　　考
E		第1面	土坑	SK07	○	
				SK08	○	
				SK09	×	
				SK10	○	
				SK11	○	
				SK12	○	
				SK13	○	
				SK14	×	
				SK15	○	
				SK16	○	
				SK17	○	
				SK18	○	
				SK19	○	
				SK20	○	
				SK21	○	
				SK22	×	
				SK23	○	
			柱穴・小穴	SP01～83	○	掘立柱建物・柵列
				SP84	○	
				SP85	○	
				SP86	○	
				SP87	○	
				SP88	○	
				SP89	○	
				SP90	○	
				SP91	○	
				SP92	○	
				SP93	○	
				SP94	○	
				SP95	○	
				SP96	○	
				SP97	○	
				SP99	○	
				SP100	○	
				SP101	○	
				SP102	○	
				SP103	○	
				SP104	○	
				SP105	○	
			溝	SD01	○	
				SD02	○	
				SD03	○	
				SD04	○	
				SD05	○	
				SD06	○	
				SD07	○	
				SD08	○	
				SD09	○	
				SD10	○	
				SD11	○	
				SD12	○	
				SD13	○	
				SD14	○	
				SD15	○	
				SD16	○	
				SD17	○	
				SD18	○	
				SD19	×	
				SD20	○	
				SD21	○	
				SD22	×	
				SD23	×	
			不明遺構	SX01	○	
				SX02	○	
				SX03	○	
				SX04	×	

地　区	小調査区	遺構面	遺構の種類	遺　構　名	報告書掲載	備　　考
E		第1面	不明遺構	SX05	○	
				SX06	○	
			墓	ST01	○	
		第2面	井戸	SE08	○	
			柱穴	SP106	○	
			溝	SD24	○	
				SD25	○	
				SD26	○	
				SD27	○	
				SD28	○	
				SD29	○	
				SD30	○	
				SD31	○	



第20図 東山崎・水田遺跡遺構配置図（1／800）

1．A地区

本調査区は本遺跡の西端に位置する。現地表の標高は8.5～9.1mと本遺跡の中で最も低い。本調査区では西からA－1・A－2・A－3区と3つの小調査区に分けて調査を行なった。その結果，本地区は中・近世以前は河川の氾濫原であり，中・近世になって地形環境が安定し，水田・畑が営まれたことを確認した。以下，各調査区の概要を記す。

(1)　A－1区

本調査区は調査以前は宅地として利用されており，0.6m程度の盛り土がみられた。この調査区では2枚の面を調査した。第1面は茶灰色シルト層上面で，標高8.0～8.1mを測る。この面では中・近世の畑の畝溝を検出した。第2面は標高7.8～8.0mを測る。この面は近世以前の氾濫原の上面にあたるが，遺構はみられなかった。

また，各面の時期については，各土層中の遺物から次のように考えた。第1面の直上には橙緑灰色～緑灰色シルト層が堆積するが，この層は第1面で検出された畑よりも新しい時期の耕作土層である。この層からはビニール袋中1袋程度の遺物が出土した。遺物は破片ばかりで，様々な時代のものがみられる。年代のわかるものの中で最も古い遺物は13世紀中葉の瓦器埦（2），最も新しいものは18～19世紀の国産陶器（5・6）である。

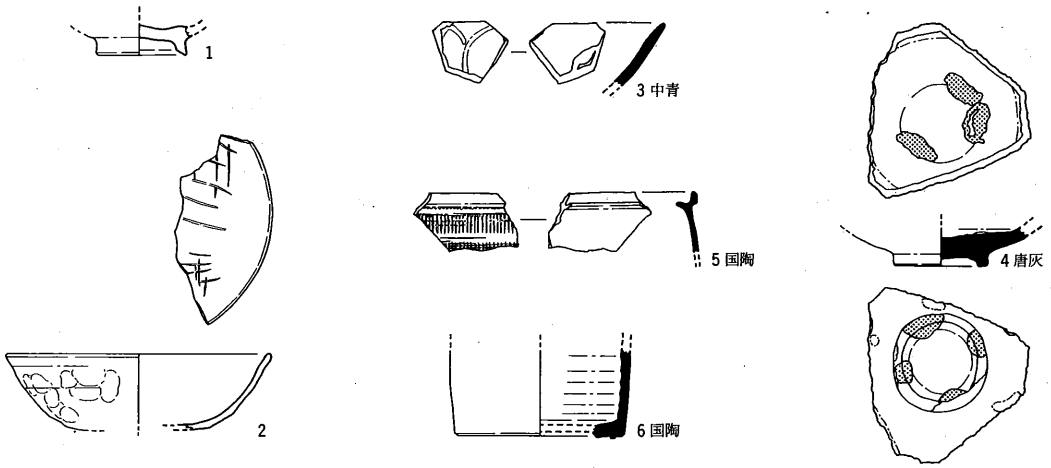
第1面で検出された畑については溝の埋土からはビニール袋小1袋の遺物が出土したが，土師質土器皿片と中国産白磁の小片などが数点みられただけで，詳細な時期を示す遺物は出土しなかった。また，畑の耕作土中からは須恵器壺の体部破片（7），土師器坏（8），須恵器壺（9），土師質土器皿（10），中国産青磁皿（11），中国産白磁皿（12）や亀山焼甕の体部破片，須恵器片など，ビニール袋中1袋程度の遺物が出土したが，近世陶磁器はみられなかった。

7は体部破片であるが，初期須恵器である。8は平安時代，10は中世あるいは近世のものであろう。11は同安窯系の青磁皿である。底部外面の釉を掻き取ることから，大宰府分類の同安窯系青磁皿Ⅰ－2類で，12～13世紀のものであると考えられる(註2)。12は口禿げの白磁皿で，大宰府分類の白磁IX類にあたる。14世紀代のものであろう。

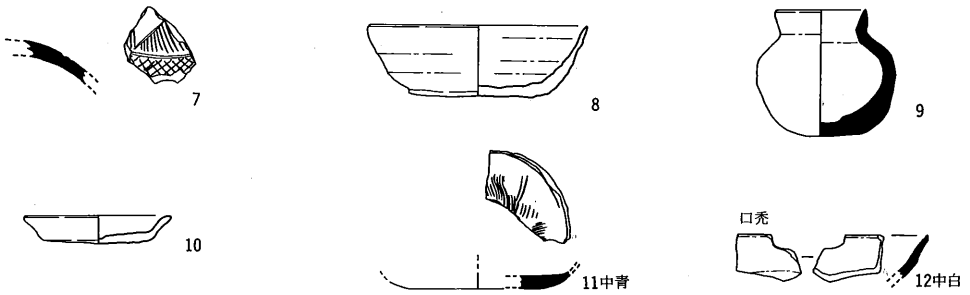
畑の耕作土からの出土遺物は少量で，年代のわかる遺物は少ないが，この中で最も新しいものは14世紀代のものであることから，畑の埋没時期は少なくとも14世紀以降で，上層の堆積層からの出土遺物から18～19世紀以前のものであると考えられる。

また，第2面の平面的な調査終了後，南壁沿いに幅1mの深掘トレンチを掘削した。緑灰色～淡茶褐色の細砂から小礫のラミナー堆積層より，須恵器高坏（13），須恵器壺（14），瓦器埦の底部破片（15），瓦質土器埦（16），石鏃（17），スクレイパー（18），弥生土器片，古代から中世の土師器片などビニール袋大1袋の遺物が出土した。

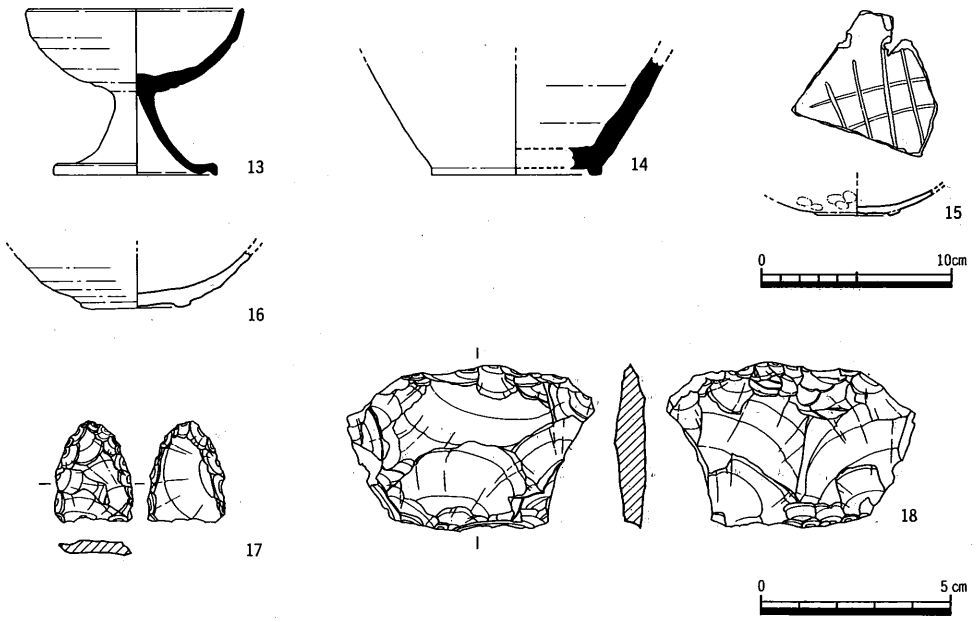
13・14は須恵器高坏・壺であるが，13は7世紀中葉から後半，14は平安時代前期のものである。



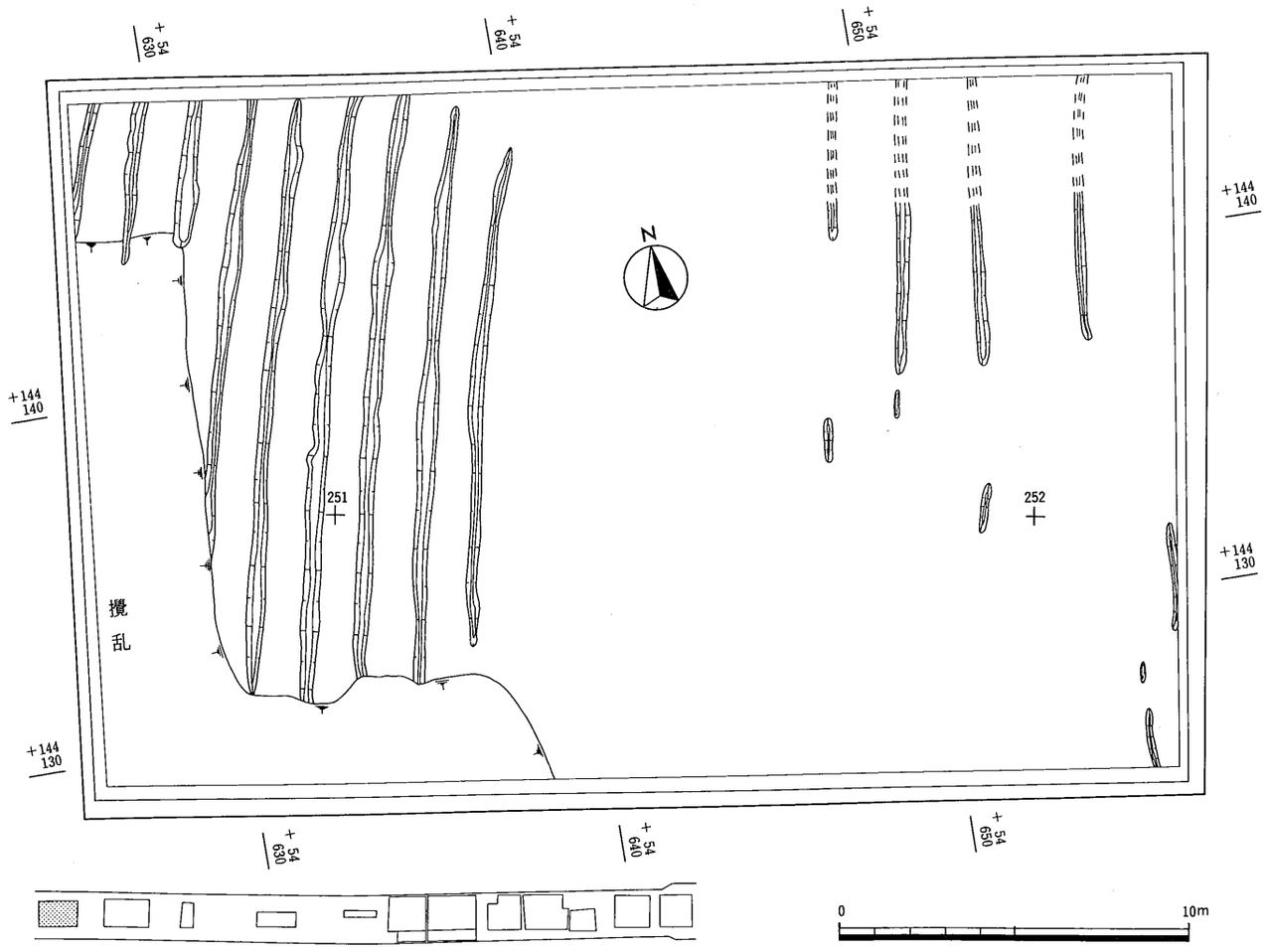
第21図　Ａ－１区第１面上位層（橙緑灰色～緑灰色シルト層）出土遺物（1/4）



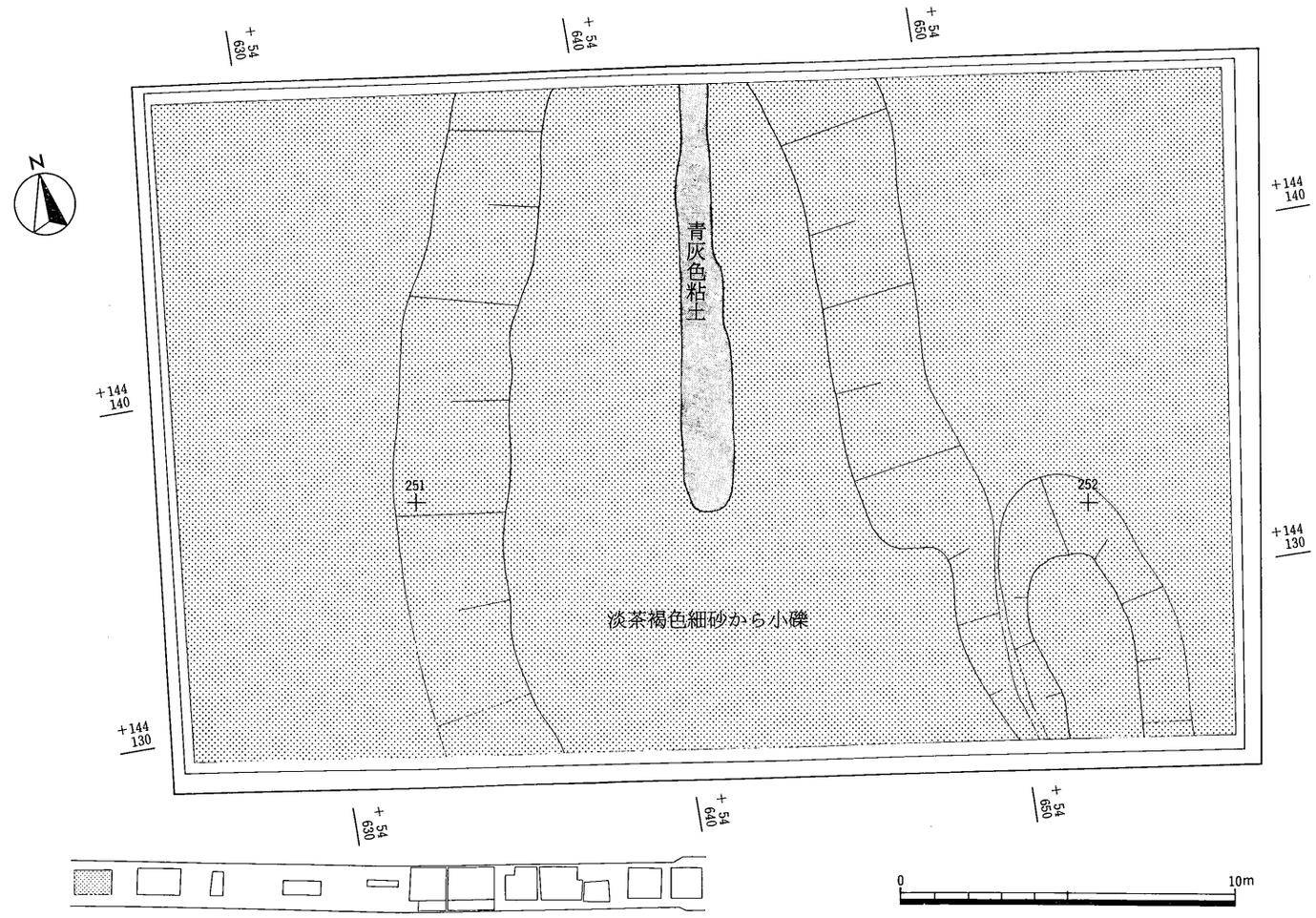
第22図　Ａ－１区第１面下位畑耕作土・第２面上位層（茶灰色シルト層）出土遺物（1/4）



第23図　Ａ－１区第２面下位層（緑灰色～淡茶褐色細砂から小礫層）出土遺物（1/4，1/2）



第24図　A－1区第1面遺構配置図（1/200）



第25図　A－1区第2面遺構配置図（1/200）

15は瓦器埦で，13世紀代のものである。16は香川県綾南町西村産の瓦質土器埦で，13世紀後半のものである。

これらの弥生時代から中世の遺物は本遺跡の上流に同時期の遺跡が存在したため，ここから流れ込んだものであると思われる。この氾濫原のラミナー堆積の中から出土した遺物の中で最も新しいものの時期は，13世紀後半であることから，本調査区では少なくとも13世紀後半以降まで堆積作用を繰り返したことは確実であるが，氾濫原中には近世陶磁器は全くみられなかったことから，近世には流れは治まったものと考えられる。

第1面（第24図，図版6・7）

1）畝溝

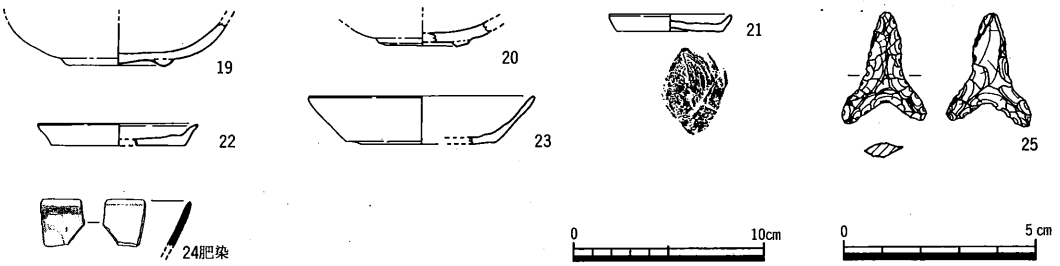
調査区の東部と西部で検出された。西南隅は一部攪乱を受けているが，調査区の西部で検出された畝溝は9本で，北東方向（N－14°－E）に平行に走る。9本の溝は幅0.4m，深さ0.1mを測り，畝溝に挟まれた一つの畝の単位は1mを測る。東部では5本の畝溝が検出された。西部の畝溝とは少し方向が異なり，N－8°－Eを測る。残りは悪く，切れ切れに検出された。幅0.2m，深さ0.1mを測る。西部・東部の畝溝の埋土は灰色細砂であることから，畝溝の埋没は洪水による堆積であると考えられる。耕作土の上部は上層からの耕作により削平されていたが，耕作土の下部は0.1m程度残存していた。茶灰色シルトである。

第2面（第25図，図版7）

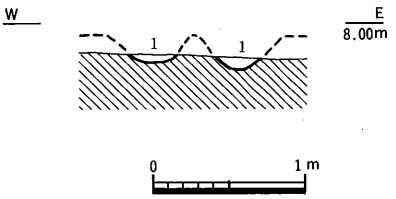
淡茶褐色細砂から小礫層，青灰色粘土層の上面である。この面以下では砂がラミナー堆積することから，氾濫原で，第2面は氾濫原の上面にあたることがわかる。淡茶褐色細砂から小礫層は調査区の中央付近で南北に細長く盛り上がっており，その中央には青灰色粘土が堆積する。また，ラミナーの平面的な方向は南北方向であるので，第2面以下の土層を堆積させた流れは南から北に向かっていたことがわかる。

(2)　A－2区

本調査区はA－1区の13m東側に位置する。本調査区では3面の遺構面を調査した。第1面は淡灰褐色細砂層の上面で，標高7.8～7.9mを測る。2条の溝と，洪水砂に覆われた畑の畝溝，耕作痕が検出された。SD01・SD02は第1面で検出された畑の畝溝と埋土は異なり，洪水砂ではないことから，第1面で検出された畑の畝溝や耕作痕と同時併存のものでないものと考えられる。第2面は調査区の西部だけに存在し，標高7.7～7.8mを測る。この面でも畑の畝溝が検出された。第3面は近世以前の氾濫原の上面にあたる。遺構は検出されなかった。標高7.5～7.7mを測る。



第26図　Ａ－２区第１面上位層（濁橙灰色シルト層）出土遺物（1/4，1/2）



第27図　Ａ－２区ＳＤ02断面図（1/50）

また，各土層の時期は各土層からの出土遺物から次のように考えた。第１面では畝溝が多数検出された。埋土からは中世あるいは近世の土師質土器皿片，須恵器片などビニール袋小１袋程度の遺物が出土したが，詳細な時期を示す遺物はみられなかった。畝溝の東部には洪水砂に覆われた耕作痕が多数検出された。これらの耕作土からは中世あるいは近世のものと考えられる土師質土器坏（26）・埦の底部破片（27）・皿片，亀山焼甕片，黒色土器甕片などビニール袋小１袋程度の遺物が出土した。これらの遺物の時期から，第１面で検出された畝溝・耕作痕は少なくとも13世紀以降に廃絶した田畑であると考えられる。

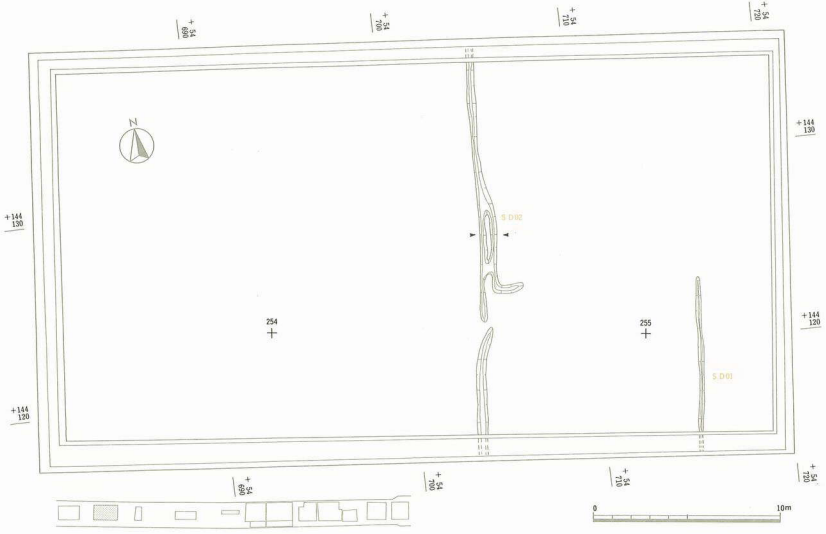
第２面でも洪水砂に覆われた畝溝が検出された。埋土からは土師器片が２片出土した。小片のため，時期は不明である。

また，第３面の平面的な調査終了後，調査区の壁沿いにトレンチを設定してこの氾濫原の一部を掘り下げたが，古墳時代の須恵器坏身（28），平安時代前期の須恵器壺（29），木製品紡織具（30），中世あるいは近世の土師質土器皿，中国産白磁片，中国産青磁碗片など数点の遺物が出土した。中国産青磁碗は鎬蓮弁のもので，13世紀末頃までのものと考えられる。出土遺物は少量であったが，この氾濫原のラミナー堆積の中から出土した遺物の中で，最も新しいものの時期は13世紀末であることから，14世紀以降まで堆積作用を繰り返していたことがわかる。しかし，この層には近世陶磁器は含まれていないことから，近世には流れは治まったものと考えられる。

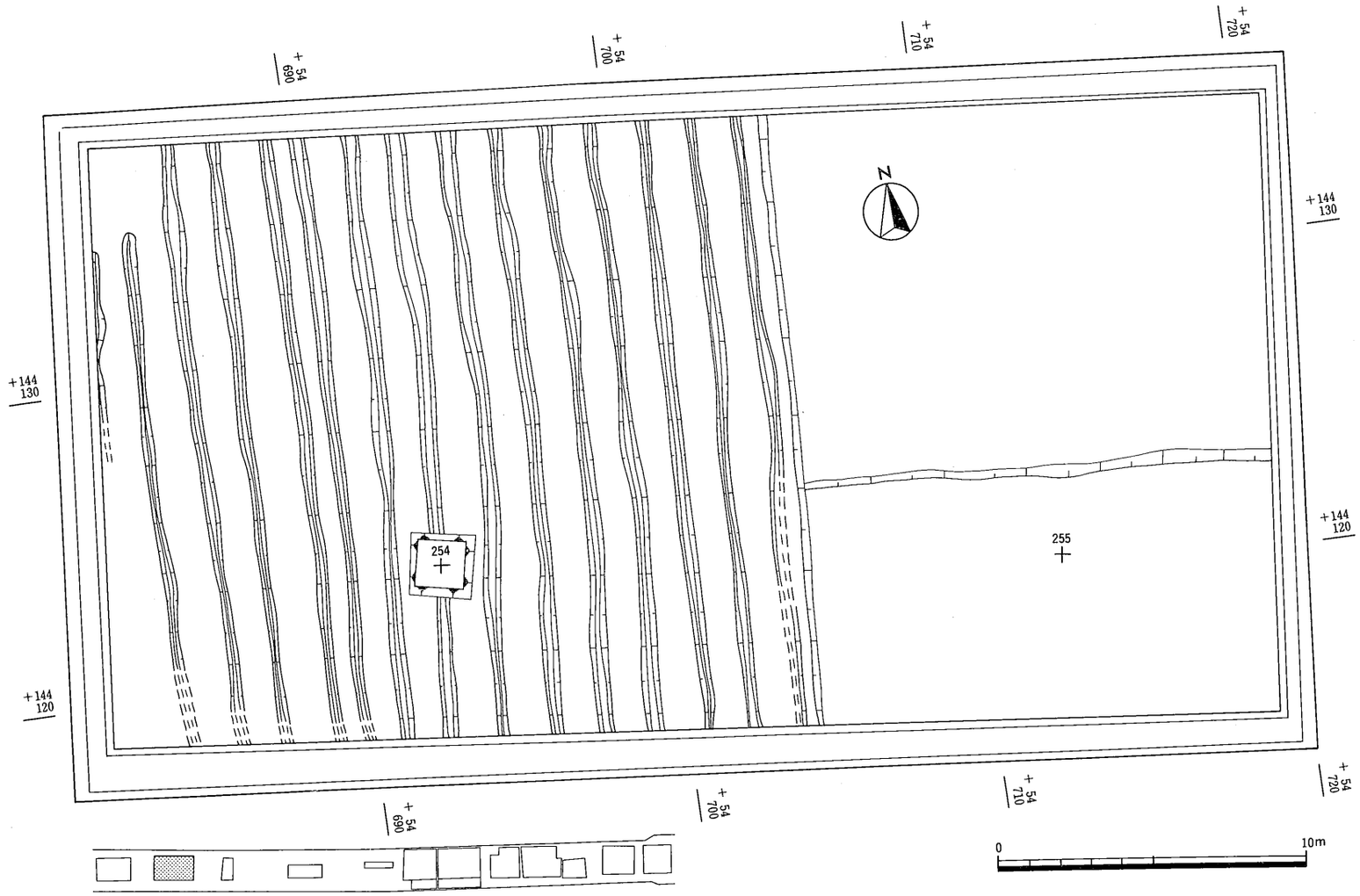
第１面

１）溝（第28図）

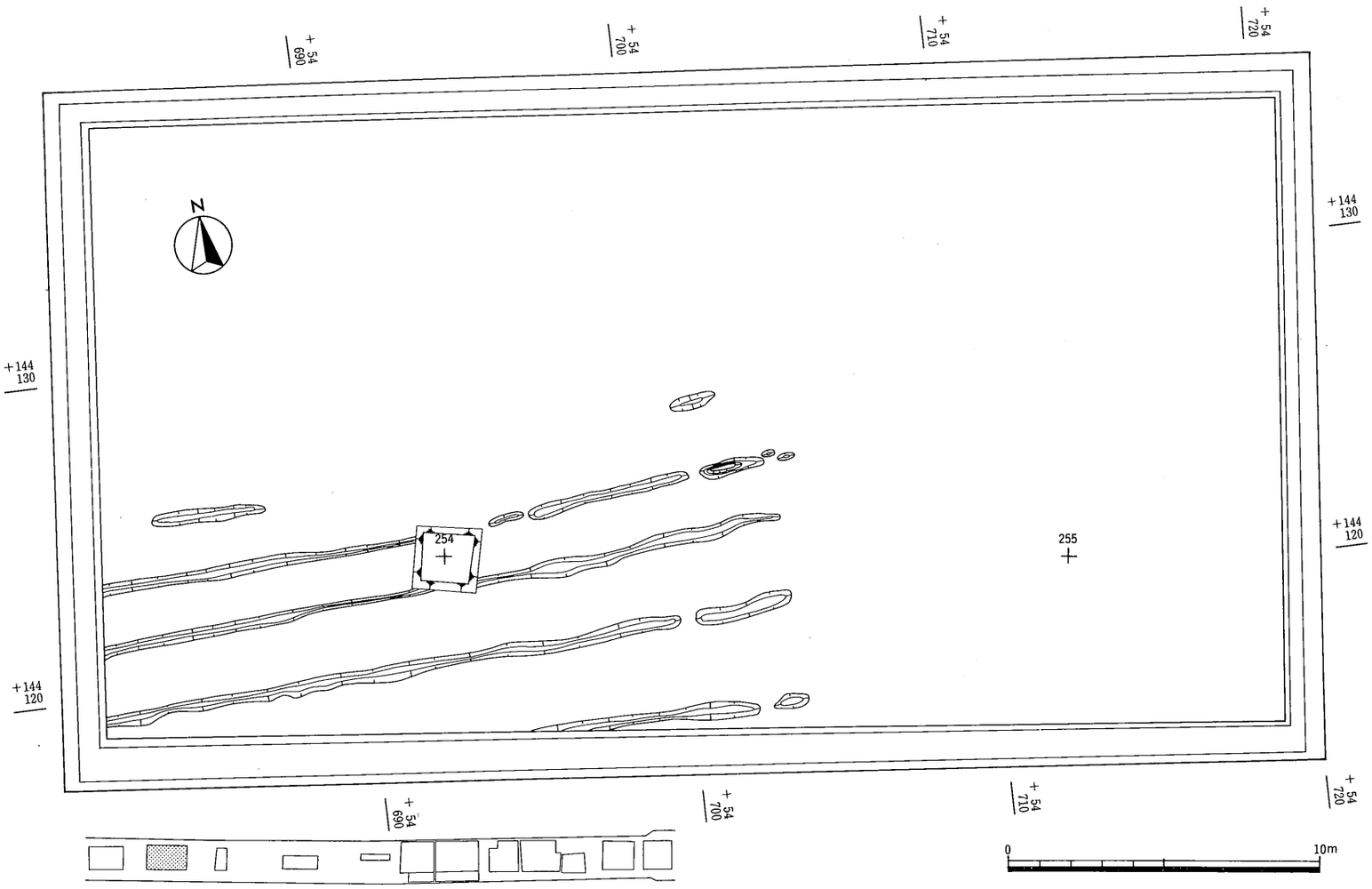
ＳＤ01　第１面よりも上層から掘り込まれた溝である。調査区の中央付近から南に延びる溝で，ほぼ南北方向（Ｎ－４°－Ｅ）に走る。検出時の幅は0.2m，深さは0.1mを測る。埋土は濁橙灰色シルトである。遺物は中世あるいは近世のものと考えられる土師質土器皿破片が１片出土した。詳細な時期は不明である。



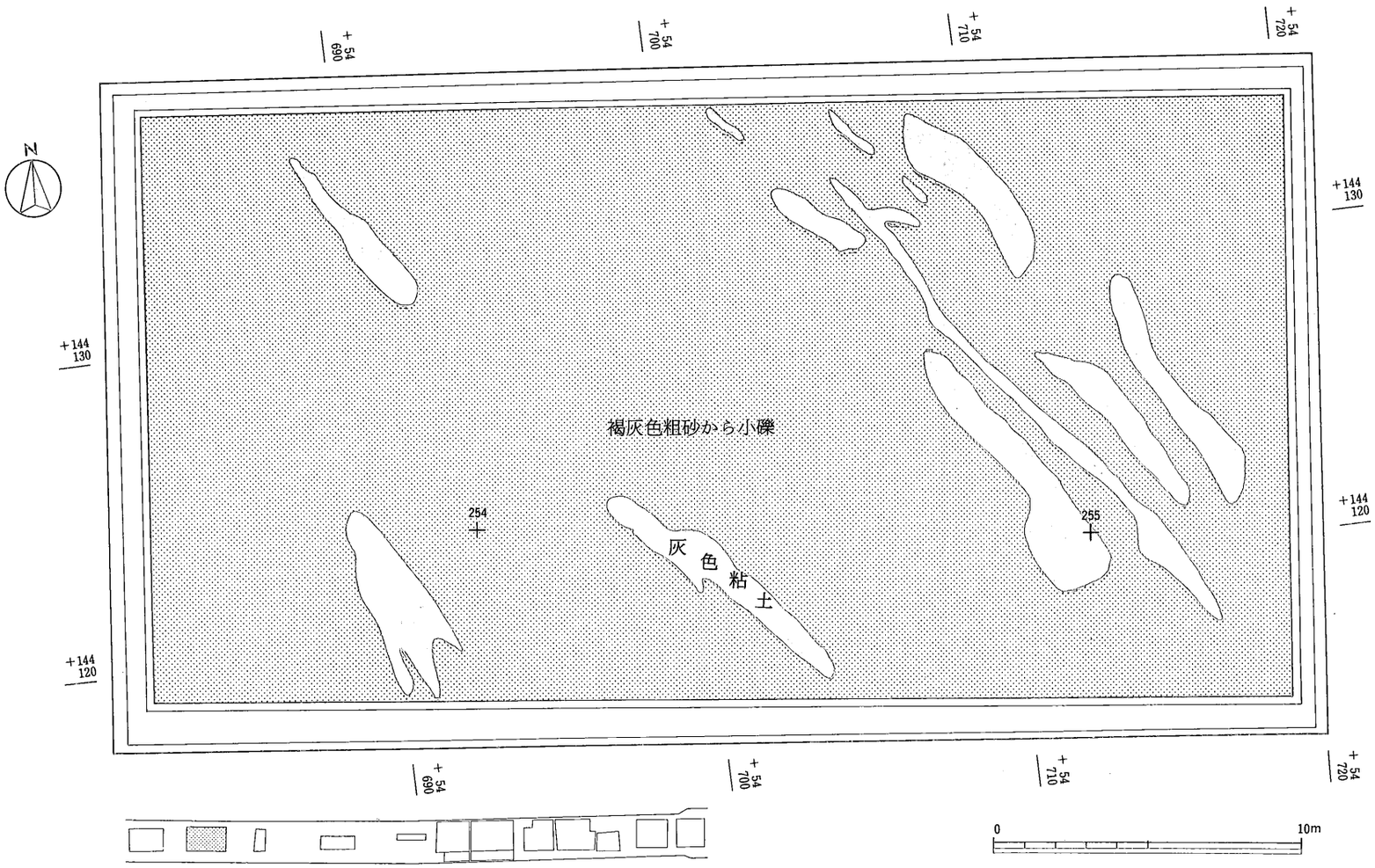
第28図　A－2区第1面遺構配置図　第1面よりも上位からの掘り込み（1/200）



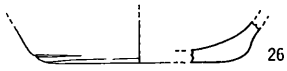
第29図　A－2区第1面遺構配置図（1/200）



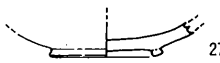
第30図　A－2区第2面遺構配置図（1/200）



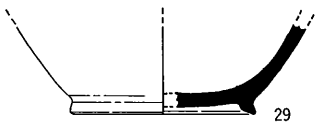
第31図　A－2区第3面遺構配置図（1/200）

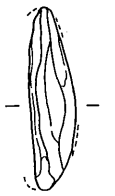


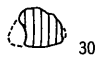
第32図　Ａ－２区第１面西部畑耕作土層（灰褐色細砂層）出土遺物（1/4）

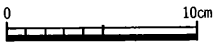


第33図　Ａ－２区第１面東部畑耕作土層（灰褐色シルト層）出土遺物（1/4）









第34図　Ａ－２区第３面下位層氾濫原（褐灰色～青灰色粗砂から小礫層）出土遺物（1/4）

ＳＤ02（第27図）　第１面よりも上層から掘り込まれた溝である。ほぼ南北方向（Ｎ－４°－Ｅ）に走る溝である。中央より南側で一部切れており，南部と北部の２本の溝に分かれるが，南部の溝の北端は北東寄りに少し曲がる。北部の溝は中央付近では東西に二股に分かれており，東側の溝は東に直角に曲がる。検出時の溝の幅は0.3m，深さは0.1mを測る。埋土は濁橙灰色シルトである。遺物は土師器片が１片出土しただけである。

２）畝溝（第29図，図版８）

調査区の西部から中央にかけて15本の溝が検出された。いずれの溝もほぼ南北方向（Ｎ－４°－Ｅ）に等間隔に平行に走ることから，畑の畝溝であると考えられる。溝幅0.3～0.4m，深さ0.1mを測る。埋土は洪水堆積物と考えられる粒子の均一な乳灰褐色細砂である。畑の畝の１単位の幅は0.8～1.4mを測る。畑の耕作土の上部は上層からの耕作により削平されていたが，耕作土の下部は0.15m程度残存する。灰褐色細砂である。

３）耕作痕（図版８）

調査区の東部で検出された切れ切れに走る溝である。これらの耕作痕は畝溝と同様，洪水堆積物の乳灰褐色細砂に覆われていた。検出面は西部から中央にかけて検出された畑より0.1m程度低く，一段下がっていた。また，調査区の中央付近で段がついており，北部はもう一段，0.1m程度下がっていた。溝は検出面で幅0.05～0.1m，深さ0.03～0.1mを測り，ほぼ南北方向（Ｎ－４°－Ｅ）に無数に走る。いずれも平面形はいびつである。無数にある耕作痕のうち，一部の遺構については埋土を掘り下げた。埋土からの出土遺物は少なく，土師質土器皿片などが数点みられた程度であった。いずれも時期不明である。また，この田畑の耕作土は灰褐色シルトで，0.1m程度残存していた。

第2面（第30図，図版9）

1）畝溝

調査区の西南部で5本の畝溝が検出された。残存はあまり良好ではなく，一部は途中で切れている。これらの畝溝は第1面で検出された畝溝とほぼ直交する方向（N－88°－E）に走る。溝幅0.3～0.5m，深さ0.1mを測る。埋土は洪水堆積物と考えられる橙灰色細砂である。一つの畝の幅は1.4～2.0mである。耕作土の上部は第1面の畑の耕作により削平されていたが，耕作土の下部は0.1m程度残存していた。灰褐色シルトである。

第3面（第31図，図版10）

この面は氾濫原の上面にあたる。遺構は検出されなかった。褐灰色粗砂から小礫中に南東方向から北西方向に走る灰色粘土がブロック状に堆積していたことから，流れの方向は南東から北西方向であったことがうかがわれる。

(3)　A－3区

本調査区はA－2区の東側に位置する。A－2区とA－3区との間には市道・用水路を挟む。この調査区では2面の遺構面を検出した。第1面は標高8.0mを測り，洪水砂に被覆された中・近世の水田跡が検出された。第2面は近世以前の氾濫原の上面にあたり，標高7.8mを測る。遺構は検出されなかった。

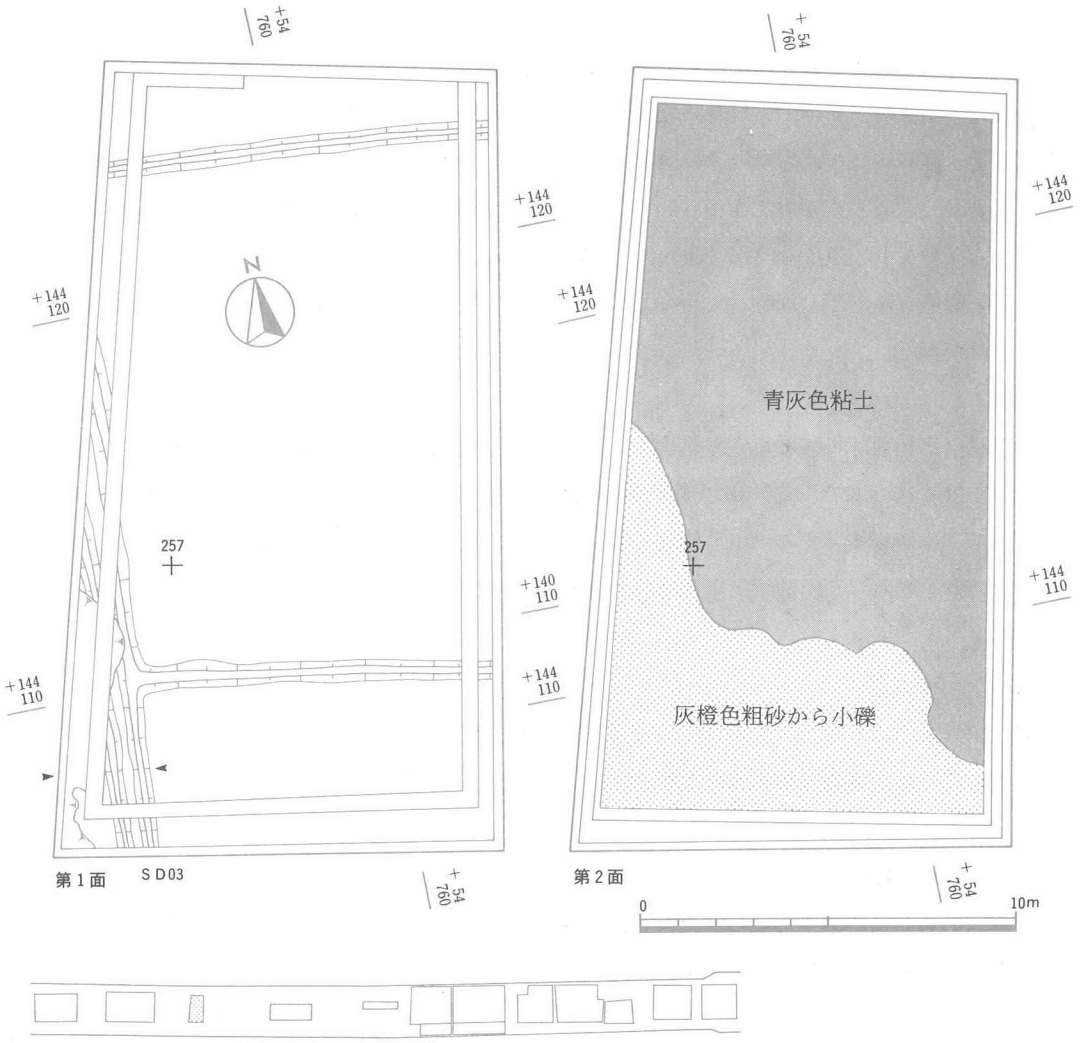
また，各土層の時期は各土層の出土遺物の時期から，次のように考えた。第1面の上層の洪水堆積層より黒色土器埦片，須恵器片，土師質土器羽釜・土鍋・皿片が数点出土した。詳細な時期は不明であるが，中世あるいは近世のものであると考えられる。また，第1面で検出された水田耕作土中より土師質土器片・須恵器片・黒色土器片がビニール袋小1袋程度出土した。遺物は小破片のみで，詳細な時期は不明であるが，中世あるいは近世のものであると考えられる。

第2面の調査終了後，壁の四周にトレンチを設定し，深さ1mの深掘りを行なったところ，中世から近世の土師質土器皿片，弥生後期甕片が数点出土した。出土遺物は少量であるが，氾濫原中の最も新しい遺物は中世から近世の土師質土器皿である。本調査区でも氾濫原中からは近世陶磁器は出土していないことから，この遺物は中世のものであると考えられるので，近世以前の流れであったものと考えられる。

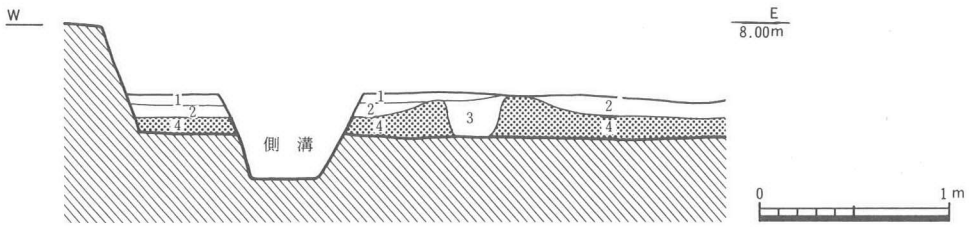
第1面

1）水田跡（第35・36図，図版10・11）

水田は厚さ0.1mの白色粗砂，淡茶灰色細砂に被覆されていた。被覆層は粒子の細かい淡茶灰色細砂が下層，粒子の大きな白色粗砂が上層に堆積していることから，この両層は同一の洪水の



第35図　Ａ－３区遺構配置図（1/200）



1．白色粗砂（洪水堆積層）
2．淡茶灰色細砂（洪水堆積層）
3．赤褐色粗砂（洪水堆積層）
4．淡茶灰色シルト（耕作土）

第36図　Ａ－３区第１面水田跡断面図（1/40）

ラミナー堆積によるものであると考えられる。調査区の西部ではこの洪水砂層の下に，２本の畦畔と，これらの畦畔に挟まれた南北方向の溝が１条検出された。また，この溝に直交して東西方向に延びる畦畔も２本検出された。北側の畦畔はＥ－５°－Ｓを測り，南側の畦畔はＥ－９°－Ｓを測る。畦畔はいずれも幅0.3m，高さ0.1mを測る。調査区が狭いため，一筆の水田面積は不明であるが，調査地の中央で検出された２本の畦畔に挟まれた中央の水田の南北長は14mであることから，かなり小規模な水田であったことがうかがわれる。土層断面の観察により，水田耕作土は淡茶灰色シルトで，厚さは0.1～0.2mを測る。耕作土の下部には鉄分・マンガンの集積層はみられなかった。

２）溝

ＳＤ03（第36図）　ほぼ南北方向（Ｎ－４°－Ｅ）に走る溝である。幅0.3～0.4m，高さ0.1mの畦畔に挟まれた溝で，幅0.3m，畦畔の上端からの深さ0.2mを測る。埋土は洪水堆積物の赤褐色粗砂で，水田を被覆する洪水堆積物と同一のものである。赤褐色化は上層からの鉄分のしみ込みによるものであろう。遺物は須恵器甕片と土師質土器片が出土した。時期は不明である。

第２面（第35図）

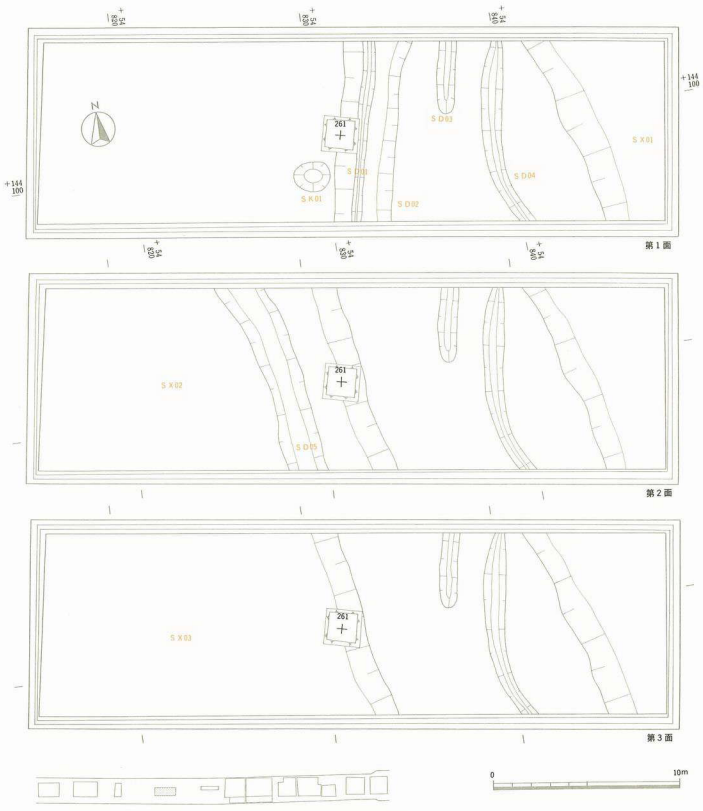
氾濫原の上面にあたる。この面では青灰色粘土層と灰橙色粗砂から小礫層が北西方向にラミナー堆積していた。遺構は検出されなかった。

２．Ｂ地区

Ａ地区の東側に位置する調査区である。本調査地の中で最も標高が高く，自然堤防上に立地する。本地区はＢ－１・Ｂ－２区の２調査区に分けて調査を行なった。Ｂ－１区とＢ－２区の間は市道などが走り，この２つの調査区は約40m離れる。遺構面はＢ－１区の東部からＢ－２区にかけては１面であるが，Ｂ－１区の西部は急激に下がっており，ここでは３面の遺構面を検出した。出土遺物が少量であるため，詳細な時期は不明であるが，Ｂ－１区の東部からＢ－２区にかけては中・近世の遺構，Ｂ－１区の西部でも中・近世の遺構を検出した。

(1)　Ｂ－１区

本調査区は調査以前は畑として利用されていた。調査区の西部では３面の遺構面，東部では１面の調査を行なった。第１面は調査区全域に広がっていた。この面はほぼ水平で標高9.0mを測る。東部では淡灰褐色シルトから細砂層，西部では淡黄灰色シルト層の上面にあたる。この面では江戸時代後半の溝４条，土坑１基，落ち込み１が検出された。第２面以下は東部は高く，西部は低い地形を呈しており，第２面は調査区の中央から西部だけに存在する。遺構面は標高8.8mで，淡灰褐色細砂層の上面である。この面では中・近世の溝が１条検出された。第３面も調査区



第37図　B－1区遺構配置図（1/200）

の西部で検出された。標高8.6mを測り，中・近世の水田あるいは畑の耕作土層と考えられる灰褐色粘土層が水平堆積をしていた。この灰褐色粘土層の下は氾濫原であるが，出土遺物の時期から近世以前のものと考えられる。

第1面（第37図，図版12）

1）土坑

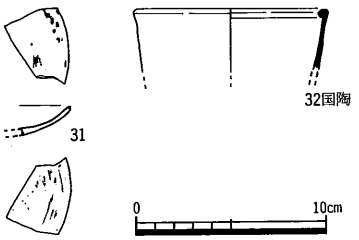
SK01　調査区の中央で検出された土坑である。径1.8m，深さ0.6mを測る。上層の埋土は灰茶色粘質シルトで，下層は淡灰茶色粘土である。遺物は出土しなかった。

2）溝

SD01　調査区の中央で検出された。南北方向に走る溝である。SD02と重複するが，SD01のほうが新しい。幅0.5m，深さ0.1mを測る。埋土は黄灰色粘土混じり細砂層である。遺物は出土しなかった。

SD02（第38図）　南北方向に走る溝である。幅3m，深さ0.2mを測る。埋土は灰褐色細砂混じり粘土で，土師質土器皿（31），国産陶器香炉または鉢（32），土師質土器片少量と瓦片が出土した。

31は黒漆が両面に付着していた。32は江戸時代後半のものである。



第38図　B－1区SD02出土遺物（1/4）

SD03　南北方向に走る溝である。幅1.0m，深さ0.2mを測る。埋土は淡灰褐色シルト層である。出土遺物は土師質土器1片だけである。

SD04　南北方向に走る溝である。溝の南部は南東方向に湾曲する。幅0.8～1.0m，深さ0.2mを測る。埋土は暗褐灰色粘質シルト層である。遺物は出土しなかった。

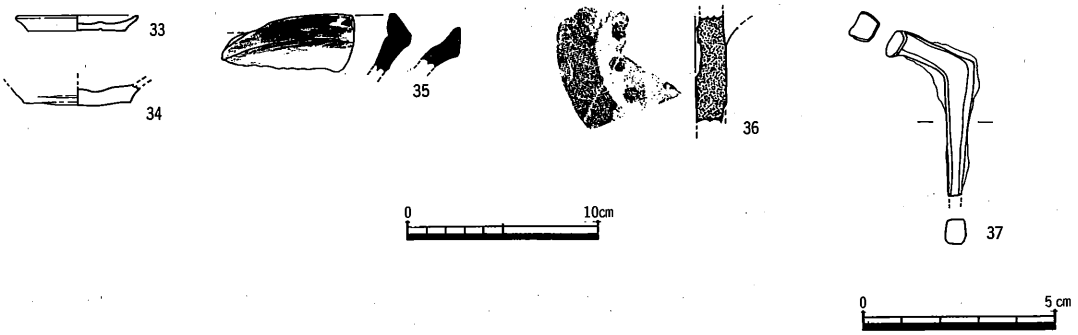
3）不明遺構

SX01　調査区の東部で検出された落ち込みである。東・南・北部は調査区外に及ぶため全体は不明であるが，調査区の東側を走る市道と平行に走る。幅6m以上で，深さ0.2～0.3mを測る。埋土は褐色粘質シルトである。土師質土器坏，黒色土器埦の破片などビニール袋小1袋程度の遺物が出土した。いずれも小片のため時期不明である。

第2面（第37図）

1）溝

SD05　東部から西部に向かって南北方向に走る溝である。幅は1.8～2.0mを測り，深さ0.4mを測る。埋土は淡灰褐色粘土層で，遺物は土師器質土器羽釜の脚・皿片が少量出土した。いずれも小片のため時期不明である。



第39図　Ｂ－１区西部第１面下位層，第２面上位層（淡黄灰色シルト層）出土遺物（1/4，1/2）

第３面（第37図，図版12・13）

調査区の西部で検出された。遺構は認められなかったが，この面は灰褐色粘土の水平堆積層で，洪水堆積物と考えられる灰褐色粗砂層に覆われていた。畦畔等は検出されなかったが，この水平堆積層にはラミナーがみられず，粘土中に細砂から小礫がブロック状に混じることから，畑または水田の耕作土層であると考えられる。この層を被覆する灰褐色粗砂層から遺物は出土しなかったため，水田あるいは畑の埋没時期は不明である。また，灰褐色粘土層の下層の茶褐色小礫混じり細砂層は氾濫堆積層である。この層から須恵器片や中・近世のものと考えられる土師質土器土鍋・皿の破片が数点が出土したが，出土遺物の中には近世陶磁器はみられないことから，この堆積層は近世以前のものと考えられる。したがって，第３面で検出された水田あるいは畑は少なくとも中世以降で，近世後半以前のものと考えられる。

(2)　Ｂ－２区（第40図，図版13）

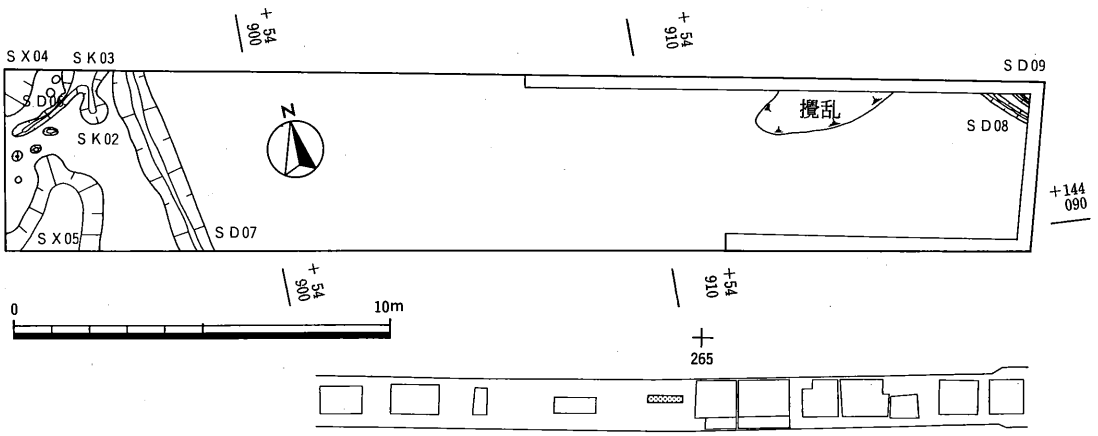
本調査区では１面の遺構面を調査した。標高8.8～9.0mを測り，西部では暗褐色細砂混じり粘土，東部では褐灰色シルト質粘土の上面で中・近世の土坑２基，溝４条，不明遺構２，小穴５個が検出された。遺構面の下位は氾濫原で，近世以前のものと考えられる。

第１面

１）土坑

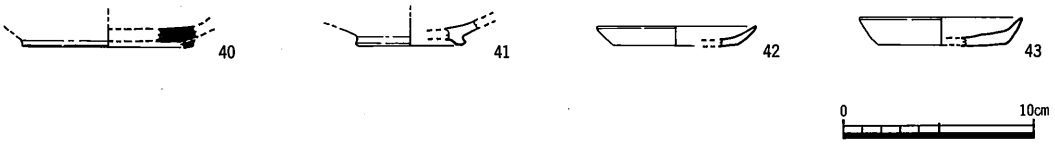
ＳＫ02　調査区の西部で検出された土坑である。北部はＳＫ03と連続する。平面形はほぼ円形で，径0.6m，深さ0.2mを測る。埋土は灰茶色細砂混じり粘土である。遺物は須恵器坏片，土師器片が数点出土した。

ＳＫ03　調査区の西部，ＳＫ02とＳＤ06の北部で検出された。北部は調査区外に連続するため，全体は不明である。径1.3m，深さ0.3mを測る。埋土は灰茶色細砂混じり粘土である。遺物は出土しなかった。



第40図　Ｂ－２区遺構配置図（1/200）

第41図　Ｂ－２区遺構面上位層（灰色細砂混じり粘土層）出土遺物（1/4）



第42図　Ｂ－２区西部遺構面下位層氾濫原（乳灰色・茶灰色シルトから小礫層）出土遺物（1/4）

２）溝

ＳＤ06　調査区の西部で検出された溝である。北部はＳＫ03と連続する。幅0.2m，深さ0.1mを測る。埋土は灰茶色細砂混じり粘土である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ07　調査区の西部で検出された溝である。南北に走る。幅0.8m，深さ0.2mを測る。埋土は須恵器甕片，土師質土器片が出土した。時期は不明である。

ＳＤ08・ＳＤ09　調査区の東部で検出された溝である。南東から北西に走る。いずれも幅0.2m，深さ0.1mを測る。埋土は乳灰黄色シルトである。遺物は出土しなかった。

３）不明遺構

ＳＸ04　調査区の北西部で検出された遺構である。北西は調査区外に続くため，全体は不明である。調査区内での最大幅は0.8m，深さ0.1mを測る。埋土は暗褐灰色粘土混じり粗砂である。遺物は出土しなかった。

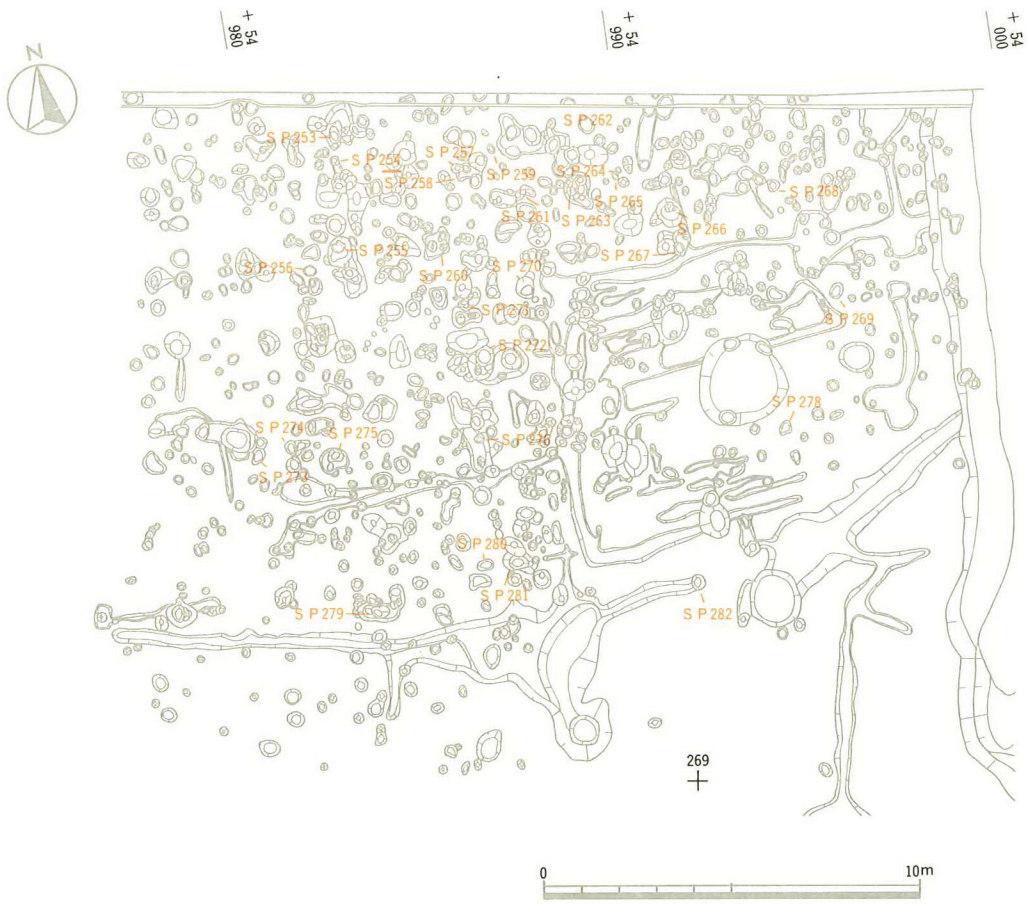
遺構面下位層（第42図）

粘土から小礫のラミナー堆積が認められた。遺構面直下より須恵器坏（40），土師質土器坏（41）・皿（42・43），土師質土器土鍋片，須恵器甕片が数点出土した。42・43は中・近世のものとであることから，少なくとも中世以降まで土砂堆積を繰り返したことがわかる。また，遺構面下位層からは近世陶磁器が出土していないことから，近世以前の堆積であると考えられる。

３．Ｃ地区

Ｂ地区の東側に位置する調査区である。大きくはＣ－１・Ｃ－２区の２調査区に分けて調査を行なったが，Ｃ－１・Ｃ－２区とも南に拡張しており，それぞれの拡張区をＣ－１南拡張区，Ｃ－２南拡張区とした。本地区では４面の遺構面を検出した。第１面はＣ地区全体に広がり，全体の平面的な調査を行なった。第２面から第４面についてはＣ－１区の東部からＣ－２区全体に広がることを確認したが，Ｃ－１南拡張区以外の調査では土層断面の観察にとどまった。

第１面は標高8.8mを測る。この遺構面ではＣ－１区の西部で16世紀前半から末の畑の畝溝が



第43図　Ｃ地区遺構配置図〔１〕(1/200)

第44図　C地区第1面遺構配置図［2］（1／200）

検出された。また，C－1区の東部からC－2区にかけては16世紀前半から末の掘立柱建物で構成される集落が検出された。第2面はC－1南拡張区で平面的な調査を行なったが，西部は細砂が厚く堆積する氾濫原で，遺構はみられず，東部では畑の畝溝が検出された。第3面は濃灰茶褐色シルト層の水平堆積がみられた。耕作土層であろう。第4面も西部は氾濫原で，東部は畑の畝溝が検出された。第4面の下層は氾濫原で粘土から粗砂・小礫のラミナー堆積が続いていた。

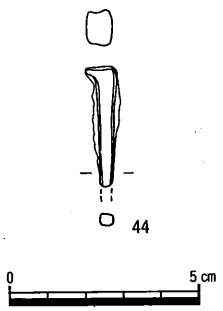
第1面（第43・44図，図版14～22）

1）畝溝（第44・45図）

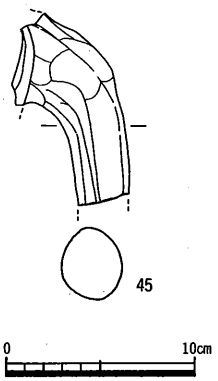
C－1区西部で5条の畝溝を検出した。畝溝群は幅0.3m，深さ0.05m，溝間1.5m，主軸の向向はN－14°－Eを測る。埋土は洪水堆積層と考えられる淡灰黄色シルトである。耕作土の上部は上層の耕作により削平されているが，下部が残存する。濃灰褐色シルトである。埋土から釘（44）が出土した。

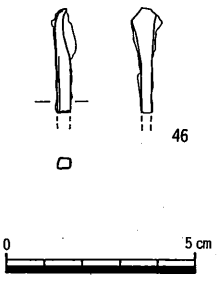
2）掘立柱建物

SB01（第46・47図）　C－1区及びC－1南拡張区で検出された南北棟の掘立柱建物である。SX01に切られているため，北西隅柱を欠く。また，SD05・12・13と整った配置関係を有することから，同時併存していた可能性が高い。SD12はSB02の北西隅にあたる柱穴を切っているため，重複する掘立柱建物SB02はSB01よりも古いと考えられる。桁行2間（8.3m），梁行2間（4.9m），主軸の方向N－9°－E，床面積は40.7m²を測る。桁行の柱穴間の距離はほぼ等間隔で，芯芯で3.8～4.3mを測る。梁行の柱間の距離は2辺とも西側が短く，東側が長い。西側は芯芯で2.1m，東側は芯芯で2.8～3.0mを測る。柱穴の掘り方の平面形は円形または楕円形を呈し，径0.3～1.0m，深さ0.1～0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。南西隅の柱穴から土師質土器羽釜の脚（45），不明鉄製品（46）が出土し，その他の柱穴からは土師質土器羽釜・皿片など数点の遺物が出土した。



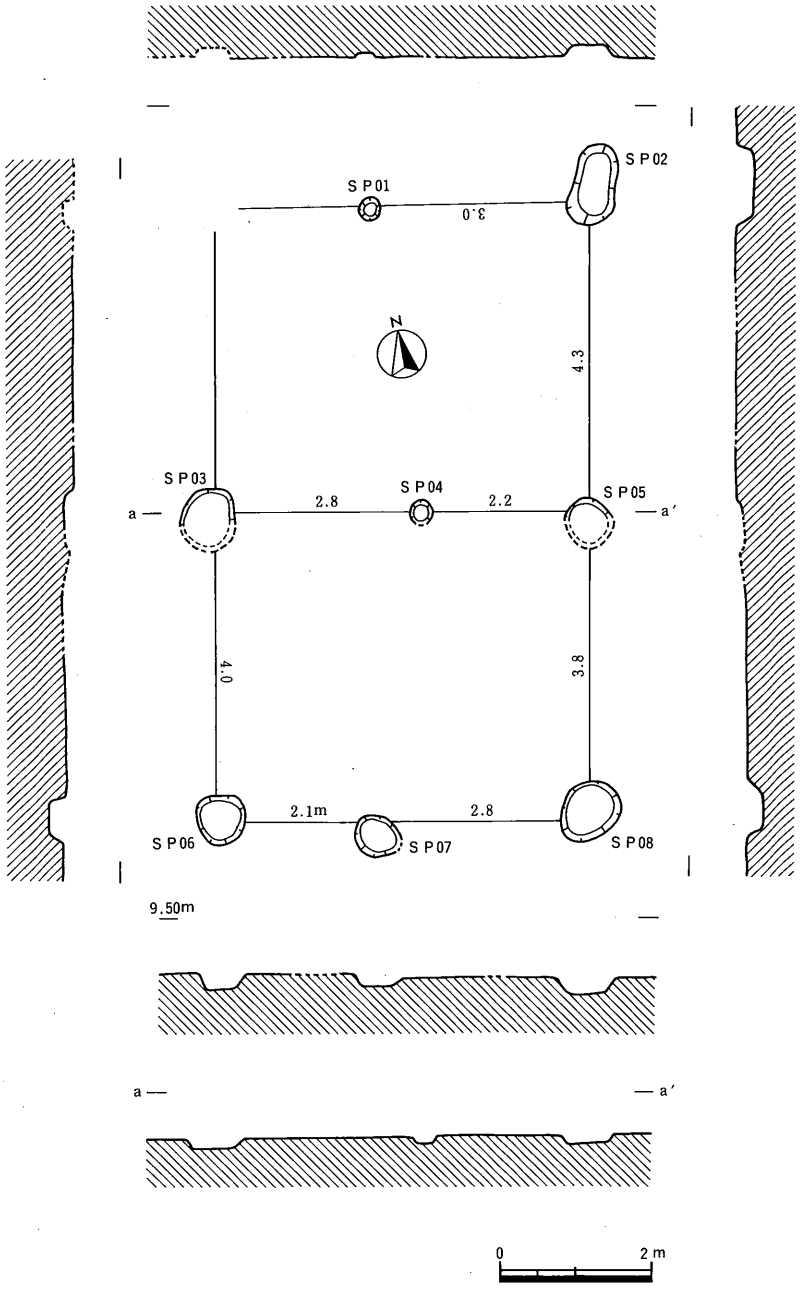
第45図　C地区第1面畝溝出土遺物（1/2）





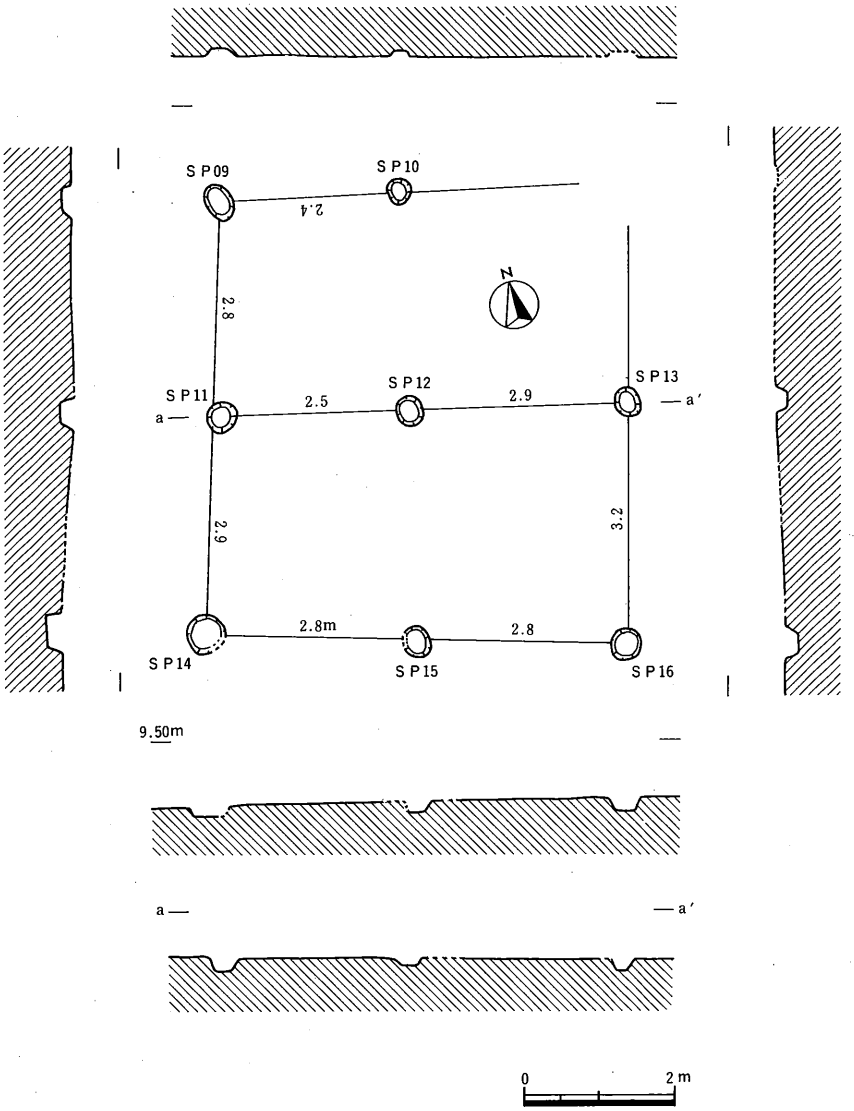
SP08

第46図　C地区第1面SB01出土遺物（1/4，1/2）



第47図　C地区第1面SB01平・断面図（1/100）

SB02（第48図）　C－1区及びC－1南拡張区で検出された南北棟の掘立柱建物である。SD12に切られるため，北東隅柱を欠く。桁行2間（5.7m），梁行2間（5.6m），主軸の方向N－18°－E，床面積は31.9m²である。柱間は桁行2.8～2.9m，梁行2.5～2.9mを測る。柱穴の掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.3～0.5m，深さ0.1～0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。柱穴から土師質土器鉢・備前焼片など数点の遺物が出土した。



第48図　C地区第1面SB02平・断面図（1/100）

SB03（第49・50図）　C－2区の中央北部で検出された東西棟の掘立柱建物である。北部は調査区外に延びるため全体は不明である。SB06と重複する。平面的な調査は行なわなかったが，第1面の下層にはC－1南拡張区第2面の畑の畝溝と同じような畝溝が走ることが第2面の航空写真から判読できた（図版16）。この畝溝の方向は南北方向（N－13°－E）である。このためこの畝溝の方向と同一の方向の建物であるSB03のほうがSB06よりも古いと考えられる。SB03は桁行5間（10.7m），梁行3間以上（6.9m以上），床面積は71m²以上を測る。主軸方位はN－13°－Eである。建物の周囲の柱穴間の距離はほぼ等間隔で，芯芯で2.1～2.4mのものが多い。柱穴の掘り方の平面形はいずれも円形で，径0.3～0.6mを測る。深さは浅いもので0.05m，深い

もので0.8mを測るが，0.4～0.5mのものが多い。ＳＰ17では柱の横部を止める詰石をもつ。建物の柱穴の埋土は暗灰褐色シルト・粘質シルトである。建物内の西部には束柱が検出されたが，東部は束柱と考えられる柱穴はみられなかった。おそらくこの建物の西部は床で，東部は土間であると考えられる。土間部分の床面積は42m²，床部分の床面積は29m²を測り，土間対床の比は３：２である。出入りするのは土間部分であるので，この建物の入り口は建物の東部であろう。また，建物の南西隅の柱穴ＳＰ25より南にＳＤ31が走る。建物の排水溝であると思われる。幅0.2m，深さ0.2mを測る。遺物は柱穴から中国産青磁碗（47），釘（48），土師質土器皿（49・50），土師質土器鉢・土鍋片が少量出土した。

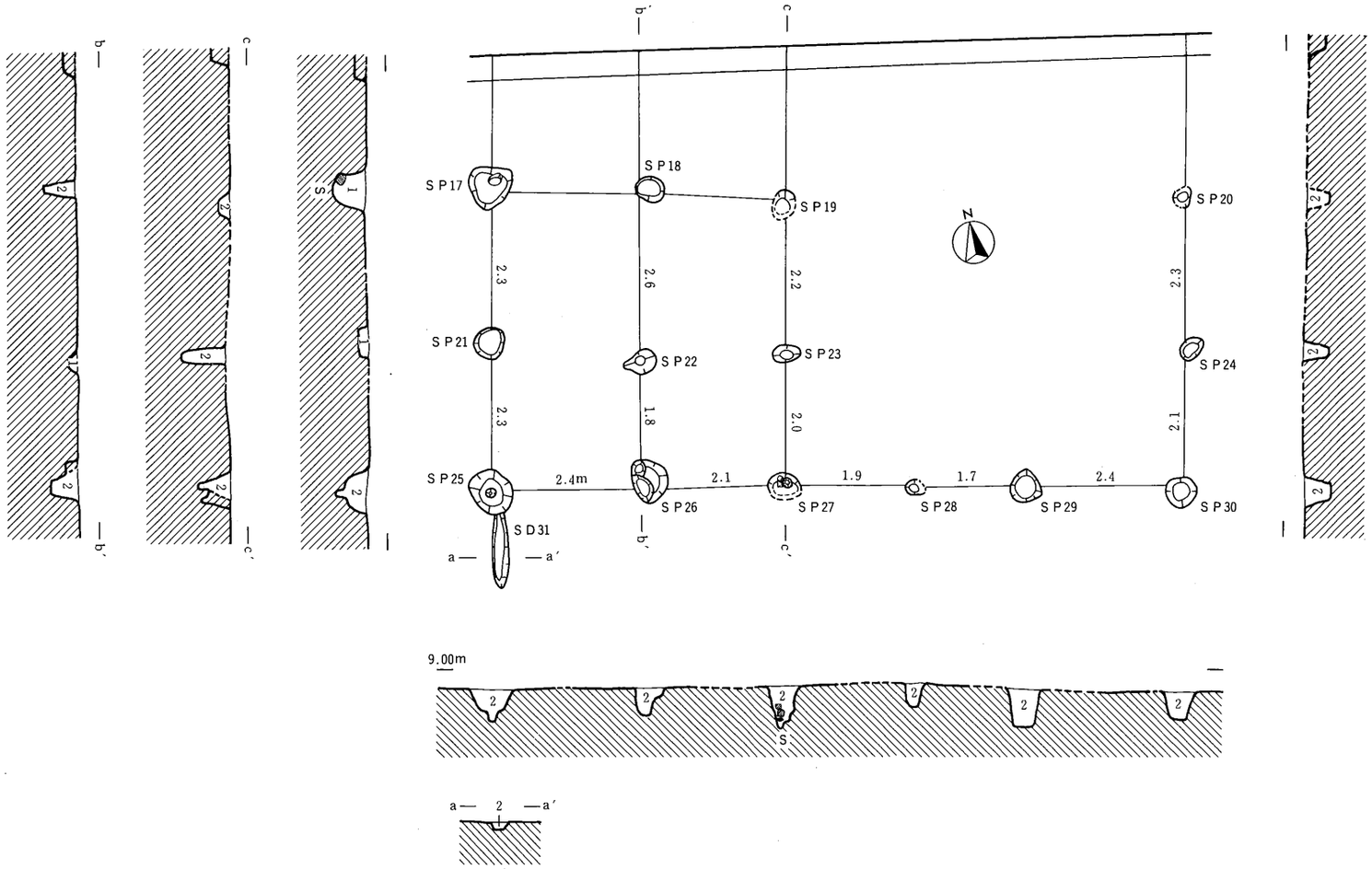
47は中国産青磁碗で，同安窯系のものである。外面に櫛描きがみられるが，底部破片で口縁部の形態は不明である。釉は高台部外面の途中までで，底部は無釉である。12世紀から13世紀のものである(註2)。ＳＰ18からは柱の破片が出土した。図示できなかったが，樹種はマツ属単維管束亜属類似種である。

ＳＢ04（第51・53図，図版30）　ＳＢ03の南側に1.2m離れて平行に建つ東西棟の掘立柱建物である。ＳＢ07と重複するが，ＳＢ03と同様，建物の方向が下層の畦溝の方向と同じであるので，ＳＢ07よりＳＢ04のほうが古いと考えられる。ＳＢ04は桁行３間（6.3m），梁行２間（3.5m）で，西側に廂をもつ。床面積は22m²を測る。主軸方位はＮ－14°－Ｅである。桁行の柱穴間の距離は芯芯で1.8～2.3mを測り，梁行の柱穴間の距離は1.5～2.0mを測る。柱穴の掘り方の平面形はいずれも円形で，径0.2～0.7mを測る。廂，梁行部分の柱穴の深さは浅く，0.1～0.2mを測る。桁行部分の柱穴の深さは0.3～0.7mを測るが，0.4m前後のものが多い。また，ＳＰ32には柱（53）が残っていた。柱穴の埋土は暗灰褐色シルトから粘質シルト，灰褐色シルトである。遺物は柱穴から土師質土器皿（51），中国産青磁盤（52），柱（53），瓦質土器片・土師質土器鉢片が少量出土した。

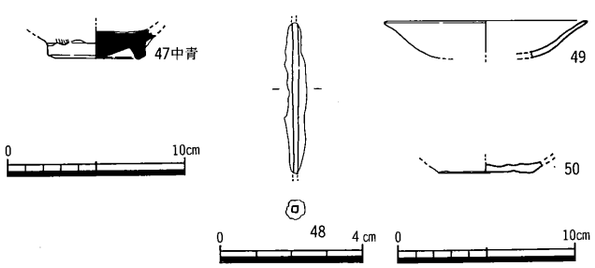
52は龍泉窯系の青磁盤で，彫り込みによる蓮弁が体部にみられる。14世紀後半から15世紀中葉のものである。53は柱の下部である。木を1/3分割したもので，芯去材である。下端には斧で切り取られた痕が明瞭に残る。柱の一辺は21.0cmである。材はマツ属複維管束亜属の一種である。

ＳＢ05（第52図）　Ｃ－２区の北東部，ＳＢ03の東側で検出された東西棟の掘立柱建物である。北部は調査区外に延びるため全体は不明である。桁行３間（4.8m），梁行１間以上（2.3m以上）の建物である。床面積は10.4m²以上を測る。主軸方位はＮ－16°－Ｅである。柱穴間の距離は芯芯で1.4～1.8mを測る。西側の梁行の柱穴間には深さ0.1mの溝をもつ。柱穴の掘り方の平面形はいずれも円形で，0.3m前後のものが多く，深さは0.2m前後のものが多い。柱穴の埋土は暗灰色粘質シルトから暗灰褐色シルトである。遺物は柱穴から土師質土器皿片が１片出土しただけである。

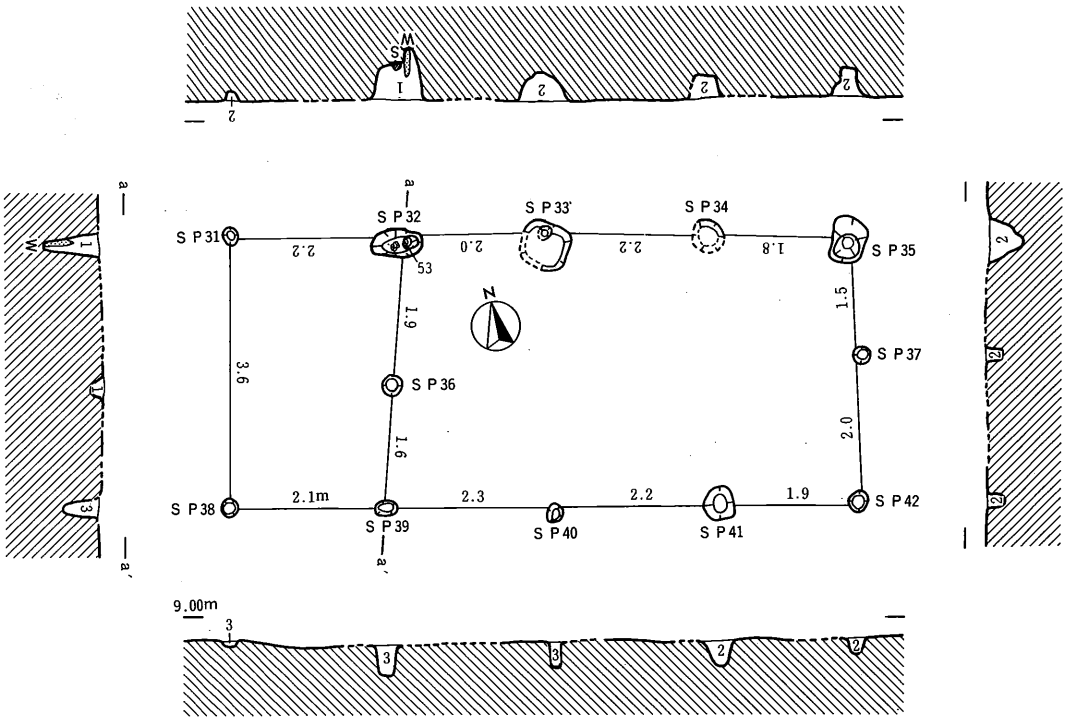
ＳＢ06（第54・55図，図版31）Ｃ－２区の中央北部で，ＳＢ03と重複して検出された東西棟の



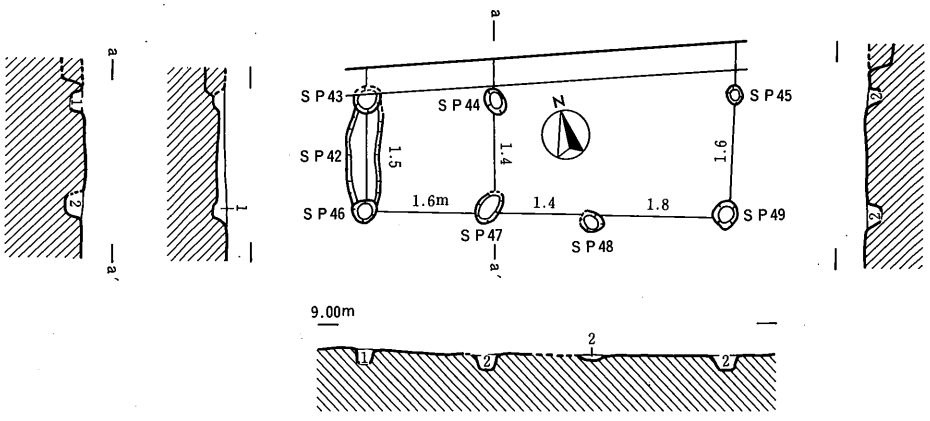
第49図　C地区第1面SB03平・断面図（1/100）



第50図　C地区第1面SB03出土遺物（1/4，1/2）

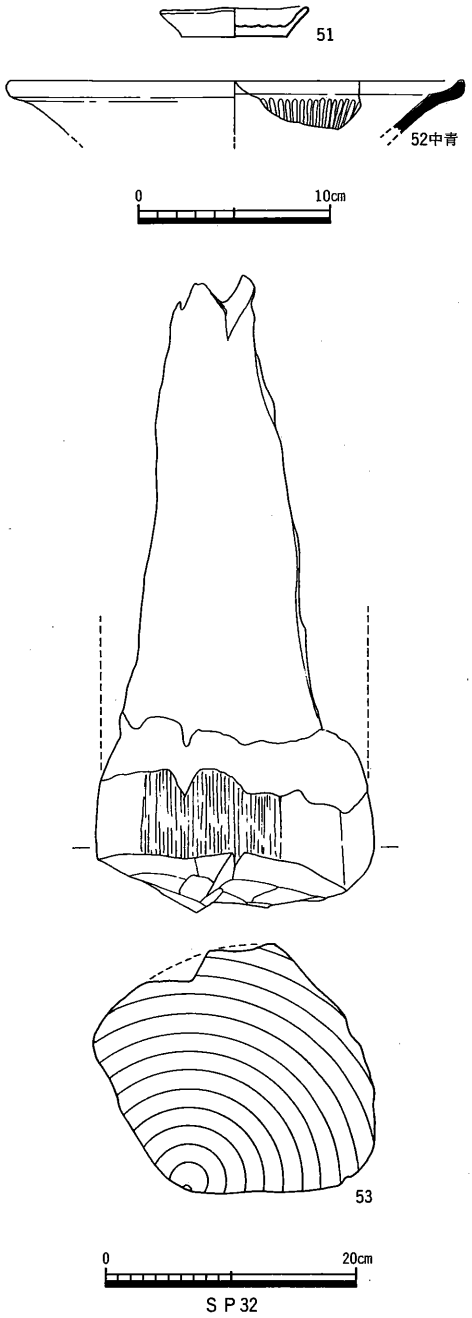


第51図　C地区第1面SB04平・断面図（1/100）



第52図　C地区第1面SB05平・断面図（1/100）

掘立柱建物である。ＳＢ06のほうが新しい。北部は調査区外に延びるため全体は不明である。桁行５間(12.9m),梁行２間(5.0m)以上の建物である。床面積は51.3㎡以上を測る。主軸方位はＮ－1°－Ｅである。建物内の西部は束柱が検出され，東部は束柱がみられないことから，建物内の西部は床をもち，東部は土間であると考えられる。また，土間の位置よりこの建物の入り口は建物の東部にあるものと考えられる。建物の全体は不明であるが，調査区内で土間部分の床面積は21.3㎡，床部分の床面積は30.0㎡を測る。おそらく土間対床の比は２：３ぐらいで，建物の中で床の面積の占める割合のほうが多かったものと考えられる。柱穴間の距離は芯芯で1.9～2.6m程度のものが多い。柱の掘り方の平面形はいずれも円形で，桁行・梁行の柱穴の径は0.4～0.6mを測り，束柱の柱穴の径は0.3m前後を測る。桁行の柱穴の深さは0.5m前後を測り，梁行・束柱の柱穴の深さは0.2～0.4m前後を測る。柱穴の埋土は暗褐色粘土混じり細砂が主体を占めるが，柱の掘り方の埋土は黄褐色粘土混じり細砂である。ＳＰ51・ＳＰ59には柱の横部や下部を止める詰石がみられる。遺物は柱穴より土師質土器皿（54），土師質土器羽釜（55），須恵器高坏片，亀山焼片が少量出土した。

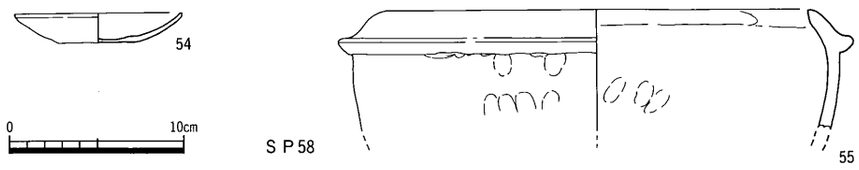


第53図　Ｃ地区第１面ＳＢ04出土遺物（1/4，1/6）

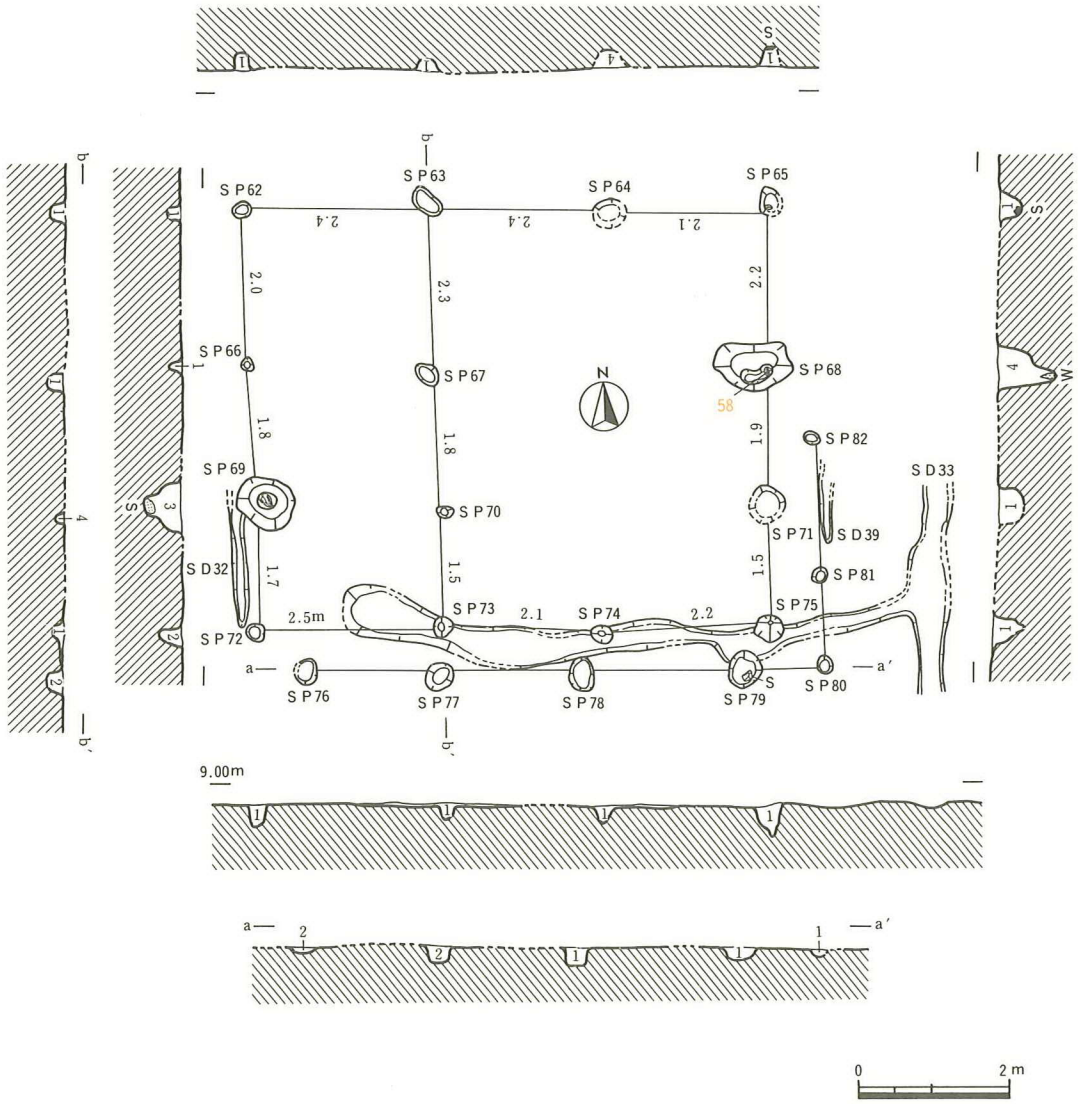
ＳＢ07（第56・57図）　ＳＢ04と重複して検出された東西棟の掘立柱建物である。ＳＢ07のほうが新しい。桁行３間（6.8m），梁行３間（5.5m）で，南側と東側には廂をもつ建物である。主軸方位はＮ－1°－Ｅである。床面積は37.7㎡を測る。建物の西側には幅0.2m，深さ0.1mのＳＤ32，南側には幅0.3～0.5m，深さ0.1mのＳＤ33，東側には幅0.2m，深さ0.1mのＳＤ39が走る。桁行の柱穴間の距離は芯芯で2.1～2.5mを測り，梁行の柱穴間の距離は芯芯で1.5～2.2mを測る。柱の掘り方の平面形は円形または楕円形で，径は0.2～0.8mを測るが，0.3m前後のものが多い。

1．暗褐色粘土混じり細砂
1a.暗褐色粘土混じり細砂
（黄褐色細砂をブロック状に含む）
1b.暗灰褐色粘土混じり細砂（炭化物を含む）
2．黄褐色粘土混じり細砂
3．暗灰褐色粘質シルト
4．暗灰褐色シルト

第54図　C地区第１面ＳＢ06平・断面図（1/100）



第55図　C地区第１面ＳＢ06出土遺物（1/4）

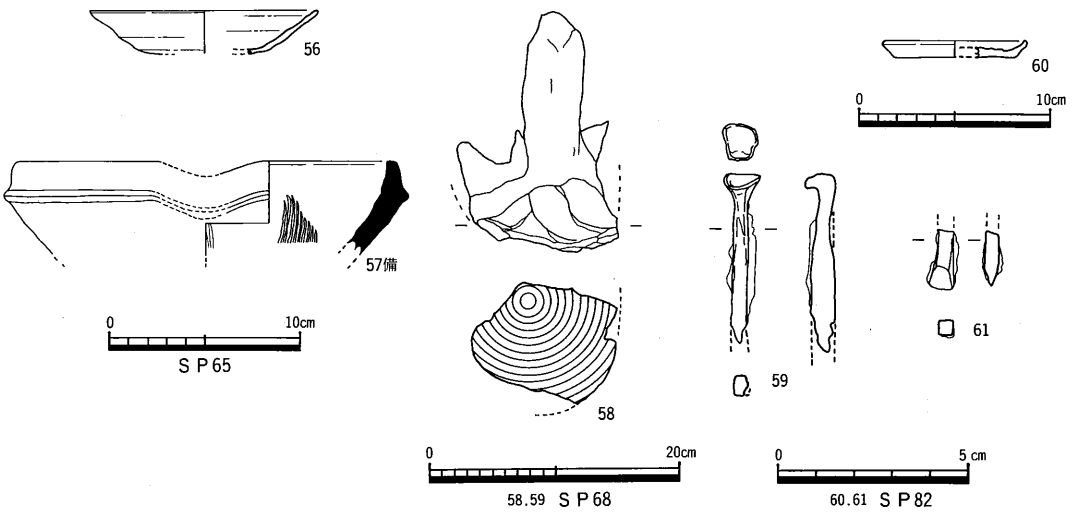


1．暗灰褐色粘質シルト
2．灰褐色粘質シルト
3．暗灰褐色シルト
4．暗灰褐色粘土混じり細砂
（淡灰褐色粘質シルトをブロック状に含む）

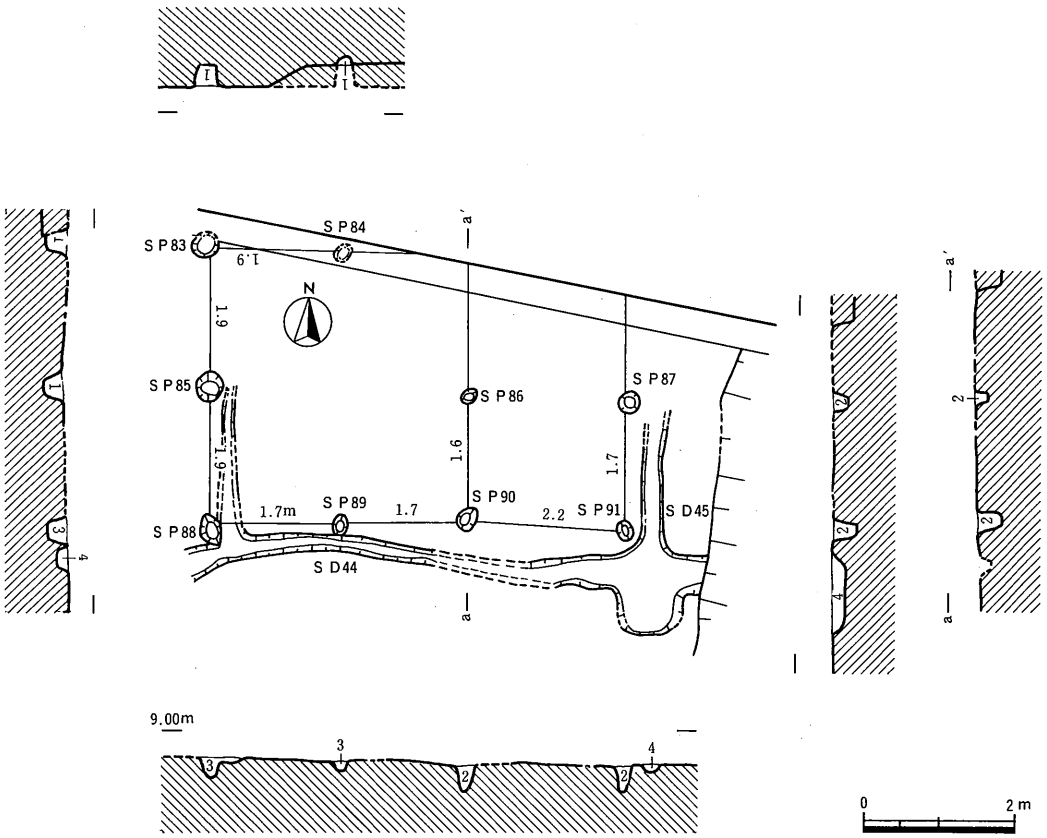
第56図　C地区第1面SB07平・断面図（1/100）

柱穴の深さは深いもので0.8mを測るが，0.3m前後のものが多い。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質シルトが主体を占める。SP65には柱の下部を止める根石をもつ。梁行の柱穴SP68，SP69では柱が残存する。SP68より出土した柱（58）は最下部だけが残存する。上部は節の部分だけが残り，下端は斧で切り取られた痕が明瞭に残る。樹種はマツ属複維管束亜属の一種である。SP69の柱は小片で，図示できなかった。このほか柱穴より土師質土器皿（56・60），備前焼擂鉢（57），柱（58），釘（59・61）が出土した。

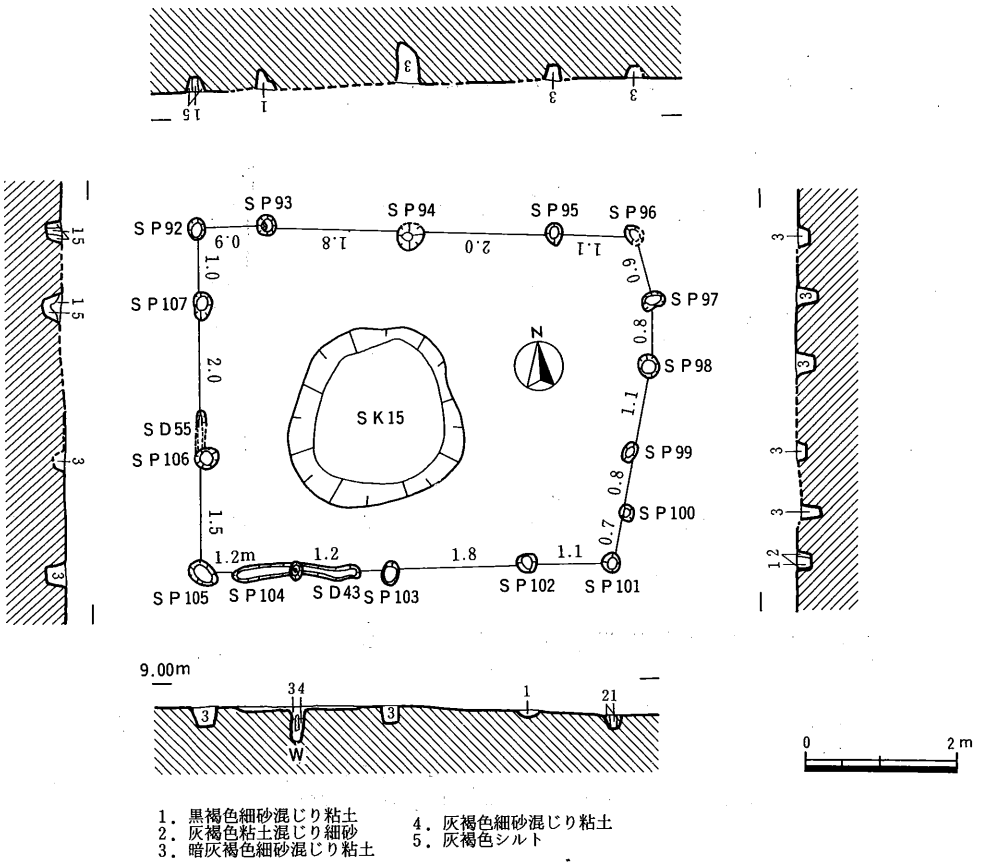
57は口縁部が上下に拡張され，拡張部には凹線がみられないことから，備前焼第IV期，14世紀



第57図　C地区第１面ＳＢ07出土遺物（1/4，1/6，1/2）



第58図　C地区第１面ＳＢ08平・断面図（1/100）

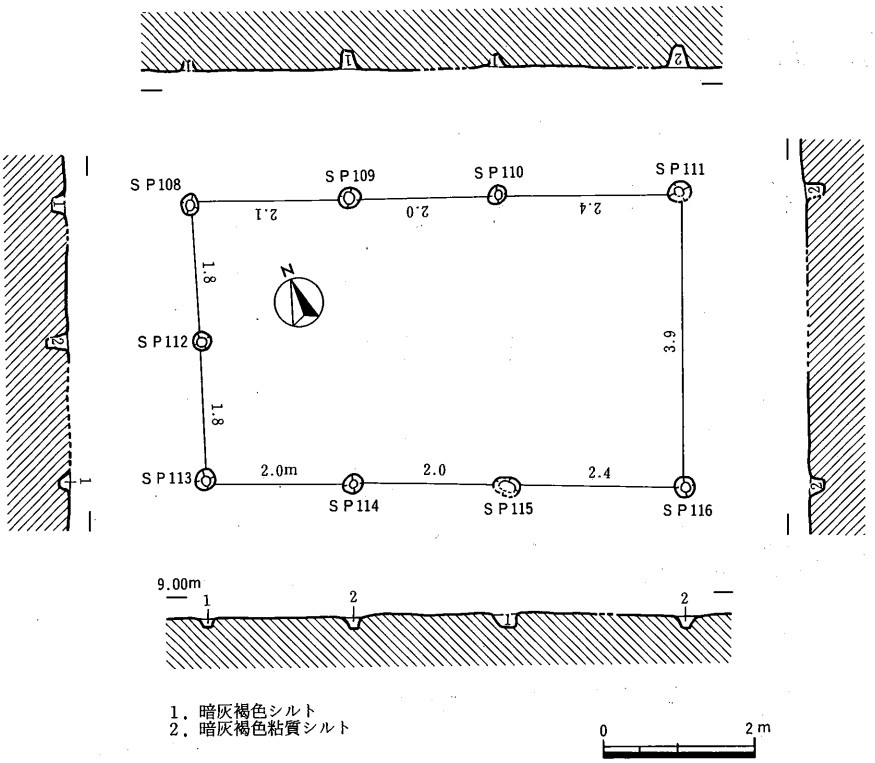


第59図　C地区第1面SB09平・断面図（1/100）

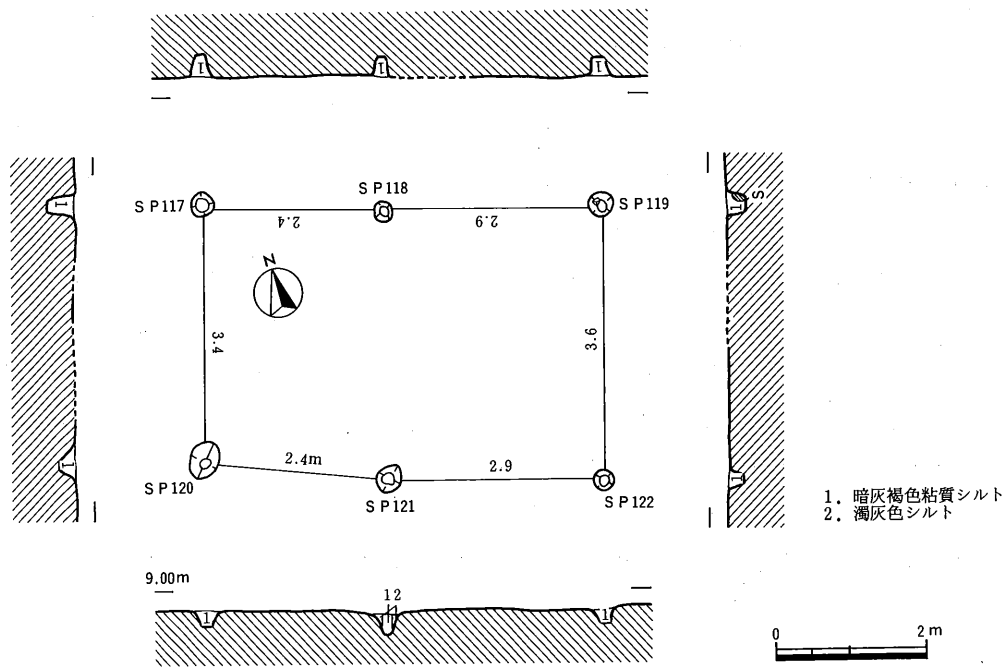
後半から16世紀初頭のものである（註3）。

SB08（第58図）　SB06の東側で，SB05と重複して検出された東西棟の掘立柱建物である。SB08のほうが新しい。北部は調査区外に延びるため全体は不明である。桁行3間（5.5m），梁行2間（3.7m）ないし2間以上の建物である。主軸方位はN－1°－Wである。床面積は18.7m²以上を測る。建物内の西部から建物の南側には幅0.3m，深さ0.1mのSD44，東側に幅0.2m，深さ0.1mのSD45が巡る。柱穴間の距離は芯芯で1.6～2.1mを測る。柱の掘り方の平面形はいずれも円形で，径は0.2m前後のものが多い。柱穴の深さは深いもので0.5m，浅いもので0.1mを測るが，0.3m前後のものが多い。柱穴の埋土は暗灰褐色シルト・粘土である。遺物は柱穴より土師質土器皿片が数点出土した。

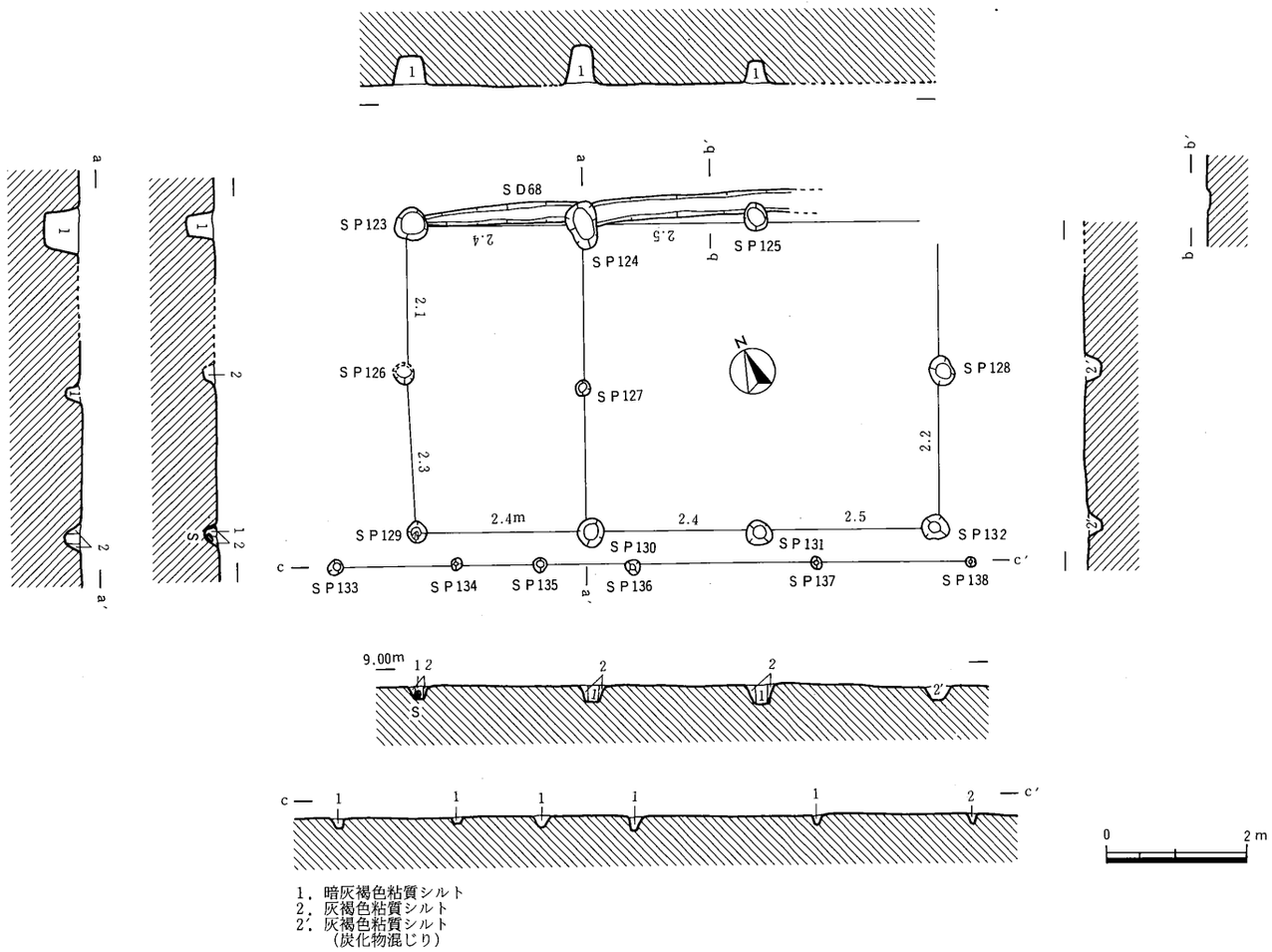
SB09（第59図）　SB08の南側で検出された東西棟の掘立柱建物である。建物内の中央やや西寄りには土坑SK15がみられるが，併存するものかどうかは不明である。SB09は桁行4間（5.4m），梁行3間（4.5m）で，主軸方位はN－1°－Eである。床面積は26.0m²を測る。南側



第60図　C地区第1面SB10平・断面図（1/100）



第61図　C地区第1面SB11平・断面図（1/100）



第62図　C地区第１面ＳＢ12平・断面図（1/100）

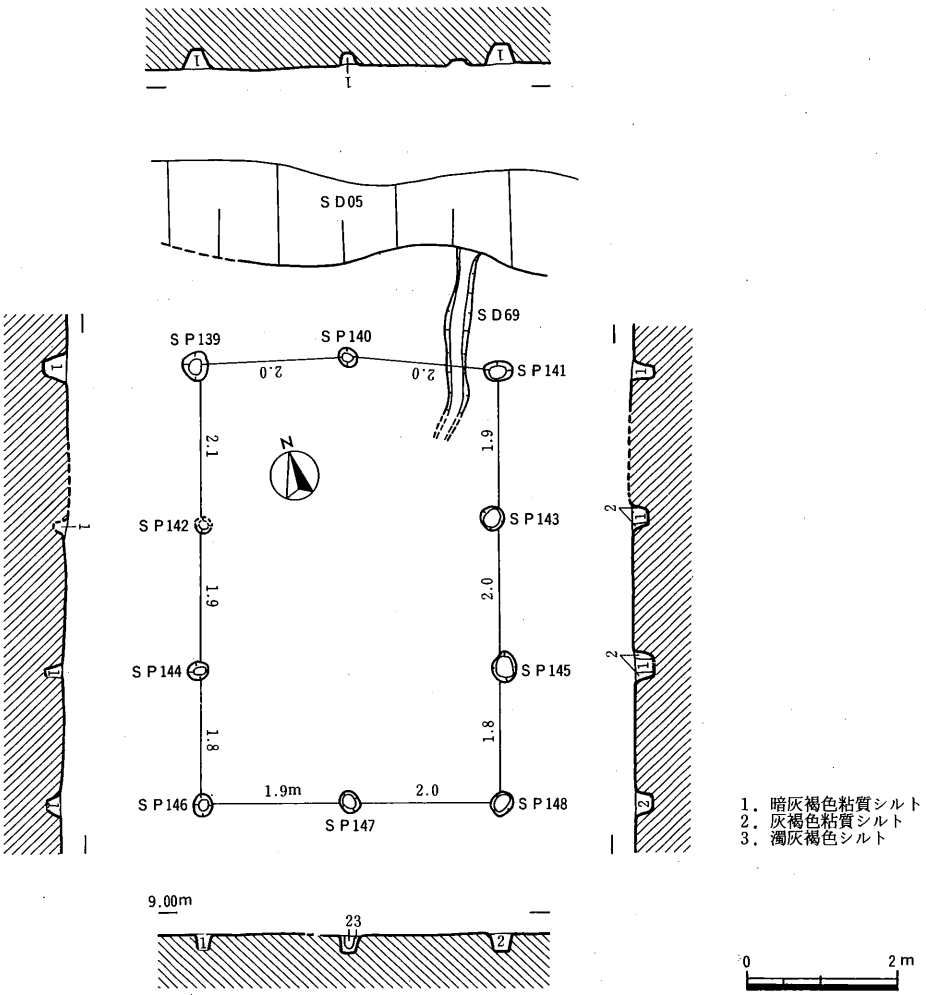
と西側の柱穴間の一部に深さ0.05mの溝をもつ。柱の掘り方の平面形はいずれも円形で，深いもので0.6m，浅いもので0.1mを測るが，0.3m前後のものが多い。柱穴の埋土は暗灰褐色細砂混じり粘土が主体を占める。ＳＰ104には柱片が残存していた。遺物は柱穴から土師質土器皿片が1片出土した。

ＳＢ10（第60図）　Ｃ－2南拡張区の西部で検出された東西棟の掘立柱建物である。ＳＢ11・ＳＢ12と重複するが，新旧関係は不明である。桁行3間（6.4m），梁行2間（3.6m）の建物である。主軸方位はＮ－19°－Ｅを測る。床面積は24.3m²を測る。柱穴間の距離は芯芯で1.8～2.4mを測る。柱の掘り方の平面形はいずれも円形で，径0.2～0.3mを測る。柱穴の深さは0.2m前後のものが多い。柱穴の埋土は暗灰褐色シルト・粘質シルトである。遺物は柱穴から土師質土器土鍋・皿片が数点出土した。

ＳＢ11（第61図）　Ｃ－2南拡張区の西部で検出された東西棟の掘立柱建物である。ＳＢ10・ＳＢ12・ＳＢ13と重複するが，新旧関係は不明である。桁行2間（5.3m），梁行1間（3.6m）を測る建物である。主軸方位はＮ－16°－Ｅである。床面積は19.1m²を測る。桁行の柱穴間の距離は芯芯で2.4m，2.9mを測り，梁行の柱穴間の距離は芯芯で3.4～3.6mを測る。柱の掘り方の平面形はいずれも円形で，径0.2～0.4mを測る。柱穴の深さは0.2～0.3mを測る。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質シルト・濁灰色シルトである。また，ＳＰ119では柱の横部を止める詰石がみられた。遺物は出土しなかった。

ＳＢ12（第62図）　Ｃ－2南部から南拡張区にかけて検出された東西棟の掘立柱建物である。この遺構の北東部から西部中央にかけては調査区の壁にあたるため，建物の北東隅の柱穴は未検出である。建物の一部がＳＢ10・ＳＢ11と重複するが，新旧関係は不明である。桁行3間（7.3m），梁行2間（4.4m）で，南側に廂をもつ建物である。建物の北側には幅0.2m，深さ0.1mを測るＳＤ68が走る。建物の主軸方位はＮ－18°－Ｅである。床面積は32.4m²を測る。桁行の柱穴間の距離は芯芯で2.4～2.5mを測り，梁行の柱穴間の距離は芯芯で2.1～2.3mを測る。柱の掘り方の平面形はいずれも円形で，径0.3～0.5mを測る。柱穴の深さは0.2～0.6mを測るが，0.3m前後のものが多い。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質シルトが主体を占める。また，ＳＰ129では柱の横部を止める詰石をもつ。遺物は柱穴から土師質土器皿片が数点出土しただけである。

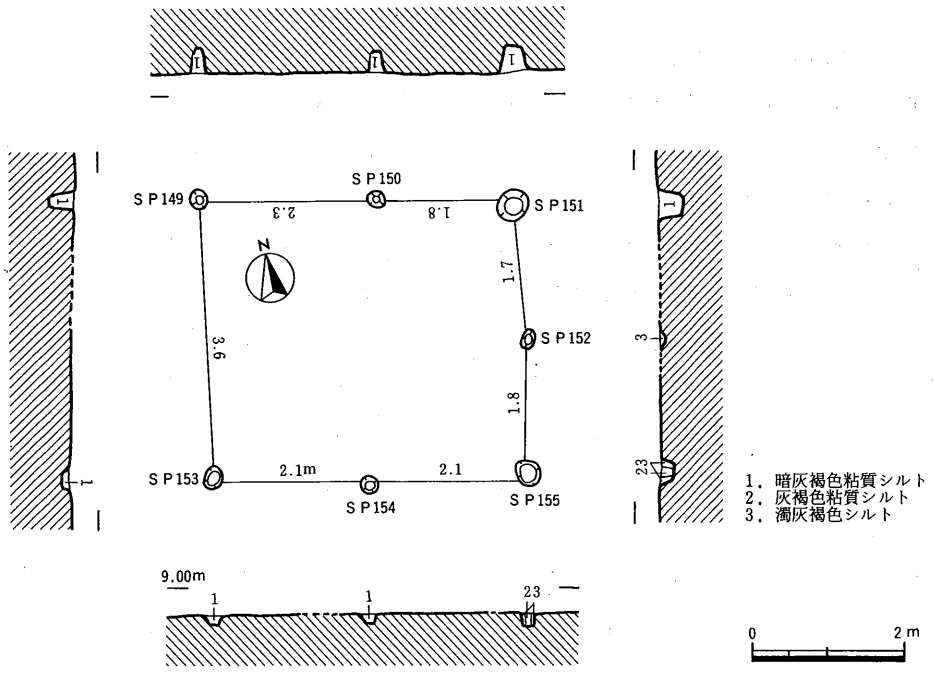
ＳＢ13（第63図）　Ｃ－2区の南拡張区の西部で検出された南北棟の掘立柱建物である。ＳＢ11と重複するが，新旧関係は不明である。桁行3間（5.8m），梁行2間（3.9m）の建物である。主軸方位はＷ－15°－Ｎ，床面積は22.3m²を測る。建物の北側をＳＤ05が東西に走るが，このＳＤ05に向かって，建物内より幅0.2～0.3m，深さ0.1mのＳＤ69が北に走る。また，建物の柱穴間の距離は1.8～2.1mを測る。柱の掘り方の平面形はいずれも円形で，径0.3～0.4mを測る。柱穴の深さは深いもので0.2～0.3mを測る。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質シルトが主体を占める。遺物は柱穴より土師質土器皿片が数点出土した。



第63図　C地区第1面SB13平・断面図（1/100）

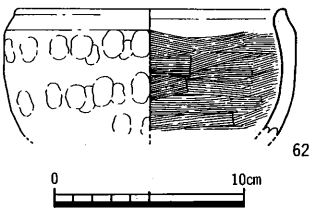
SB14（第64図）　C－2南拡張区の中央やや東寄りで検出された東西棟の掘立柱建物である。SB15と重複するが，新旧関係は不明である。桁行2間（4.2m），梁行2間（3.6m）の建物である。主軸方位はN－10°－Eである。床面積は15.6m²を測る。柱の掘り方の平面形はいずれも円形で，径0.2～0.4mを測る。桁行の柱穴の深さは0.2～0.4m，梁行の柱穴SP152の深さは0.1mを測る。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質シルトが主体を占める。遺物は柱穴から土師質土器片が1片出土しただけである。

SB15（第65・66図）　C－2区の南拡張区の中央やや東寄りで検出された東西棟の掘立柱建物である。SB14と重複するが，新旧関係は不明である。桁行5間（10.8m），梁行2間（3.9m）で，北側と東側に廂をもつ建物である。建物の北部にはSD70が北に向かって走る。この建物の主軸方位はN－11°－Eで，床面積は43.7m²を測る。桁行の柱穴間の距離は芯芯で2.0～2.3mを測り，梁行の柱穴間の距離は芯芯で1.5～2.3mを測る。柱の掘り方の平面形はいずれも円形で，柱穴の深さは深いもので0.35m，浅いもので0.15mを測るが，0.2～0.3mのものが多い。



第64図　Ｃ地区第１面ＳＢ14平・断面図（1/100）

ＳＰ165・173・174には柱の横部を止める詰石がみられる。また，ＳＰ176には柱の一部が残っていた。材は広葉樹(散孔材)である。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質シルトが主体を占める。遺物はＳＰ161より土師質土器羽釜片（62），備前焼片が出土した。また，建物内の北東部には土坑ＳＫ26がみられるが，併存するものかどうかは不明である。



ＳＰ161

第65図　Ｃ地区第１面ＳＢ15出土遺物（1/4）

２）柵

ＳＡ01（第44図）　Ｃ－１区北部，ＳＤ04の東肩で検出された柵である。４間(11.3m)を検出したが，さらに北に延長して調査区外に延びるものと思われる。主軸の方向Ｎ－11°－Ｅ，柱間は2.4～3.2mを測る。柱穴の掘り方の平面形は円形または楕円形を呈し，径0.2m，深さ0.1mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。柱穴からは土師質土器皿片が数点出土した。

ＳＡ02（第44図）　Ｃ－１区北部，ＳＡ01の東隣りで検出された柵である。２間（4.2m）を検出した。主軸の方向Ｎ－10°－Ｅ，柱間は2.1～2.2mを測る。柱穴の掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。柱穴からは土師質土器皿片が出土した。

ＳＡ03（第44図）　Ｃ－１区北東部で検出された柵で，ＳＡ01と共に屋敷地の東西側縁を区画

する。4間（12.0m）を検出したが，さらに北に延長して調査区外に延びるものと思われる。主軸の方向N－14°－E，柱間は1.9～3.8mを測る。柱穴の掘り方の平面形は円形または楕円形を呈し，径0.2～0.3m，深さ0.1～0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。柱穴からは土師質土器・須恵器片が数点出土した。

ＳＡ04（第44図）　Ｃ－２区で検出されたＬ字形の柵である。ＳＡ05と重複する。柵の方向よりＳＡ04のほうがＳＡ05よりも古いと考えられる。柵は南北から東西方向に直角に曲がる。北部は調査区外に続くため全体は不明である。主軸方位はＮ－３°－Ｅ，Ｅ－３°－Ｓを測る。長さは東西9.0m，南北14.1m以上を測る。柱穴間の距離は芯芯で1.1～2.9mを測る。柱の掘り方の平面形はいずれも円形である。径0.1～0.4mを測るが，0.3m前後のものが多い。柱穴の深さは0.1～0.5mを測るが，0.3m前後のものが多い。柱穴の埋土は暗灰褐色シルト混じり粘土が主体を占める。遺物は柱穴から土師質土器片が数点出土しただけである。

ＳＡ05（第44図）　Ｃ－２区で検出されたＬ字形の柵である。ＳＡ04と重複するが，ＳＡ05のほうが新しい。南北から東西方向に直角に曲がる。北部は調査区外に続くため全体は不明である。主軸方位はＮ－14°－Ｅ，Ｅ－14°－Ｓを測る。長さは東西8.5m，南北8.5m以上を測る。柱穴間の距離は芯芯で1.1～2.9mを測る。柱の掘り方の平面形はいずれも円形で，径0.2～0.5mを測る。柱穴の深さは0.2～0.5mを測るが，0.3m前後のものが多い。柱穴の埋土は暗灰色褐色シルトが主体を占める。遺物は柱穴から土師質土器片が数点出土した。

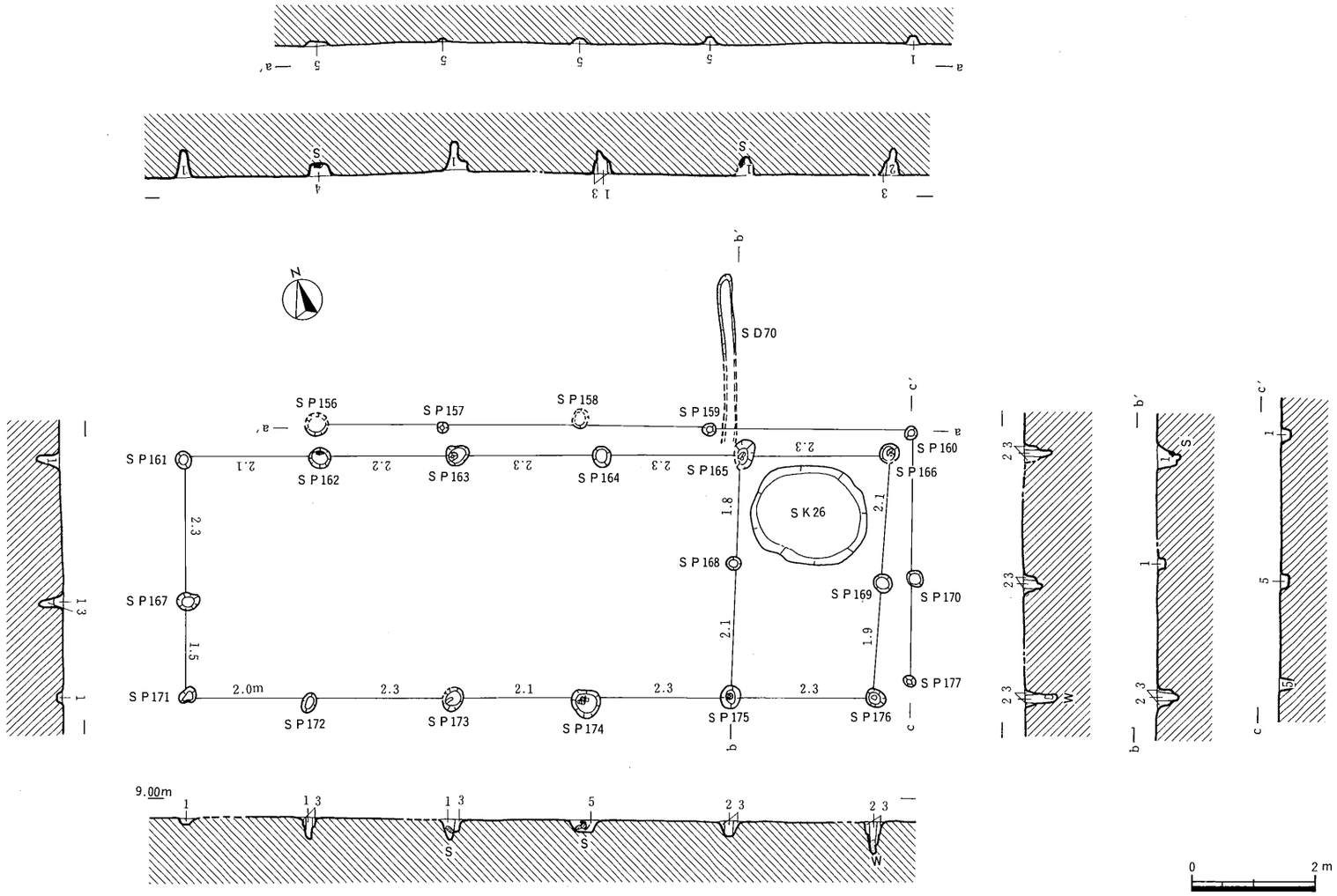
ＳＡ06（第44図）　Ｃ－２区の東部で検出された柵である。ＳＢ05・ＳＢ08・ＳＢ09とＳＤ20の間に位置し，ＳＤ20の西岸を南北に走る。北部は調査区外に続くため全体は不明である。長さは6.7m以上を測る。柱穴間の距離は芯芯でほぼ2.0mを測る。柱の掘り方の平面形はいずれも円形である。径は0.3m前後，深さは0.2～0.3mを測る。柱穴の埋土は暗灰色シルト混じり粘土が主体を占める。遺物は柱穴から土師質土器片，瓦質土器片が数点出土した。

ＳＡ07（第44図）　Ｃ－２区の東部，ＳＡ06の東部で検出された柵である。ＳＤ20の西岸を南北に走る。北部は調査区外に続くため全体は不明である。長さは7.2m以上を測る。柱穴間の距離は芯芯で1.8m，2.6mを測る。柱の掘り方はいずれも円形で径0.3m前後，深さ0.2m前後を測る。柱穴の埋土は暗灰色シルト混じり粘土が主体を占める。遺物は出土しなかった。

ＳＡ08（第44図）　Ｃ－２区の東部，ＳＡ07の東部で検出された柵である。ＳＤ20の西岸を南北に走る。北部は調査区外に続くため全体は不明である。長さは7.2m以上を測る。柱穴間の距離は芯芯で2.1mを測る。柱の掘り方の平面形はいずれも円形で径0.2m前後，深さは0.3m前後を測る。柱穴の埋土は暗灰褐色シルト混じり粘土が主体を占める。遺物は出土しなかった。

3）橋

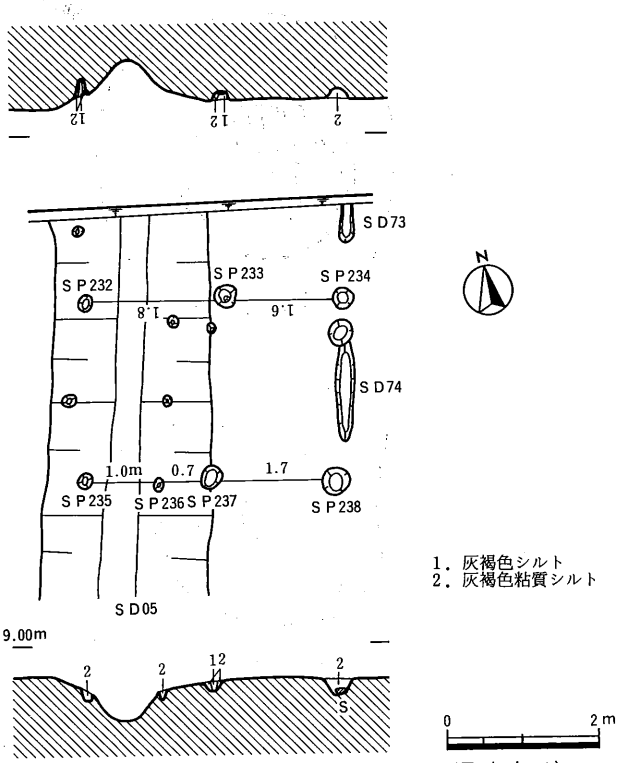
ＳＹ01（第67図）　Ｃ－２南拡張区で検出された。柱穴がＳＤ05に直角に規則正しく並ぶことから，橋であると考えられる。東西方向に架かる。幅2.4m，長さ3.5mを測る。東西方向に3個



1．暗灰褐色粘質シルト
2．灰褐色シルト
3．濁灰褐色シルト
4．褐灰色シルトブロック混じり（灰色粘質シルト）
5．灰褐色粘質シルト

第66図　C地区第１面ＳＢ15平・断面図（1/100）

の柱穴が2列に並び，橋を支える。また，SD05の東岸の中程にも柱を支えたと考えられる柱穴が南北に3個並ぶ。柱穴の堀り方の平面形はいずれも円形で，南北の両端の柱穴は径0.2～0.3m，深さ0.1～0.2m，東岸の中ほどの南北に並ぶ柱穴は径0.1m，深さ0.1を測る。遺物は柱穴より土師質土器片が数点出土しただけである。



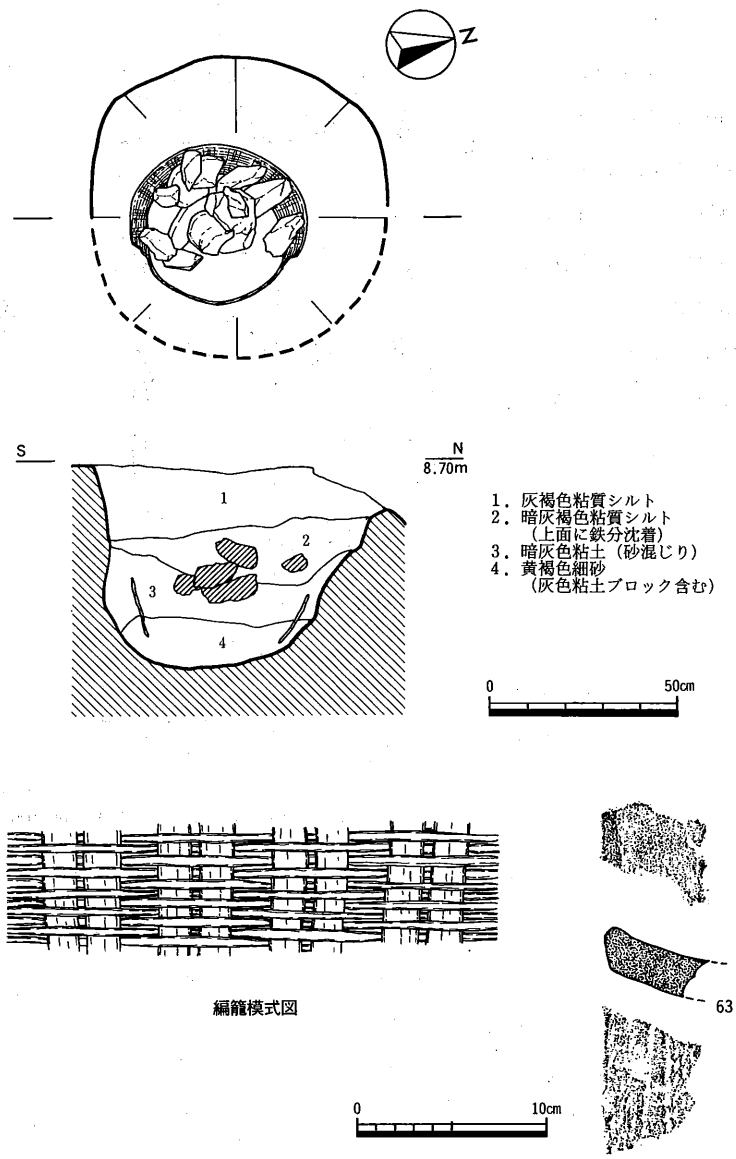
第67図　C地区第1面SY01平・断面図（1/100）

3）井戸・水溜め

SE01（第68図，図版23）　C－1区中央部のSD04と05の合流部西側で検出された井戸で，東半をSD04に削られる。現存部から復元すると，掘り方の平面形は径0.9mの円形を呈し，深さは0.5mを測る。埋土は上層から灰褐色粘質シルト，暗灰色粘質シルト・粘土，黄褐色細砂である。検出面より0.3m掘り下げた下層中より，井戸枠である竹製の編み籠が出土した。編み籠は底が刳り貫かれたもので，径0.5m，高さ0.2mを測る。東部はSD04に攪乱され大きく欠損していたが，僅かに下半の輪郭が遺存していた。また，編み籠内部及び埋土中には，拳大程度の礫が投げ込まれていた。遺物は平瓦（63），土師質土器土鍋・羽釜片，須恵質土器片が数点出土した。

SE02（第69・70図，図版24）　C－1南拡張区の西端で検出された。深さは0.4mと浅いが，底面は細砂層で，湧水がみられたことから，井戸であると考えた。素掘りの井戸で，SE03を切っている。掘り方の平面形はややいびつな隅丸長方形を呈し，長辺1.8m，短辺1.7mを測る。埋土は上層（1～4層）と下層（5・6層）に大別される。上層は灰褐色系粘質シルトが，下層はグライ化した灰色系粘土が堆積する。出土遺物は乏しいが，埋土中位から土師質土器釜（66）がまとまって出土した。そのほか埋土の上層からは土師質土器焙烙（64），埋土下層からは土師質土器焙烙（65）・備前焼甕（67）・唐津灰釉皿（68）・軒丸瓦（69）・杭（70）が出土した。このほか土師質土器土鍋・瓦質土器埦・須恵質土器・丸瓦片がコンテナ1箱程度出土した。

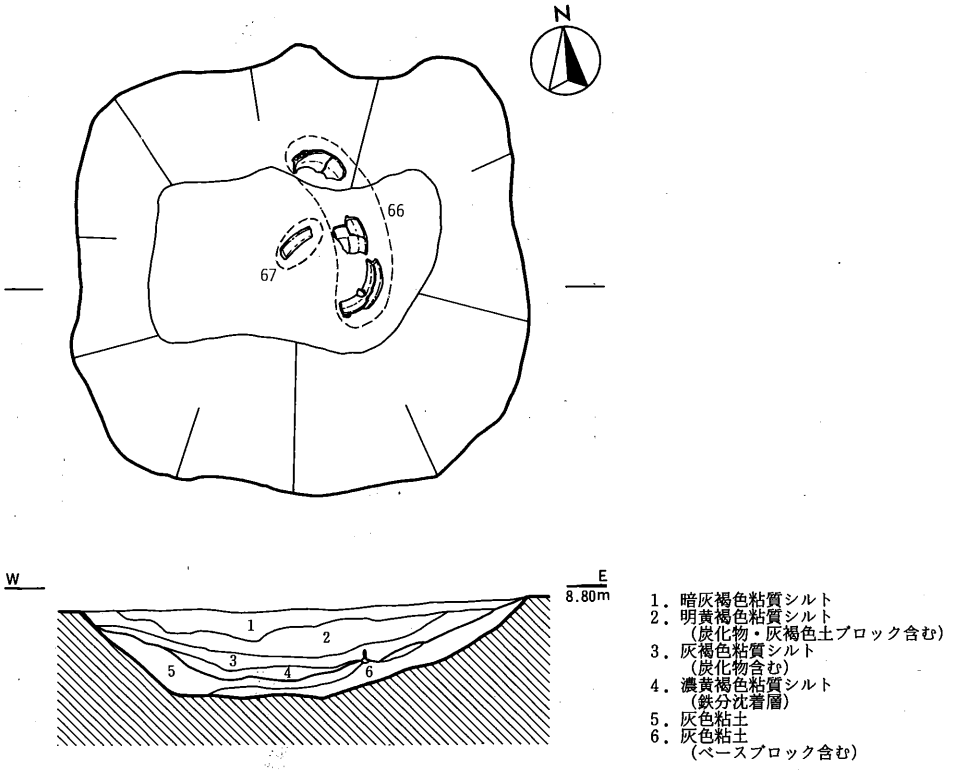
65は土師質土器焙烙で，18世紀後半のものと考えられる。67は備前焼甕である。複合部に2～3本の凹線をもつことより，備前焼第Ⅴ期，16世紀前半から17世紀前半のものと考えられる(註3)。68は唐津灰釉皿である。内面に砂目が付着することから，1600～1630年代のものと考え



第68図　C地区第1面SE01平・断面図（1/20），出土遺物（1/4）

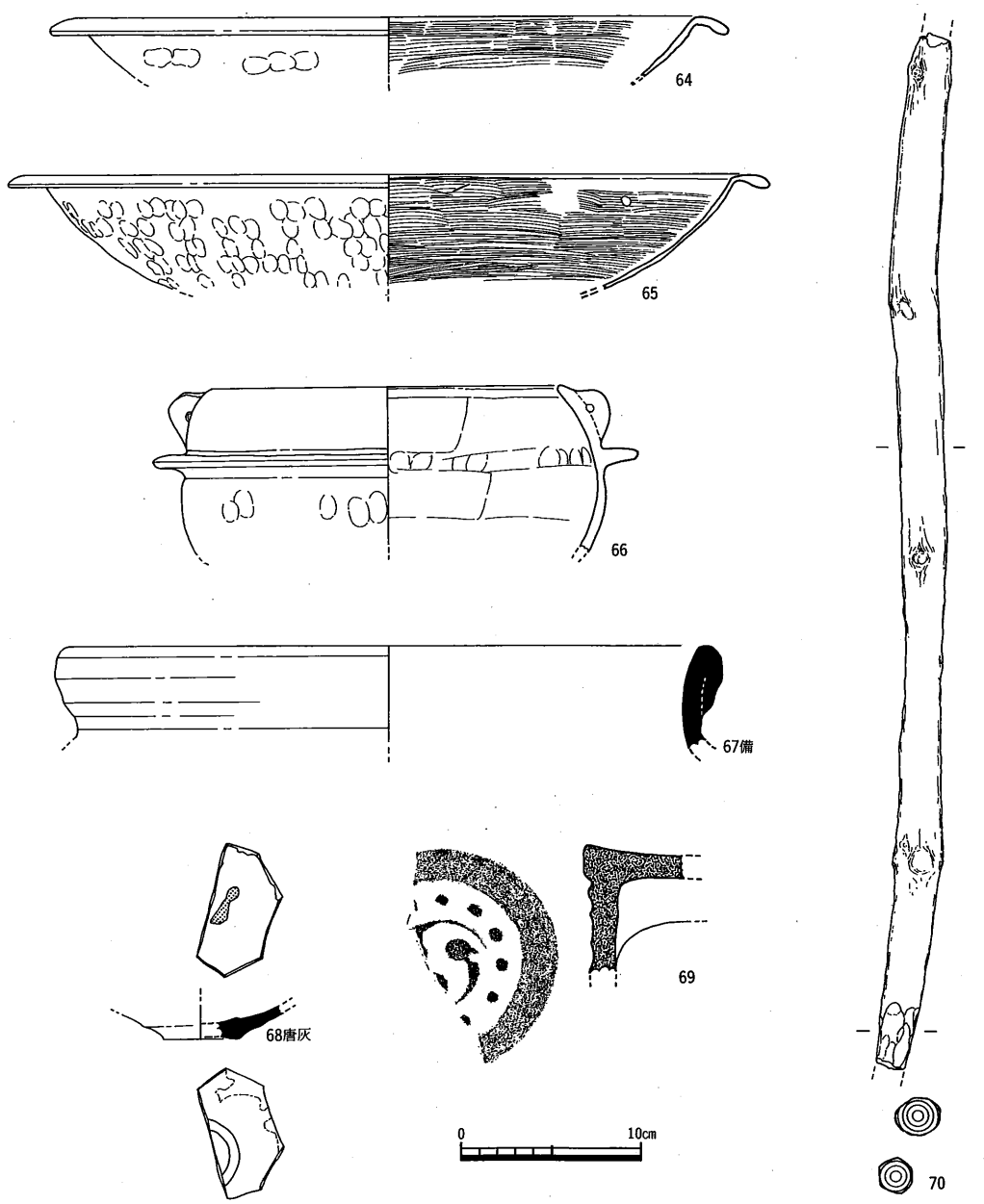
られる（註4）。

SE03（第71～73図）　C－1南拡張区西端で検出された。南端部分はSE02によって大きく攪乱されている。掘り方の平面形は比較的大きな隅丸長方形を呈し，長辺6.2m，短辺2.5m，深さ0.5mを測る。底面はわずかに凹凸が認められるもののほぼ平坦で，断面形は概ね箱状を呈する。また一部壁面が抉れて袋状になっている部分もあった。埋土は大きく2層に大別される。上層は灰褐色系粘質シルトが，下層はグライ化した灰色粘土が堆積する。規模や形状などから井戸ではない可能性も考えられるが，北部はSD07と連続することから，水溜めの機能をもつことは間違いないと考えられる。埋土からはコンテナ5箱の遺物が出土した。大きくは埋土上位と下位に分けて取り上げた。埋土上位から土師質土器皿（71・72）・羽釜（74）・焙烙（79・80），唐津



第69図　C地区第1面SE02平・断面図（1/30）

灰釉皿（84），京焼風陶器碗（88），備前焼壺（90），埋土下位から土師質土器焙烙（77・81），唐津灰釉皿（83）・灰釉碗または皿（85）・鉄釉鉢（86）・刷毛目皿（87），備前焼擂鉢（89・92）・壺（91），杭（93），動物遺存体（1407）が出土した。また，埋土上位と下位出土の破片が接合したものとして土師質土器釜（75・76）・焙烙（77～82）がみられる。77～82は土師質土器焙烙で，18世紀後半のものである。いずれも外面に煤が多量に付着する。83～85は唐津灰釉皿または碗である。83・84は胎土目がとれた痕跡がみられ，85は砂目が付着することなどから，83は1580～1610年代，84は1590～1610年代，85は1600～1630年代のものと考えられる（註4）。86は唐津鉄釉鉢で，17世紀代のものである。87は唐津刷毛目皿である。内面に蛇の目釉剝ぎがみられることから，17世紀後半から18世紀代のものであると考えられる。88は京焼風陶器碗で，高台内部にも釉がかかる。胎土は精製された緻密なものである。底部から17世紀後半から18世紀のものであると考えられる（註5）。89～92は備前焼である。89は口縁部が断面三角形を呈することから，備前焼第III期，13世紀末から14世紀中葉のものであると考えられる（註3）。92は底部破片であるが，底部内面にも密に卸目が施されることから，備前焼第VI期，17世紀中葉から18世紀代のものであると考えられる。93は杭である。断面形は丸みを帯びるが，芯去材である。両端が削り込まれて加工されている。1407は動物の種類は不明であるが，斧様の傷がみられる。

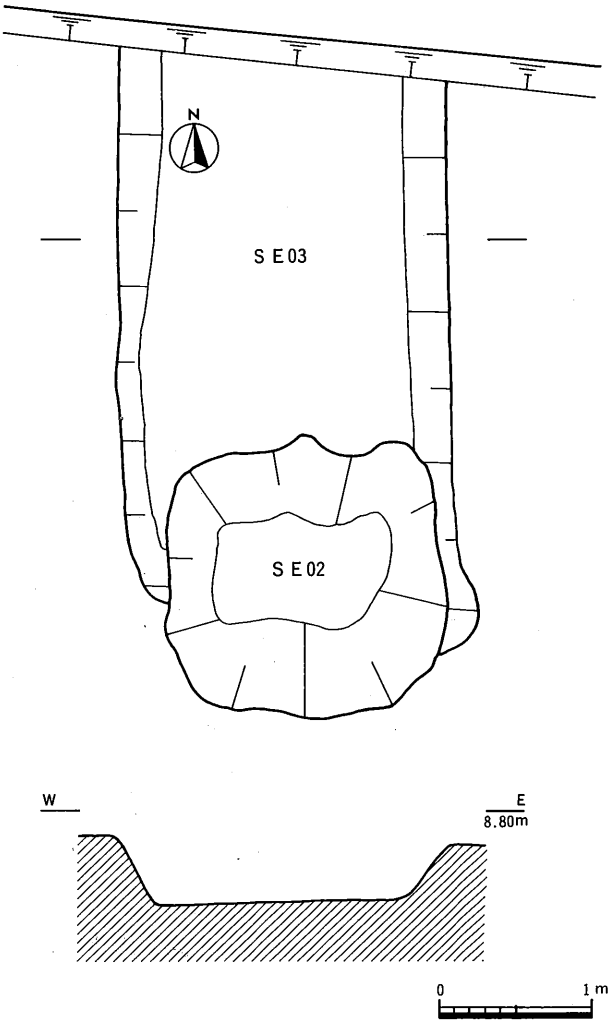


第70図　Ｃ地区第１面ＳＥ02出土遺物（1/4，1/6）

ＳＥ04・ＳＫ17（第75～77図，図版25）　ＳＥ04はＣ－２区の中央で検出された井戸である。遺構の北部はＳＫ17・ＳＤ35と連続する。平面形はほぼ円形を呈し，径1.3～1.6m，深さ0.9～1.0mを測る。底部を欠いた備前焼甕（95）を井戸枠として使用していた。井戸枠の上端部の径は0.8m，高さは0.6mを測る。口縁部は一部残存していただけで，底部は２つに割れた状態で体部上半の上に置かれていた。井戸の底面は粗砂層の湧水層で，常に水が湧いている状態であった。

また，ＳＥ04の北部はＳＫ17とＳＤ35に連続する。位置からＳＥ04の作業場と排水溝であると思われる。ＳＫ17の平面形は不定三角形で，長軸0.9m，短軸1.1m，深さ0.3mを測る。底面には暗灰褐色細砂混じり粘土が堆積し，上部には灰褐色細砂・粘土ブロック混じりの黒褐色粘質シルトが堆積する。ＳＥ04からは95と土師質土器羽釜（94）が出土した。

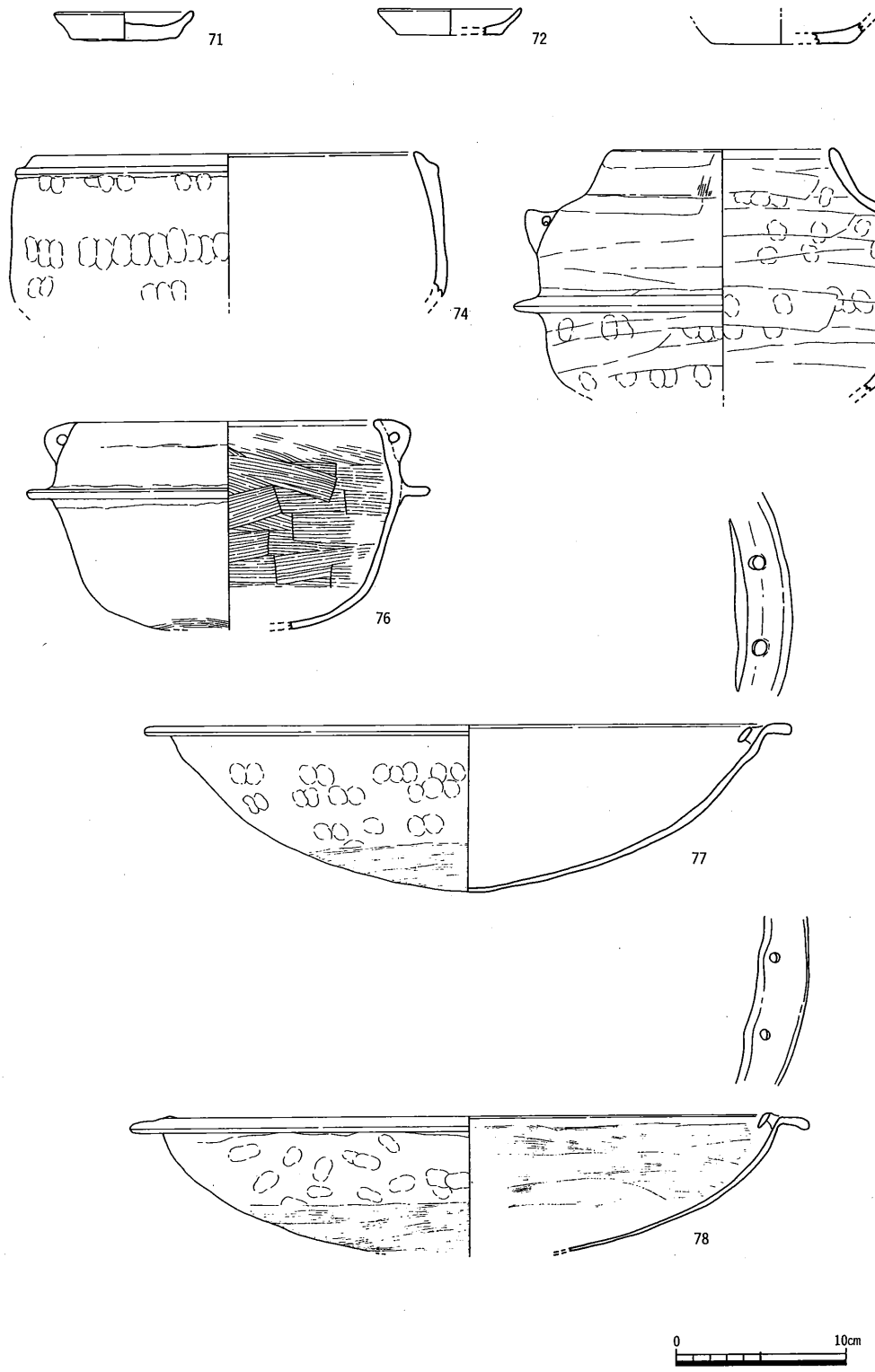
95は製作時から体部下半の接合痕付近で割れやすくなっており，底部欠損後，底部のない甕を井戸枠として再利用したものと考えられる。口縁部外面に2～3本の凹線をもつことから，備前焼第Ⅴ期，16世紀前半から17世紀前半のものであると考えられる（註3）。ＳＫ17からは土師質土器羽釜（96）・擂鉢（97・98）・鉢（99），瀬戸・美濃灰釉皿（100）・卸目付灰釉皿（101），備前焼壺（102）・甕（103）の他，亀山焼甕・須恵質土器・土師質土器土鍋，土壁と考えられる焼土塊，鉄滓がビニール袋大1袋程度出土した。



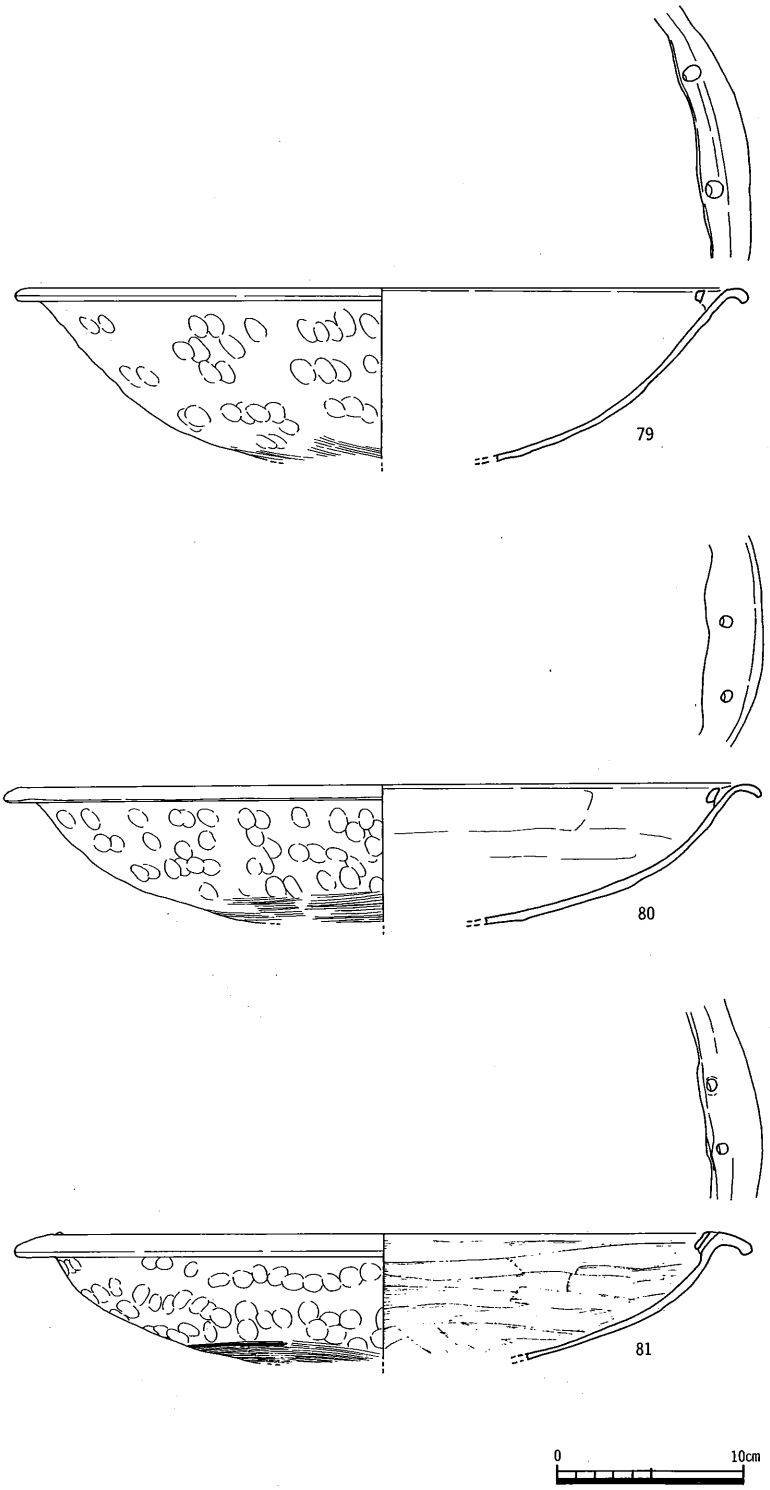
第71図　C地区第1面ＳＥ03平・断面図（1/50）

100は瀬戸・美濃灰釉皿である。端反り皿で，大窯1段階，15世紀末から16世紀初頭のものである（註6）。103は備前焼甕である。口縁部外面に凹線をもつことから，備前焼第Ⅴ期，16世紀前半から17世紀前半のものと考えられる（註3）。

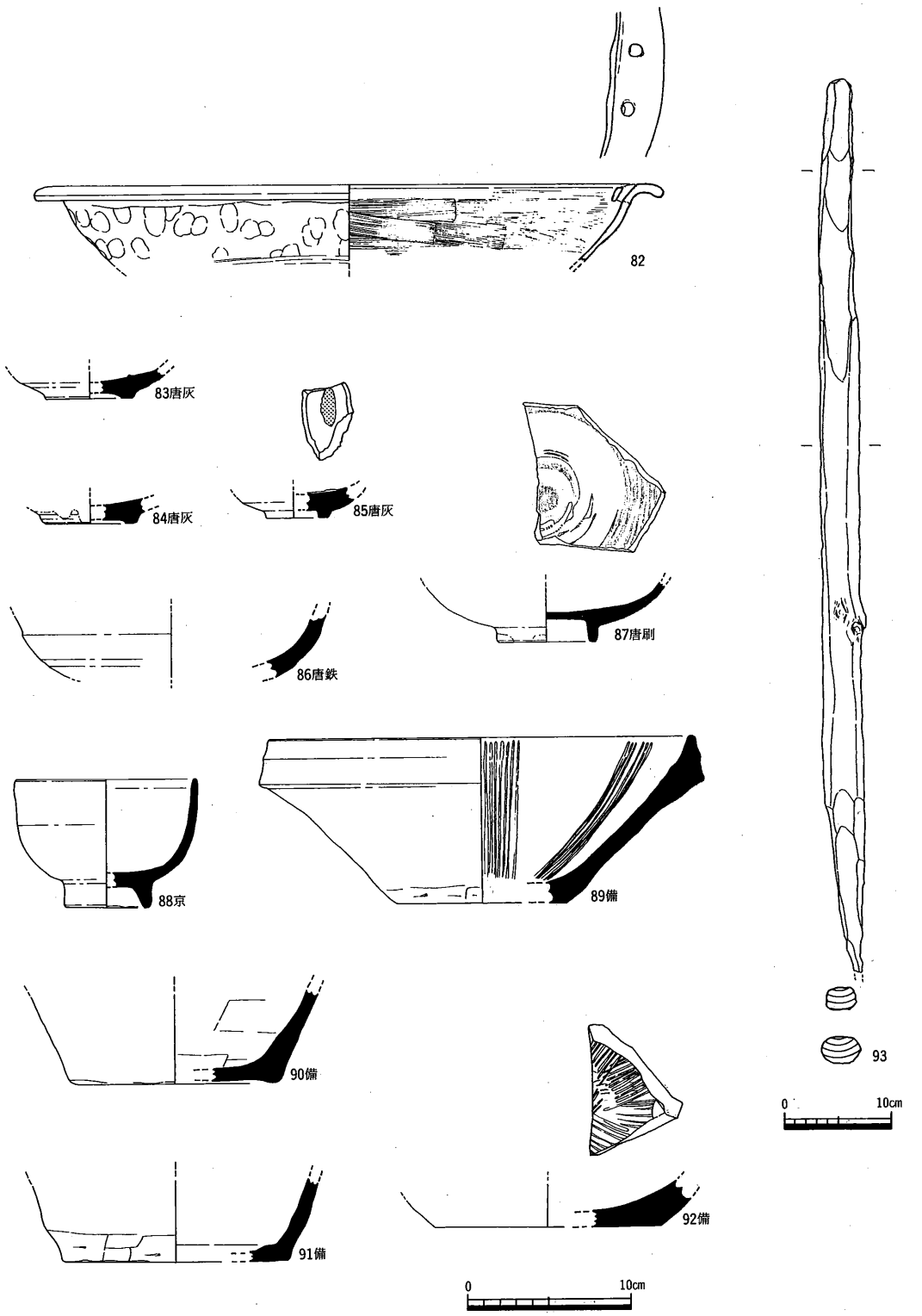
ＳＥ05（第78～81図，図版26）　C－2区の東部を南から北に走る溝，ＳＤ20内の南端で検出された井戸である。平面形はほぼ円形を呈し，径2.2m，深さ1.0mを測る。井戸は二段に掘り込まれており，その中からは5個の曲物（上から104～108）を重ねた井戸枠が出土した。井戸枠の高さは検出時で0.4mであり，径0.5m前後を測る。この井戸枠のまわりには径0.2～0.4mの自然石が数個出土した。これらの石はいずれも平坦部を上にして置かれていること，出土した場所が井戸に降りていくとき足をかけるのにちょうどよい場所であることから踏み石と思われる。井戸の底面は淡灰色粗砂層で湧水層に達し，調査中も常に水が湧いている状態であった。井戸枠の中からは土師質土器皿片が出土しただけである。



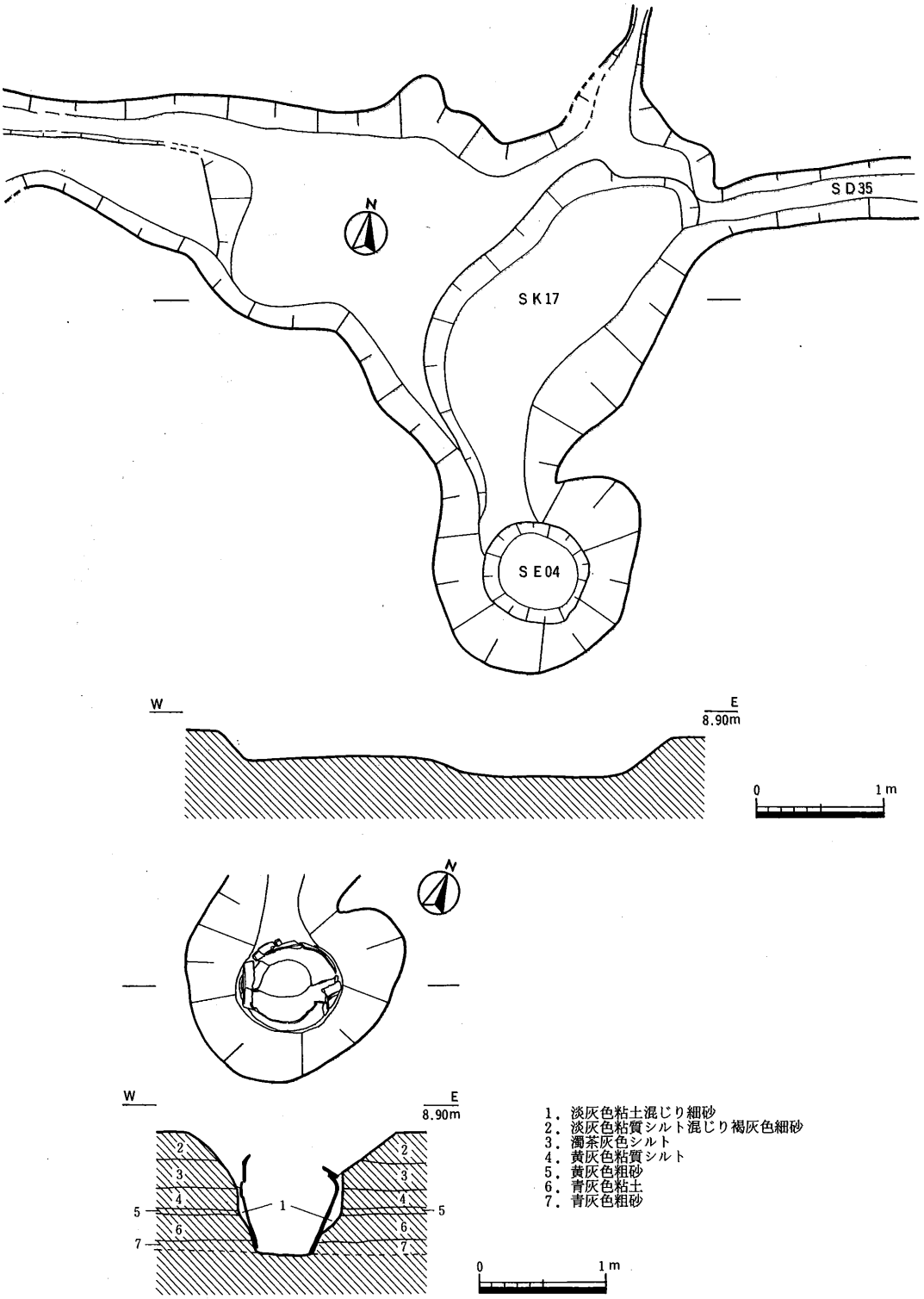
第72図　Ｃ地区第１面ＳＥ03出土遺物〔１〕(1/4)



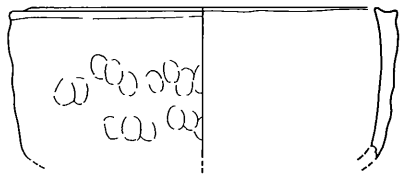
第73図　Ｃ地区第１面ＳＥ03出土遺物〔２〕(1/4)

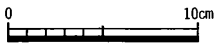


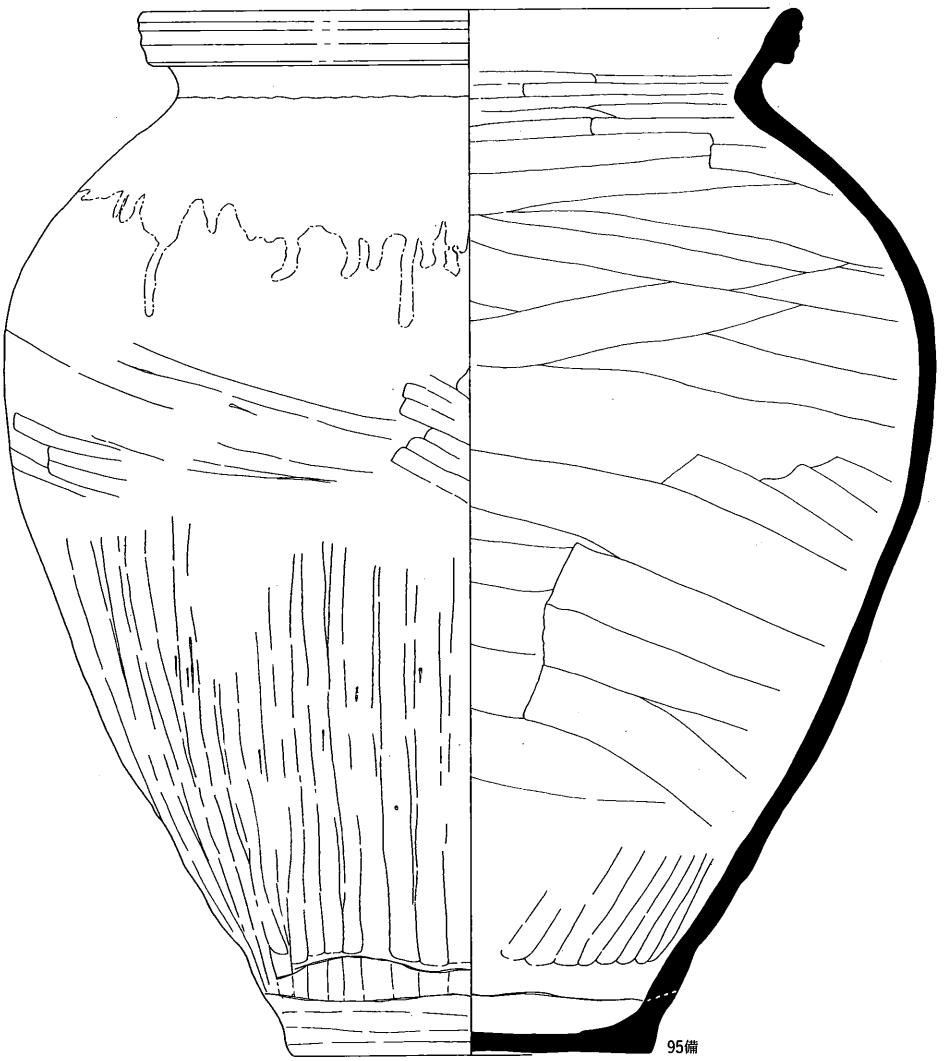
第74図　Ｃ地区第１面ＳＥ03出土遺物〔３〕(1/4, 1/6)

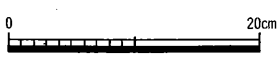


第75図　C地区第1面SE04・SK17平・断面図（1/50）

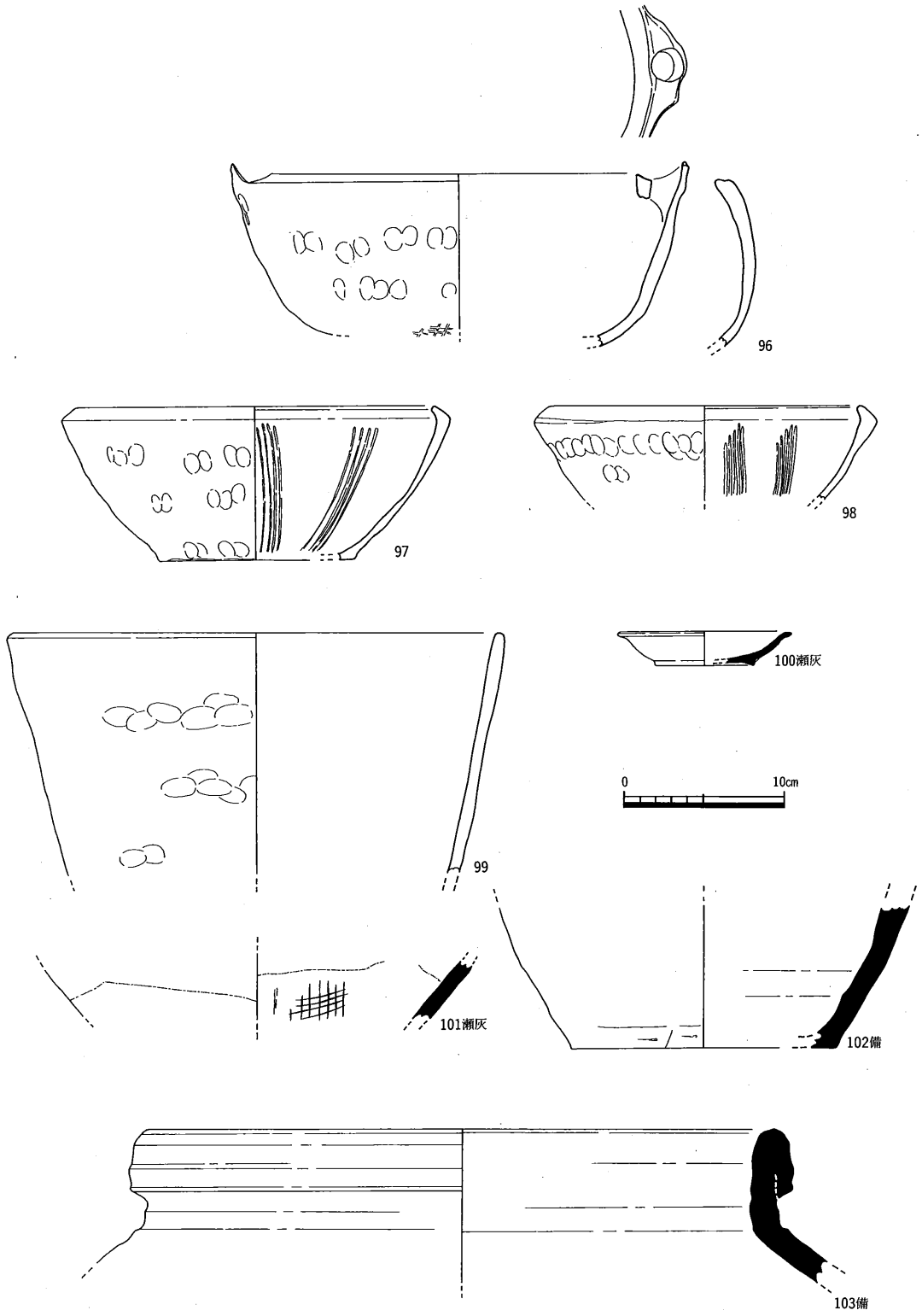




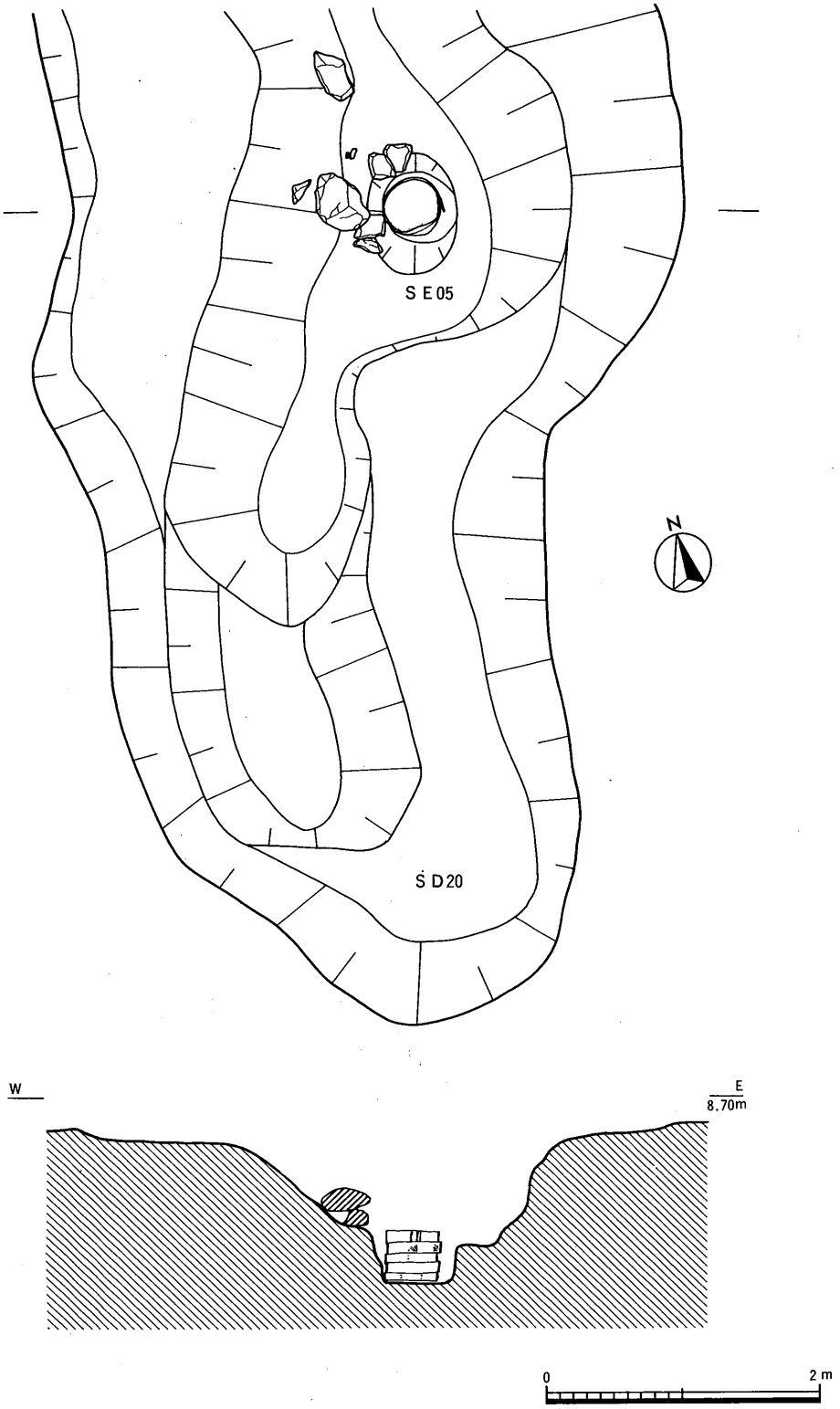




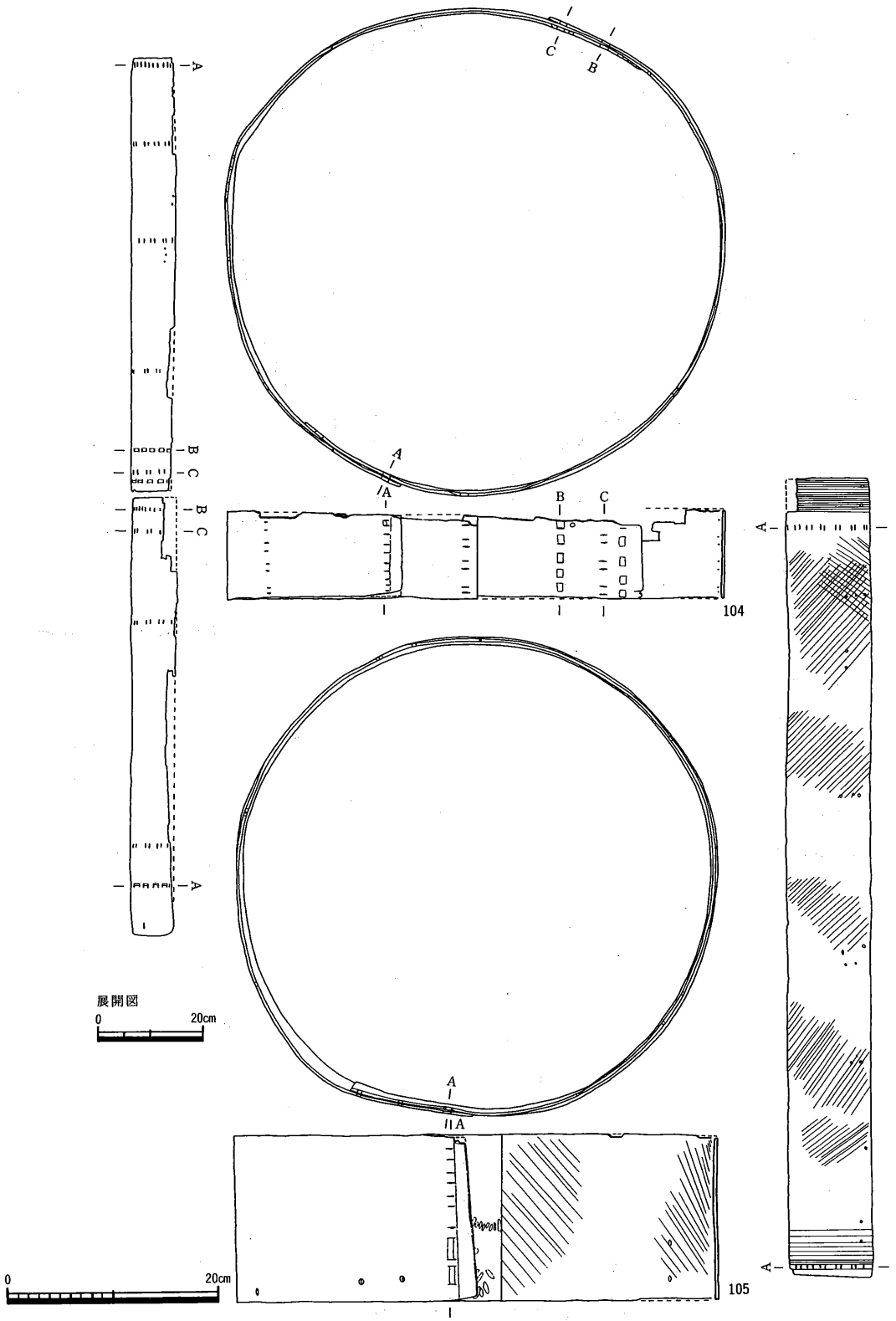
第76図　Ｃ地区第１面ＳＥ04出土遺物（1/4，1/6）



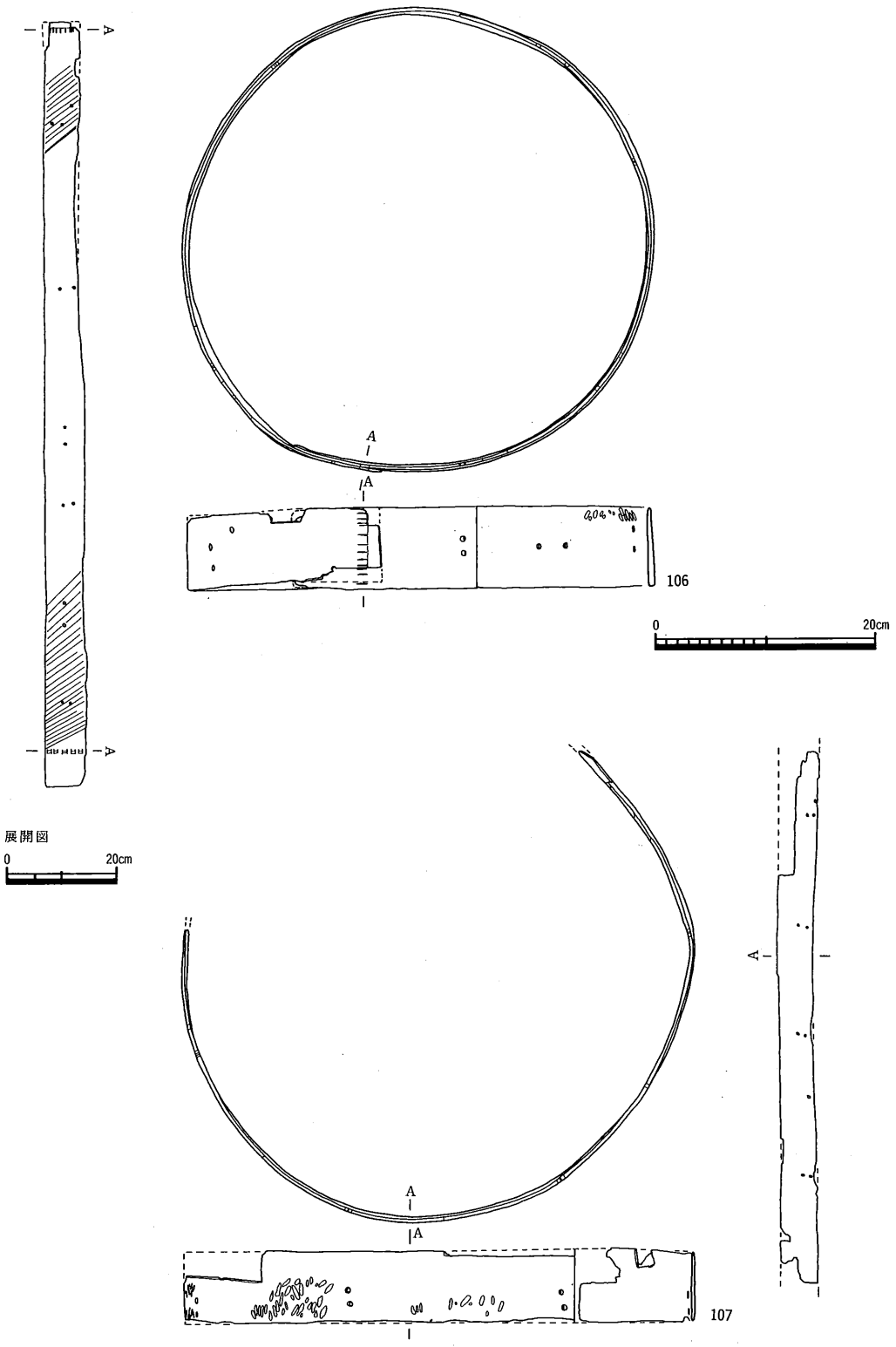
第77図　C地区第1面SK17出土遺物（1/4）



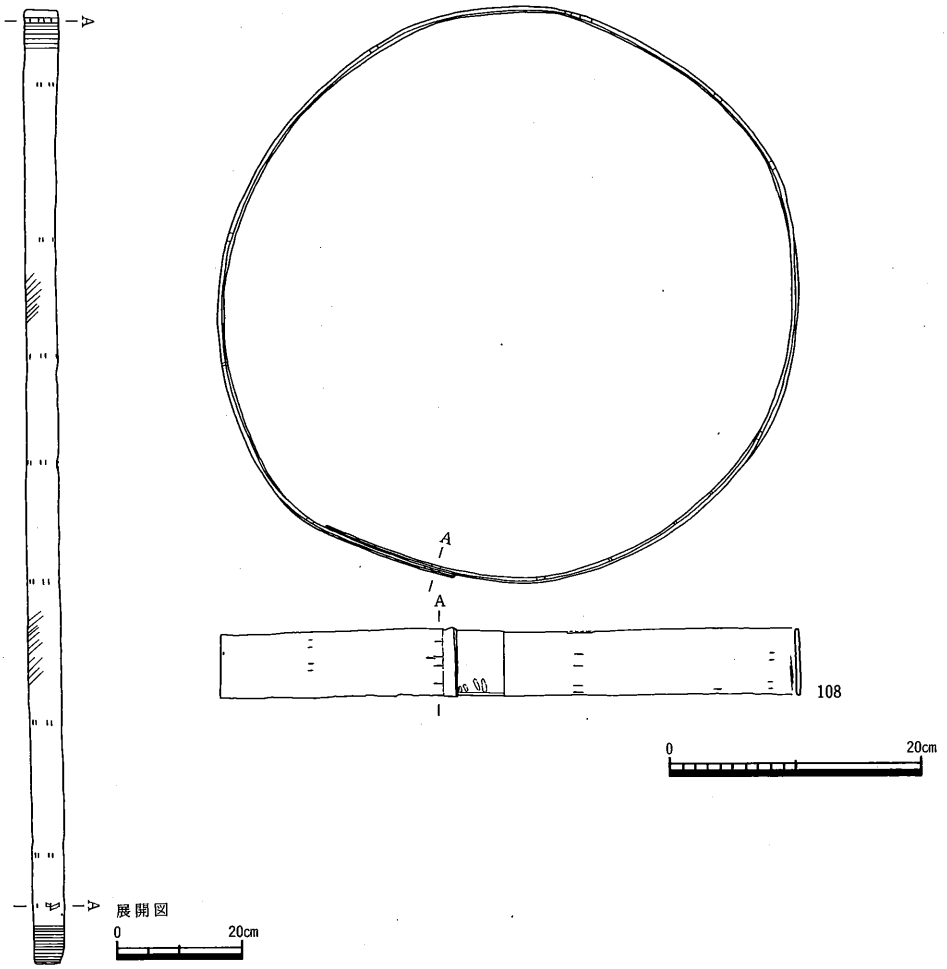
第78図　Ｃ地区第１面ＳＥ05平・断面図（1/50）



第79図　C地区第1面SE05出土遺物〔1〕(1/6, 1/12)



第80図　C地区第1面SE05出土遺物〔2〕(1/6, 1/12)



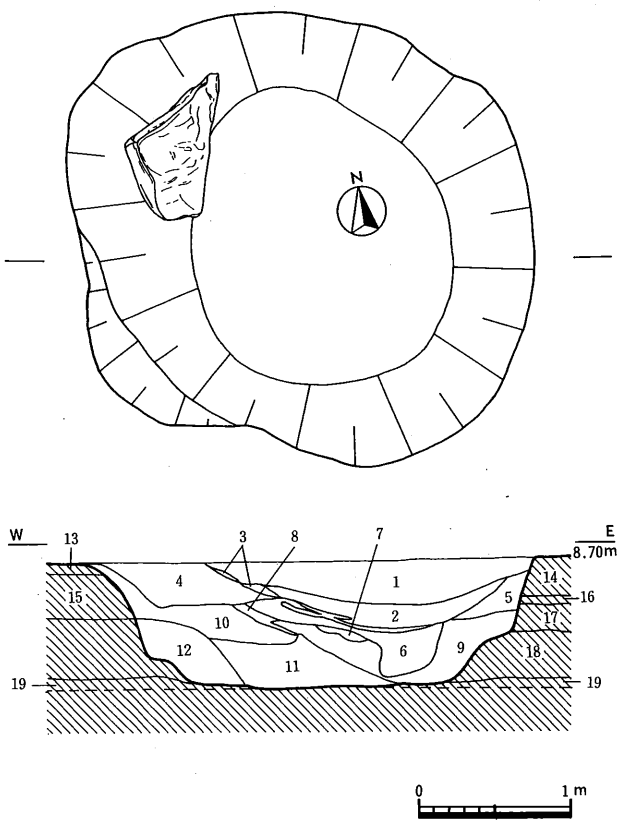
第81図　C地区第1面SE05出土遺物〔3〕(1/6, 1/12)

104～108は曲物である。104は幅8.5cmで，2枚の板を組み合わせていた。105は幅15.7cmで，桜と思われる木の皮で綴じる。内面にはケビキが施され，底板を止めたと考えられる穴がみられる。106は幅7.5cm，107は幅6.5cm，108は幅5.2cmである。106～108は浅い曲物で，底板を固定するための穴があけられている。これらの曲物はいずれも底板を止めたと考えられる穴がみられることより，井戸枠専用として製作されたものではなく，入れ物として作られたものを転用したものと考えられる。

SE06（第82・83図）　SD20の南側で検出された井戸である。平面形は不定円形で，径3.0m，深さ0.8mを測る。断面形は逆台形を呈し，底面は平坦である。底面は灰色小礫混じり粗砂層で，現在もこの層からはかなりの湧水がみられる。井戸内の北西部からは一辺0.5m前後の平たい自然石が斜めに落ち込んだ状態で出土した。土層断面観察から井戸の埋没は西部より東部のほうが遅く，井戸が少し埋まった後，東部を掘り直したことがわかる。埋土より土師質土器皿（109）・鉢（110）・擂鉢（111・112），備前焼擂鉢（113），亀山焼甕（114），中国産白磁皿

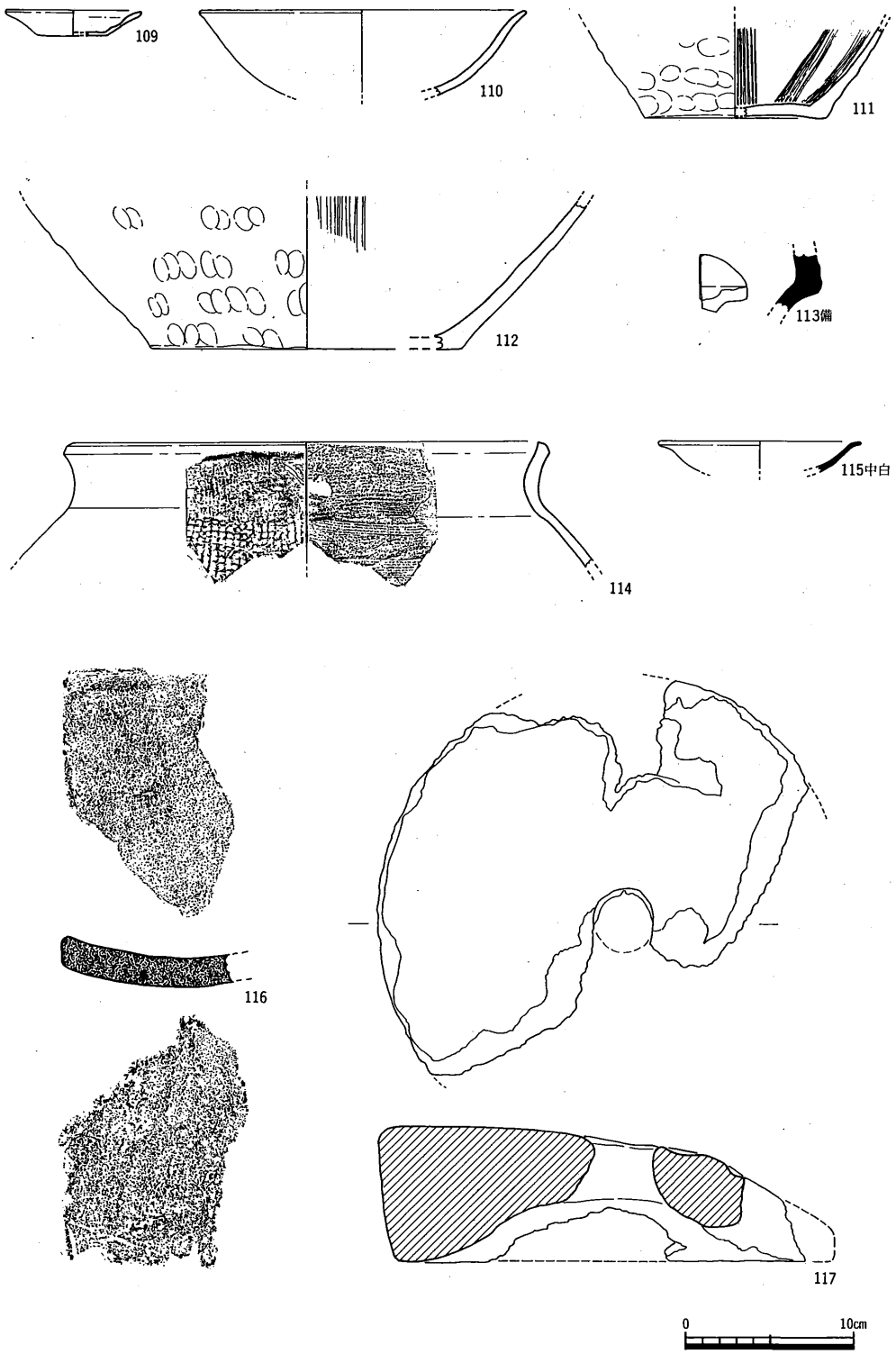
（115），平瓦（116），石臼（117），アカニシの殻（1366）などビニール袋大１袋程度の遺物が出土した。

113は備前焼の擂鉢で，口縁部破片である。口縁部を拡張し，外面に凹線をもつことから，備前焼第Ⅴ期，16世紀前半から17世紀前半のものであると考えられる（註３）。115は中国産白磁皿の口縁部の破片である。口縁部が端反りすることより，森田氏の分類のＥ群にあたり，16世紀代のものであると考えられる（註７）。117は半分欠損しているが，摺り面が凸形になっていることより，下臼であることがわかる。かなり使い込んでいる。石材は本遺跡の５㎞程北の高松市屋島，高松市の５～10㎞沖合いに浮かぶ女木島・男木島・小豆島付近で産する塩基性凝灰角礫岩である。



1．暗褐灰色細砂混じり粘土
2．淡茶色～灰青色粘土
3．淡灰色シルト
4．暗褐灰色粘土混じり細砂
5．暗灰色～褐黄色砂混じり粘土
6．暗灰色粘土
7．灰色細砂
8．灰黄色～灰色粗砂
9．暗灰色細砂混じり粘土
10．灰黄色～暗灰色細砂混じり粘土
11．暗灰色粘土混じり粗砂
（植物遺体を少量含む）
12．暗灰色粘砂混じり粘土
（植物遺体を少量含む）
13．灰黄色シルト
14．茶灰色細砂混じり粘土
15．灰黄色粘土
16．灰色シルト
17．青灰色粘質シルト
18．青灰色シルト
19．灰色小礫混じり粗砂

第82図　Ｃ地区第１面ＳＥ06平・断面図（1/50）



第83図　C地区第1面SE06出土遺物（1/4）

５）土坑

ＳＫ01（第84図）　Ｃ－１区北半部の中央で検出された土坑である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径1.1m，深さ0.5mを測る。断面形は緩やかに掘り込まれて逆台形状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトが堆積し，４層に細分された。ベースブロックや炭化物を含んでおり，人為的に埋め戻された可能性が高い。埋土から土師質土器皿片・須恵器片が数点出土した。

ＳＫ02　Ｃ－１区東部で検出された土坑で，ＳＤ07を切っている。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.75m，深さ0.15mを測る。底面はほぼ平坦で，断面形は箱状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトが堆積し，２層に細分された。土師質土器片が数点出土した。

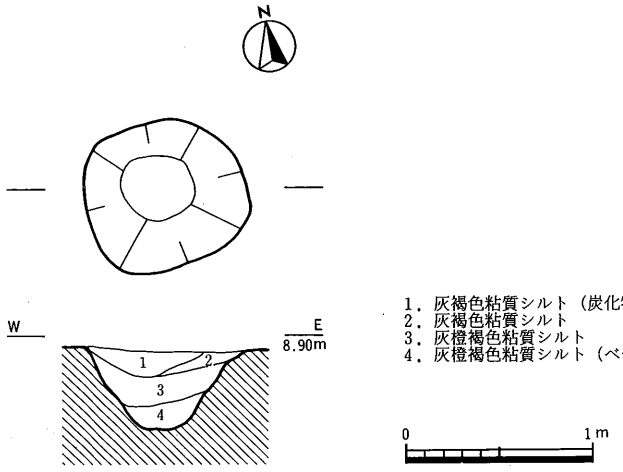
ＳＫ04　Ｃ－１区南部で検出された土坑で，北半部をＳＤ05に切られている。掘り方の平面形は現状で楕円形を呈し，径0.8m，深さ0.15mを測る。断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルト及び灰黄褐色粘質シルトからなる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ05　Ｃ－１区南部で検出された土坑である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，長軸1.1m，短軸0.6m，深さ0.15mを測る。断面形は概ね逆台形状を呈し，底面には３cm前後の起伏が認められた。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。土師質土器片が数点出土した。

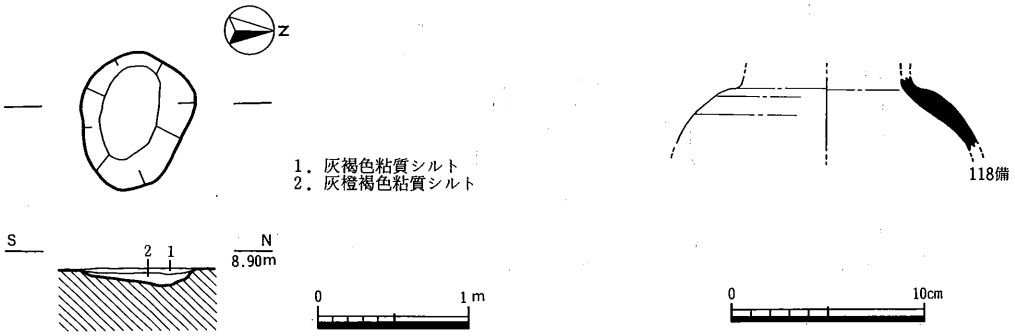
ＳＫ06　Ｃ－１区南部で検出された土坑である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.9m，深さ0.4mを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトが堆積する。一部ベースブロックを含み，人為的に埋め戻された可能性がある。土師質土器皿・羽釜片が数点出土した。

ＳＫ07（第85図）　Ｃ－１区中央部で検出された土坑で，ＳＤ06を切っている。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.75m，深さ0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈し，底面は北に傾斜して北端部が５cm程低くなっている。埋土は灰褐色系粘質シルトが堆積し，２層に細分された。備前焼壺（118），土師質土器皿・羽釜片が数点出土した。

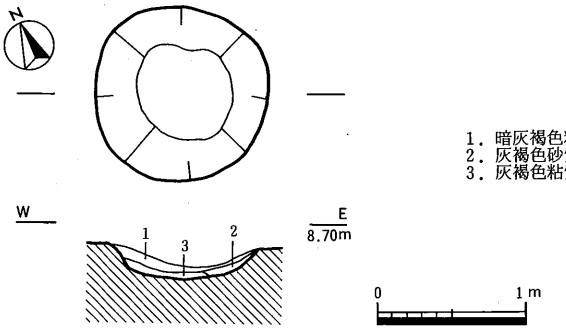
ＳＫ08（第86図）　Ｃ－１区東端で検出された土坑で，西大半をＳＤ02に切られる。掘り方の平面形は円形を呈し，径1.0m，深さ0.25mを測る。断面形は皿状を呈し，埋土は灰褐色系粘質シ

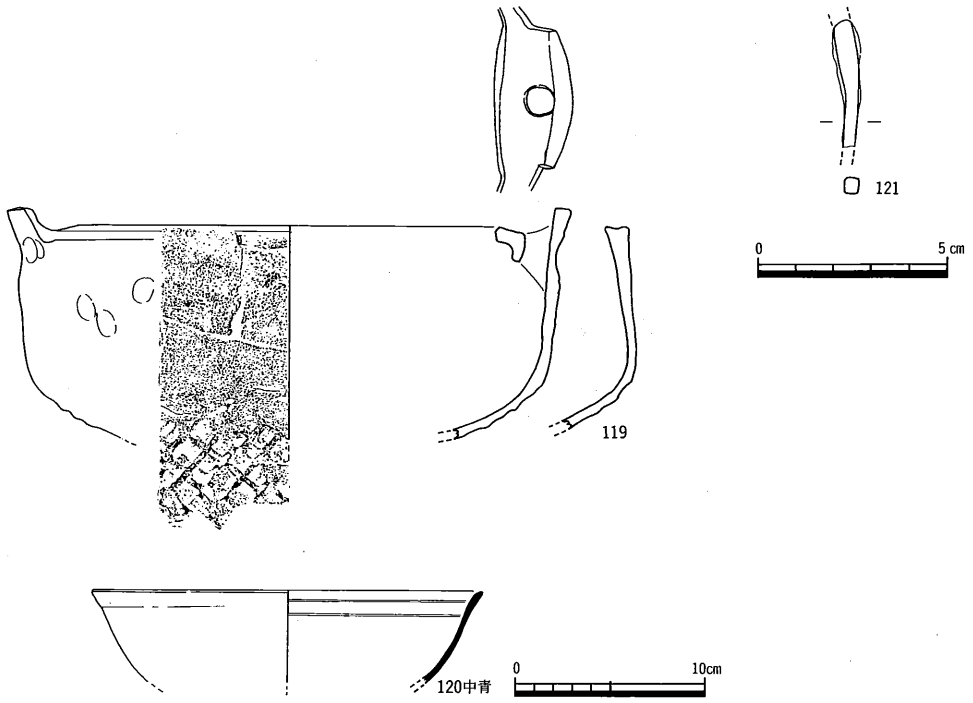


第84図　Ｃ地区第１面ＳＫ01平・断面図（1/50）

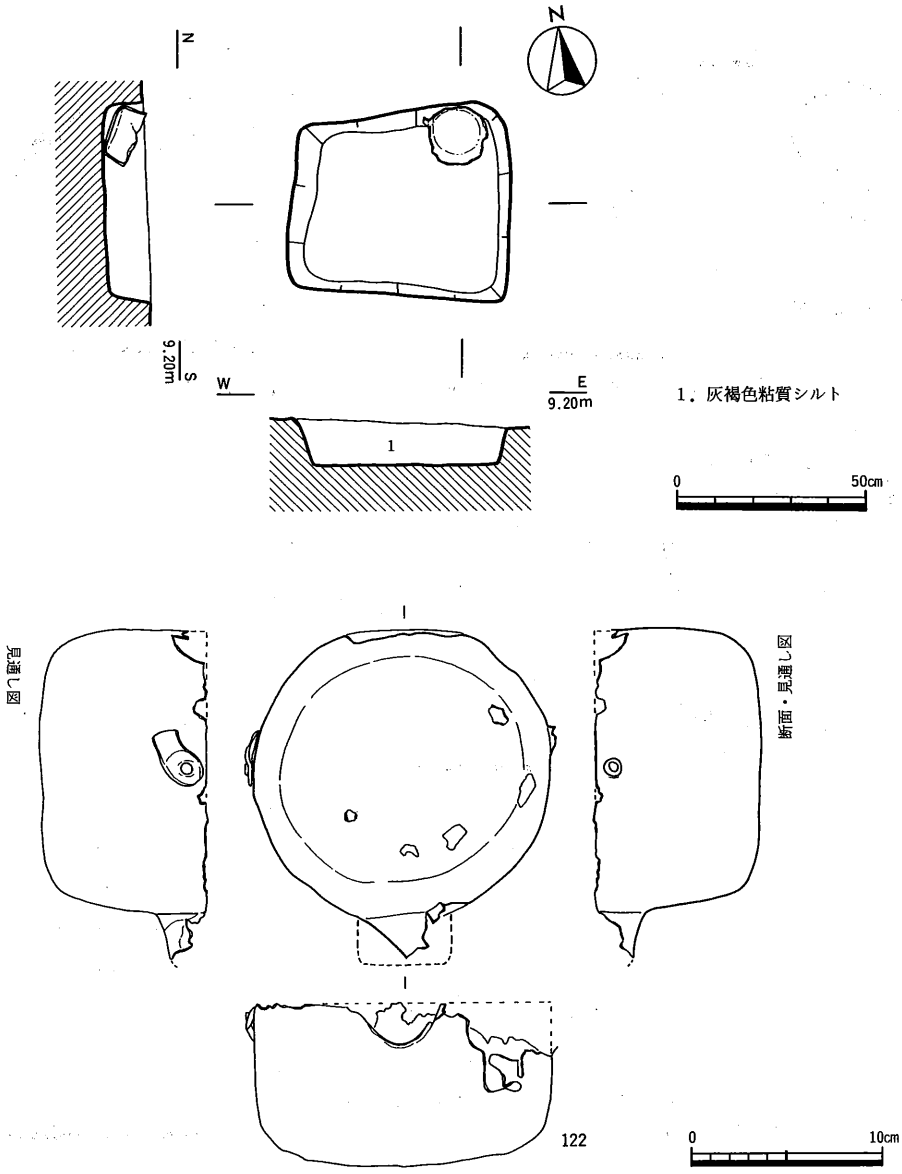


第85図　C地区第1面SK07平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）





第86図　C地区第1面SK08平・断面図（1/50），出土遺物（1/2，1/4）

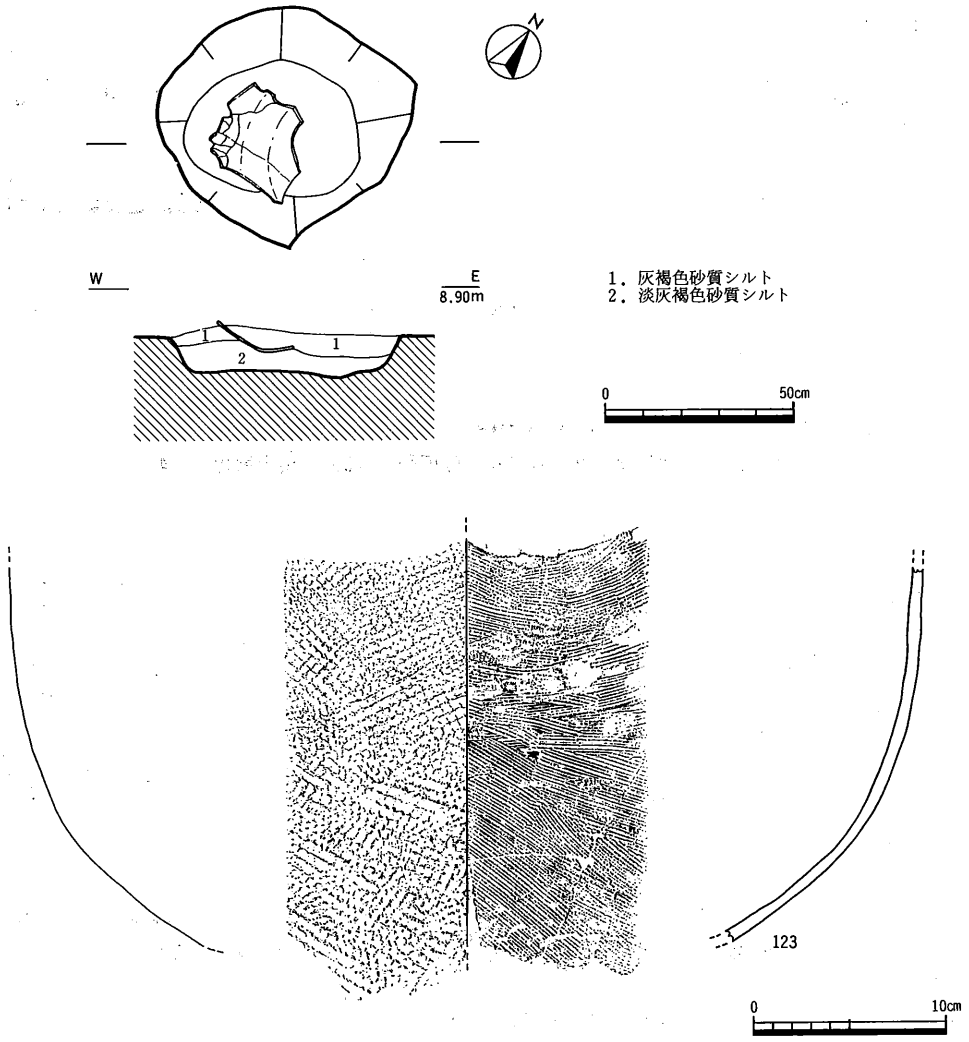


第87図　C地区第1面SK09平・断面図（1/20），出土遺物（1/4）

ルトが主体を占め，3層に細分された。埋土からは土師質土器羽釜（119），中国産青磁鉢（120），釘（121），土師質土器片が数点出土した。

120は口縁部内面に2本の沈線が施される。口縁部が外反することから，上田氏の分類のD類にあたり、14世紀代のものであると考えられる（註8）。

SK09（第87図，図版27）　C－1区中央部で検出された土坑である。平面形は西辺がやや短い台形状を呈し，長軸5.7m，短軸4.8m，深さ0.1mを測る。断面形は箱状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。また北東隅部で，床面に接してほぼ完形の銅碗（122）が出土した。122は口縁部を上に向け，北壁面に底部をもたせかけるようにして，南に傾いて出土した。ほかに



第88図　C地区第1面SK10平・断面図（1/20），出土遺物（1/4）

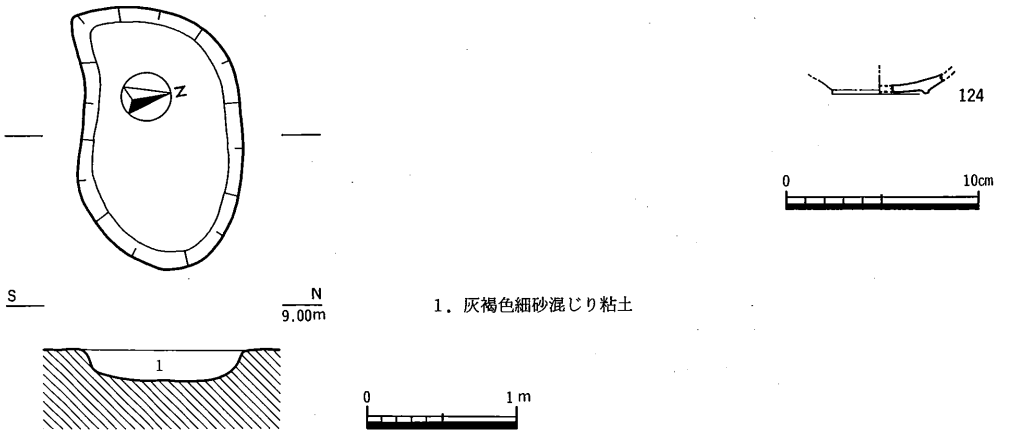
は遺物は出土しなかった。

122は片口の銅碗である。両端には留め具がつく。

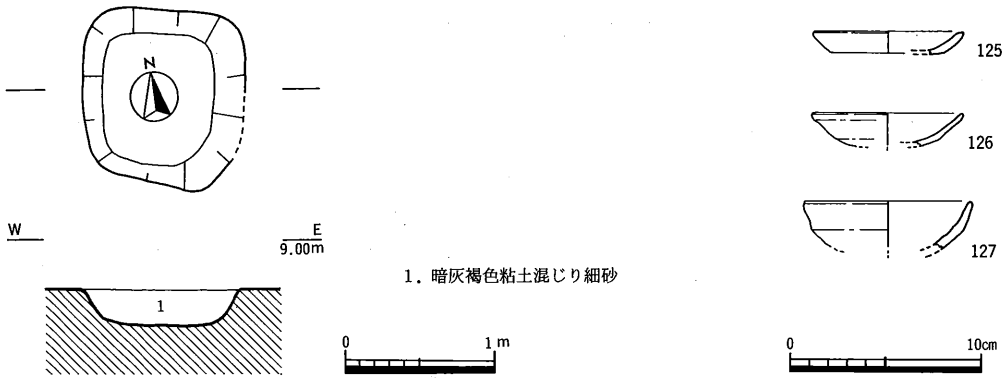
SK10（第88図，図版27）　C－1南拡張区東端で検出された土坑で，東端部をSD77に切られる。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.6m，深さ0.15mを測る。上面は削平されているらしくかなり浅い。断面形は概ね箱状を呈し，底面はほぼ平坦であった。埋土は灰褐色砂質シルト及び淡灰褐色砂質シルトからなる。上位層中より，内面を上に向けた亀山焼甕の体部片（123）が出土した。

123は焼きが良く，須恵質でやや堅緻である。

SK11（第89図）　C－2区の西部で検出された土坑である。平面形は不定楕円形を呈し，長軸1.8m，短軸1.2mを測る。深さは0.2mを測り，埋土は灰褐色細砂混じり粘土である。遺物は瓦



第89図　C地区第1面SK11平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）



第90図　C地区第1面SK12平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

器埦（124）のほか土師質土器皿の破片が数点出土した。

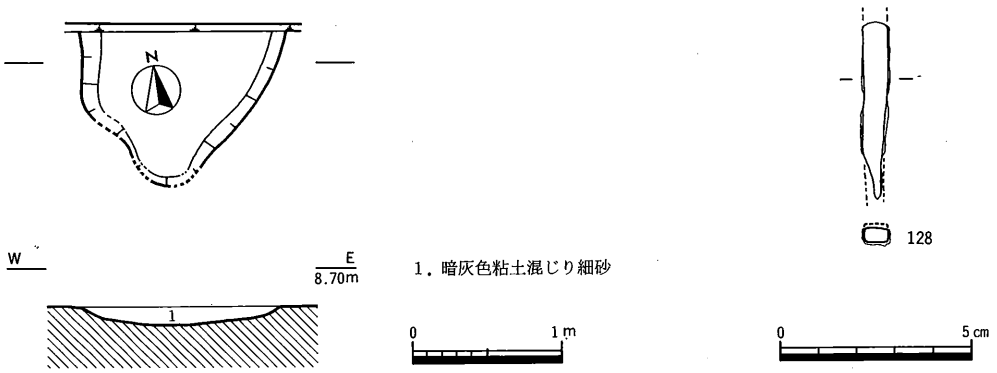
124は底部破片で，13世紀代のものである。

SK12（第90図）　C－2区の北部で検出された土坑である。平面形は隅丸方形を呈し，一辺1.1m，深さ0.2mを測る。2個の小穴が重複していたが，前後関係は不明である。埋土は暗灰褐色粘土混じり細砂である。遺物は土師質土器皿（125・126）・坏（127）のほか土師質土器土鍋や瓦質土器の破片が数点出土した。

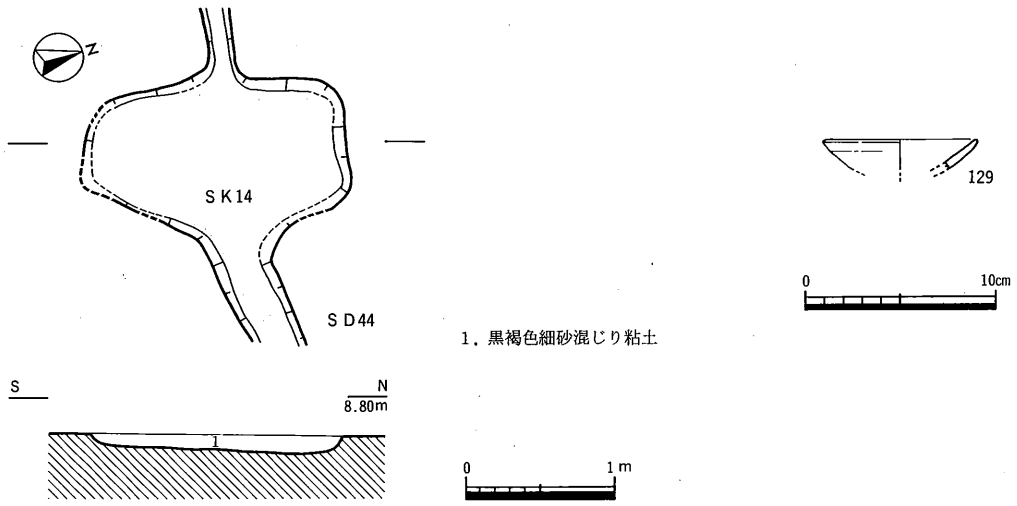
SK13（第91図）　C－2区の北東部，SD20の西側で検出された土坑である。北部は調査区外に延びるため，全体は不明である。平面形は不定形を呈するが，東西の長さは1.3mを測る。深さは0.2mを測り，埋土は暗灰色粘土混じり細砂である。遺物は釘（128）のほか土師質土器皿片が1片出土しただけである。

128は角釘であるが，両端部を欠損する。

SK14（第92図）　C－2区の北東部，SK13の南部で検出された土坑である。SD44と連続



第91図　C地区第1面SK13平・断面図（1/50），出土遺物（1/2）

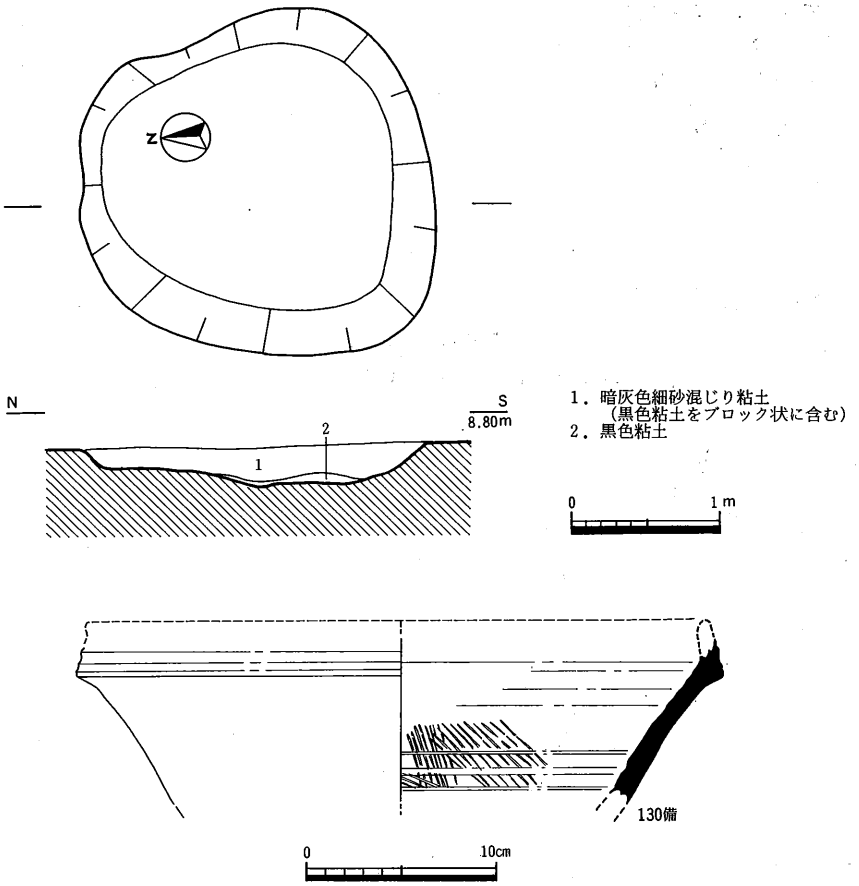


第92図　C地区第1面SK14平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

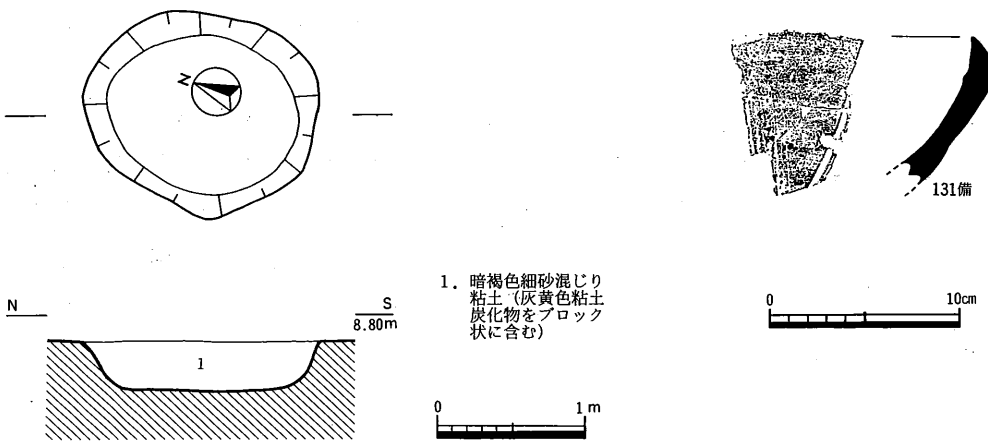
し，小穴と重複するが，前後関係は不明である。平面形は隅丸長方形である。長辺1.8m，短辺0.9m，深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色細砂混じり粘土である。遺物は土師質土器皿（129）のほか土師質土器土鍋片，瓦質土器擂鉢片が数点出土した。

SK15（第93図）　C－2区の北東部で検出された土坑である。SB09や3個の小穴と重複する。平面的な切り合い関係より小穴より新しいことが確認された。SB09との前後関係は不明である。平面形は不定円形を呈する。径1.5m，深さ0.3mを測る。埋土は底面付近には黒色粘土が薄く堆積し，その上には黒色粘土と黄灰色粘土をブロック状に含む暗灰色細砂混じり粘土が堆積する。土層の堆積より，人為的に埋め戻されたものであると考えられる。遺物は備前焼擂鉢（130）のほか土師質土器土鍋・皿，瓦片，亀山焼甕の破片が数点出土した。

130は口縁部の上部を欠損するが，口縁部外面を拡張して，拡張部に凹線をもち，体部に斜めの卸目をもつことから，備前焼第Ⅴ期，16世紀前半から17世紀前半のものであると考えられる（註3）。



第93図　Ｃ地区第１面ＳＫ15平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）



第94図　Ｃ地区第１面ＳＫ16平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

SK16（第94図，図版28）　C－2区の東部で検出された土坑である。SD62や小穴と重複する。平面形は円形である。径1.5m，深さ0.3mを測る。埋土は灰黄色粘土・炭化物をブロック状に含む暗褐色細砂混じり粘土である。おそらく人為的に埋められたものであろう。遺物は備前焼擂鉢（131）のほか土師質土器皿の破片が少量出土した。

131は口縁部が断面三角形を呈していることから、備前焼第IV期前半、14世紀後半から15世紀代のものであると考えられる（註3）。

SK18（第95図）　C－2区の西部で検出された土坑である。SD37・SD38と重複する。土層断面の観察より，SD37・SD38はSK18よりも古いものであることがわかる。平面形は楕円形を呈し，長軸2.7m，短軸2.1m，深さ0.5mを測る。遺物は土師質土器皿（132・133）・坏（134），肥後焼鉄釉壺（135）のほか備前焼片，土師器土鍋，須恵質土器片が数点出土した。

135は耳をもち，体部外面に鉄釉を塗布する。17世紀代のものであると考えられる。135の接合破片はC－2区北西部の柱穴からも出土した。

SK19　C－2区の中央，SE04の南部で検出された土坑である。平面形は不定円形を呈し，径1.2m，深さ0.4mを測る。遺物は出土しなかった。

SK20（第96図）　C－2区の東部で検出された土坑である。北部はSD66，西部はSD67と連続する。SK20・SK66・SD67の埋土は同じ暗灰褐色細砂混じり粘土であることから，同時期のものであると考えられる。SK20の平面形は隅丸方形を呈し，長辺3.9m，短辺2.4m，深さ0.2mを測る。遺物は土師質土器皿（136）・羽釜（137）のほか土師器土鍋・擂鉢，瓦質土器片などビニール袋大1袋程度の遺物が出土した。

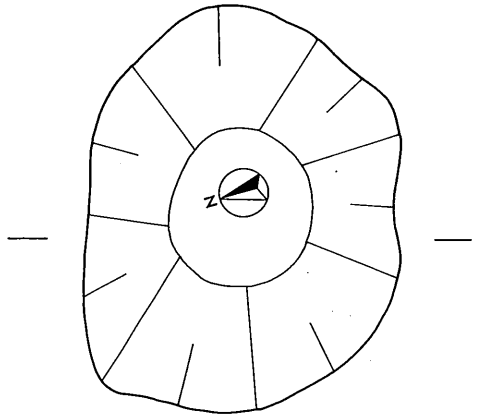
SK21（第97図）　C－2区の北東部，SD20の東肩で検出された土坑である。平面形は楕円形を呈し，長軸1.7m，短軸1.3mを測る。中央付近は2段掘りとなり，深さ0.4mを測る。遺物は須恵質土器片，土師質土器片が数点出土した。

SK22（第98・99図，図版28）　C－2区の北東部，SD20の東肩，SK21の南部で検出された土坑である。平面形はほぼ円形を呈し，径1.6～1.7mを測る。深さは0.3mを測る。北肩より土師質土器羽釜（138）が口縁部を上に向けた状態で出土した。脚部は欠損する。他に鉄滓と土師質土器皿片が数点出土した。

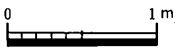
SK23　C－2区の南部SD05とSD21に挟まれた場所で検出された土坑である。平面形は不定方形を呈し，一辺は1.0m，深さは0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

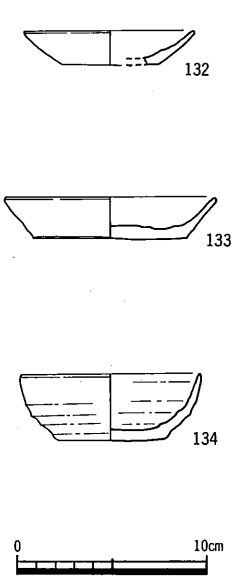
SK24（第100図）　C－2区の南部SD05の南肩で検出された土坑である。SD05と重複するが，SK24はSD05が埋まってから掘削されたものである。平面形は隅丸長方形を呈し，短辺2.3m，長辺2.5m，深さ0.1mを測る。遺物は土師質土器片が数点出土した。

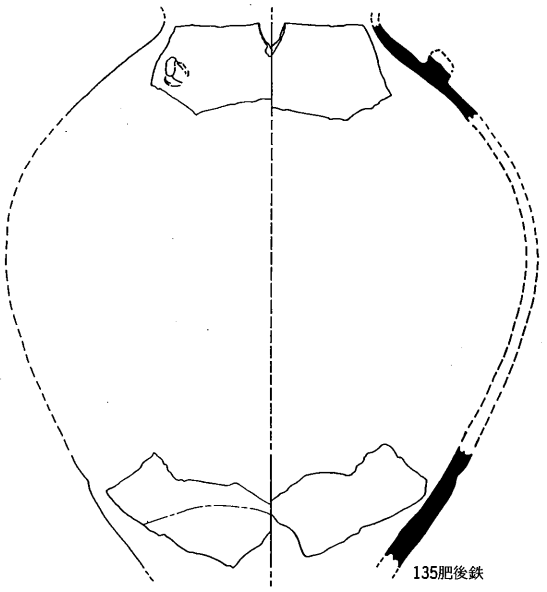
SK25（第101図）　C－2区の南部SD05の南肩で検出された土坑である。SD05と重複するが，土層断面の観察から，埋没はSK25のほうが先であることがわかる。平面形は方形を呈し，



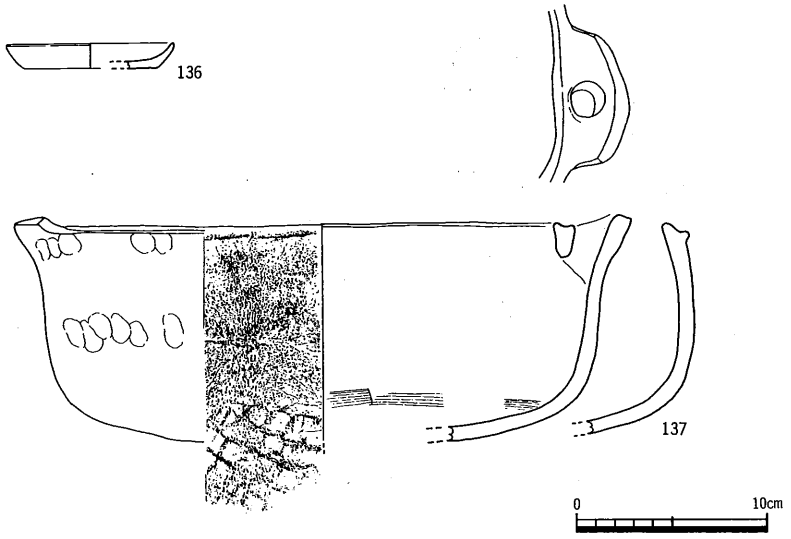
1．灰褐色細砂混じり粘土
2．淡黄灰色粘土混じりシルト
3．淡灰黄色粘土混じり細砂
4．淡黄灰色シルト（灰色シルトをブロック状に含む）
5．灰黄色粘土



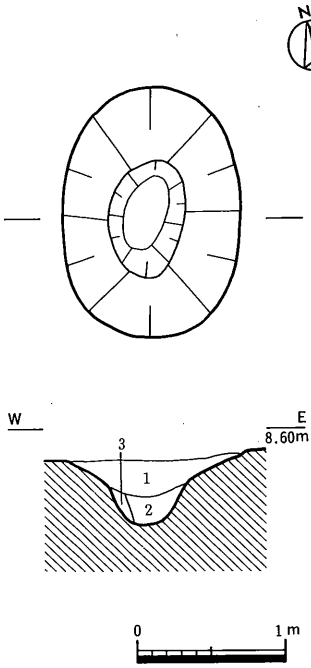




第95図　Ｃ地区第１面ＳＫ18平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

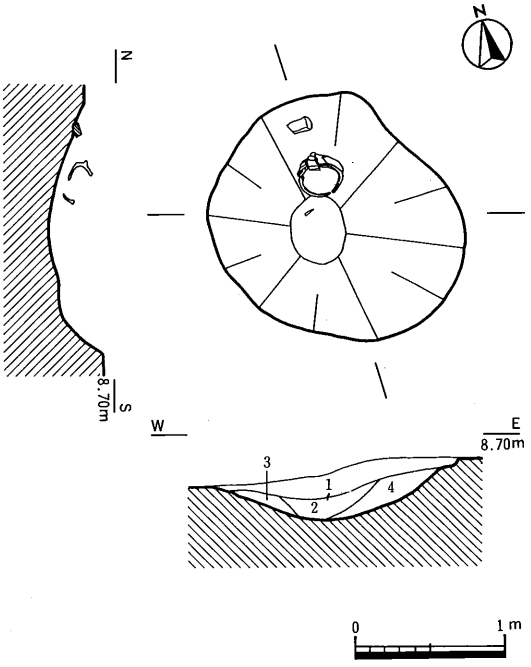


第96図　C地区第1面SK20出土遺物（1/4）



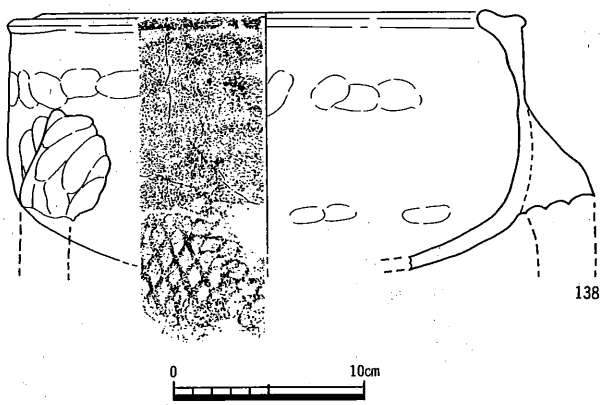
1．濁灰褐色シルト
2．濁灰色シルト
3．淡茶灰色細砂

第97図　C地区第1面SK21平・断面図（1/50）

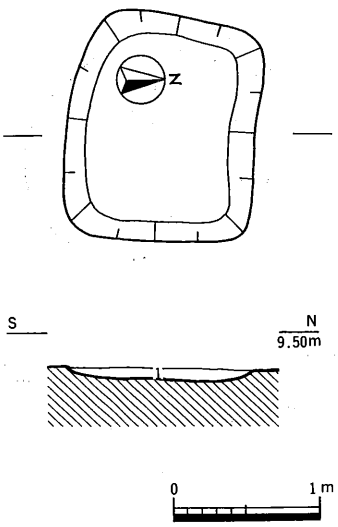


1．茶褐色斑混じり濁灰色シルト
2．濁淡灰色シルト
3．茶灰色シルト
4．濁灰色シルト

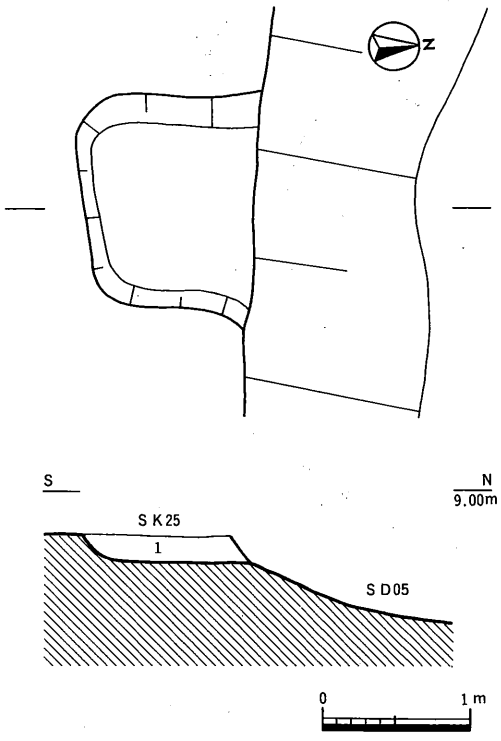
第98図　C地区第1面SK22平・断面図（1/50）



第99図　C地区第1面SK22出土遺物（1/4）



第100図　C地区第1面SK24平・断面図（1/50）



第101図　C地区第1面SK25平・断面図（1/50）

一辺の長さは1.4m，深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

SK26（第102図）　C－2南拡張区で検出された土坑である。SD05・SB15，3個の小穴と重複する。平面形はほぼ円形を呈し，径1.6～1.9m，深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

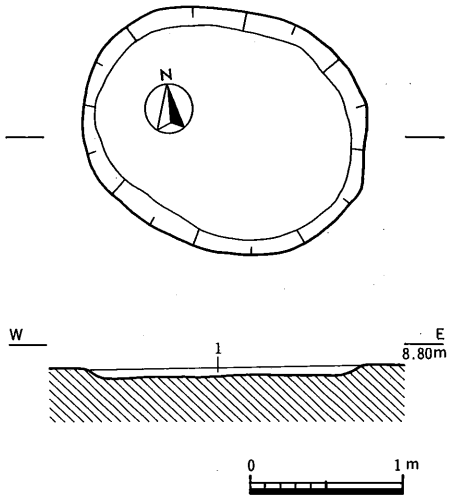
SK27（第101・102図，図版29）　C－2区の西部，柵SA04・SA05の内側，掘立柱建物SB03・SB04・SB06・SB07の西南で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸1.0m，短軸0.7m，深さ0.6mを測る。土坑の下部からは備前焼甕（139）が底部を下にして出土した。この中には片岩系の自然石が置かれていた。自然石の大きさは一辺15cm前後を測る。ほかに土器破片などがみられないことから，備前焼甕（139）は廃棄されたものではなく，人為的に埋納されたものであると考えられるが，その性格については不明である。

139は底部の一部，口縁部から体部上半を欠損する。口縁部は小破片が埋土の上部から出土した。139は体部が直線的であるが，口縁部が玉縁状になることから，備前焼第Ⅲ期、13世紀末から14世紀中葉のものであると考えられる（註3）。

6）柱穴・小穴

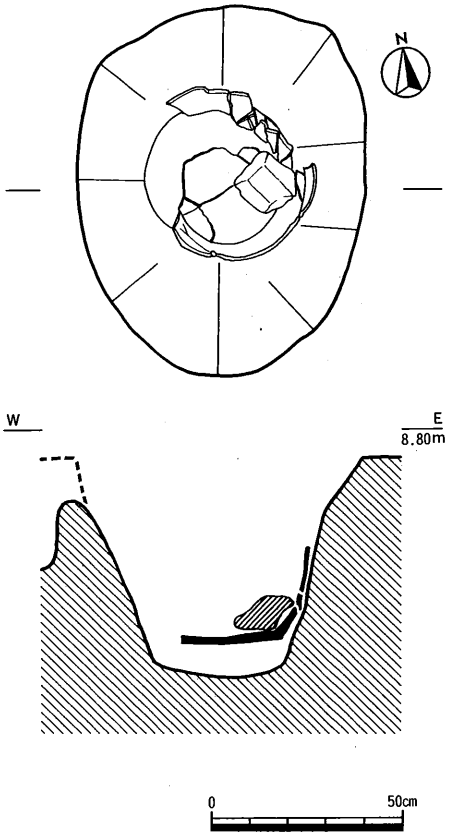
SP239（第105図，図版29）　C－1区の北部で検出された小穴である。平面形は円形を呈し，径0.35m，深さ0.15mを測る。床面より僅かに浮いた位置より，墨書のある和紙に包まれた銅製の皿（140）が倒位の状態で出土した。

和紙の残存状態は非常に悪く，墨書も不明である。140は銅製の皿である。口縁部をいくつか内側に折り，輪花状にする。皿外面の窪んだところには金箔が残存する菊皿である。おそらく組物の一つであろうが，ほかの皿は見当らなかった。紅



1．淡茶色斑混じり濁灰色シルト

第102図　C地区第1面SK26平・断面図（1／50）



第103図　C地区第1面SK27平・断面図（1/20）

などの付着はみられなかった。

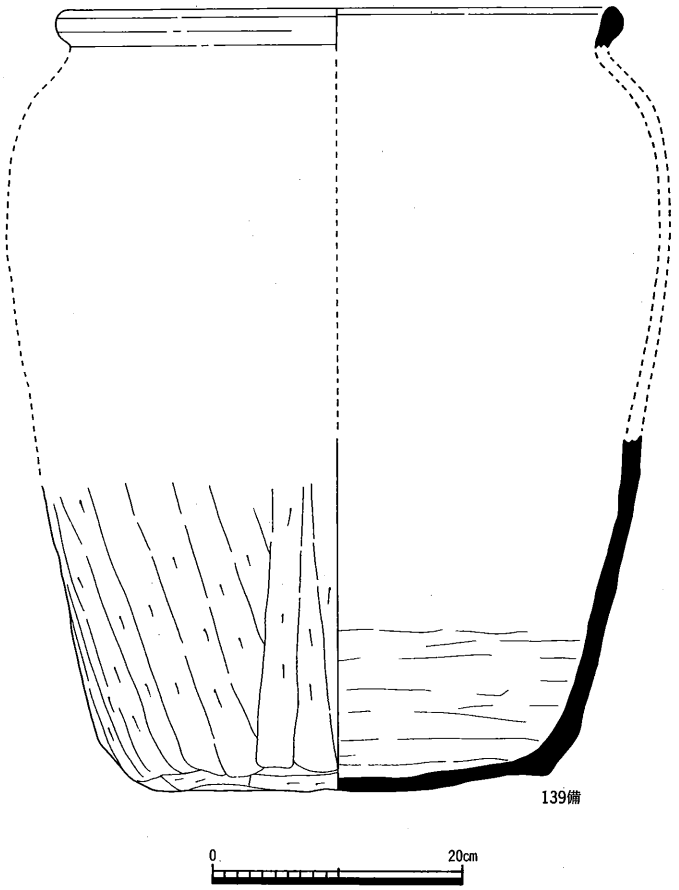
ＳＰ240（第111図）　Ｃ－１区の中央やや北寄りで検出された小穴である。土師質土器皿（154）が出土した。

ＳＰ241（第111図）　Ｃ－１区の南部で検出された小穴である。中国産青磁碗（155）が出土した。

155は底部内面に環状の線刻とその内部に線刻文様を施している。底部外面には環状釉剝ぎがみられることから，14世紀後半から16世紀前半のものと考えられる（註8）。

ＳＰ242（第111図）　Ｃ－１区の南部で検出された小穴である。埋土上位より，釘（156）が出土した。

156は角釘である。



第104図　Ｃ地区第１面ＳＫ27出土遺物（1/6）

ＳＰ243（第111図）　Ｃ－１区の南部，ＳＰ242の東側で検出された小穴である。埋土より銅銭（157）が出土した。

157は北宋で1068年より鋳造された「熙寧元寶」である。

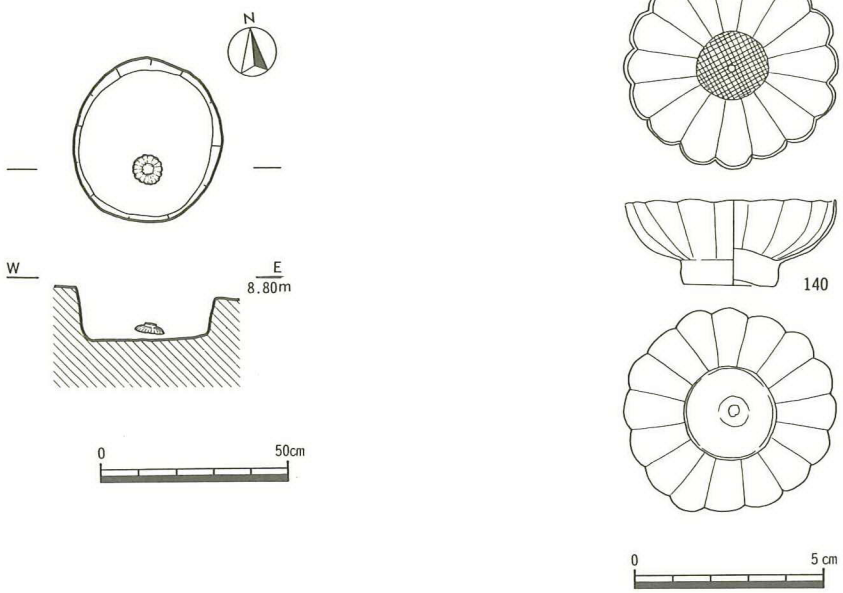
ＳＰ244（第111図）　Ｃ－１区の南部，ＳＰ243の東側で検出された小穴である。埋土上位より吹子の羽口の破片（158）が出土した。

ＳＰ245（第111図，図版30）　Ｃ－１区の南東部で検出された小穴である。瀬戸・美濃灰釉皿（159）が出土した。ほぼ完形である。

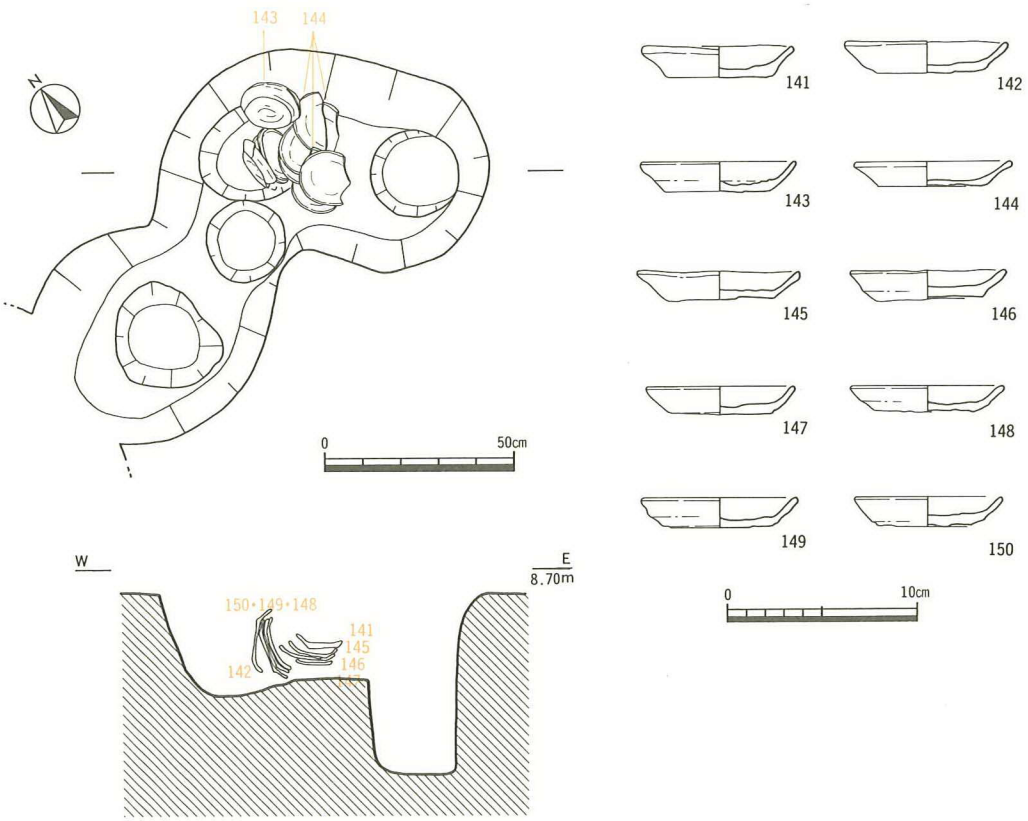
159は丸皿で，器高はやや低く，体部下方にはあまり丸味はなく，付高台は低く，小さい。内面には菊文様が押印される。このような器形の特徴から，大窯２～４段階，16世紀中葉から後半のものであると考えられる（註6）。

ＳＰ246（第111図）　Ｃ－１区の南東部，ＳＰ245の東側で検出された小穴である。土師質土器皿（160）が出土した。

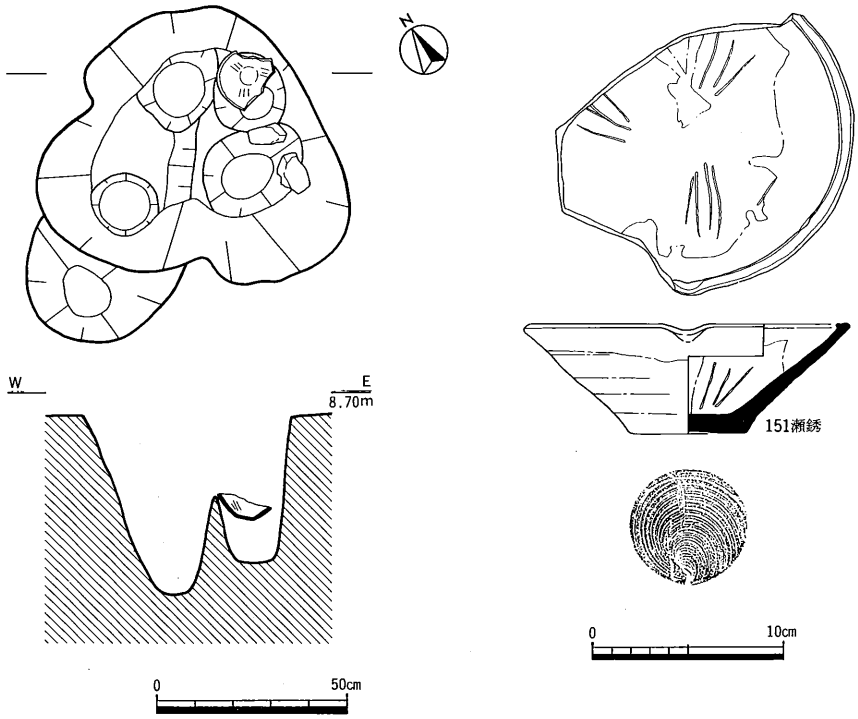
ＳＰ247（第111図）　Ｃ－１区の南東部，ＳＰ246の南側で検出された小穴である。鍬（161）



第105図　Ｃ地区第１面ＳＰ239平・断面図（1/20），出土遺物（1/2）



第106図　Ｃ地区第１面ＳＰ261平・断面図（1/20），出土遺物（1/4）



第107図　Ｃ地区第１面ＳＰ266平・断面図（1/20），出土遺物（1/4）

が出土した。

161はかなりの部分を欠損しているが，平面形は長方形で，幅10cm以上を測る。厚さは２㎜で，先端は丸くなっており，かなり使用したものと考えられる。

ＳＰ248（第111図）　Ｃ－１南拡張区のやや西寄り，ＳＤ04とＳＤ13の間で検出された小穴である。埋土上位から土師質土器皿（162），埋土下位から土師質土器鉢（163）が出土した。

ＳＰ249（第111図）　Ｃ－１南拡張区の中央で検出された小穴である。埋土上位から土師質土器皿（164）が出土した。口縁部破片であるが，内外面に化粧土がみられる。

ＳＰ250（第111図，図版32）　Ｃ－２区の西壁で検出された柱穴である。この柱穴からは柱（165）が出土した。

165は断面形は多角形で，径13.0cmを測る。芯持ち材で，周囲は荒削りのままで形は整えられていない。柱の端には斧で切り取られた痕がそのまま残る。樹種はモミ属の一種である。

ＳＰ251（第112図）　Ｃ－２区の西部，ＳＤ25の南側で検出された小穴である。埋土から刀子（166）が出土した。切先付近だけである。最大幅1.6cm測る。

ＳＰ252（第112図）　Ｃ－２区の西部，ＳＤ30と重複して検出された小穴である。この小穴からは柱が出土した。材はマツ属複維管束亜属の一種である。

ＳＰ253（第112図）　Ｃ－２区の北部で検出された小穴である。この小穴からは土錘（167）が出土した。有孔土錘である。

ＳＰ254（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ253の南側で検出された小穴である。柱が出土し

た。材はマツ属単維束管亜属類似種である。

ＳＰ255（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ254の南側で検出された小穴である。埋土から鎹（168・169），釘（170），不明鉄製品（171）が出土した。

ＳＰ256（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ255の西側で検出された小穴である。埋土から土師質土器皿（172）が出土した。

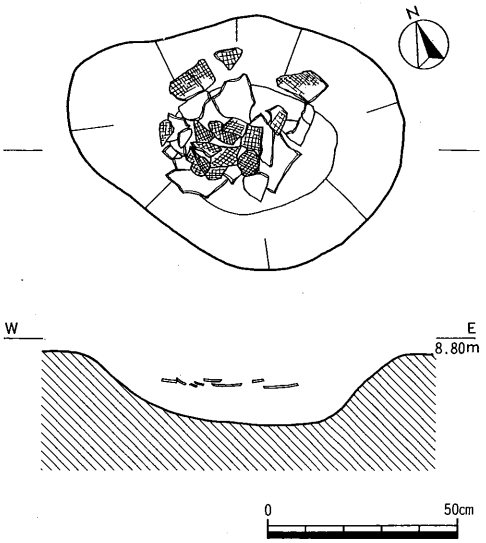
ＳＰ257（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ254の東側で検出された小穴である。埋土から土師質土器皿（173）が出土した。

ＳＰ258（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ257の南側で検出された小穴である。埋土から土師質土器皿（174）が出土した。

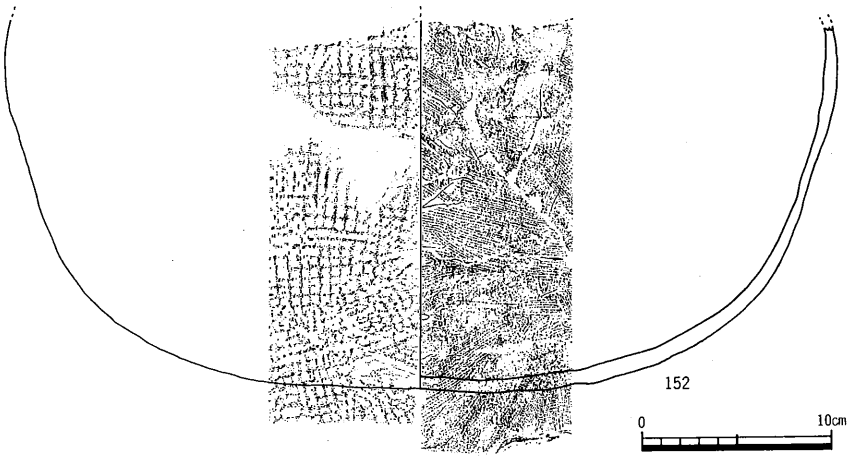
ＳＰ259（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ257の東側で検出された小穴である。埋土から土師質土器皿（175）が出土した。

ＳＰ260（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ258の南側で検出された小穴である。埋土から中国産染付皿（176），中国産青磁碗（177）が出土した。

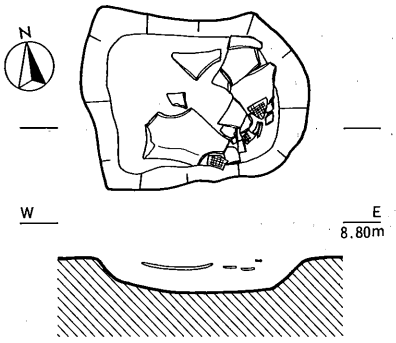
176は碁笥底で，内面に「寿」字を人形風に図案した人形寿字文が施されている。小野氏の分類のＣ群皿Ⅲ類にあたり，15世紀末から16世紀代のものであると考えられる(註13)。177は龍泉窯系青磁碗で外面には線描きによる蓮弁文が施されている。細線は蓮弁の単位を意識して，描かれる。上田氏分類のＢ－

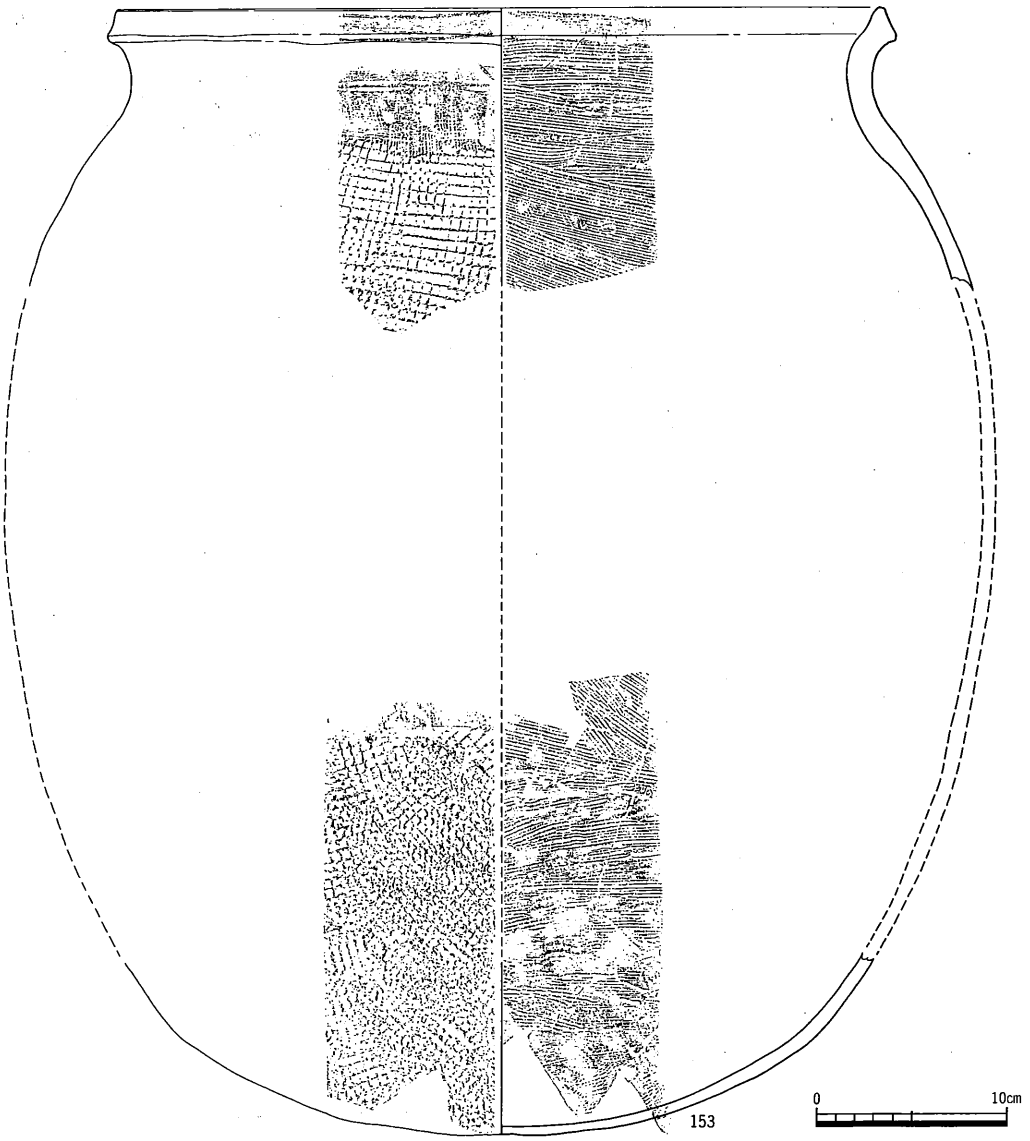


第108図　Ｃ地区第１面ＳＰ285平・断面図（1/20）

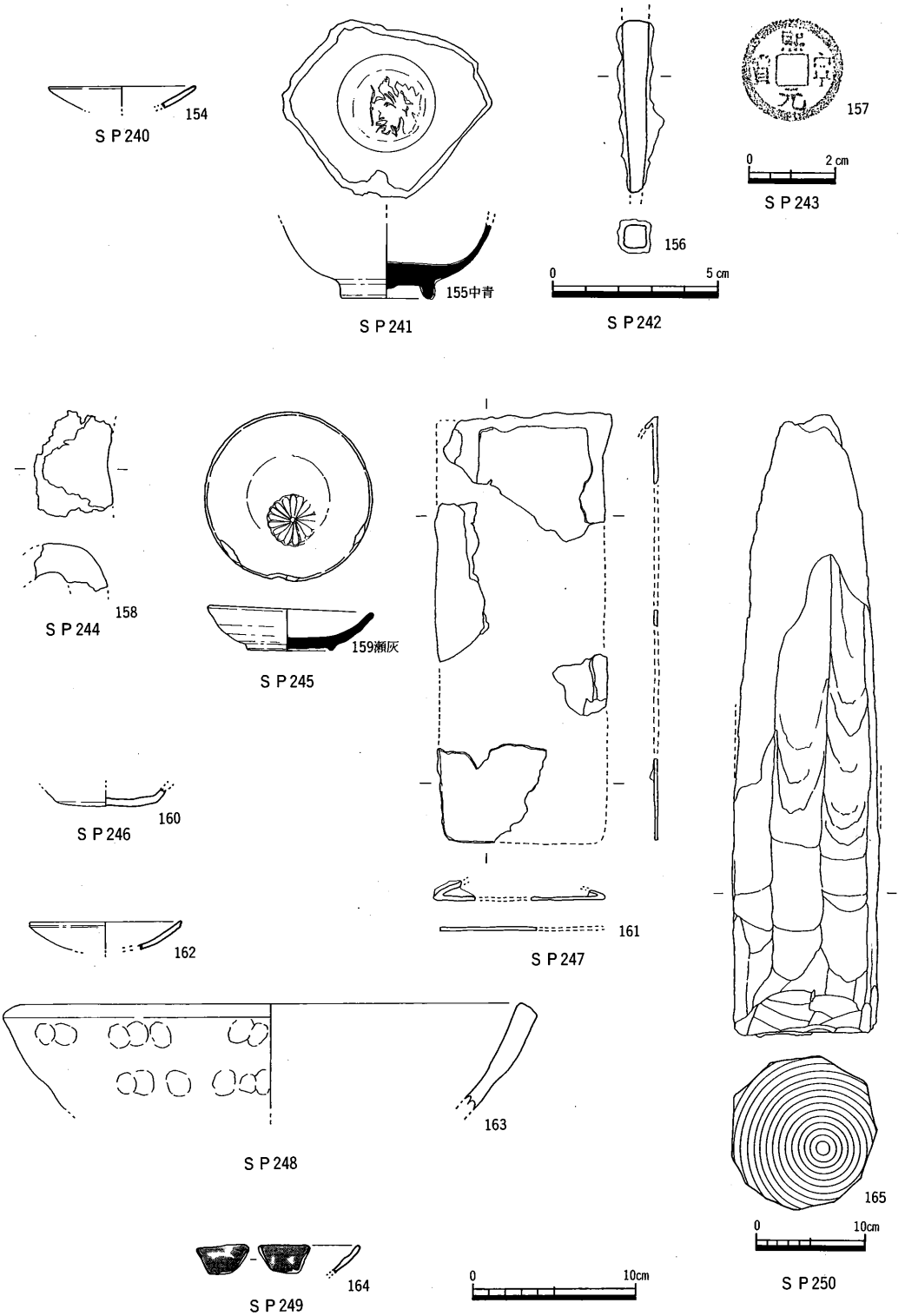


第109図　Ｃ地区第１面ＳＰ285出土遺物（1/4）

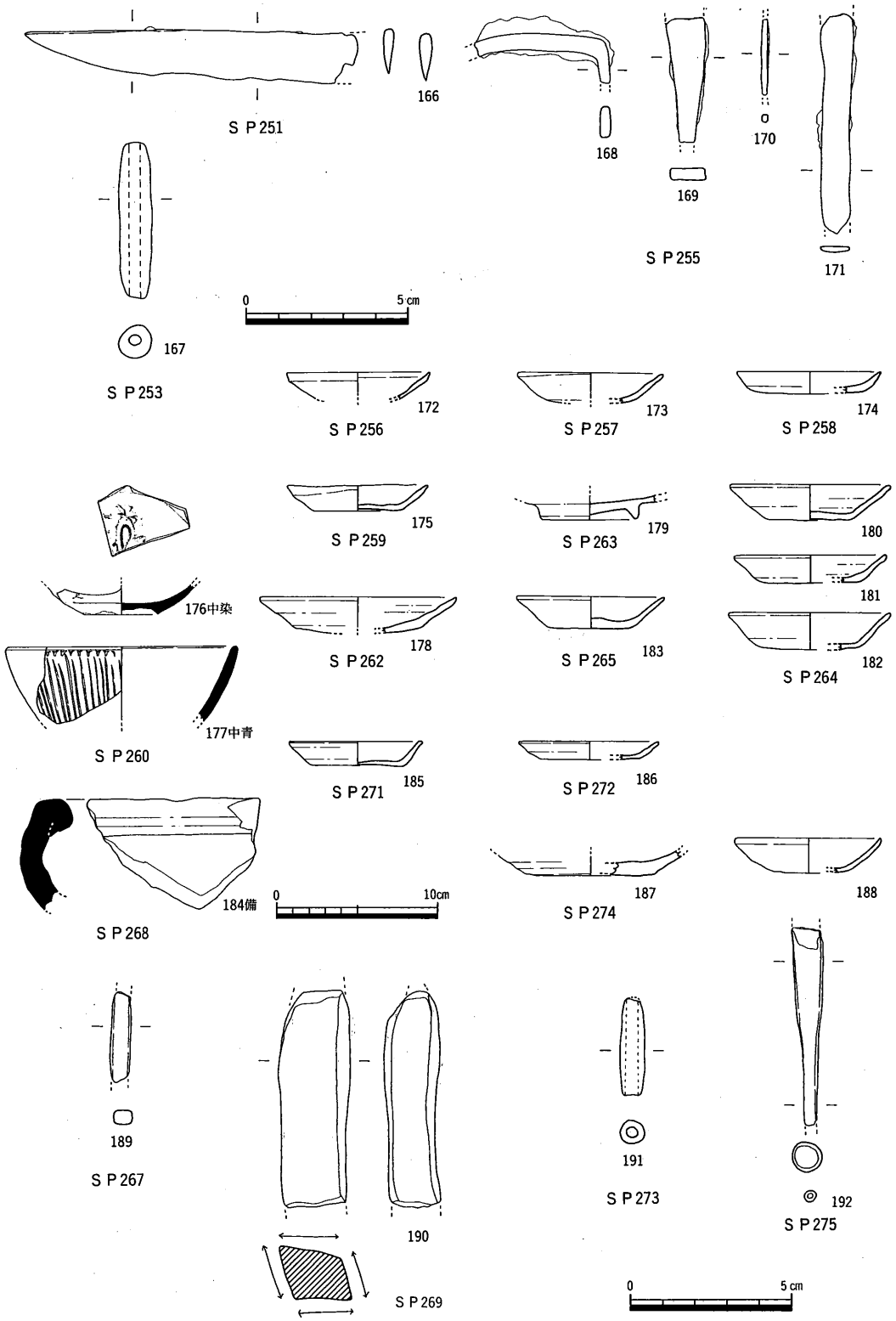




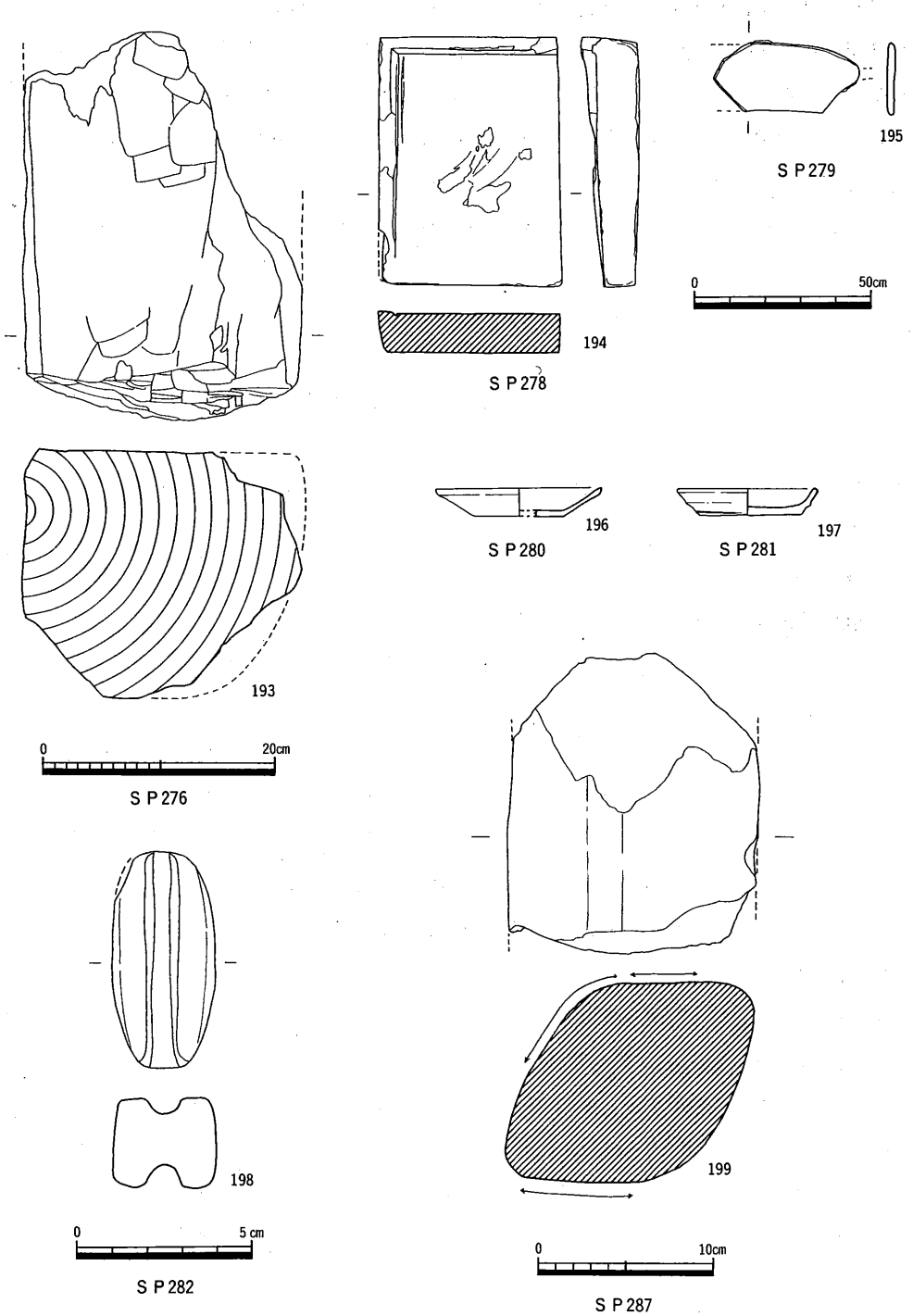
第110図　Ｃ地区第１面ＳＰ286平・断面図（1/20）　出土遺物（1/4）



第111図　C地区第1面S P 240～S P 250出土遺物（1/2，2/3，1/4，1/6）



第112図　C地区第1面S P251～S P275出土遺物（1/2，1/4）



第113図　C地区第1面S P276～S P287出土遺物（1/2，1/6，1/4）

IV類にあたり，15世紀後半から16世紀代のものであると考えられる（註8）。

ＳＰ261（第106図，図版32）　Ｃ－２区の北部中央で検出された柱穴である。柱穴は複数切り合っており，隣りの柱穴との新旧関係は不明である。ＳＰ261の平面形は円形で，径0.2m，深さ0.3mを測る。ＳＰ261の南東部から土師質土器皿（141～150）が10枚固まって出土した。おそらく南東方向に斜めに柱を抜き取ったあと，埋めたものであろう。皿は５枚ずつセットになって埋められており，142・143・148～150を口縁部を手前にして埋めたあと，141・144・145～147を埋めている。

141～150はいずれも口径８cm前後を測り，ほぼ同形のものである。また，底部の調整はいずれもヘラ切りである。

ＳＰ262（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ259の東側で検出された小穴である。埋土から土師質土器皿（178）が出土した。

ＳＰ263（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ259の東側で検出された小穴である。埋土から土師質土器器種不明（179）が出土した。

ＳＰ264（第112図，図版33）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ262の南側で検出された小穴である。埋土から土師質土器皿（180～182）が出土した。

ＳＰ265（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ262の南側で検出された小穴である。埋土から土師質土器皿（183）が出土した。

ＳＰ266（第107図，図版33）　Ｃ－２区の北東部で検出された柱穴である。柱穴は複数切り合っているが，隣りの柱穴との新旧関係は不明である。柱穴の平面形は円形で，径0.2m，深さ0.5mを測る。この柱穴の埋土中位付近から瀬戸・美濃錆釉鉢（151）が口縁部を上に向けた状態で出土した。おそらく柱が抜き取られたあと埋められたものであろう。

151は片口の擂鉢形小鉢で，口縁部の一部を欠損する。口縁部内外面には錆釉がかかる。内面には卸し目が３単位みられるが，かなり磨耗しており，よく使い込まれたことがうかがわれる。体部は直線的で，口縁部を内側に折り返し，水平方向に鋭く突出した突帯をもつことから，古瀬戸中期，14世紀前後のものであると考えられる（註10）。

ＳＰ267（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＤ44の北部で検出された小穴である。埋土から釘（189）が出土した。角釘である。

ＳＰ268（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ266の東部で検出された小穴である。埋土から備前焼甕（184）が出土した。口縁部の玉縁が丸くなっていることより，備前焼第III期，13世紀末から14世紀中葉のものであると考えられる（註３）。

ＳＰ269（第112図）　Ｃ－２区の北東部，ＳＤ51の東側で検出された小穴である。埋土から砥石（190）が出土した。４面を使用している。石材は中粒砂岩である。

ＳＰ270　Ｃ－２区の北部，ＳＤ44の北西部で検出された小穴である。柱の一部が出土した。

マツ属単維管束亜属類似種である。

ＳＰ271（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ260の南側に位置する小穴である。埋土から土師質土器皿（185），土師質土器片が２点出土した。

ＳＰ272（第112図）　Ｃ－２区の北部，ＳＰ271の南側に位置する小穴である。埋土から土師質土器皿（186）が出土した。

ＳＰ273（第112図）　Ｃ－２区の中央部，ＳＤ32の東側に位置する小穴である。埋土から土錘（191）が出土した。

ＳＰ274（第112図）　Ｃ－２区の中央部，ＳＰ273の東側に位置する小穴である。埋土から土師質土器皿（187）が出土した。

ＳＰ275（第112図）　Ｃ－２区の中央部，ＳＰ275の東側に位置する小穴である。埋土から土師質土器皿（188），煙管の吹口（192）が出土した。192は銅製である。

ＳＰ276（第113図）　Ｃ－２区の中央部，ＳＤ33の北側に位置する柱穴で，柱（193）が残存していた。柱は芯去り材である。一部欠損しているが，柱の断面形は二辺が直角に交わる扇形を呈する。柱の最大幅は24.9cmで，７寸５分を測る。下部は斧で切り取られたままで，加工は行なわれていない。樹種はマツ属複維管束亜属の一種である。

ＳＰ278（第113図）　Ｃ－２区の東部，ＳＫ15の南東側に位置する小穴である。埋土から硯転用砥石（194）が出土した。194は二辺に縁をもち，他の２辺には縁はみられない。かなり使用している。石材は結晶片岩系である。

ＳＰ279（第113図）　Ｃ－２区の中央部，ＳＤ35の北側に位置する小穴である。埋土から不明鉄製品（195）が出土した。

ＳＰ280（第113図）　Ｃ－２区の中央部，ＳＰ279の西側に位置する小穴である。埋土から土師質土器皿（196）が出土した。

ＳＰ281（第113図）　Ｃ－２区の中央部，ＳＫ17の北側に位置する小穴である。埋土から土師質土器皿（197）が出土した。

ＳＰ282（第113図）　Ｃ－２区の中央部，ＳＤ35の東部で，重複して検出された小穴である。新旧関係は不明である。埋土から土錘（198）が出土した。有溝土錘で，長さ6.3cm，幅2.9cmを測る。土錘の中でも大型のものである。

ＳＰ283　Ｃ－２区の南端で検出された小穴である。柱の一部が出土した。材はサクラ属類似種である。

ＳＰ284　Ｃ－２区の南端，ＳＤ05とＳＤ21の間で検出された小穴である。柱の一部が出土した。コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種である。

ＳＰ285（第109図，図版34）　Ｃ－２南拡張区の西部で検出された小穴である。平面形は不定楕円形を呈し，長軸0.9m，短軸0.7m，深さ0.2mを測る。この小穴の埋土中位から亀山焼甕

（152）の体部下半～底部の破片が出土した。

152の胎土はやや粗く，焼成は土師質である。

ＳＰ286（第110図，図版34）　Ｃ－２南拡張区の南部で検出された小穴である。ＳＤ77と重複するが，ＳＰ286のほうが新しい。平面形は不定方形を呈し，長辺0.6m，短辺0.5m，深さ0.1mを測る。埋土の上位からは亀山焼甕（153）の破片が出土した。

153は瓦質で，152に比べて堅緻である。

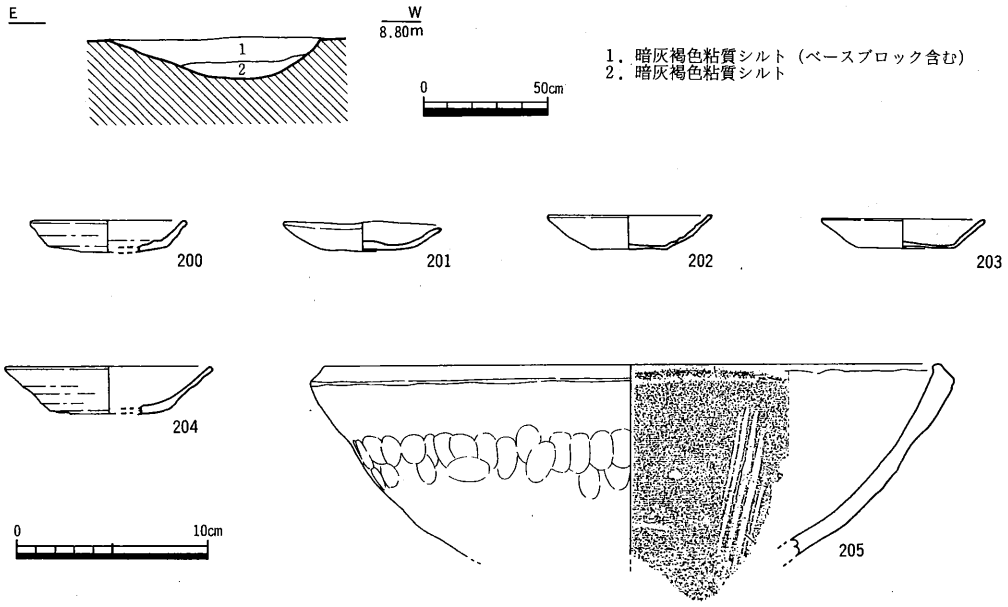
ＳＰ287（第113図）　Ｃ－２南拡張区の北端で検出された小穴である。埋土から砥石（199）が出土した。３面を使用している。石材は凝灰岩質流紋岩である。

ＳＰ288　Ｃ－２南拡張区の中央で検出された小穴である。柱の破片が出土した。材は広葉樹（環孔材）である。

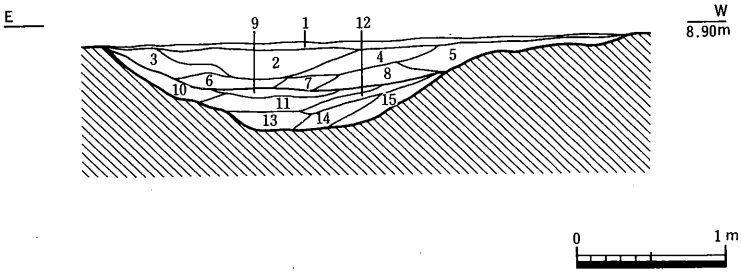
８）溝

ＳＤ01・02（第114図）　Ｃ－１区東端で検出された溝である。ＳＤ02は，ＳＤ03と平行して南北に延び，南端はＬ字状に屈曲して東に延びる。また北半部でＳＤ01が東に派生する。ＳＤ02は幅0.8m，深さ0.2m，南北溝の主軸の方向Ｎ－13°－Ｅを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルトである。ＳＤ01からは遺物は出土しなかった。土師質土器皿（200～204）・擂鉢（205），土師質土器皿・羽釜・土鍋，須恵器片，土壁と考えられる焼土塊がコンテナ１箱程度出土した。

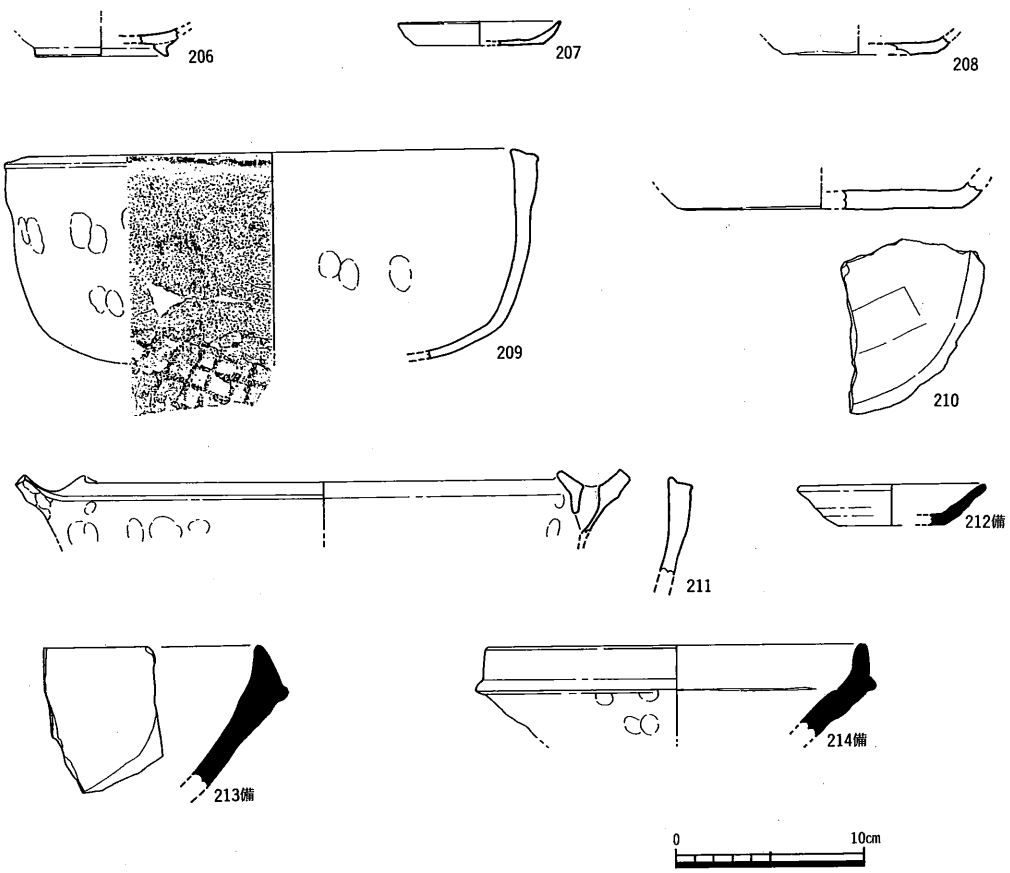
ＳＤ03（第115・116図，図版35）　Ｃ－１区東部で検出された溝である。南端はＳＤ05に合流する。幅3.5m，深さ0.6m，主軸の方向Ｎ－14°－Ｅを測る。掘り方の断面形は概ね逆台形状を



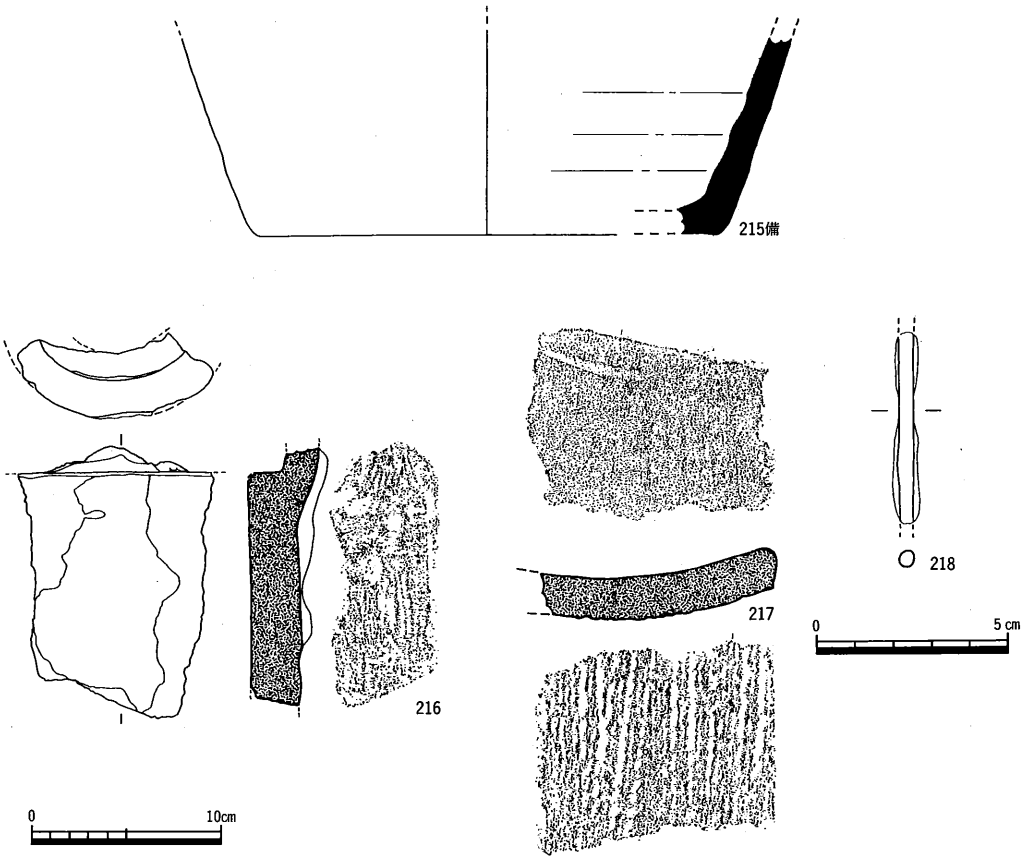
第114図　Ｃ地区第１面ＳＤ02断面図（1/30），出土遺物（1/4）



1．明灰褐色砂質シルト
2．淡灰褐色砂質シルト(炭化物含む)
3．灰褐色砂質シルト
4．灰褐色粘質シルト
5．灰褐色粘質シルト(ベースブロック含む)
6．暗灰褐色粘質シルト
7．暗灰褐色粘質シルト
8．灰褐色粘質シルト
9．灰褐色粘土(上面に鉄分沈着)
10．灰褐色粘土(砂混じり)
11．灰色粘土(植物遺体含む)
12．明黄灰色中砂
13．暗灰色粘土(植物遺体含む)
14．暗灰色粘土(植物遺体含む)
15．灰色粘土，黄灰色細砂ラミナー



第115図　C地区第1面SD03断面図 (1/50)，出土遺物〔1〕(1/4)

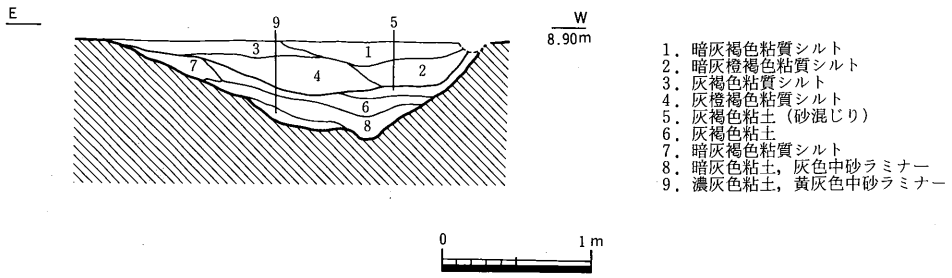


第116図　Ｃ地区第１面ＳＤ03出土遺物〔２〕(1/4，1/2)

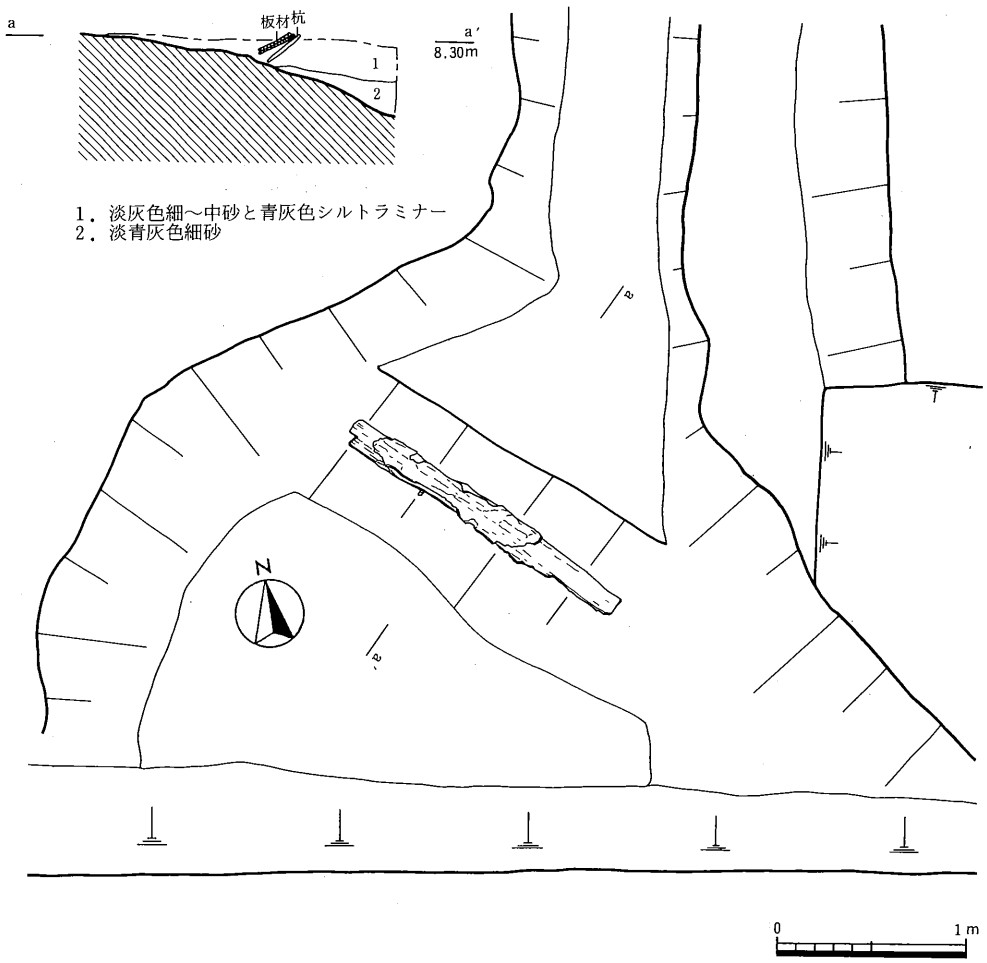
呈し，西肩は緩やかに掘り込まれ，テラス状を呈していた。このテラス部には柵ＳＡ01が打設されている。埋土は，上層（１～３層），中層（４～８層），下層（９～15層）に大別される。上層は灰褐色系砂質シルトが，中層は灰褐色系粘質シルトが，下層はグライ化した灰色系粘土がそれぞれ堆積していた。埋土からは黒色土器Ａ類埦（206），土師質土器皿（207・208）・羽釜（209・211）・擂鉢（210），備前焼坏（212）・擂鉢（213・214）・壺（215），丸瓦（216），平瓦（217），釘（218），動物遺存体（1389・1396・1410・1414）のほか，唐津鉄釉の小片１点，中国産白磁２点，中国産青磁１点が出土した。

212は備前焼坏である。備前焼第Ⅴ期のもので，16世紀前半から17世紀前半のものである。213・214は備前焼擂鉢である。口縁部下部が拡張され，突出することから，備前焼第Ⅳ期，14世紀後半から16世紀初頭のものであると考えられる(註３)。1389・1396・1410・1414は動物遺存体である。1389はウシまたはウマの上腕骨で，筋状の切傷がみられる。1396はニホンジカの脛骨である。1410・1414は不明である。

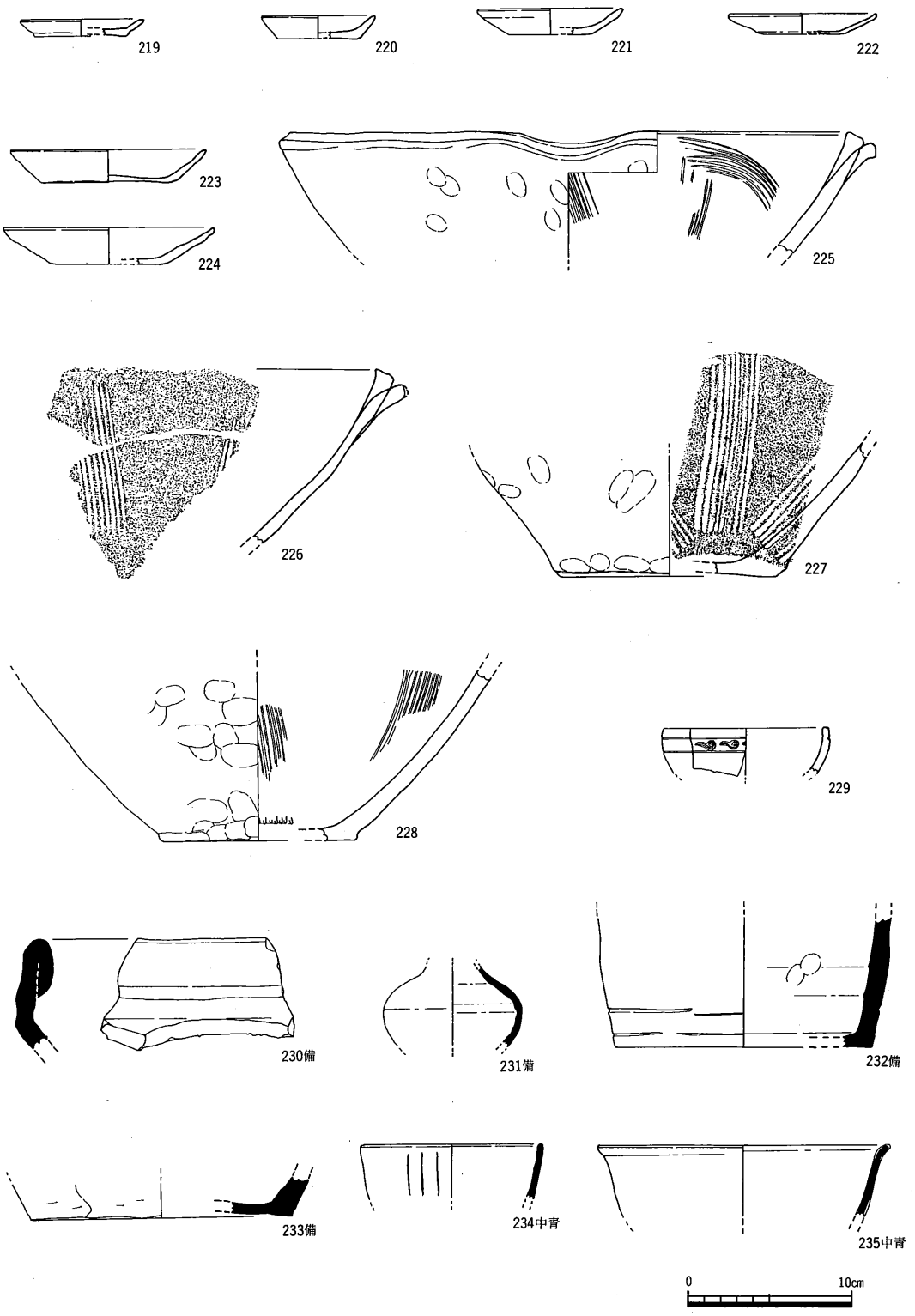
ＳＤ04（第117～120図，図版35～37）　Ｃ－１区中央部で検出された溝で，ＳＤ03の西９ｍに位置する。ＳＤ04の西側では畝溝群が検出されており，集落と畑とを区画する。幅2.5m，深さ



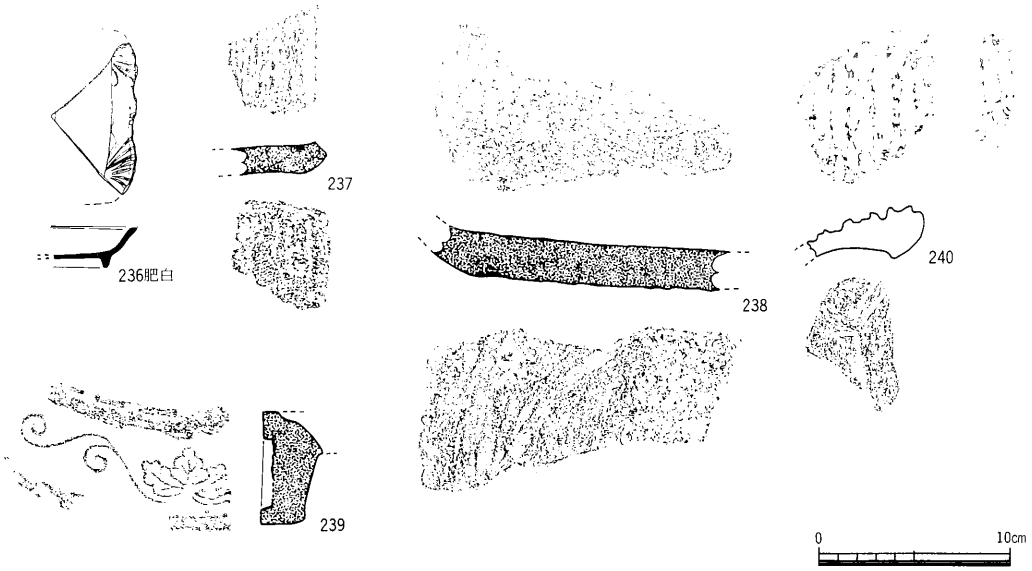
第117図　Ｃ地区第１面ＳＤ04断面図（1/50）

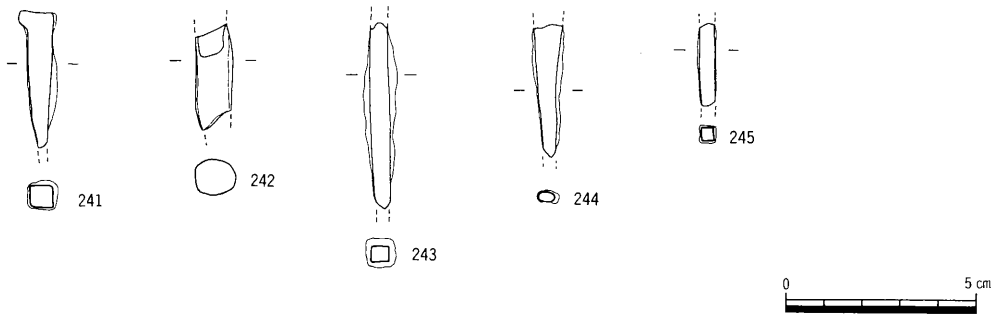


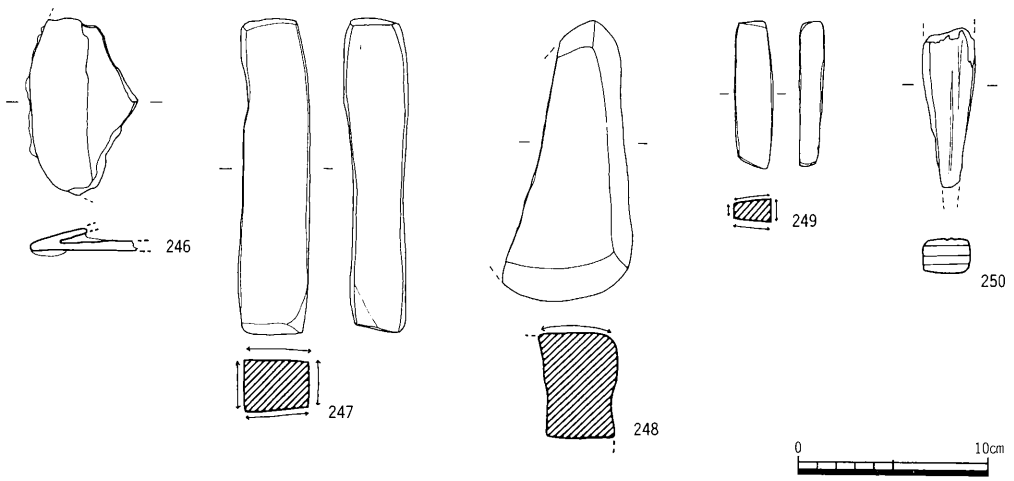
第118図　Ｃ地区第１面ＳＤ04堰状遺構平・断面図（1/40）



第119図　Ｃ地区第１面ＳＤ04出土遺物〔１〕(1/4)





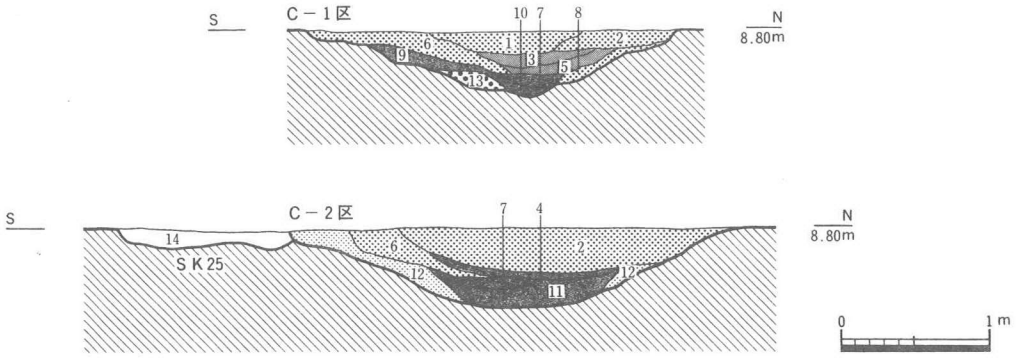


第120図　C地区第1面SD04出土遺物〔2〕(1/4, 1/2)

0.65m，主軸の方向N－12°－Eを測る。掘り方の断面形は概ねU字形を呈し，東肩に幅0.5mのテラスが巡る。埋土は，上層（1～4層）と下層（5～9層）に大別される。上層は灰褐色粘質シルト，下層は灰色系粘土及び中砂のラミナー堆積よりなる。また，埋土の一部は第1面よりも下層に堆積するものと同一であったことから，SD04は第1面形成よりも古い時期に掘られたことがうかがわれる。なお，C－1南拡張区南端では，平面形は袋状を呈し，堰状遺構が検出された。堰状遺構は，長さ1.7m，幅0.2m，厚さ2cmの板材2枚を重ねて，流路方向に直行させて据え，南側から杭数本を40°の角度で打ち込んで土留めとしたものである。なお，この杭はベース層まで達しておらず，溝底に若干の土砂が堆積した後に構築されたものと考えられる。板材は外皮の残る針葉樹系の板目板を使用している。また周囲には数本の杭が検出され，何らかの護岸設備が構築されていたものと考えられる。この堰状遺構の南側では，溝底のレベルは0.4～0.5m下がり，貯水池等の機能を有していたものと推定される。埋土から土師質土器皿（219～222）・坏（223・224）・擂鉢（225・226・227・228），瓦質土器鉢（229），備前焼甕（230）・壺（231・232）・不明（233），中国産青磁碗（234）・鉢（235），肥前白磁皿（236），平瓦（237・238），軒平瓦（239），土壁（240），釘（241・243～245）・鍬または鋤（246），不明鉄製品（242），砥石（247～249），不明木製品（250），動物遺存体（1409・1417・1421・1425・1430），土師質土器土鍋・羽釜片，亀山焼甕片，中国産白磁片1点などがコンテナ2箱程度出土した。

230は備前焼甕の口縁部である。口縁部の折り返しが幅広で，外面には凹線をもたないことから，備前焼第Ⅳ期，14世紀後半から16世紀初頭のものと考えられる(註3)。234は中国産青磁碗である。外面に細線の線描き蓮弁文を施すことから，上田氏の分類のB－Ⅳ類，15世紀後半から16世紀前半のものであると考えられる(註8)。235は中国産青磁鉢である。口縁部が外反することから，上田氏の分類のD－Ⅰ類，14世紀代のものであると考えられる。240は土壁である。堅く焼けており，縄目の痕やスサの痕がよく残る。247～249は砥石である。247・249の石材は凝灰岩質流紋岩で，248は讃岐山脈で産する細～中粒砂岩である。1409・1417・1421・1425・1430は動物遺存体であるが，動物の種類は不明である。

SD05（第121～131図，図版38～40）　C－1区からC－2区にかけて検出された溝である。C－2南拡張区の南端から北に向い（N－15°－E），C－2区の南部で西に直角に曲がり（E－15°－N），C－1区の中央部でSD04と合流する。南端は調査区外に続くため全体は不明である。幅2～3m，深さ0.4～0.5mを測り，調査区内での溝の長さは65mを測る。溝底の標高は南端部で8.12m，SD04との合流部で8.40mを測り，調査区内で0.28mの差がみられる。溝の埋土は上部に灰褐色粘質シルトが堆積し，下部に細砂・粘土が堆積する。また，C－2区の東部，SB15の排水溝SD70の北東側付近のSD05の南岸では径10～20cmの自然石が30個程度固まって出土した。おそらく人為的に置かれたものであろうが，性格については不明である。遺物は埋土の上位から下位まで含まれる。特に，C－2南拡張区のSY01付近で，溝の底面に貼りついた状態



1．灰褐色粘質シルト(炭化物を含む)
2．灰褐色粘質シルト
3．灰褐色砂質シルト
4．褐灰色粘土
5．暗灰褐色砂質シルト
6．淡灰褐色粘質シルト
7．灰褐色粘土(砂混じり)
8．明灰褐色粘質シルト(砂混じり)
9．明灰褐色粘土(砂混じり,炭化物を含む)
10．暗灰褐色粘土(砂混じり)
11．灰色粘土(砂混じり)
12．灰褐色細砂(粘土ブロック混じり)
13．灰色中砂
14．灰褐色細砂混じり粘土(SK25)

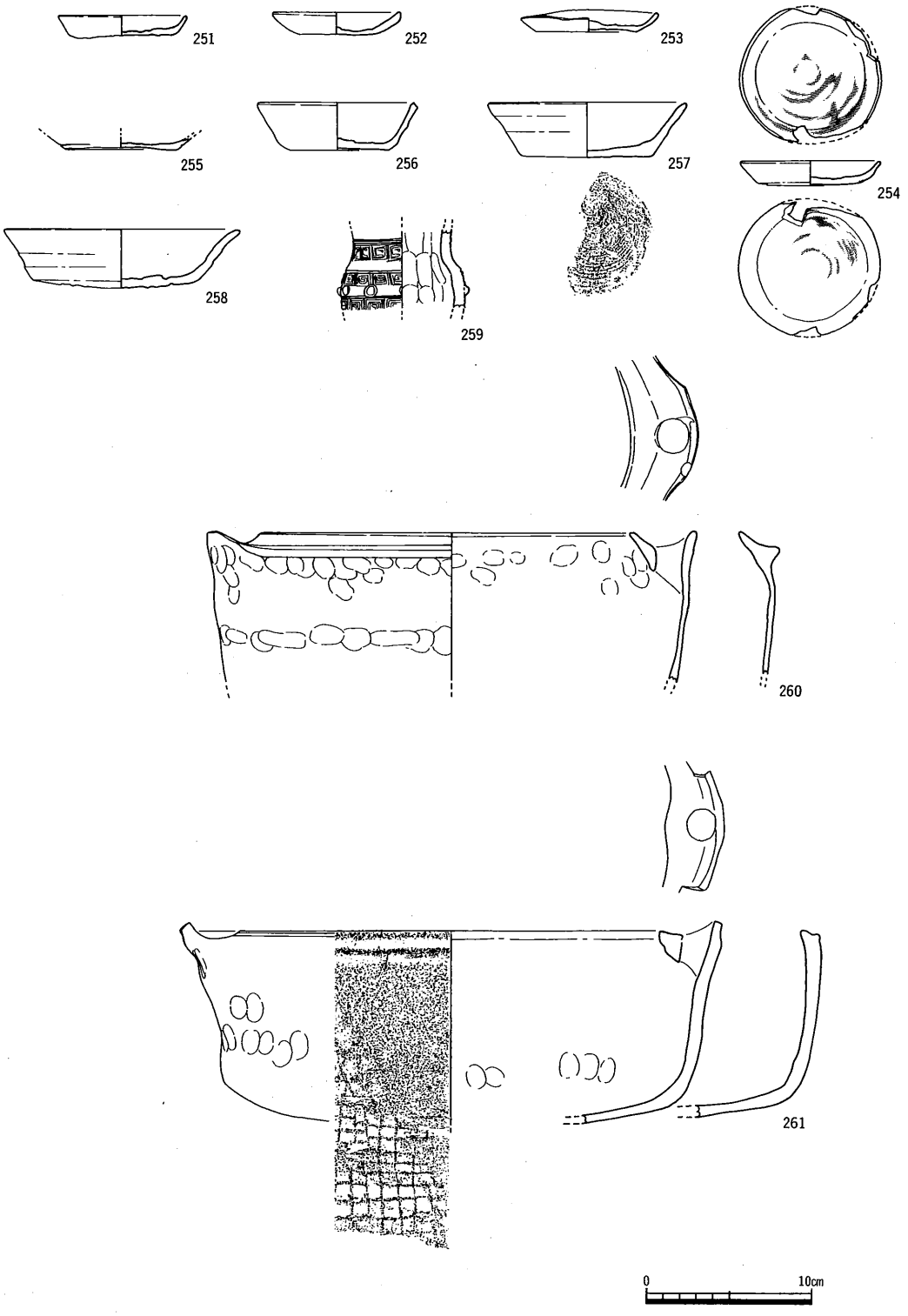
第121図　C地区第1面SD05・SK25断面図(1/50)

で数個体の土器が出土した。完形になる土器はみられないことから，捨てられたものであろう。土師質土器皿（251～255）・坏（256～258）・壺（259）・羽釜（260～265）・釜（266・267）・土鍋（268～270）・擂鉢（271～276），亀山焼甕（277・278），瀬戸・美濃鉄釉皿（279），瀬戸・美濃灰釉碗（280），備前焼擂鉢（281～284）・壺（285）・徳利（286～287）・甕（288～289），中国産青磁碗（290）・青磁皿（291）・白磁皿（292～294）・白磁碗（295）・染付碗（296・298）・染付皿（297）・褐釉壺（299），平瓦（300・301），金属製品の鍬または鋤（302），小刀の柄（303），釘（304・306～307），鎹（305）・銅銭（308），砥石（309），木製品の下駄（310・311）・漆塗椀（312～315）・形代（316）・部材（317）・楔（318）・板材（319）・杭（320），動物遺存体（1371・1397・1403・1405・1412・1416・1422），中国産白磁・青磁など，コンテナ10箱程度の遺物が出土した。

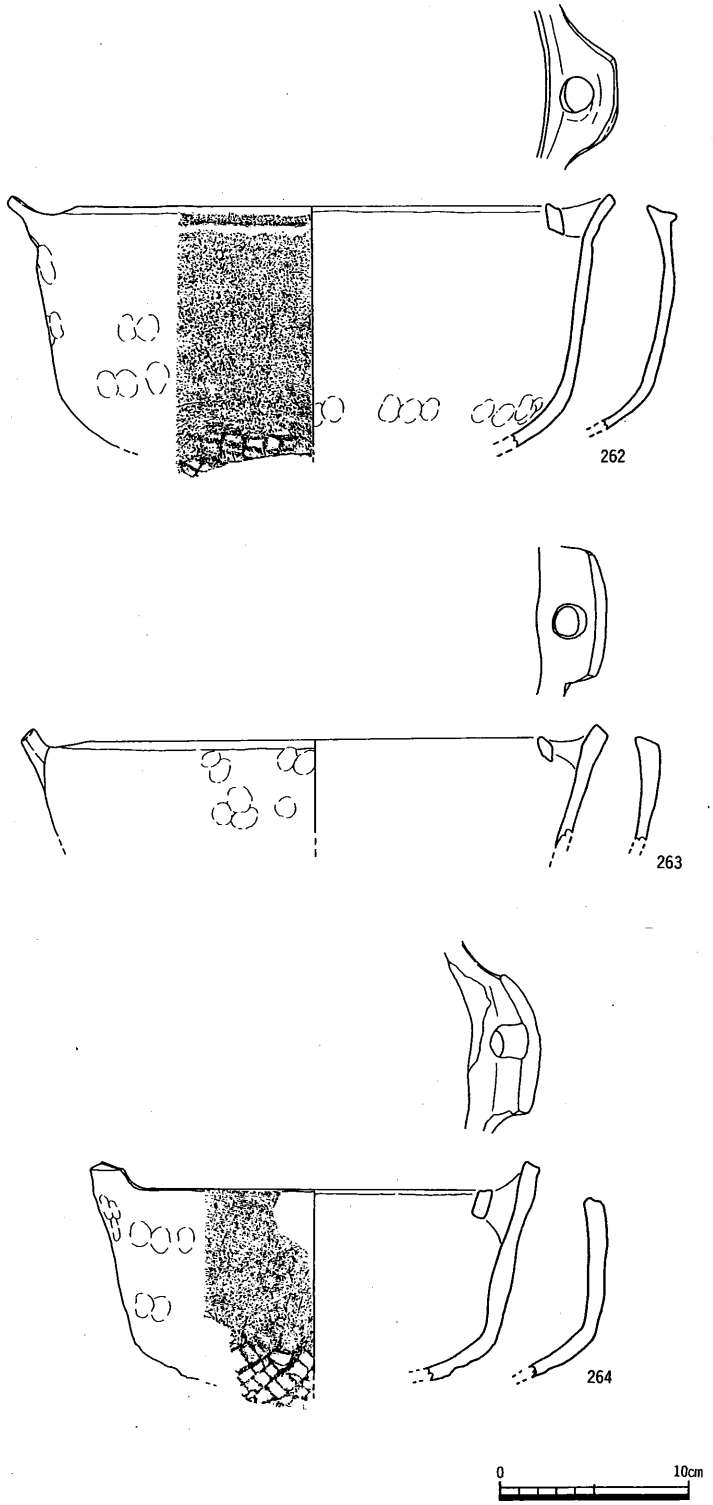
254は土師質土器皿である。漆と考えられる黒色の付着物がみられた。277・278は瓦質の亀山焼で，亀山焼の中でも非常に軟質である。279は瀬戸・美濃の鉄釉皿である。折縁皿で，この口縁部の形態から大窯4段階，16世紀中葉から後半のものであると考えられる(註6)。280は瀬戸・美濃の灰釉碗で，丸碗である。底部の形態から18世紀前半のものであると考えられる(註12)。281～284は備前焼擂鉢である。281は口縁部を欠損するが，卸目の幅が2.2cmとやや広いことから，備前焼第IV期で，14世紀後半から16世紀初頭のものであると考えられる(註3)。282・283は口縁部外面を上下に拡張し，凹線が2～3本みられる。また，内面の卸目は幅広く，縦方向だけでなく，斜め方向にも施されることから，備前焼第V期，16世紀前半から17世紀前半のものであると考えられる。284も卸目が斜め方向にも施され，底面にもみられることから，備前焼第V期，16世紀前半から17世紀前半のものであると考えられる。288は備前焼甕である。口縁部片であるが，口縁部

を折り返し，外面に弱い凹線が2本程度みられることから，備前焼第IV期，14世紀後半から16世紀初頭のものであると考えられる。290は中国産青磁碗である。龍泉窯系で，底部内面に陰刻がみられる。底部外面の釉を環状に剝ぎ取ることなどから，14世紀後半から16世紀前半のものであると考えられる（註8）。291は中国産青磁皿である。龍泉窯系のもので，290と同様に底部外面の釉を環状に剝ぎ取ることから，14世紀後半から16世紀前半のものであると考えられる。292～294は中国産白磁皿である。端反り皿である。293は森田氏の分類のE群で16世紀代のものである。292・294は畳付が無釉であることから，森田氏の分類のE－2 b群にあたる。292～294は16世紀代のものである（註7）。295は中国産白磁碗である。口縁部は端反りし，体部下半から底部は無釉である。これも森田氏の分類のE群にあたり，16世紀代のものであると考えられる。296～298は中国産染付碗・皿である。296・297は陶質で，黄味を帯びた白色の胎土をもち，底部は平らで，高台部から体部下半は露胎である。小野氏の分類のA群，上田氏の分類の碗B－V類にあたり，16世紀末のものであると考えられる。298は口縁部破片であるが，296・297同様胎土はやや粗いが，296・297に比べ焼きは良く，磁器である。16世紀末のものであると考えられる。299は中国産褐釉壺である。14～15世紀代のもので，内外面に鉄手を塗布している。303は小刀の柄である。柄は銅製であるが，内側に鉄製の小刀の茎が残る。304～306は角釘で，307は丸釘である。308は銅銭である。北宋の皇宋通寶で，鋳造の開始は1039年である。309は砥石で，四面とも使用している。石材は本遺跡の15km程西方の高松市の西部から坂出市の東部の五色台で産する含ザクロ石流紋岩製である。310は広葉樹（環孔材）製の下駄で，板目取りのものである。長さは20.1cmである。足形の摩滅痕より左足用に用いたものであることがわかる。前壺を台の中央，前歯の外側にあけ，後壺を後歯の前にあけている。歯は欠損しているが，鋸で挽いた連歯下駄であることがわかる。311はクリ製の下駄で，板目取りのものである。長さは20.3cmであるが，縦半分欠損しており，幅は不明である。前壺の位置が中央よりやや右であることと，足形部分が摩滅・炭化していることより左足用であることがわかる。前端の平面形は半円形で，前壺は歯の外側，後壺は後歯の前にあけており，後壺は鑿で十字に穿っている。歯は欠損しているが，鋸で挽いた連歯下駄であることがわかる。312～315は漆塗椀である。312・313は底部の厚さは2cm程度で分厚く，314・315は0.7cmと薄い。いずれも漆の付着がかすかに認められる。312はクリ製の漆塗椀で，横木地である。内面は剝落が激しいが，外面は黒色漆，内面は赤色漆が塗っている。313はクリ製の漆塗椀で，横木地である。外面は黒色漆が塗られているが，内面は漆が残っていないため不明である。314はクリ製の漆塗椀である。外面は漆が残っていないため不明であるが，内面は赤色漆を塗られている。315はクリ類似種製の漆塗椀で，横木地である。外面は黒色漆が塗られているが，内面は漆が残っていないため不明である。316は形代で，立体人形である。頭部先端は一部欠損する。スギ類似種の一木作りで，縦木地である。頸部が削り込まれ，頭部が表現されている。正面は顔が表現されており，目は刳り貫かれ，耳はまわりを彫り込んで浮き彫りにし，えぐりを入れて顎

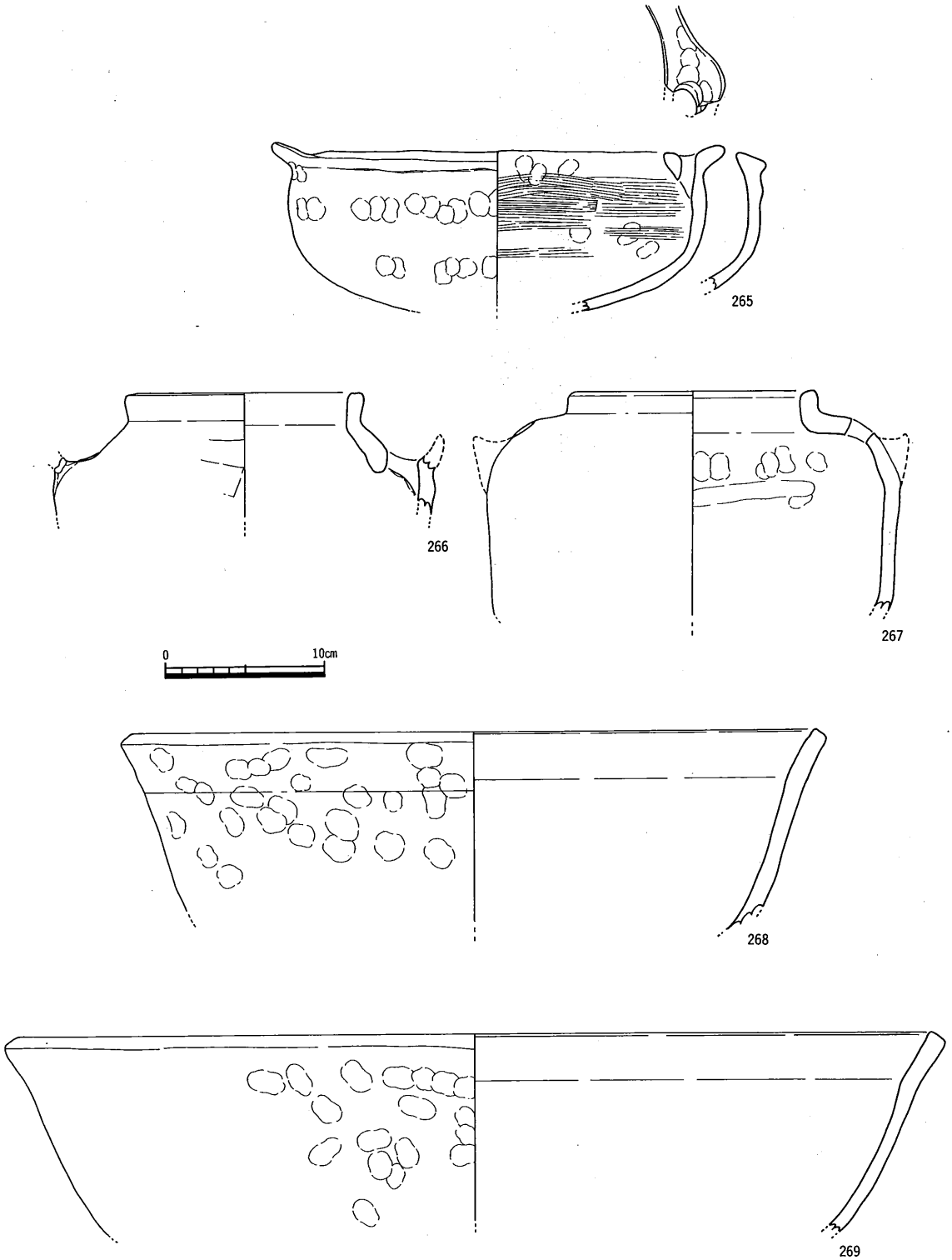
第122図　C－2南拡張区第1面SD05遺物出土状況（1／30）



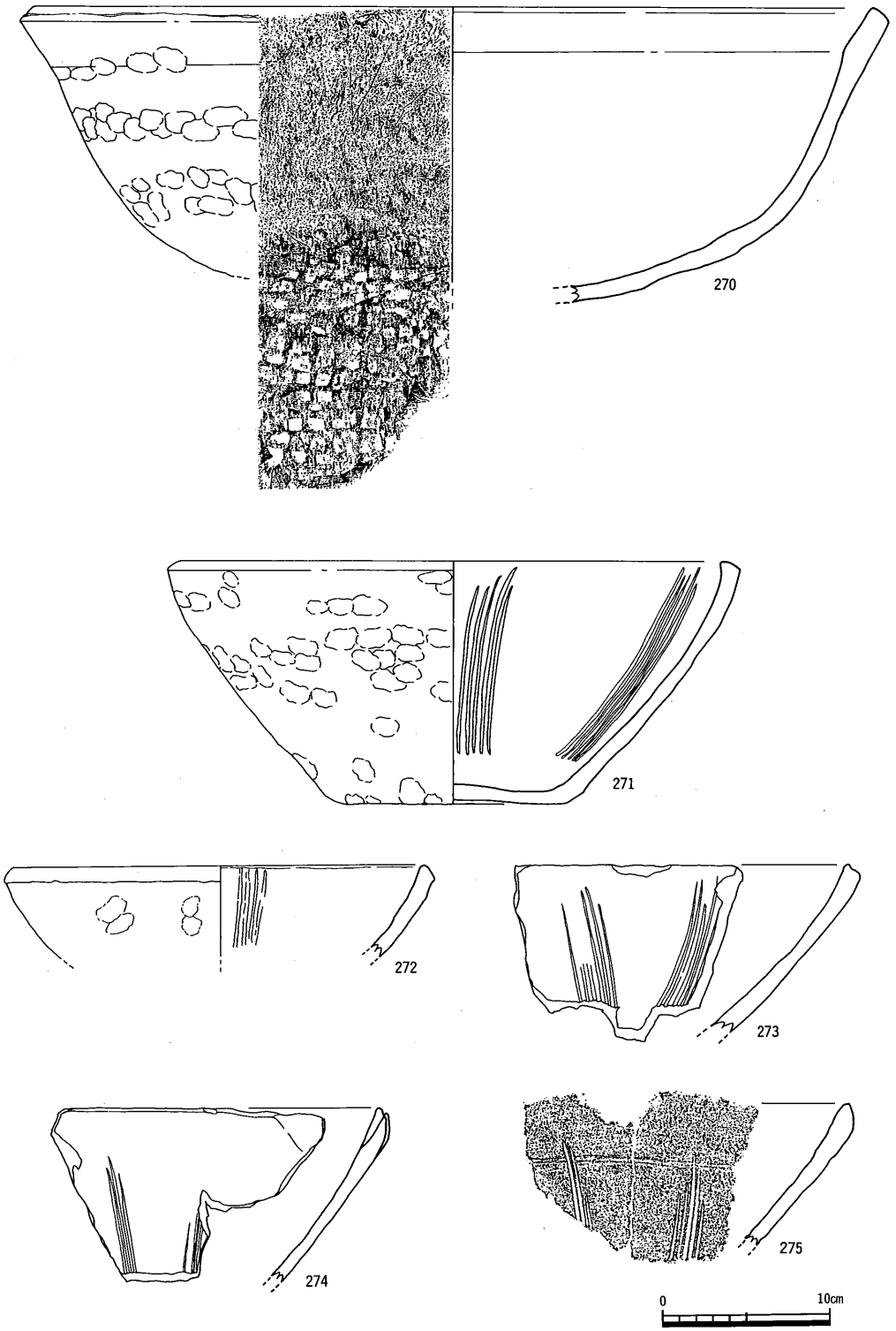
第123図　C地区第1面SD05出土遺物〔1〕(1/4)



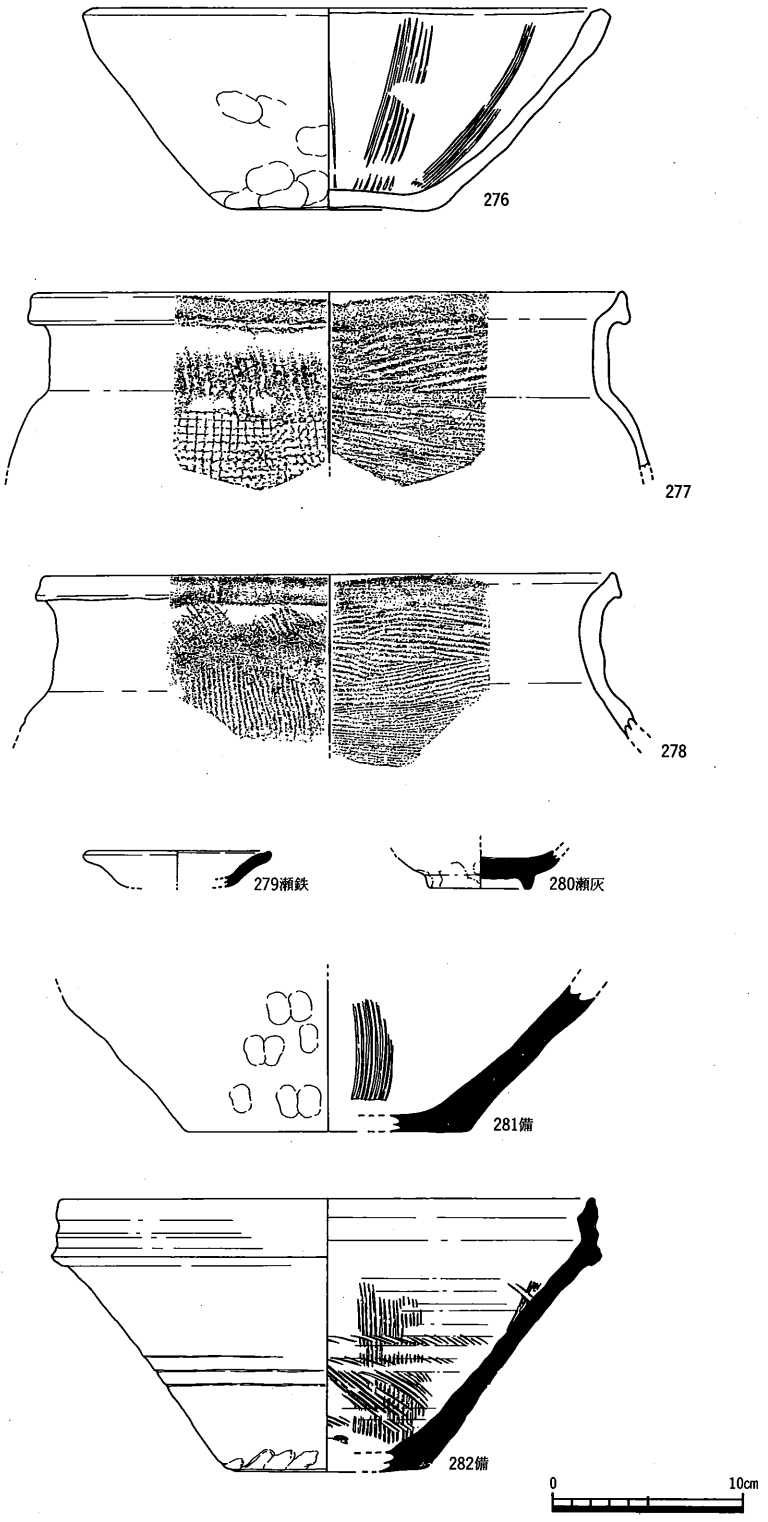
第124図　Ｃ地区第１面ＳＤ05出土遺物〔２〕(1/4)



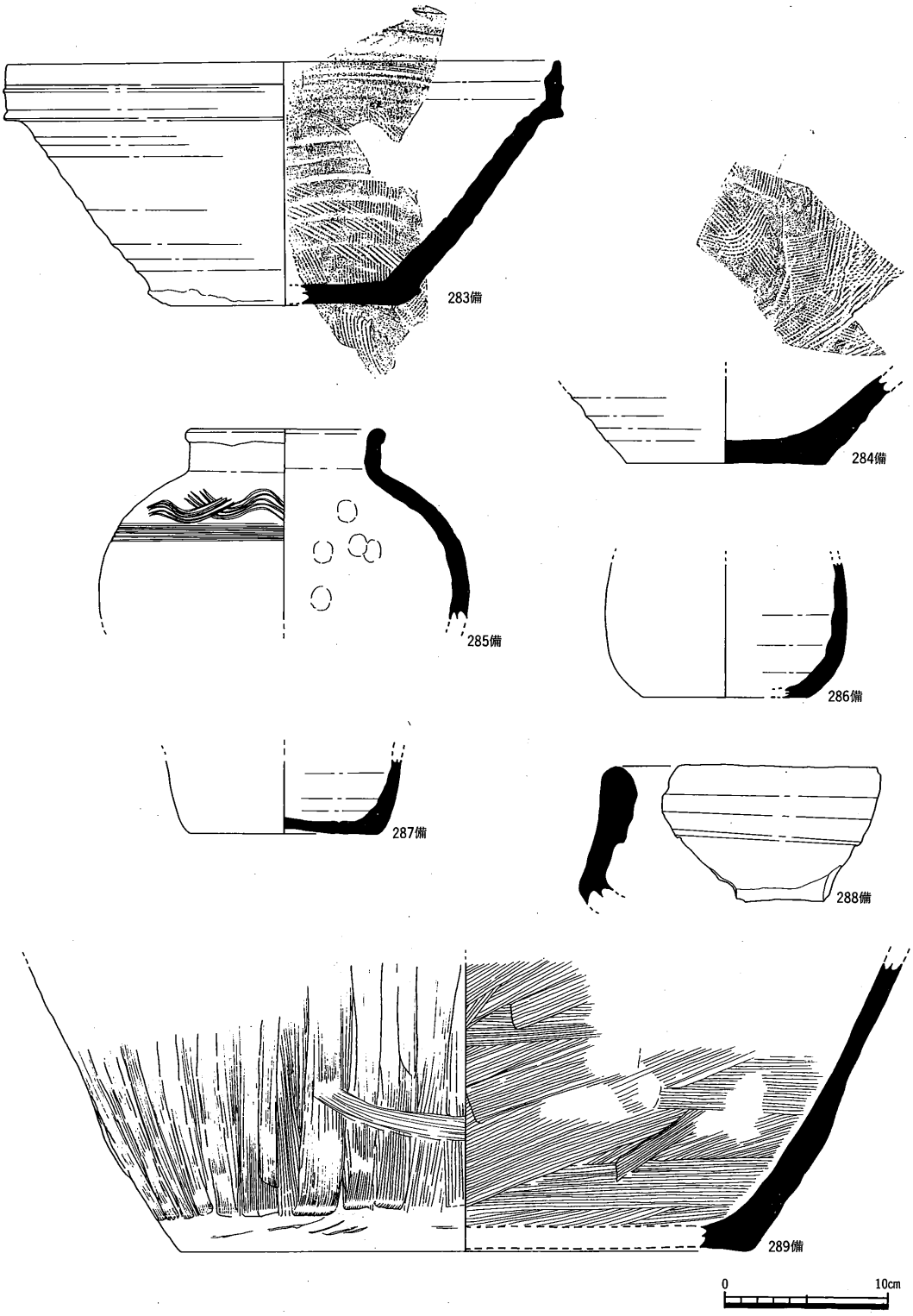
第125図　C地区第1面SD05出土遺物〔3〕(1/4)



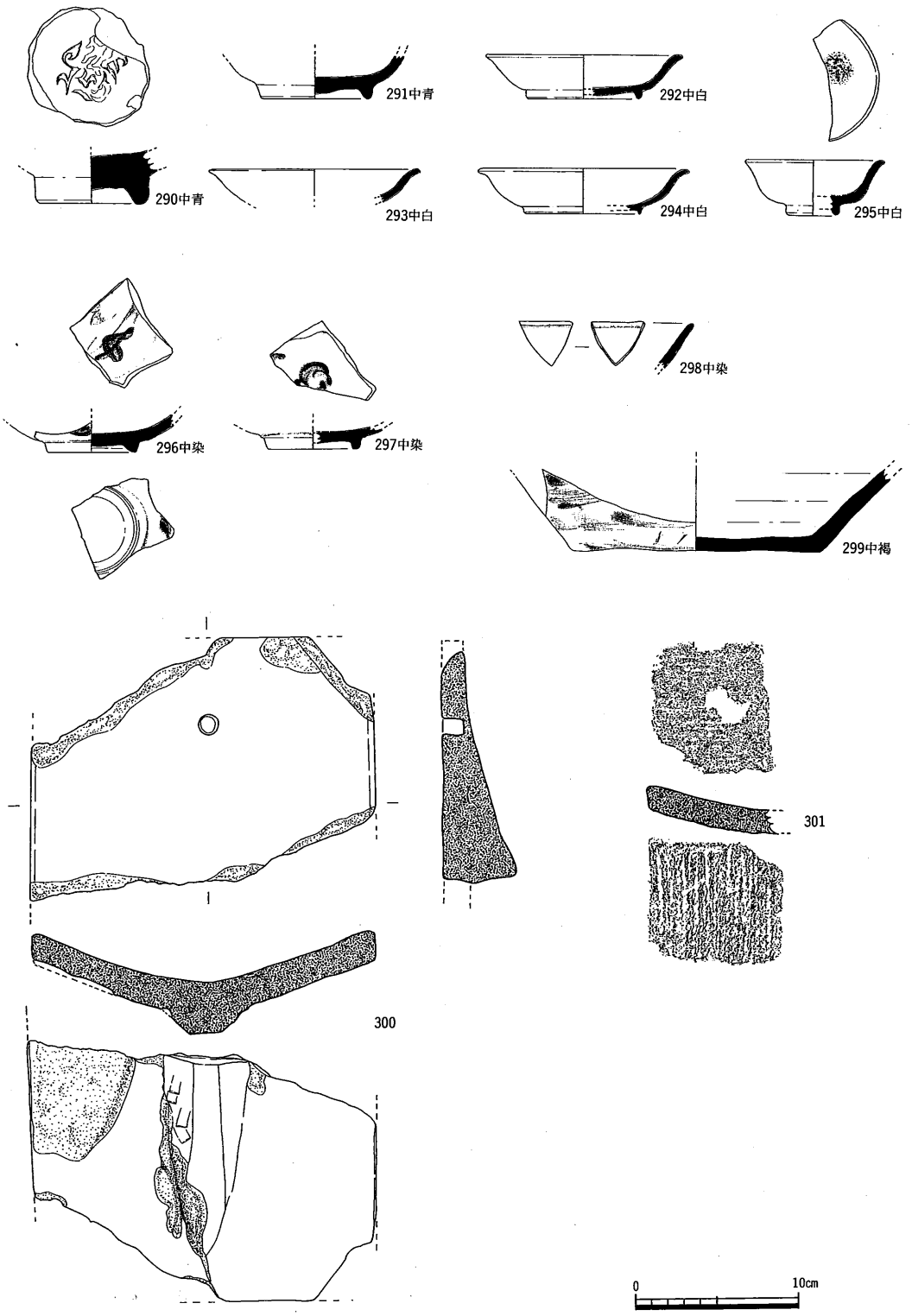
第126図　Ｃ地区第１面ＳＤ05出土遺物〔４〕(1/4)



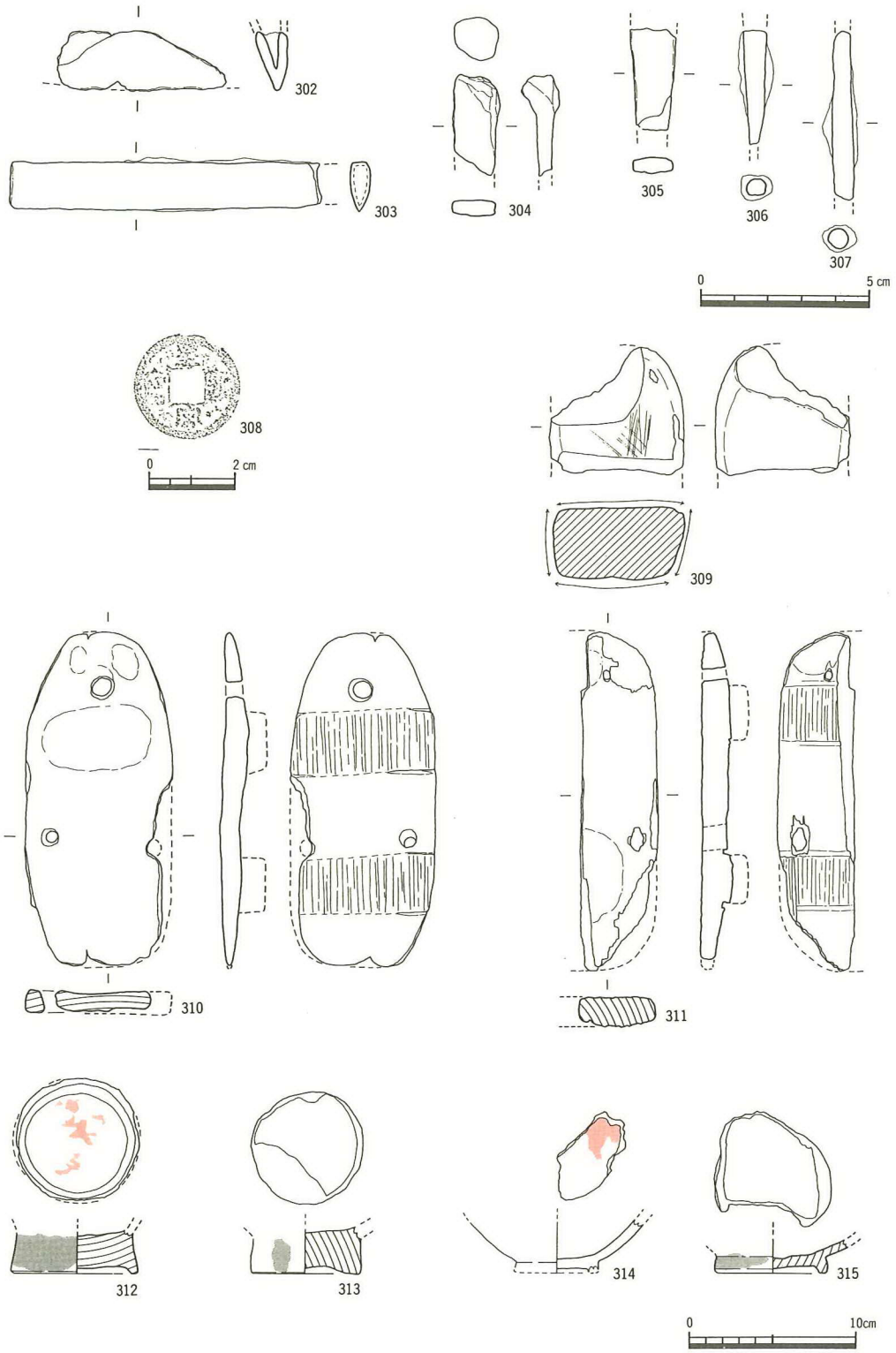
第127図　C地区第1面SD05出土遺物〔5〕(1/4)



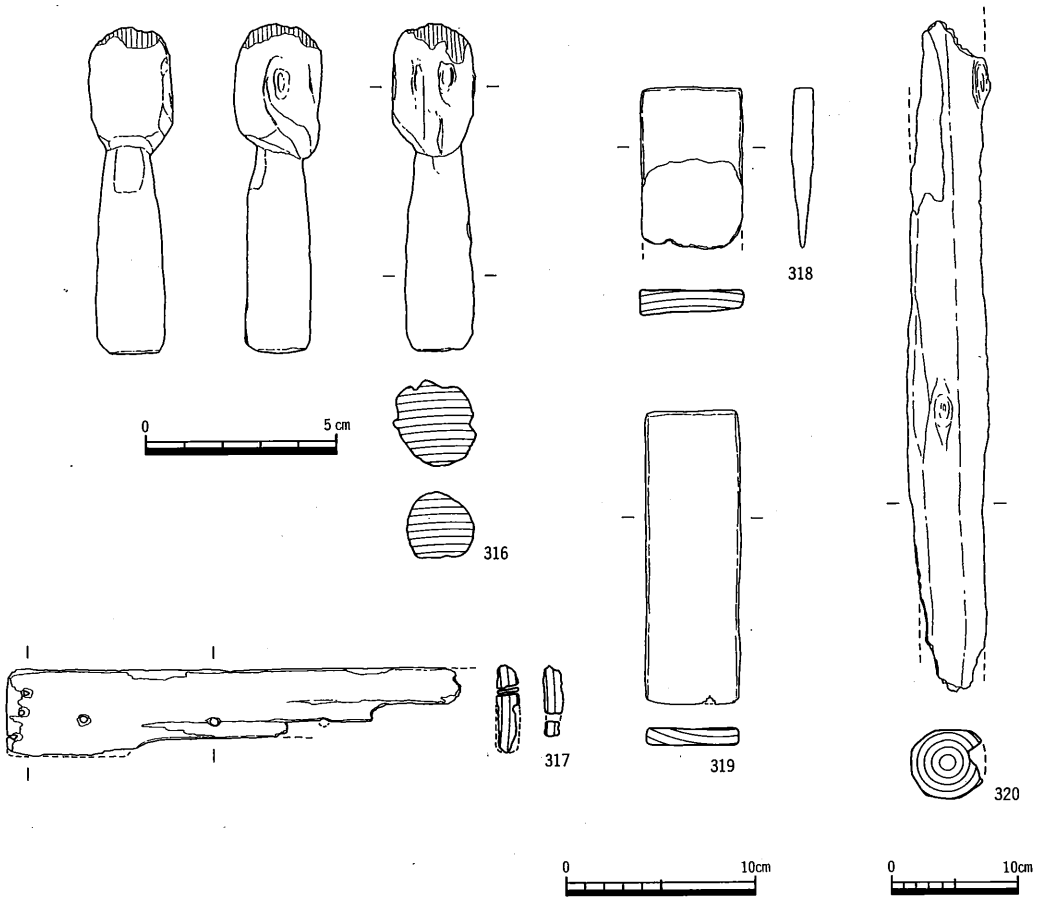
第128図　Ｃ地区第１面ＳＤ05出土遺物〔６〕(1/4)



第129図　C地区第1面SD05出土遺物〔7〕(1/4)



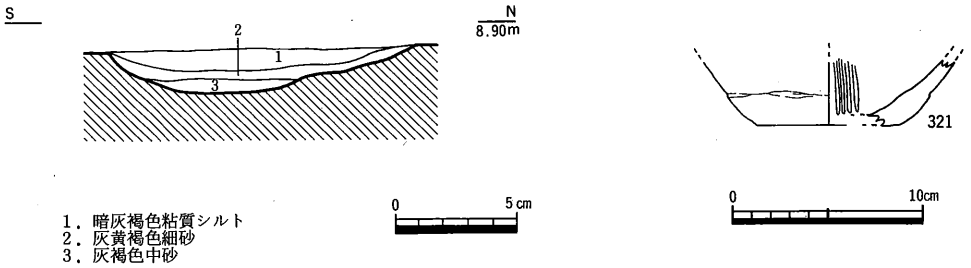
第130図　Ｃ地区第１面ＳＤ05出土遺物〔８〕(1/2，2/3，1/4)



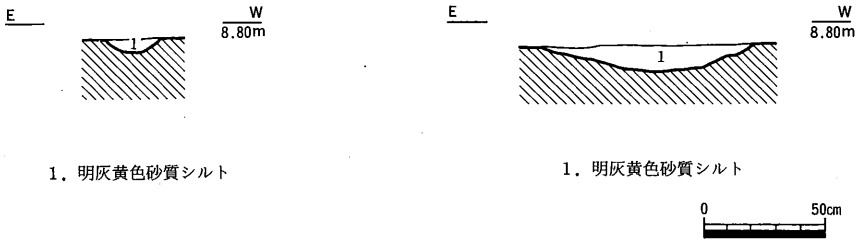
第131図　C地区第1面SD05出土遺物〔9〕(1/2, 1/4, 1/6)

が表現されている。317は部材である。スギ類似種製で，板目板を用いる。横半分を欠損しているが，おそらく容器の台脚であろう。下端の中央部には弧状に抉りを入れて脚を作り出している。右端には縦に穴を3個穿っており，いちばん上の穴には木釘が差し込まれていた。これは別の部材との接合のために穿たれたものであろう。また，横にも3個釘穴が並んでいるが，おそらくこれは底板を支えるためのものであると考えられる。318は樹種はスギである。1371・1397・1403・1405・1412・1416・1422は動物遺存体である。1371はイシガイ科殻皮である。1397はニホンジカ踵骨で，白色灰化している。1403・1405・1412・1416・1422は動物の種類は不明である。1403・1412・1416は灰化している。

SD06（第132図）　C－1区中央部で検出された溝で，SD05と平行して東西に延びる。東端はSD03と，西端はSD04と合流する。SD05との切り合い関係は不明瞭だが，埋土が近似することから同時併存していたものと思われる。幅1.2m，深さ0.3mを測り，掘り方の断面形は浅い皿状を呈する。埋土は，上層（1層）と下層（2・3層）に大別される。上層は暗灰褐色粘質シルト，下層は灰黄褐色細砂及び灰褐色中砂よりなる。遺物は瓦質土器擂鉢片（321）のほか土師質土器皿片，備前焼片が数点出土した。



第132図　C地区第1面SD06断面図(1/30)，出土遺物(1/4)



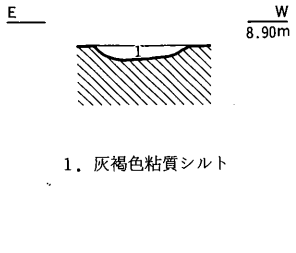
第133図　C地区第1面SD07断面図(1/30)　第134図　C地区第1面SD08断面図(1/30)

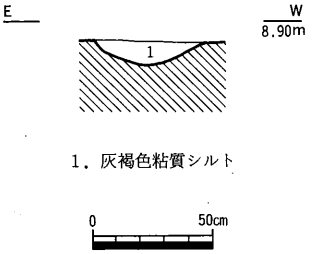
SD07（第133図）　C－1区西部で検出された小溝で，SD04に平行して直線状に南北に延びる。また南端はSE03に切られる。幅0.2m，深さ0.1m，主軸の方向N－11°－Eを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は明灰黄褐色砂質シルトの単層である。遺物は土師質土器皿片が数点出土した。

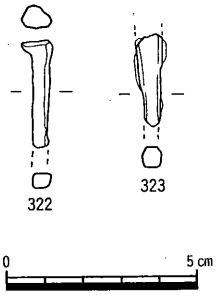
SD08（第134図）　C－1区西部で検出された溝で，SD04に平行して直線状に南北に延びる。幅0.8m，深さ0.3m，主軸の方向N－11°－Eを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は明灰黄色砂質シルトの単層であった。埋土から土師質土器皿・羽釜片，瓦質土器片，須恵器片が数点出土した。なお、SD04との間は3.1mを測り，顕著な遺構は認められないことから通路として利用されていたと推定される。

SD09・10（第135・136図）　C－1区中央部のSD03～05に囲まれた区画内で検出された小溝で，直線状に南北に延びる。南端はSD06の北4～5mで途切れ，北端は調査区外に延びる。いずれも幅0.4m，深さ0.1mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。なお，溝の両脇には柵列SA01～03がみられ，内側には柱穴群が検出されたことから，建物の雨落ち溝的な性格を有すると思われる。SD09からは土師質土器皿片が数点，SD10からは釘（322・323），土師質土器皿片，須恵質土器片，瓦質土器片，亀山焼片が数点出土した。

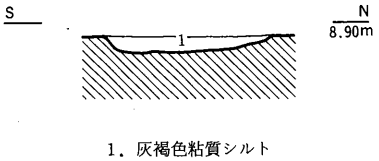
SD11（第137図）　C－1区東半部で検出された小溝で，SD05の南側をクランク状に延びる。幅0.7m，深さ0.1m，検出長5.3mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。遺物は土師質土器皿片が数点出土した。

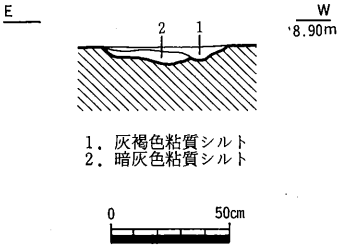


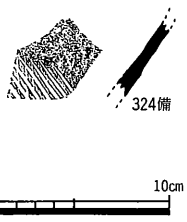




第135図　C地区第1面SD09断面図（1/30）　第136図　C地区第1面SD10断面図（1/30），出土遺物（1/2）





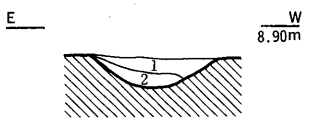


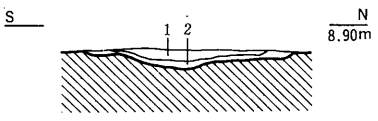
第137図　C地区第1面SD11断面図（1/30）　第138図　C地区第1面SD12断面図（1/30），出土遺物（1/4）

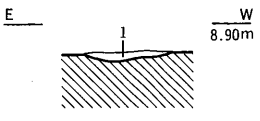
SD12（第138図）　C－1区東半部で検出された小溝で，SD05より派生して南に延びる。幅0.5m，深さ0.05m，主軸の方向N－11°－E，検出長3mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトからなる。遺物は備前焼擂鉢（324），土師質土器皿片，亀山焼甕片が数点出土した。

324は卸目が斜め方向にもみられることより，備前焼第Ⅴ期，16世紀前半から17世紀前半のものと考えられる(註3)。

SD13（第139図）　C－1区中央部で検出された溝で，SX01より分岐して南に延び，南端部はやや屈曲して途切れる。幅0.5m，深さ0.15m，検出長7.9mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトよりなる。SB01と整った配置関係を有することから，SB01の雨落ち溝であると考えられる。遺物は土師質土器皿，須恵質土器，亀山焼片が数点出土した。





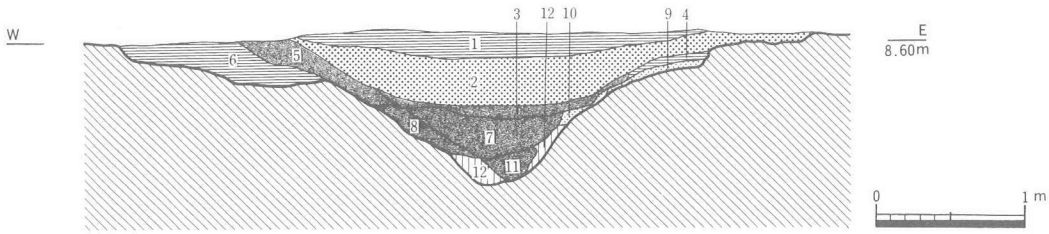


第139図　C地区第1面SD13断面図（1/30）　第140図　C地区第1面SD18断面図（1/30）　第141図　C地区第1面SD19断面図（1/30）

ＳＤ18（第140図）　Ｃ－１南拡張区南端で検出された溝で，東西両端は試掘調査時のトレンチに攪乱される。配置形態から，西端はＳＤ04に合流し，東端はＳＤ03の延長ライン上でＬ字状に屈曲して南へ延びるか，途切れるものと思われる。幅0.8m，深さ0.1m，検出長２ｍを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトよりなる。遺物は出土しなかった。

ＳＤ19（第141図）　Ｃ－１南拡張区南端で検出された溝で，ＳＤ18より派生して南に延びる。幅0.35m，深さ0.05m，検出長1.0mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルトの単層であった。遺物は出土しなかった。

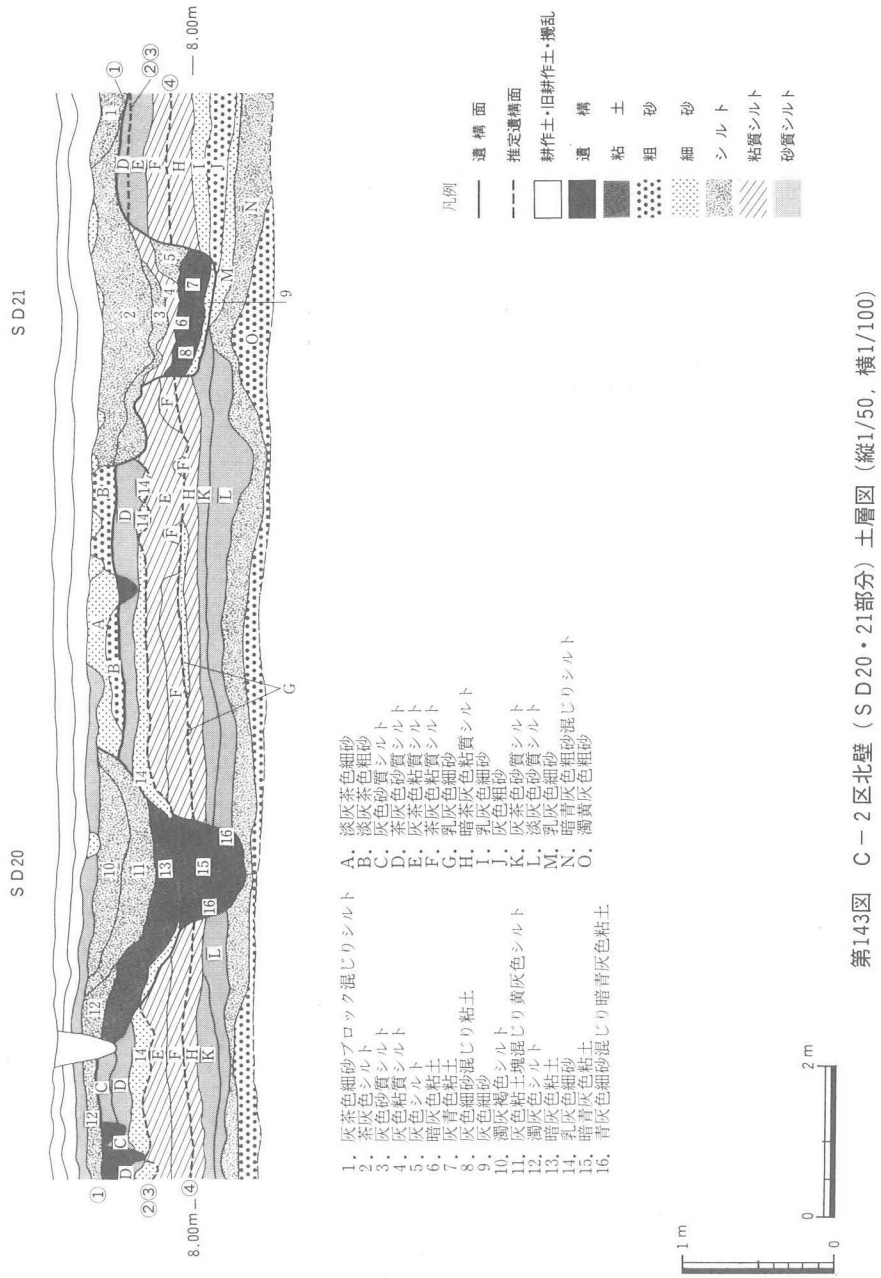
ＳＤ20（第142～148図，図版40）　Ｃ－２区の東部で検出された溝である。溝はＳＥ06の北部から掘り込まれており，北に向かって走る（Ｎ－４°－Ｅ）が，北部は調査区外に続くため，全体は不明である。この溝は第１面で検出されたが，北壁の土層堆積の観察から，最後に埋没したのは第１面より10cm程度上位であることがわかった。また，先述したとおり，本地区においては第１面の下位に３面の遺構面である第２～４面が未調査ながらもほぼ全体に広がっており，ＳＤ20の検出されたＣ－２区の東部においてもこれらの遺構面が広がることを調査区の北壁の土層堆積で確認した。北壁を観察するとＳＤ20の埋土途中に細砂の流れ込みがみられるが，これは第２・３面を覆う細砂層と同一のものである（第143図）。このことから，ＳＤ20は第１面の下位の遺構面である第２・３面と同時併存していたことがわかる。おそらく何回も掘り直されていると考えられることから，ＳＤ20の掘削された時期や対応する遺構面については不明であるが，第１面形成より古い時期のものであることは確実である。溝幅は検出面では4.5mを測る。２段掘りで，中央部は急に深くなっており，深さ1.0mを測る。溝の始まり部分である南端にはＳＥ05が掘り



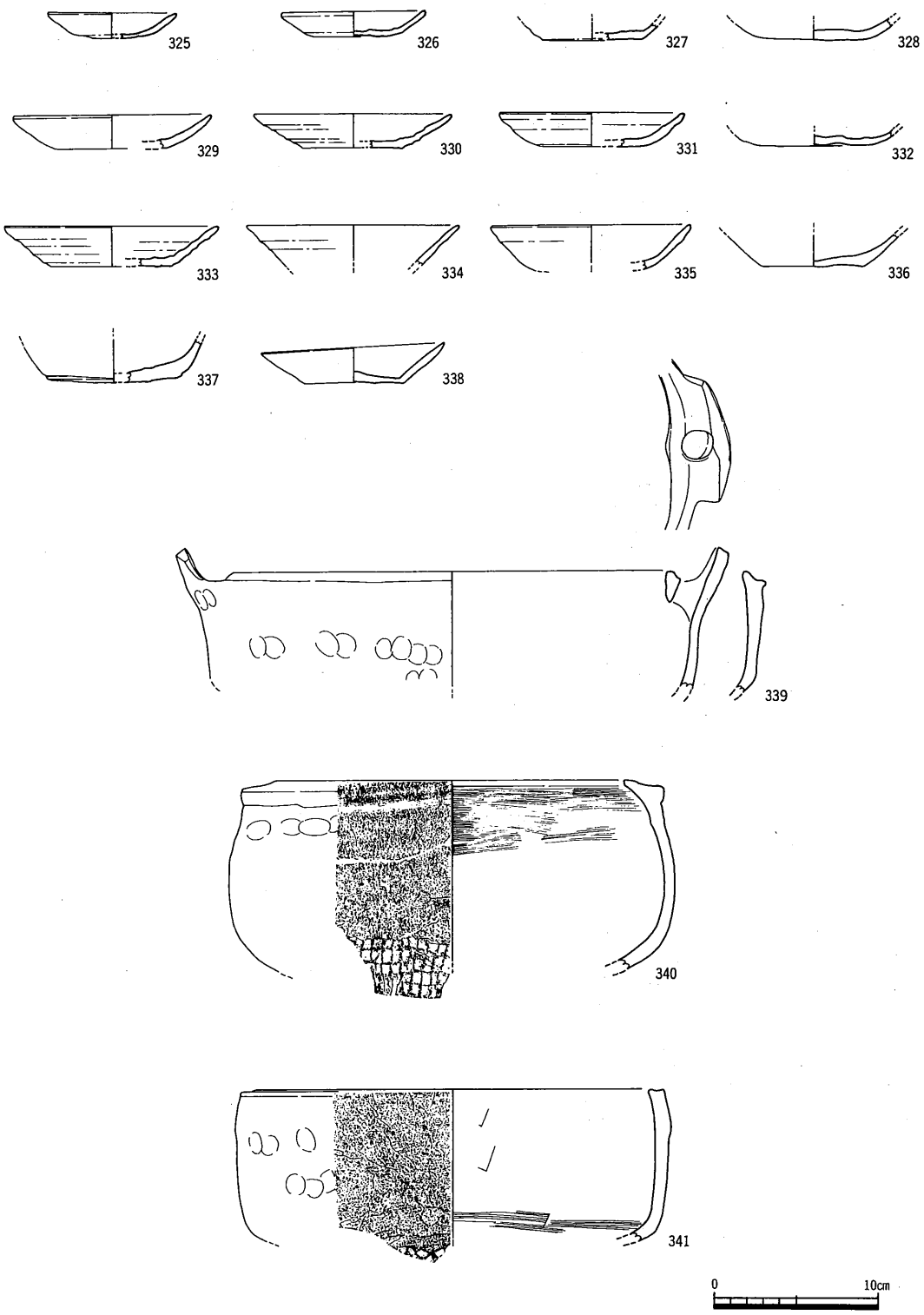
1．濁灰褐色シルト
2．灰色粘土塊混じり黄褐色シルト
3．茶褐色粘土
4．暗茶褐色シルト
5．暗灰色粘土
6．濁灰色シルト
7．暗青灰色粘土(植物遺体を多量に含む)
8．暗灰色細砂混じり粘土
9．茶灰色細砂
10．赤褐色細砂
11．暗青灰色粘土
12．青灰色細砂混じり暗青灰色粘土

第142図　Ｃ地区第１面ＳＤ20断面図（1/50）

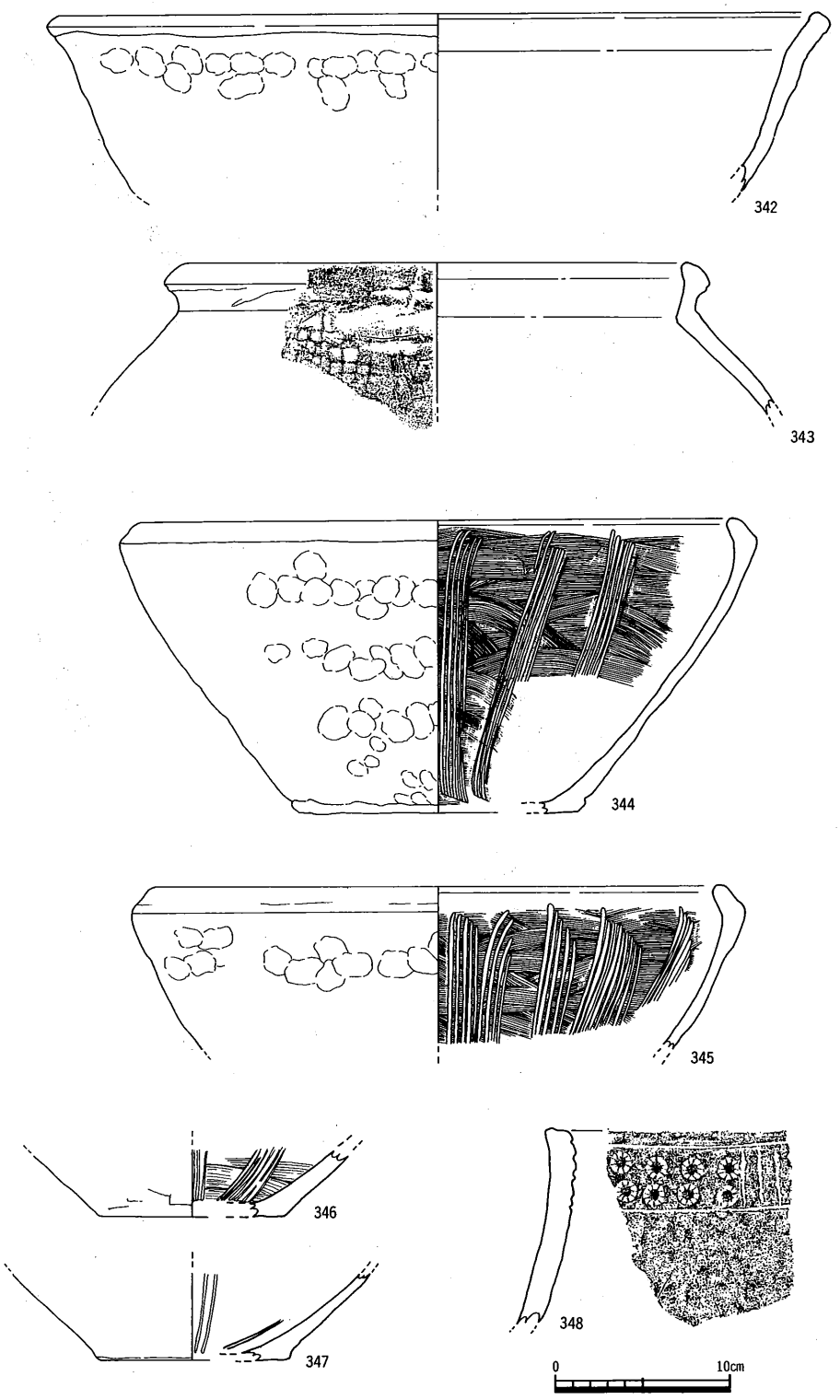
込まれている。先述のようにＳＥ05の底は粗砂層に達し，常時湧水がみられたことから，この溝はＳＥ05からの湧水を流していたものと考えられる。また，この溝はＣ－２区で検出された建物群の東部を区切る役割ももつものと考えられる。埋土は上部にシルトが厚く堆積しており，下部には粘土と細砂が堆積する。埋土下部の粘土には植物遺体が多量に含まれていた。遺物は埋土のどの層からもほぼ同量出土したが，木製品は埋土の下部より出土した。遺物は土師質土器皿（325～332）・坏（333～338）・羽釜（339～341）・土鍋（342）・甕（343）・擂鉢（344～



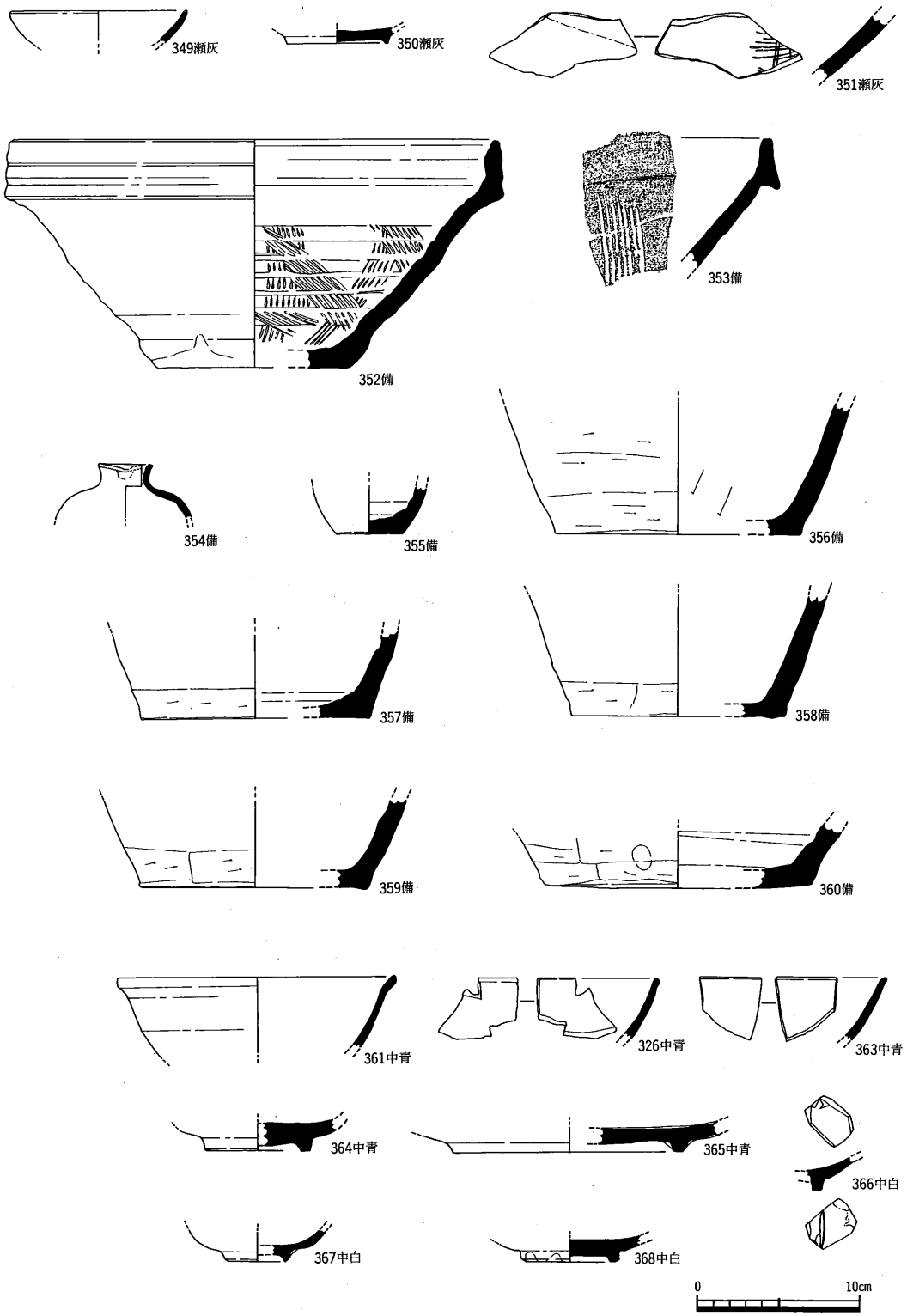
第143図　Ｃ－２区北壁（ＳＤ20・21部分）土層図（縦1/50，横1/100）



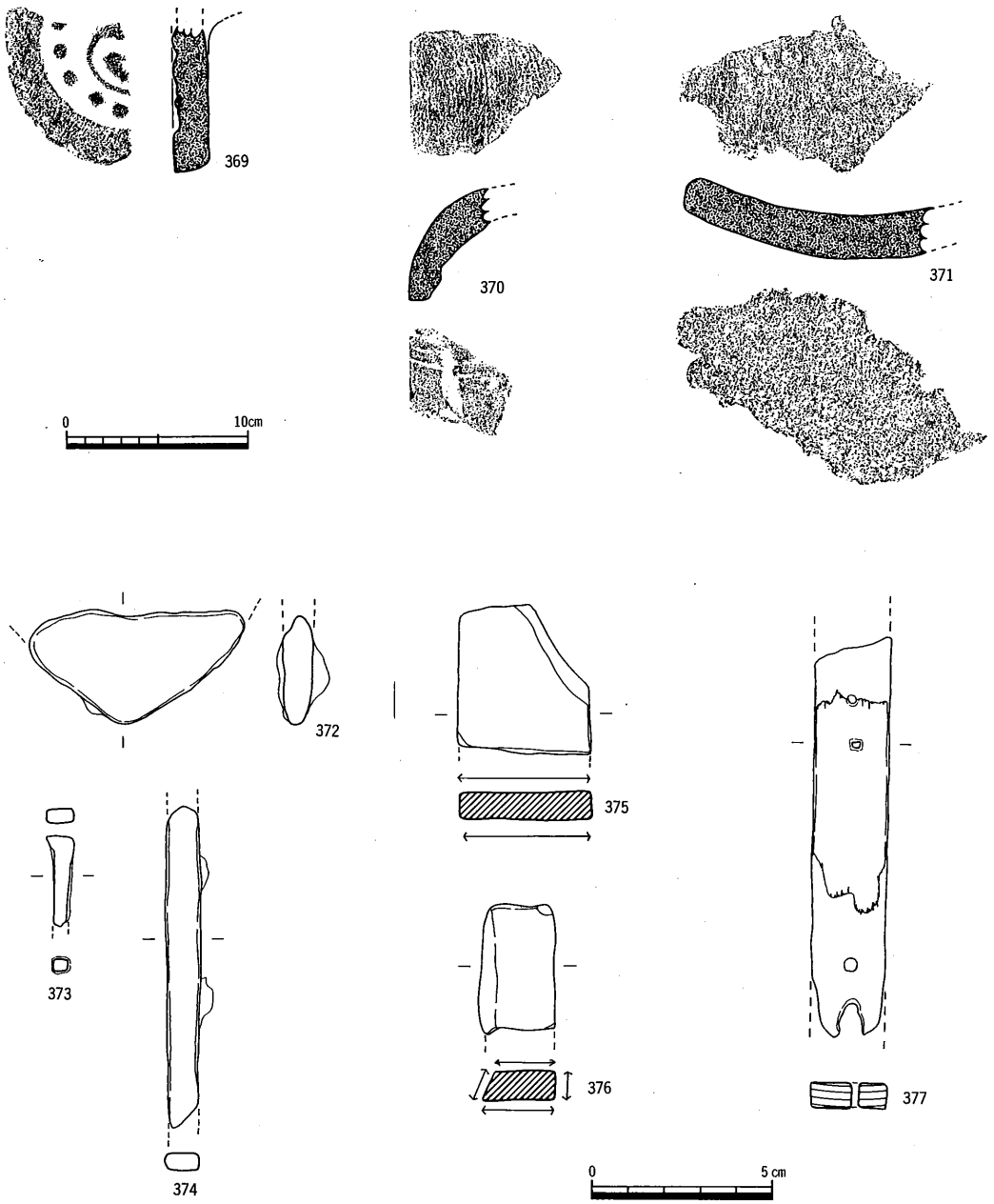
第144図　Ｃ地区第１面ＳＤ20出土遺物〔１〕(1/4)



第145図　C地区第1面SD20出土遺物〔2〕(1/4)

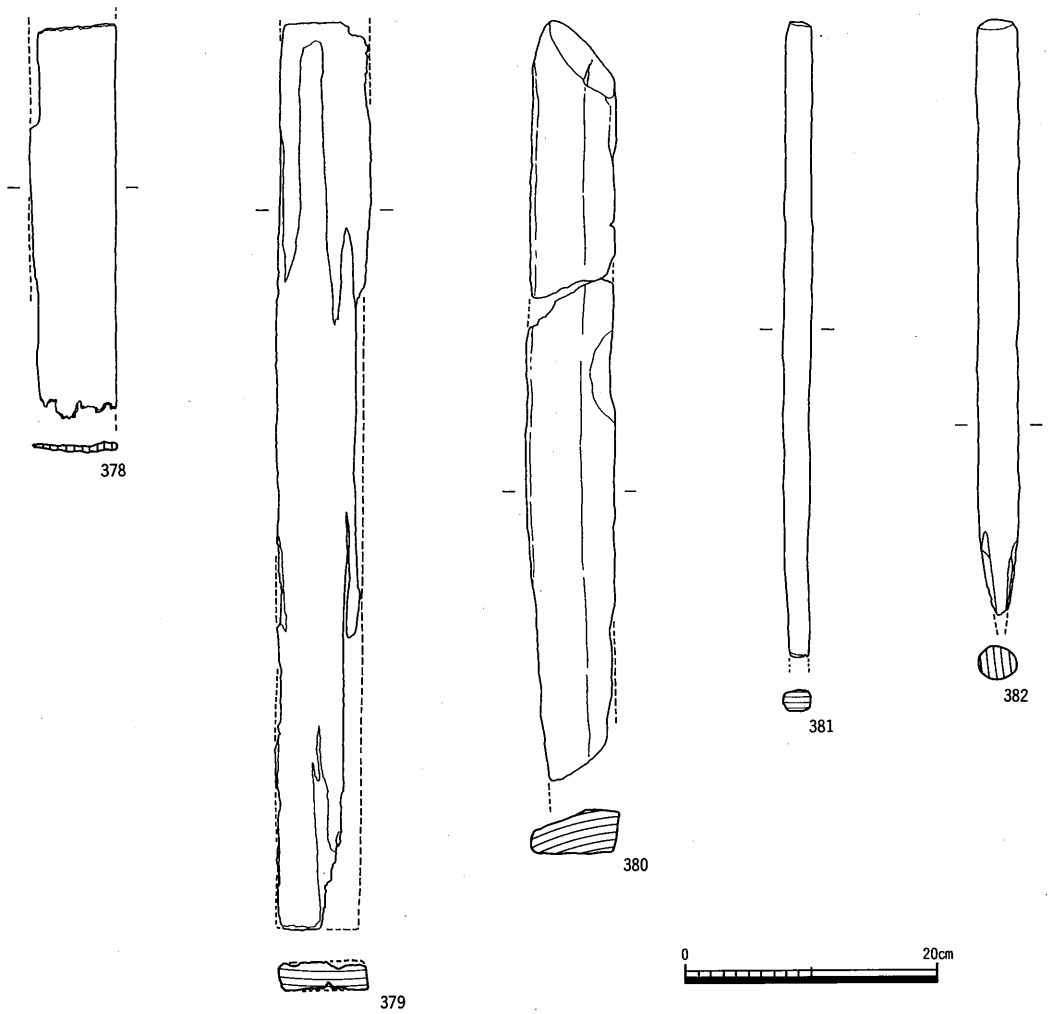


第146図　C地区第1面SD20出土遺物〔3〕(1/4)



第147図　C地区第1面SD20出土遺物〔4〕(1/4, 1/2)

347)・火舎（348)，瀬戸・美濃灰釉皿（349・350)，瀬戸・美濃卸目付灰釉皿（351)，備前焼擂鉢（352・353)・壺（354～360)，中国産青磁鉢（361)・青磁碗（362～364)・青磁盤（365)・白磁碗（366・367)・白磁盤（368)，軒丸瓦（369)，丸瓦（370)，平瓦（371)，鉄製鋤または鍬（372)・釘（373・374)，砥石（375・376)，木製品部材（377)・板材（378～380)・杭（381・382)，土壁と考えられる焼土塊，動物遺存体（1377・1384・1390・1395・1398・1406・1435・1438・1439・1440・1441)，瀬戸・美濃鉄釉陶器の小片1点，中国産白磁の小片1点などがコン



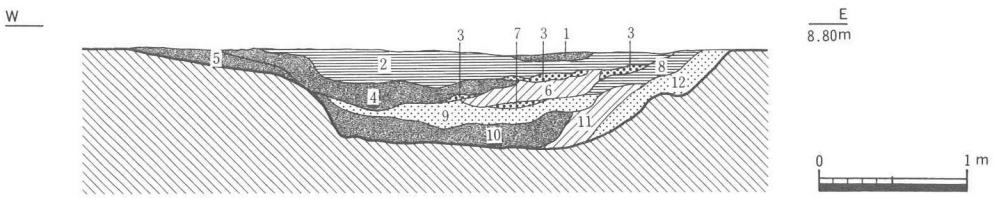
第148図　Ｃ地区第１面ＳＤ20出土遺物〔５〕(1/6)

テナ15箱程度出土した。

349・350は瀬戸・美濃灰釉皿である。349は丸皿で，体部がやや深めであることから，大窯２段階，16世紀中葉のものであると考えられる（註６）。350は口縁部の形態は不明であるが，高台が高いことから大窯１～２段階，15世紀末から16世紀中葉のものであると考えられる。351は瀬戸・美濃卸目付灰釉皿である。体部破片で全体は不明であるが，卸目が格子状に付く。時期は不明である。352・353は備前焼擂鉢である。352は口縁部が拡張され，外面に凹線を３本程もつ。また，体部内面には斜め方向にも卸目が施されることから，備前焼第Ⅴ期，16世紀前半から17世紀前半のものであると考えられる（註３）。353は口縁部を上下に拡張する。外面に凹線はみられず，下部への拡張部分が鋭いことから，備前焼第Ⅳ期前半のもので，14世紀後半から15世紀前半のものであると考えられる。361は中国産青磁鉢で，龍泉窯系のものである。口縁部が外反する。上田氏の分類のＤ類にあたり，14世紀後半から15世紀中葉のものであると考えられる。362・363は中国産

青磁碗である。361と同様，口縁部が外反することから，14世紀後半から15世紀中葉のものであると考えられる。364は高台畳付から底部外面にかけては無釉であることから，14世紀後半から15世紀中葉のものであると考えられる。365は龍泉窯系の青磁盤で，外面の底部周縁を環状に釉を剝ぎ取ることから，14世紀後半から15世紀中葉のものであると考えられる（註8）。366・367は中国産白磁碗である。366は底部破片で，全体の形態は不明である。体部下半外面から底部にかけて無釉であることと底部の形態から，12世紀から14世紀前半のものであると考えられる（註7）。367は底部破片で，全体の形態は不明である。畳付から底部外面にかけては無釉であることから，16世紀代のものと考えられる。368は中国産白磁盤である。畳付から底部外面は無釉であることと，底部の形状から12世紀から14世紀前半のものであると考えられる。375・376は砥石である。いずれも幅4cm以内と小さく持運び用のものと考えられる。375は三木町池戸・井上・岳山・鞍掛山から高松市三谷付近で産する流紋岩製である。376も凝灰岩質流紋岩製である。産地は不明である。377は部材と考えられるものである。ヒノキ属の一種で，板目板である。中央に2個一単位で二単位あけられている。1377・1384・1390・1395・1398・1406・1435・1438・1439・1440・1441は動物遺存体である。1377はウシの尺骨である。1384はウシの中手骨で，打痕がみられる。白色化している。1390はウシかウマの橈骨で，斧様の傷がみられる。1395はニホンシカの角で，工具の柄として加工されたものである。中央に径5～8㎜の穴があけられ，径2.6cm，長さ4.0cmを測る。1398はヒトの下顎である。成人で，白色化している。1406・1435・1438・1439・1440・1441は動物の種類は不明である。1438は動物の種類は不明であるが，頭骨である。1439は白色灰化している。

ＳＤ21（第143・149～160図，図版41～42）Ｃ－２区の東端を南北方向（Ｎ－８°－Ｅ）に走る溝である。北部，南部ともに調査区外に続くため全体は不明である。ＳＤ20の検出は第１面で行



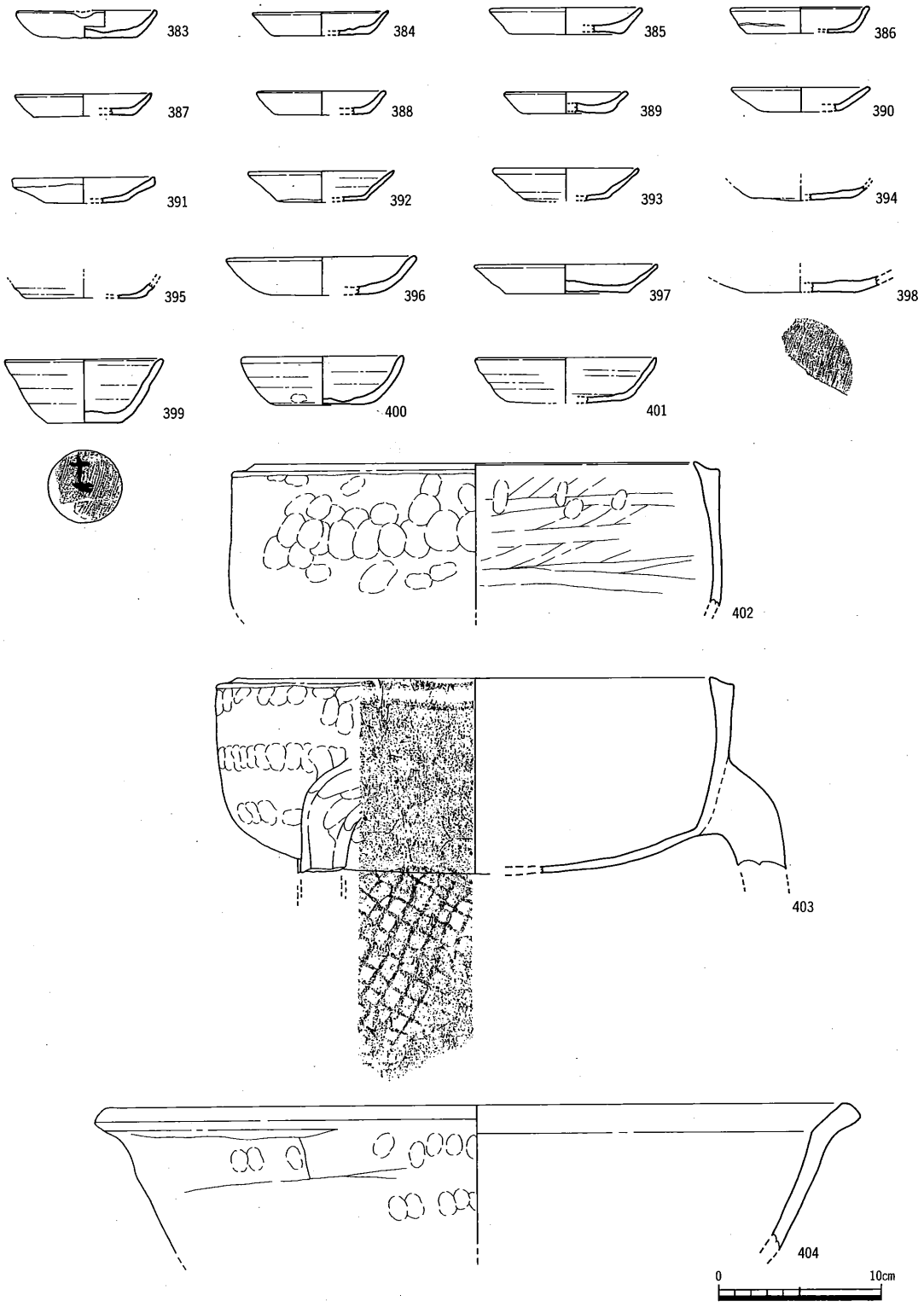
1．黄灰色粘土
2．茶灰色シルト
3．淡黄褐色粗砂
4．灰茶色粘土
5．暗黄灰色粘土
6．灰茶色粘土混じり粗砂
7．淡黄褐色粗砂
8．灰茶色シルト
9．茶灰色～灰青色粗砂混じり粘土
10．暗灰黄色～灰青色粘土
11．灰黄色～灰青色粘土混じり粗砂
12．灰青色～茶灰色粗砂混じり粘土

第149図　Ｃ地区第１面ＳＤ21断面図（1/50）

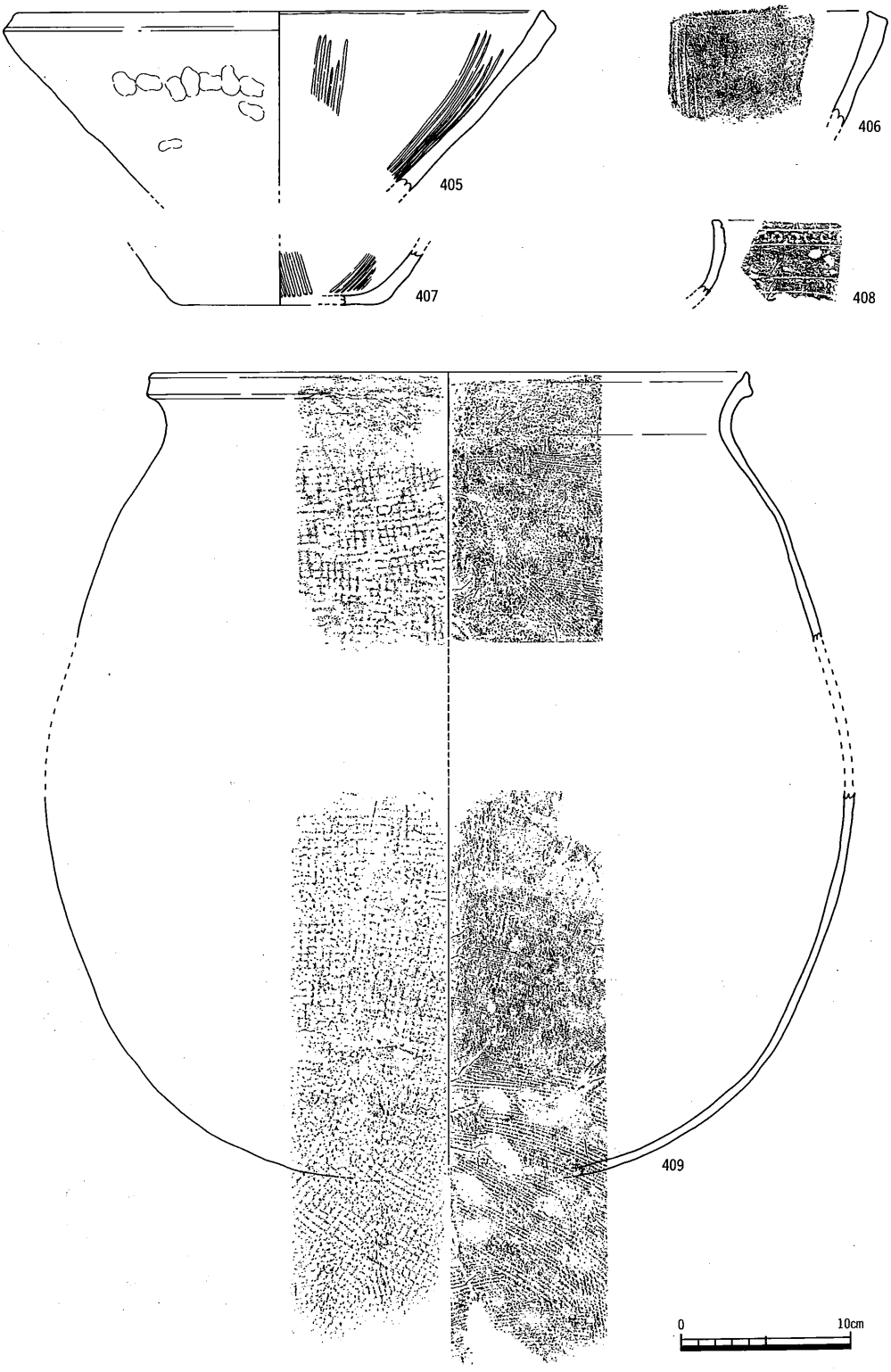
第150図　Ｃ地区第１面ＳＤ21遺物出土状況（1/20）

なわれたが，北壁の土層断面の堆積状況からＳＤ20の最終埋没は第１面より10cm程度上層であることが確認できた（第143図）。また，掘削時期については何度も掘り直されていると考えられるが，ＳＤ20でみられたような第２・３面の上位に堆積する土層と同一のものが遺構内にみられないことから，第２・３面形成より新しい時期に掘られた可能性も考えられる。溝は２段掘りになっており，検出面で幅2.4～4.3m，深さ1.2m前後を測る。現在，C地区とD地区との間には幅1.5mの用水路が南から北に走る。この用水路はC地区の北部で東側に湾曲して北に流れている。ＳＤ21はこの用水路と平行に南北に流れており，北部では現用水路と平行に東側に湾曲することから，ＳＤ21は東側を走る現用水路の前身であろうと思われる。埋土の上部にはシルト，下部には粘土，粘土混じり粗砂が堆積する。遺物は埋土の上層から下層まで含まれる。木製品についてはそのほとんどが埋土の下部より出土した。特にＣ－２南拡張区からは多量に出土した。土師質土器皿（383～398）・坏（399～401）・羽釜（402・403）・土鍋（404）・擂鉢（405～407）・鉢（408），亀山焼甕（409），唐津鉄絵皿（410）・灰釉皿（411・413・416～420）・灰釉碗（412・414・415），肥前青磁器種不明（421），京焼風陶器碗（422），瀬戸・美濃皿または香炉（423），瀬戸・美濃灰釉皿（424～425），瀬戸・美濃天目碗（426），瀬戸・美濃と考えられる器種不明品（427），備前焼擂鉢（428～433）・甕（434～438）・壺（439～443）・灯明皿（444），中国産青磁碗（445・446）・青磁盤（447・448）・天目碗（449），坩堝（450），平瓦（451・452），丸瓦（453），不明鉄製品（454），木製品紡織具（455・456）・下駄（457）・折敷（458～466）・不明品（467）・底板（468～471）・把手（472）・漆塗椀（473～475）・箸（476）・呪符木簡（477～479）・木簡（480）・札（481・496）・板材〈482～485）・部材（486・487）・杭（488～494）・楔（495）・用途不明品（497・498），動物遺存体（1367～1369・1372・1378・1385・1386・1391・1404・1408・1411・1426・1432・1436・1437）のほか，18～19世紀のものと考えられる国産磁器染付の破片８点，京焼風陶器の破片１点，唐津の破片７点，瀬戸・美濃の灰釉皿あるいは碗の破片１点，瀬戸・美濃の鉄釉皿あるいは天目碗の破片２点，中国産青磁の破片２点，中国産白磁の破片１点，産地不明の白磁破片１点，土壁と考えられる焼土塊，鉄滓，炭化物などコンテナ20箱の遺物が出土した。なお，これらの遺物の中で明らかに後出する様相をもつ国産染付は最終埋土下0.5mの位置で出土した。

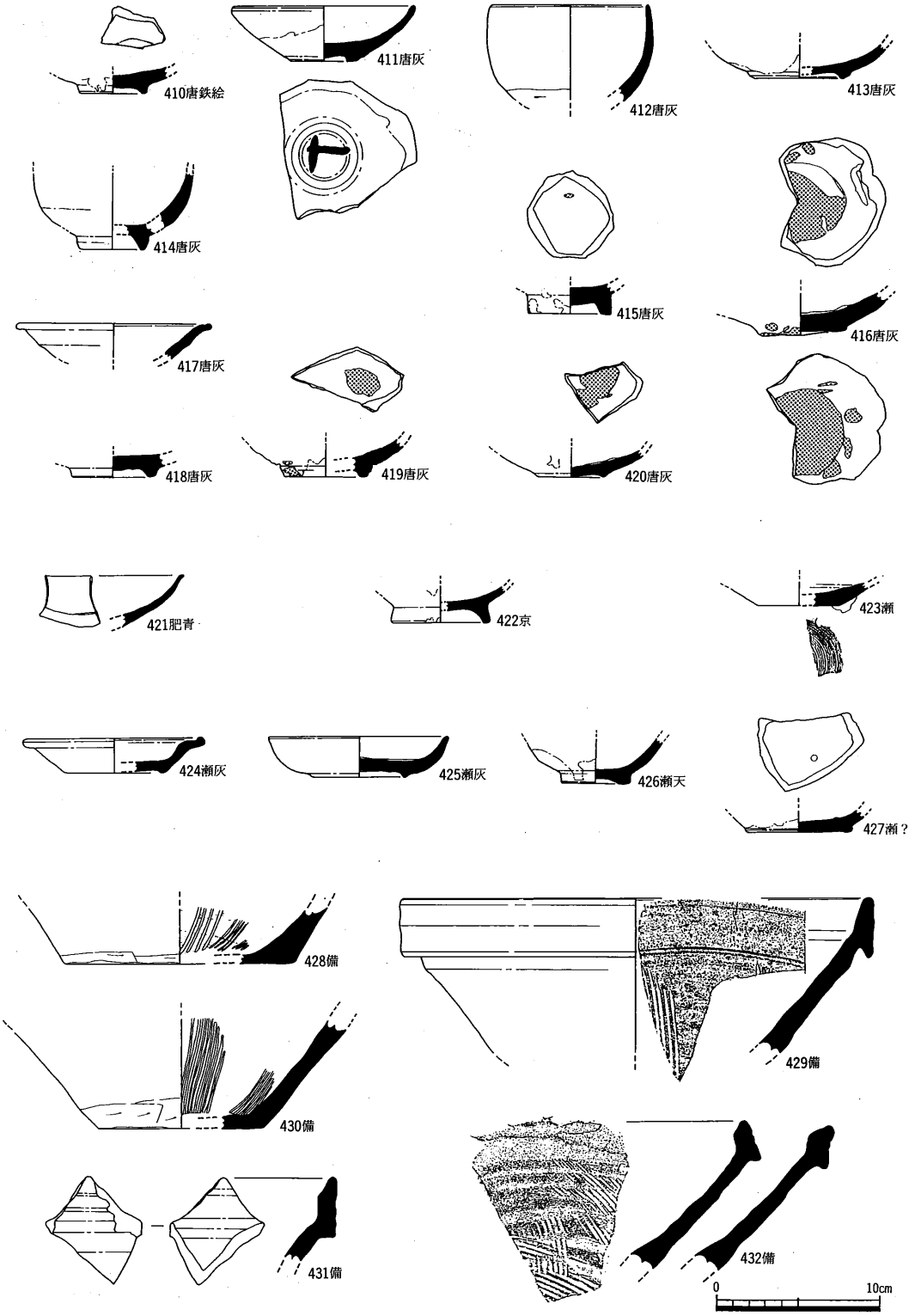
399は土師質土器坏である。底部外面は静止糸切りで，「十七」という墨書がみられる。409は亀山焼の甕である。焼成は瓦質で，やや軟質である。410は唐津鉄絵皿である。1580～1610年代のものである（註4・5）。411～420は唐津灰釉皿・碗である。411は口縁部が丸くおわる丸皿である。1580～1610年代のものである。底部外面には窯印と考えられる墨書が薄くみられる。413は灰釉皿であるが，砂目がみられないことから，1580～1610年代のものであると考えられる。412・414は灰釉碗であるが，口縁部が丸くおわる丸碗で，1580～1610年代のものと考えられる。415～420は灰釉皿・碗で，砂目積のものである。415・419～420は底部内面に砂目，416は底部内外面に



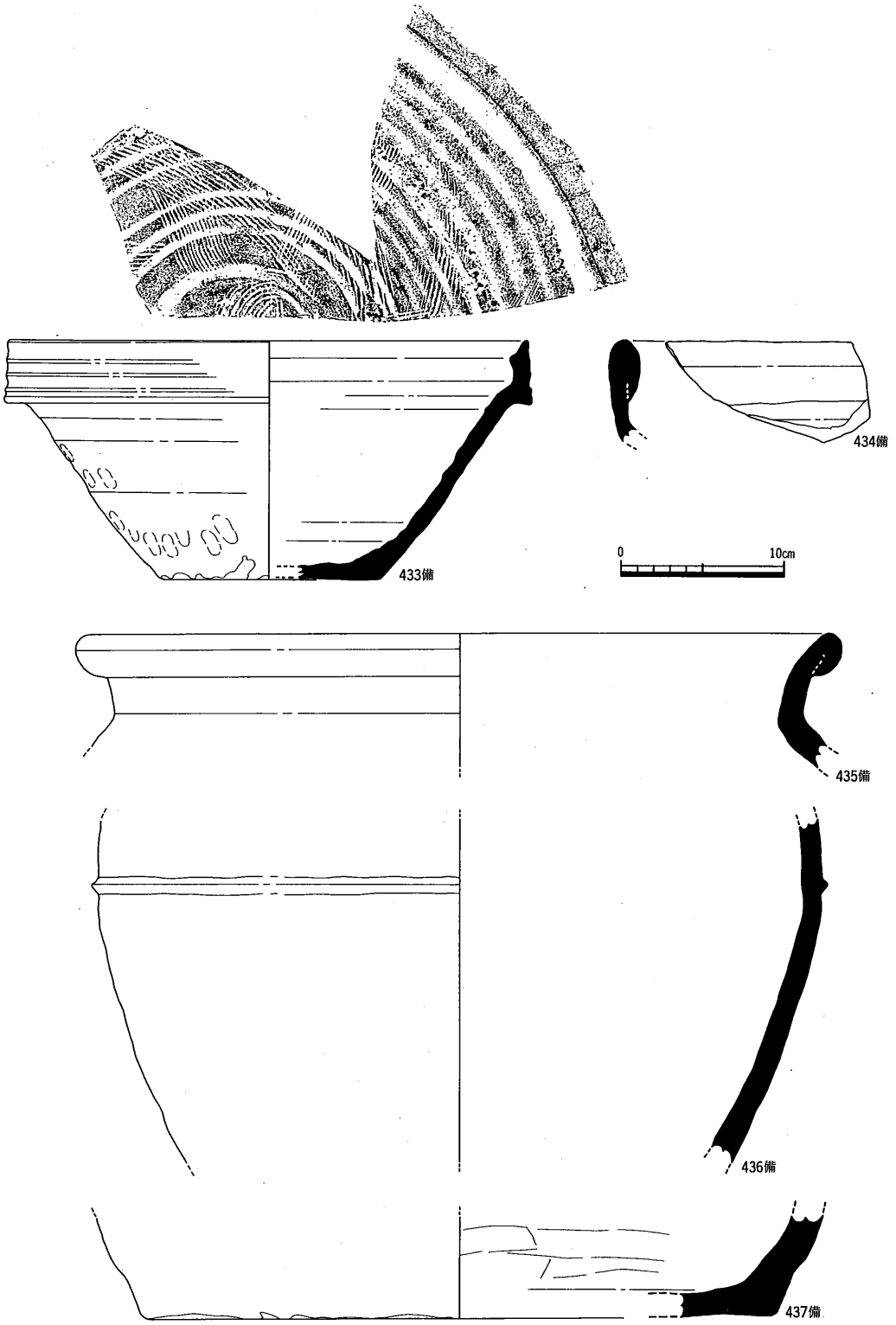
第151図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔１〕(1/4)



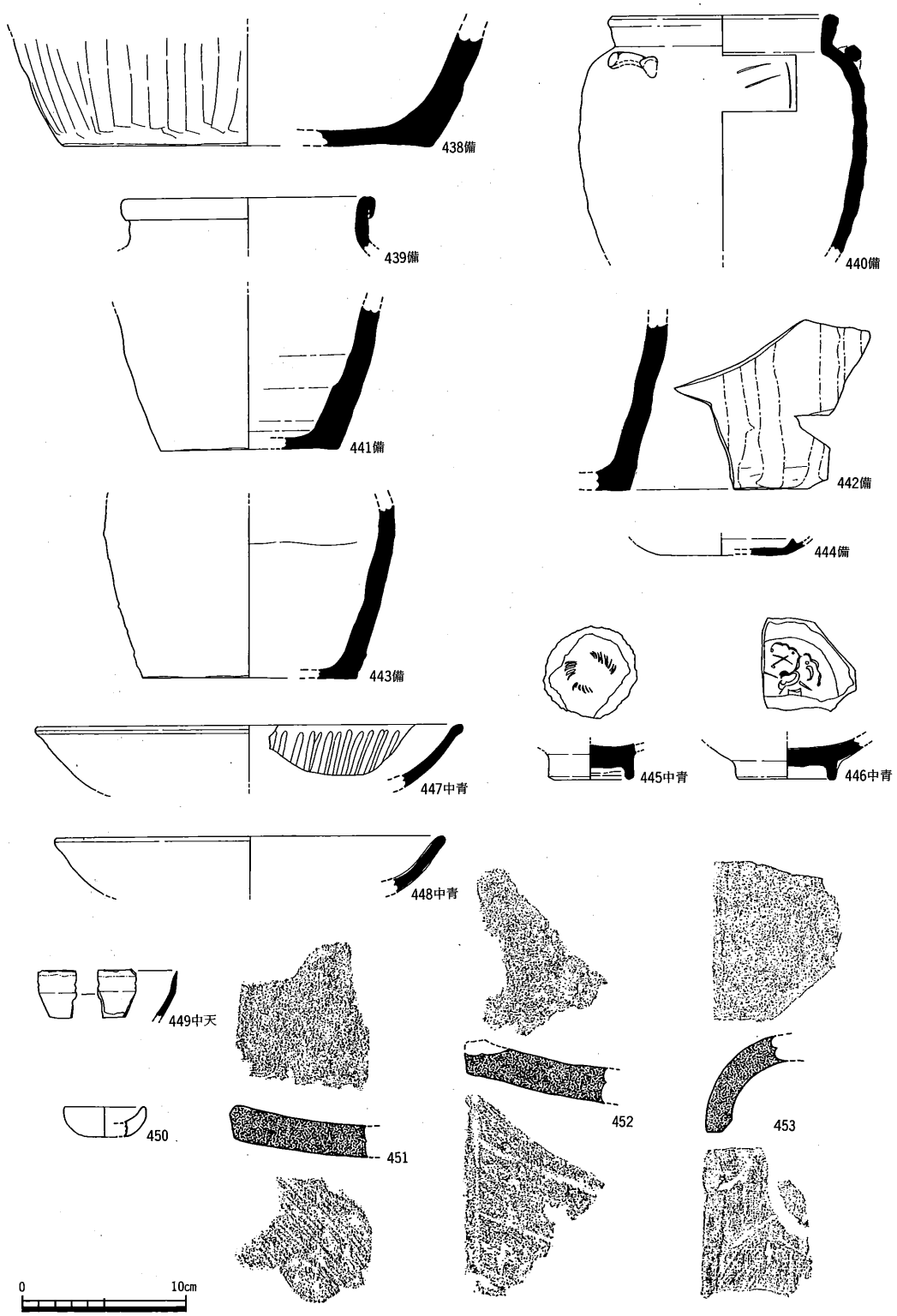
第152図　C地区第1面SD21出土遺物〔2〕(1/4)



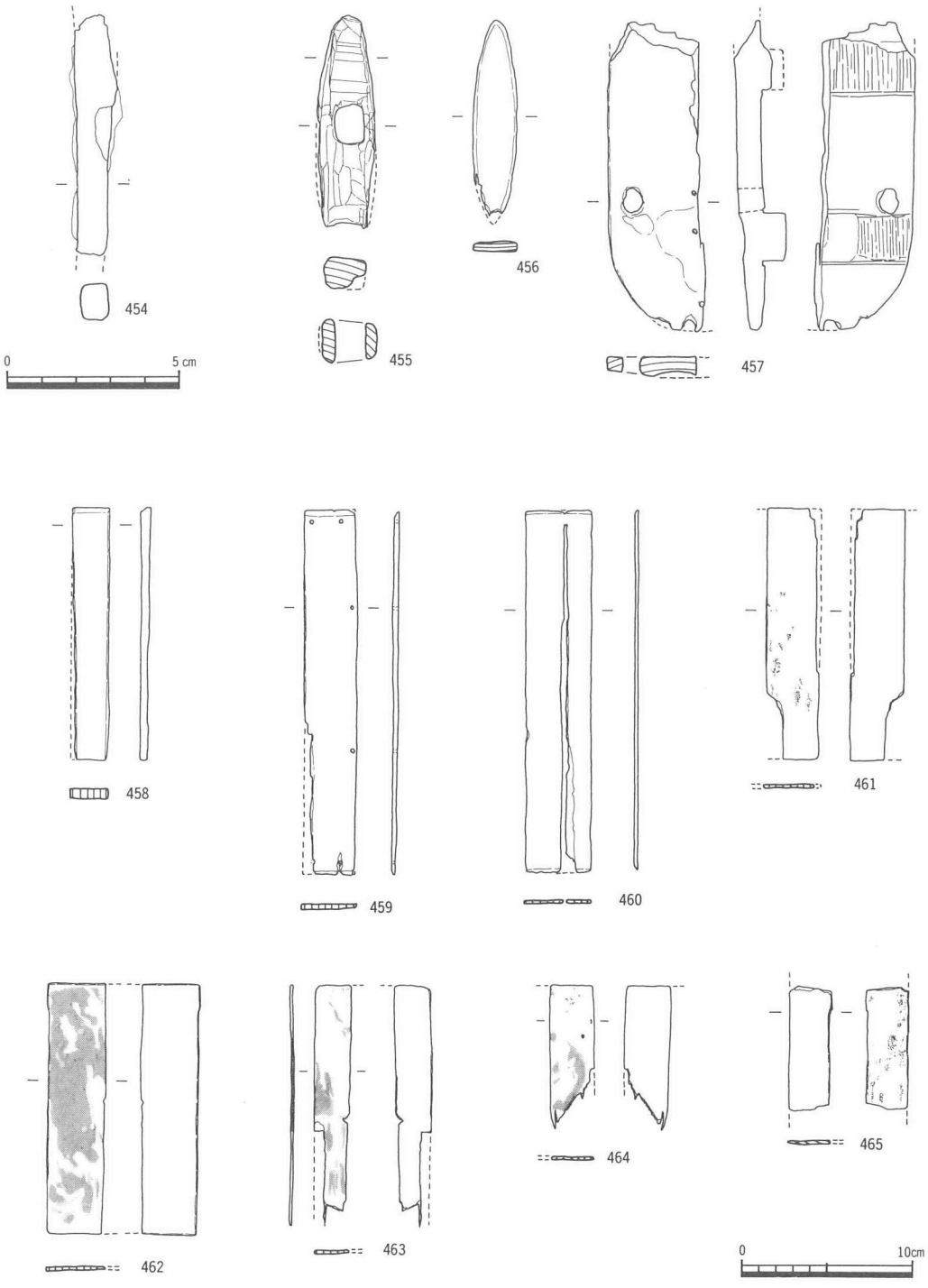
第153図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔３〕(1/4)



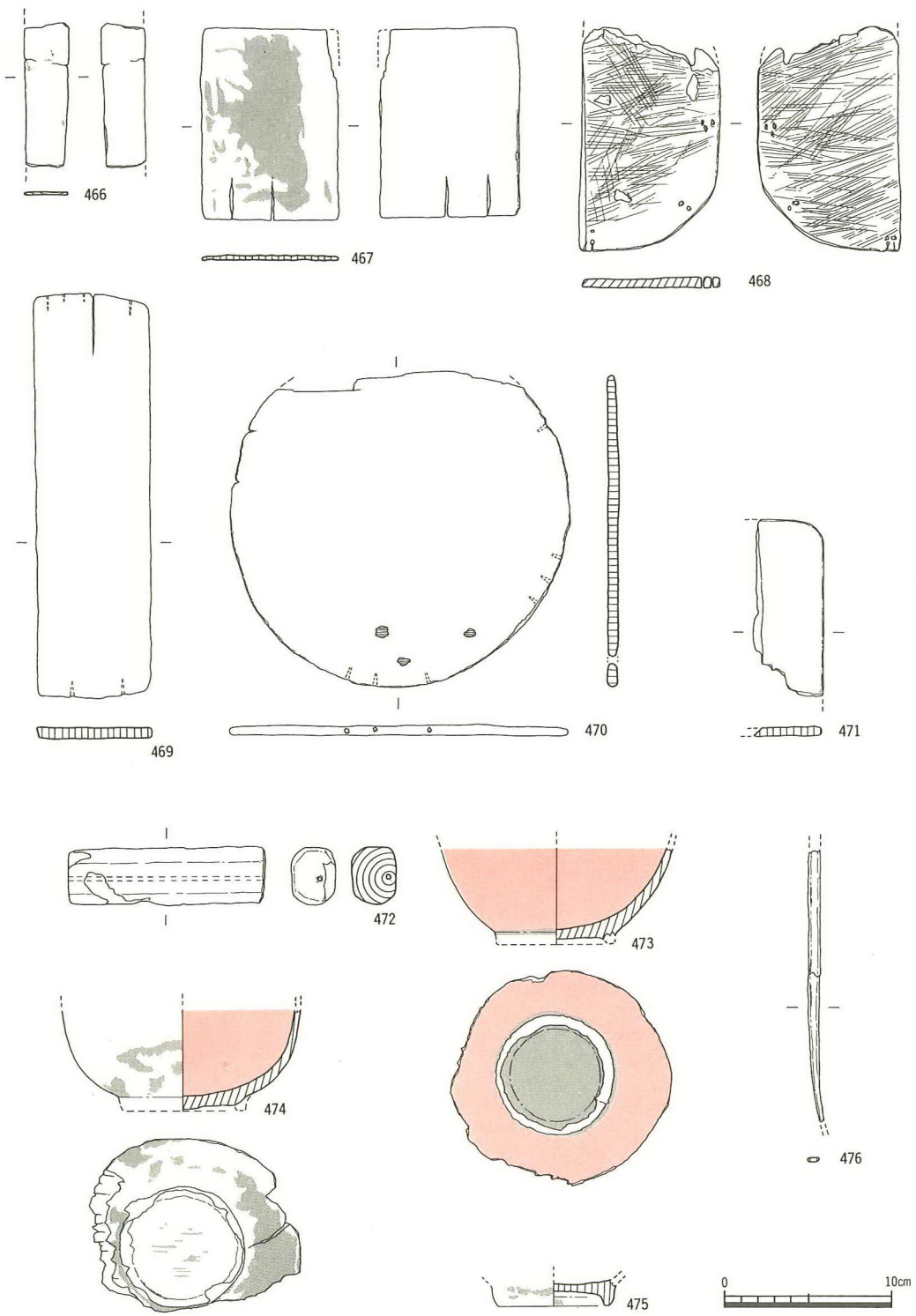
第154図　C地区第1面SD21出土遺物〔4〕(1/4)



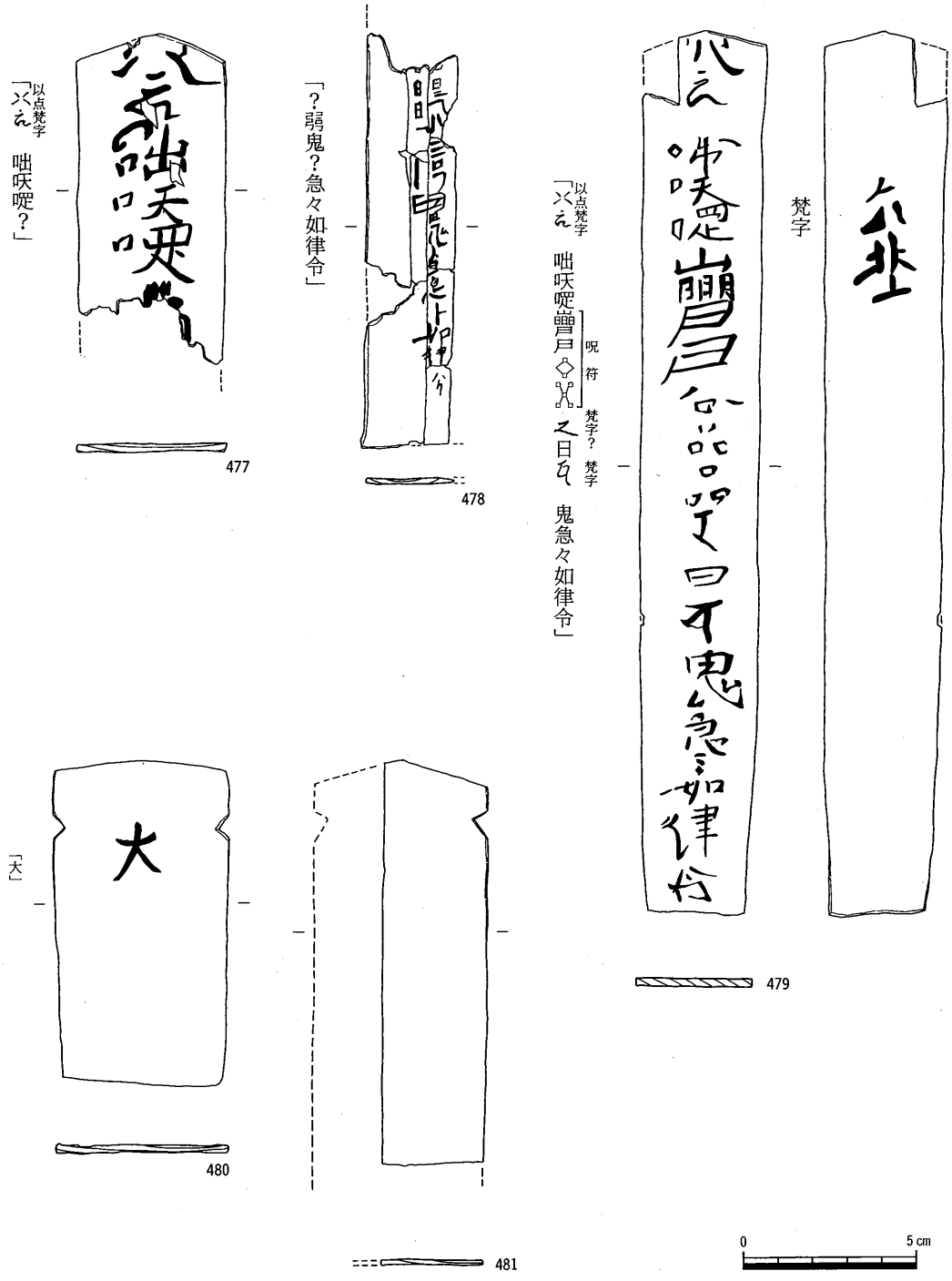
第155図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔５〕(1/4)



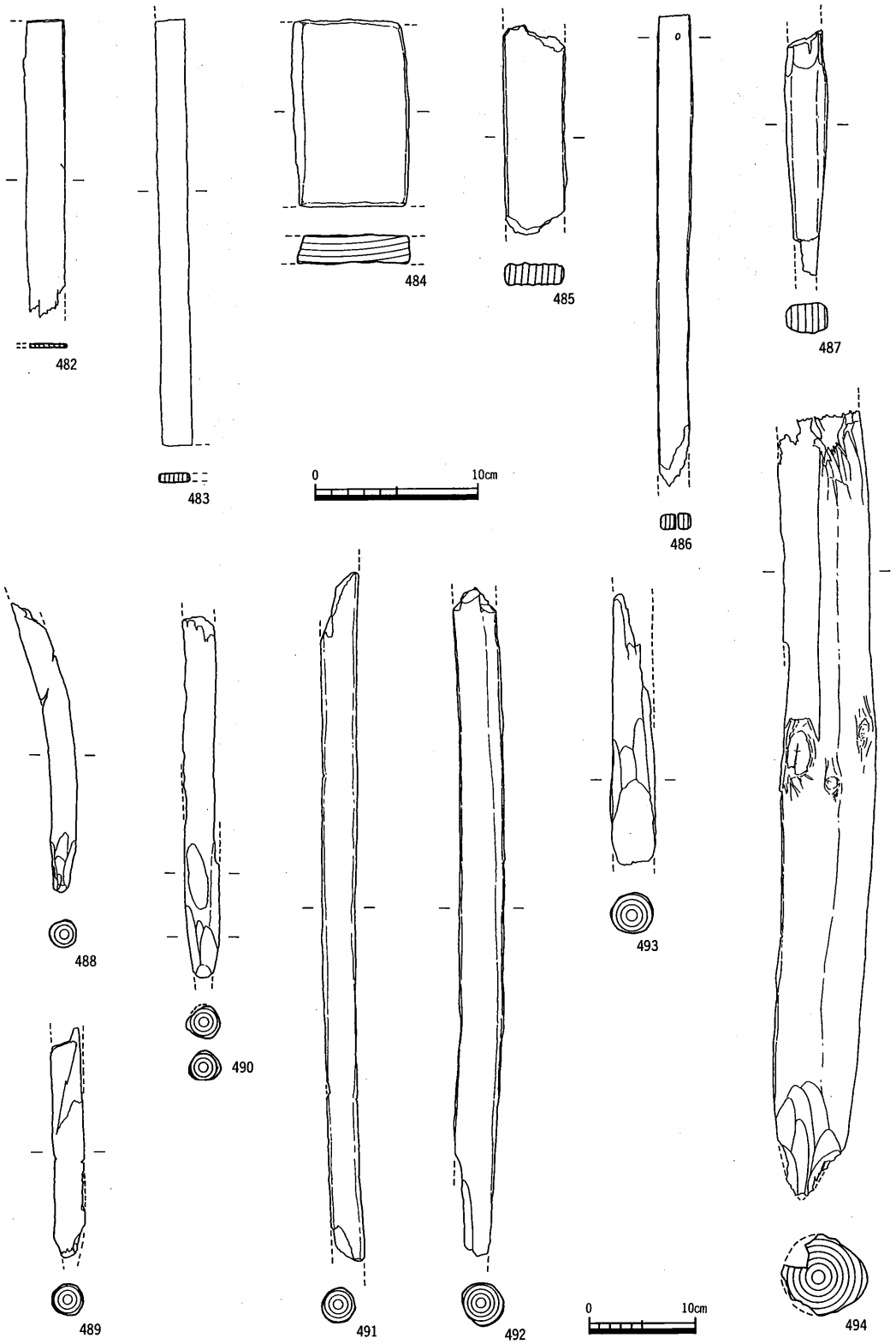
第156図　C地区第1面SD21出土遺物〔6〕(1/2, 1/4)



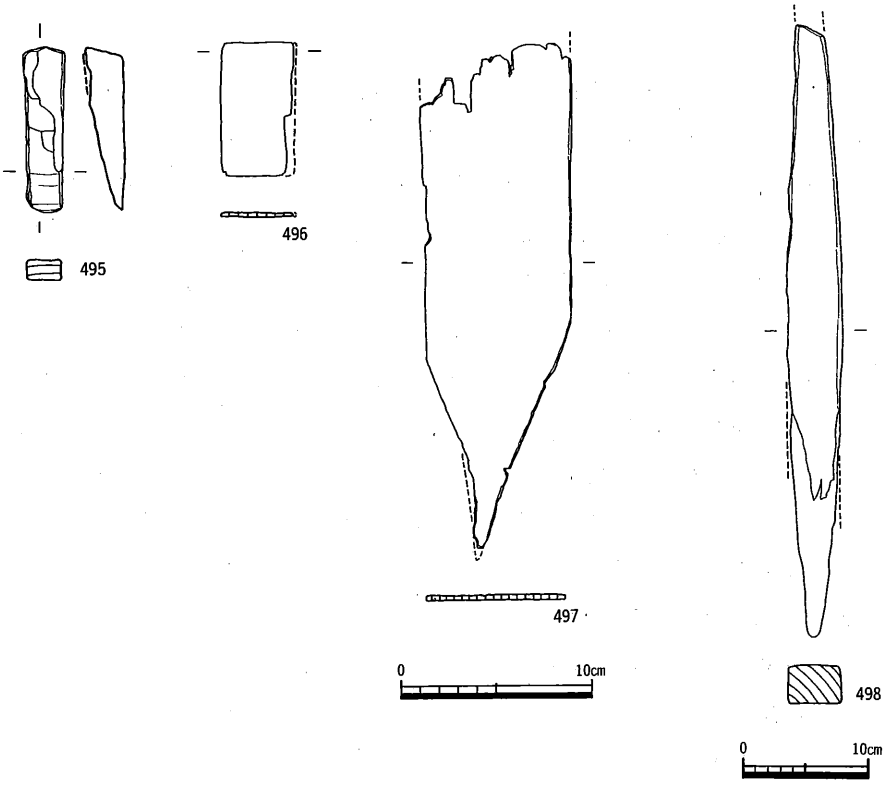
第157図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔７〕(1/4)



第158図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔８〕(1/2)



第159図　Ｃ地区第１面ＳＤ21出土遺物〔９〕(1/4, 1/6)

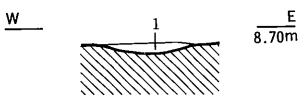


第160図　C地区第1面SD21出土遺物〔10〕(1/4, 1/6)

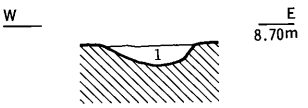
砂目がみられる。415は1590～1630年代，416は1600～1620年代，417～420は1600～1630年代のものである。422は京焼風陶器碗である。高台内外面に施釉される。18世紀代のものである(註5)。423は瀬戸・美濃皿または香炉である。底部外面に足がつく。古瀬戸後期(註11)のもので14世紀後半から15世紀末のものである。424は瀬戸・美濃灰釉皿である。折縁皿で，大窯4段階，16世紀末(註6)のものである。425は丸皿で，大窯3段階，16世紀第3四半期のものである。426は天目碗である。高台周辺が露胎で，高台は浅い削り込みによって作られることから天目碗のII類第4型式であると考えられる。古瀬戸後4期，15世紀代のものである。428～433は備前焼擂鉢であるが，かなり時期差がみられる。428は卸目の数が4本と少ないことから，備前焼第III期で，13世紀末から14世紀中葉のものであると考えられる(註3)。429・430は口縁部を上下に拡張する。特に下部に拡張した端部が鋭く，卸目が斜め方向に入らないことから，備前焼第IV期のものであると考えられる。14世紀後半から16世紀初頭のものであろう。431～433は口縁部を上下に拡張し，外面に2～3本の凹線が入る。431は口縁部破片であるため体部は不明であるが，432・433は体部内面の卸目が斜めにもみられる。431～433は備前焼第V期で，16世紀前半から17世紀前半のものであると考えられる。434・435は備前焼甕の口縁部破片である。434は口縁部外面には凹線がみられないことから，備前焼第IV期のもので，435は口縁部が玉縁であることから，備前焼第III期のものであると考えられる。436は水屋甕である。体部上半に凸帯は巡らす。完形でないため結び目はみられない。438は外面に縦方向のヘラナデがみられることより，甕であると考えられる

が，時期は不明である。439～443は備前焼壺である。439は口縁部を少し折り返し，やや扁平な複合部をもつことから，備前焼第IV期のものであると考えられる。440は口縁部の折り返しが少しだけになり，肥厚させる程度であることから，備前焼第Ⅴ期のものであると考えられる。肩部外面に3個の耳をもち，ヘラ記号を施す。443は外面が丁寧にナデ調整されていることから，壺であると考えられるが，時期は不明である。444は灯明皿で，内面にかえりがつく。伊部手と呼ばれる塗り土が施される。17世紀代のものであろう。445・446は中国産青磁碗である。445は内面に櫛状工具による陰刻が施されている。高台内面の途中まで釉がかかることから，15～16世紀のものであると考えられる(註8)。446は龍泉窯系で，陰刻花文を内面に施す。畳付から底部中心外面が無釉であることから，14世紀後半から15世紀中葉のものであると考えられる。447・448は中国産青磁盤である。447は内面をヘラ彫りによる蓮弁を施し，口縁部が外反することから，14世紀後半から15世紀中葉のものであると考えられる。449は中国産天目碗である。14～15世紀のものであろう。457は連歯下駄で，前壺は前歯の前で，後壺は後歯の前にあける。歯は鋸で挽いて作る。マツ属複維管束亜属の一種の板目板である。458～466は折敷の側板である。458はC－2区，459～466はC－2南拡張区の溝底面から出土した。458～462は側板の横方向が完存しており，折敷の一辺の長さがわかる。13～14cm程度のものと21～22cm程度のものがみられる。また，458～460では側板の縦方向の長さがわかる。2～4cm程度である。厚さは458が0.6cmで，458以外は0.2～0.3cm程度である。458は他のものと比べると少し分厚い。また，461～466は片面に黒色漆が付着する。458～464はスギないしスギ類似種の柾目板で，465・466はヒノキの板目板である。467は平面形は長方形を呈しており，長11.6cm，幅8.3cmを測る。片面に黒色漆が塗られていることより，折敷の底板の可能性も考えられる。材はスギ類似種である。468～471は容器の底板である。468は平面形が半円形に近い形で，2枚で一枚の底板になるものと考えられる。周囲には側板などの結合のため2個一組の孔が底板の周囲にみられる。ヒノキ属の一種で，板目板である。また，この底板は両面とも無数の切傷が一面にみられることから，俎として転用されていることがわかる。469は底板であるが，数枚を結合させて底板とするものである。長辺24.5cm，短辺6.9cmであることから，径25cm程度の容器であることがわかる。側面には側板と結合させるための釘孔がみられる。針葉樹の柾目板である。470は平面形が円形の底板である。径20.7cmを測る。周囲には釘孔がみられる。スギの柾目板である。471は残存状態は悪く，全体の形は不明であるが，おそらく469のようなものであると考えられる。周囲に釘孔はみられない。スギの柾目板である。472は把手である。長さ12.0cmで，断面形は隅丸方形である。芯持材であるが，中央を刳り貫き木棒が差し込まれている。473～475は漆塗椀である。473は底部外面は黒色漆，体部内外面は赤色漆が塗布される。474は外面黒色漆で，内面赤色漆である。475は外面黒色漆であるが，内面は漆がみられない。底部は3点とも0.4～0.5cmと薄い。材は473がニレ属の一種，474はコナラ属コナラ亜属コナラ節の一種，475はトネリコ属の一種で，いずれも横木地である。477～479は呪符木簡である。

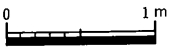
477は上端が圭頭状を呈しており，片面に墨書がみられる。墨書は「〻」という以点の下に梵字がみられ，その下には「咄呋啰」がみられるが，その下は欠損しているため不明である。スギ類似種の板目板である。478は下端の一部分が残存しているだけで，全体は不明である。呪符の内容を書いてその下に「急々如律令」をかく。樹種は不明であるが，板目板である。479 は上部の一部が欠損するだけで，他の2点に比べて残りが良い。477同様「〻」という以点の下に梵字がみられ，「咄呋啰」を書く。その下には呪符の内容がみられ「(梵字) 日 (梵字) 鬼急々如律令」をかく。モミ属の一種で，板目板である。477と479は字体が似る。477～479の呪符の内容については不明である。480は木簡である。上端は圭頭を呈し，左右に切り込みを入れる。片面に「大」を墨書する。スギの板目板である。481は札である。左半分は欠損しているが，480と同様上端は圭頭を呈し，左右に切り込みを入れる。墨書はみられない。スギ類の似種で，板目板である。1367～1369・1372・1378・1385・1386・1391・1404・1408・1411・1426・1432・1436・1437は動物遺存体である。1367～1369はアカニシの殻である。いずれも灰化している。1372はイヌの上腕骨である。1378はウシの大腿骨である。1385・1386はウシの中足骨である。1391はウマの上腕骨で，斧様の傷がみられる。1404・1408・1411・1426・1432・1436・1437は動物の種類については不明である。1411・1426・1436は白色灰化している。

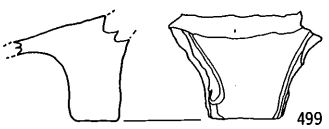


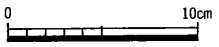
1．灰褐色細砂混じり粘土



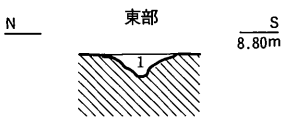
1．暗灰色細砂混じり粘土
(褐灰色粘土のブロックを含む)



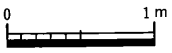


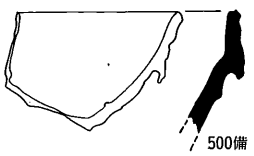


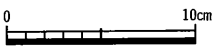
第161図　C地区第1面SD22断面図 (1/50)　第162図　C地区第1面SD25断面図 (1/50)，出土遺物 (1/4)



1．暗褐色細砂混じり粘土
2．暗灰褐色粘土混じり細砂

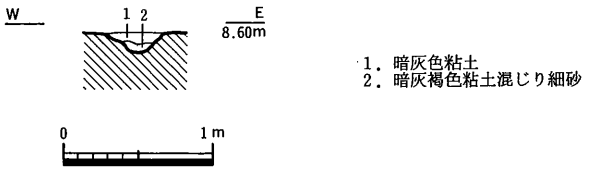






第163図　C地区第1面SD35東部・西部断面図 (1/50)，出土遺物 (1/4)

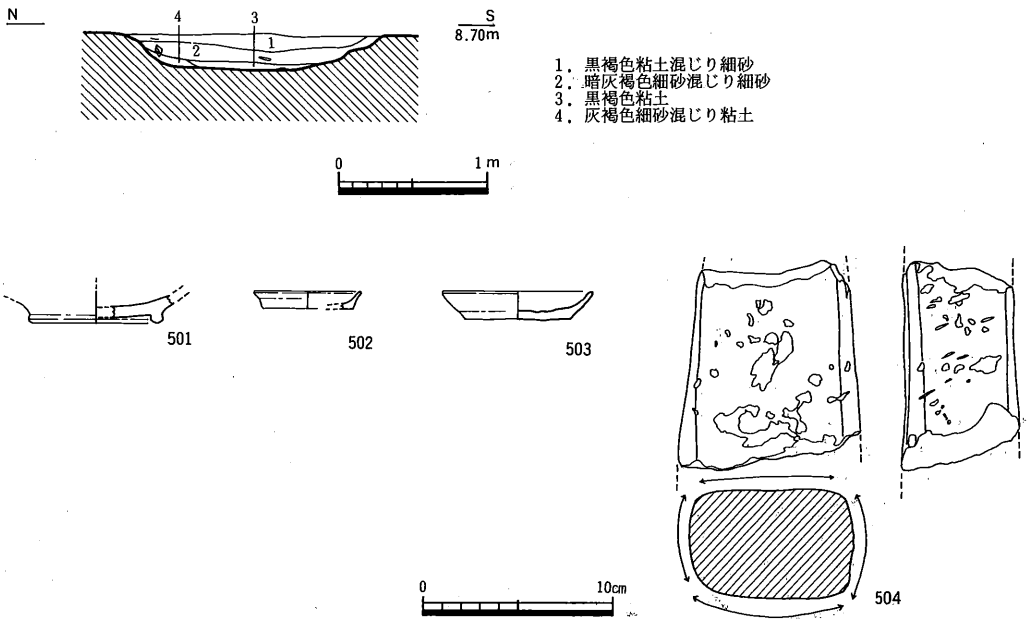
ＳＤ22（第161図）　Ｃ－２区の北東部で検出された。ＳＤ21の西側を走る溝である。北部は調査区外に連続しており，全体は不明である。最大幅1.2m，深さ0.2mを測る。遺物は土師質土器土鍋・備前焼の破片が数点出土した。



第164図　Ｃ地区第１面ＳＤ61断面図（1/50）

ＳＤ25（第162図）　Ｃ－２区の西部で検出された。南北方向に走る溝である。北部は調査区外に延びるため全体は不明である。南部は二股に分かれて浅くなる。埋土は褐灰色粘土ブロックが混じる暗灰色細砂混じり粘土である。遺物は土師質土器火舎（499）のほか土師器土鍋・擂鉢・皿片がビニール袋中１袋程度出土した。

ＳＤ35（第163図）　Ｃ－２区の中央付近で検出された。掘立柱建物群の南側に位置する。ほぼ東西方向に走る溝である。途中南に湾曲し，ＳＫ17と連続する。ＳＫ17はＳＥ04の作業場と考えられるが，ＳＤ35はＳＫ17・ＳＥ04の排水溝の機能ももつと考えられる。幅0.3～0.5m，深さ0.1～0.2mを測る。埋土は西部では暗灰褐色粘土混じり細砂，東部では暗褐色細砂混じり粘土で若干異なる。遺物は備前焼擂鉢（500）のほか土師質土器皿・土鍋片が数点が出土した。500は口縁部を上下に拡張し，凹線をもたないことから，備前焼第Ⅳ期，14世紀後半から16世紀初頭のものであると考えられる（註３）。



第165図　Ｃ地区第１面ＳＤ62断面図（1/50），出土遺物（1/4）

SD36　C－2区中央付近，SD35の南部で検出された。SD35と連続する。南北に走る溝である。この溝の南部には東西に走るSD67の西部から二股に分かれて北に延びる溝があるが，SD36の南部はこの溝に続いていくものと考えられる。遺物は出土しなかった。

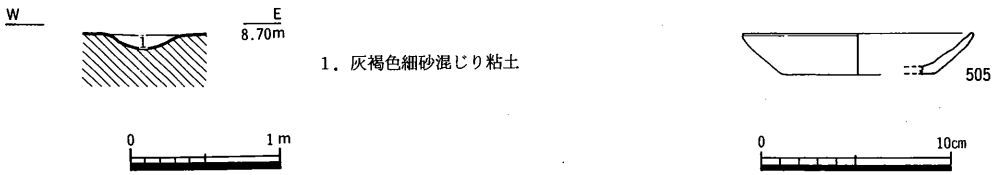
SD37　C－2区の西部で検出された。北西から南東方向（E－15°－S）に走る溝である。SK18と連続するが，SK18より古い。埋土は暗灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

SD38　C－2区の西部，SD37の南側で検出された溝である。SD37と平行に西から南東方向（E－16°－E）に走る。SD67の西側に位置し，SD67の延長上に位置する。SD67と同一溝かもしれない。幅0.3m，深さ0.1mを測る。埋土は灰色粘土混じり細砂である。遺物は出土しなかった。

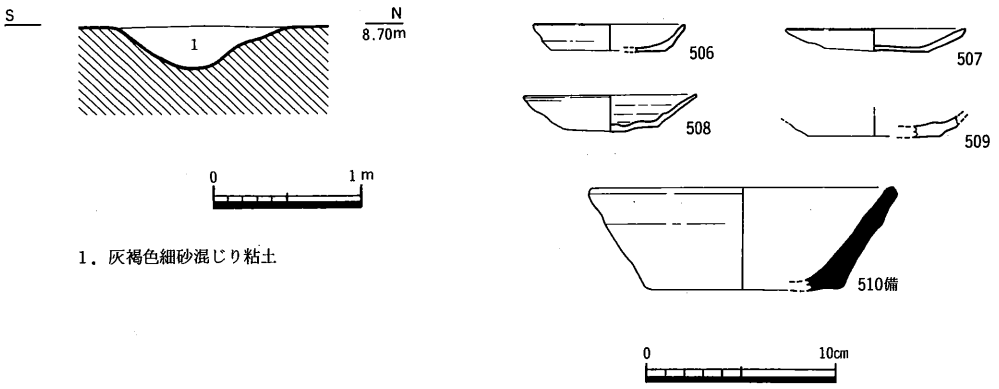
SD44　C－2区の北東部で検出された。コの字状に曲がる溝である。幅0.2～0.3m，深さ0.1mを測る。埋土は暗灰色粘土混じり細砂である。おそらく建物に関係する溝であろう。遺物は土師質土器皿などが数点が出土した。

SD61（第164図）　C－2区の東部SD20の西部で検出された。長さ3mの短い溝で，南北（N－3°－E）に走り，南部はハート状に二股に分かれる。幅0.3～0.4mを測り，深さ0.1mを測る。遺物は土師質土器鉢破片など2片が出土しただけである。

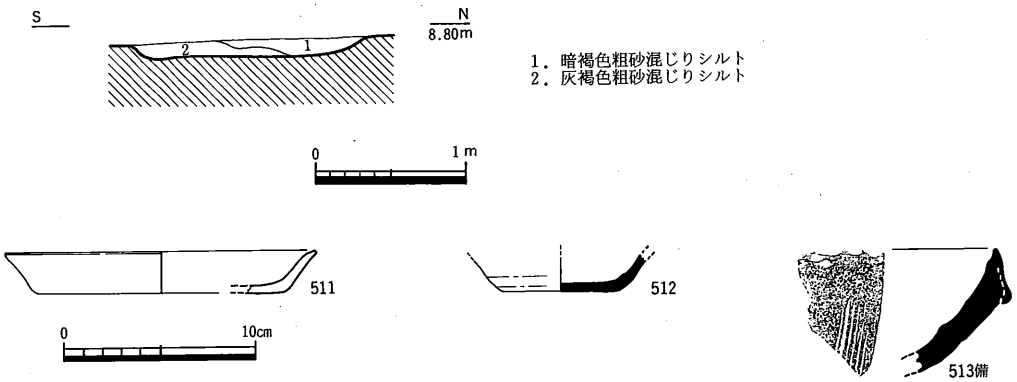
SD62（第165図）　C－2区の東部，SD20の南部で検出された。西南から北東方向（E－33°－N）に走る溝で，東部は南北に走るSD20に注ぐ。幅0.2m，深さ0.2mを測る。遺物は土



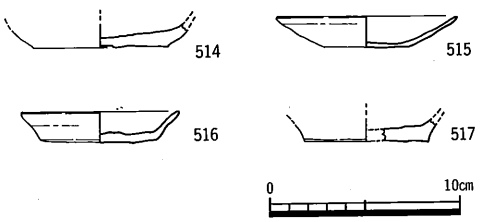
第166図　C地区第1面SD66断面図（1/50），出土遺物（1/4）



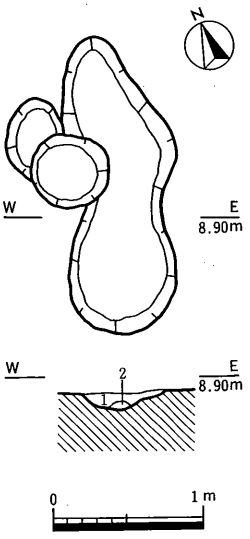
第167図　C地区第1面SD67断面図（1/50），出土遺物（1/4）



第168図　C地区第1面SD77断面図（1/50），出土遺物（1/4）



第169図　C地区第1面SX01出土遺物（1/4）



師質土器埦（501）・皿（502・503），砥石（504）のほか土師質土器土鍋，瓦質土器，亀山焼甕片がビニール袋中1袋程度出土した。501は高台部の形態から，13世紀代のものと考えられる。504は讃岐山脈で産する細粒砂岩（和泉砂岩）である。4面とも使用している。

SD66（第166図）　C－2区の東部で検出された。SK20・SD62・SD64・SD65に連続する。埋土はいずれも灰褐色細砂混じり粘土であり，切り合い関係はみられない。SK20の北部から北に向かって走り，東西に走るSD64に合流する。遺物は土師質土器皿（505）のほか土師質土器土鍋片が出土しただけである。

SD67（第167図）　C－2区の南部で検出された。SK20から西に延びる溝である。東西方向（E－15°－S）に走る溝である。幅0.3～0.4m，深さ0.3mを測る。遺物は土師質土器皿（506～509），備前焼こね鉢（510）のほか土師質土器擂鉢・土鍋片，瓦質土器片などビニール袋小1袋の遺物が出土した。

第170図　C地区第1面SX02
平・断面図(1/50)，出土遺物(2/3)

SD75　C－2南拡張区で検出された。南北方向（N－5°－E）に走る溝である。SD76と重複するが，平面的な切り合い関係よりSD76より新しいことが確認された。幅0.1～0.2m，深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

SD76　C－2南拡張区西南隅で検出された。南北（N－19°－S）に走り，南部はSD77に連続する。埋土は灰褐色粗砂混じりシルトである。遺物は出土しなかった。

SD77（第168図）　C－1南拡張区の東南隅からC－2南拡張区の西南隅で検出されたL字形の溝である。SD77は東西方向（E－15°－S）に走り，C－1南拡張区の東南隅で南に直角に曲がる。幅0.3～0.6m，深さ0.1mを測る。遺物は土師質土器皿（511），須恵器坏（512），備前焼擂鉢（513）のほか須恵器片，土師質土器土鍋片などビニール袋中1袋程度出土した。

512は平安時代のもので，513は口縁部の形態から備前焼第IV期，14世紀後半から16世紀初頭のものであると考えられる（註3）。

8）不明遺構

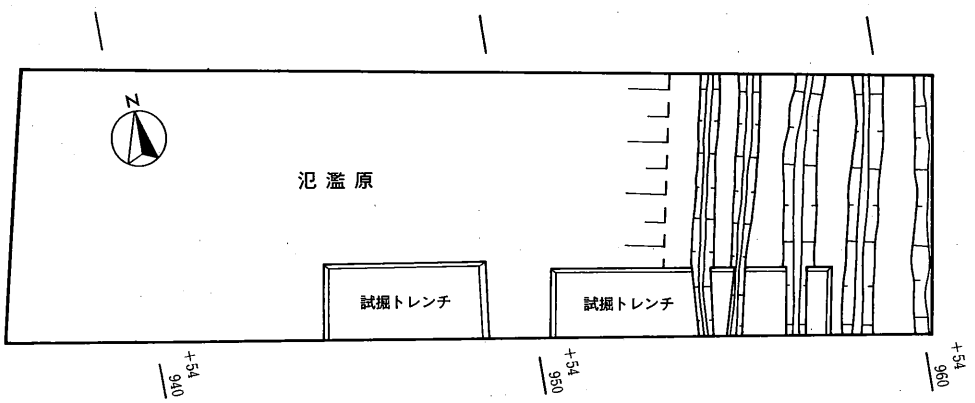
SX01（第169図）　C－1区中央部のSD04・05の合流部付近南側で検出された落ち込み状の遺構である。掘り方の平面形はややいびつな三角形状を呈し，SD04・05に向かって緩やかに傾斜する。深さは最深部で0.2mを測る。埋土はSD04・05と同質の土層が堆積していた。遺物は土師質土器皿（514～517）が出土した。

SX02（第170図）　C－1南拡張区の中央部で検出された遺構である。SB02と重複する。掘り方の平面形は中央部がややくびれたいびつな隅丸長方形を呈し，長軸2.0m，短軸0.8mを測る。断面形は浅い皿状を呈し，上面はかなり削平を受けたらしく深さは0.1mをとどめるに過ぎない。埋土は2層に分かれ，上層は暗茶灰褐色粘質シルトが，下層は炭層が堆積していた。下層は南半に集中する傾向が認められ，また床面に赤変部分は認められなかった。埋土より銅銭（518）が1枚出土した。

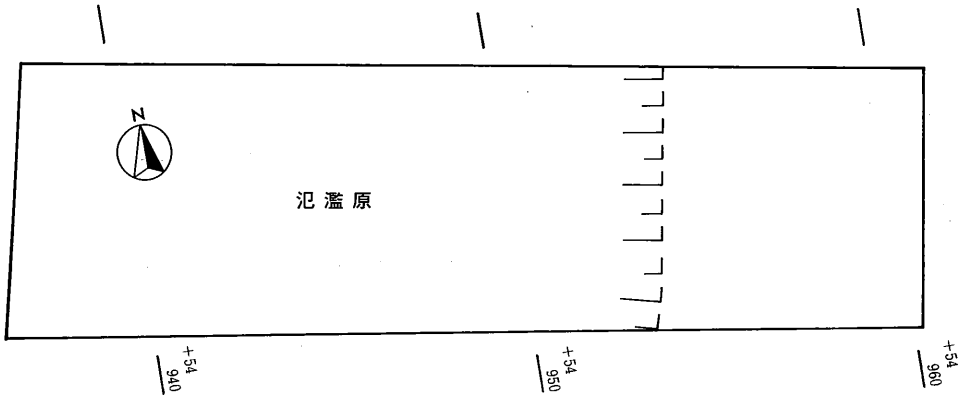
518は「政和通寶」で，北宋で1111年以降に鋳造されたものである。

第2面（第171図，図版42）

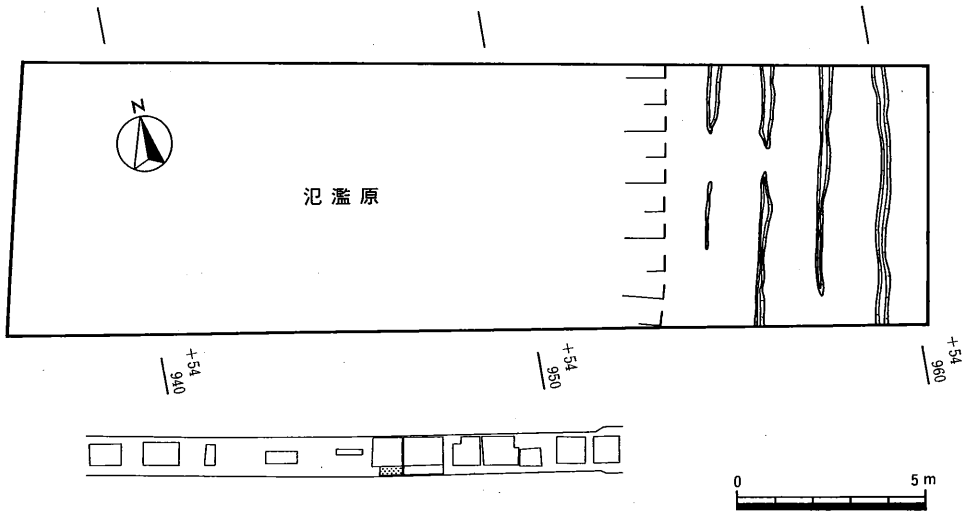
灰褐色シルト上面である。先述のように第2面はC地区全体に広がるが，第2面以下の遺構面についてはC－1南拡張区のみ平面的な調査を行なった。検出面の標高は8.60mを測る。なお，西部は氾濫堆積砂層に攪乱されて，遺構面は遺存していなかった。本遺構面では5条の畝溝群を検出した。畝溝群は，幅0.5m，深さ0.1m，溝間0.8～1.0m，主軸の方向N－13°－Eを測る。埋土は洪水堆積層と考えられる淡灰褐色シルトであった。耕作土は灰褐色シルトであるが，上部は上層の耕作により削平されていた。埋土からは遺物は出土しなかった。また，第1面よりも下位で，第2面よりも上位の層からは土師質土器などビニール袋小1袋程度の遺物が出土したが，詳細な時期のわかるものはみられなかったため，畑の廃絶時期については不明である。



第171図　Ｃ－１南拡張区第２面遺構配置図（1/200）



第172図　Ｃ－１南拡張区第３面遺構配置図（1/200）



第173図　Ｃ－１南拡張区第４面遺構配置図（1/200）

第3面（第172図，図版43）

濃灰褐色シルト層上面である。標高は8.45mを測る。本遺構面では明確な遺構は検出されなかったが，濃灰褐色シルト層の上面はほぼ水平に均され，下層に鉄分等の沈着が認められたことから濃灰褐色シルト層は耕作土層であると考えられる。この面は上層の耕作により，削平されており，畝溝などは検出できなった。第2面の下位で，第3面の上位層からは土師質土器などビニール袋小1袋程度の遺物が出土したが，詳細な時期のわかるものはみられなかった。

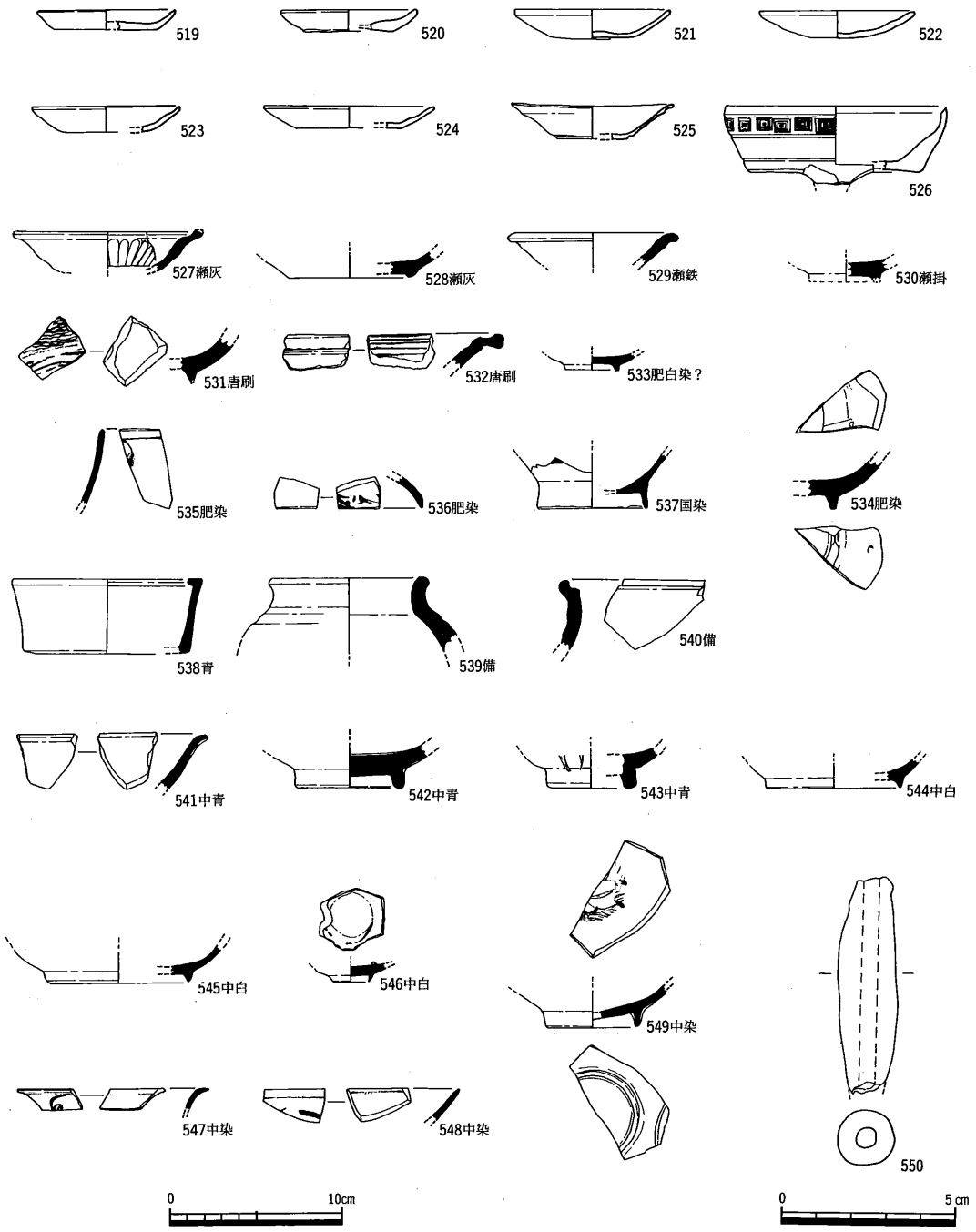
第4面（第173図，図版43）

灰褐色シルト層上面である。検出面の標高は8.30mを測る。この面では4条の畑の畝溝を検出した。溝は幅0.5m，深さ0.02m，溝間1.2～1.3m，主軸の方向N－13°－Eを測る。上層の耕作により，かなり削平されているため，溝は一部が切れており，残存はあまり良くない。埋土は洪水堆積層と考えられる淡灰褐色シルトであった。埋土からは遺物は出土しなかったため，廃絶時期は不明である。また，この面の下層の氾濫原からは土師質土器皿（568）・坏（569～572）など土師質土器がビニール袋小1袋程度出土した。詳細な時期については不明であるが，568は中世，569～572は古代あるいは中世のものと考えられる。

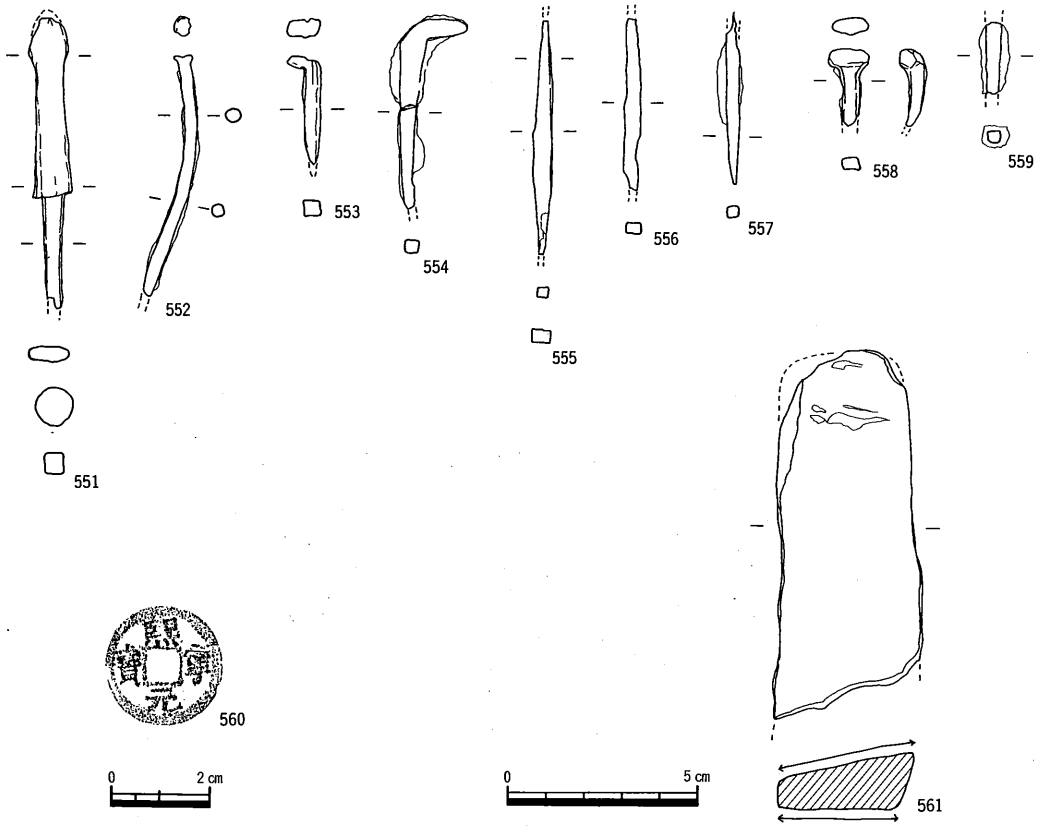
C－1・C－2区第1面上位層（第174・175図）

第1面上位層とする遺物は大部分が第1面直上から出土したものである。第1面上位層からは，土師質土器皿（519～525），瓦質土器香炉（526），瀬戸・美濃灰釉皿（527・528）・鉄釉皿（529）・掛分碗（530），唐津刷毛目碗（531）・刷毛目皿（532），肥前白磁または染付小坏（533）・染付碗（534・535）・青磁染付蓋（536），国産磁器染付碗（537），産地不明青磁香炉（538），備前焼壺（539）・壺または鉢（540），中国産青磁碗（541～543）・白磁皿（544・545）・白磁小坏（546）・染付皿（547）・染付器種不明（548）・染付碗（549），土錘（550），鉄鏃（551）・釘（553～559）・銅銭（560），砥石（561）のほか須恵器・亀山焼・軒丸瓦片などコンテナ2箱の遺物が出土した。

527は瀬戸・美濃灰釉皿である。折縁皿で，内面に菊花状の削ぎが入っている。大窯3段階，16世紀第3四半期のものである（註6）。528は底部破片で，全体は不明であるが，やや丸味を帯びた断面三角形の付高台であることより大窯1～2段階，15世紀末から16世紀中葉のものであると考えられる。529は鉄釉皿である。おそらく大窯期のもので，17世紀以前のものと考えられる。530は外面灰釉，内面鉄釉の掛分碗であるが，腰さび湯呑とも呼ばれるものである。18世紀前後のものであろう（註12）。531・532は唐津刷毛目碗・皿であるが，いずれも17世紀半から18世紀代のものである（註4・5）。533は肥前白磁または染付小坏であるが，17世紀後半から18世紀代のものである。534は肥前染付碗である。蛇の目釉剝ぎが内面にみられる（註4）。外面には丸文を染付し



第174図　Ｃ－1・Ｃ－2区第１面上位層出土遺物〔１〕(1/4, 1/2)



第175図　C－1・C－2区第1面上位層出土遺物〔2〕(1/2, 2/3)

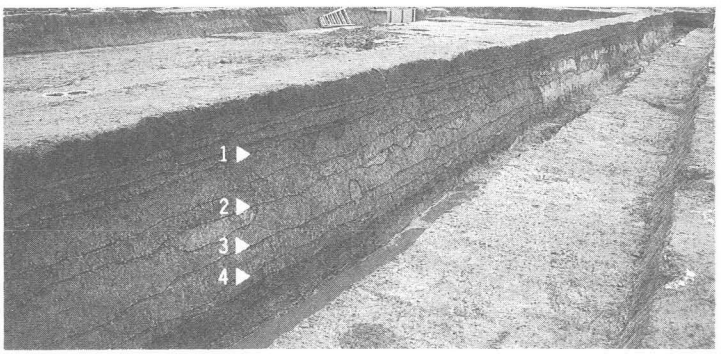
ていることから，波佐見窯系で18世紀後半のものであると考えられる。535は肥前染付碗であるが，時期は不明である。536は肥前青磁染付碗の蓋である。18世紀後半のものと考えられる。537はいわゆる広東型の碗で18世紀末から19世紀代のものである。538は肥前か中国産であるか不明である。器種は香炉である。541～543は中国産青磁碗で，龍泉窯系である。541は口縁部が端反りであることから，上田氏分類のD類で，14世紀後半から15世紀中葉のものである(註8)。542は底部外面を環状に釉剝ぎすることから，14世紀後半から16世紀前半のものであると考えられる。543は外面に線彫り蓮弁を施す。15世紀後半のものである。544・545は中国産白磁皿で，546は中国産白磁小坏である。いずれも高台が小さく，断面三角形状になることから，森田氏分類のE群と呼ばれるもので，16世紀代のものである(註7)。546は底部内面に別個体の一部が焼成時についており，この部分には環状釉剝ぎがみられる。547は中国産染付皿である。口縁部が外反する端反りのものである。小野氏の分類によるB群で，15世紀後半から16世紀前半のものであると考えられる(註13)。548は中国産染付であるが，口縁部破片であるので，器種は不明である。碗か皿であろう。16世紀後半のものと考えられる。549は高台に砂が付着することから，上田氏分類の碗C－V類にあたるものと考えられる。見込に蓮の花が描かれており，15世紀末から16世紀中葉のものであると考えられる。552は丸釘，553～559は角釘である。560は銅銭で，北宋で1068年より鋳造

の始まった「熙寧元寶」である。561は砥石である。端部を欠損するが，幅3.8cmと小さいことから，持運び用であると考えられる。裏表の２面使用している。石材は凝灰岩質流紋岩である。

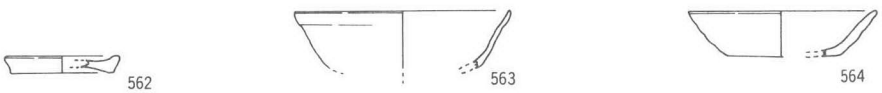
Ｃ－２区第１面下位層（第180図）

土師質土器皿（573），中国産白磁皿（574），備前焼壺（575）など少量の遺物が出土した。

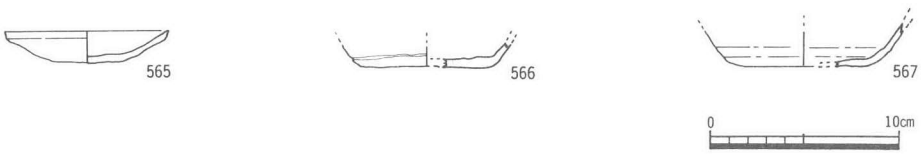
574は切高台のもので，高台外面から底部外面にかけては無釉である。森田氏の分類のＤ群にあたる。15世紀代のものであろう（註７）。



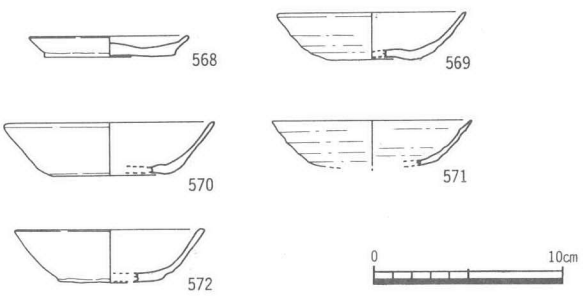
第176図　Ｃ－１区南壁土層断面



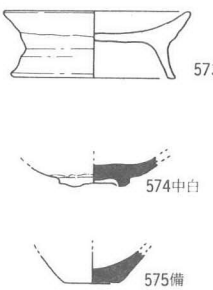
第177図　Ｃ－１区第１面下位，第２面上位層出土遺物（1/4）



第178図　Ｃ－１区第２面下位，第３面上位層出土遺物（1/4）



第179図　Ｃ－１区第４面下位層出土遺物（1/4）



第180図　Ｃ－２区第１面下位層出土遺物（1/4）

4．D地区

D地区は3小区に分けて調査を行なった。西よりD－1～D－3区とそれぞれ呼称する。D－1・2区では2面，D－3区では1面の遺構面が確認された。

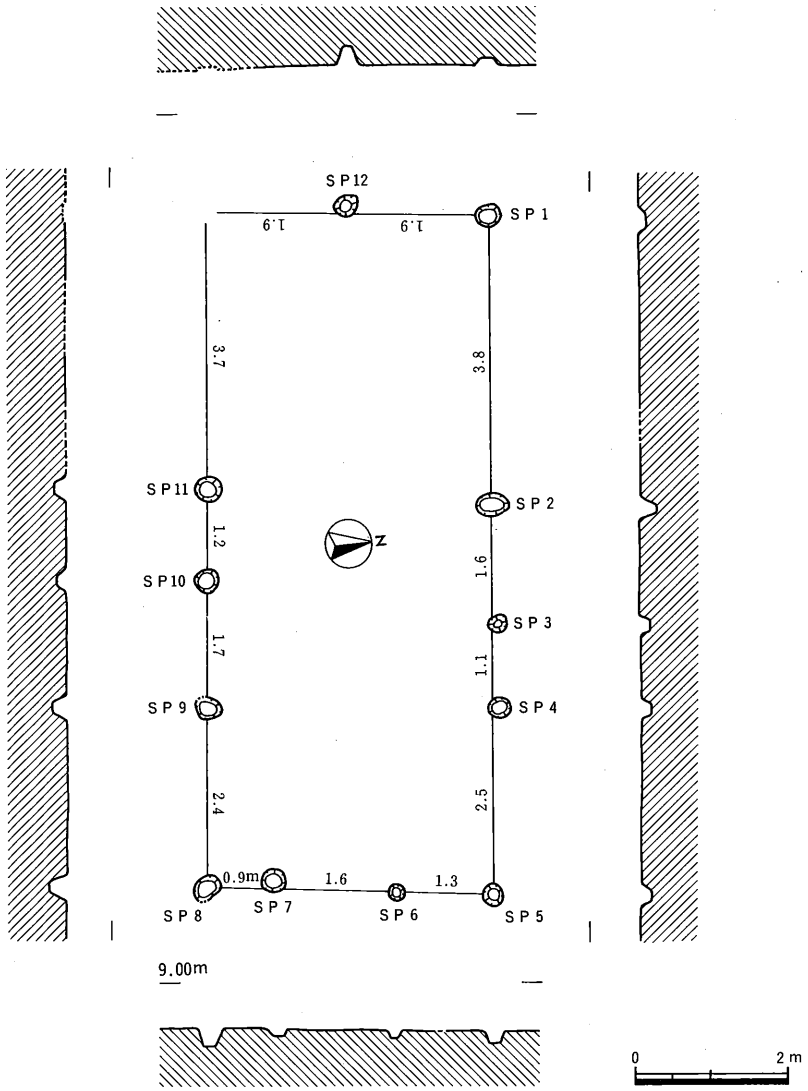
第1面は，各調査区の耕作土直下で検出した。検出面の標高は8.5mを測る。D－1区では暗灰橙褐色粘質シルト，D－2・3区では明黄褐色細～粗砂と明黄灰褐色砂質シルトをベースとしている。これらの土層は，第3章第1節で詳述しているように，ラミナー堆積を繰り返し繁雑な状況を示していることから旧河道の氾濫堆積層と考えられ，第1面はこれら氾濫堆積がおさまった後に形成されている。D－1区では畝溝や井戸，D－2・3区では区画溝で画された屋敷地とそれに付随する各種遺構を検出した。これらの遺構の所属時期は，16世紀後半から17世紀前半が主体を占め，一部18世紀に降るものも認められた。また本遺構面は，C地区第1・2面およびE地区第1面の遺構と時期的に併行する。なおD－1区では，調査の都合上第2面まで重機によって掘り下げて調査を行なったため，いくつかの遺構で掘り込み位置が捉えられなかったものもあり，これらは第1面に含めて記述している。

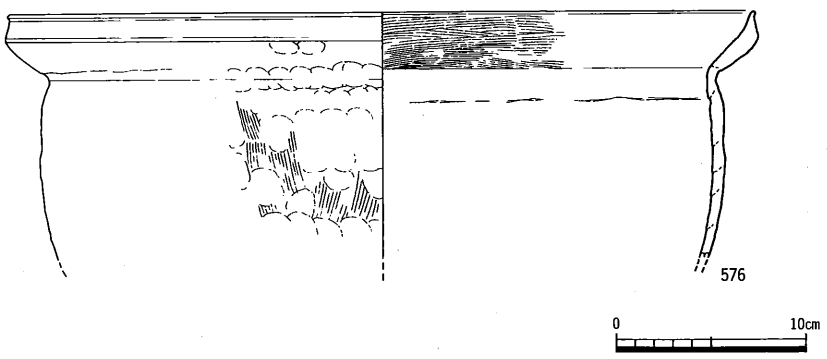
第2面は，D－1区とD－2区西端部分で検出した。D－1区第1面のベース層である暗灰橙褐色粘質シルトを包含層とし，濃灰橙褐色粘質シルトを掘り込んで形成される。検出面の標高は8.1mを測る。D－2区の大半とD－3区では，第1面ベース層の黄褐色砂層が検出面下2m以上堆積しており，第2面はこの砂層に攪乱されて確認できなかった。またこの砂層は西に傾斜して緩やかに落ち込み，D－1区では標高7.8m以下で確認された。この凹地部分にはシルト質の土層が0.3～0.5m堆積し，砂層堆積後の安定した状態を示している。つまりD地区は全域が河道範囲で，その中を流路が蛇行を繰り返しており，この河道は第1面形成前まで機能していたと推定される。そしてD－1区では，こうした河道の流路がD－2・3区に固定したことによって浸食を免れ，第1面形成前に比較的安定した遺構面が形成されたと理解できる。第2面では溝5条を検出した。出土遺物が少なく遺構の所属時期は明確にし難いが，14～15世紀を中心とする時期と考えている。

第1面

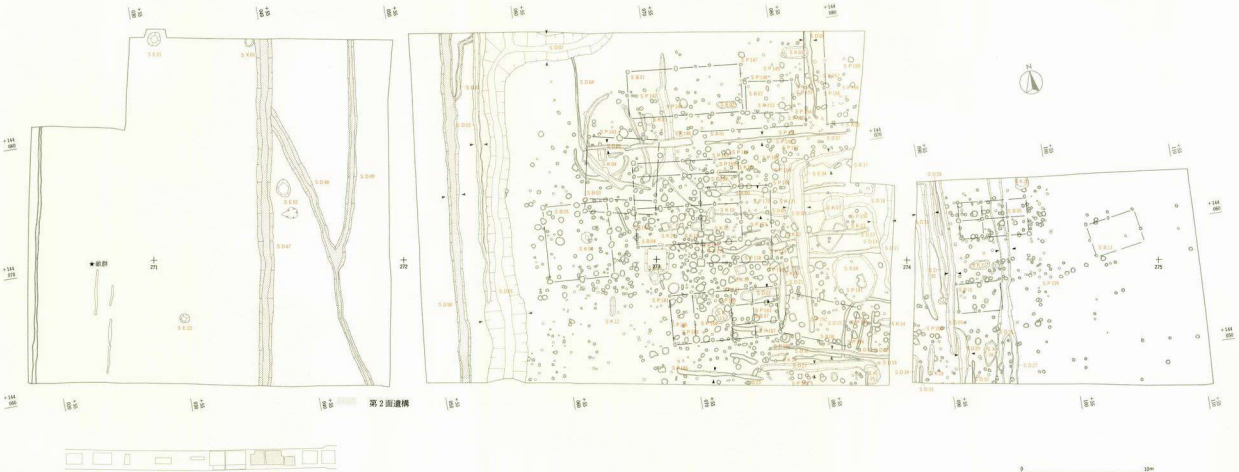
1）掘立柱建物

SB01（第182図）　D－2区北部で検出された東西棟の掘立柱建物である。桁行4間（9.1m），梁行は東列で3間（3.8m），床面積は34.6m²を測る。主軸方向はE－5°－Sである。柱間は，桁行1.2～3.8m，梁行1.0～2.0mを測る。柱穴掘り方の平面形はいずれも円形で，径0.2～0.3m，深さ0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。柱間距離にばらつきが大きいことなどにやや疑問も残るが，SD04～05と整った配置関係にあることからこの規模の掘立柱建物と推定した。

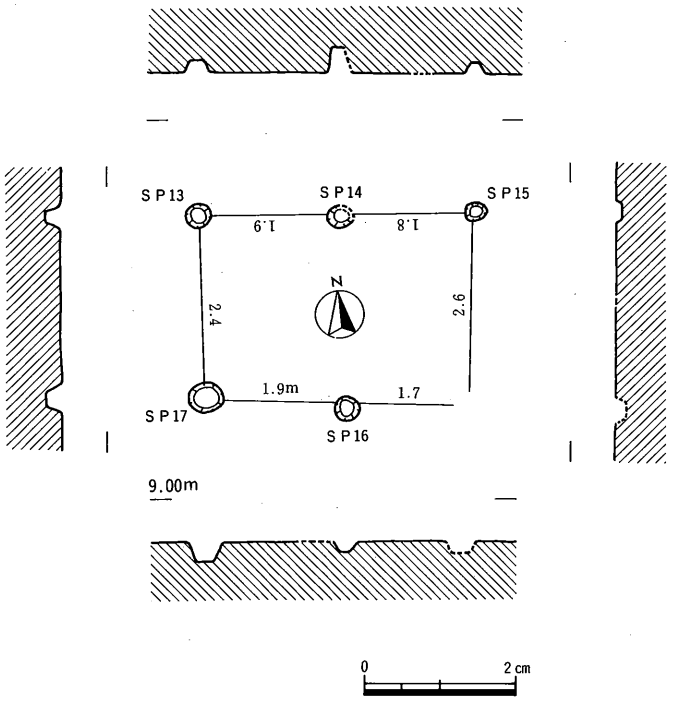




第181図　Ｄ地区第１面ＳＢ01平・断面図（1/100），出土遺物（1/4）



第182図　D地区第1・2面遺構配置図（1／200）



第183図　D地区第1面SB02平・断面図（1/100）

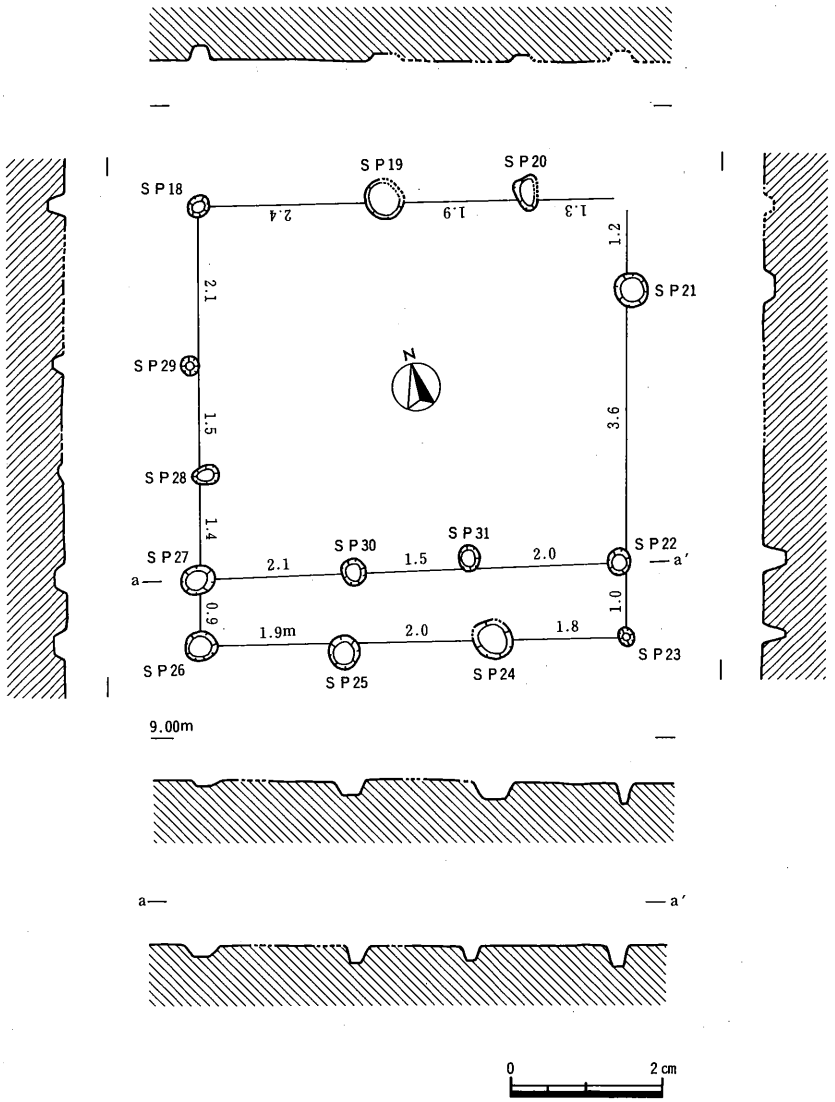
遺物は，SP07より土師質土器土鍋（576）が出土している。

SB02（第183図）　SB01に東接して検出された東西棟の掘立柱建物である。南東隅の柱穴を欠く。桁行2間（3.8m），梁行1間（2.5m），床面積は9.5m²を測る。主軸方位はE－5°－Sである。柱間は桁行1.7～1.9m，梁行2.4～2.6mを測る。柱穴掘り方の平面形はいずれも円形で，径0.3～0.5m，深さ0.1～0.3mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

SB03（第184図）　D－2区西半部で検出された，南面に廂を伴うほぼ正方形の掘立柱建物である。北東隅の一穴と東列側柱の北第3穴を欠く。桁行3間（5.6m），梁行3間（4.8～5.0m），床面積は28.0m²を測る。主軸方向はE－10°－Sである。柱間は，桁行1.3～2.4m，梁行1.4～2.1mを測る。柱穴掘り方の平面形はいずれも円形で，径0.2～0.5m，深さ0.1～0.3mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

SB04（第185図）　D－2区ほぼ中央で検出された，北面に廂を伴う東西棟の掘立柱建物である。SB03・06と重複し，柱穴の切り合い関係からSB03に先行することが確認された。SB06との先後関係は不明である。廂の西第2穴と北列側柱の一部を欠く。桁行4間（8.2m），梁行4間（5.5m），床面積は45.1m²を測る。主軸方向はE－6°－Sである。柱間は，桁行1.7～2.5m，梁行1.1～1.8mを測る。柱穴掘り方の平面形は楕円形または円形で，径0.2～0.5m，深さ0.1～0.3mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

遺物は，柱穴より中国産染付皿（577）が出土した。外面に唐草文を描く端反りの皿で，小野氏

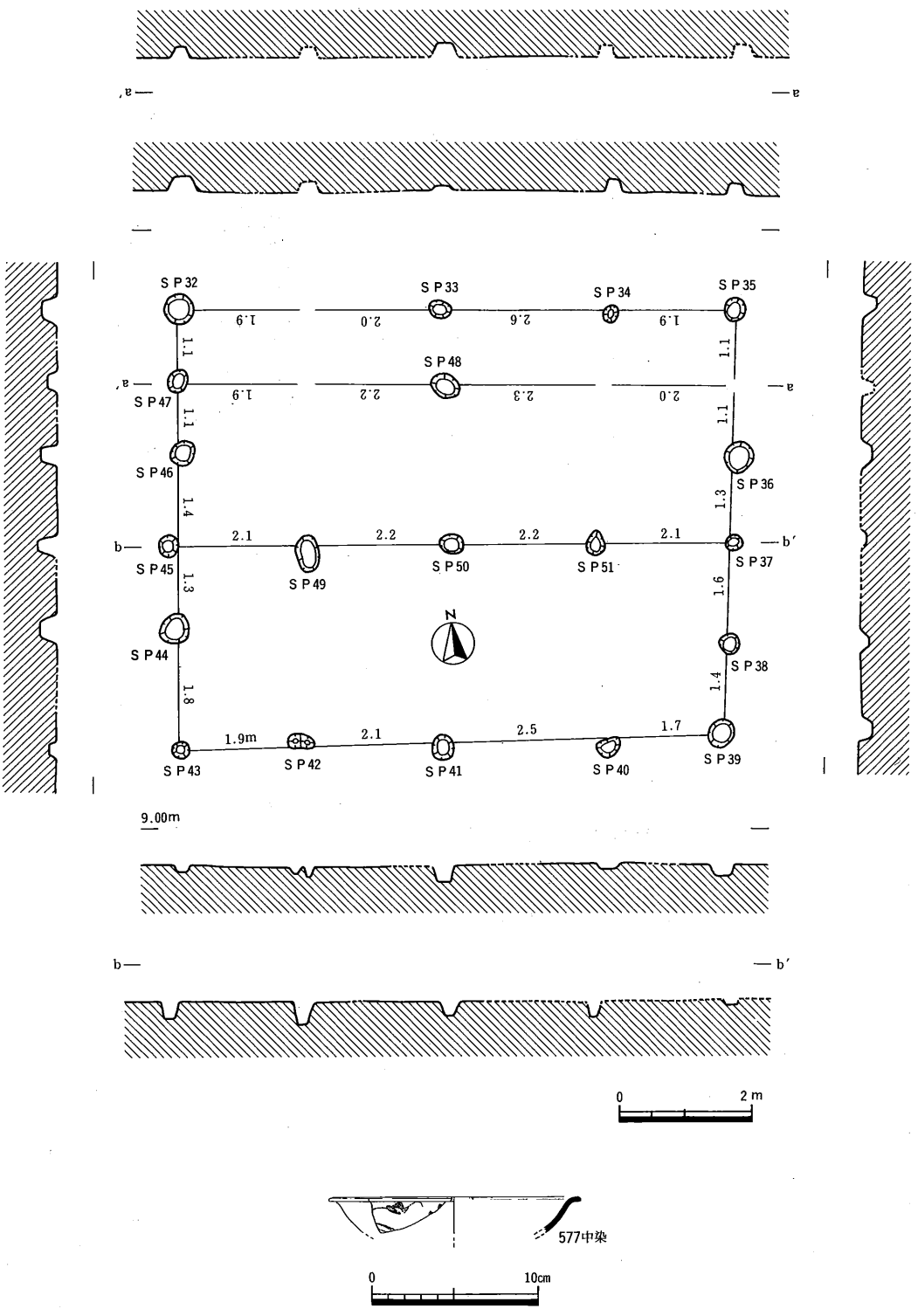


第184図　Ｄ地区第１面ＳＢ03平・断面図（1/100）

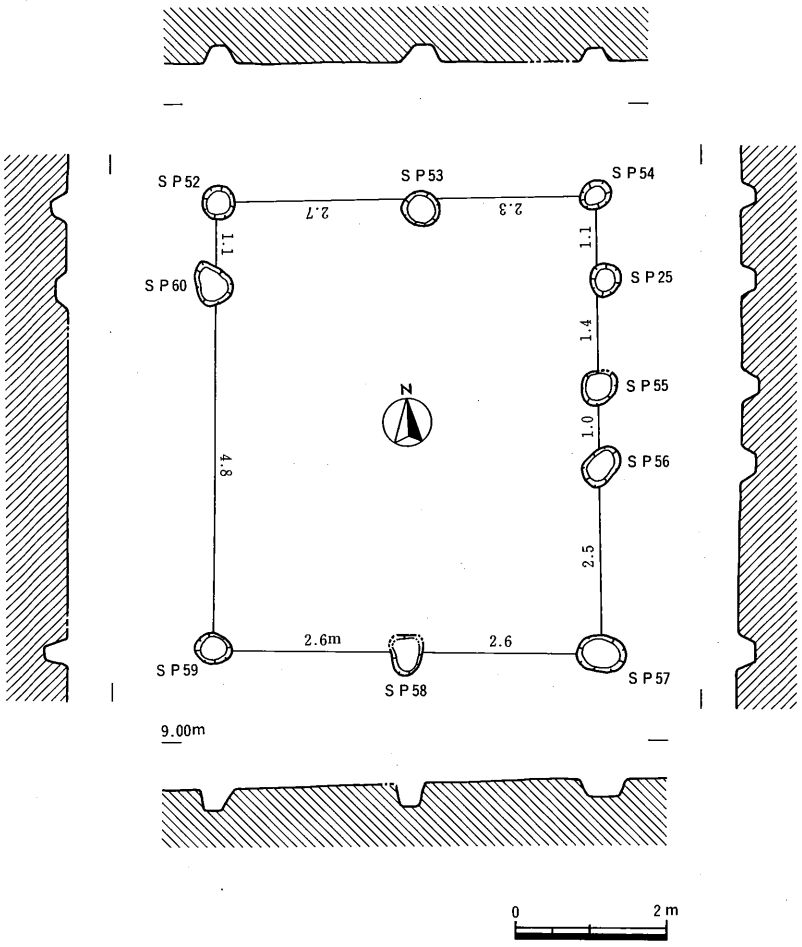
の分類（註13）のＢ１群皿Ⅶ類に属する。

ＳＢ05（第186図）　Ｄ－２区西半部で検出された南北棟の掘立柱建物である。ＳＢ03と重複するが先後関係は不明である。西列側柱の一部を欠く。桁行３間（6.0m），梁行２間（5.2m），床面積は31.2㎡を測る。主軸方向はＮ－４°－Ｅである。柱間は，桁行1.0～2.5m，梁行2.3～2.7mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.4～0.6m，深さ0.2～0.3mを測る。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質シルトが主体を占める。

ＳＢ06（第187図）　Ｄ－２区中央部で検出された南北棟の掘立柱建物である。東列側柱の北第２穴を欠く。桁行３間(6.0m)，梁行２間(5.5m)，床面積は33.0㎡を測る。主軸方向はＮ－８°



第185図　D地区第1面SB04平・断面図（1/100），出土遺物（1/4）

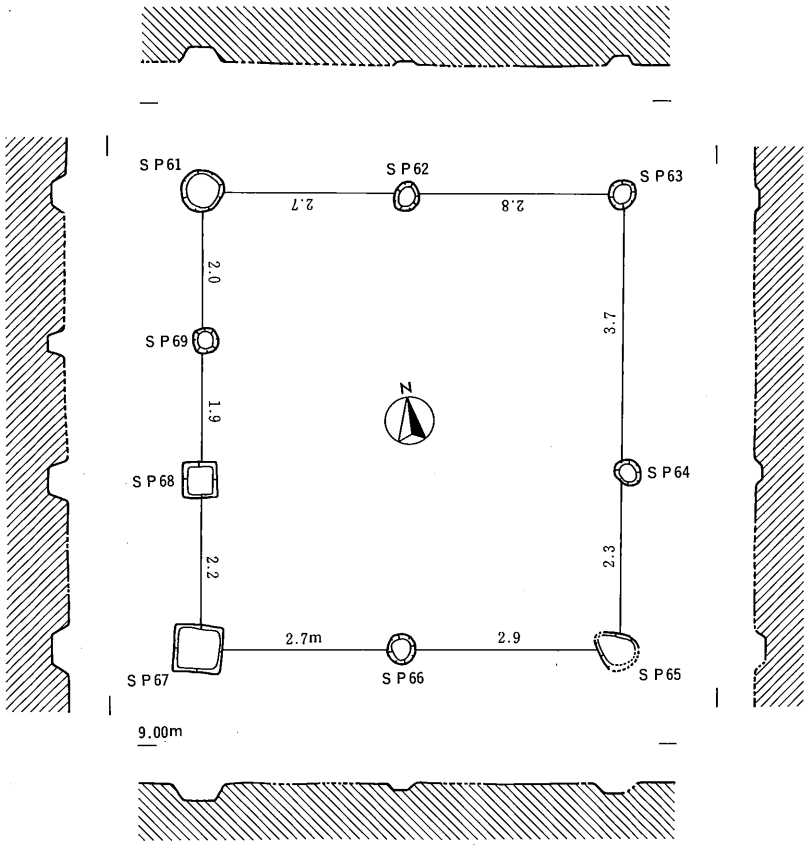


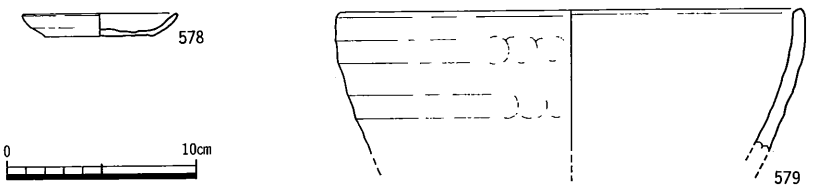
第186図　Ｄ地区第１面ＳＢ05平・断面図（1/100）

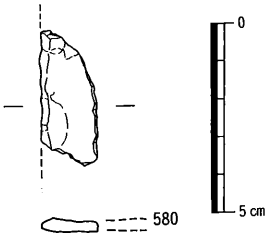
－Ｅである。柱間は，桁行1.9～2.3m，梁行2.7～2.9mを測る。柱穴掘り方の平面形は方形または円形で，一辺または径0.4～0.6m，深さ0.1～0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

遺物は，柱穴より土師質土器皿（578），同こね鉢（579），不明鉄製品（580）が出土した。

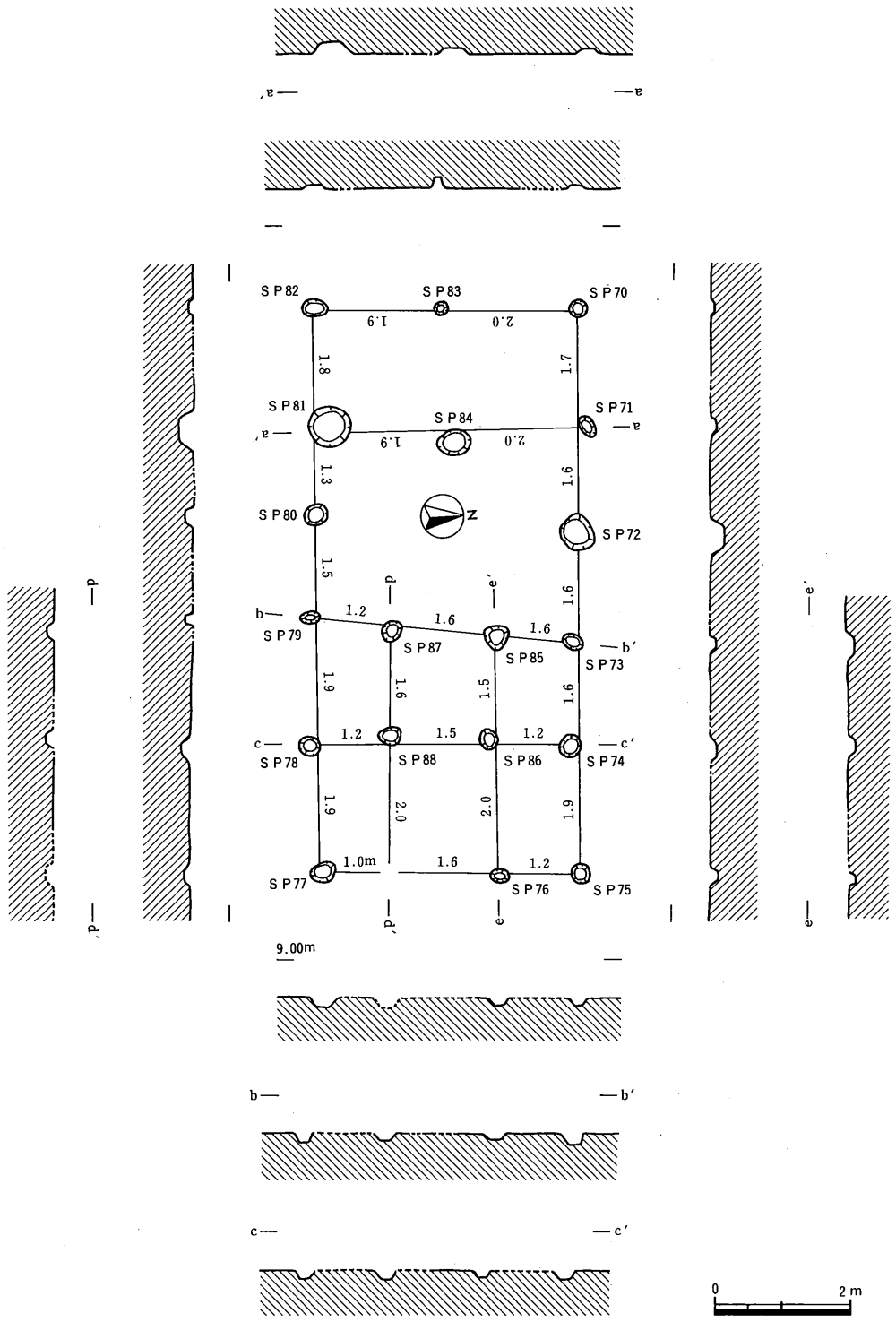
ＳＢ07（第188図）　Ｄ－２区南部で検出された東西棟の掘立柱建物である。東列側柱の北第３穴を欠く。桁行５間（8.2m），梁行は西半２間，東半３間（3.8m），床面積は31.2m²を測る。主軸方向はＥ－３°－Ｓである。建物の桁行東２間には束柱を伴うことから，東半部は床張り，西半部は土間とみることが出来る。床部分の面積は12.9m²，土間部分は18.3m²を測る。柱間は，桁行1.3～2.0m，梁行は床部分で1.0～1.6m，土間部分で1.9～2.0mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.2～0.6m，深さ0.1～0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。



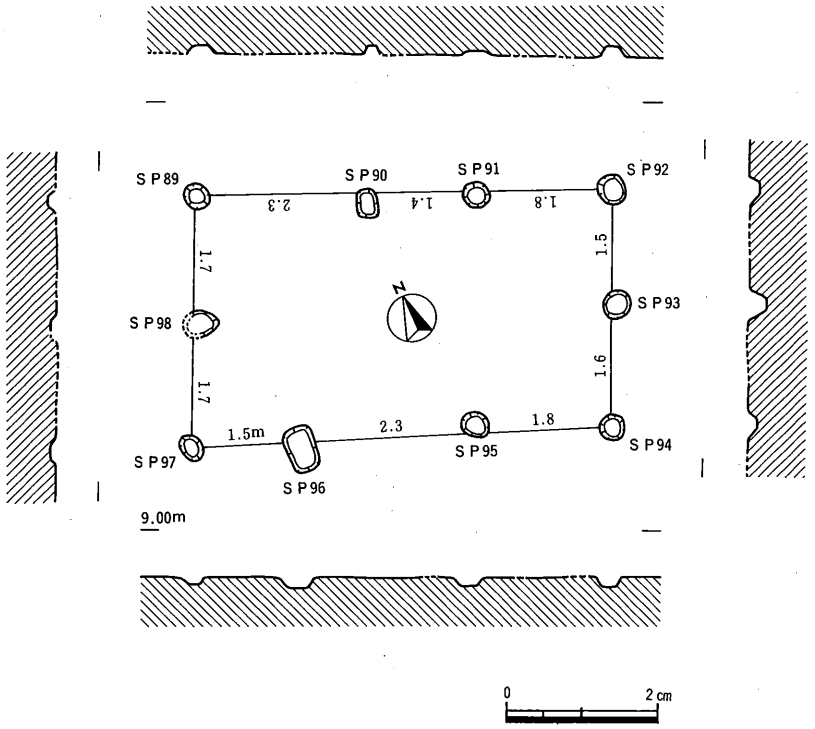




第187図　D地区第1面SB06平・断面図（1/100），出土遺物（1/4，1/2）



第188図　Ｄ地区第１面ＳＢ07平・断面図（1/100）



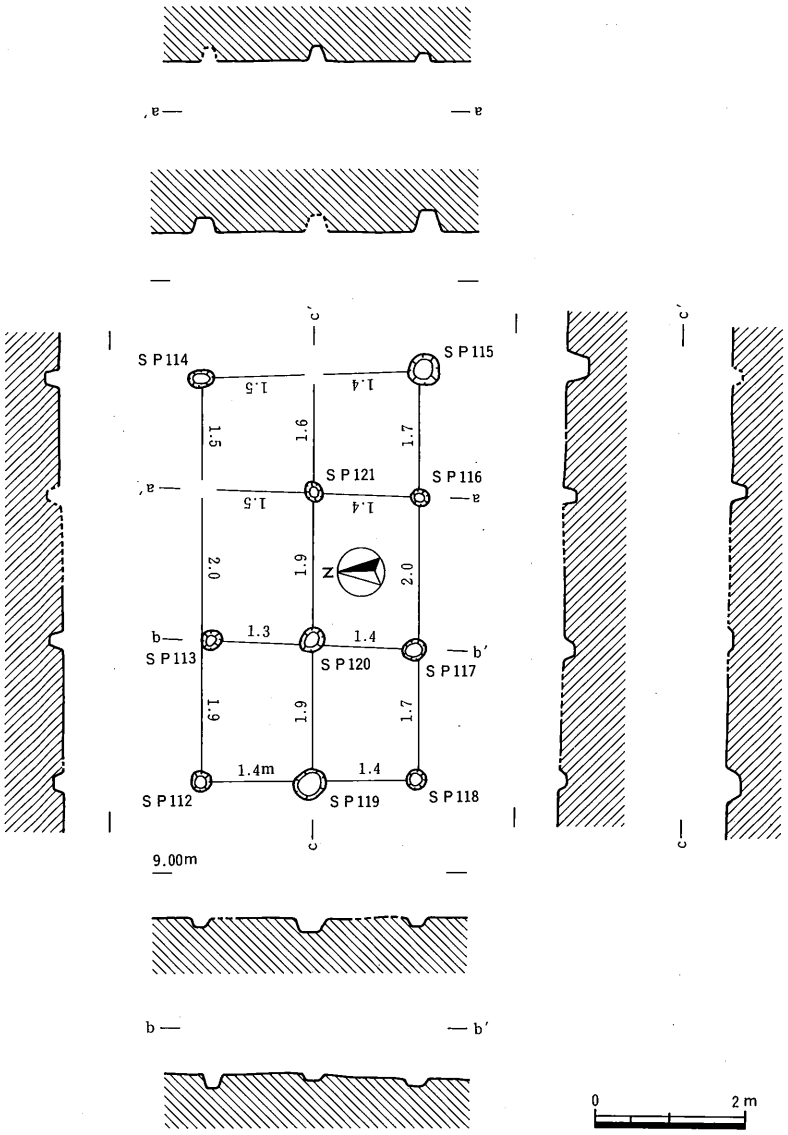
第189図　D地区第1面SB08平・断面図（1/100）

SB08（第189図）　D－2区南部で検出された東西棟の掘立柱建物である。桁行3間（5.6m），梁行2間（3.3m），床面積は18.5m²を測る。主軸方向はE－22°－Sである。柱間は，桁行1.4～2.3m，梁行1.5～1.7mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または隅丸方形で，径または一辺0.4～0.6m，深さ0.1～0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

SB09（第190図）　D－3区北西部で検出された東西棟の総柱建物である。東列および北列の側柱の一部を欠く。桁行3間（5.4m），梁行2間（2.8m），床面積は15.1m²を測る。主軸方向はE－5°－Sである。柱間は，桁行1.5～2.0m，梁行1.4～1.5mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.3～0.5m，深さ0.1～0.3mを測る。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質シルトが主体を占める。

SB10（第191図）　D－3区西部で検出された東西棟の掘立柱建物である。南東隅の柱穴は，推定される位置で根石と思われる石材を検出したのみで，明確な掘り方は検出できなかった。桁行2間（3.4m），梁行1間（2.3m），床面積は7.8m²を測る。主軸方向はE－3°－Sである。柱間は，桁行1.5～2.0m，梁行2.3mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.2～0.3m，深さ0.1～0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

SB11（第192図）　D－3区北東部で検出された東西棟の掘立柱建物である。南列側柱の一部を欠く。桁行2間（4.0m），梁行2間（2.6m），床面積は10.4m²を測る。主軸方向はN－81°－Eである。柱間は，桁行1.9～2.1m，梁行0.9～1.7mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または

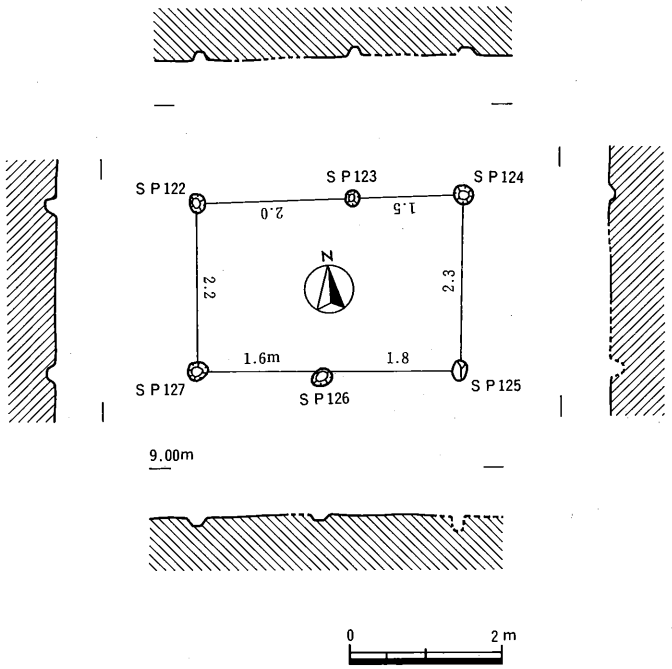


第190図　D地区第１面ＳＢ09平・断面図（1/100）

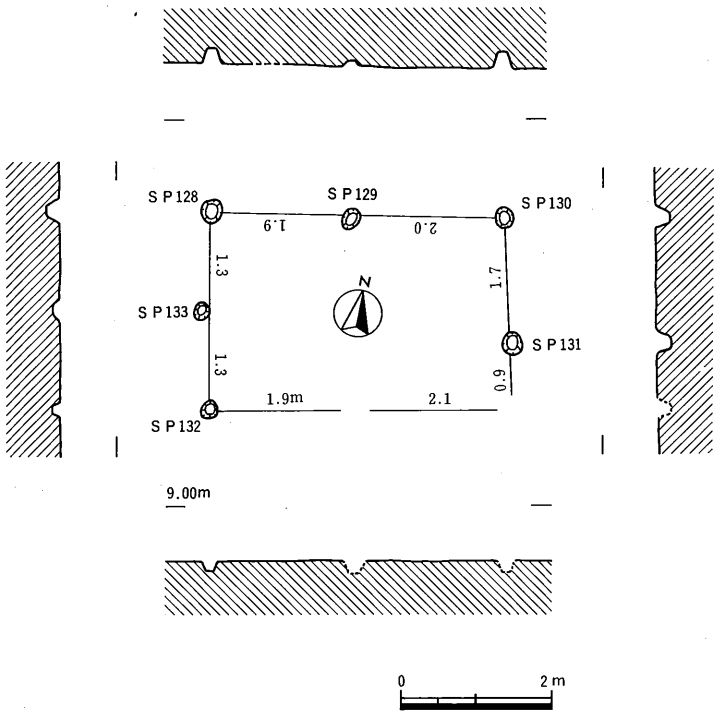
楕円形で，径0.2～0.3m，深さ0.2～0.3mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

２）柵列

ＳＡ01（第181図）　Ｄ－２区北部で検出された平面Ｌ字状を呈する柵列である。ＳＢ01，ＳＤ07・08，ＳＡ02と整った配置関係を呈しており，同時併存の可能性がある。東西列３間（8.9m），南北列１間（2.9m）を検出した。南北列は更に北に延び，調査区外に続くものと思われる。東西列の主軸方向はＥ－５°－Ｓである。柱間は，東西列2.7～3.2m，南北列2.9mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.2～0.5m，深さ0.2～0.3mを測る。柱穴の埋土は



第191図　D地区第１面ＳＢ10平・断面図（1/100）



第192図　D地区第１面ＳＢ11平・断面図（1/100）

灰褐色粘質シルトが主体を占める。

ＳＡ02（第181図）　Ｄ－２区ＳＡ01とはＳＤ08を隔てて隣接して検出された，平面Ｌ字状を呈する柵列である。東西列１間（2.0m），南北列２間（5.1m）を検出した。両列共に調査区外に延びると思われる。南北列の主軸方向はＮ－５°－Ｅである。柱間は，東西列2.0m，南北列2.3～2.8mと東西列がやや狭い。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.2m，深さ0.1～0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

３）井戸

ＳＥ01（第193・194図，図版51・52）　Ｄ－１区北西隅付近で検出された井戸である。掘り方の平面形はほぼ円形を呈し，径1.1m，深さ1.1mを測る。井戸枠は，ほぼ平坦な底面の上に人頭大程度の安山岩の塊石を積み上げた石組で，内径0.4mを測る。その積み方は，一周７～８個の石材を横積みし，３～４段まで螺旋状に積み上げていた。また，井戸枠の内側には，井戸廃棄時に石組を一部破壊しながら埋め戻したらしく，若干の石材が落ち込んでいた。本地点では，井戸掘削面下0.6mで透水層（12層）に達する。ＳＥ01はこの透水層を0.5m掘り抜いて作られており，透水層部分を中心に石組が認められた。つまり，透水層自体が浅い位置にあるため，石組の高さが低く簡略な構造となっていると考えられる。

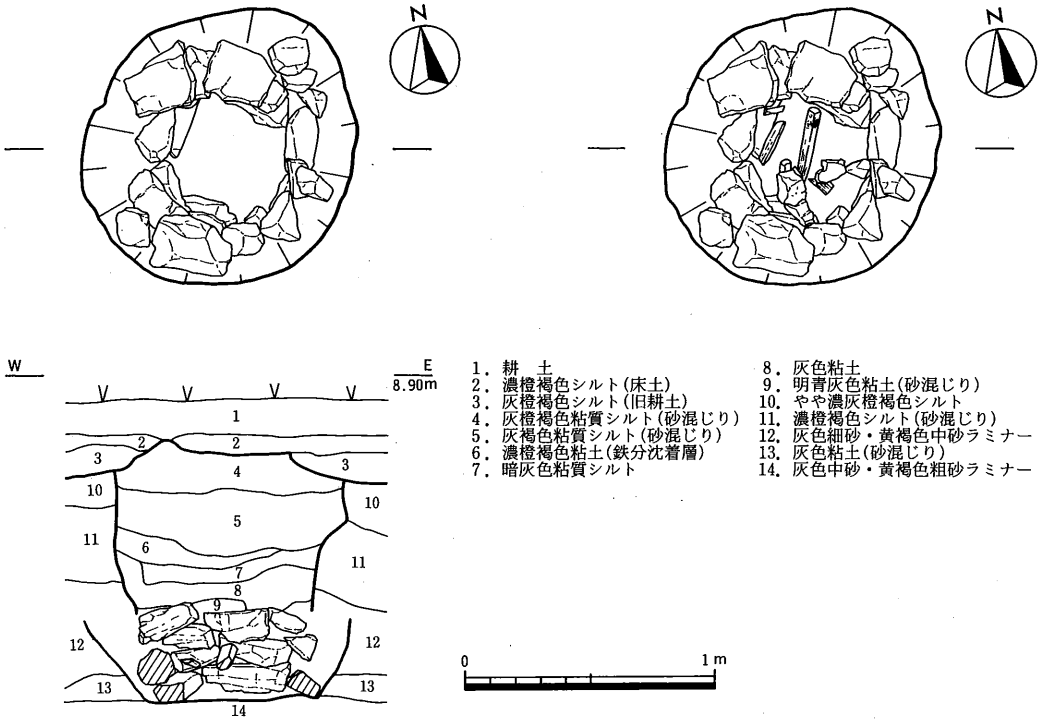
遺物は，井戸枠内より瓦質土器焙烙（581），肥前の陶胎染付碗（582），木製品（583～585）が出土した。583は組合せ式の桶底板である。短側面に４本，長側面に２本の径３㎜程の円形の目釘穴があり，長側面の一穴には木釘が遺存していた。材はヒノキ属の一種で板目板を使用する。584は柄状の木製品である。先端を欠損しているため用途は特定できない。585は芯持丸太材の両端を切断し，側面を幅4.5cm程面取りして平坦面を作っている。完形品ながら用途は特定できない。

出土遺物から，ＳＥ01は18世紀には廃棄されたと考えられる。

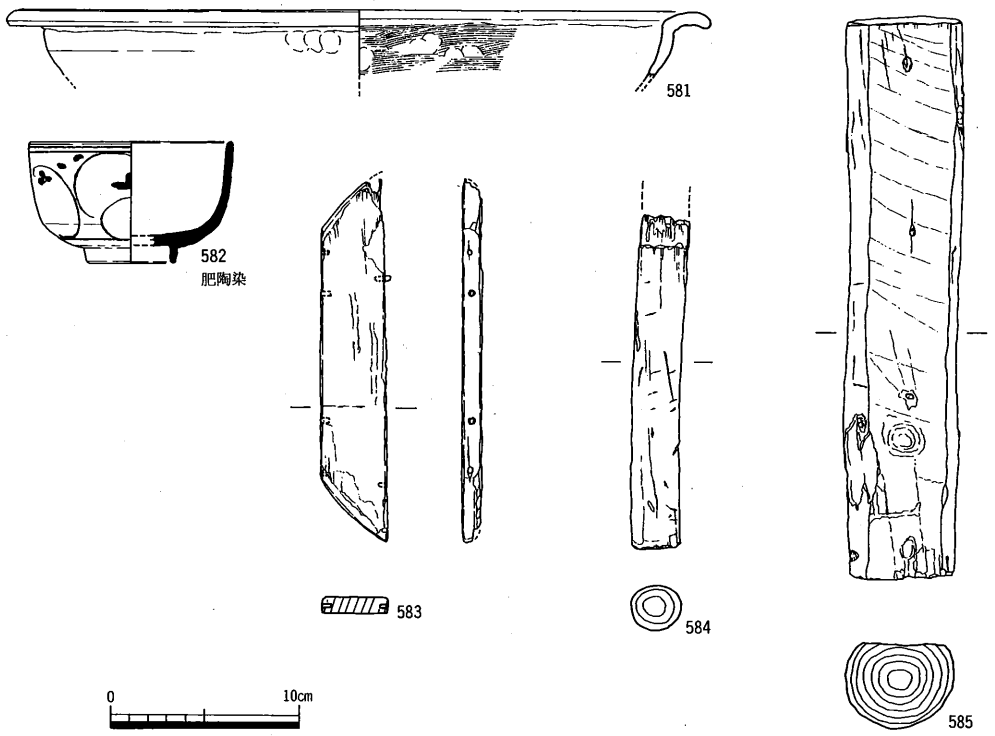
ＳＥ02（第195図，図版53）　Ｄ－１区のほぼ中央で検出された素掘りの井戸である。前述したように，第２面まで重機によって掘り下げたため，掘り込み位置は正確には把えられなかった。掘り方の平面形は卵形状を呈し，長径1.4m，短径1.1m，深さ0.25mを測る。断面形はややいびつな逆台形状を呈し，東肩は直に近く掘り込まれ，西肩はゆるやかに立ち上がる。床面には，若干の凹凸が認められた。埋土は，大きく２層に分かれる。上層（１層）は灰褐色粘質シルト，下層（２・３層）はグライ化した青灰色シルトが堆積していた。井戸枠等の施設は認められなかったが，埋土下層が滞水状態下で堆積したと思われることや，透水層である黄褐色砂層を掘り抜いて構築されていること等から，井戸と推定した。

遺物は，土師質土器皿と羽釜の細片が数点出土したのみである。

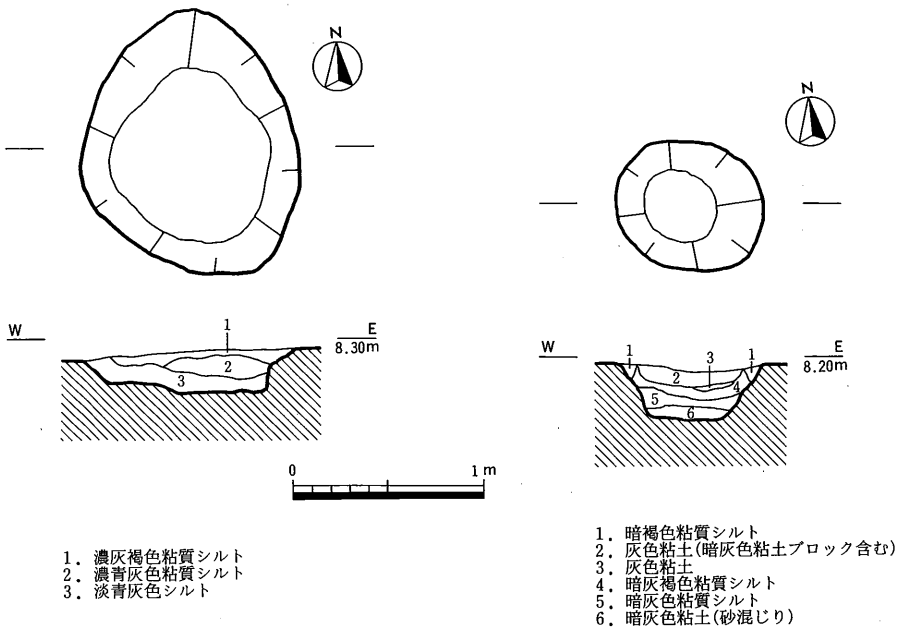
ＳＥ03（第195図，図版53）　Ｄ－１区南西部で検出された素掘りの井戸である。本井戸も掘り込み位置は正確には把えられなかった。掘り方の平面形はほぼ円形を呈し，径1.0m，検出面から



第193図　Ｄ地区第１面ＳＥ01平・断面図（1/30）



第194図　Ｄ地区第１面ＳＥ01出土遺物（1/4）



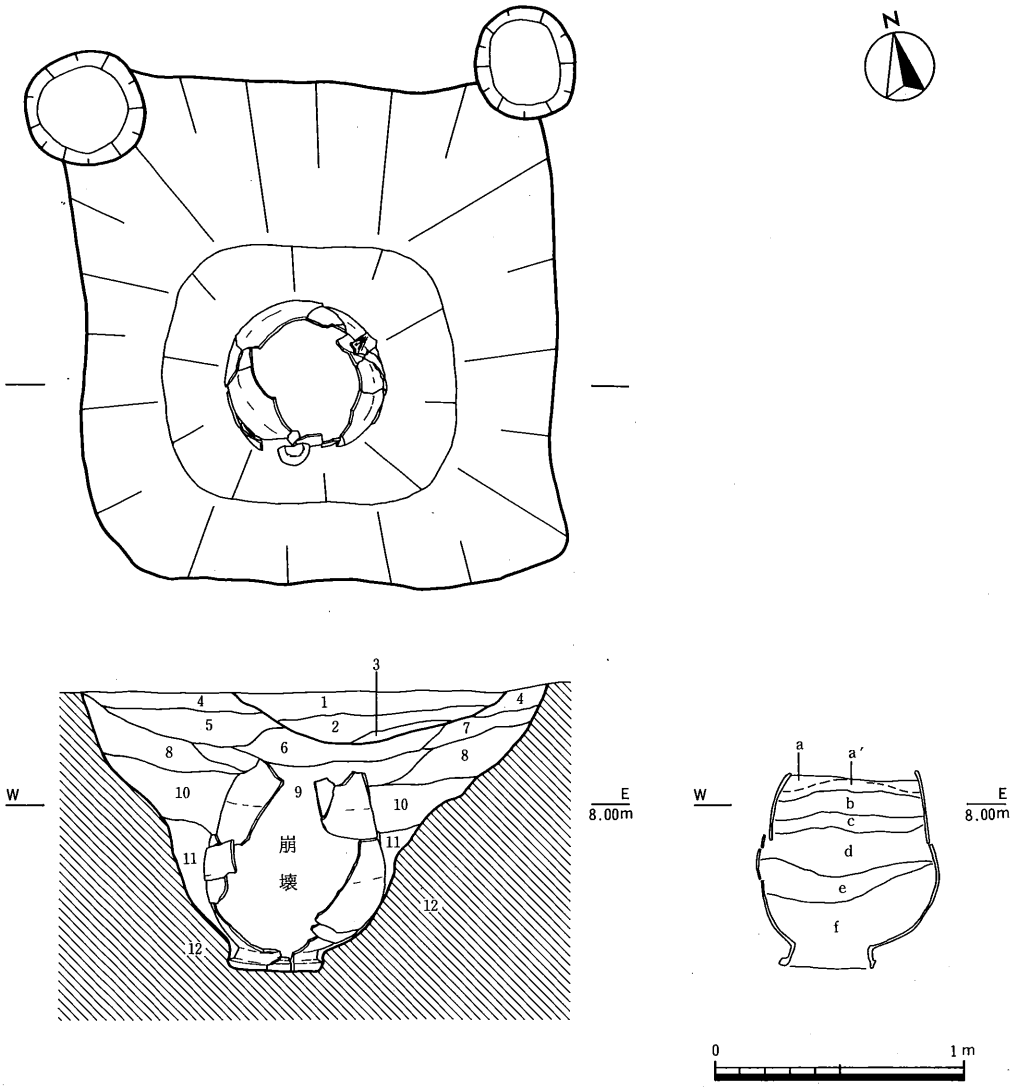
第195図　D地区第1面ＳＥ02，ＳＥ03平・断面図（1/40）

の深さ0.3mを測る。壁面は緩やかに掘り込まれ，底面はほぼ平坦で，断面形は整った逆台形状を呈する。埋土は，灰色粘土と暗灰色粘質シルトの互層が水平に堆積していた。井戸枠等の施設は認められなかったが，掘り方上面の肩部を幅約10cm程の暗茶褐色粘質シルトが帯状に一周しており，木質の井戸枠等の痕跡と考えられる。

遺物は，全く出土していない。

ＳＥ04（第196～198図，図版54・55）　Ｄ－２区東部で検出された井戸である。ＳＤ12の屈曲部が本井戸と重複しており，上面は大きく攪乱されている。掘り方の平面形は，東西1.9m，南北2.0mの整った正方形を呈し，検出面からの深さ1.2mを測る。上面より30cm程掘り下げた位置で，口縁部を下にした倒位の状態で据え置かれた備前焼甕を検出した。底部は打ち欠いており，その小片が掘り方内より１点出土している。掘り方の断面形は，周囲が砂層であるためか，上半部では緩やかに掘り込まれ皿状をなしており，下半部は甕の外形ラインに沿ってほぼ直に掘り込まれ二段掘りとなっている。底面は径0.6mの略円形を呈し，甕口縁部の直径とほぼ等しい。埋土は，甕上端部まではベースブロックを含んだ暗灰褐色粘土等（10・11層）を充填しており，甕埋置後に人為的に埋め戻した土層であると考えられる。甕より上位では，灰褐色系粘質シルト（４～９層）がレンズ状に堆積していた。なお１～３層はＳＤ12の埋土である。また，甕内部は，グライ化した青灰色粘土と灰色中砂が互層を為して水平に堆積していた。

遺物は，土師質土器皿（586～589），同坏（590・591），西村産の瓦質土器埦（592），和泉型瓦



1．暗灰褐色粘質シルト(粗砂多く混る，炭化物含む)
2．暗灰褐色粘質シルト(粗砂混り，炭化物含む)
3．黄灰褐色砂質シルト
4．茶灰褐色粘質シルト(粗砂混り)
5．暗茶灰褐色粘質シルト(砂混り，炭化物含む)
6．暗灰茶褐色粘質シルト(粗砂混り)
7．茶灰褐色砂質シルト
8．暗灰褐色砂質シルト
9．暗灰茶褐色砂質シルト
10．暗灰茶褐色粘質シルト(粗砂混り)
11．暗灰褐色粘土(砂混り，ベースブロックわずかに含む)
12．明～淡黄褐色粗砂(ベース)

a　暗茶褐色粘質シルト(砂混じり)
a′　にぶい黄褐色粘質シルト(鉄分沈着層)
b　暗灰褐色粘土(砂混じりC層をブロック状に含む)
c　濃青灰褐色粘土(植物遺体多く含む)
d　暗灰色粘土(砂混り，植物遺体多く含む)
e　淡灰色中砂(f層をブロック状に含む，植物遺体多く含む)
f　濃青灰色粘土(砂混り，植物遺体多く含む)

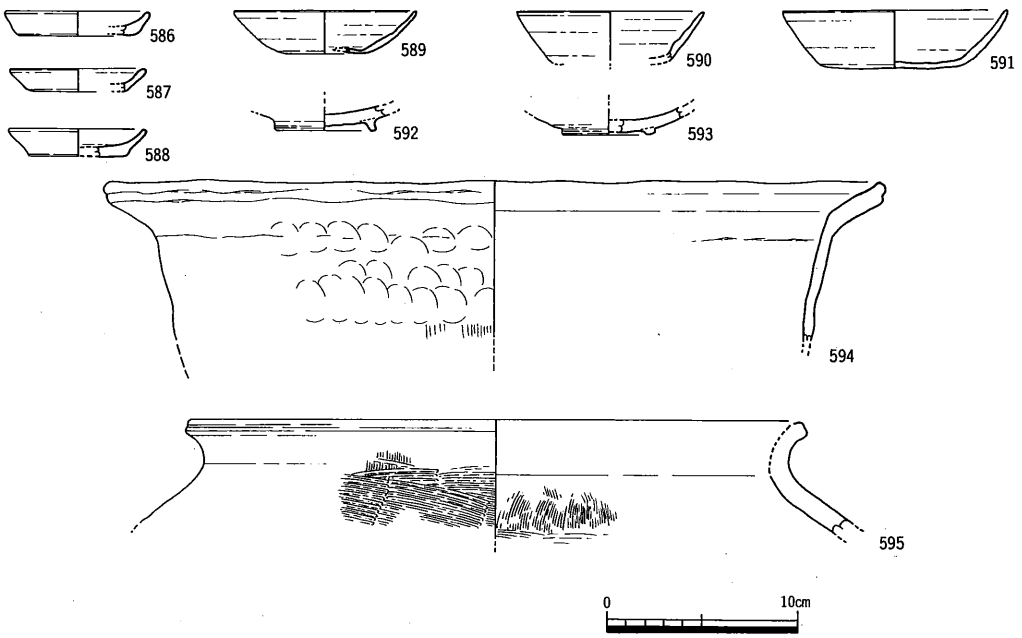
第196図　D地区第1面SE04平・断面図 (1/30)

器埦（593），土師質土器土鍋（594），亀山焼甕（595），備前焼甕（596）等が出土した。この内590は備前焼甕内部，589は掘り方下半部埋土中，その他は掘り方上半部埋土中より出土した。586・591は底部ヘラ切りである。595は焼きがあまく，亀山焼の中でも軟質の部類に含まれる。伊藤氏の編年（註14）の亀山焼第一群に属する。596は体部外面下半に縦方向の刷毛目，体部内面にはヘラナデが認められ，口縁部の特徴などから備前焼第Ⅳ期前半に属し，年代は14世紀後半から15世紀前半頃である。

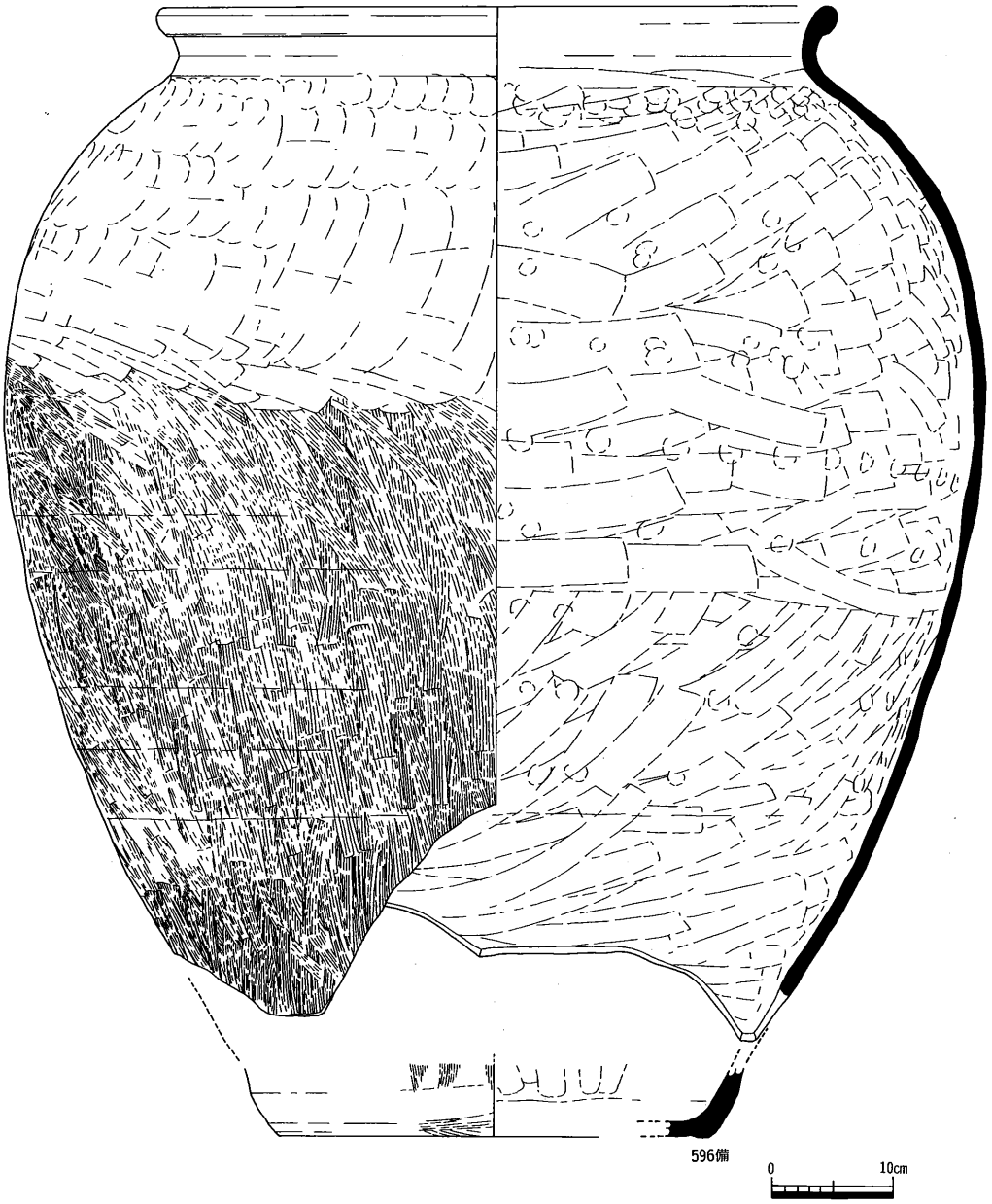
さてＳＥ04の時期については，第１面のベース砂層の埋没下限が13世紀頃と推定され，また井戸の構造がＣ地区ＳＥ05に近似すること等を考えると，備前焼甕の年代をそのまま構築時期とすることは躊躇される。またＳＤ12は16世紀末頃に位置付けられ，この年代が下限となる。以上より本井戸の時期は14世紀から16世紀後半の幅の中で考えられ，その中でもＣ地区ＳＥ05に近い年代が与えられよう。

４）土坑

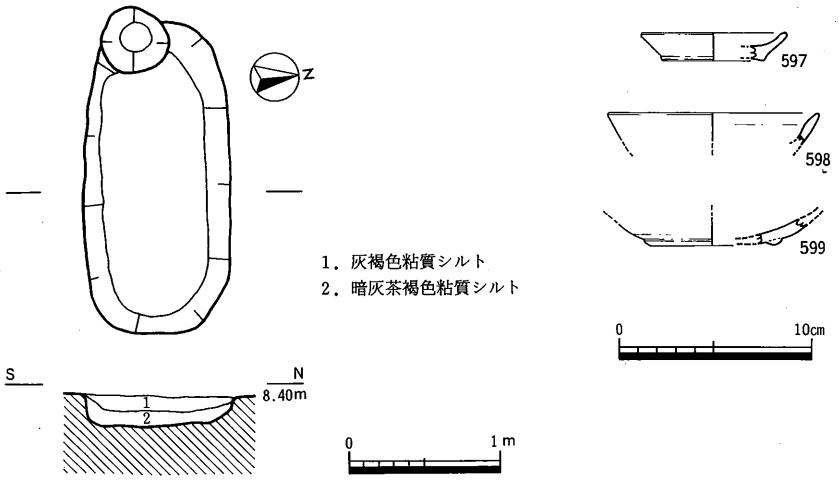
ＳＫ01（第199図）　Ｄ－２区北東部，ＳＤ05の西側で検出された土坑で，ＳＤ05を切っている。長辺2.1m，短辺1.0m，主軸の方向Ｅ－７°－Ｓを測る。平面形は，東西に長い隅丸長方形を呈する。掘り方は直に掘り込まれ，断面形は箱状を呈する。底面には若干の凹凸が認められた。埋土は，灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトからなる。



第197図　Ｄ地区第１面ＳＥ04出土遺物〔１〕(1/4)



第198図　D地区第１面ＳＥ04出土遺物〔２〕(1/6)



第199図　Ｄ地区第１面ＳＫ01平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

遺物は，土師質土器皿（597），同坏（598），西村産の瓦質土器椀（599）の他，土師質土器羽釜・土鍋，和泉型瓦器椀，亀山焼甕等の細片が出土した。597は底部ヘラ切りである。

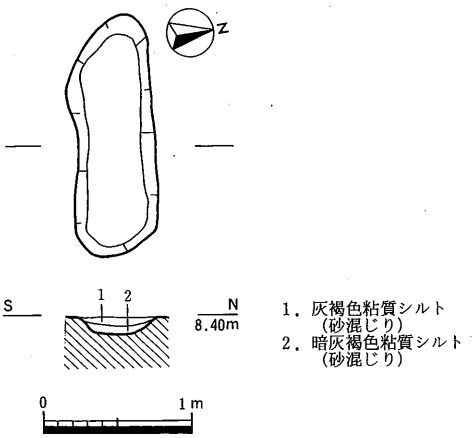
ＳＫ02（第200図）　Ｄ－２区北部で検出された土坑である。平面形はややいびつな隅丸長方形を呈し，長辺1.5m，短辺0.5mを測る。主軸の方向はＥ－７°－Ｓを測り，ＳＫ01とほぼ一致する。深さは0.1mを測り，断面形は逆台形状を呈する。埋土は，灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトからなる。

遺物は，土師質土器皿と西村産瓦質土器椀等の細片が少量出土したのみである。

ＳＫ03（第201図）　Ｄ－２区北部，ＳＤ09南北溝の西側で検出された土坑である。径0.9mの平面略円形を呈し，深さ0.15mを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトからなる。

遺物は，西村産の瓦質土器椀（600）の他，土師質土器の皿・羽釜・土鍋，和泉型瓦器椀等の細片が出土した。

ＳＫ04（第202図）　Ｄ－２区北部，ＳＤ05の南に接して検出された土坑で，ＳＤ05に北端を切られる。平面形は整った長方形を呈し，長辺0.8m，短辺0.4m，主軸の方向Ｎ－２°－Ｅを測る。深さは0.2mを測り，断面形は緩やかな逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトからな

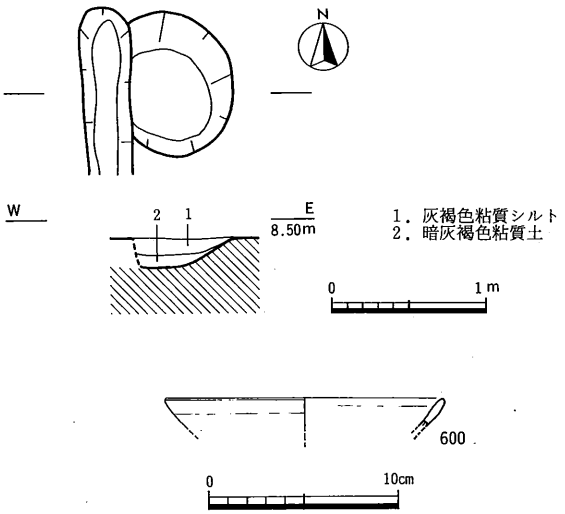


第200図　Ｄ地区第１面ＳＫ02平・断面図（1/50）

る。

遺物は，土師質土器坏等の細片が少量出土した。

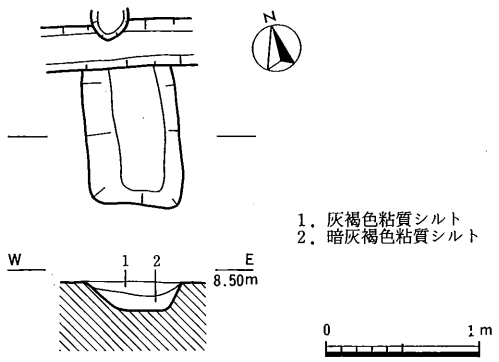
ＳＫ05（第203図）　Ｄ－２区中央部，ＳＤ09東西溝の北側で検出された土坑である。長辺1.7m，短辺0.45m，主軸の方向Ｅ－12°－Ｓを測る。掘り方の平面形は隅丸長方形を呈する。深さは0.1mを測り，断面形は皿状を呈する。埋土は，灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトからなる。



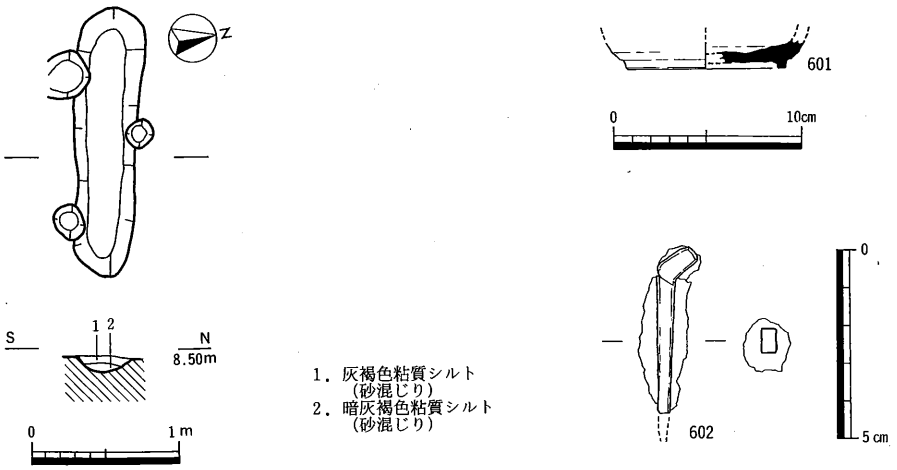
第201図　D地区第１面ＳＫ03平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

遺物は，須恵器坏（601），釘（602）の他，土師質土器皿・土鍋・擂鉢，亀山焼の甕等の細片が出土した。601は混入品であろう。

ＳＫ06（第204図）　Ｄ－２区中央部，ＳＫ05の南側で検出された土坑で，ＳＤ09東西溝を切っている。平面形は径1.4mの略円形を呈する。深さは0.3mを測り，断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトが



第202図　D地区第１面ＳＫ04平・断面図（1/50）



第203図　D地区第１面ＳＫ05平・断面図（1/50），出土遺物（1/4，1/2）

レンズ状に堆積し，５層に細分された。中位層はブロックを含む土で充填されており，廃棄後人為的に埋められた可能性が考えられる。

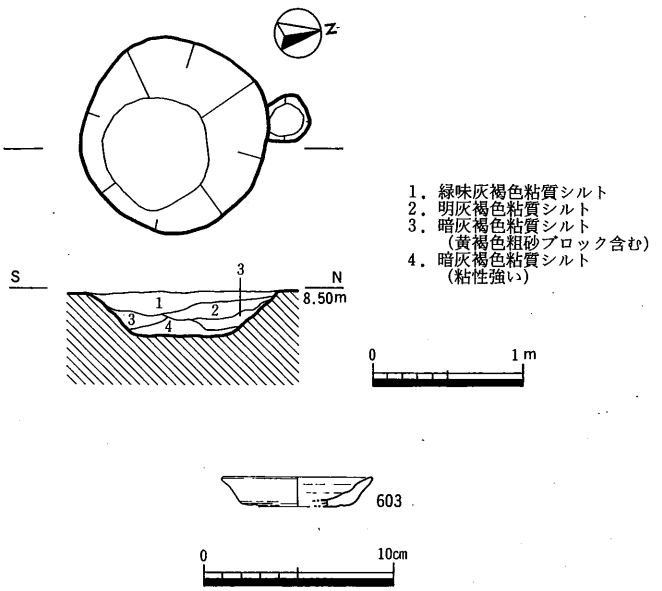
遺物は，土師質土器皿（603）の他，和泉型瓦器椀，唐津の灰釉皿等の細片が出土した。603は底部ヘラ切りである。

ＳＫ07（第205図）　Ｄ－２区東部で検出された土坑で，ＳＤ09を切っている。平面形は，長辺1.7m，短辺1.5mの略方形を呈する。主軸の方向はほぼ南北を示す。断面形は浅い皿状を呈し，底面には凹凸が認められた。埋土は，暗灰褐色粘質シルト及び灰褐色砂質シルトからなる。

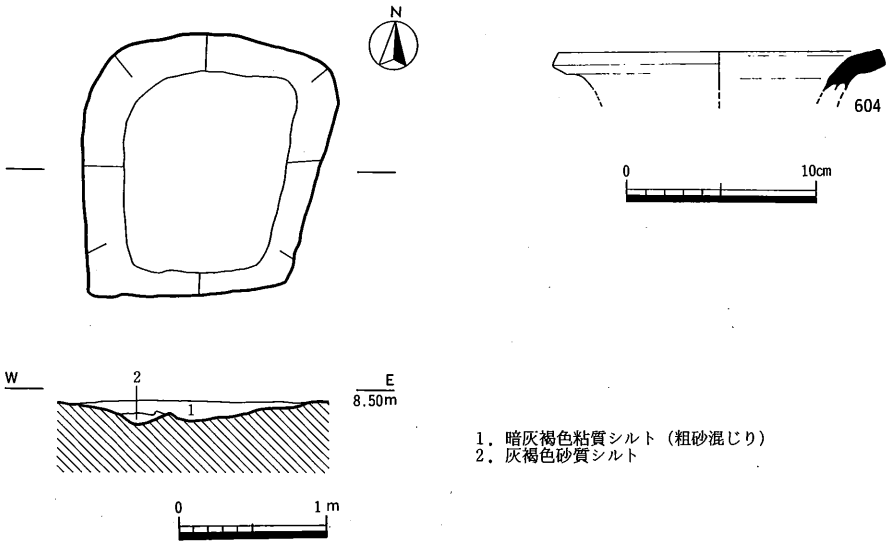
遺物は，須恵器の壺口縁部（604）が出土した。

ＳＫ08（第206図）　Ｄ－２区中央部で検出された土坑である。平面形は径0.7mの略円形を呈し，深さ0.2mを測る。断面形はややいびつな逆台形状を呈する。埋土は，灰褐色系粘質シルトがレンズ状に堆積し，３層に細分された。

遺物は，土師質土器皿(605)



第204図　Ｄ地区第１面ＳＫ06平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）



第205図　Ｄ地区第１面ＳＫ07平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

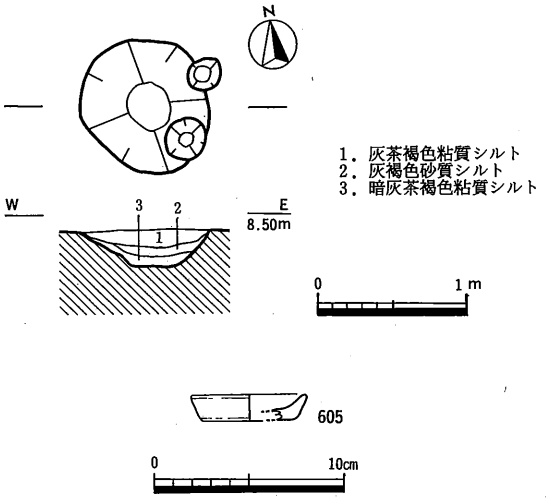
のほか，和泉型瓦器埦等の細片が出土した。

ＳＫ09　Ｄ－２区東部，ＳＤ12南北溝の西際で検出された土坑で，ＳＤ12南北溝に東端を切られる。長辺0.8m，短辺0.4m以上，深さ0.1m，主軸の方向Ｎ－５°－Ｅを測る。平面形は，現存部で比較的整った長方形を，断面形は概ね皿状を呈する。底面には若干の凹凸が認められた。埋土は灰茶褐色粘質シルトの単層であった。

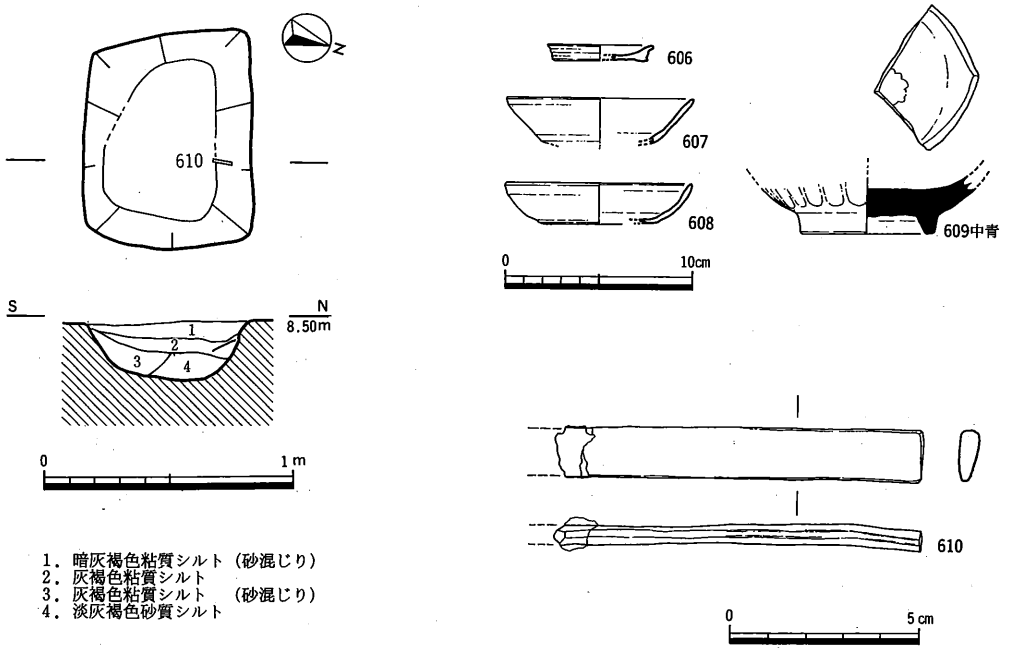
遺物は，土師質土器細片が少量出土した。

ＳＫ10（第207図）　Ｄ－２区中央部で検出された土坑である。平面形は一辺0.9mの略方形を呈し，深さは0.25mを測る。断面形は逆台形状を呈する。上位３層は灰褐色系粘質シルト，最下位層はベース土をブロック状に含む淡灰褐色砂質シルトを埋土としていた。

本土坑からの出土遺物は比較的多い。土師質土器皿(606)，同坏(607



第206図　Ｄ地区第１面ＳＫ08平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）



第207図　Ｄ地区第１面ＳＫ10平・断面図（1/30），出土遺物（1/4，1/2）

・608)，龍泉窯系青磁碗（609)，小柄の柄と考えられる銅製品（610）の他，亀山焼甕，備前焼，焼土粒等が出土した。606は底部ヘラ切りである。610は北壁際の中位層中より出土した。左端に小柄の茎部分と思われる鉄錆が付着する。

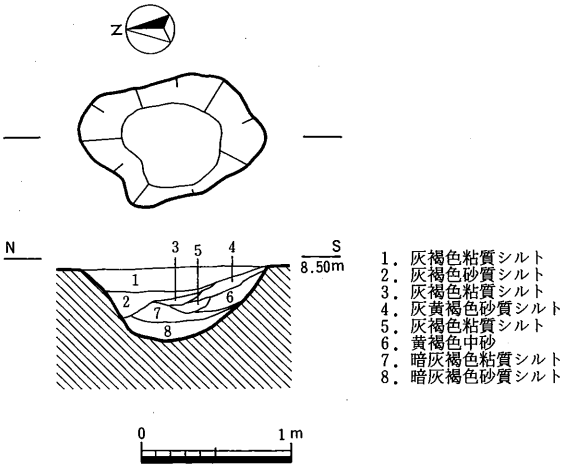
ＳＫ11（第208図）　Ｄ－２区中央部で検出された土坑である。長軸1.0m，短軸0.9mを測り，平面形は不整形な楕円形を呈する。深さは0.4mを測り，断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトがレンズ状に堆積し，８層に細分された。なお中位層にはベース土である黄褐色中砂の流れ込みが認められた。

遺物は，瓦質土器の擂鉢・甕等の細片が出土した。

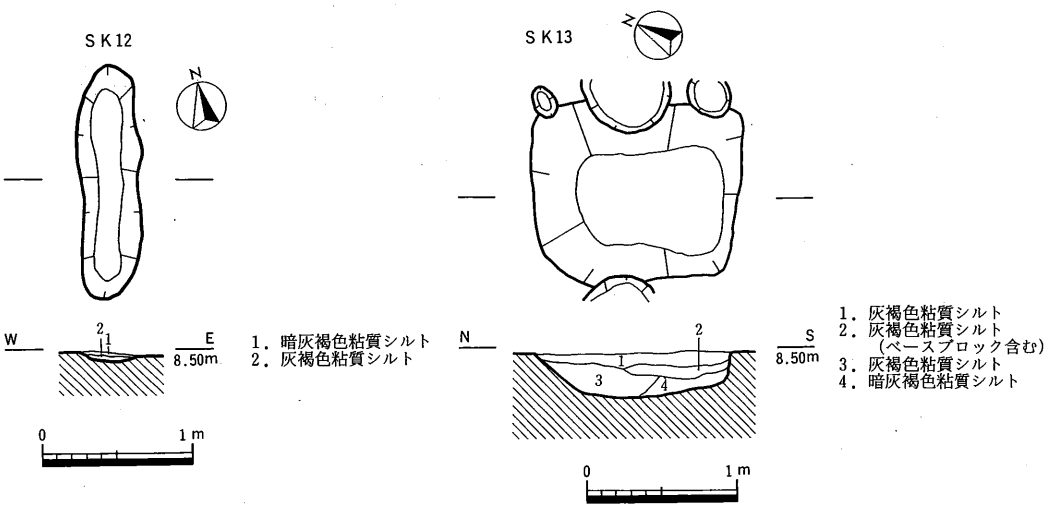
ＳＫ12（第209図）　Ｄ－２区南西部で検出された土坑である。長軸1.5m，短軸0.4mを測り，平面形は南北に細長い隅丸長方形を呈する。深さは0.1mを測り，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰褐色粘質シルト及び灰褐色粘質シルトからなる。

遺物は，土師質土器皿の細片が少量出土した。

ＳＫ13（第209図）　Ｄ－２区中央南半で検出された土坑である。平面形は一



第208図　Ｄ地区第１面ＳＫ11平・断面図（1/50）



第209図　Ｄ地区第１面ＳＫ12，ＳＫ13平・断面図（1/50）

辺1.2mのややいびつな正方形で断面形は逆台形状を呈し，深さは0.25mを測る。埋土は灰褐色系粘質シルトが堆積し，4層に細分された。中位層はベースブロックを含んでおり，人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は，土師質土器皿，備前焼甕，唐津灰釉皿，瀬戸・美濃灰釉皿等の細片が出土した。

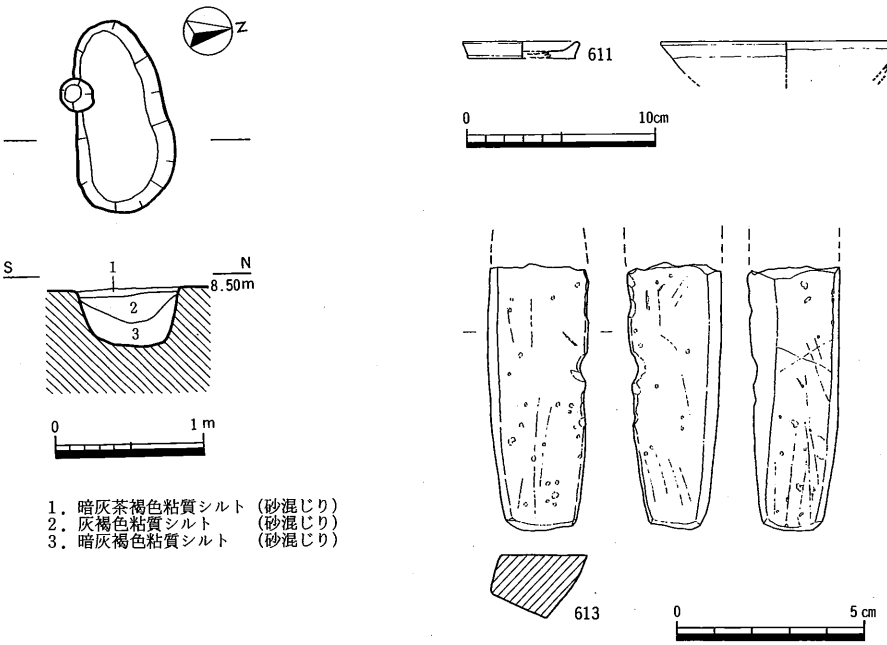
ＳＫ14（第210図）　Ｄ－２区南端で検出された土坑である。長軸1.3m，短軸0.55mを測り，平面形は隅丸長方形を呈する。深さは0.3mを測り，断面形は箱形を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトで，3層に細分された。

遺物は，土師質土器皿（611），西村産の瓦質土器椀（612），凝灰岩質流紋岩製の砥石（613）が出土した。611は底部ヘラ切りであろう。613は4面が使用されており，全面に細かな線状擦痕が認められる。石質から仕上げ砥と考えられる。

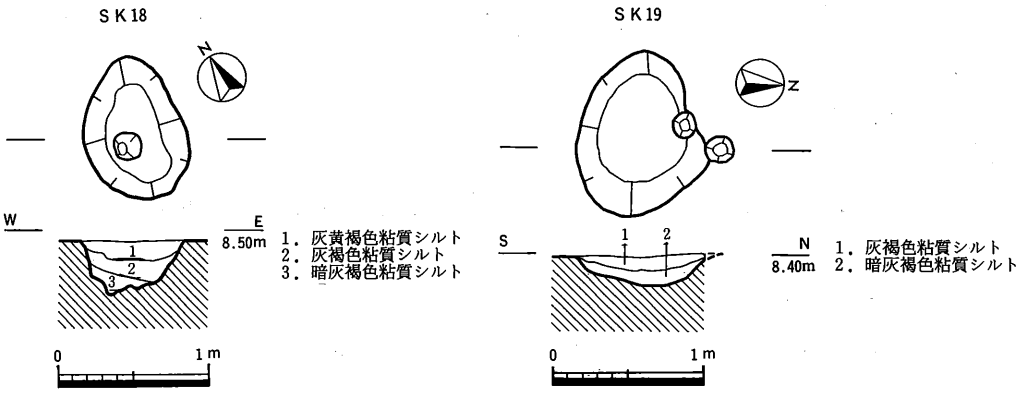
ＳＫ16　Ｄ－２区北東部で検出された土坑である。長軸0.8m，短軸0.4mを測り，平面形はいびつな長円形を呈する。深さは0.2mを測り，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，全く出土していない。

ＳＫ17　Ｄ－２区北東端で検出された土坑である。ＳＤ12東西溝に北端を切られ，東半は調査区外に延びるため，確認し得たのはごく僅かである。平面形は現状で一辺1.2mの方形を呈する。深さは0.2mを測り，断面形は皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。



第210図　Ｄ地区第１面ＳＫ14平・断面図（1/50），出土遺物（1/4，1/2）



第211図　Ｄ地区第１面ＳＫ18，ＳＫ19平・断面図（1/50）

遺物は，土師質土器と磁器の細片が出土した。

ＳＫ18（第211図）　Ｄ－２区中央部で検出された土坑である。ＳＤ09東西溝を切っている。長軸1.0m，短軸0.7mを測り，平面形は長円形を呈する。深さは0.4mを測る。底面西半部に柱沈み痕状の凹みが見られるので，柱穴の可能性がある。埋土は灰褐色系粘質シルトで，３層に細分された。

遺物は，土師質土器皿の細片が出土した。

ＳＫ19（第211図）　Ｄ－２区中央部で検出された土坑である。長軸1.1m，短軸0.9mを測り，平面形はいびつな長円形を呈する。深さは0.2mを測り，断面形は皿状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトで，２層に細分された。

遺物は，土師質土器皿等の細片が少量出土した。

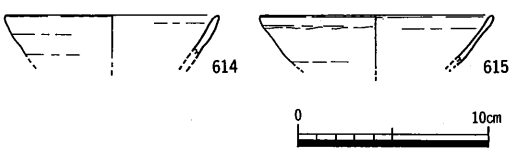
ＳＫ20　Ｄ－２区中央部で検出された土坑である。長辺0.9m，短辺0.5mを測り，平面形は整った長方形を呈する。深さは0.1mを測り，断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，土師質土器細片が少量出土した。

ＳＫ21（第212図）　Ｄ－２区中央部で検出された土坑で，北端及び西端部を柱穴に切られる。現状で，平面形は一辺0.7mの隅丸方形を呈する。深さは0.4mを測り，断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は土師質土器坏（614），西村産瓦質土器碗（615）の他，土師質土器皿や羽釜の細片が出土した。

ＳＫ22（第213図）　Ｄ－２区東部で検出された土坑で，東半部はＳＤ12南北溝に，西端部は柱穴に切られており，確認し得たのはごく僅かであった。現状で長軸0.8m，短軸



第212図　Ｄ地区第１面ＳＫ21出土遺物（1/4）

0.6mを測り，平面形はややいびつな隅丸長方形を呈する。深さは0.1mを測り，断面形は皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトからなる。

遺物は土師質土器と磁器の細片が出土した。

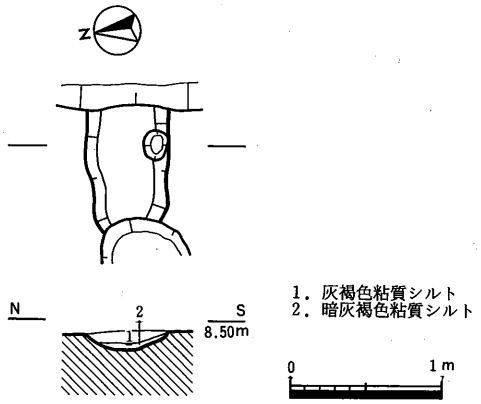
ＳＫ23　Ｄ－２区東部で検出された土坑で，ＳＤ13を切っている。長軸1.2m，短軸0.7mを測り，平面形は不整形な三角形状を呈する。深さは0.1mを測り，断面形は浅い皿状を呈する。埋土はベース砂層をブロック状に含んだ灰橙褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，全く出土していない。

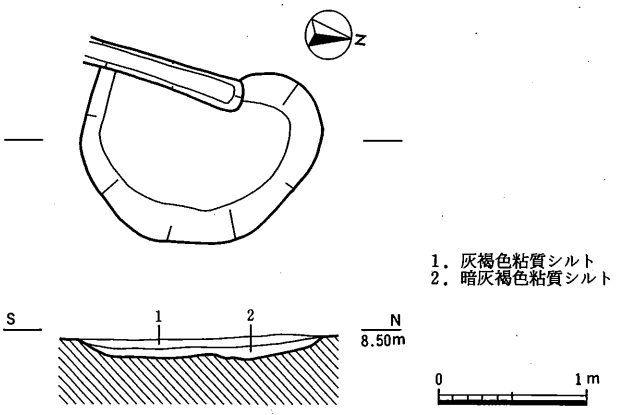
ＳＫ24　Ｄ－２区東南端で検出された土坑で，東半は調査区外に延び，西端部は柱穴に切られるため，検出されたのは一部である。現状で，長軸1.1m以上，短軸0.7mを測り，平面形は長円形状を呈する。深さは0.2mを測り，断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトの単層であった。

遺物は，土師質土器細片が少量出土した。

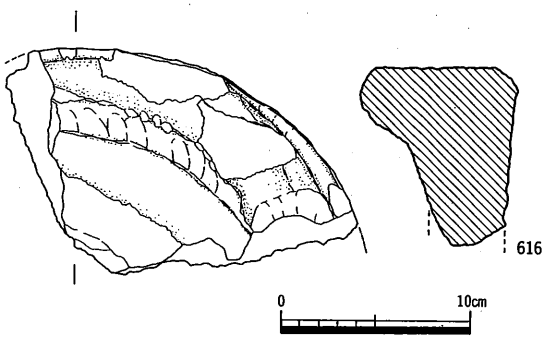
ＳＫ25（第214・215図）　Ｄ－２区東南端で検出された土坑で，ＳＤ17を切っている。長軸1.6m，短軸1.2mを測り，平面形はいびつな楕円形を呈する。深さは0.1mを測り，断面形は概ね皿状を呈する。底面に



第213図　Ｄ地区第１面ＳＫ22平・断面図（1/50）



第214図　Ｄ地区第１面ＳＫ25平・断面図（1/50）



第215図　Ｄ地区第１面ＳＫ25出土遺物（1/4）

は若干の凹凸が認められた。埋土は灰褐色系粘質シルトで，２層に細分された。

遺物は石臼（616）のほか土師質土器細片が少量出土した。616は上臼である。

ＳＫ26（第216図）　Ｄ－３区北端で検出された土坑で，北半は調査区外に延びる。検出部分で，短軸1.0m，長軸1.0m以上を測り，平面形は略方形を呈する。深さは0.5mを測り，断面形は逆台形状を呈する。埋土の堆積状況から，上層（１～４層）と下層（５・６層）に大別される。下層上位にはベースブロックを含んだ土が認められ，人為的に埋め戻された可能性がある。

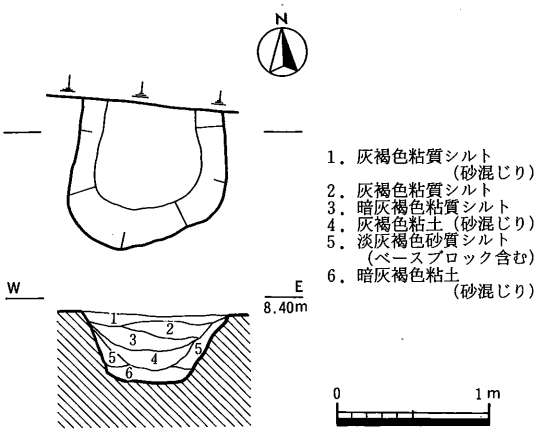
遺物は，土師質土器埦・皿・羽釜・土鍋，瓦質土器こね鉢等の細片が出土した。

ＳＫ27（第217図）　Ｄ－３区西部で検出された土坑である。長軸1.7m，短軸0.7m，主軸の方向Ｅ－２°－Ｓを測り，平面形はややいびつな隅丸長方形を呈する。深さは0.2mを測る。断面形は概ね皿状を呈し，南壁は２段に掘り込まれ中央部がやや深くなる。埋土は灰褐色系粘質シルトで，３層に細分された。

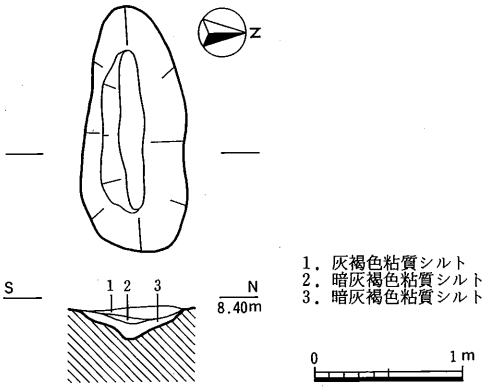
遺物は，土師質土器擂鉢，備前焼壺，亀山焼甕等の細片が出土した。

ＳＫ28（第218図）　Ｄ－３区西南部で検出された土坑である。長軸2.4m，短軸0.5mを測り，平面形は細長い溝状を呈する。深さは0.2mを測り，断面形は皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

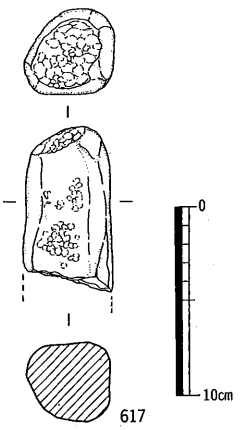
遺物は，中粒砂岩製の敲石（617）が出



第216図　Ｄ地区第１面ＳＫ26平・断面図（1/50）



第217図　Ｄ地区第１面ＳＫ27平・断面図（1/50）



第218図　Ｄ地区第１面ＳＫ28
出土遺物（1/4）

土した。

4）柱穴

ＳＰ100（第219図）　Ｄ－2区東部で検出された柱穴である。ＳＤ07を切っている。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.4m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器羽釜（676）が出土した。

ＳＰ109（第219図）　Ｄ－2区北東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.5m，深さ0.4mを測る。

遺物は，土師質土器坏（646）が出土した。底部ヘラ切り後ナデを施す。

ＳＰ142（第220図）　Ｄ－2区北西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.1mを測る。

遺物は，土師器小型丸底壺（680）が出土した。口縁部を欠くが，体部はほぼ完存している。

ＳＰ143（第219図）　Ｄ－2区北西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.7m，深さ0.4mを測る。

遺物は，土師質土器坏（653）が出土した。底部ヘラ切り後丁寧なナデを施す。

ＳＰ144（第219図）　Ｄ－2区北部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.4m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器埦（654）が出土した。

ＳＰ146（第219図）　Ｄ－2区北部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.1mを測る。

遺物は，土師質土器皿（626）が出土した。底部ヘラ切り後ナデを施す。

ＳＰ147（第220図）　Ｄ－2区北部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は長円形を呈し，長径0.6m，深さ0.3mを測る。

遺物は，土師質土器竈（681）が出土した。炊き口部の破片で，外面には鰭状の突帯が付く。また内外面共に粗い刷毛目が顕著である。

ＳＰ148（第219図）　Ｄ－2区北部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（625・629）が出土した。いずれも底部ヘラ切りである。

ＳＰ149（第219図）　Ｄ－2区北西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（628）が出土した。底部ヘラ切りである。

ＳＰ150（第219図）　Ｄ－2区北西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.4m，深さ0.3mを測る。

遺物は，土師質土器羽釜（675）が出土した。体部外面には煤が付着する。

ＳＰ151（第219図）　Ｄ－２区北東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（623），同椀（656）が出土した。623は底部ヘラ切りである。

ＳＰ152（第219図）　Ｄ－２区北西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（632）が出土した。底部ヘラ切り後ナデを施す。

ＳＰ153（第219図）　Ｄ－２区北東部で検出された柱穴である。ＳＰ154を切っている。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.6m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（620），西村産瓦質土器椀（659）が出土した。620は底部ヘラ切りである。

ＳＰ154（第219図）　Ｄ－２区北西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は長方形を呈し，長辺0.6m，短辺0.3m，深さ0.3mを測る。

遺物は，土師質土器坏（644），同椀（655），西村産瓦質土器椀（660）が出土した。644は底部ヘラ切りである。

ＳＰ155（第219図）　Ｄ－２区北西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.3mを測る。

遺物は，西村産瓦質土器椀（661）が出土した。

ＳＰ156（第219図）　Ｄ－２区北西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.5m，深さ0.3mを測る。

遺物は，土師質土器坏（642）が出土した。

ＳＰ157（第219図）　Ｄ－２区北西部で検出された柱穴で，ＳＤ08に切られる。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.5m，深さ0.3mを測る。

遺物は，土師質土器皿（631）が出土した。底部ヘラ切りである。

ＳＰ158（第220図）　Ｄ－２区南西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2mを測る。

遺物は，釘（690）が出土した。丸釘で頭部及び先端部を欠損する。

ＳＰ160（第219・220図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.3mを測る。

遺物は，中国産白磁皿（668），鉄釘（689）が出土した。668は端反りの皿で，森田氏の分類の皿Ｅ群２ｂ類に属する(註7)。689は角釘で，先端部を欠損する。

ＳＰ162（第220図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.5m，深さ0.2mを測る。

遺物は，鉄釘（691），サヌカイト製の凹基式石鏃（688）が出土した。691は角釘で，下端部を

欠損する。

ＳＰ163（第219図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器坏（645）が出土した。

ＳＰ164（第219・220図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.4m，深さ0.4mを測る。

遺物は，土師質土器坏（649），瓦質土器甕（679）が出土した。649は底部ヘラ切り後丁寧なナデを施す。

ＳＰ165（第219図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.1mを測る。

遺物は，西村産瓦質土器埦（664）が出土した。

ＳＰ166（第219図）　Ｄ－２区東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，西村産瓦質土器埦（658・662）が出土した。658 の内面にはヘラ当り痕のようなものが認められる。

ＳＰ167（第219図）　Ｄ－２区東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器坏（648）が出土した。底部ヘラ切り後ナデを施す。

ＳＰ168（第220図）　Ｄ－２区東部で検出された柱穴である。ＳＥ04を切っている。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.4m，深さ0.2mを測る。

遺物は，細粒砂岩製の凹み石（687）が出土した。平らな面の中央の他，側縁にも敲打痕が認められ，叩き石に転用されている。

ＳＰ169（第219図）　Ｄ－２区東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.5m，深さ0.3mを測る。

遺物は，土師質土器皿（635）が出土した。

ＳＰ170（第219図）　Ｄ－２区東部で検出された柱穴である。ＳＤ09東西溝を切っている。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.5m，深さ0.3mを測る。

遺物は，土師質土器皿（636）が出土した。

ＳＰ171（第219図）　Ｄ－２区東部で検出された柱穴である。ＳＤ09東西溝を切っている。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，瀬戸・美濃灰釉皿（671）が出土した。付高台の丸皿と思われ，灰釉を全面施釉する。高台内外面には輪トチの痕跡が認められる。時期は16世紀代である。

ＳＰ172（第219図）　Ｄ－２区東部で検出された柱穴である。ＳＤ09東西溝及びＳＰ173を切っ

ている。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，唐津灰釉皿（673）が出土した。外面高台部付近には砂目積痕が認められる。時期は1600～1620年代である。

ＳＰ173（第220図）　Ｄ－２区東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.4m，深さ0.2mを測る。

遺物は，細粒砂岩製の砥石（685）が出土した。３面を使用しており，各面共によく使い込まれ細かな擦痕が多く認められる。また，火熱を被っており，破断面を中心に黒色化している。石質より荒砥と推定される。

ＳＰ174（第219図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（621）が出土した。底部ヘラ切りである。

ＳＰ175（第220図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。ＳＫ20を切っている。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.6m，深さ0.3mを測る。

遺物は，須恵質の平瓦（684）が出土した。全体に摩滅が著しく，凸面に僅かに縄目タタキ痕が認められる。

ＳＰ176（第219図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.7m，深さ0.2mを測る。

遺物は，中国産白磁碗（667）が出土した。太宰府の分類のIV類に属する（註２）。

ＳＰ177（第219・220図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形はいびつな三角形を呈し，長軸0.5m，深さ0.2mを測る。

遺物は，中国産青磁碗（665），凝灰岩質流紋岩製の砥石（686）が出土した。665は口縁部が内湾する無文の碗で，口縁端部に一条の沈線が巡る。上田氏の分類のＥ類に属する（註８）。686は４面を使用し，各面には細かな擦痕が多く認められる。石質より，仕上げ砥と推定される。

ＳＰ178（第219図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.4m，深さ0.1mを測る。

遺物は，土師質土器皿（624）が出土した。底部ヘラ切りである。

ＳＰ179（第219・220図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，中国産青磁碗（666），土師質土器土鍋（677）が出土した。666は外面に鏑蓮弁を有し，太宰府の分類（註２）の龍泉窯系碗Ｉ－５類に属する。

ＳＰ180（第219図）　Ｄ－２区南東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は方形を呈し，一辺0.6m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（619），同埦（657）が出土した。619は底部ヘラ切りである。

ＳＰ181（第219図）　Ｄ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，西村産瓦質土器埦（663）が出土した。

ＳＰ182（第219図）　Ｄ－２区南東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形はいびつな円形を呈し，径0.6m，深さ0.2mを測る。

遺物は，中国産青磁碗（672）が出土した。外面口縁部付近に便化した波状の雷文帯を有するもので，上田氏の分類のＣ－Ⅲ類に属する（註8）。

ＳＰ183（第219図）　Ｄ－２区南東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.4m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（618）が出土した。底部ヘラ切りである。

ＳＰ184（第219図）　Ｄ－２区南東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形はいびつな円形を呈し，径0.7m，深さ0.3mを測る。

遺物は，中国産白磁小坏（669）が出土した。内面見込を蛇ノ目状に釉剝ぎする。時期は16世紀頃であろう。

ＳＰ185（第219図）　Ｄ－２区南部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は長円形を呈し，長軸0.5m，深さ0.3mを測る。

遺物は，土師質土器皿（630）が出土した。

ＳＰ186（第220図）　Ｄ－２区南部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器竈（682）が出土した。炊き口部の最下部と思われ，側面には鰭状の突帯が付く。

ＳＰ187（第219図）　Ｄ－２区南東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.1m，深さ0.1mを測る。

遺物は，土師質土器皿（627）が出土した。底部ヘラ切りである。

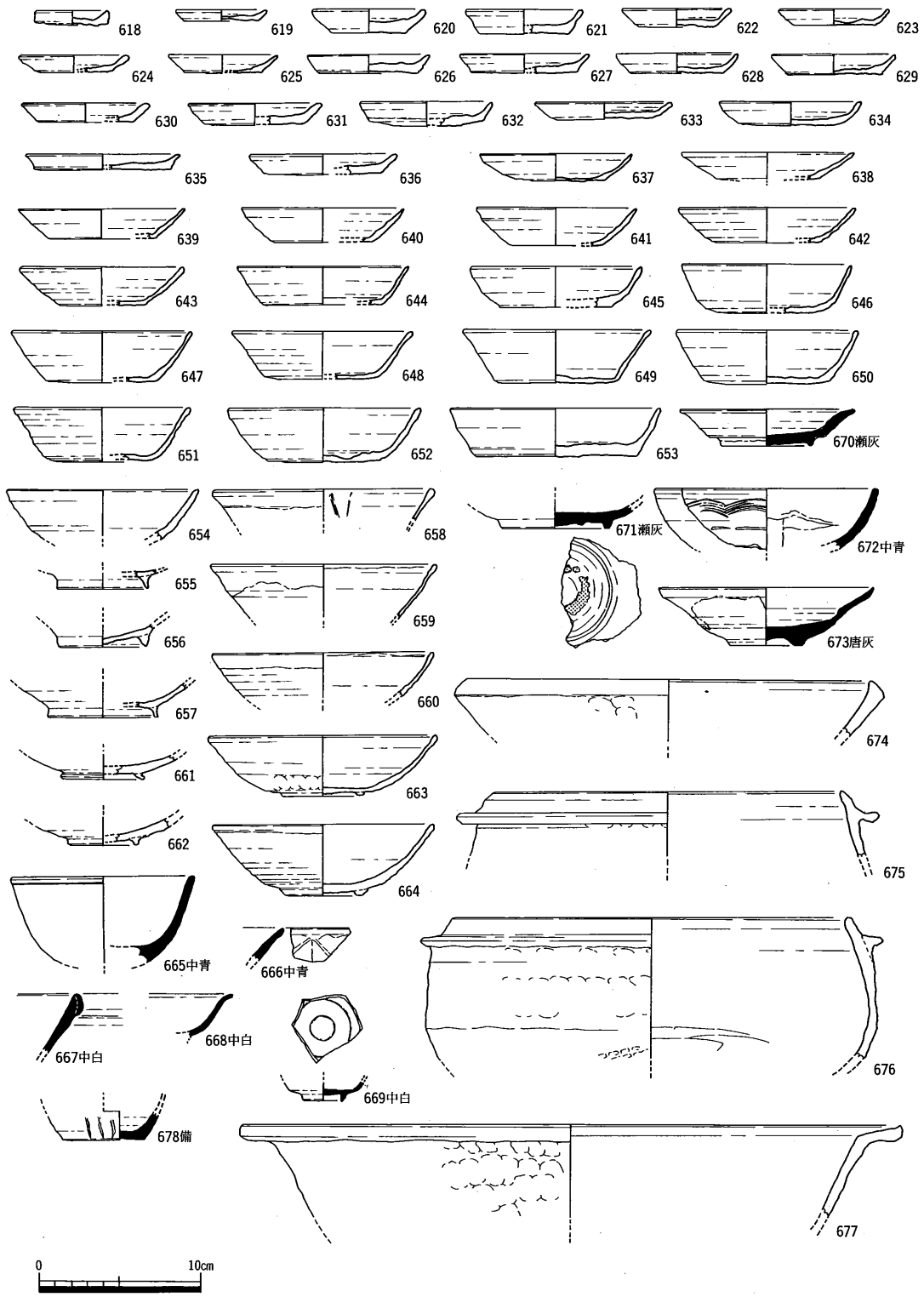
ＳＰ188（第219図）　Ｄ－２区南東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.8m，深さ0.3mを測る。

遺物は，瀬戸・美濃灰釉皿（670）が出土した。高台内外面には，輪トチの痕跡が認められる。時期は16世紀頃であろう。

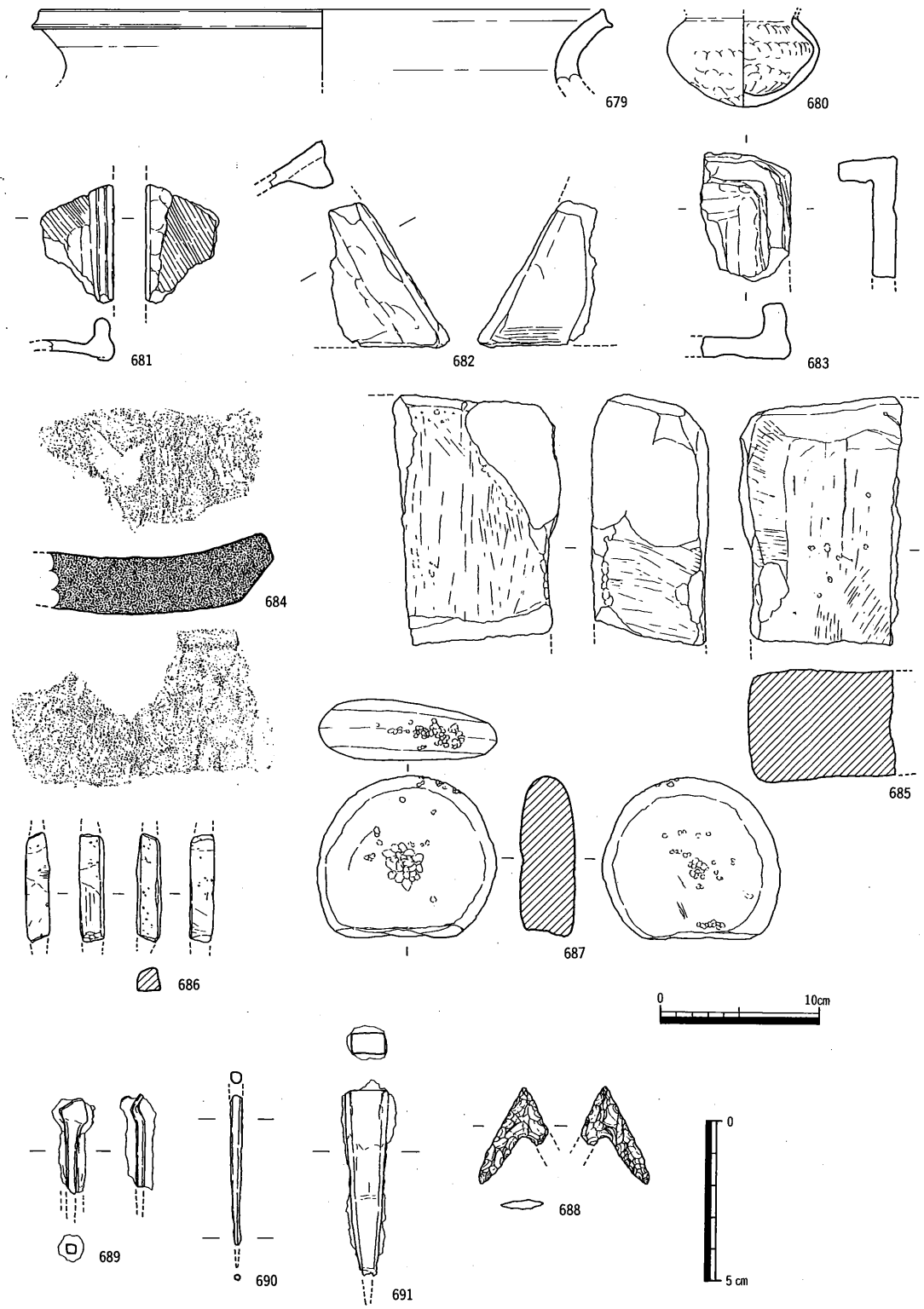
ＳＰ189（第219図）　Ｄ－２区南東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は方形を呈し，一辺0.4m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（640）が出土した。底部ヘラ切りである。

ＳＰ190（第219図）　Ｄ－２区東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。



第219図　Ｄ地区第１面柱穴出土遺物〔１〕(1/4)



第220図　D地区第1面柱穴出土遺物〔2〕(1/4, 1/2)

遺物は，土師質土器坏（652）が出土した。底部ヘラ切り後ナデを施す。

ＳＰ191（第219図）　Ｄ－２区南東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.3mを測る。

遺物は，土師質土器皿（639・641）が出土した。

ＳＰ192（第219図）　Ｄ－２区南東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器こね鉢（674）が出土した。

ＳＰ193（第219図）　Ｄ－２区南東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は長円形を呈し，長軸0.6m，深さ0.3mを測る。

遺物は，土師質土器皿（637・638），同坏（651）が出土した。637及び651は底部ヘラ切りである。

ＳＰ194（第219図）　Ｄ－２区南東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は長円形を呈し，長径0.7m，深さ0.4mを測る。

遺物は，土師質土器皿（643・647・650）が出土した。いずれも底部ヘラ切り後ナデを施す。

ＳＰ195（第219図）　Ｄ－２区東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は長円形を呈し，長径0.5m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（622・634）が出土した。いずれも底部ヘラ切り後ナデを施す。

ＳＰ196（第219図）　Ｄ－２区南部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.2m，深さ0.1mを測る。

遺物は，土師質土器皿（633）が出土した。底部ヘラ切りである。

ＳＰ199（第220図）　Ｄ－３区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2mを測る。

遺物は，備前焼底部（678）が出土した。器種は徳利と思われる。

ＳＰ200（第220図）　Ｄ－３区西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.4m，深さ0.1mを測る。

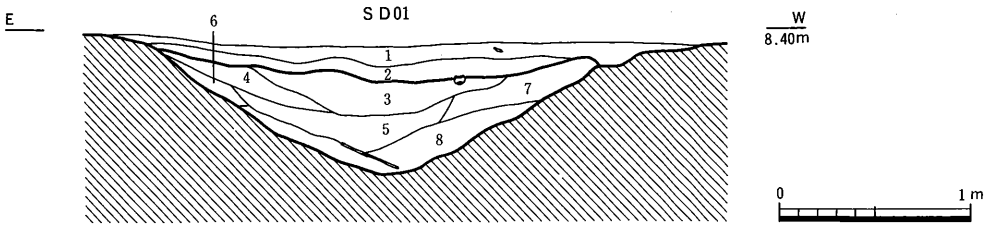
遺物は，瓦質の土製品（683）が出土した。器種は不明である。

5）溝

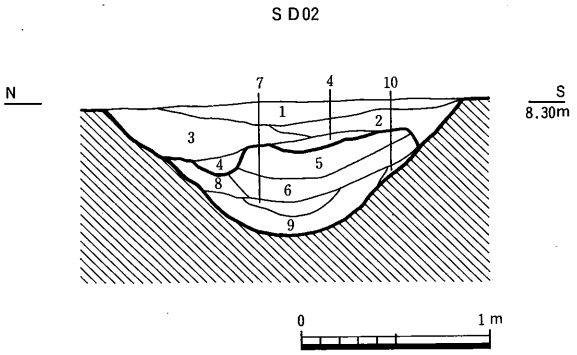
ＳＤ01・02（第221～235図・図版56～59）　ＳＤ01は，Ｄ－２区西端を直線的に南北に延びる溝である。調査区北端近くでＳＤ02が東に分岐し，南半部でＳＤ03が派生して，ＳＤ01の西側を平行に北に延びる。溝の西側にはピット群は認められないことから，Ｄ－２区の屋敷地の西端を画する溝であろう。主軸方向はＮ－６°－Ｅ，南端部幅3.2m，深さ0.8m，北半部幅1.6m，深さ0.7mを測り，ＳＤ02が分流する北半部ではかなり狭くなっている。掘り方の断面形は緩やかに掘り込まれ概ねＵ字状を呈し，両肩に幅0.2～0.4mのテラスを有する。ＳＤ02はＳＤ01と直交し

て東に延び，東端は緩やかに屈曲して調査区外に延びる。検出した延長距離は7mと短いが，溝の周囲や調査区北端部付近ではピット群が希薄となることから，SD01と同様にD－2区屋敷地の北端の一部を区画するものと推定される。幅4.0m，深さ0.8mを測り，掘り方の断面形は逆台形状を呈する。両溝共，埋土は2層に大別される。上層は灰褐色系粘質シルトが，下層はグライ化した青灰色系粘土と中砂の互層が堆積していた。上・下層よりコンテナ10箱程の遺物が出土した。これらの遺物は，上述した層位によって2つに大別される。しかしながら，両層から出土した資料が接合した例（695・729・732・770・757等）もあり，上層堆積時に清掃等によって攪拌を受けた可能性が考えられ，層位による明確な時期差は捉えられなかった。

上層からは，土師質土器皿（692～695），同坏（697・698），同椀（699～701），同羽釜（704～711），同土鍋（712～721），同こね鉢（724），同擂鉢（726），同十能の把手（767），和泉型瓦器皿（696），同椀（702），西村産瓦質土器椀（703），東播系こね鉢（722・723），瓦質土器こね鉢（725），備前焼擂鉢（727・728），同壺（730），甕（733），陶器擂鉢（729），唐津灰釉皿



1．暗灰褐色粘質シルト（砂混じり）
2．暗灰褐色粘土（砂混じり・下面に鉄分沈着）
3．濃青灰色粘土（砂混じり）
4．暗灰色中砂・濃青灰色粘土ラミナー
5．濃青灰色粘土
6．暗灰色中砂
7．黄灰色中砂・濃青灰色粘土ラミナー
8．明灰色中砂・濃青灰色粘土ラミナー



1．暗灰褐色粘質シルト（砂混じり）
2．暗灰褐色粘質シルト
3．黄灰中砂・灰褐色粘質シルトラミナー
4．明黄灰色中砂（黒灰色粘土混じる）
5．暗青灰色粘土（砂混じり）
6．暗青灰色粘土・暗青灰中砂ラミナー
7．濃青灰色粘土
8．灰色中砂（黒灰色粘土ブロック含む）
9．暗青灰色中砂・黒灰色粘土ラミナー
10．暗黄灰色粗砂

第221図　D地区第1面SD01，SD02断面図（1/40）

(734～740)，同灰釉碗（745)，同灰釉鉢（746～748)，同鉄絵皿（749・750)，肥前染付碗（751・754)，同陶胎染付碗（752)，同染付瓶（753)，瀬戸・美濃灰釉皿（755～757)，同天目碗（758)，中国産白磁壺（759)，同青磁碗（760・761)，同染付皿（762)，同青白磁合子（763)，円盤状土製品（764),瓦質土器脚(765)，土師質の土錘（766)，土師質土器竈（768・769)，瓦質の平瓦（770)，同丸瓦（771)，砥石（772～774)，敲石（775)，銅銭（776）の他，牛や鹿又は猪の骨等の動物遺存体が出土した。下層からは，土師質土器皿（777～786)，同坏（787)，同埦（789)，同羽釜（790，791)，同擂鉢（793)，同土鍋（795～798)，同火舎（799)，同竈（800・801)，黒色土器埦(788)，瓦質土器羽釜（792)，備前焼皿（802)，同壺（803～805)，同擂鉢（806～808)，同甕(809・811),唐津灰釉皿(812～824),同灰釉碗(825・826),同鉄絵皿(827),同鉄絵碗(828)，同鉢（830)，同灰釉鉢（831～833)，肥前染付皿（834～839)，同染付又は白磁皿（840)，同染付碗（841)，同染付又は白磁碗（842)，同天目型掛分碗（843・844)，同青磁碗（845)，瀬戸・美濃灰釉卸皿（846)，同鉄釉小瓶（847)，中国産染付皿（848～850)，同染付碗（851)，同青磁碗（852～854)，同白磁皿（855～857)，縄文土器深鉢（858)，須恵器壺？（859)，円盤状土製品（860～865)，瓦質の平瓦（866～869)，同丸瓦（870・871)，敲石（872)，石臼（873)，砥石（874・875)，石錘（876)，銅製文鎮（877)，木製品（878～908）の他，人・牛・馬・猪等の動物遺存体や松傘・団栗等の自然遺物が出土している。特に人骨は通常の出土状態と異なり，その埋没過程を考える上で興味深いものがある。また特殊な遺物として，志野焼細片が1点出土している。

692・697・698・777～782・784・785は底部ヘラ切りである。784は，口縁端部に煤が付着し，灯明皿として使用されている。787は円盤状高台を有する。788は，内面に炭素を吸着させており，A類埦と呼ばれているものである。土師質の羽釜は，口径と体部径，鍔の形態によって3類に大別される。つまり，鍔が形骸化し口径が体部径より大きいもの（710)，しっかりした鍔を有し口径より体部最大径が大きいもの（704～709・791)，前者と同様の鍔を有し口径が体部最大径より大きいもの（711・790）である。土師質の土鍋も口縁部の形態によって，くの字に外反させるもの（712～718・796)，くの字に外反させ口縁部内面を受口状に凹ませるもの（721・795)，口縁部が直立するもの（719)，口縁部外面に粘土を貼り付けて肥厚させるもの（720・797）の4類に大別される。備前焼は16点図示した。727は第IV期前半に属し(註3・14)，14世紀後半から15世紀前半頃である。728・807は16世紀後半から17世紀前半頃である。731は器種不明。733は体部外面に突帯が付く水屋甕で，16世紀後半頃である。802は胎土が良質のものであり，16世紀末を中心とする時期が考えられる。803は15世紀頃である。804は三耳壺で，一方の耳の下に「×」字のヘラ記号が認められる。16世紀後半から17世紀前半頃である。805は肩部に2～3本の沈線が2段に施される。16世紀末頃である。806・809は15世紀から16世紀前半である。811は水屋甕の口縁部と思われる。16世紀末頃である。唐津及び肥前産の陶磁器は54点図示した。735は内面見辺にモミガ

第222図　D地区第１面ＳＤ01下層遺物出土状況（1/20）

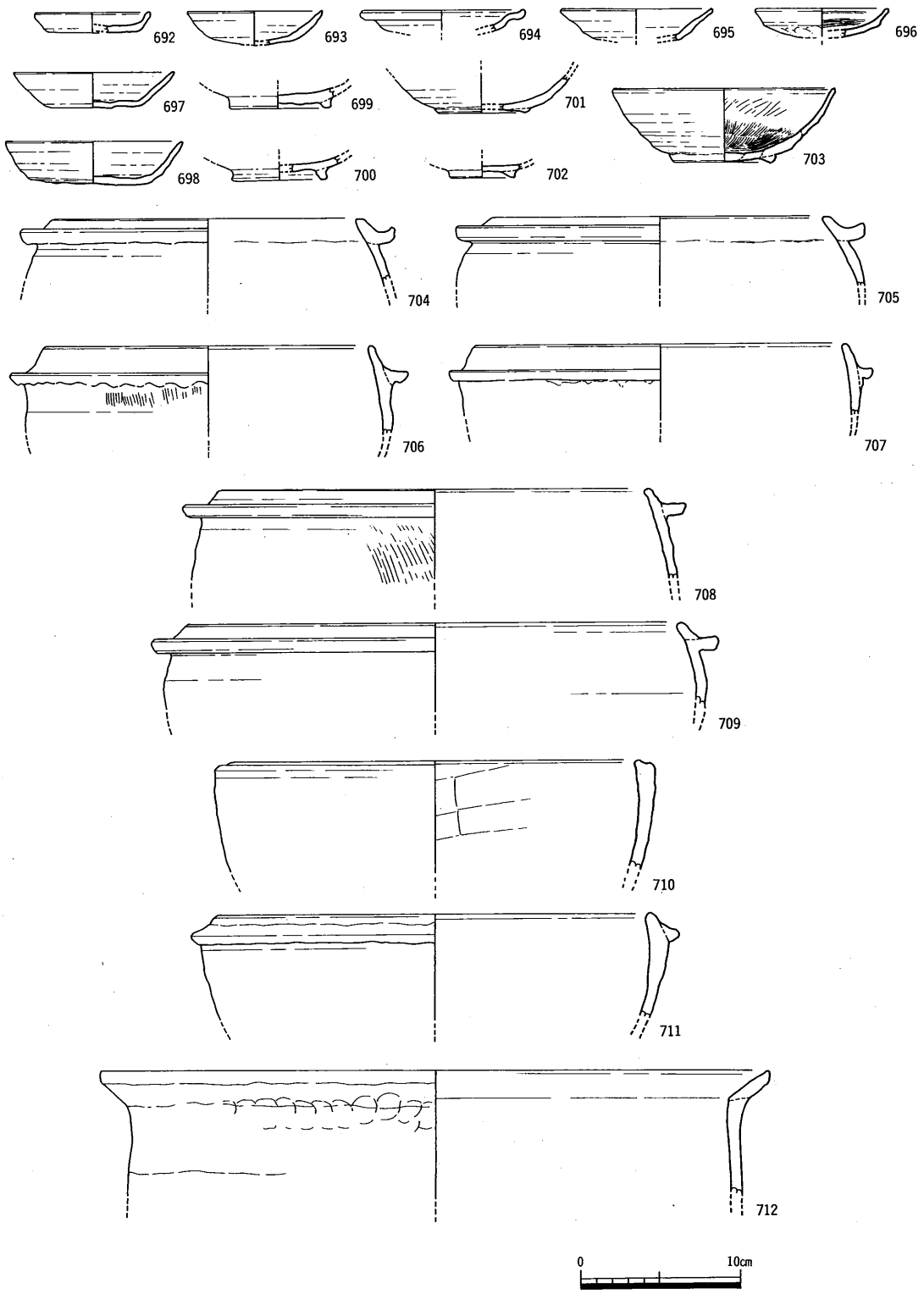
ラ状の釉着が認められる。737は見辺みに砂目積痕が認められ，口縁部内面に鉄絵で圏線が描かれる。746～748は内外面にイラボ釉的灰釉が施される。749は内面見辺に鉄絵でススキを，750は芦を描いている。751は外面に柳を，753は松を描いている。754は円盤状土製品に転用されている。内面見辺に花卉文，外面高台内に「大明」銘を描いている。813は高台部付近に鉄泥を塗っている。814は口縁端部に鉄釉を塗った，いわゆる皮鯨手と呼ばれるものである。825は火熱を破っており外面に煤が付着する。827は，口縁部内面に鉄絵で直線及び円弧を描いている。828は，鉄絵で体部外面に自由闊達なタッチで抽象的な文様を描いている。829はいわゆる天目碗である。834～837はほぼ同意匠の皿で，口縁部内面に2～3条の圏線を2段に描いている。見辺には砂目積が認められる。839は内面見辺に植物を描いている。841はいわゆる筒形碗と呼ばれるもので，外面腰部に一条の圏線を描いている。843は鉄釉と透明釉の掛分碗である。844は青磁釉と透明釉の掛分碗で，高台部に鉄泥を塗っている。生産地での時期は，735・736・749・750・813・814・827・828が1580～1610年代，747・748・831・832が1590～1630年代，746が1590～1640年代，740・821が1600～1620年代，738・739・741～744・817・818・822・824・825が1600～1630年代，834～837・841が1610～1630年代，839が1620～1640年代，843・844・845が1630～1640年代，751・842が1630～1650年代，754が1640～1660年代，753・829が17世紀前半代，830が17世紀代，752が18世紀代である。瀬戸・美濃の陶磁器は6点図示した。755は削り辺み高台の丸皿で，灰釉を全面施釉する。内面見辺及び高台内にトチの目痕が認められる。756は付高台の丸皿であろう。灰釉を全面施釉する。757は折縁皿である。内面見辺と高台内は無釉。高台内に三又トチが認められる。846は内外面に灰釉を施す。847は体部外面に鉄釉を，底部付近は錆釉で鉄化粧を施す。生産地での時期は，846が15世紀代，755～757・847が16世紀代，758が18世紀代である。中国産磁器は15点図示した。760・761・852は外面に鏑蓮弁を有する龍泉窯系の青磁碗で，太宰府の分類の龍泉窯系碗Ⅰ－5類に属する(註2)。853・854も龍泉窯系の青磁碗である。762・848は陶器質の碁笥底の染付皿で，いずれも内面見辺に人形寿字文が描かれる。小野氏の分類のC群皿Ⅲ類に属する(註13)。849は内面に植物を描く。細片のため型式は不明。850は同氏の分類の皿E群に属する。851は同氏の分類項目には無く，16世紀後半以降に多出するものである。855～857はいずれも端反りの白磁皿で，森田氏の分類(註7)の皿E群2b類に属する。円盤状土製品は，上・下層合わせて86点出土した。その内訳は，土師質のものが最も多く44点，備前焼27点，唐津11点，肥前磁器2点，瀬戸・美濃陶器1点，瓦質のもの1点である。また径は3.4cmから6.0cmまでの幅があった。767は県内では延命遺跡城岡地区SP02，下川津遺跡SEIV02に類例が認められる。土師質の竈は4点を図示した。769・800・801は炊き口部の破片で，外面には鰭状の突帯が付く。瓦は8点を図示した。770・771・866・867・869・871は表面に炭素を吸着させている。771は玉緑を有する丸瓦で，凹面に布目痕が認められる。867の凸面には離れ砂が付着する。871も玉緑を有する丸瓦で，凸面はナデ調整を行ない，凹面には布目圧痕が認められる。なお，866・868・869は火熱を

被っており，変色や煤の付着がみられる。砥石は5点を図示した。772は細～中粒砂岩製である。4面を使用しており，各面には細かな擦痕が多く認められる。773は凝灰質細粒砂岩製である。横断面で六角形に面取りされており，4面以上を使用している。774は細粒砂岩製である。現状で4面を使用しており，各面には細かな擦痕が多く認められる。875は中粒砂岩製である。ほぼ全形を知り得る資料で，1面のみ使用している。横断面形は凹状を呈し，中央部には溝状の擦痕が認められる。なお裏面は，火熱を被ってもろくなっている。874は細粒砂岩製である。ほぼ全形を知り得る資料で，3面を使用している。縦断面形は凹状を呈し，中央部には溝状の擦痕が認められる。上面は火熱を被っており，煤が厚く付着する。なお石質より，772・774・874・875は荒砥，773は仕上げ砥と推定され，本遺構より出土した砥石は，点数が限られるものの圧倒的に荒砥が多い点が注意される。凹み石（775）は1点図示した。細～中粒砂岩製である。上端に敲打痕が認められ，敲き石に転用されている。872は細～中粒砂岩製である。上端に敲打痕が認められ，また火熱を被って黒色化している。873は塩基性角礫凝灰岩製の下臼である。上面には条溝が認められるが，風化が著しく分画数等は不明である。876は石材不明。ほぼ球状の体部を有し，上部に紐を通したと思われる小孔を穿つ。形態から漁具に使用された石錘と推定される。776は摩滅が著しいため銭種は不明。僅かに「元〇〇寶」と読める。877は銅製品である。体部は燈籠形を呈し，頂部に径4㎜の小孔が穿たれる。下端面は平坦であることから文鎮と推定した。木製品は，横櫛（878・879），手斧の柄（880），下駄（881～885），蓋板？(886～889,891)，底板（890），桶側板（892～895），漆塗椀（896～900），部材（901），用途不明品（902～905），杭（906），木栓（907），独楽（908）が出土している。878・879は，いずれも破片である。全体形状は，背部が弓なりに湾曲しカマボコ形に近く，断面形状は背部が丸く柳葉形に近い。878 は一端を欠く。丁寧に櫛歯を挽き出しており，歯元はよく揃っている。櫛歯密度は14条/cmとやや粗い。879は両端及び櫛歯の大半を欠く。櫛歯密度は4条/cmと極めて粗く，挽き出しは比較的丁寧に行なっている。両者共材は広葉樹が使用されている。880はほぼ完形品である。頭部は断面台形状，握り部は楕円形状を呈する。頭部には刃部着装用の浅い抉りがあり，抉り部側面には摩滅による着装痕が認められる。全面は丁寧に加工されている。材はコナラ属アカガシ亜属の一種で柾目材を使用する。881は露卯差歯高下駄の歯である。上端中央には台部と接合するための枘穴が認められる。下端木口は使用によるささくれがある。材はヒノキ属類似種で板目材を使用する。882～885は，連歯下駄である。鼻緒孔の位置は，いずれも前壺はほぼ中央，後壺は後歯の前に穿たれている。台部の平面形は，882～884は長方形，885は後端が僅かに幅を狭めた台形状を呈する。歯幅は882～883が台幅より僅かに広く，884・885は台幅とほぼ等しい。885の前歯中央には，幅4cmの断面半円形状の溝が穿たれている。883は，表面に足痕がかすかに認められ，左足用と推定され，前歯は親指側がやや広く削り出されている。886～889・891はいずれも円形を呈する薄板で，側面に曲物等に結合するための木釘等の痕跡が認められないことから，容器の蓋板として仮に分類した。

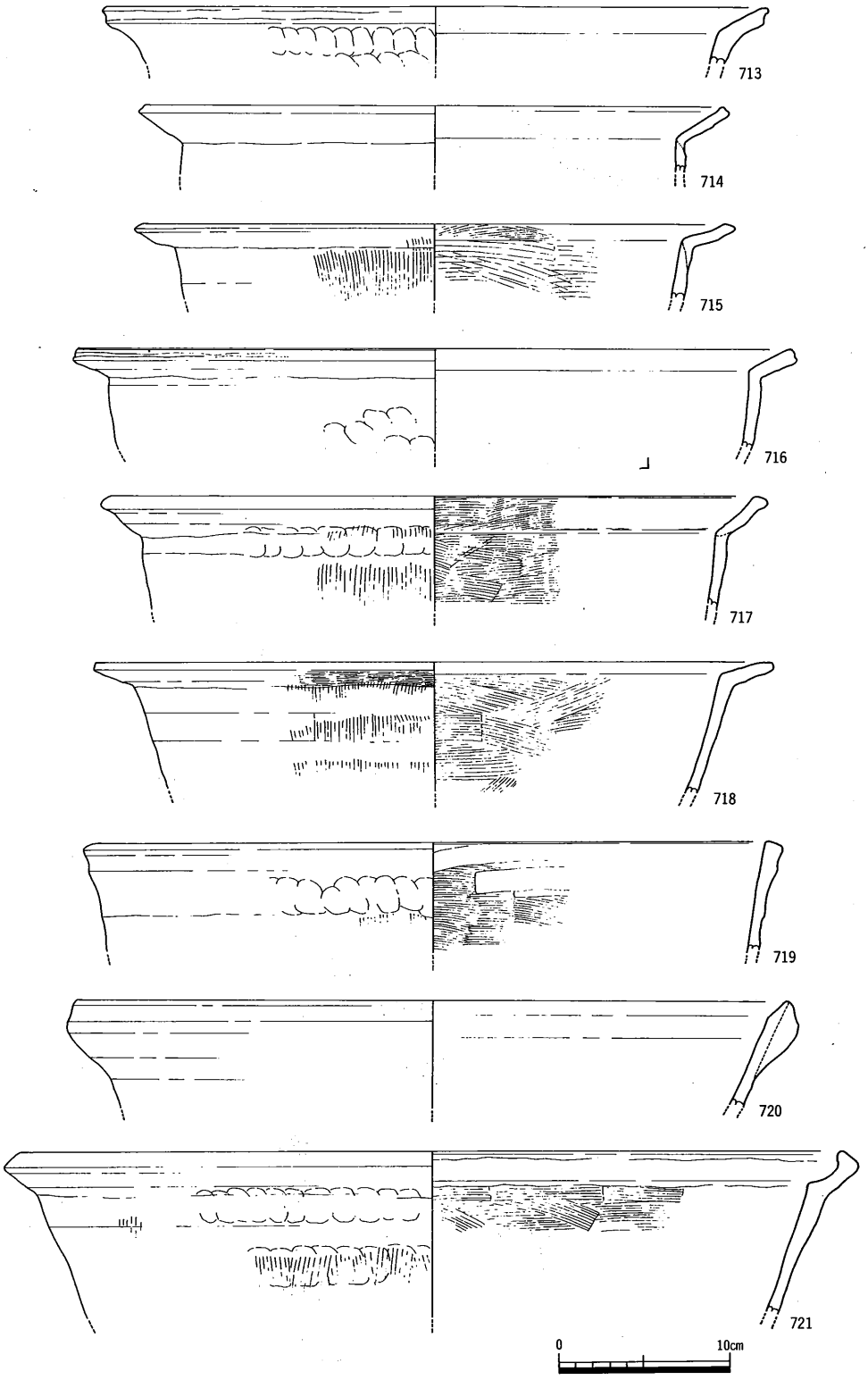
ただし，嵌殺しによって側板と接合する方法もあり，この場合桶や樽との関連を考慮する必要がある。886・887は，上下両面及び側面に黒漆が塗られていることから蓋板の可能性が高い。890は組合せ式のもので，これは底板であろうか。892～894は，両側面がシャープな平坦面を保ちながら傾斜し，しかも横断面はやや内湾し，前記側面の傾斜は内湾する面に存在することから，桶の側板と判断した。いずれも外面には，892は上下2段に，893・894は3段にタガの痕跡が認められる。892は長さ12.7cmを測り，上端から10.3cmの位置に幅0.6cmの底板の圧痕が認められる。このことから，この桶は深さ10.3cmを測る小型品で，約1.8cmの上げ底であったと推定される。同様に893・894は同一規格を有し，長さ27.0cmを測り，上端から24.1cmの位置に幅0.6cmの底板の圧痕が認められていることから，この桶は深さ24.1cmを測るもので約2.3cmの上げ底と考えられる。なお，893・894の内面には，使用時の内容物が付着している。895は全体に摩滅が著しいため，詳細は不明である。材はスギ・コウヤマキ・ヒノキの類似種が使用されており，木取りは全て板目取りであった。なお，桶の側板は柾目取りが多いとされている(註15)ことからすると，例外的な事例と考えられる。本溝より出土した漆塗椀は，細片も含めると10点を数える。そのうち形態のある程度判明するものを図示した。これらを形態の上から分類するとおよそ2類に分類される。A類は，高台部の厚さと体部の厚さがほぼ等しいものである（897～899)。B類は，底部の器肉の厚さが体部の器肉より厚いもの，つまり高台が比較的高いにもかかわらず，高台内の刳り辺みが浅いものである（900)。この他，高台裏面を未調整のベタ高台とするものも出土したが，状態が悪く図化できなかった。こうした高台形態の差は法量にも若干の差として表われており，用途に差があった可能性が考えられる。896は，外面に黒色漆，内面に赤色漆を塗る。897は外面に黒色漆，内面は柿渋を下地に使用し赤色漆を塗っている。898は外面に黒色漆が塗られるが，内面は剝落したのか不明である。899は外面に黒色漆，内面は黒色漆を塗った後に赤色漆が塗り重ねられている。さらに内面見辺には黒色漆で植物（ススキ？）が描かれる。900は外面に黒色漆，内面に赤色漆を塗っている。なお材は，トチノキ・クリ・コナラの一種が使用されており，木取りは全て横木取りであった。901は建築部材と考えられる。断面長方形に斫った芯持材を使用する。902は形態から横槌になる可能性がある。しかし加工痕が不明瞭で破損部位も多く，断定はできない。907は長径4.8cmの断面楕円形を呈し，下端を円錘状に削って尖がらすもので，とりあえず木栓とした。上端面は磨耗しておらず，未使用に近い。材はカヤを使用していた。908は上端部径5.0cmを測り，断面形は略円形を呈する。下半は丁寧で細かい面取り加工を加えて尖らす。上面に軸を挿入する径1.3cm程の円孔が穿たれている。材はマツ属の一種を使用していた。

出土遺物から，ＳＤ01は17世紀中頃にほぼその機能を停止しており，18世紀頃には最終的に埋没していたものと思われる。

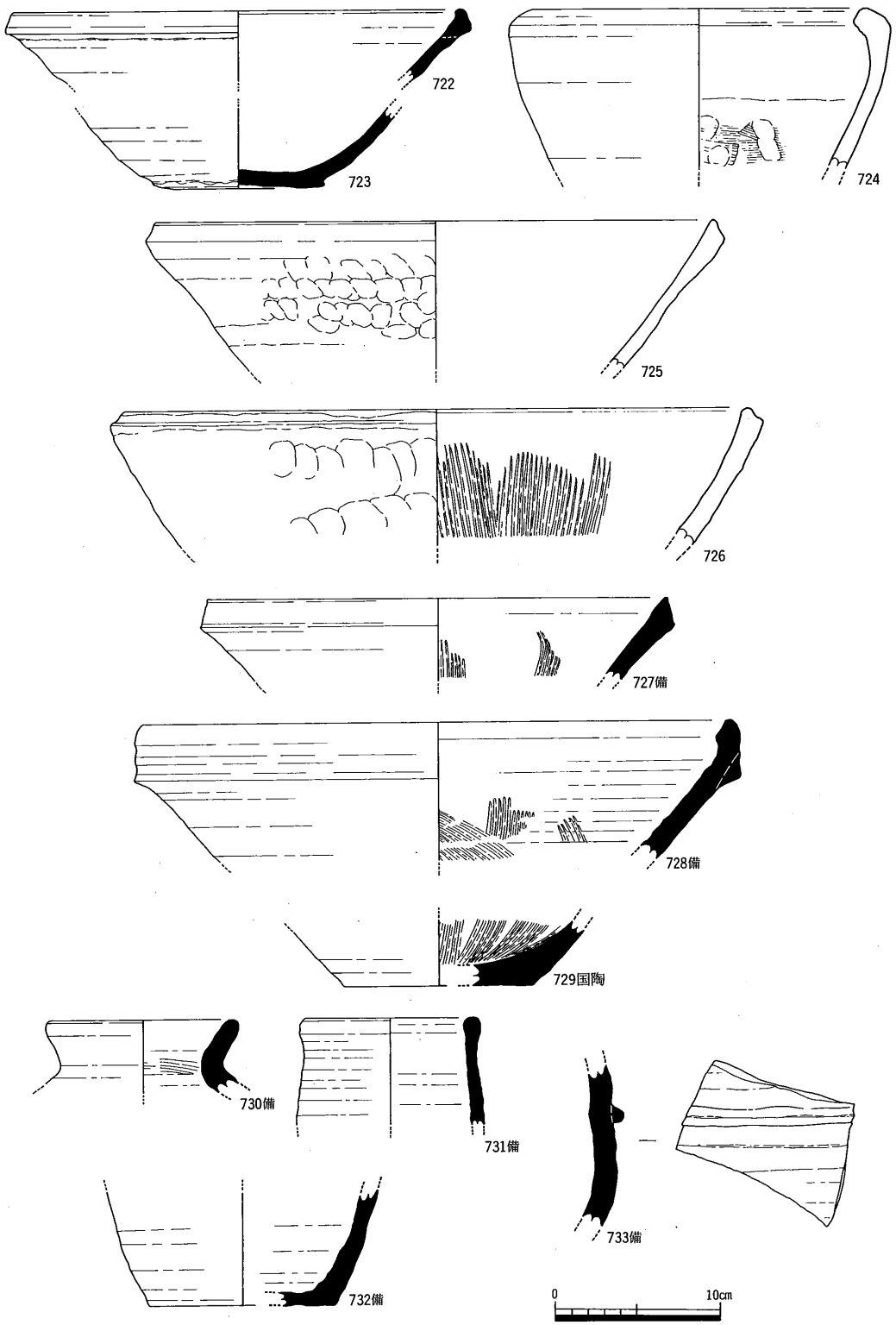
ＳＤ03（第236図）　Ｄ－２区西端部で検出された溝で，ＳＤ01より派生してＳＤ01の西側を平行に北に延びる。幅0.6m，深さ0.2m，主軸の方向Ｎ－６°－Ｅを測る。断面形は逆台形状を呈



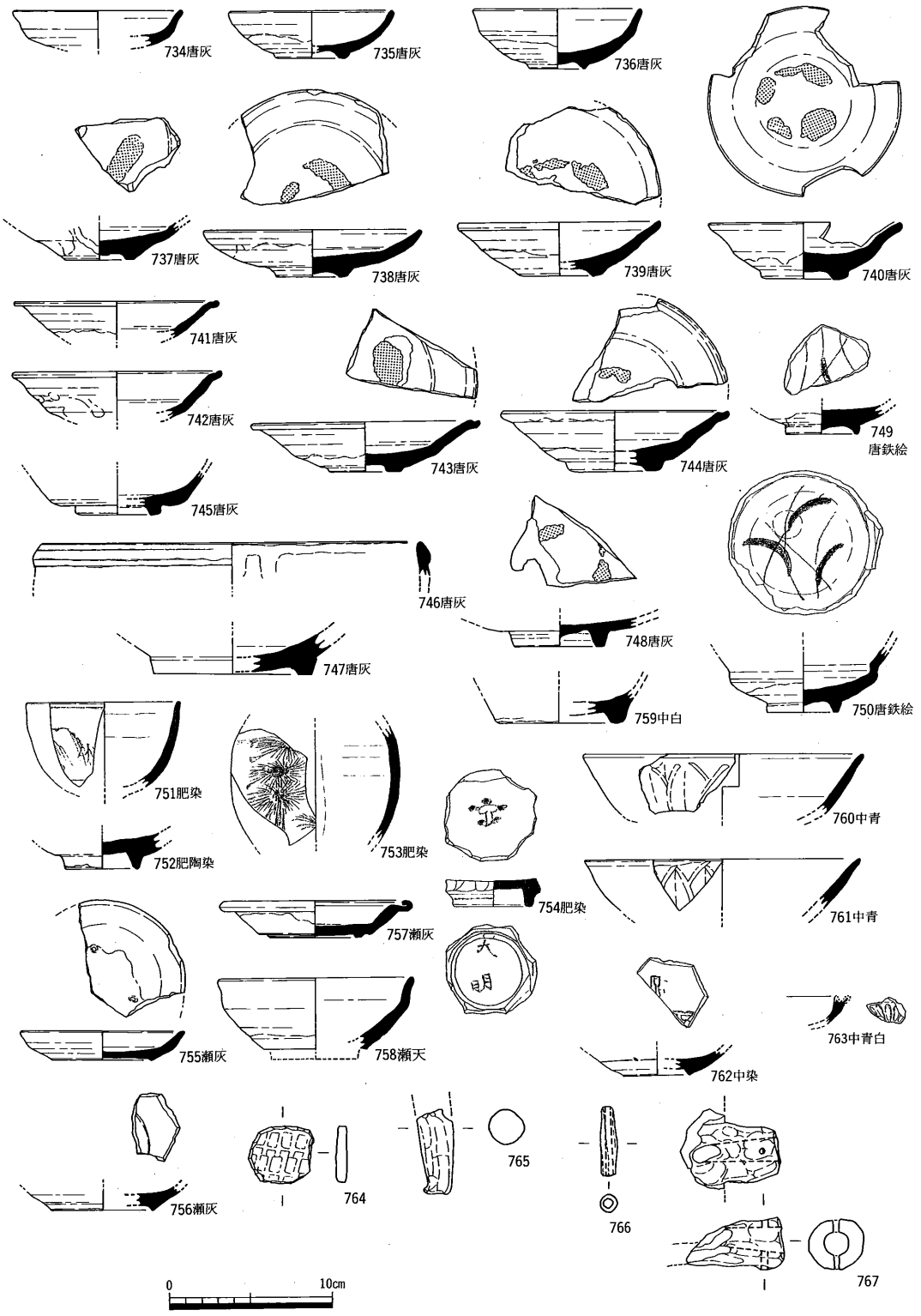
第223図　Ｄ地区第１面ＳＤ01上層出土遺物〔１〕(1/4)



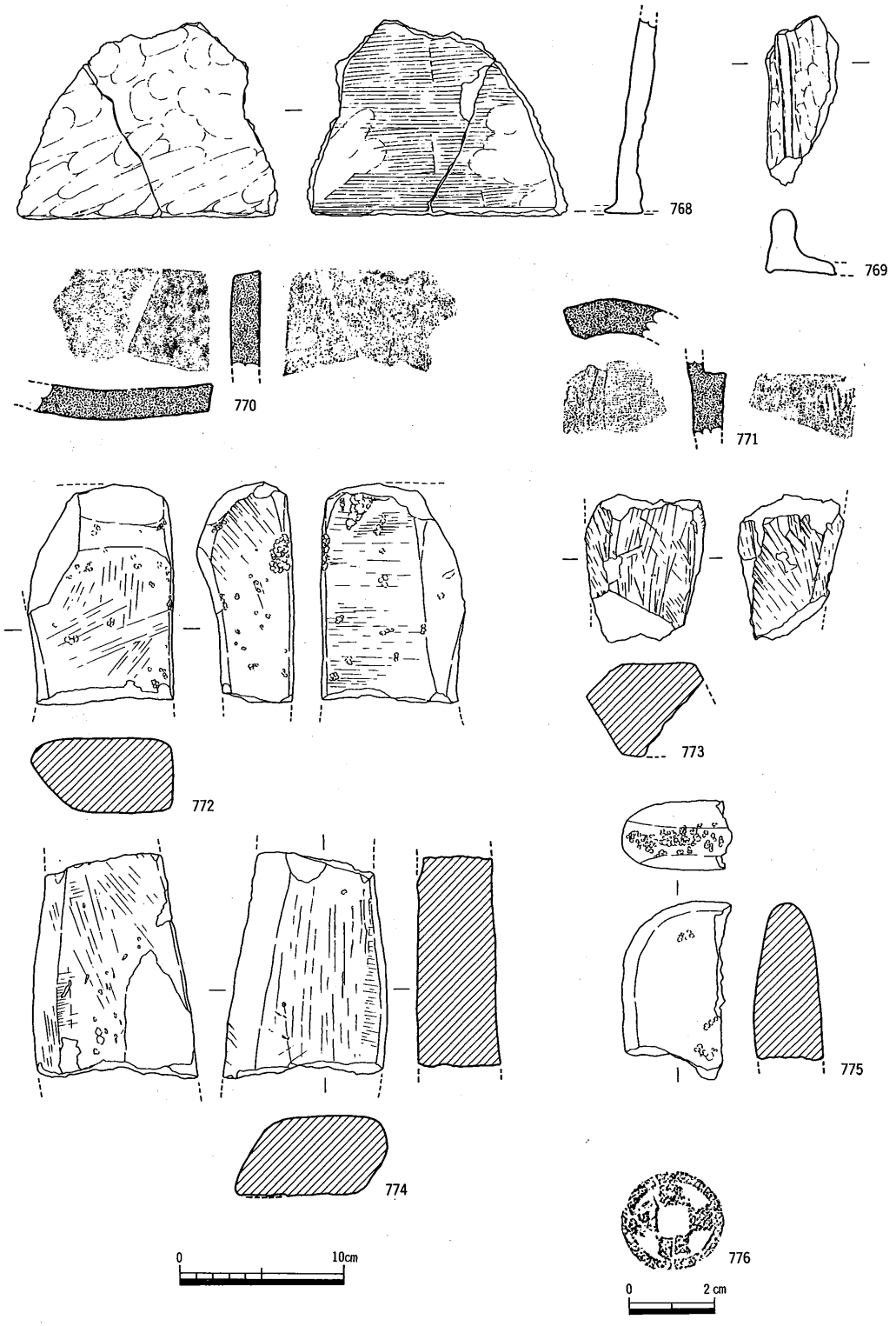
第224図　D地区第1面SD01上層出土遺物〔2〕(1/4)



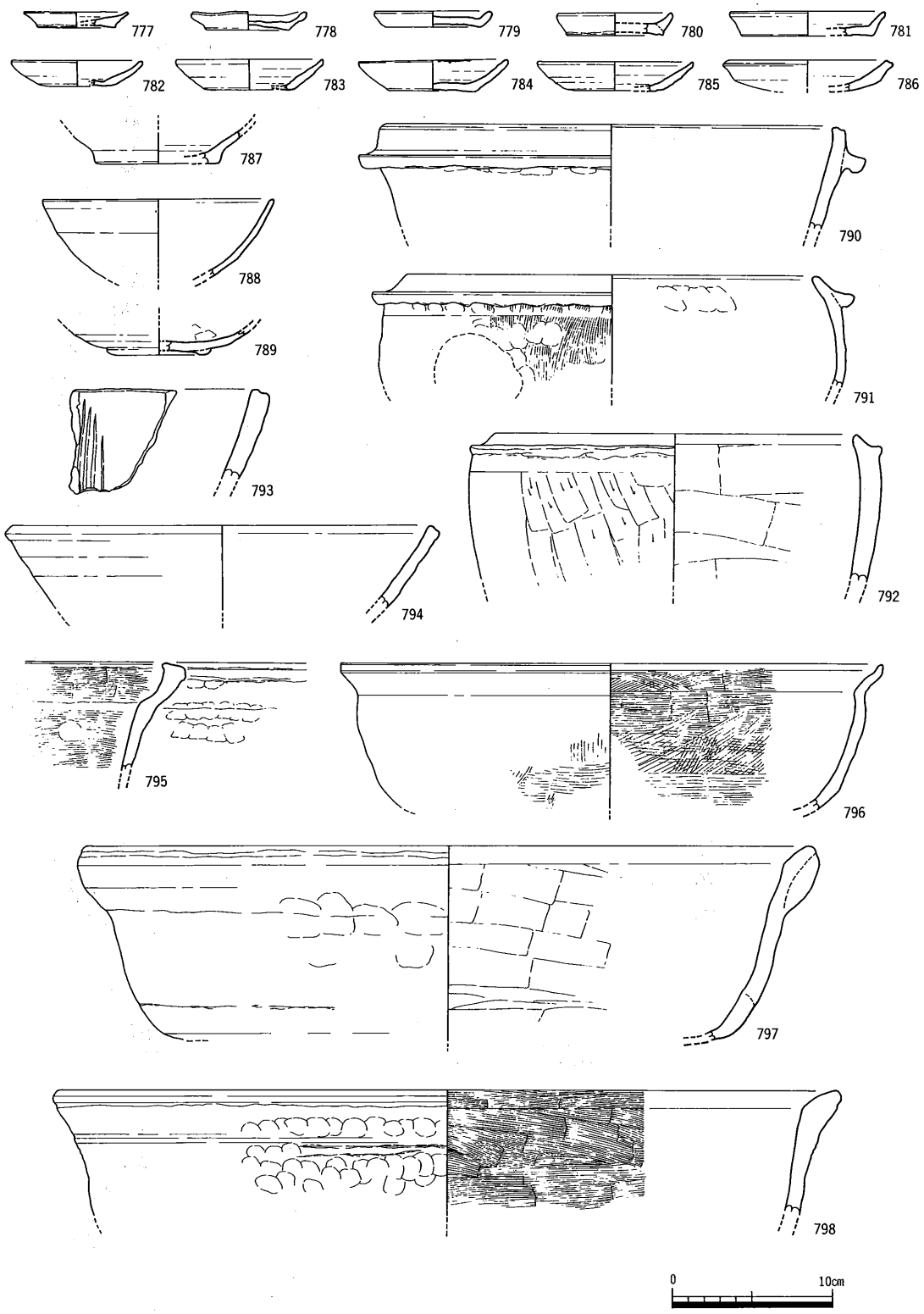
第225図　Ｄ地区第１面ＳＤ01上層出土遺物〔３〕(1/4)



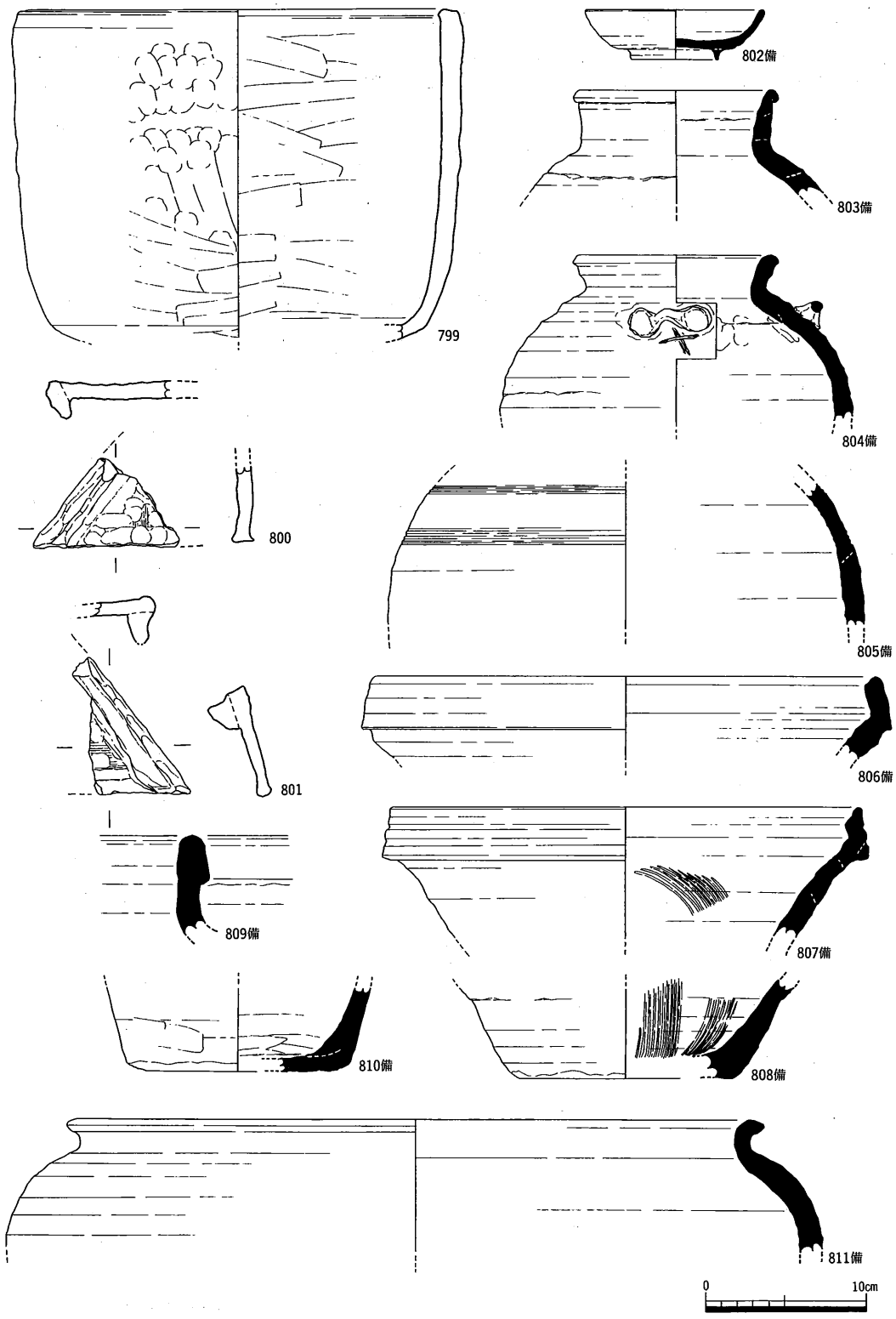
第226図　Ｄ地区第１面ＳＤ01上層出土遺物〔４〕(1/4)



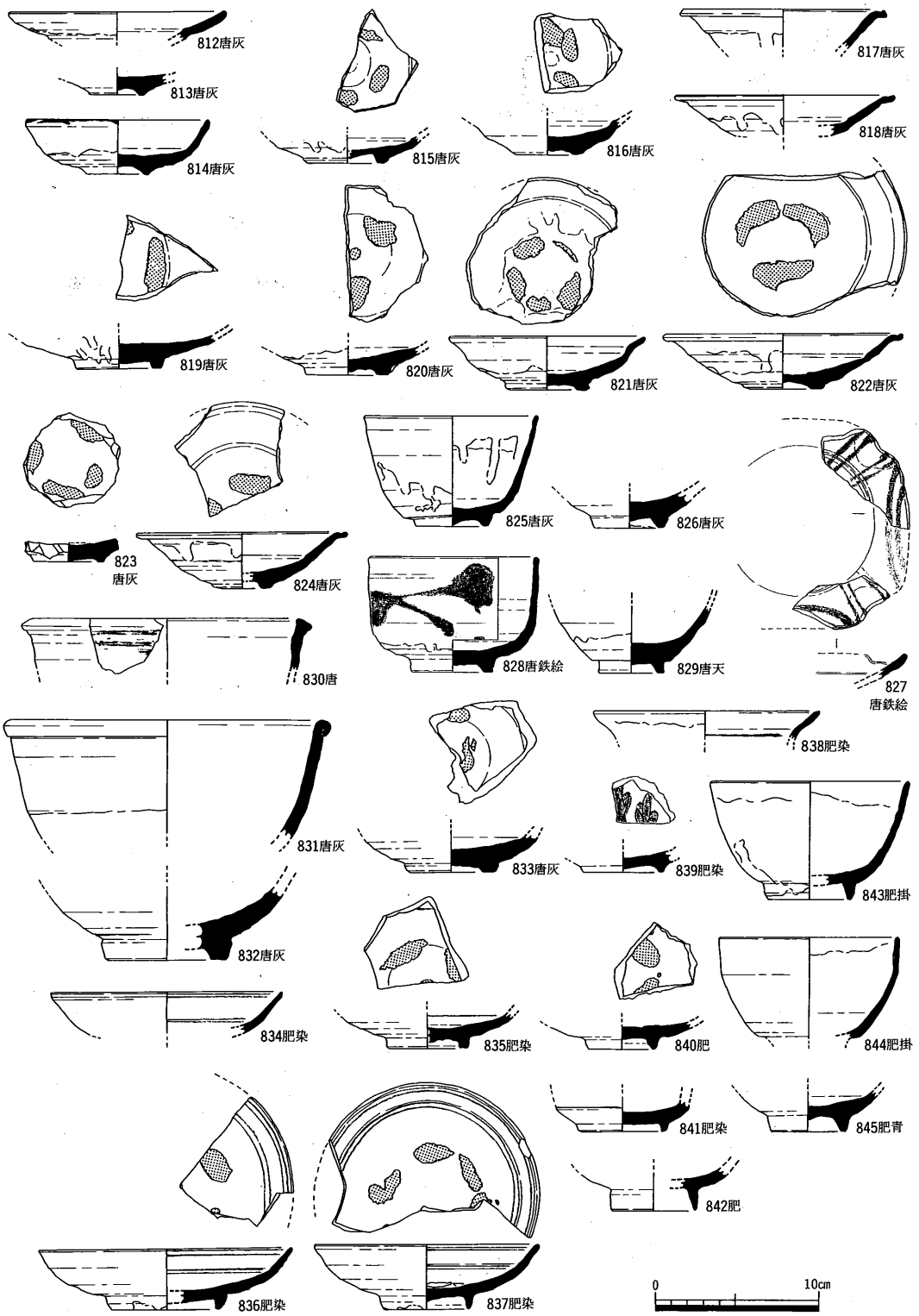
第227図　Ｄ地区第１面ＳＤ01上層出土遺物〔５〕(1/4, 2/3)



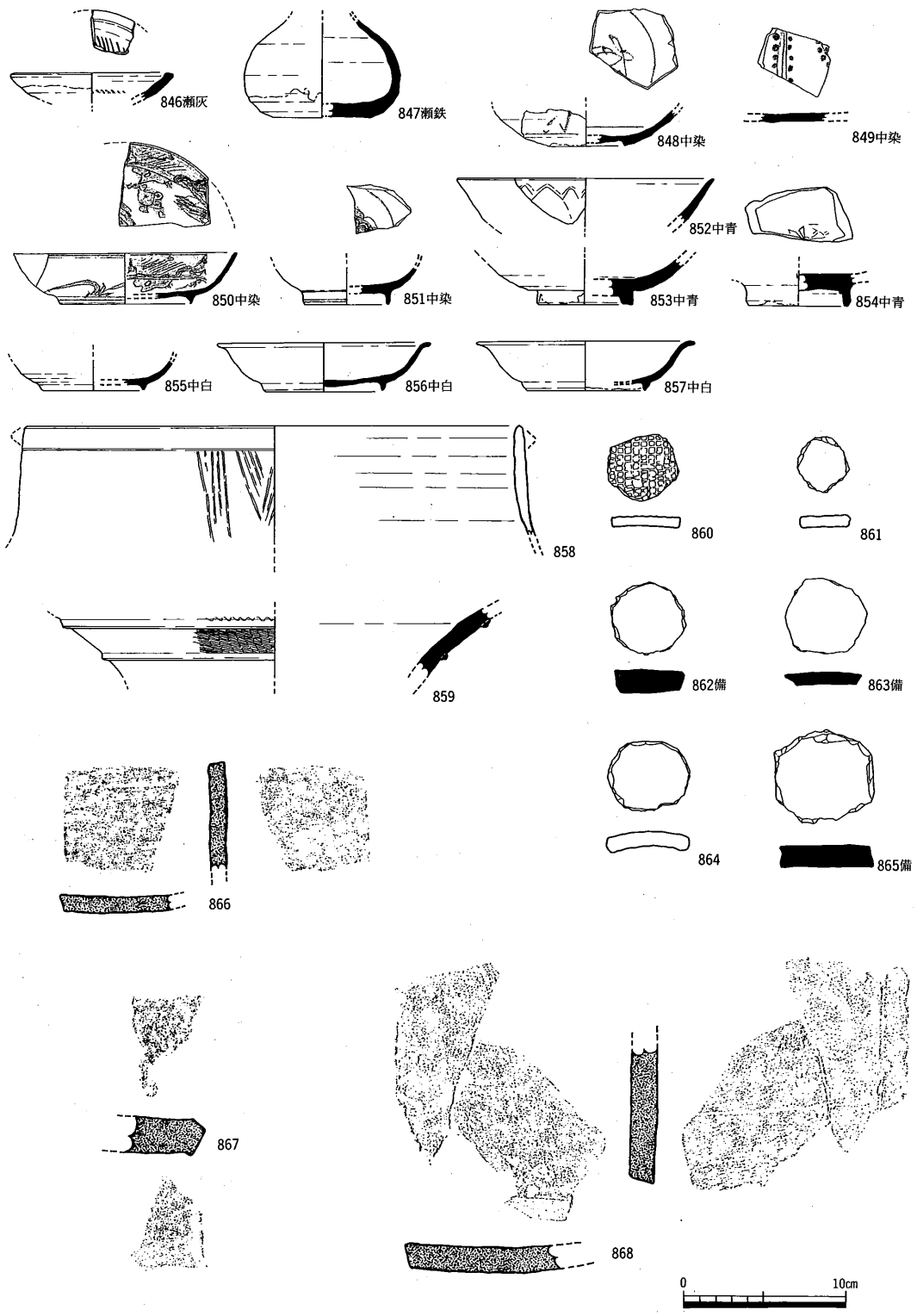
第228図　D地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔１〕(1/4)



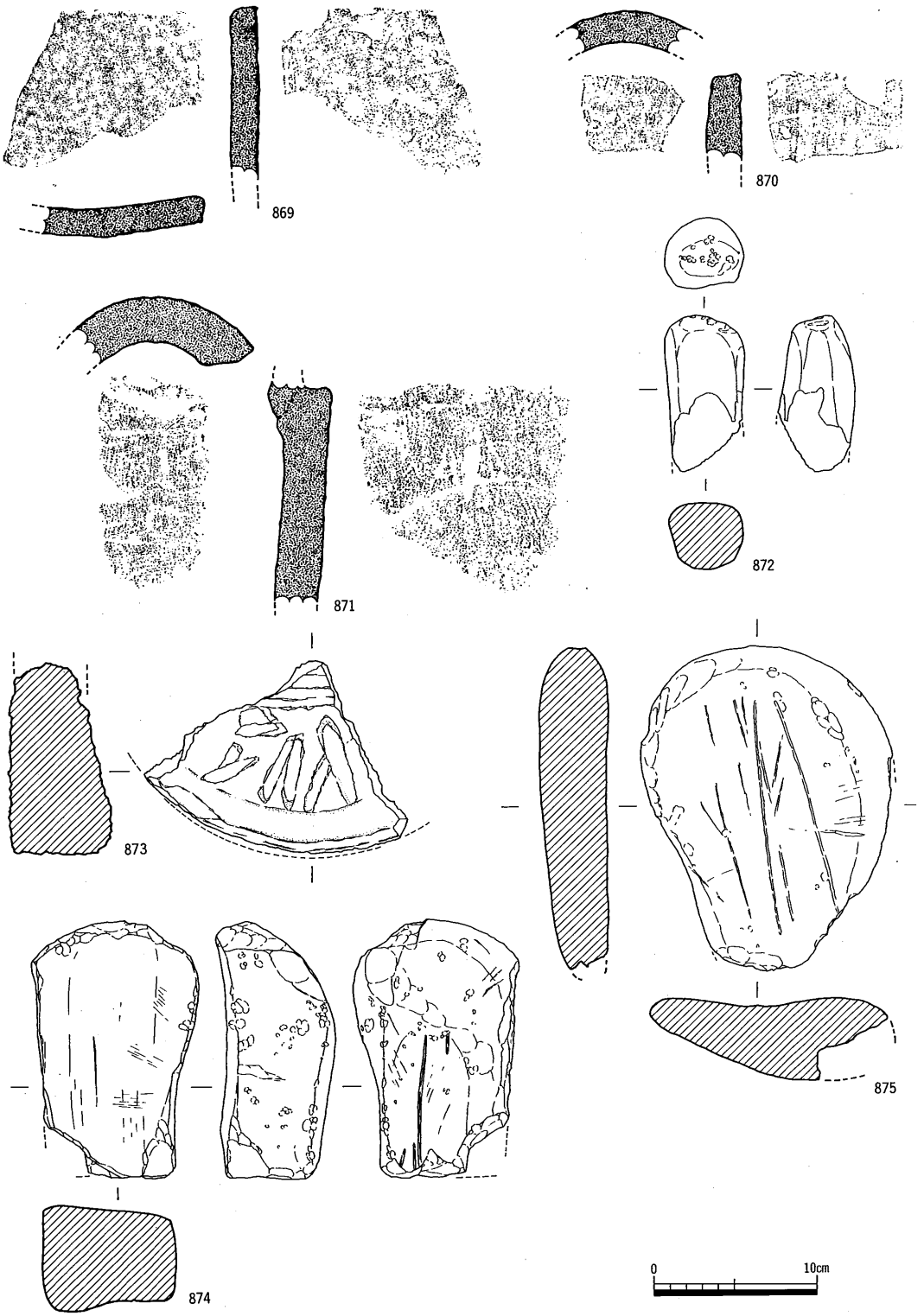
第229図　Ｄ地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔２〕(1/4)



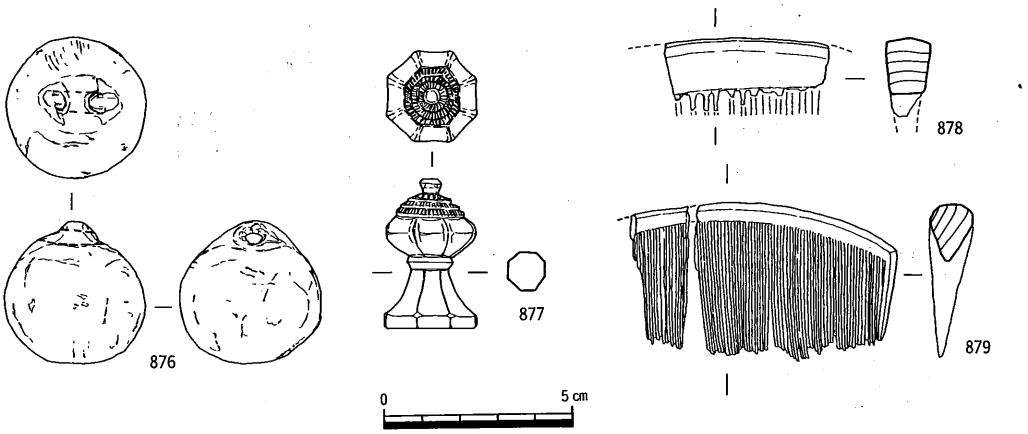
第230図　Ｄ地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔３〕(1/4)

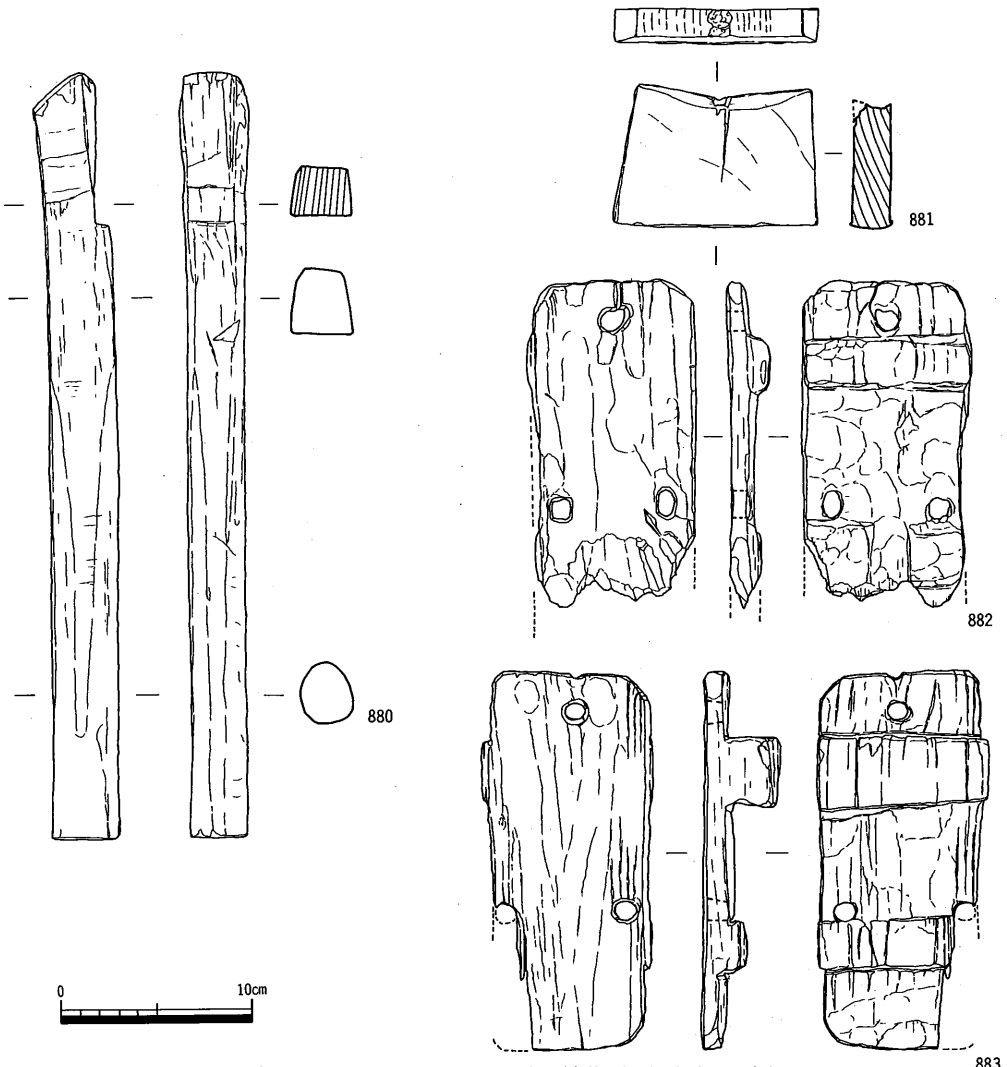


第231図　Ｄ地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔４〕(1/4)

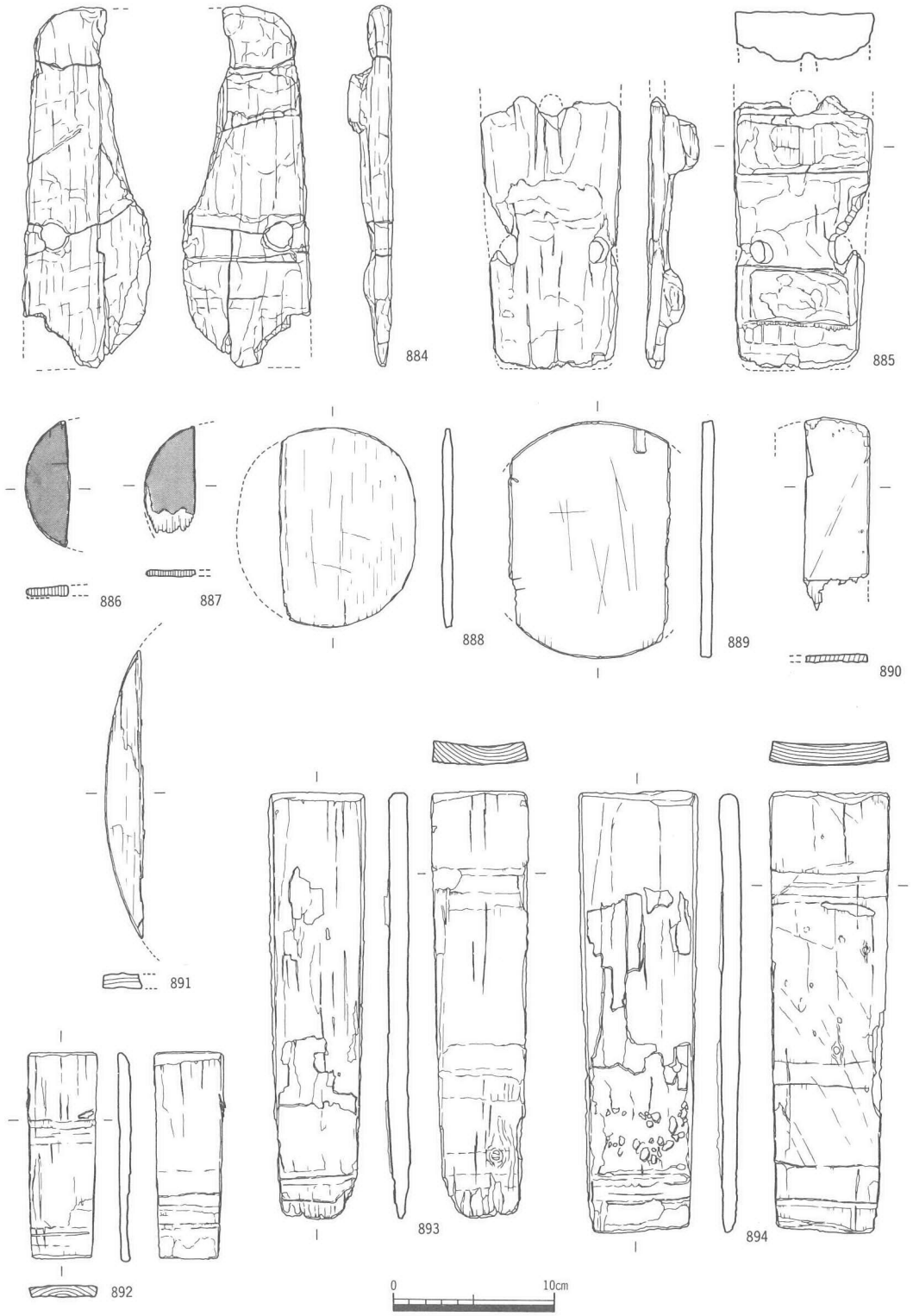


第232図　D地区第1面SD01下層出土遺物〔5〕(1/4)

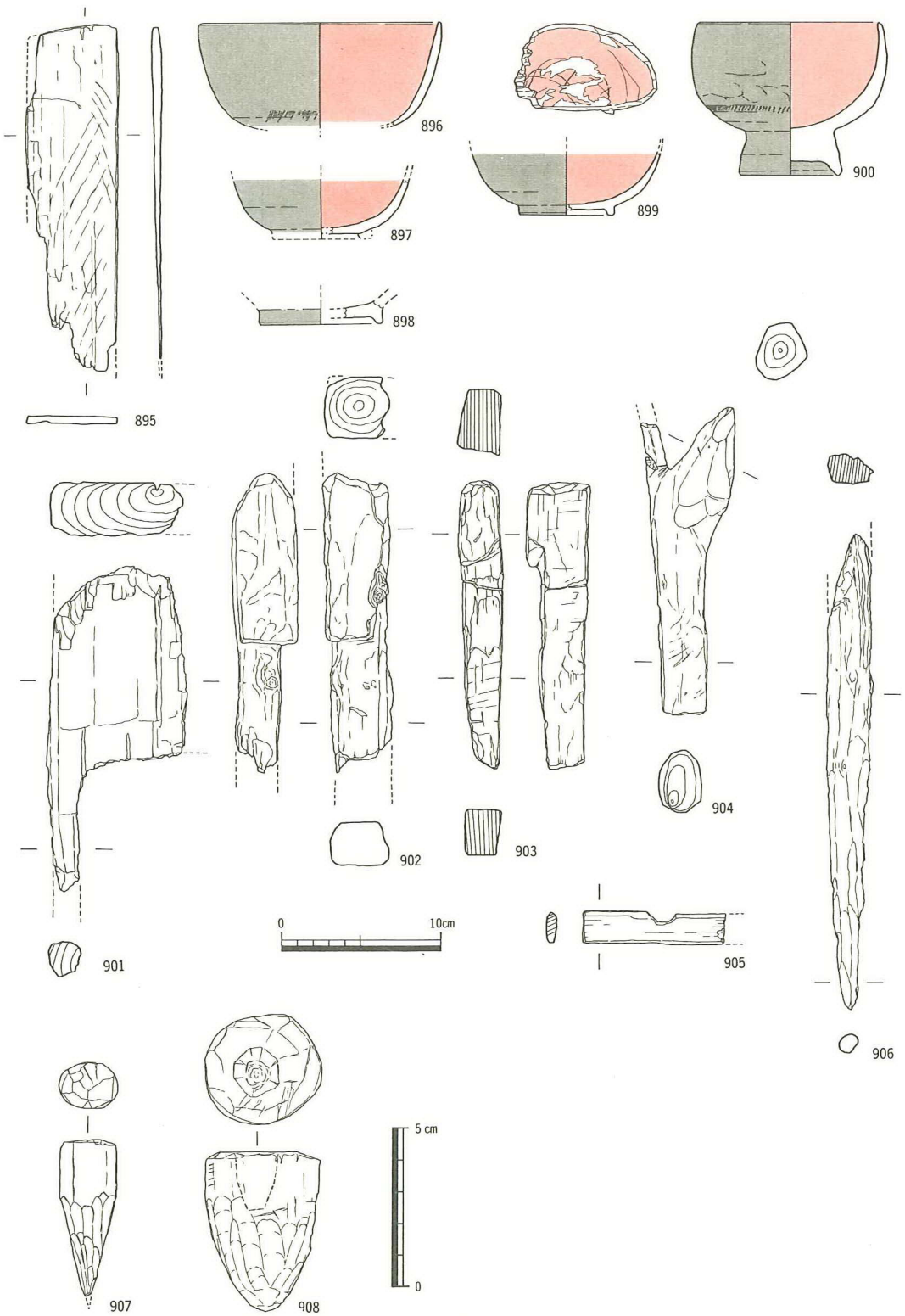




第233図　D地区第1面SD01下層出土遺物〔6〕(1/2, 1/4)



第234図　D地区第1面SD01下層出土遺物〔7〕(1/4)



第235図　Ｄ地区第１面ＳＤ01下層出土遺物〔８〕(1/4，1/2)

する。埋土はＳＤ01に類似し，上層は灰褐色系粘質シルト及び砂質シルトが，下層は灰褐色細砂が堆積していた。なお，本溝とＳＤ01との底のレベル差は0.4mを測る。

遺物は土師質土器坏（909），同埦（910・911）が出土した。909は底部ヘラ切りである。

ＳＤ04　Ｄ－２区北西部で検出された小溝である。ほぼ直線的に南北に延び，北端はＳＤ02に切られる。南端部は屈曲してＳＤ05に連なる。幅0.2m，深さ0.1m，検出長7.5m，主軸の方向Ｎ－３°－Ｅを測る。断面形はＵ字状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

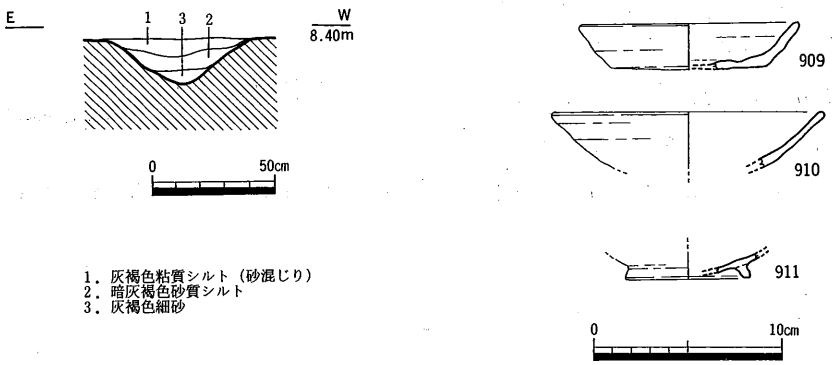
遺物は土師質土器の羽釜・皿，備前焼甕等の細片が出土した。

ＳＤ05・07（第237図）　ＳＤ05は，ＳＤ04から屈曲して東に延びる小溝である。屈曲部から3.5mのところで途切れる。さらに６m東には，ＳＤ07が同一方向に延びている。ＳＤ05は幅0.2m，深さ0.05m，ＳＤ07は幅0.25m，深さ0.1m，主軸方位はいずれもＥ－６°－Ｓを測る。断面形はいずれもＵ字形を呈する。ＳＤ05の埋土は暗灰褐色粘質シルトの単層，ＳＤ07は灰黄褐色粘質シルト及び灰褐色粘質シルトからなる。

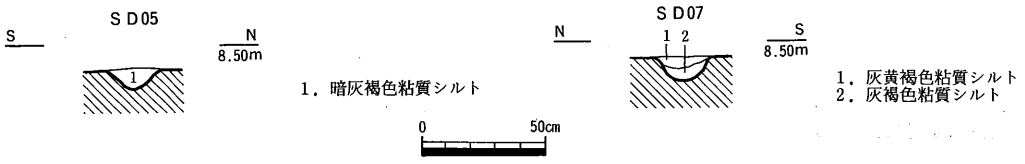
両溝とも出土遺物は極めて乏しい。僅かにＳＤ07より，土師質土器脚部１点が出土したのみである。

ＳＤ08（第238図）　Ｄ－２区北東隅部をほぼ直線状に南北に延びる小溝である。南端付近で僅かに屈曲する。幅0.5m，深さ0.1m，主軸の方向Ｎ－５°－Ｅを測る。断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，土師質土器羽釜（912），備前焼壺（913）の他，土師質土器土鍋・皿・亀山焼甕等の細



第236図　Ｄ地区第１面ＳＤ03断面図（1/30），出土遺物（1/4）



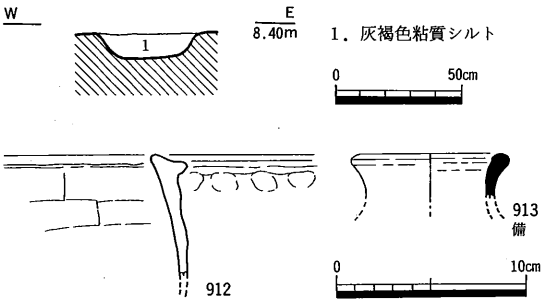
第237図　Ｄ地区第１面ＳＤ05，ＳＤ07断面図（1/30）

片が出土した。913は，端部から内面にかけてゴマ状の自然釉がかかる。備前焼第Ⅴ期に属し(註3・14)，時期は16世紀前半から17世紀前半頃である。

出土遺物よりＳＤ08の埋没時期は，17世紀前半頃と推定される。

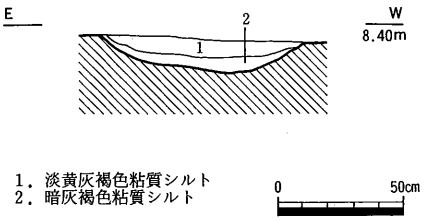
ＳＤ09（第239・240図）　Ｄ－２区東半部をＬ字状に巡る溝である。北端部は調査区北辺より1.5m南で途切れ，東端はＳＤ10に合流する。コーナー部は緩やかに屈曲し，南への突出が見受けられる。南北溝の幅0.4～0.9m，深さ0.15m，主軸の方位Ｎ－５°－Ｅ，東西溝の幅1.1～1.9m，深さ0.15m，主軸の方位Ｅ－７°－Ｓを測る。断面形は皿状を呈し，埋土は淡黄灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトからなる。

遺物は，土師質土器皿（914），同坏（915・916），細粒砂岩製の砥石（917）の他，土師質土器羽釜，和泉型瓦器埦等の細片が出土した。914は底部ヘラ切りである。917は４面以上を使用しており，各面に細かな線状擦痕が多くみられる。石質から荒砥と推定される。

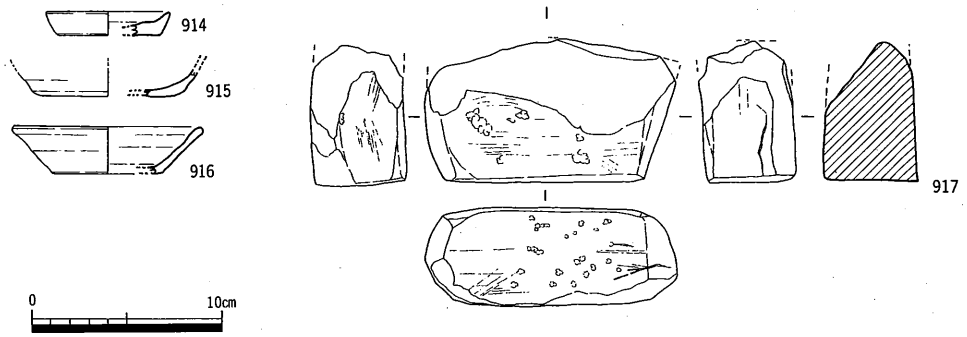


第238図　Ｄ地区第１面ＳＤ08断面図（1/30），出土遺物（1/4）

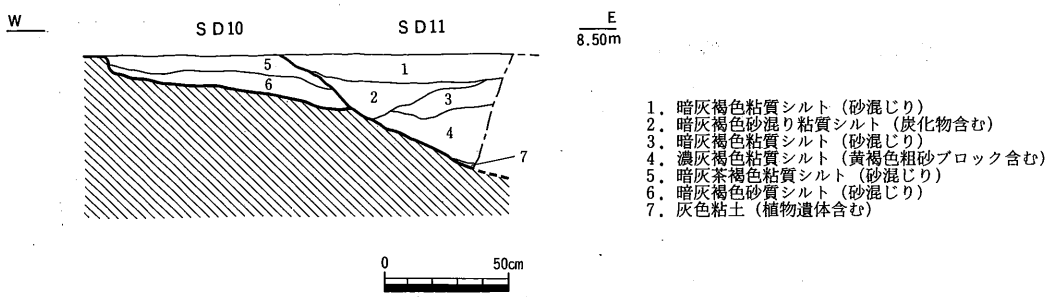
ＳＤ10（第241図）　Ｄ－２区東端を南北に延びる溝である。ＳＤ09とともに，Ｄ－２区東北部をコの字型に区画する。東肩はＳＤ11に切られ，今一つはっきりしない。幅0.8m以上，深さ0.2mを測る。調査時に，ＳＤ11の掘り込みに気付かずに掘り下



第239図　Ｄ地区第１面ＳＤ09断面図（1/30）



第240図　Ｄ地区第１面ＳＤ09出土遺物（1/4）



第241図　D地区第1面SD10，SD11土層断面図（1/30）

げてしまったため，一部両溝の遺物が混じってしまった。

遺物は，土師質土器坏・瓦質土器埦等の細片が少量出土した。

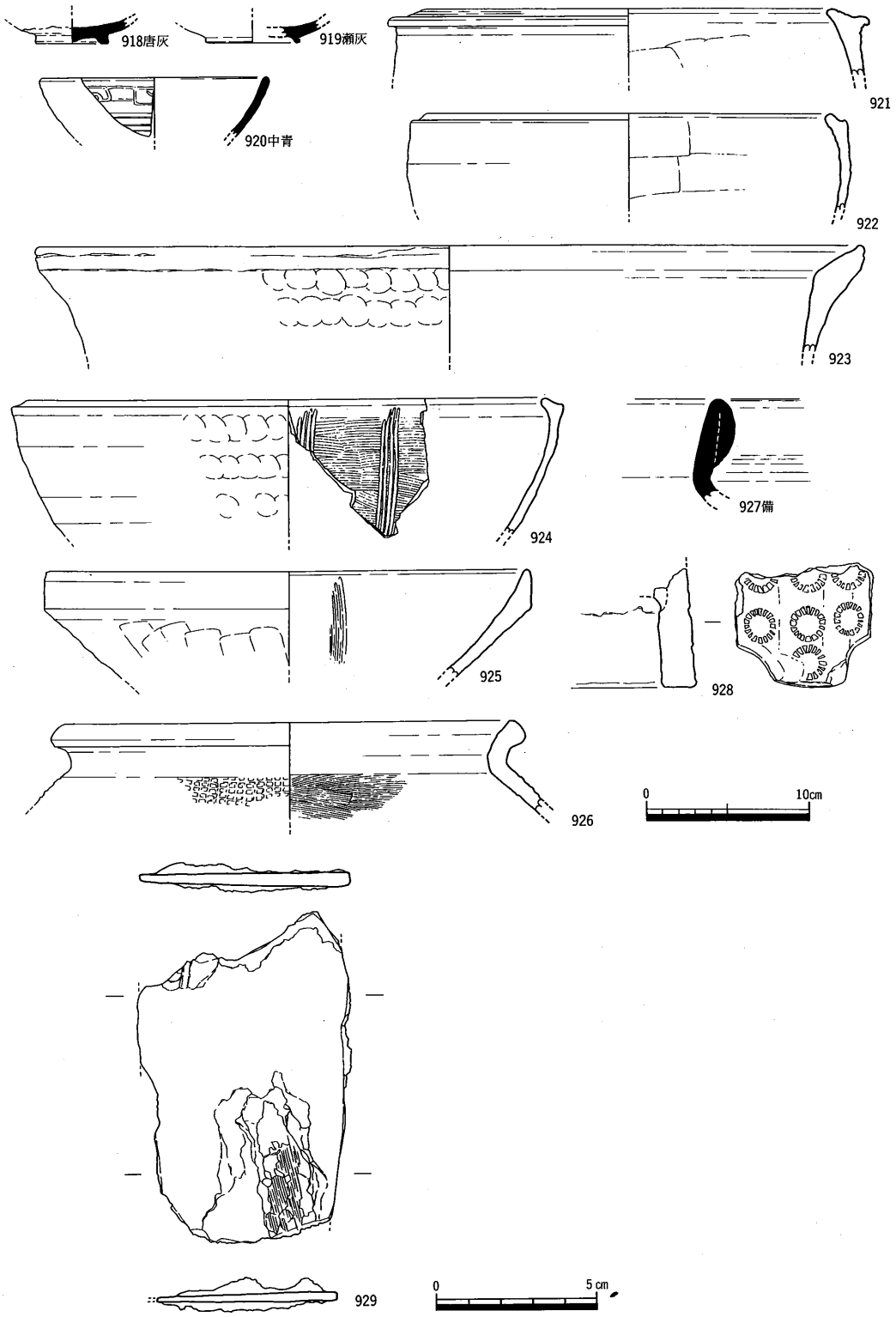
SD11（第241・242図）　SD11はD－2区東端部を南北に延びる溝である。南北両端と東肩は，調査区の関係上確認できなかった。ただし，D－3区西南端で一部検出されたSD34は，埋土や主軸方位等が一致し一連のものと考えられ，この場合幅2m前後，深さ0.4m以上を測る溝となる。埋土は大きく2層に分かれる。上層は灰褐色系粘質シルトを主体とし，下層は植物遺存体を多く含む灰色粘土が認められた。

遺物は上層を中心に出土している。上層からは，唐津灰釉碗（918），瀬戸・美濃灰釉皿（919），中国産青磁碗（920），土師質土器羽釜（921・922），同土鍋（923），同擂鉢（924），同甕（926），同火舎（928），瓦質土器擂鉢（925），備前焼甕（927），不明鉄製品（929）の他，亀山焼甕，唐津灰釉皿（溝縁）等の細片が出土した。919は付高台の皿である。灰釉を全面施釉する。時期は16世紀頃である。920は口縁部に雷文帯を施す青磁碗で，上田氏の分類のC－II類に属する（註8）。927は備前焼第IV期に属し（註3・14），時期は14世紀後半から16世紀初頭頃である。929は下端に木質部が遺存し，鍬又は鋤の可能性がある。

出土遺物からSD11の埋没時期は，17世紀前半頃と推定される。また規模・方向・埋土・遺物・時期等がSD01に近似することから，D－2区屋敷地の東縁辺部を区画する区画溝と推測される。

SD12（第243図）　D－2区東端を逆L字状に巡る溝である。東西溝の幅1.1m，深さ0.25m，主軸の方向N－4°－E，南北溝の幅1.0m，深さ0.2m，主軸の方向N－85°－Eを測る。断面形は皿状を呈し，埋土は主として灰褐色系粘質シルトが認められた。また，コーナー部の東方約1mで，凝灰岩の亜角礫を上面がほぼ水平になるように据え置いた敷石状の遺構が検出された。石は溝幅の中心よりやや南に偏っている。これに付随する遺構は認められなかったため，機能等は不明である。

遺物は，土師質土器皿（930），同埦（931），備前焼擂鉢（932），須恵質平瓦（934），細粒砂岩製の砥石（935）が出土した。930は底部ヘラ切りである。931は早島式土器とされるものに近い。



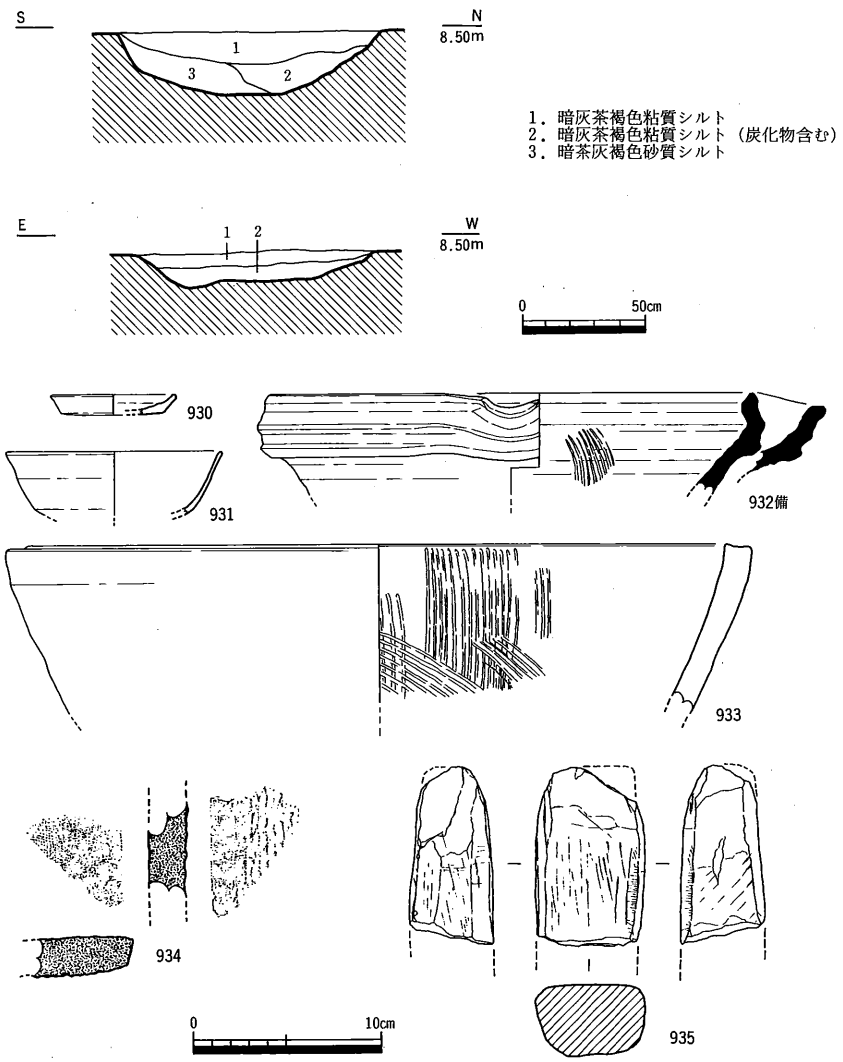
第242図　Ｄ地区第１面ＳＤ11出土遺物（1/4，1/2）

932は備前焼第Ⅴ期に属し(註３・14)，時期は16世紀前半から17世紀前半頃である。935の砥石は４面を使用しており，各面はよく使い込まれ，細かな線状擦痕が多く認められる。石質から粗砥と推定される。

出土遺物からＳＤ12は，17世紀前半頃には埋没していたものと考えられる。

ＳＤ13　Ｄ－２区東部で検出された小溝で，西端部をＳＤ12南北溝に切られる。幅0.3m，深さ0.1m，主軸の方向Ｅ－４°－Ｓ，検出長4.8mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は土師質土器擂鉢等の細片が数点出土したのみである。



第243図　Ｄ地区第１面ＳＤ12断面図（1/30），出土遺物（1/4）

ＳＤ14　Ｄ－２区東部で検出された小溝で，東端をＳＤ11に，西端をＳＤ12南北溝に切られる。幅0.5m，深さ0.1m，主軸の方向Ｅ－５°－Ｓ，検出長5.6mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は全く出土していない。

ＳＤ15　Ｄ－２区南東隅で検出された平面Ｌ字状に巡る小溝である。東端は調査区外に延び，南端はＳＤ16に合流する。また，ＳＤ16との合流部付近でＳＤ18に切られる。幅0.3m，深さ0.1mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は土師質土器皿，羽釜等の細片が少量出土したのみである。

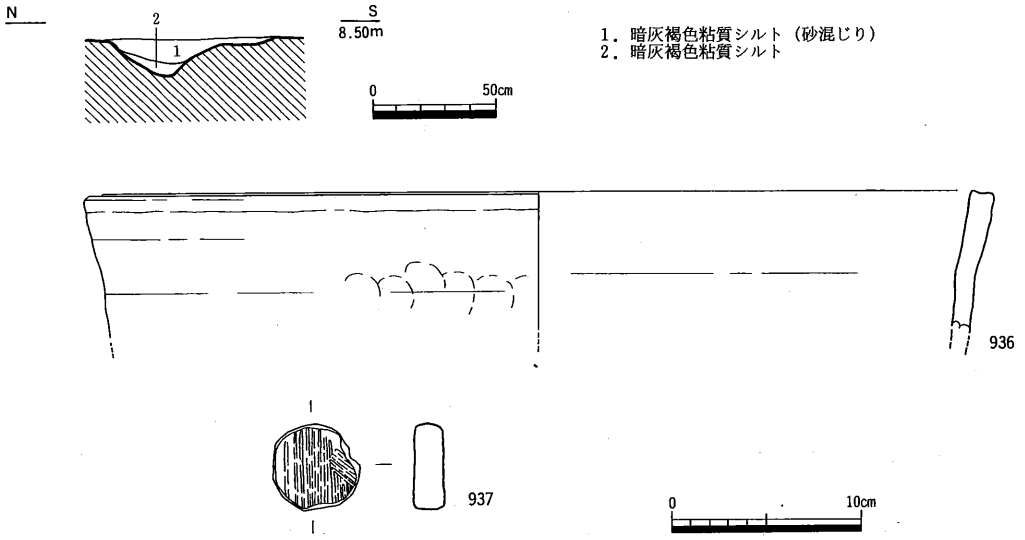
ＳＤ16　Ｄ－２区南東隅で検出された溝である。現存部の中央付近でＳＤ15が合流し，東端部はＳＤ17に切られる。幅0.5m，深さ0.1m，主軸の方向Ｅ－12°－Ｓ，検出長5.8mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は土師質土器，備前焼等の細片が数点出土したのみである。

ＳＤ17（第244図）　Ｄ－２区東南端部で検出された溝で，東端をＳＫ25に切られる。延長距離9.2mを検出した。幅0.7m，深さ0.15m，主軸の方向Ｅ－７°－Ｓを測る。断面形は概ね皿状を呈し，南半にテラス部が認められる。埋土は暗灰褐色粘質シルトからなる。

遺物は，土師質土器土鍋（936），同円盤状土製品（937）の他，備前焼甕，焼土粒等が出土した。

ＳＤ18（第245図）　Ｄ－２区東南部で検出された小溝である。幅0.35m，深さ0.15m，主軸の方向Ｅ－14°－Ｓを測る。約9.5mを検出した。断面形は浅い皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シ



第244図　Ｄ地区第１面ＳＤ17断面図（1/30），出土遺物（1/4）

ルトからなる。

遺物は中国産龍泉窯系青磁碗（938），同白磁壺（939）の他，土師質土器皿，土鍋等の細片が出土した。939は燭台の可能性が考えられるが，類例に乏しく不明である。

ＳＤ19　Ｄ－２区南東隅で検出された小溝である。幅0.2m，深さ0.05m，主軸の方向Ｎ－23°－Ｅ，検出長2.5mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は土師質土器皿や羽釜等の細片が数点出土したのみである。

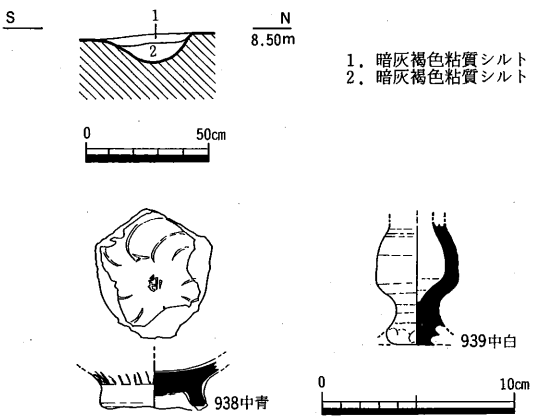
ＳＤ20　Ｄ－２区南東隅で検出された平面Ｌ字状を呈する小溝である。幅0.2m，深さ0.05m，南北溝の方向Ｎ－15°－Ｅを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は土師質土器の細片が１点出土したのみである。

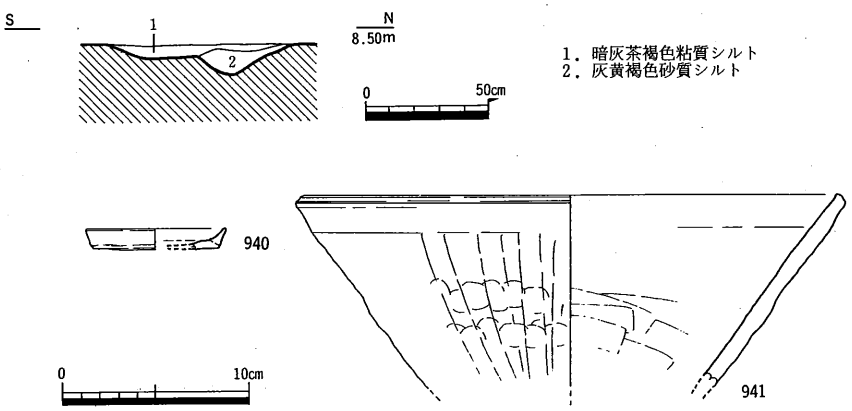
ＳＤ21　Ｄ－２区東部で検出された溝で，ＳＤ22を切っている。幅0.6m，深さ0.1m，主軸の方向Ｎ－9°－Ｅ，検出長4.8mを測る。掘り方の断面形は概ね皿状を呈し，やや東半部が深くなる。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は全く出土していない。

ＳＤ22（第246図）　Ｄ－２区中央部で検出された溝である。東端付近をＳＤ21に切られる。幅0.8m，深さ0.15m，検出長3.5m，主軸の方向Ｅ－1°－Ｓを測る。断面形は北肩にテラス部を持ち，南辺がＵ字状に凹む。埋土は暗灰褐色粘質シルト及び灰黄褐色砂質シルトからなる。



第245図　Ｄ地区第１面ＳＤ18断面図（1/30），出土遺物（1/4）



第246図　Ｄ地区第１面ＳＤ22断面図（1/30），出土遺物（1/4）

遺物は土師質土器皿（940），瓦質土器こね鉢（941）が出土した。940 は底部ヘラ切りである。

ＳＤ23　Ｄ－２区南端部を東西に延びる小溝である。幅0.4m，深さ0.1m，主軸の方向Ｅ－14°－Ｓを測る。断面形は浅い逆台形状を呈し，北半部がやや凹む。埋土は灰茶褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は乏しく，備前焼等の細片が少量出土したのみである。

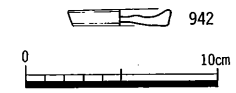
ＳＤ24（第247図）　Ｄ－２区中央部で検出された溝である。平面形はいびつに屈曲する。幅0.3m，深さ0.1mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は土師質土器皿（942）が出土した。底部はヘラ切りである。

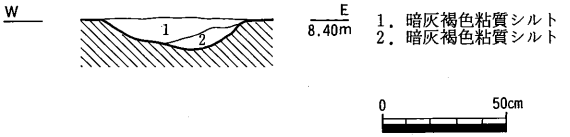
ＳＤ25（第248・249図）　Ｄ－３区西半部で検出された溝で，南端部でＳＤ29を切っている。幅0.6m，深さ0.1m，主軸の方向Ｎ－４°－Ｅを測る。断面形は浅い皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルトからなる。

遺物は，土師質土器釜（943），肥前染付皿（944），唐津灰釉皿（945），凝灰岩質流紋岩製の砥石（946）が出土した。944は内面の見込に亀甲文と菊文を描く。時期は1620～1640年代である。945の時期は1600～1630年代である。946は４面を使用している。石質より仕上げ砥と推定される。

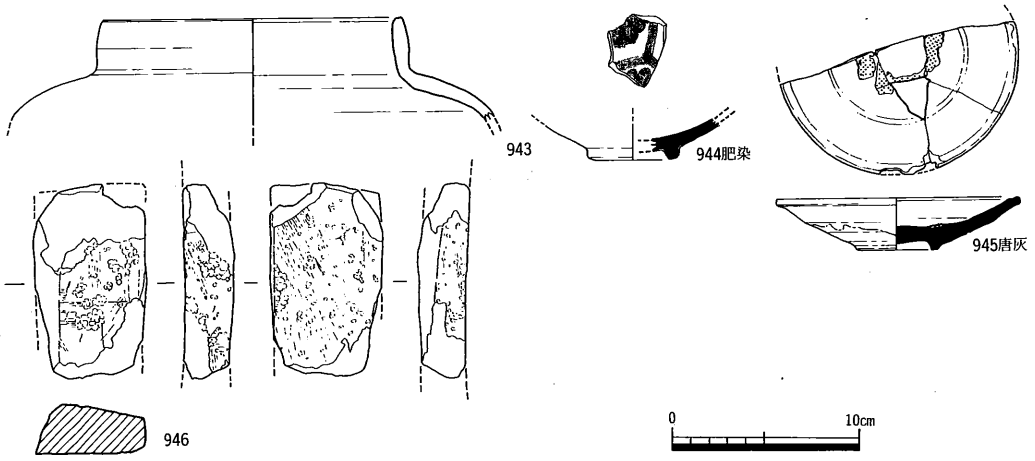
出土遺物よりＳＤ25の埋没時期は，17世紀前半頃と推定される。



第247図　Ｄ地区第１面
ＳＤ24出土遺物（1/4）



第248図　Ｄ地区第１面ＳＤ25断面図（1/30）



第249図　Ｄ地区第１面ＳＤ25出土遺物（1/4）

ＳＤ26（第250図）　Ｄ－３区中央部で検出された溝で，ＳＤ25にほぼ並行して南北に延びる。南端付近でＳＤ27が二股に分かれて南に延びる。主軸の方向Ｎ－３°－Ｅ，幅0.8m，深さ0.2mを測る。南半部では掘り方は直に近く掘り込まれ，断面箱状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトで，２～３層に細分された。

遺物は，土師質土器皿（947），和泉型瓦器埦（948），サヌカイト製の凹基式石鏃（949）が出土した。

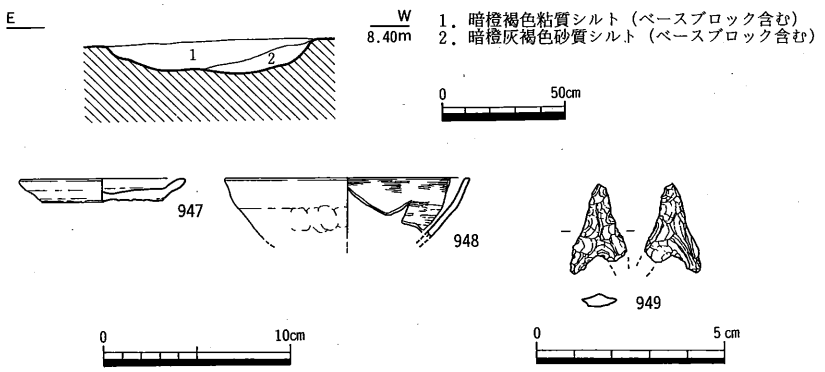
ＳＤ27　Ｄ－３区中央部で検出された溝で，ＳＤ26より分岐して南に延びる。幅0.5m，深さ0.1m，主軸の方向Ｎ－７°－Ｅ，検出長4.0mを測る。掘り方の断面形は概ね皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は土師質土器の細片が数点出土したのみである。

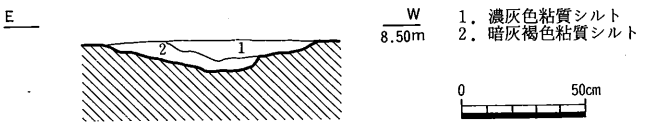
ＳＤ28　Ｄ－３区西北部で検出された小溝で，ＳＤ25とＳＤ30との間を両溝に並行して南に延び，北端部をＳＤ25に切られる。主軸の方向Ｎ－１°－Ｅ，幅0.1m，深さ0.05m，検出長4.3mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，土師質土器，備前焼擂鉢，肥前染付等の細片が出土した。

ＳＤ29（第251図）　Ｄ－３区西部で検出された溝である。調査区南端より約4.5m検出し，北端部はＳＤ25に切られる。幅0.9m，深さ0.15mを測る。両肩は緩やかに掘り込まれ，幅0.25m程度のテラスを有す。このテラスより上位には濃灰色粘質シルトが，下位には暗灰褐色粘質シルトが堆積していた。



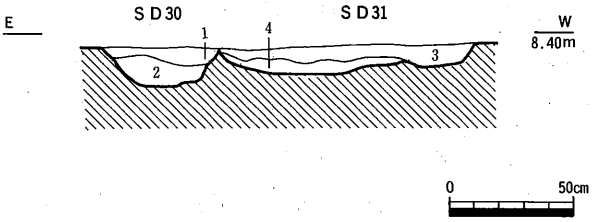
第250図　Ｄ地区第１面ＳＤ26断面図（1/30），出土遺物（1/4，1/2）



第251図　Ｄ地区第１面ＳＤ29断面図（1/30）

遺物は，土師質土器坏・羽釜，常滑焼甕，焼土粒が出土した。

ＳＤ30・31（第252～254図）　Ｄ－3区西端で検出された溝で，南半部は二股に分かれる。東溝（ＳＤ30）の南端はＳＤ25に切られる。ＳＤ30は，幅0.5m，深さ0.15mを測る。西溝（ＳＤ31）は，主軸の方向Ｎ－3°－Ｅ，幅1.0m，深さ0.15mを測る。断面形はいずれも逆台形状を呈する。埋土は，灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトよりなる。



1．灰褐色粘質シルト
2．暗灰褐色粘質シルト（砂混じり）
3．暗灰褐色粘質シルト
4．暗灰褐色粘質シルト（砂混じり，炭化物含む）

第252図　Ｄ地区第１面ＳＤ30，ＳＤ31断面図（1/30）

遺物は，ＳＤ30より土師質土器皿（950・951），同羽釜（953・954），同擂鉢（955），同土鍋（957），同釜（958），瓦質土器擂鉢（956），中国産染付皿（952）の他，備前焼壺，常滑焼甕，亀山焼甕等が出土した。またＳＤ31より，土師質土器羽釜（959），同土鍋（960）の他，土師質土器皿，亀山焼甕等が出土した。952は外面及び内面見込に字款を描く陶器質の染付皿で，小野氏の分類のＣ群皿III類に属する（註13）。957は口縁端面を凹線状に凹ませるもので，羽釜の系譜上で捉えられるものかもしれない。なお，これらの遺物の大半は，両溝の合流部付近よりまとまって出土した。

出土遺物よりＳＤ30・31の埋没時期は，16世紀後半頃と推定される。

ＳＤ32　Ｄ－3区南西部で検出された小溝である。幅0.25m，深さ0.05m，検出長1.8m，主軸の方向Ｎ－9°－Ｅを測る。断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は土師質土器の細片が少量出土したのみである。

ＳＤ33　Ｄ－3区南西隅で検出した小溝である。幅0.3m，深さ0.05m，主軸の方向Ｎ－13°－Ｅ，検出長1.4mを測る。断面形は概ね浅い皿状を呈し，やや東が深くなる。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

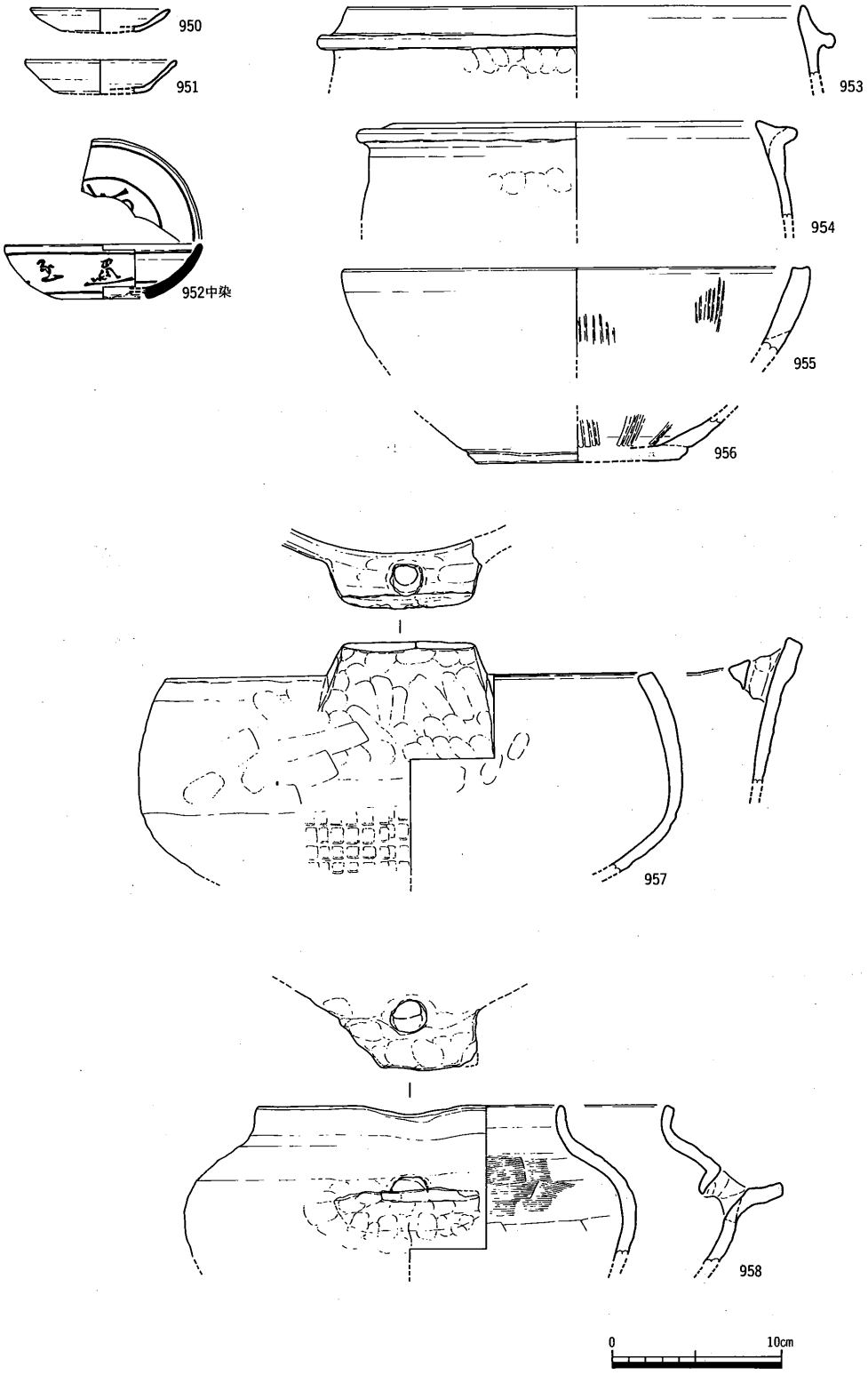
遺物は全く出土していない。

ＳＤ34（第255図）　Ｄ－3区南西隅で検出した溝である。大半は調査区外に延びるため，検出し得たのは僅かであった。前述したように，ＳＤ11と一連の溝と考えられる。現状で，幅0.5m以上，深さ0.2m以上を測る。掘り方の断面形は緩やかに掘り込まれ皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルトが確認された。

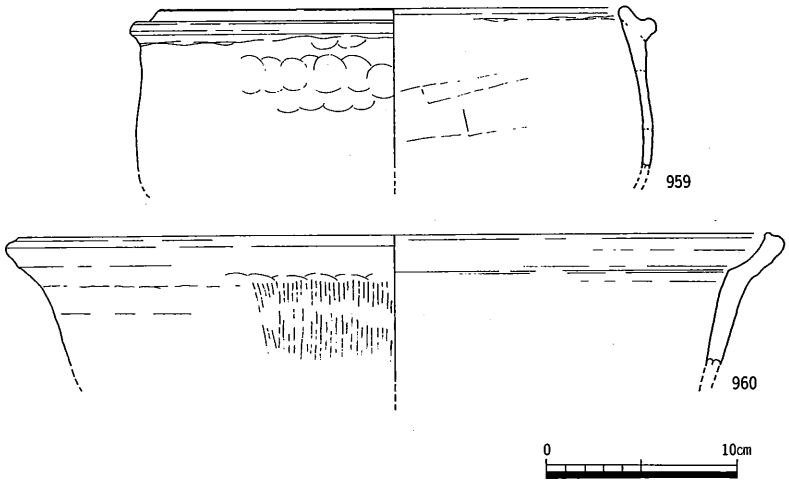
遺物は中国産青磁碗（961）の他，土師質土器皿・羽釜等の細片が少量出土した。961は内面見込に僅かに印花文が認められる。

6）不明遺構

ＳＸ01（第256・257図・図版60）　Ｄ－1区北端で検出された遺構で，北半は調査区外に延び

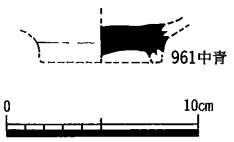


第253図　Ｄ地区第１面ＳＤ30出土遺物（1/4）



第254図　D地区第1面SD31出土遺物（1/4）

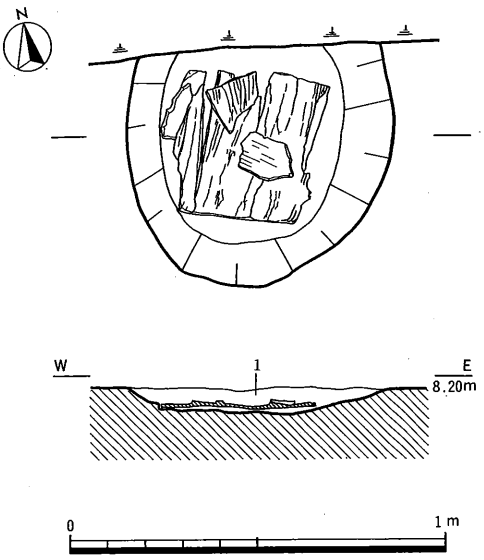
る。また前述した様に重機によって第2面まで掘り下げたため，掘り込み位置の詳細は捉えられず，また遺構の検出状態も良くない。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.7m，深さ0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトが認められた。床面より1cm程浮いた位置で，ほぼ水平に敷かれた方形の板材を検出した。板材は一辺40cm，厚さ2cmを測る。腐食が著しいため材質等は不明である。この板材に接して，土師質土器の甕の体部片数点と銅製の煙管（962）が出土した。甕は板材の上に散乱した様な状況で出土しており，出土状況からその用途は特定できなかった。また煙管の状態は良好で，竹製の羅宇の一部が遺存していた。形態から古泉氏の分類のII類に属する（註16）。



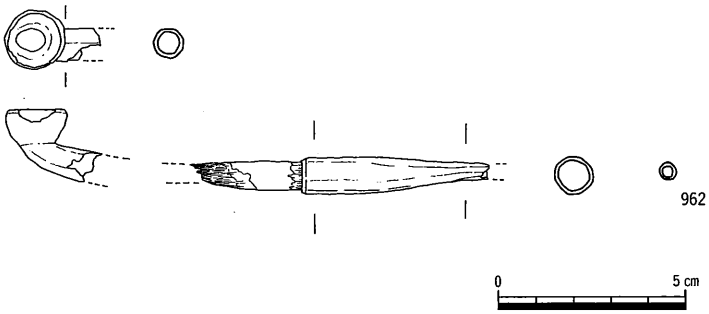
第255図　D地区第1面SD34出土遺物（1/4）

SX01から人骨等は一切検出できなかったが，棺材の一部と考えられる板材や土器及び副葬品と考えられる煙管の出土から墓の可能性が考えられる。また時期は，煙管の特徴から18世紀を中心とした時期と考えられる。

SX04（第258・259図）　D－2区東端で検出された浅い溜まり状の凹みで，SD14に切られかつSD15を切っている。掘り



第256図　D地区第1面SX01平・断面図（1/20）



第257図　Ｄ地区第１面ＳＸ01出土遺物（1/2）

方の平面形は長円形を呈し，長軸3.8m以上，短軸3.3m，深さ0.2mを測る。断面形は皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトがレンズ状に堆積し５層に細分された。底面より柱穴と土坑１基を検出した。

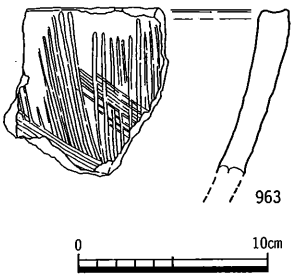
遺物は土師質土器擂鉢（963）が出土した。

ＳＸ06　Ｄ－３区南部で検出された遺構で，ＳＤ26を切っている。掘り方の平面形は不定形な長円形を呈し，長軸2.1m，短軸1.0m，深さ0.05mを測る。断面形は概ね皿状を呈し，底面は若干の凹凸が認められた。また埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は乏しく，土師質土器の細片が１点出土したのみである。

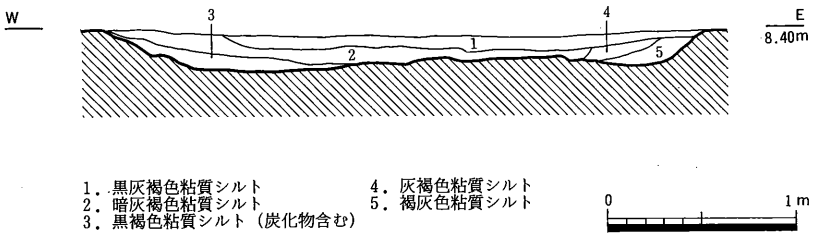
７）畝溝群（第181図・図版59）

Ｄ－１区西端で検出された。前述したように，第２面まで重機によって掘り下げたため，平面的に僅かに３条を検出したのみである。東２条は幅0.2m，深さ0.05m，溝間約１mを測る。西端の溝は幅0.5m，深さ0.1mを測り，東２条に比して特に幅が広いことから，耕作域の西端を限る溝であろう。埋土はいずれも洪水砂層と考えられる明灰黄褐色細砂からなる。



第258図　Ｄ地区第１面ＳＸ04出土遺物（1/4）

遺物は全く出土しなかった。しかしＣ地区ＳＤ21からＤ

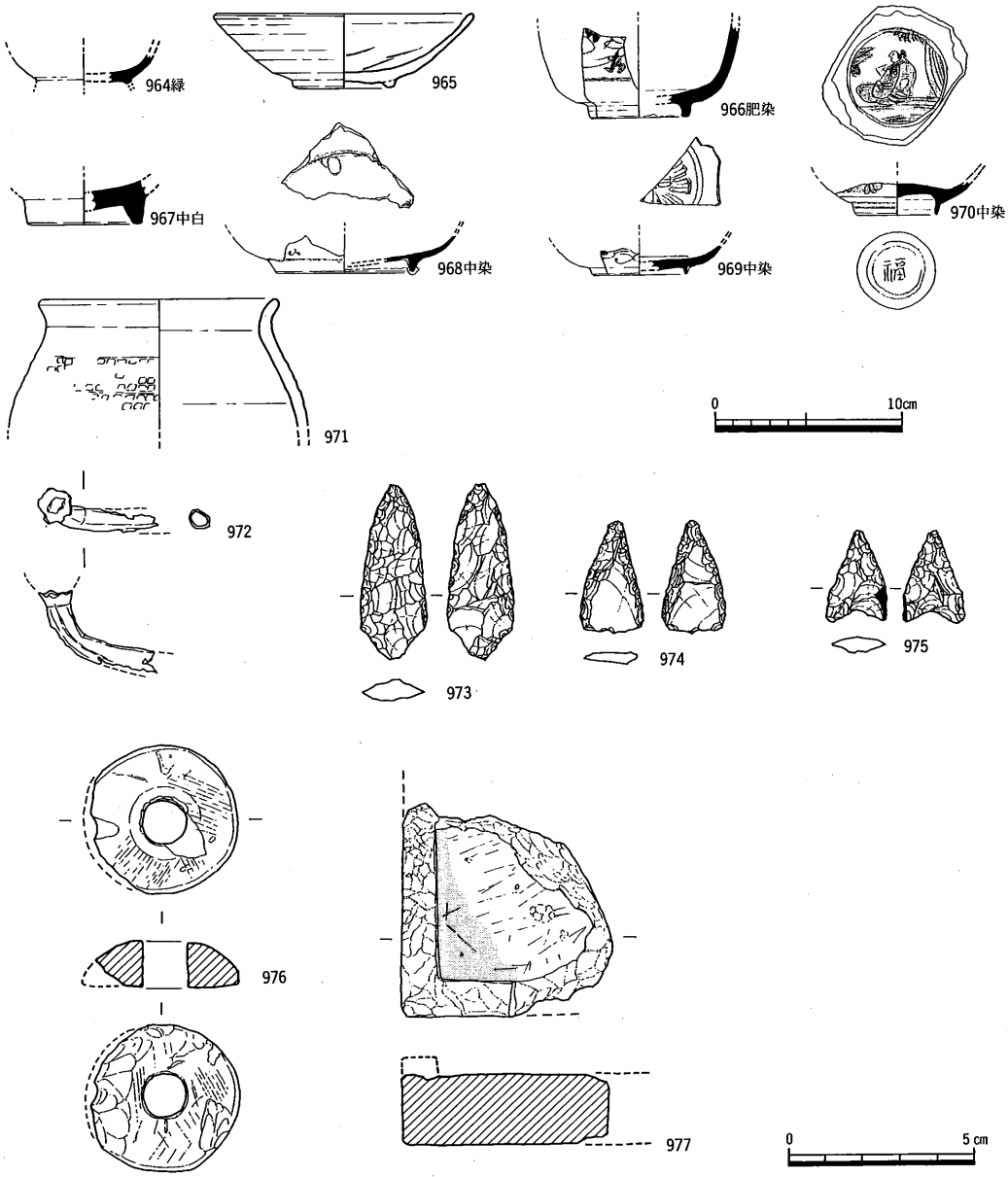


第259図　Ｄ地区第１面ＳＸ04断面図（1/40）

地区ＳＤ01の間は明確な遺構を検出しておらず，本畝溝群は遺物からの時期決定は困難なものの両屋敷地間の空隙を利用した耕作域と推定される。

８）包含層（第260図）

包含層出土として報告する遺物は，重機による表土掘削中及び遺構面精査中に出土したものである。つまり，本来は個別の遺構中に含まれていたものや遺構面下位の砂層中に含まれていたも



第260図　Ｄ地区第１面上位包含層出土遺物（1/4，1/2）

のも，包含層出土遺物として取り上げている。

遺物はコンテナ8箱分が出土しており，その中より特徴的な遺物のみ14点を図示した。964は緑釉陶器の碗である。欠損部分が多いため，所属時期等詳細は不明である。965は西村産瓦質土器の埦である。966は肥前産の染付碗である。体部外面に葡萄唐草文を描いており，時期は1610～1630年代である。967は中国産白磁の碗である。太宰府の分類(註2)のV類に属する。968は中国産染付皿で，高台畳付部分には砂が多く付着する。小野氏の分類(註13)の皿B2群に属し，釉調より中国南方福建省産と考えられる。969も中国産染付皿で，内面見込に十字花文を描く。同氏の分類のB1群皿VI類に属する。970は中国産染付碗である。いわゆる「饅頭心」型の碗で，内面見込に樹下仙人図，高台内に「福」の字款を描いている。同氏の分類のE群碗VIII類に属する。971は瓦質土器の壺と考えられる。972は銅製の煙管である。973はサヌカイト製の有舌尖頭器である。両側縁側より緻密な調整剝離を施している。974はサヌカイト製の平基式石鏃である。両側縁部より緻密な調整剝離を施しているが，正面・裏面とも素材の剝離面を残しており，未製品の可能性がある。975はサヌカイト製の凹基式石鏃である。両側縁部より調整剝離を施している。976は滑石製の紡錘車である。両面には擦痕が認められる。977は長方硯である。石材は不明。平面形の外面隅部は直角で，硯背は平坦である。墨をする陸部の隅に墨だまり状の墨痕が認められる。

第2面

1）溝

SD47　D－1区中央部で検出されたほぼ直線状に南北に延びる溝で，SD49を切っている。幅1.3m，深さ0.1m，主軸の方向N－10°－Eを測る。断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，和泉型瓦器埦，黒色土器A類埦，土師質土器細片が少量出土したのみである。

SD48　D－1区東端で検出された溝で，途中SD49が西に分岐して延びる。分岐点より南では，南東方向に流路を変更する。幅0.6m，深さ0.15m，北半部の主軸の方向N－13°－Eを測る。断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色シルトの単層であった。

遺物は，全く出土していない。

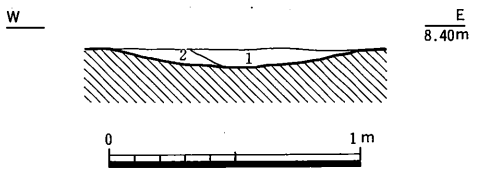
SD49　D－1区東端で検出された溝で，SD48より分岐して北西に延びる。またSD47に切られ，SD47より西では明確に検出できなかった。幅0.8m，深さ0.05m，主軸の方向N－16°－Wを測る。断面形は浅い皿状を呈し，埋土はSD01と同様に灰褐色シルトの単層であった。

遺物は，全く出土していない。

SD50（第261図）　D－2区西端で検出されたほぼ直線状に南北に延びる溝で，北半部でSD51が分岐して北に延びる。幅1.0m，深さ0.1m，主軸の方向N－6°－Eを測る。断面形は浅い

皿状を呈し，埋土は灰黄褐色粘質シルト及び灰褐色粘質シルトからなる。

遺物は，土師質土器坏・埦，和泉型瓦器埦等の細片が少量出土したのみである。



1．灰黄褐色粘質シルト
2．灰褐色粘質シルト

第261図　D地区第２面ＳＤ50断面図（1/30）

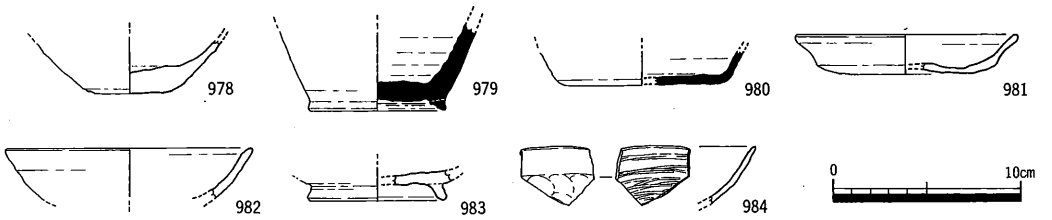
ＳＤ51　Ｄ－２区西端で検出された溝で，ＳＤ50より派生して北に延び，調査区北端近くで東へ屈曲する。また東端は第１面ＳＤ03に攪乱されて途切れる。幅0.4m，深さ0.1m，検出長5.0mを測る。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，土師質土器坏，黒色土器Ａ類埦，西村産瓦質土器埦，和泉型瓦器埦等の細片が少量出土したのみである。

遺構面下位層（第262図）

遺構面下位層出土として報告する遺物は，主にＤ－２・３区の遺構面下の砂層中より出土したものである。この砂層は，第３章で詳述しているように河川の氾濫によって形成され，複数の流路の切り合いの集合として存在している。しかしながら，調査時に流路の一単位を平面的に把握できなかったため，調査区内砂層一括として遺物の取り上げを行なった。したがって，流路の単位毎の遺物の種類や時期等の内容については不明な点が多く，流路を一括した砂層堆積時期の下限が捉えられたにすぎない。以下に個々の遺物について報告する。

978は弥生土器の壺または甕の底部である。表面は摩滅が著しい。979は須恵器の壺の底部である。980は須恵器の坏である。979・980の時期は８～９世紀頃と考えられる。981は土師器の坏である。982・983は土師質土器の埦である。ハの字形に開くしっかりした高台を有する。984は和泉型瓦器埦である。以上の遺物の内982～984については，13世紀頃の年代が与えられ，砂層堆積時期の下限についてもほぼこれを中心とする時期と考えられる。



第262図　D地区遺構面下位層出土遺物（1/4）

5．E地区

E地区は調査区の東端に位置し，2小区に分けて調査を行なった。西よりE－1区，E－2区と呼称する。E－1区では1面，E－2区では2面の遺構面を検出した。

第1面は，両調査区の耕作土直下で検出した。検出面の標高は，E－1区では後世の削平により8.5mと低く，E－2区では8.6～8.7mを測る。E－1区では灰褐色粘質シルト及び灰褐色砂質シルト及び黄褐色中砂を，E－2区では明黄褐色粘質シルト及び灰褐色粘質シルトをベースとする。第1面では，C～D地区の屋敷地に先行する13世紀後半から16世紀前半頃の区画溝で囲まれた屋敷地が検出され，また一部D地区屋敷地に付属する遺構が検出された。

第2面は，E－2区で検出された。検出面の標高は，E－2区東端では8.4mを西端では8.5mを測り，僅かに北東に傾斜する。E－1区では第2面のレベルまで後世に削平され，二時期の遺構が同一面で検出され分離はできなかった。E－2区西半では遺構は希薄となり，主に調査区の北東側に遺構は広がるものと推定される。第1面のベース層である明黄褐色粘質シルト及び灰褐色粘質シルトを包含層として，灰黄褐色粘質シルト及び灰黄褐色シルト等を掘り込んで形成される。第2面からは，溝・井戸・柱穴等の遺構を検出した。時期は出土遺物から13世紀前半頃と考えられる。

第1面

1）掘立柱建物

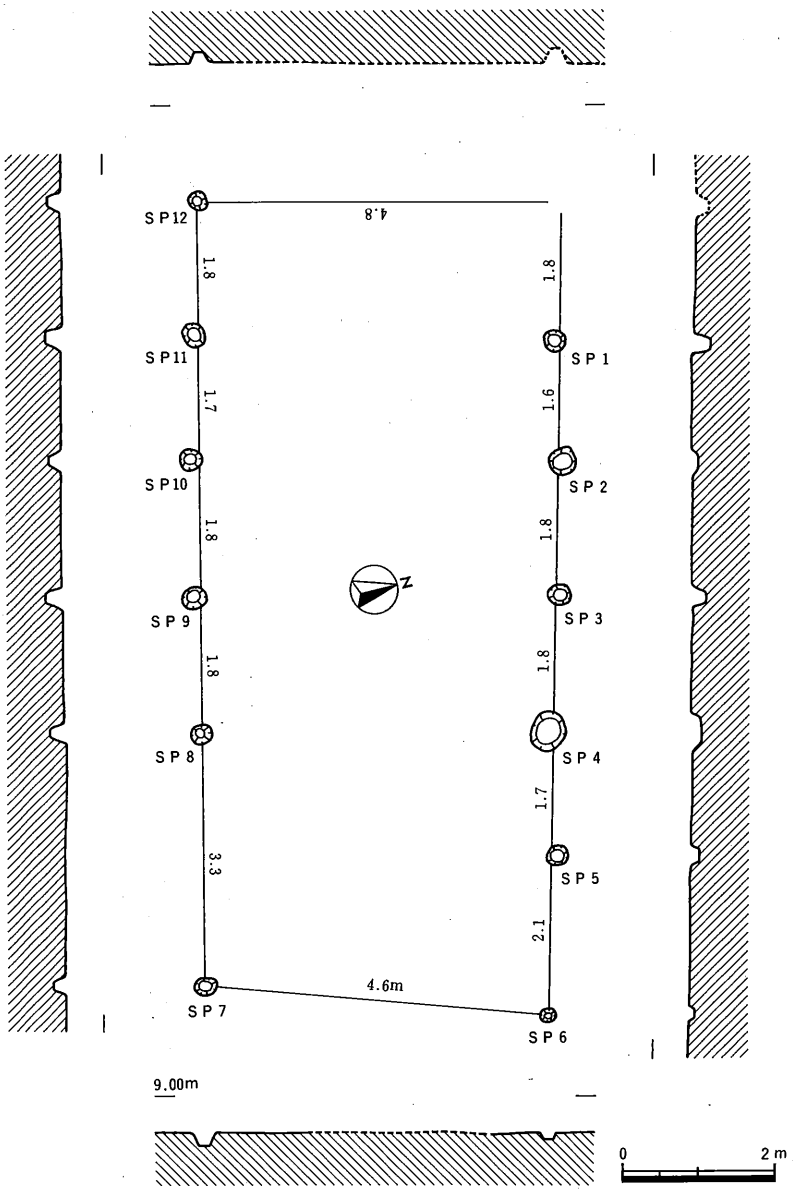
SB01（第263・264図）　E－1区南部で検出された東西棟の掘立柱建物である。SD04・SE04と重複し，切り合い関係から見てSE04に先行する。SD04との先後関係は不明である。北西隅柱と南列側柱の一部を欠く。桁行6間（10.8m），梁行1間（4.8m），床面積は51.6m²を測る。主軸方向はE－11°－Sである。柱間は，桁行1.6～2.1m，梁行4.6～4.8mを測る。梁行は桁行に比べて極端に広いことから，2間になる可能性がある。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.2～0.5m，深さ0.1～0.3mとややばらつきが認められる。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

遺物は，柱穴より土師質土器坏（985），和泉産瓦器椀（986），東播系こね鉢（987）が出土した。986の底部内面には，格子目状の暗文が認められる。

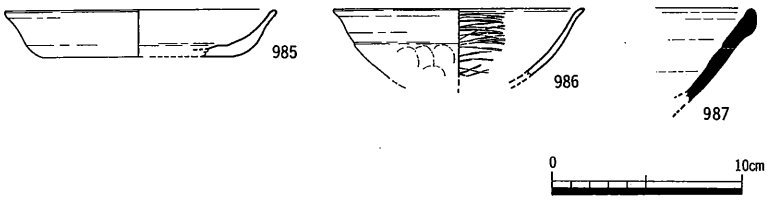
SB02（第266・267図）　E－1区北東部で検出された東西棟の掘立柱建物である。桁行4間（7.3m），梁行3間（6.4m），床面積は46.7m²を測る。主軸の方向はE－8°－Sである。柱間は不揃いで，桁行1.1～4.0m，梁行1.7～2.4mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕形で，径0.2～0.5m，深さ0.1～0.4mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

遺物は，柱穴より土師質土器皿（988）が出土した。

SB03（第268図）　E－1区南西隅で検出された南北棟の総柱建物である。建物南半は調査区

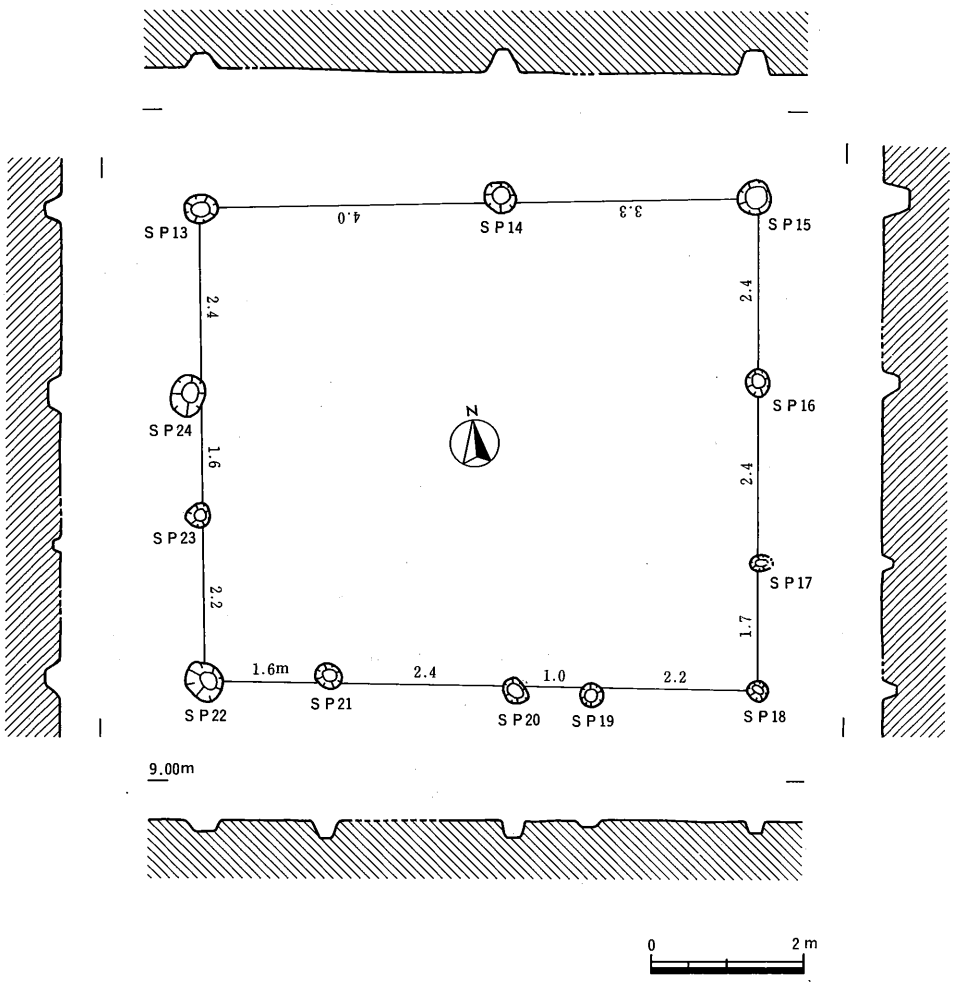


第263図　Ｅ地区第１面ＳＢ01平・断面図（1/100）



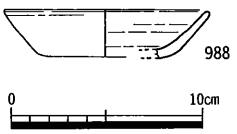
第264図　Ｅ地区第１面ＳＢ01出土遺物（1/4）

第265図　E地区第1面遺構配置図 (1/200)



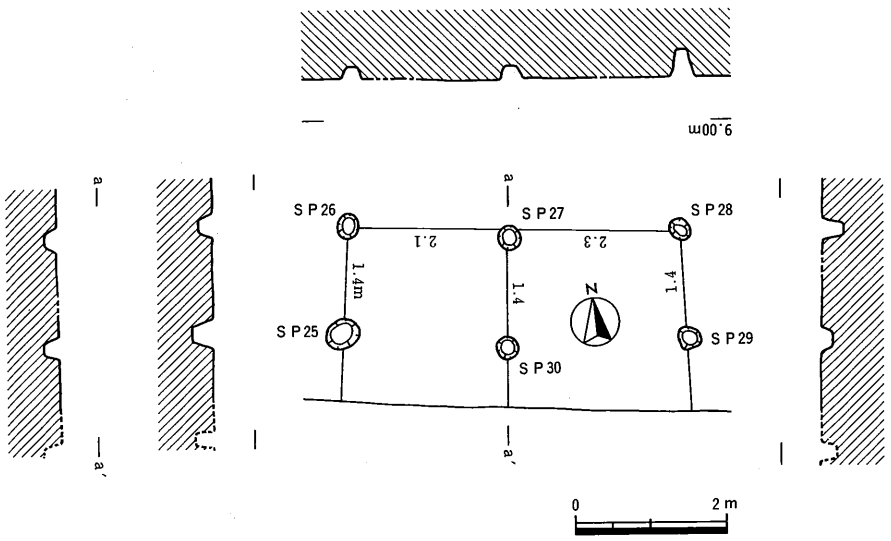
第266図　Ｅ地区第１面ＳＢ02平・断面図（1/100）

外に延びる。ＳＢ04～06と同位置で重複しており，３回の建て替えが想定される。しかし，ＳＢ03と他の建物との先後関係は不明である。桁行１間以上（2.5m以上），梁行２間（4.4m），床面積は11m²以上を測る。主軸方向はＮ－９°－Ｅである。柱間は，桁行1.4m，梁行2.1～2.3mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.3～0.5m，深さ0.2～0.3mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

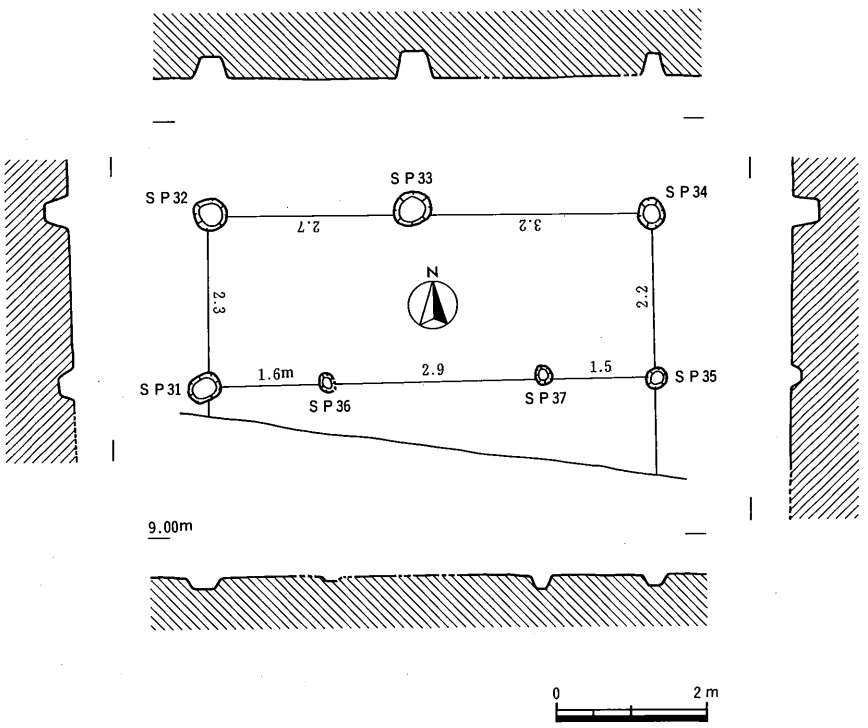


第267図　Ｅ地区第１面
ＳＢ02出土遺物（1/4）

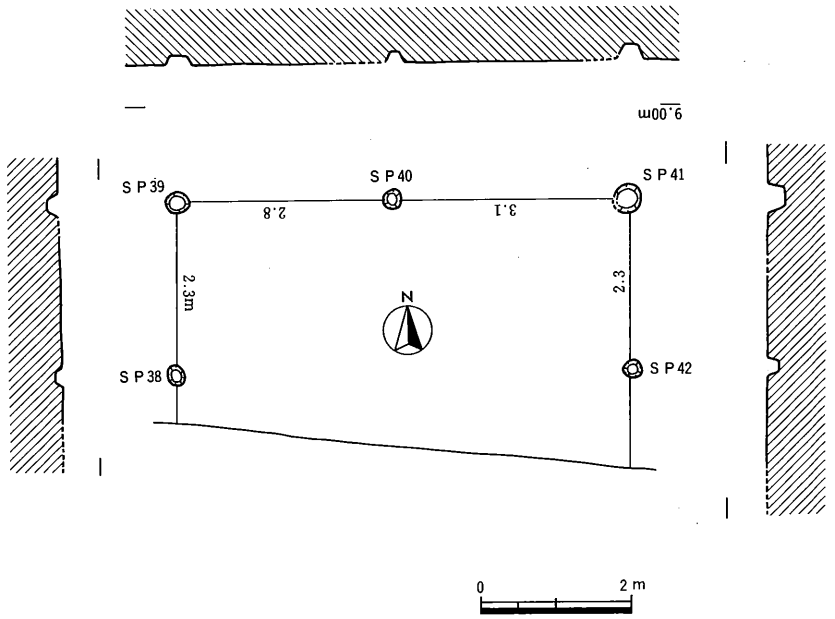
ＳＢ04（第269図）　Ｅ－１区南西隅で検出された南北棟の掘立柱建物である。建物南半は調査区外に延びる。ＳＢ05と重複し，切り合い関係からＳＢ05に先行する。桁行１間以上（3.5m以上），梁行２間（5.8m），床面積は20m²以上を測る。主軸方向はＮ－３°－Ｅである。柱間は，桁行2.2～2.3m，梁行2.7～3.2mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.2～0.5m，深さ0.2～0.4mを測る。なおこの建物の棟通りには２本の束柱が配されており，側柱に比べ



第268図　Ｅ地区第１面ＳＢ03平・断面図（1/100）



第269図　Ｅ地区第１面ＳＢ04平・断面図（1/100）



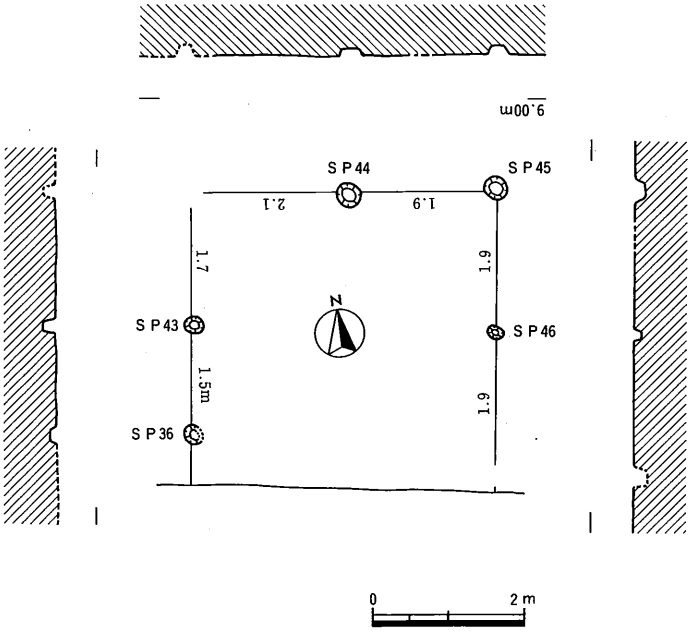
第270図　Ｅ地区第１面ＳＢ05平・断面図（1/100）

て束柱の２穴は極端に小さい。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

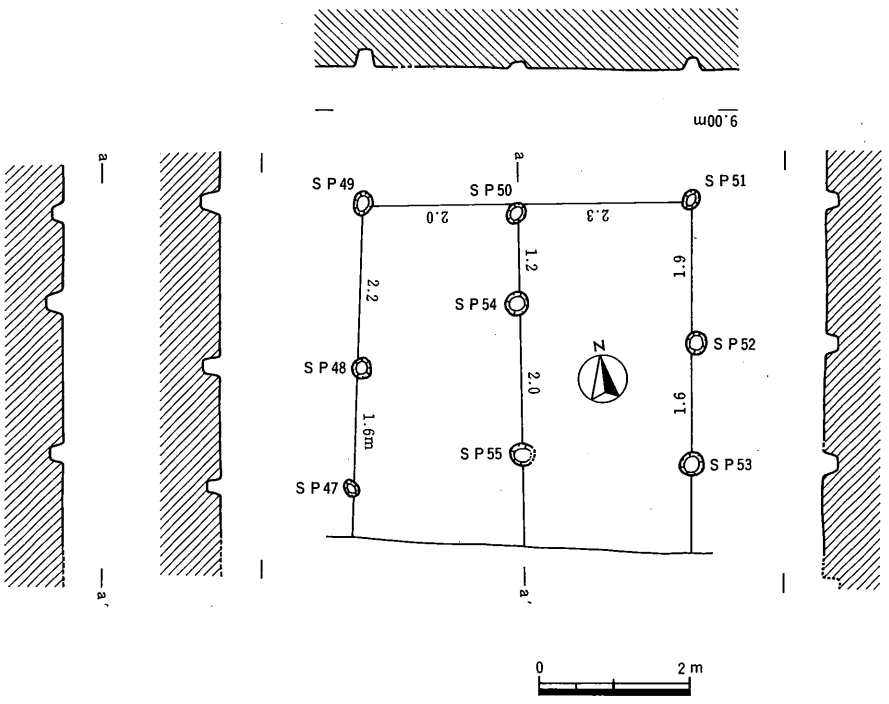
ＳＢ05（第270図）　Ｅ－１区南西隅で検出された南北棟の掘立柱建物である。建物南半は調査区外に延びる。桁行１間以上（3.5m以上），梁行２間（5.9m），床面積は20㎡以上を測る。主軸方向はＮ－４°－Ｅである。柱間は，桁行2.3m，梁行2.8～3.1mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.3～0.4m，深さ0.1～0.3mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

ＳＢ06（第271図）　Ｅ－１区南西隅で検出された南北棟の掘立柱建物である。建物南半は調査区外に延び，北西隅柱を欠く。桁行２間以上（3.9m以上），梁行２間（4.0m），床面積は15㎡以上を測る。主軸方向はＮ－６°－Ｅである。柱間は，桁行1.5～1.9m，梁行1.9～2.1mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.2～0.3m，深さ0.1～0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

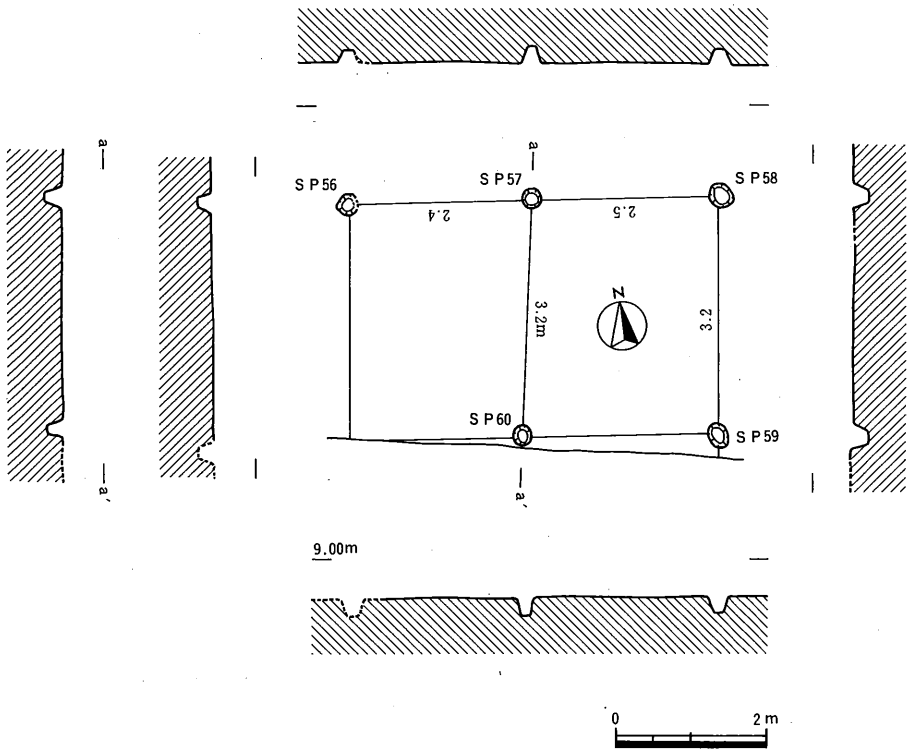
ＳＢ07（第272図）　Ｅ－１区南部で検出された南北棟の掘立柱建物である。建物南半は調査区外に延びる。この建物もＳＢ04～06と同様にＳＢ08・09と重複しており，２回の建て替えが推定される。しかしこれらの建物の先後関係は不明である。なおこの建物は，棟方向に側柱と柱間寸法の異なる束柱が２本以上配されている。桁行２間以上（4.3m以上），梁行２間（4.3m），床面積は18㎡以上を測る。主軸方向はＮ－７°－Ｅである。柱間は，桁行1.6～2.2m，梁行2.0～2.3mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.2～0.4m，深さ0.1～0.3mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。



第271図　Ｅ地区第１面ＳＢ06平・断面図（1/100）



第272図　Ｅ地区第１面ＳＢ07平・断面図（1/100）



第273図　Ｅ地区第１面ＳＢ08平・断面図（1/100）

ＳＢ08（第273図）　Ｅ－１区南部で検出された南北棟の総柱建物である。建物南半は調査区外に延びる。桁行１間以上（3.4m以上），梁行２間（4.9m），床面積は16m²以上を測る。主軸方向はＮ－６°－Ｅである。柱間は，桁行3.2m，梁行2.4～2.5mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.3～0.4m，深さ0.2～0.3mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

ＳＢ09（第274図）　Ｅ－１区南部で検出された南北棟の掘立柱建物である。建物南半は調査区外に延びる。桁行２間以上（4.3m以上），梁行１間（2.7m），床面積は11m²以上を測る。主軸方向はＮ－７°－Ｅである。柱間は，桁行2.0～2.3m，梁行2.7mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.3～0.5m，深さ0.2～0.3mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

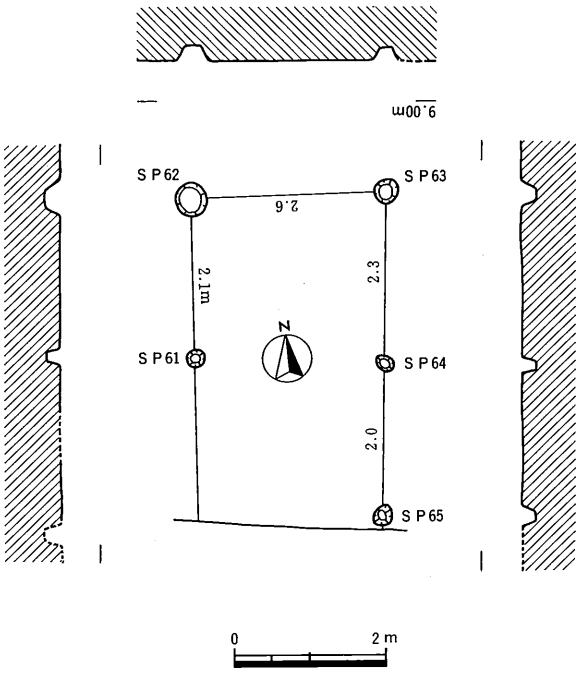
ＳＢ10（第275図）　Ｅ－１区南東部で検出された南北棟の掘立柱建物である。建物南半は調査区外に延び，北西隅柱を欠く。桁行１間以上（3.5m以上），梁行１間（3.1m），床面積は10m²以上を測る。主軸方向はＮ－６°－Ｅである。柱間は，桁行1.8～2.0m，梁行3.1mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.2～0.3m，深さ0.1～0.3mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

ＳＢ11（第276図）　Ｅ－２区北西部で検出された東西棟の掘立柱建物である。ＳＫ16・20と重複する。南西隅柱と北列および東列側柱の一部を欠く。桁行３間（4.0m），梁行４間（3.9m），床面積は15.6㎡を測る。主軸方向はＮ－24°－Ｅである。柱間は，桁行1.0～1.5m，梁行0.7～1.3mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.3～0.5m，深さ0.2～0.3mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。

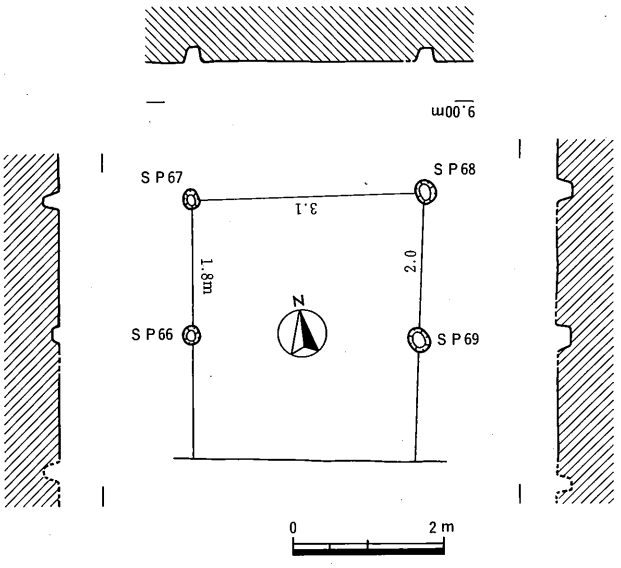
遺物は，柱穴より土師質土器羽釜（989）が出土した。

２）柵列

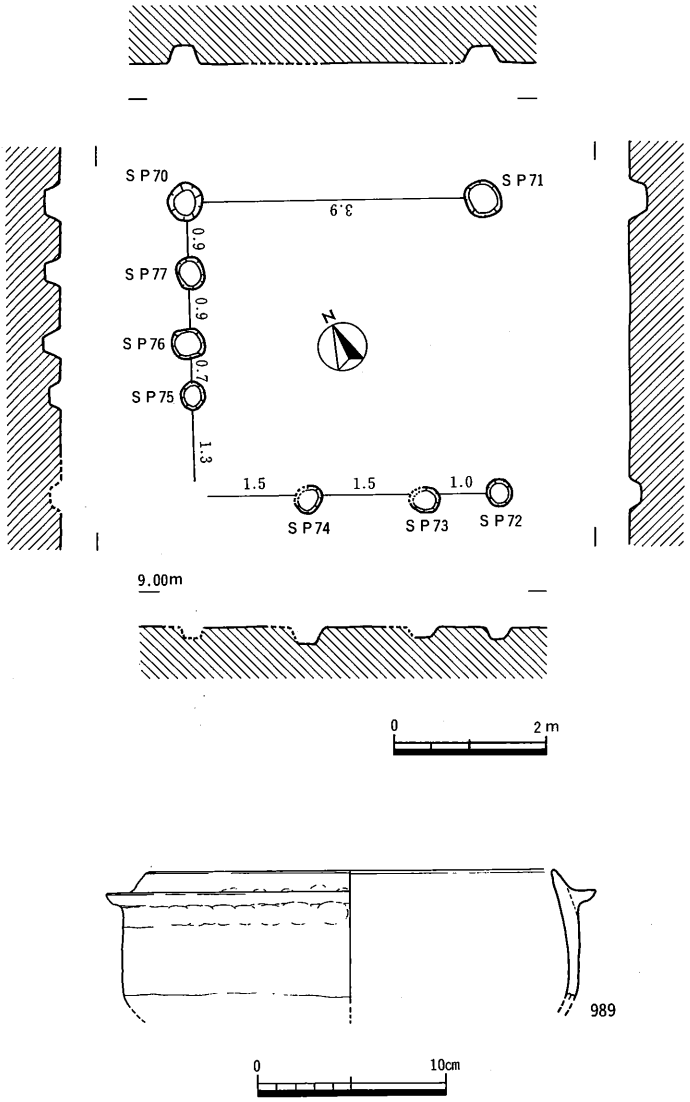
ＳＡ01（第263図）　Ｅ－１区中央南で検出された平面逆Ｌ字状を呈する柵列である。ＳＢ03，ＳＤ05・12・13と主軸方向が一致する等整った配置関係を有し，同時併存の可能性がある。なお南北列は調査区外に延びる。東西列３間（6.3m），南北列２間以上（5.1m以上）を検出した。東西列の主軸方向はＥ－6°－Ｓである。柱間は，東西列1.7～2.4m，南北列2.2mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形で，径0.2m，深さ0.1～0.2mを測る。柱穴の埋土は灰褐色粘質シルトが主体を占める。



第274図　Ｅ地区第１面ＳＢ09平・断面図（1/100）



第275図　Ｅ地区第１面ＳＢ10平・断面図（1/100）

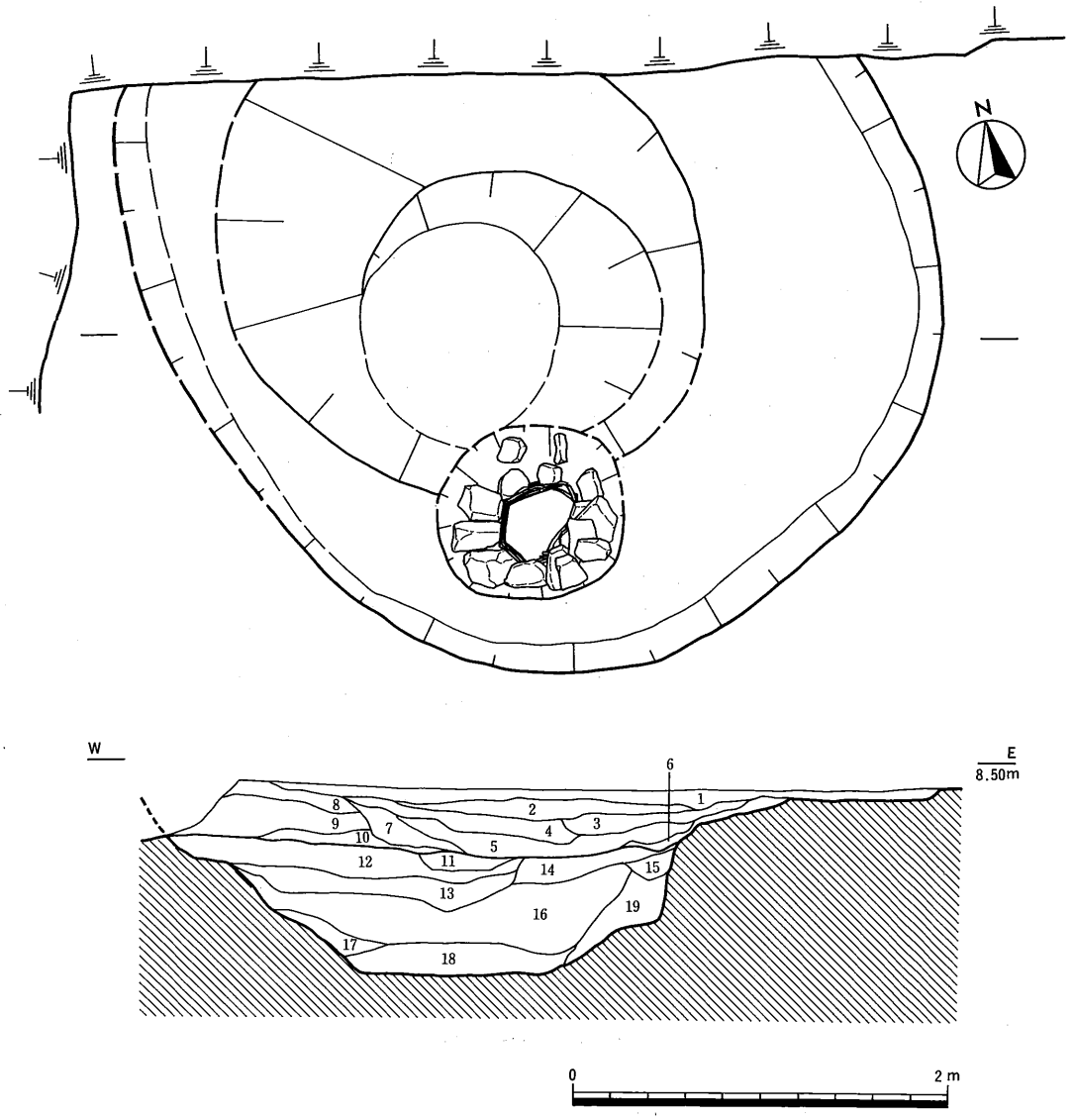


第276図　E地区第1面SB11平・断面図（1/100），出土遺物（1/4）

SA02（第263図）　E－2区南東部で検出された平面L字状を呈する柵列である。南北列はSD10と，東西列はSD20・21と整った配置関係を有し，同時併存の可能性がある。また柵列南東側には柱穴群が展開することから，建物群を区画する可能性が考えられる。東西列4間（6.4m），南北列3間（6.3m）を検出した。南北列はさらに南に延び，調査区外に延長するものと思われる。東西列の主軸の方向E－29°－S，南北列はN－38°－Eである。柱間は，東西列1.2～1.9m，南北列1.4～3.0mを測る。柱穴掘り方の平面形は円形または楕円形を呈し，径0.1～0.3m，深さ0.1～0.3mを測る。柱穴の埋土は暗灰褐色粘質シルトが主体を占める。

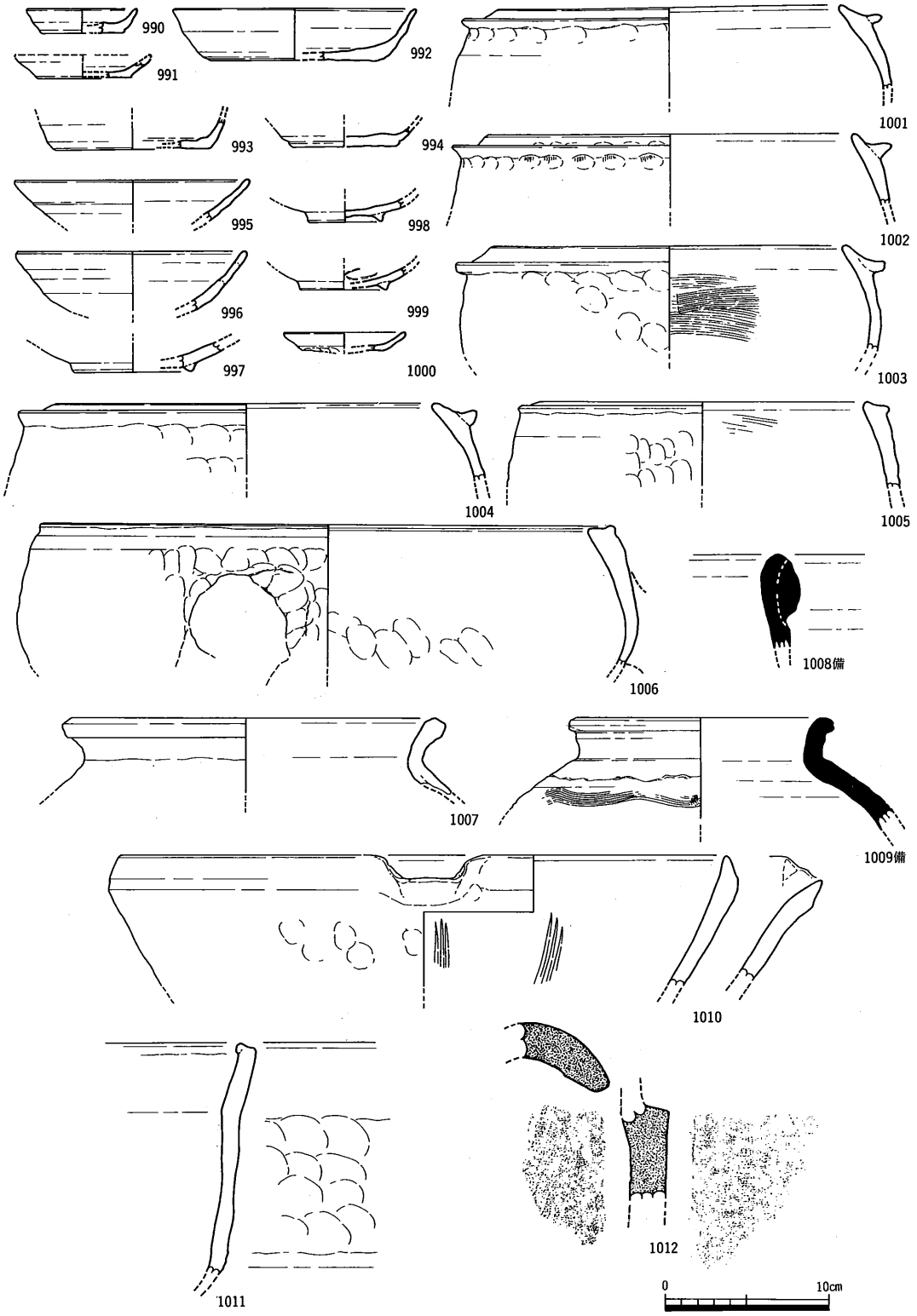
3）井戸

SE01（第277～279図）　E－1区北西部で検出された素掘りの井戸で，SD01・02を切って

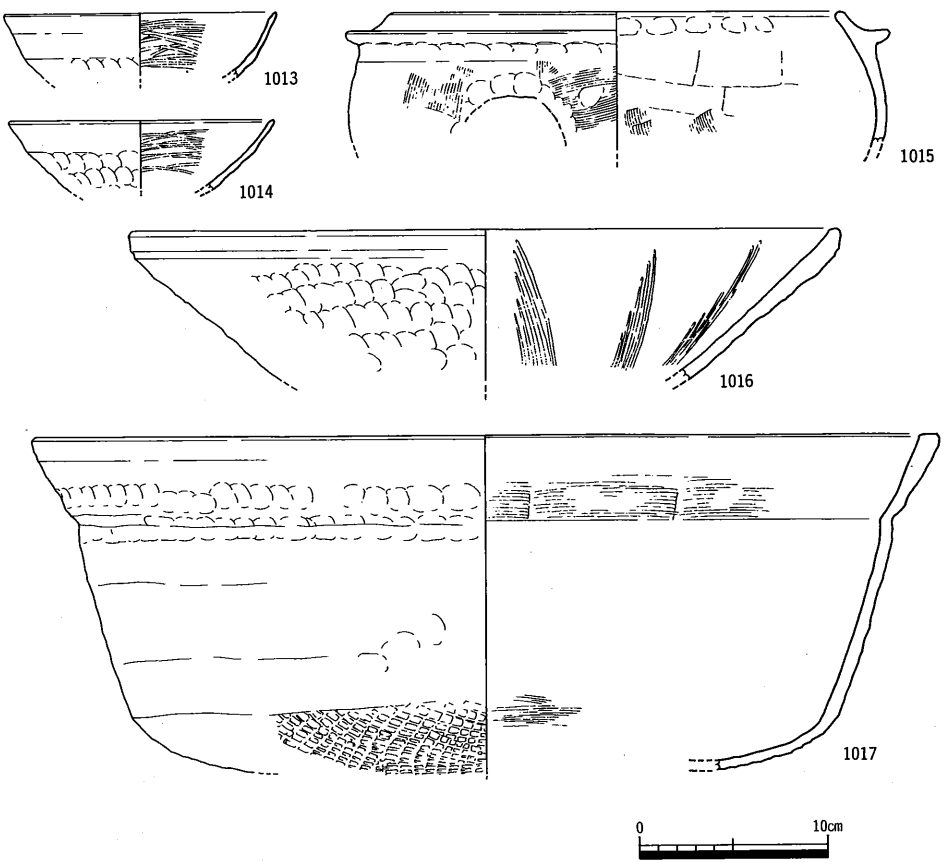


1．暗灰褐色粘質シルト
2．暗灰褐色粘質シルト
3．暗灰色粘土（炭化物含む）
4．暗灰色粘土（砂混じり，炭化物含む）
5．濃灰色粘土
6．灰色中砂
7．暗灰色粘土
8．暗灰色粘質シルト
9．暗灰褐色粘質シルト
10．褐灰色粘土（上面に鉄分沈着）
11．灰色粘土
12．暗灰色粘土（植物遺体含む）
13．暗灰色粘土（砂混じり，植物遺体含む）
14．濃灰色粘土（植物遺体含む）
15．濃灰色粘土
16．濃灰色粘土（砂混じり，植物遺体含む）
17．灰色細砂
18．暗灰色粘土（砂混じり，植物遺体含む）
19．青灰色細砂

第277図　E地区第1面SE01平・断面図（1/40）



第278図　E地区第1面SE01上層出土遺物（1/4）



第279図　Ｅ地区第１面ＳＥ01下層出土遺物（1/4）

おり，北端部は調査区外に延びる。なお，西半部は当初ＳＤ01との切り合い関係が捉えられず，断面図実測部分では掘り抜いてしまったが，調査区北壁の土層観察によってＳＥ01が後出することが判明した。掘り方の平面形は楕円形を呈し，長径4.5m，深さ1.0mを測る。東肩は，掘り方の上面から0.2m下まで緩やかに掘り込まれテラス部を有し，これより下位は垂直に掘り下げられている。これに対して西肩は，比較的緩やかに掘り込まれ擂鉢状を呈する。底面はほぼ平坦であった。埋土は大きく上層（１～10層）と下層（11～19層）に大別される。上層は灰褐色系粘質シルト及び有機質を含む灰色系粘土からなる。下層は植物遺存体を多く含む灰色系粘土が主として堆積し，壁際で壁面の崩落によると思われるベース砂層の流れ込みが認められた。井戸枠等は全く認められなかったが，下層の堆積状況から素掘り井戸と推定した。

遺物は上層より土師質土器皿（990・991），同坏（992～994），同埦（995～997），和泉型瓦器埦（998・999），同皿（1000），土師質土器羽釜（1001～1006），同甕（1007），同土鍋（1011），備前焼甕（1008），同壺（1009），瓦質土器擂鉢（1010），瓦質の丸瓦（1012）が，下層より和泉型瓦器埦（1013・1014），土師質土器羽釜（1015），同土鍋（1017），瓦質土器擂鉢（1016）が出土した。1008は備前焼第Ⅳ期に属し（註３・14），時期は15～16世紀頃である。また1009は同第Ⅴ期後

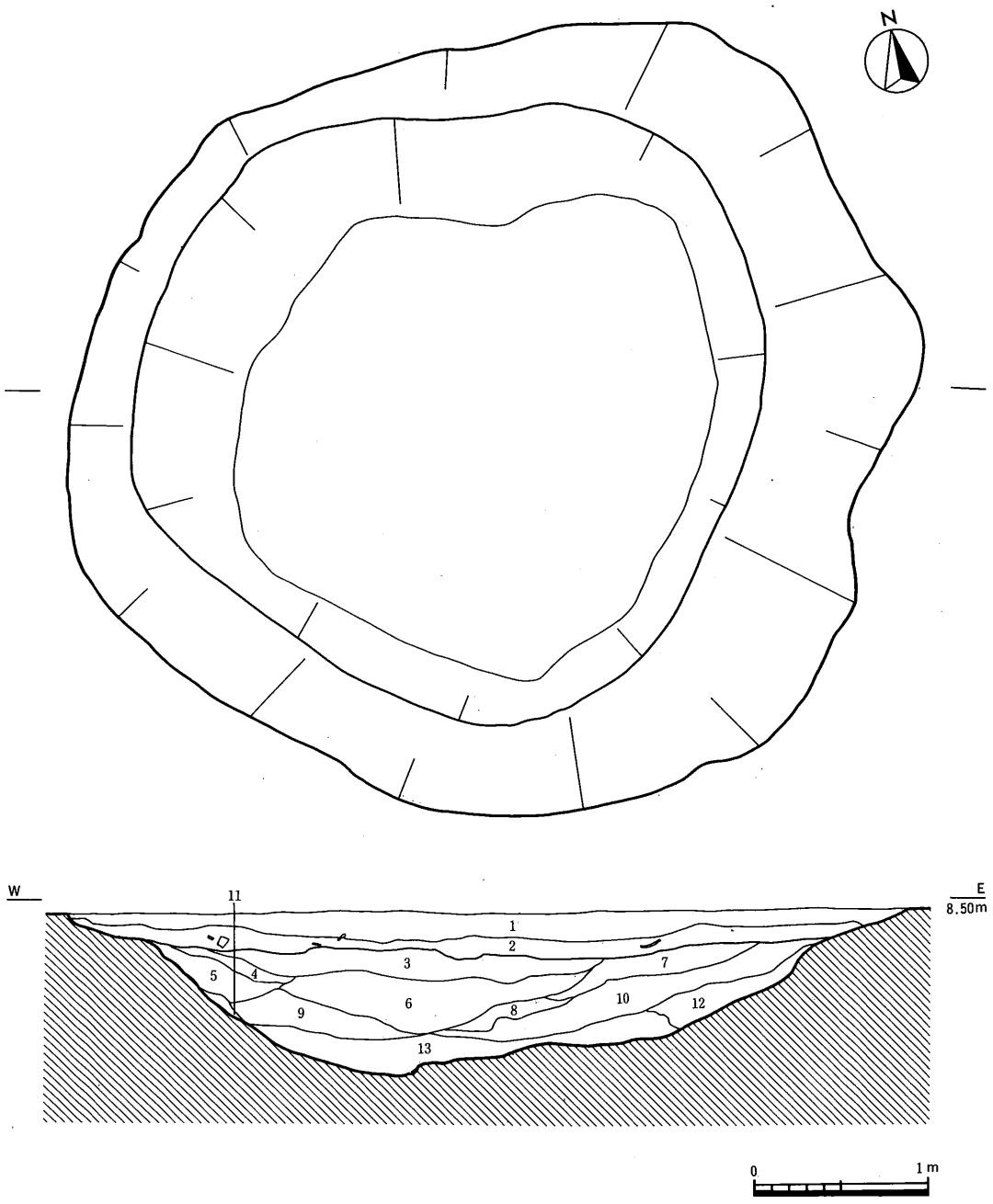
半に属し，時期は16世紀末頃である。出土遺物中に唐津や肥前産の陶磁器が全く含まれないことから，ＳＥ01は16世紀末には廃絶していたと推定される。

ＳＥ02（第280～283図，図版67）　Ｅ－１区西部で検出された素掘りの井戸で，ＳＥ04・ＳＤ04を切っている。掘り方の平面形はややいびつな略円形を呈し，径4.6m，深さ0.9mを測る。断面形は，掘り方の上面より0.1m下で幅0.5m程のテラスが一周し，それより下位は緩やかに掘り込まれて擂鉢状を呈する。底面には若干の凹凸が認められた。埋土はこのテラスを境にして上層（１～２層）と下層（３～13層）に大別される。上層は灰褐色系粘質シルトが認められ，また下層は灰色系粘土及び壁面からの崩落と思われるベース砂層と粘土層がラミナー状に堆積しており，ＳＥ01の土層に近い状況が伺われた。

遺物は上層より，土師質土器皿（1018・1019），同坏（1020），同羽釜（1023～1027），同釜（1028），同甕（1029），同土鍋（1038・1039），中国産白磁皿（1021），須恵器高坏（1022），瓦質土器こね鉢（1030），東播系こね鉢（1031），須恵質壺（1032），備前焼壺（1033），同壺底部（1034・1035），同擂鉢（1036），同甕（1037），瓦（1040～1043）が出土した。また下層より，土師質土器羽釜（1044・1045），同土鍋（1051・1052），中国産青磁碗（1046），備前焼壺（1048・1049），同擂鉢（1047），常滑焼甕（1050），木製品（1053・1054）が出土した。1018・1019は底部ヘラ切り後ナデを施す。1048はいわゆる雀口と呼ばれる小壺である。1036・1047は備前焼第IV期前半に(註3・14)，1037・1049は第IV期後半に，1033・1048は第Ｖ期にそれぞれ属する。時期は，1036・1047が14世紀後半から15世紀前半，1037・1049が15世紀後半から16世紀初頭，1033・1048が16世紀前半から17世紀前半頃である。1046は底部が厚く，高台が低く削り出されていることから，太宰府の分類の龍泉窯系碗Ⅰ類に属する(註2)。瓦類は４点を図示した。1040と1041は瓦質の平瓦である。凸面には離れ砂が付着する。1042は土師質の平瓦である。1043は瓦質の玉縁付丸瓦である。1050は外面に押印が認められる。1053は連歯高下駄で，前壺が貫通していないことから未製品と推定される。鼻緒孔の位置は，前壺はほぼ中央，後壺は前歯の後に穿たれている。台部の平面形はほぼ長方形を呈し，歯幅は僅かに台幅より広い。台部上面は丁寧に仕上げられているが，裏面は加工痕が顕著に残る。1054も連歯高下駄である。1053と同様の形態で，図示した歯が前歯になると考えた。これも未製品の可能性があり，台部上面は加工痕が明瞭に残る。

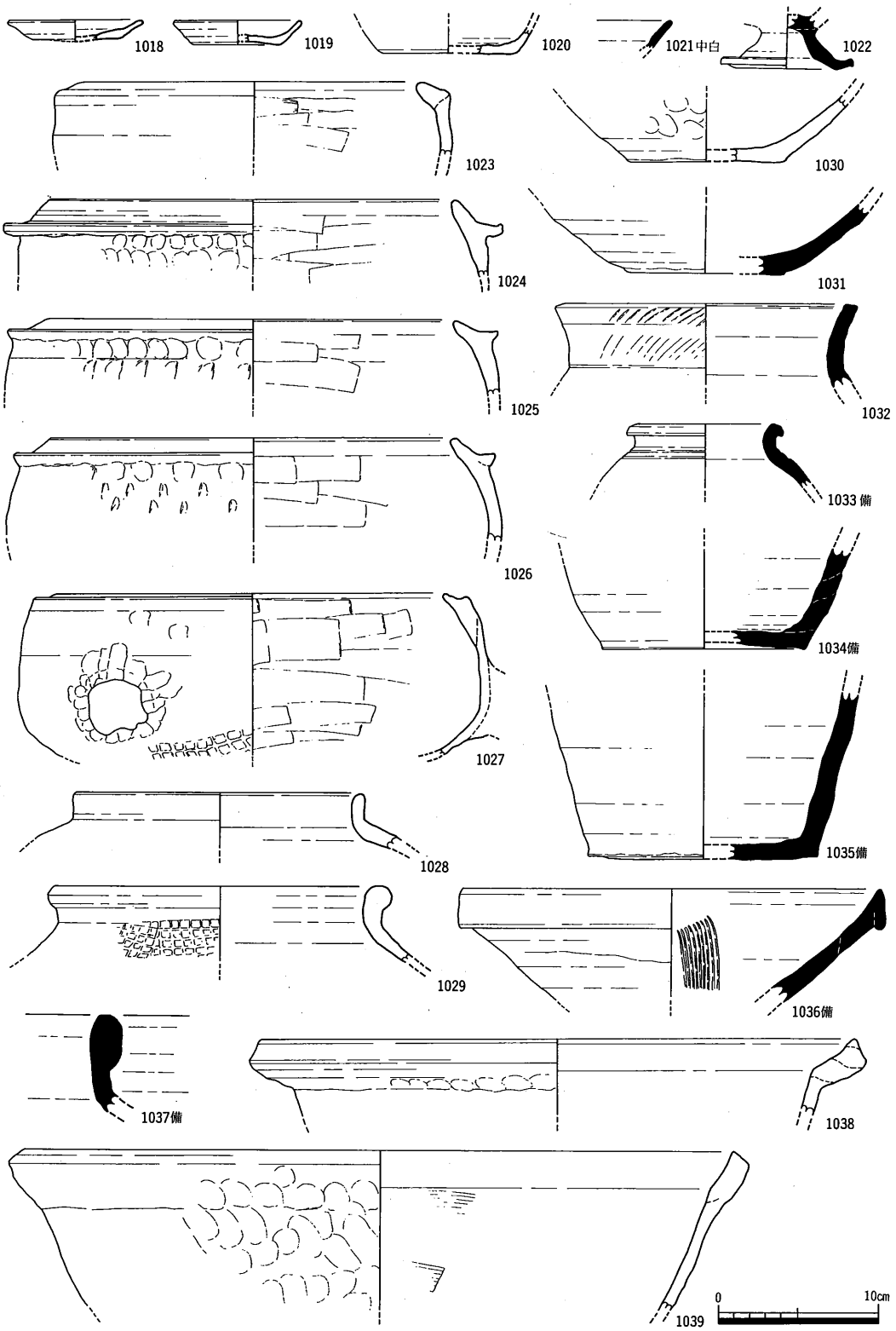
ＳＥ02の時期はＳＥ04との切り合い関係から，ＳＥ04に後出し，17世紀前半頃と考えられる。

ＳＥ03（第284～286図，図版67～68）　Ｅ－１区南西隅部で検出された素掘りの井戸で，ＳＤ05を切っている。掘り方の平面形は長円形を呈し，長軸3.5m，短軸2.9m，深さ1.0mを測る。断面形は検出面より0.4m下まで緩やかに掘り込まれ擂鉢状を呈し，それより下位では垂直に掘り下げられ二段掘りとなる。なお下位の壁面は砂層を掘り抜いているためか，抉れて一部袋状を呈している。底面は比較的広く平坦であった。埋土はこの掘り方の断面形に対応して，上層（１～７層）と下層（８～15層）に大別される。上層は灰褐色系粘質シルトが認められ，また下層は植

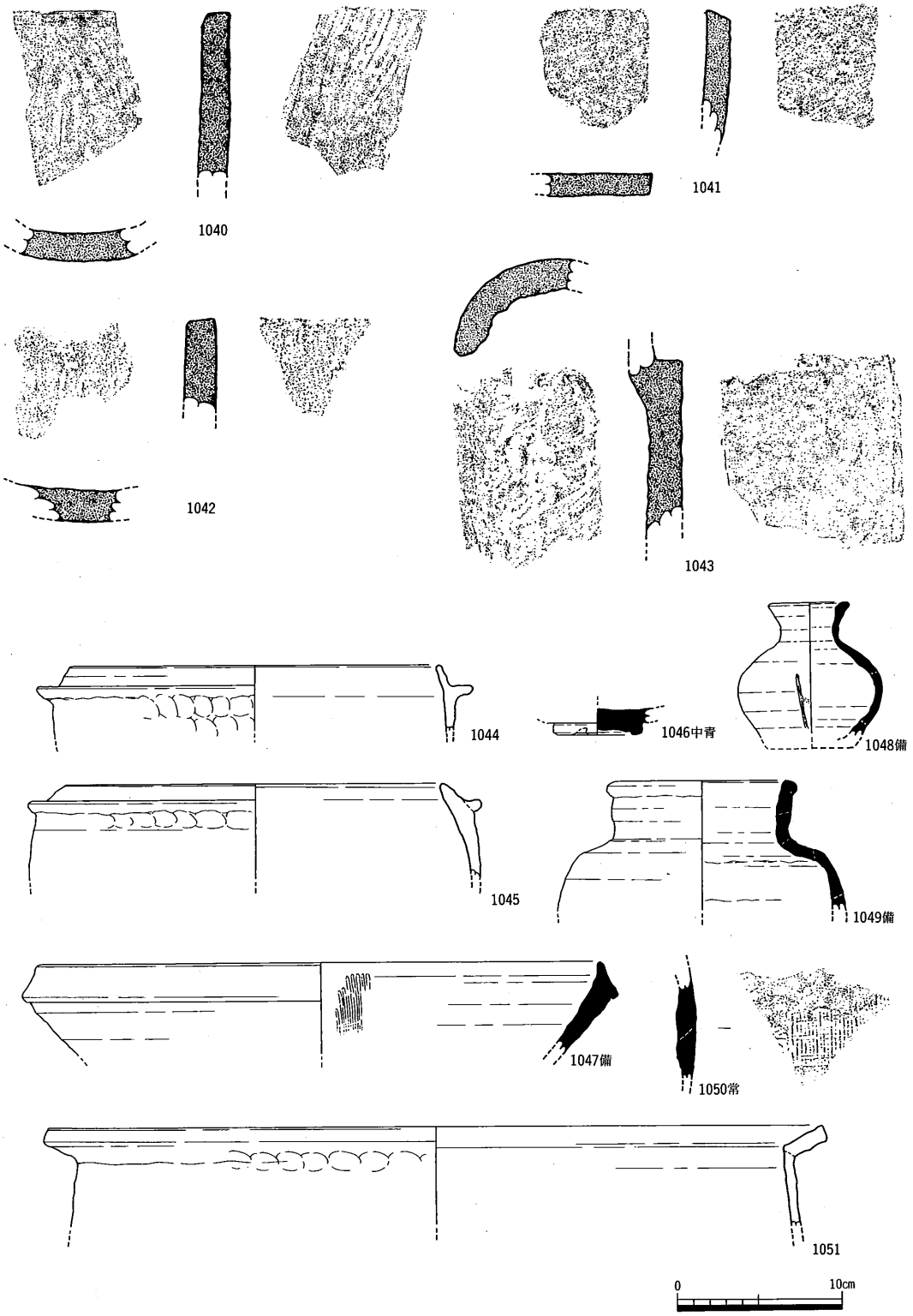


1．暗褐色粘質シルト
2．暗灰褐色粘質シルト（ベースブロック含む）
3．暗灰色粘土（砂混じり，上面に鉄分沈着）
4．暗灰色粘土（植物遺体含む）
5．濃灰色粘土・黄褐色粗砂ラミナー
6．濃灰色粘土（砂混じり，植物遺体含む）
7．黄褐色粗砂（灰色粘土ブロック含む）
8．灰色中砂
9．灰色粗砂（濃灰色粘土ブロック含む）
10．濃灰色粘土・灰色中砂ラミナー
11．暗橙灰色粗砂
12．黄褐色粗砂・濃灰色粘土ラミナー
13．暗灰色中砂・濃灰色粘土ラミナー

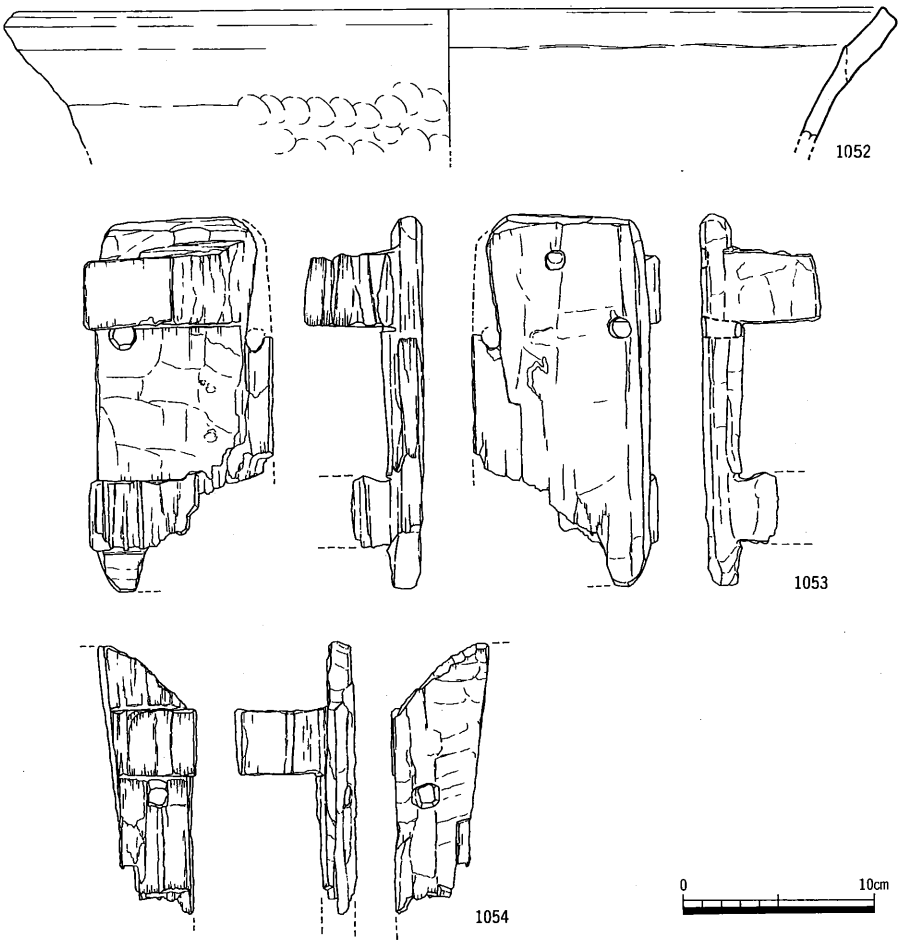
第280図　Ｅ地区第１面ＳＥ02平・断面図（1/40）



第281図　Ｅ地区第１面ＳＥ02上層出土遺物〔１〕(1/4)



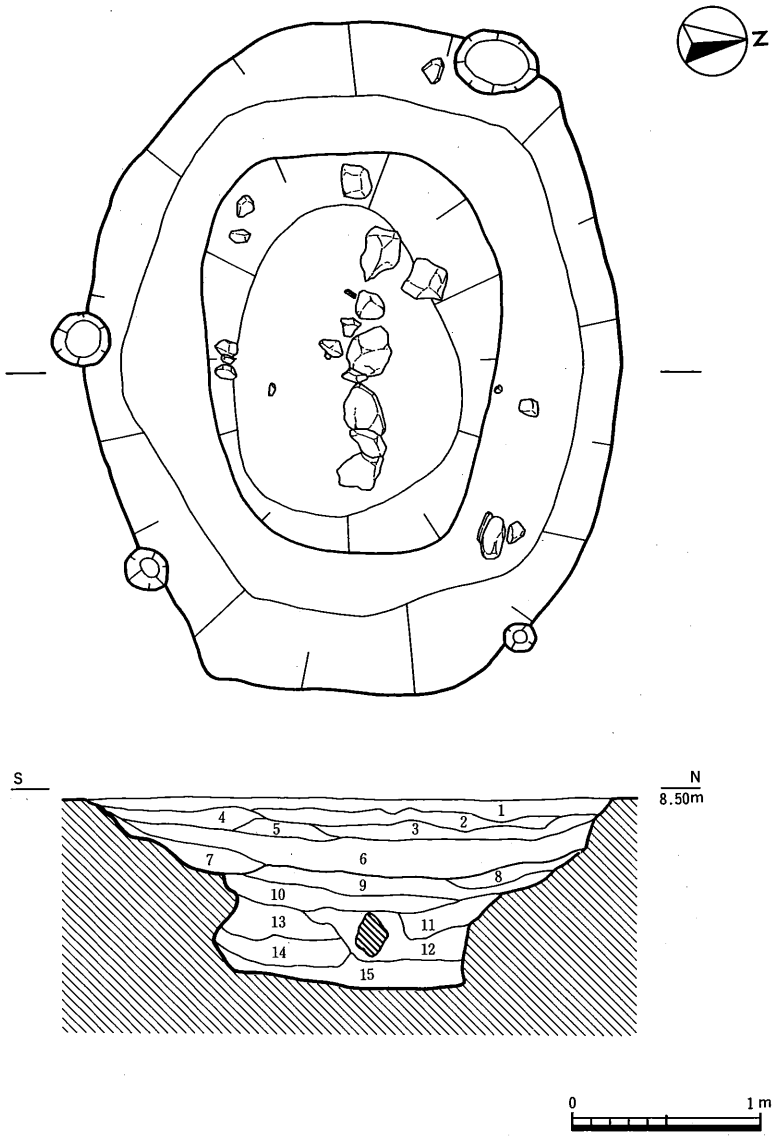
第282図　Ｅ地区第１面ＳＥ02上層（23～26），下層（27～34）出土遺物〔２〕(1/4)



第283図　E地区第1面SE02下層出土遺物〔3〕(1/4)

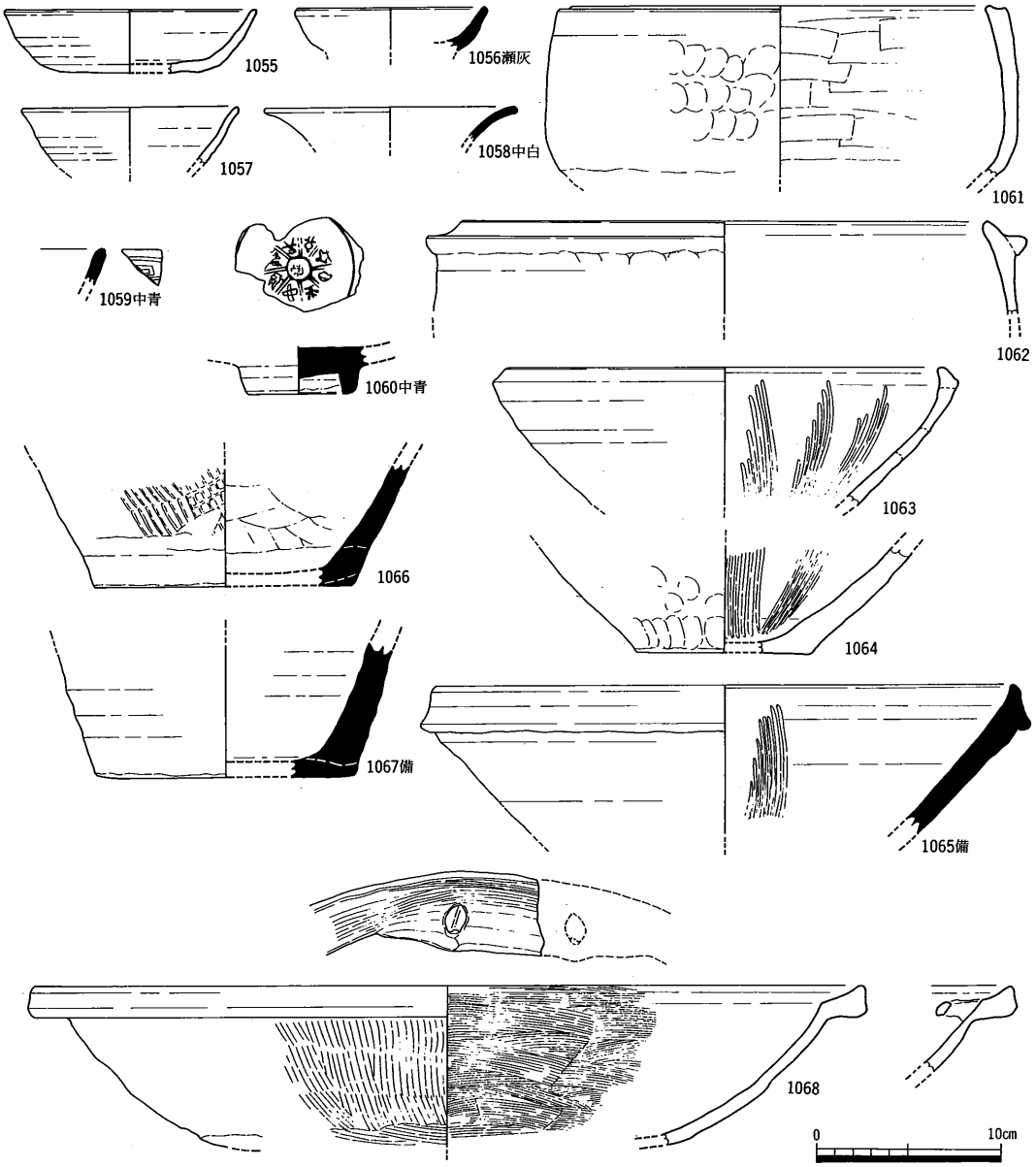
物遺存体を含む灰色系粘土を主体に，壁面の崩落によると思われる砂層の流れ込みが認められた。なお下層中位より，8個の人頭大の安山岩塊石が列状に並んで検出された。石組みを破壊したものかとも考えられたが，性格を特定することは出来なかった。また最下層の細砂層は，湧水を清浄に保つため底面に敷かれた可能性が考えられる。

遺物は，土師質土器坏（1055），同埦（1057），同羽釜（1061～1062），同擂鉢（1063・1064），須恵器壺（1066），備前焼壺底部（1067），同擂鉢（1065），亀山焼焙烙（1068），瀬戸・美濃灰釉皿（1056），中国産白磁皿（1058），同青磁碗（1059・1060）の土器類の他，木製品（1069～1073）が出土した。1055は底部糸切りである。本遺跡より出土した16世紀代の土師質土器の坏類はヘラ切りが大半を占め，1055は混入品若しくは搬入品の可能性がある。1056は丸皿で，時期は16世紀代である。1058は端反りの皿で，森田氏の分類のE群2b類に属する(註7)。1059は口縁部に雷文帯を有する青磁碗で，上田氏の分類(註8)のC－II類に属する。1060は内面見込に吉祥文が押印されている。1066は外面に平行タタキを施すもので，いわゆる十瓶山周辺で生産されたものである。1065は備前焼第IV期前半に属し(註3・14)，時期は14世紀後半から15世紀前半頃であ



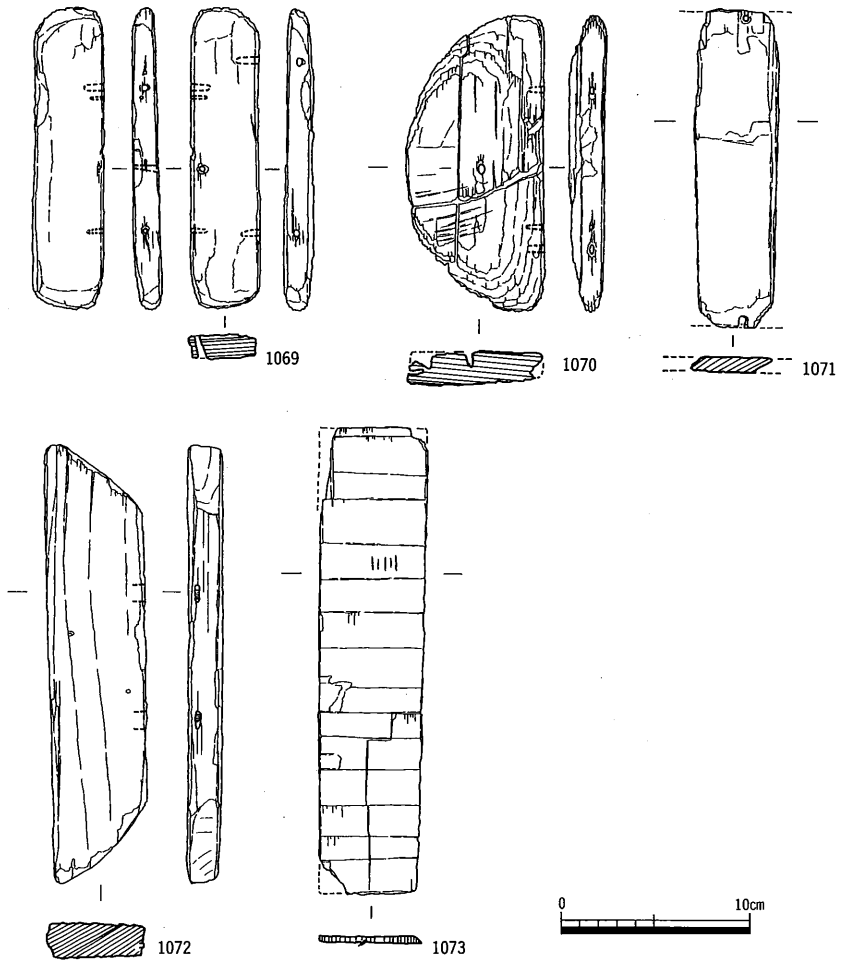
1．暗灰褐色粘質シルト
2．暗灰橙褐色粘質シルト（炭化物含む）
3．暗灰褐色粘質シルト
4．暗灰褐色粘質シルト（ベースブロック含む）
5．灰褐色粘質シルト
6．暗茶褐色粘質シルト
7．灰黄褐色粘質シルト（砂混じり）
8．濃灰色粘土（砂混じり，植物遺体含む）
9．濃灰色粘土（植物遺体含む）
10．濃灰色粘土（砂混じり，植物遺体含む）
11．暗灰色粗砂（濃灰色粘土ブロック含む）
12．濃灰色粘質シルト
13．青灰色粘質シルト
14．濃灰色粘土（砂混じり，植物遺体含む）
15．青灰～淡灰色細砂

第284図　Ｅ地区第１面ＳＥ03平・断面図（1/40）



第285図　E地区第1面SE03出土遺物〔1〕(1/4)

る。また1068は亀山焼IV群に属し(註14)，時期は16世紀代である。なお亀山焼焙烙は県内では類例に乏しく，下川津遺跡SXIV01より1点出土している(註17)。1069・1070・1072は，いずれも桶または樽の底板であろう。側面に2～3個の目釘穴を開ける。1069は，長側辺側に補修孔と思われる貫通孔が認められる。また材はいずれもモミ属の一種で，板目板を使用する。1071は用途不明品である。上下両端には円孔が穿たれている。また，片面には黒色漆が塗られており，折敷の縁になる可能性がある。材はモミ属の一種で，板目板が使用されている。1073は曲物側板の残欠である。

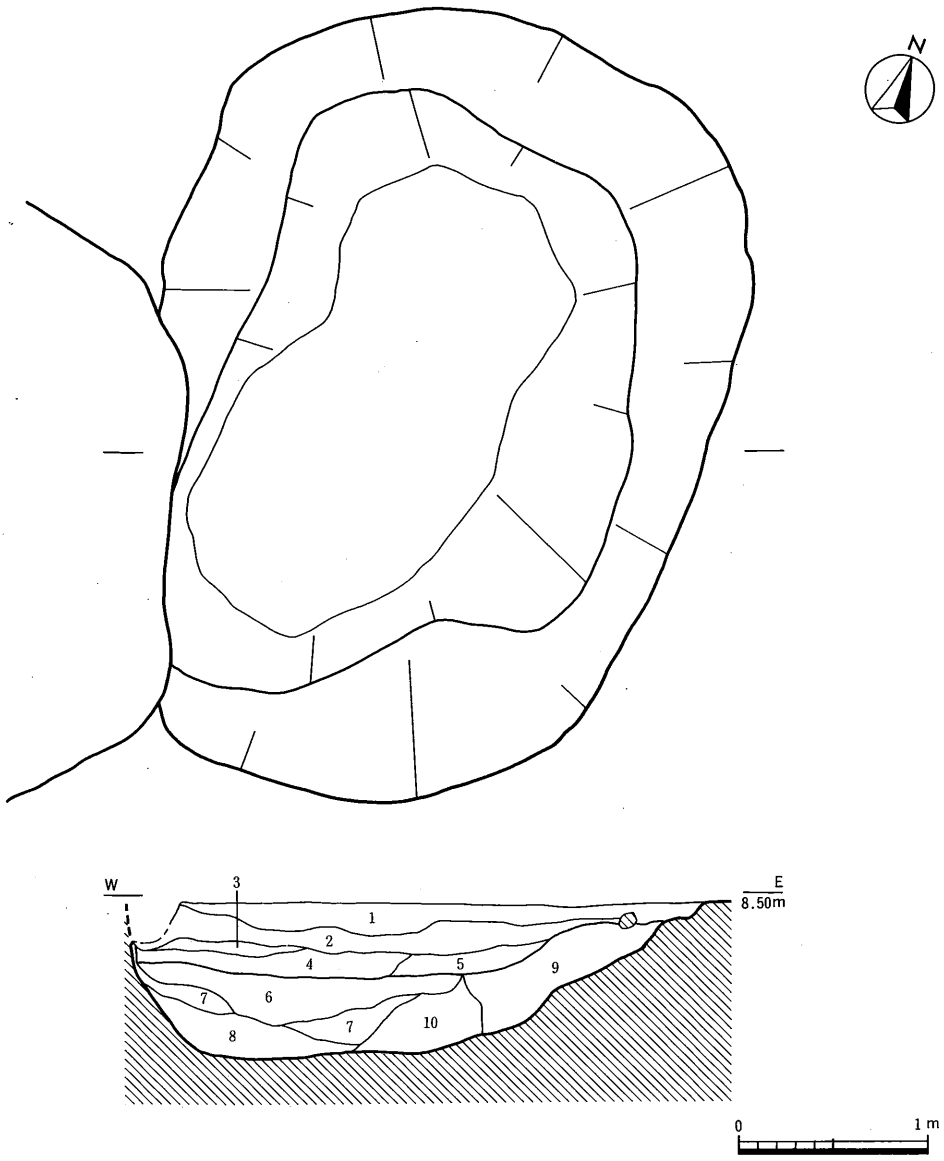


第286図　Ｅ地区第１面ＳＥ03出土遺物〔２〕(1/4)

ＳＥ03も出土遺物中に唐津製品を含まないことから，16世紀末頃には廃棄されていたと推定される。

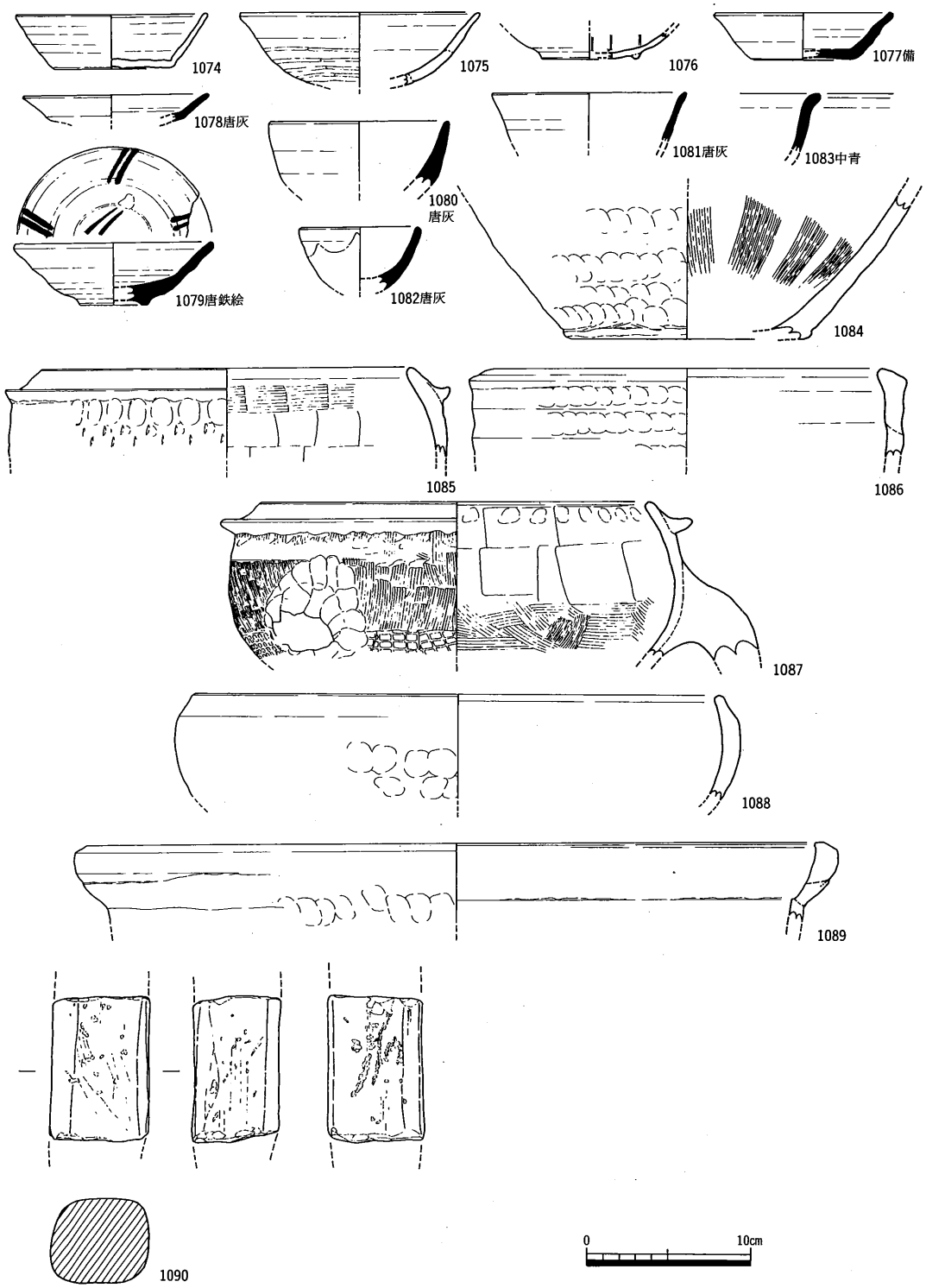
ＳＥ04（第287・288図，図版67）　Ｅ－１区南西部で検出された素掘りの井戸である。南西隅をＳＥ02に切られ，ＳＤ02・03を切っている。掘り方の平面形は長方形を呈し，長軸4.2m，短軸3.0m，深さ0.8mを測る。断面形は東及び南肩は緩やかに掘り込まれ，僅かなテラスを２段に作りながら底に至り，西肩は垂直に掘り込まれている。埋土は上層（１～５層）と下層（６～10層）に大別される。上層は灰褐色系粘質シルトが認められ，また下層は植物遺体を含む灰色系粘土及びベース砂層の流れ込みからなる。

遺物は，土師質土器坏（1074），同擂鉢（1084），同羽釜（1085～1088），同土鍋（1089），西村産瓦質土器埦（1075），和泉型瓦器埦（1076），備前焼坏（1077），唐津灰釉皿（1078），同鉄絵皿（1079），同灰釉碗（1080・1081），同灰釉小坏（1082），中国産青磁碗（1083），細粒砂岩製の砥石（1090）が出土した。1074は胎土・焼成共良質のもので，底部はヘラ切りである。1077は口縁

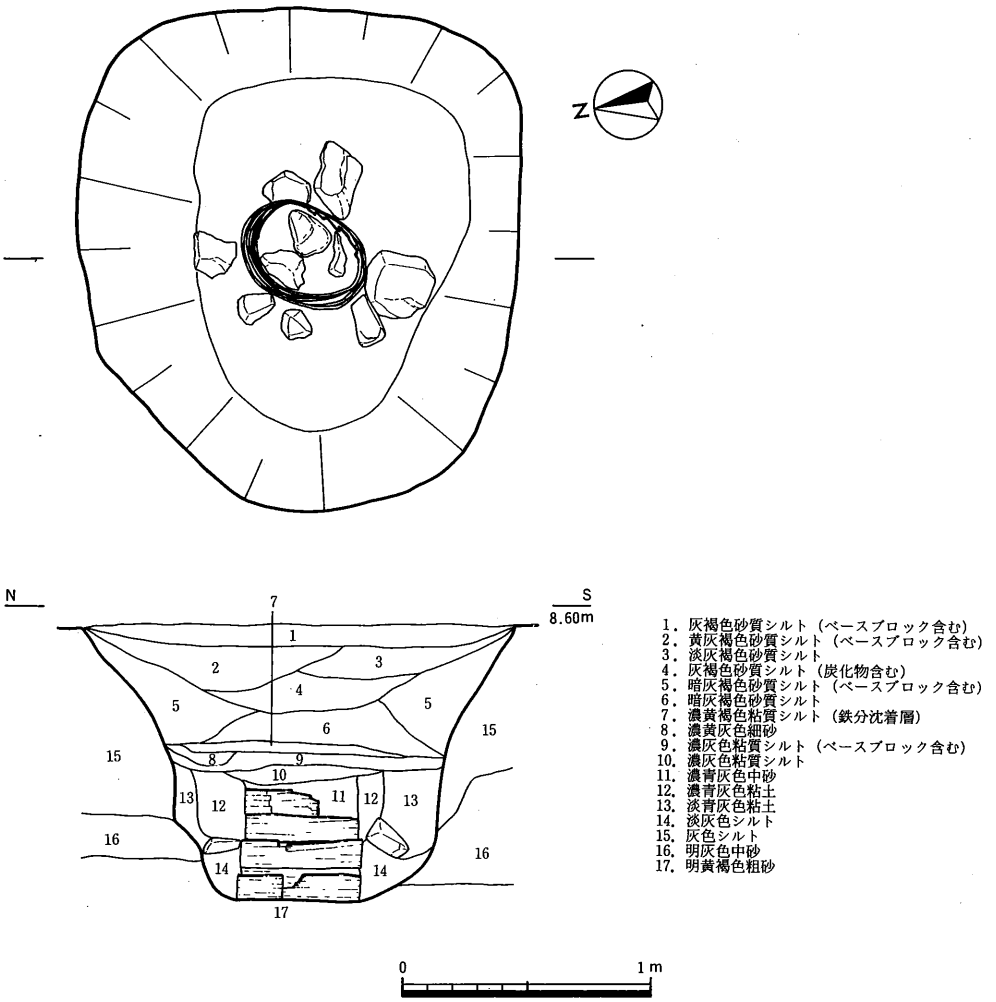


1．暗灰褐色粘質シルト（炭化物含む）
2．暗灰褐色粘質シルト
3．暗褐色粘質シルト
4．暗灰褐色粘質シルト（上面に鉄分沈着）
5．灰褐色粘質シルト
6．濃灰色粘土（上面に鉄分沈着，植物遺存体含む）
7．濃灰色粘土（砂混じり，植物遺存体含む）
8．濃灰色粗砂
9．暗灰褐色粘土・黄褐色粗砂ラミナー
10．灰色粗砂，濃灰色粘土ラミナー

第287図　E地区第1面SE04平・断面図（1/40）



第288図　Ｅ地区第１面ＳＥ04出土遺物（1/4）



第289図　E地区第1面SE05平・断面図（1/30）

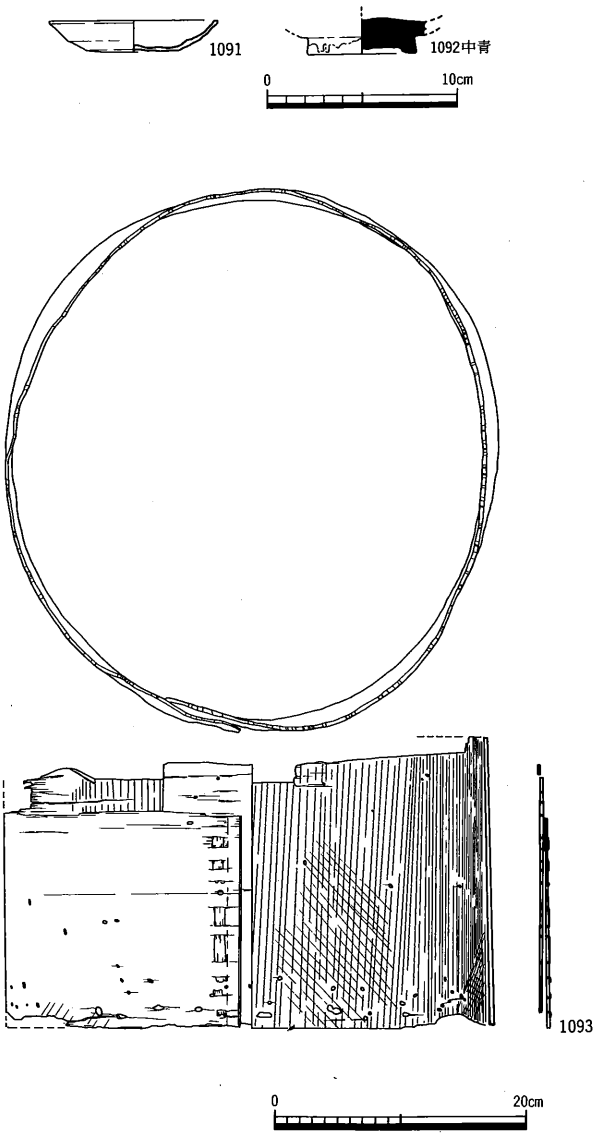
部が外反するもので，時期は16世紀後半から末頃である。唐津は比較的多く出土している。1080の釉は砂目積段階では施釉されなくなるもので，雑器に多いものである。時期は1580～1610年代である。1079は口縁部及び見込に鉄絵で2本単位の直線文様を描くもので，見込には胎土目痕が認められる。時期は1580～1610年代である。1082は外面は口縁部のみに施釉する。時期は1600～1630年代である。1083は口縁部が外反し厚く釉を掛けるもので，上田氏の分類（註8）のD－II類に属する。1090は4面を使用する方柱状の荒砥で，数条の溝状擦痕が認められる。

出土遺物よりSE04の時期は，16世紀後半から17世紀前半頃と推定される。

さて，上述したSE01～04はE－1区西端部にほぼ直線状に4基並んで検出され，僅かな時期差を有して構造や土層に共通した内容を有することから，数基単位で構築された井戸群と推定される。さらに，本井戸群とD地区屋敷地とは同一時期で，かつ屋敷地内で井戸が1基のみしか検出されなかったことを考えると，本井戸群はD地区屋敷地に付属する施設とする推定も可能であ

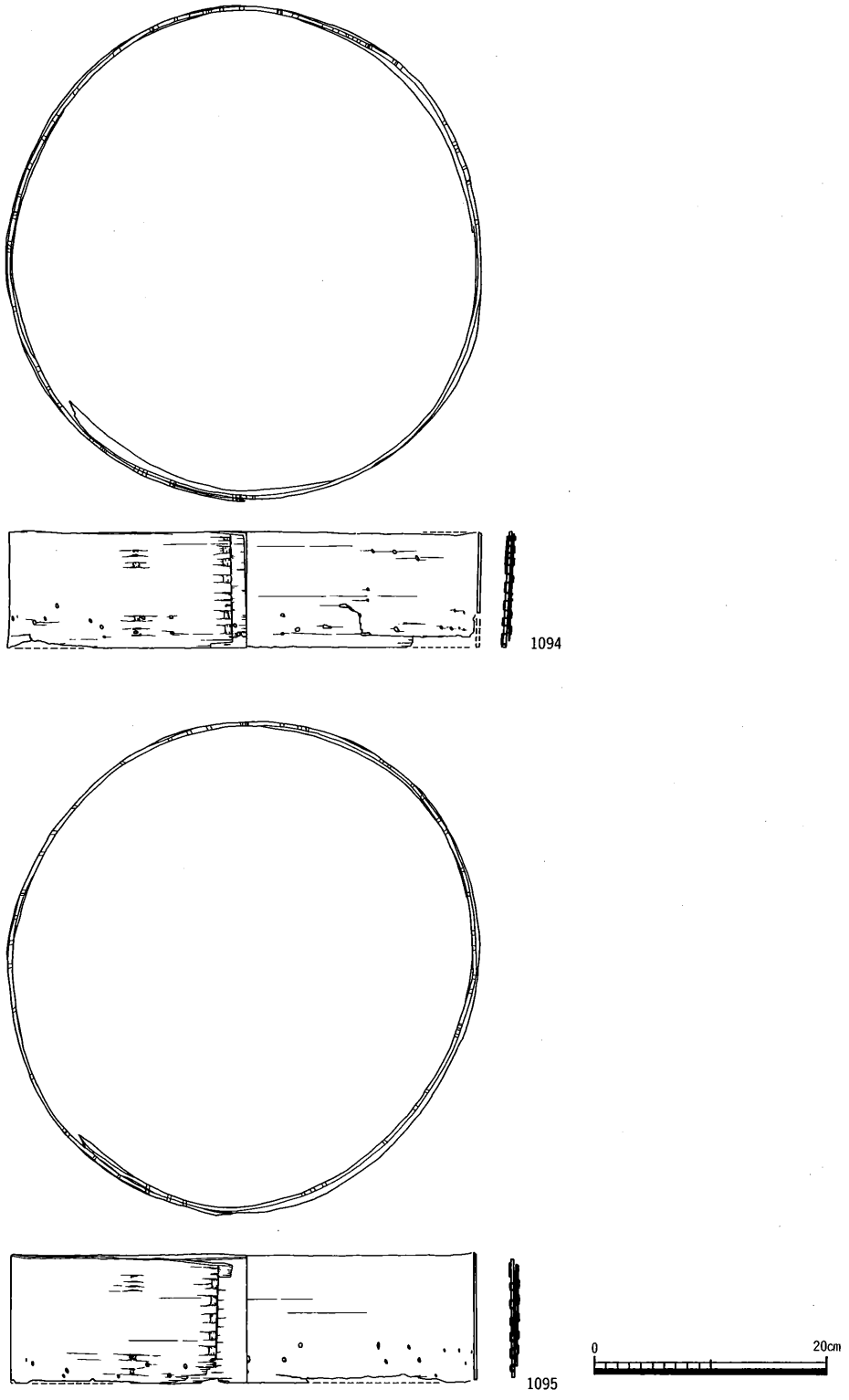
る。

ＳＥ05（第289～291図，図版69・70）　Ｅ－２区北西部で検出された井戸である。掘り方の平面形はやや西辺が張った隅丸方形を呈する。長軸2.0m，短軸1.7m，深さ1.1mを測る。断面形は掘り方上面より0.5m下までの上半部は緩やかに掘り込まれ擂鉢状を呈し，これより下位ではほぼ垂直に掘り下げられている。底面はほぼ平坦であった。なお，本地点では，検出面下約0.7mで透水層（明灰色中砂層）に達し，本井戸はこれを0.4m掘り抜いて構築されている。検出面より0.7m掘り下げた位置で，井戸枠である４段に積み重ねられた曲物を検出した。また曲物２段目の上端レベルで，人頭大の安山岩の塊石をやや不規則ながら曲物周囲に配し，曲物を固定していた。最下段の曲物（1093）は上下２段にまわしと２枚のへぎ板を有している。土層は曲物上端をほぼ境にして，上層（１～６層）・中層（７～11）・下層（12～14）に大別される。上層は灰褐色系粘質シルトが堆積し，ベースブロックを顕著に含むことから，井戸廃棄に伴って人為的に埋め戻した土砂であろう。中層は曲物上面で水平に薄く堆積する土層で，灰褐色系粘質シルト及びマンガン沈着層からなる。下層はグライ化した灰色系粘土層からなり，曲物の裏込め土を中心とする土層である。



第290図　Ｅ地区第１面ＳＥ05出土遺物〔１〕(1/4，1/6)

出土遺物は乏しく，僅かに土師質土器皿（1091）と中国産青磁碗（1092）が曲物内より出土したのみである。1091は底部ヘラ切りである。1092は太宰府の分類(註２)の龍泉窯系碗Ⅰ類に属する。曲物は３点（1093～1095）を図示した。1093の内面には縦方向と一部斜め方向に剝刀状刃物によって木理直交刃痕(ケビキ)を入れる。1094・1095にはこれは認められない。底板の固定はい



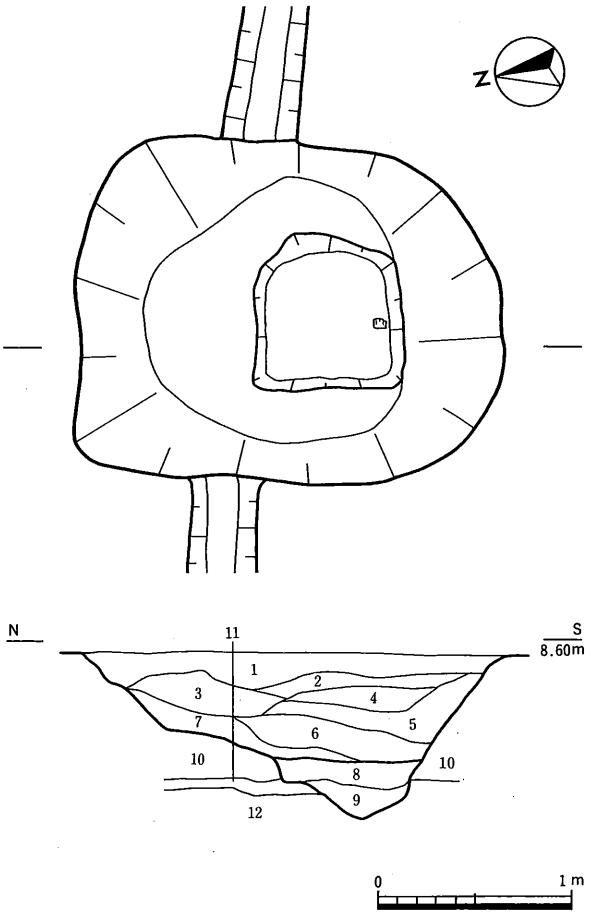
第291図　Ｅ地区第１面ＳＥ05出土遺物〔２〕(1/6)

ずれも底部に沿って径３㎜程の円孔が穿たれており，木釘を使用したものと思われる。側板の接合方法は桜皮を使用し，一列のみ縫い合わせて固定する。

出土遺物や井戸枠に曲物を使用していることから，ＳＥ05の時期は13世紀代を中心とする時期と推測される。

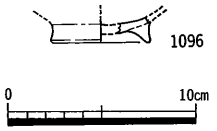
ＳＥ06（第292・293図，図版70・71）　Ｅ－2区西部で検出された井戸である。東西両側には排水溝と考えられるＳＤ18が接続する。掘り方の平面形は南辺がやや張り出した隅丸方形状を呈する。長軸2.2m，短軸1.8m，深さ0.8mを測る。掘り方の南肩は垂直に近く掘り込まれ，北肩は緩やかに立ち上がる。掘り方上面より0.5m掘り下げた位置で北半部を中心にテラス面が形成され，南半部ではさらに一辺0.8mの方形の掘り込みが認められた。なお，本井戸周辺では検出面下0.6mで透水層（明黄灰色粗砂層）に達し，本井戸はこれを0.2m掘り抜いて構築されている。埋土はテラス面を境にして上層（１～７層）と下層（８・９層）に大別される。上層は灰褐色系粘質シルト，下層は暗灰色粘土及び暗褐色粗砂からなる。井戸枠等は認められなかったが，下位の方形掘り込みの南辺部より曲物残欠が１点出土しており，本来は方形掘り込み内に曲物を設置していたものと思われる。

遺物は土師質土器埦（1096）が出土したのみである。



1．灰茶褐色砂質シルト
2．灰褐色砂質シルト
3．暗灰褐色砂質シルト
4．暗灰褐色粘質シルト（砂混じり）
5．濃灰褐色粘質シルト（砂混じり）
6．明灰茶褐色シルト
7．濃灰褐色粘質シルト
8．暗灰色粘土（砂混じり・明青色粘土ブロック含む）
9．暗褐色粗砂
10．明茶灰色シルト
11．明黄灰褐色粗砂
12．淡黄灰色中砂・濃茶褐色粗砂ラミナー

第292図　Ｅ地区第１面ＳＥ06平・断面図（1/40）

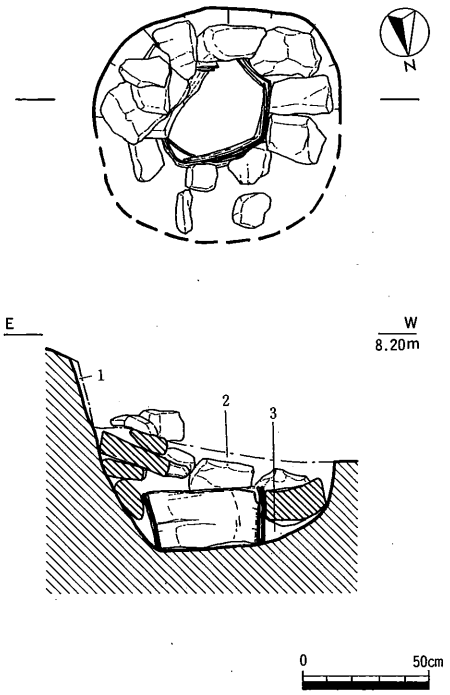


第293図　Ｅ地区第１面ＳＥ06出土遺物（1/4）

ＳＥ06の時期は，出土遺物が乏しく今一つ明確にし難い。周辺の遺構配置や井戸枠に曲物を使用していることから考えて，ＳＥ05と余り隔たらない時期と考えられる。

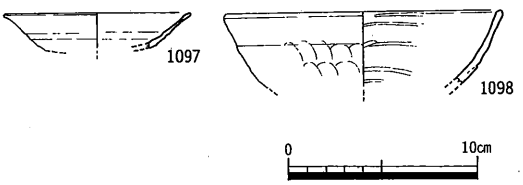
ＳＥ07（第294～297図，図版72・73）

Ｅ－１区北西部で検出された井戸である。本井戸はＳＥ01掘削途中に石組が検出され，また土層に切り合い関係が確認されたため改めてＳＥ01と別の井戸として調査を行なった。したがって，上面の掘り込み位置については今一つ明確にできていない。検出した段階で掘り方の上面形は略円形を呈し，径1.0m，深さ0.8mを測る。断面形は垂直に近く掘り込まれ筒状を呈する。底面はほぼ平坦であった。井戸枠は曲物井筒及び石組みからなる。掘り方底面に接して径0.4m，高さ0.2mの曲物を１段据え，その上に人頭大ないしは拳大の安山岩の塊石を，木口面を内側に向け４段以上組み上げている。石組み背後に控え積みは認められず，濃青灰色シルト質細砂が裏込め土として充填されていた。また曲物は，４個が重ねられていた。なお，東側の石組は土圧によって曲物内に内傾しており，それに伴って曲物もいびつに変形していた。埋土は石組み上面及び内部で灰色系粘土が確認された。



1．暗灰色粘土（砂混じり）
2．濃灰色粘土
3．濃青灰色シルト質細砂

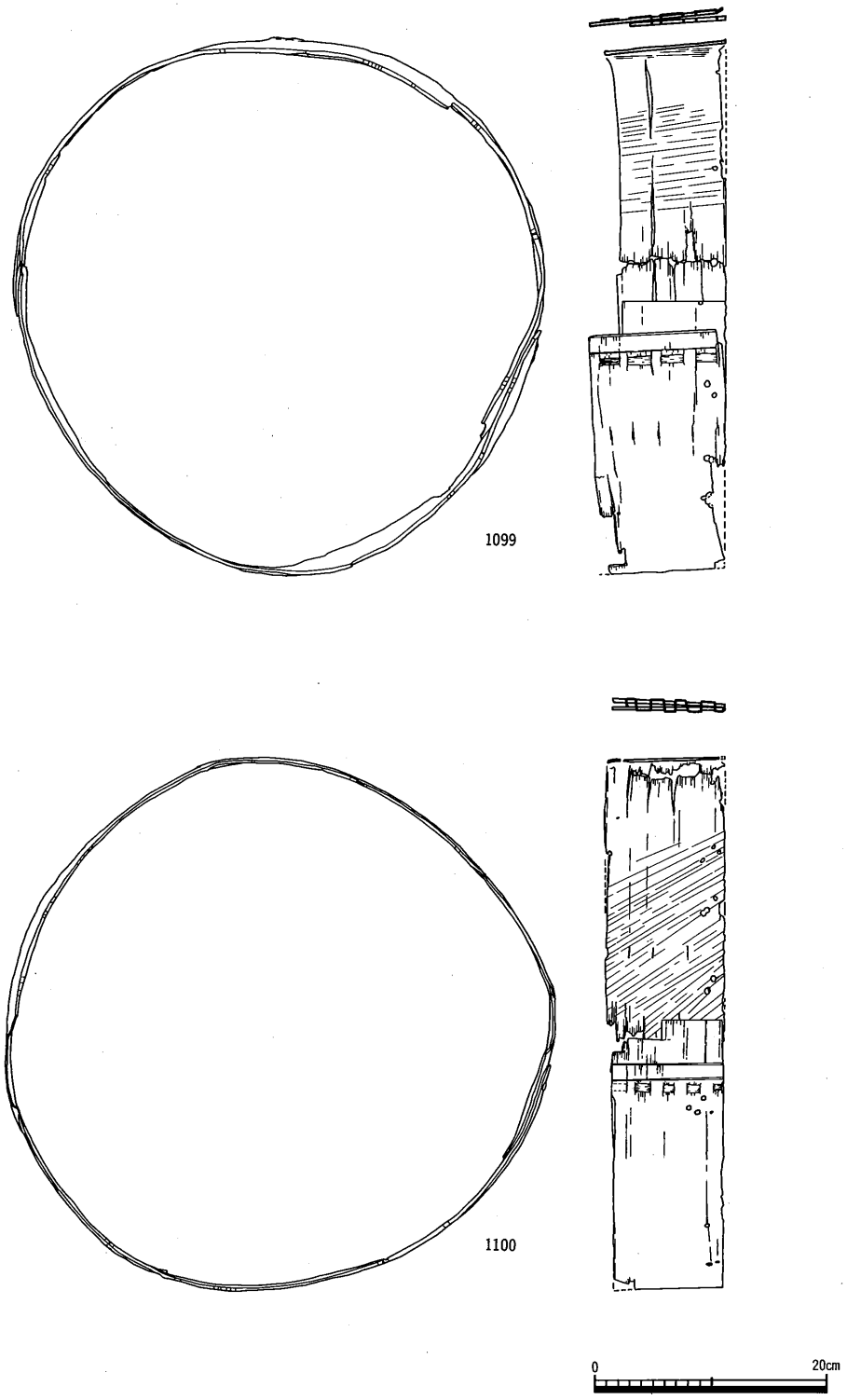
第294図　Ｅ地区第１面ＳＥ07平・断面図（1/30）



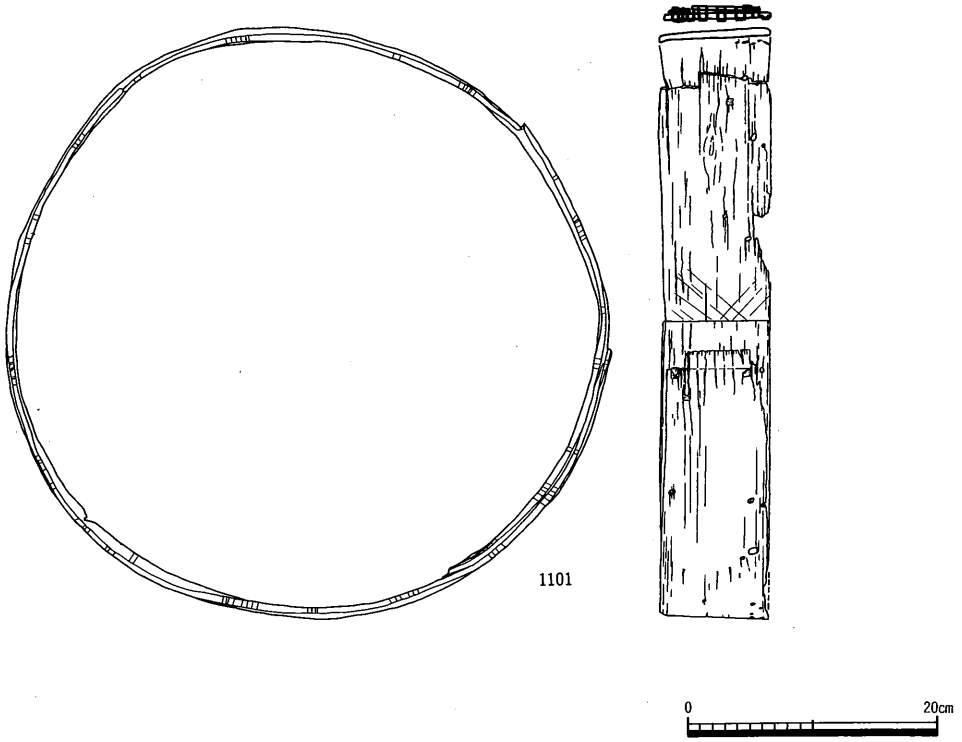
第295図　Ｅ地区第１面ＳＥ07出土遺物〔１〕(1/4)

遺物は乏しく，土師質土器皿（1097），和泉型瓦器埦（1098）が石組下方の掘り方内埋土中より出土したのみである。曲物は３点（1099～1101）を図示した。いずれも内面には剝刀状刃物によって縦または斜め方向の木理直交刃痕（ケビキ）を入れ，底板との接合は木釘を使用したものと思われる。また側板の固定はいずれも桜皮を使用しており，1099と1100は一列止め，1101は２列止めである。

ＳＥ07の時期は，出土遺物が乏しく今一つ明確にし難い。瓦器埦の特徴と井戸枠に曲物が使用されている点から13世紀後半頃と推定される。なお本調査区検出の13世紀を中心とする井戸群（ＳＥ05～07）の特徴として，井戸枠内からの出土遺物が少ない点が挙げられよう。



第296図　Ｅ地区第１面ＳＥ07出土遺物〔２〕(1/6)



第297図　E地区第1面SE07出土遺物〔3〕(1/6)

4）土坑

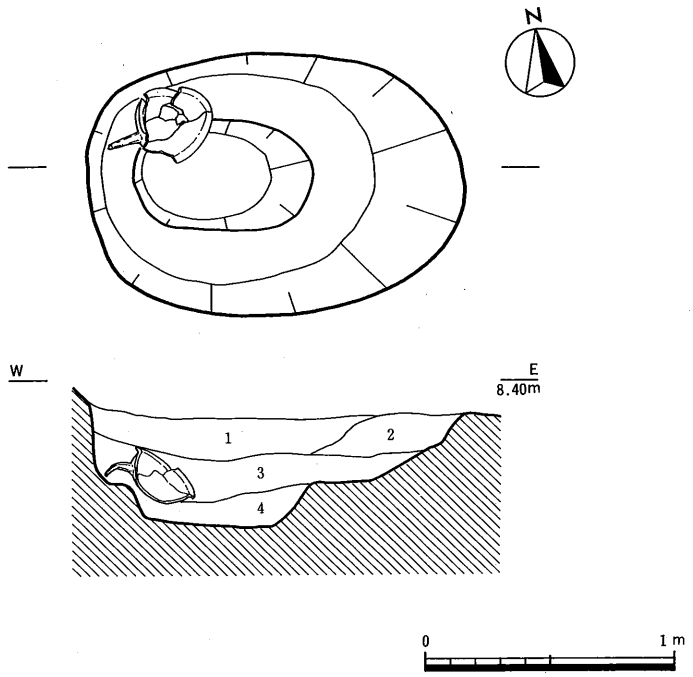
SK01　E－1区北西部で検出された土坑で，西半をSD03に切られている。平面形は現状で，径1.3mの楕円形を呈する。深さは0.1mを測り，断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は乏しく，土師質土器の細片が少量出土したのみである。

SK02（第298・299図，図版73）　E－1区北端部で検出された土坑である。SD03と重複し，切り合い関係よりSD03に後出する。長軸1.3m，短軸1.0m，深さ0.45mを測り，平面形は長円形を呈する。掘り方は2段に掘り込まれ，床面より0.2m上位で幅0.1～0.25mのテラスが一周する。そして，このテラスに一足を置き，土坑中央に向かって落ち込んだ状態で，完形の土師質土器土鍋（1102）が出土した。埋土は灰褐色粘質シルトで，4層に細分された。

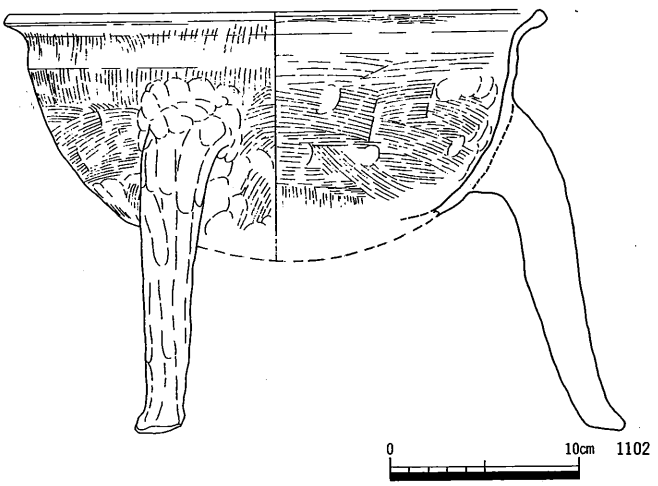
1102は三足付土鍋で，類例に乏しく，岡山県鹿田遺跡Ⅰ地点井戸29(註18)，岡山県菰池遺跡B区包含層(註19)，広島県尾道遺跡灰褐色砂質土層(註20)，広島県草戸千軒町遺跡29次SD2022(註21)等より出土しており，12～13世紀の年代が与えられている。

SK03（第300図）　E－1区中央部で検出された土坑である。径1.1m，深さ0.3mを測り，平面形は略円形を呈する。肩部は緩やかに掘り込まれ，断面形はU字状を呈する。埋土は濃灰褐色粘質シルト及び灰褐色粘質シルトからなる。



1．暗灰褐色粘質シルト
2．暗褐色粘質シルト（炭化物，ベースブロック含む）
3．暗灰褐色粘質シルト（ベースブロック含む）
4．暗灰褐色粘質シルト（ベースブロック含む）

第298図　Ｅ地区第１面ＳＫ02平・断面図（1/30）



第299図　Ｅ地区第１面ＳＫ02出土遺物（1/4）

遺物は極めて乏しく，土師質土器の細片が数点出土したのみである。

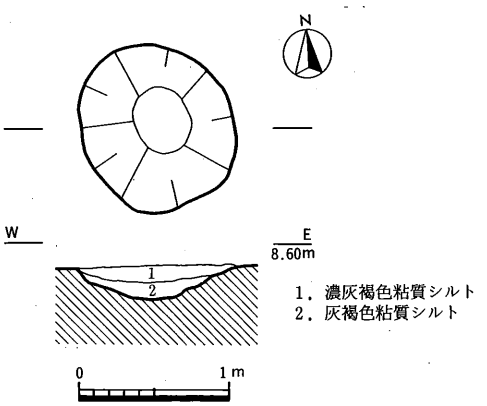
ＳＫ04（第301図）　Ｅ－１区北東部で検出された土坑である。長径1.4m，短径1.2mを測り，平面形は楕円形を呈する。深さは0.7mを測り，東壁は直に掘り込まれ，西壁はやや緩やかに立ち上がる。埋土は上層（１～３層）と下層（４・５層）に大別された。上層は灰褐色系粘質シルトが，下層はグライ化した灰色系粘土が堆積していた。下層は滞水状態下で堆積しており，素掘り井戸の可能性が推定される。また上層下位はベースブロックを含んでおり，オープンな状態で一定期間経過後人為的に埋め戻された可能性が推定される。

遺物は土師質土器皿（1103），備前焼壺（1104）の他，土師質土器埦・羽釜，青磁碗等の細片が出土した。1104は口縁部のみの破片だが，備前焼第IV期に属し(註3・14)，時期は14世紀から15世紀頃である。

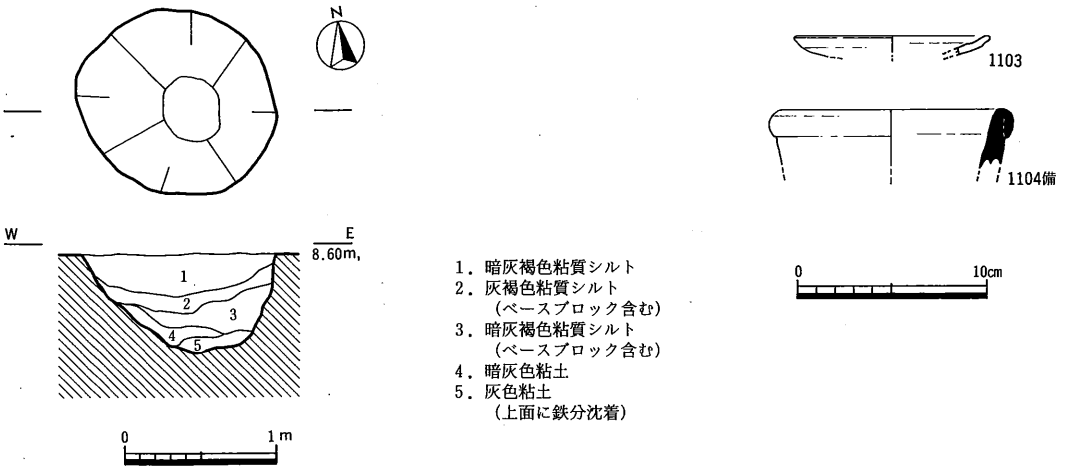
ＳＫ05（第302図）　Ｅ－１区北東部で検出された土坑である。長軸1.4m，短軸0.5m，深さ0.1mを測る。平面形は隅丸長方形，断面形は箱形を呈する。主軸の方向は，区画溝の方向と一致する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，土師質土器皿（1105），同羽釜（1106）の他，和泉型瓦器埦等の細片が少量出土したのみである。

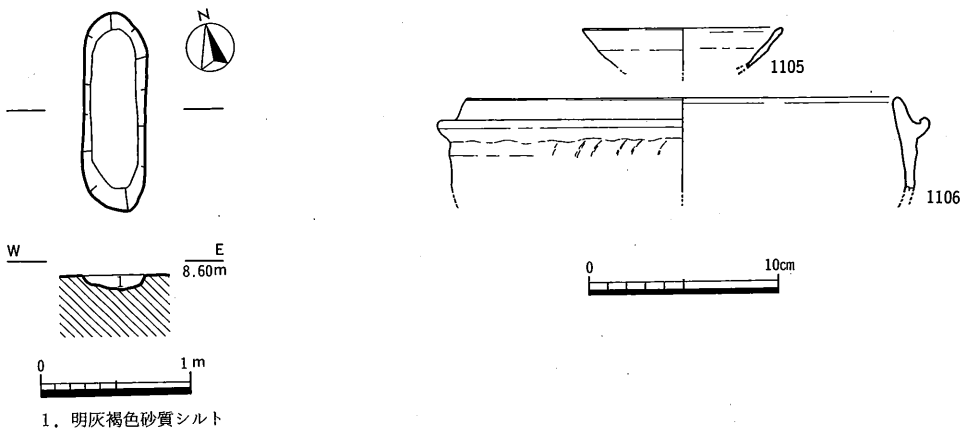
ＳＫ06（第303図）　Ｅ－１区東半部で検出された土坑である。長軸1.2m，短軸0.7m，深さ0.3mを測る。平面形は西半部



第300図　Ｅ地区第１面ＳＫ03平・断面図（1/50）



第301図　Ｅ地区第１面ＳＫ04平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）



1．明灰褐色砂質シルト

第302図　E地区第１面ＳＫ05平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

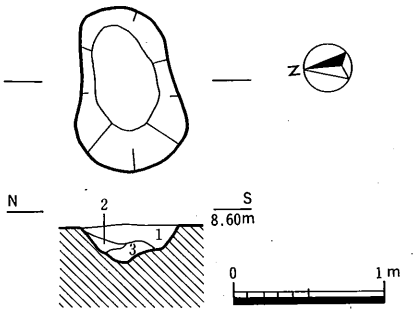
がやや広がった隅丸長方形を，断面形は皿状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトが堆積し，３層に細分された。最上層及び最下層はベースブロックを含んでおり，人為的に埋められた可能性がある。

遺物は，土師質土器皿・羽釜，和泉型瓦器椀等の細片が出土した。

ＳＫ07（第304図）　Ｅ－１区中央部で検出された土坑である。径1.2m，深さ0.3mを測り，平面形は略円形状を呈する。断面形は緩やかに掘り込まれ逆台形状を呈し，底面はほぼ平坦であった。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

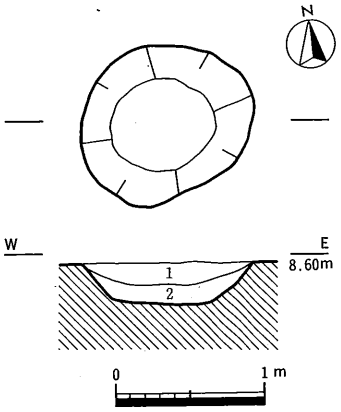
遺物は極めて乏しく，土師質土器や西村産瓦質土器椀の細片が数点出土したのみである。

ＳＫ08（第305～307図，図版74）　Ｅ－１区中央部で検出された土坑である。径1.4m，深さ0.8mを測る。検出面から0.5mは緩やかに掘り込まれ擂鉢状を呈し，これより下位は直に近く掘り込まれている。底面はほぼ平坦であった。埋土は，上位２層は灰褐色系粘質シルトが，下位層は暗灰褐色粘土が認められた。いずれもベースブロックを含んでおり，オープンな状態で一定期間経過後人為的に埋められた可能性がある。また下位２層は，石臼や砥石等の製品の他，拳大～人頭大の石礫を多量に含んでいた。石臼や砥石は全て破損しており，また火熱を受けているものも見



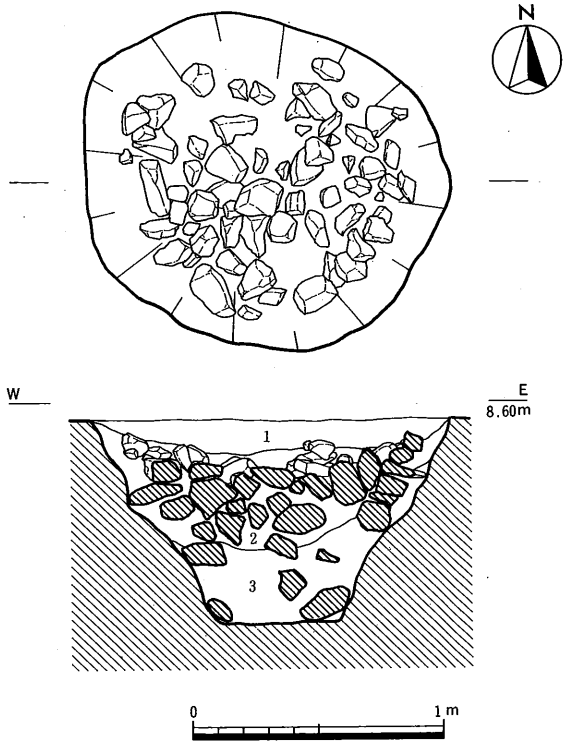
1．灰褐色粘質シルト（ベースブロック含む）
2．灰黄褐色粘質シルト
3．灰褐色粘質シルト（炭化物、ベースブロック含む）

第303図　E地区第１面ＳＫ06平・断面図（1/50）



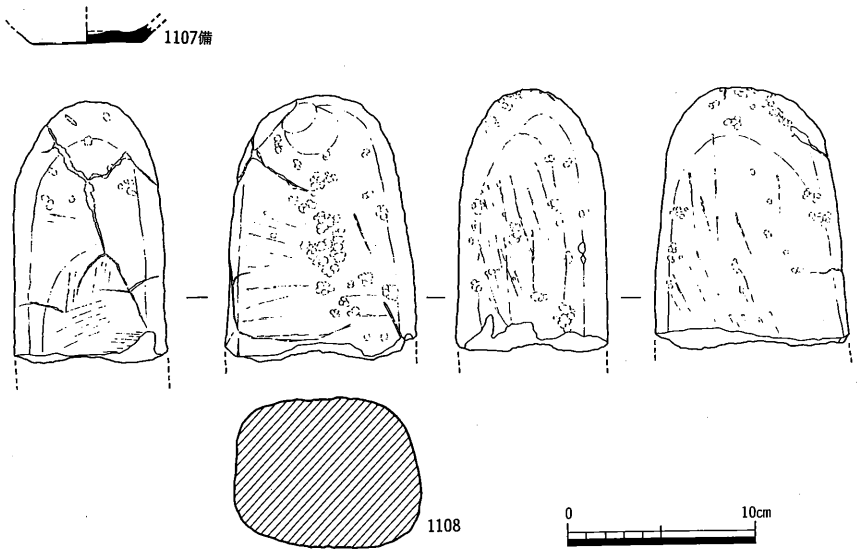
1．暗灰褐色砂質シルト（ベースブロック含む）
2．灰褐色粘質シルト（ベースブロック含む）

第304図　E地区第１面ＳＫ07平・断面図（1/50）

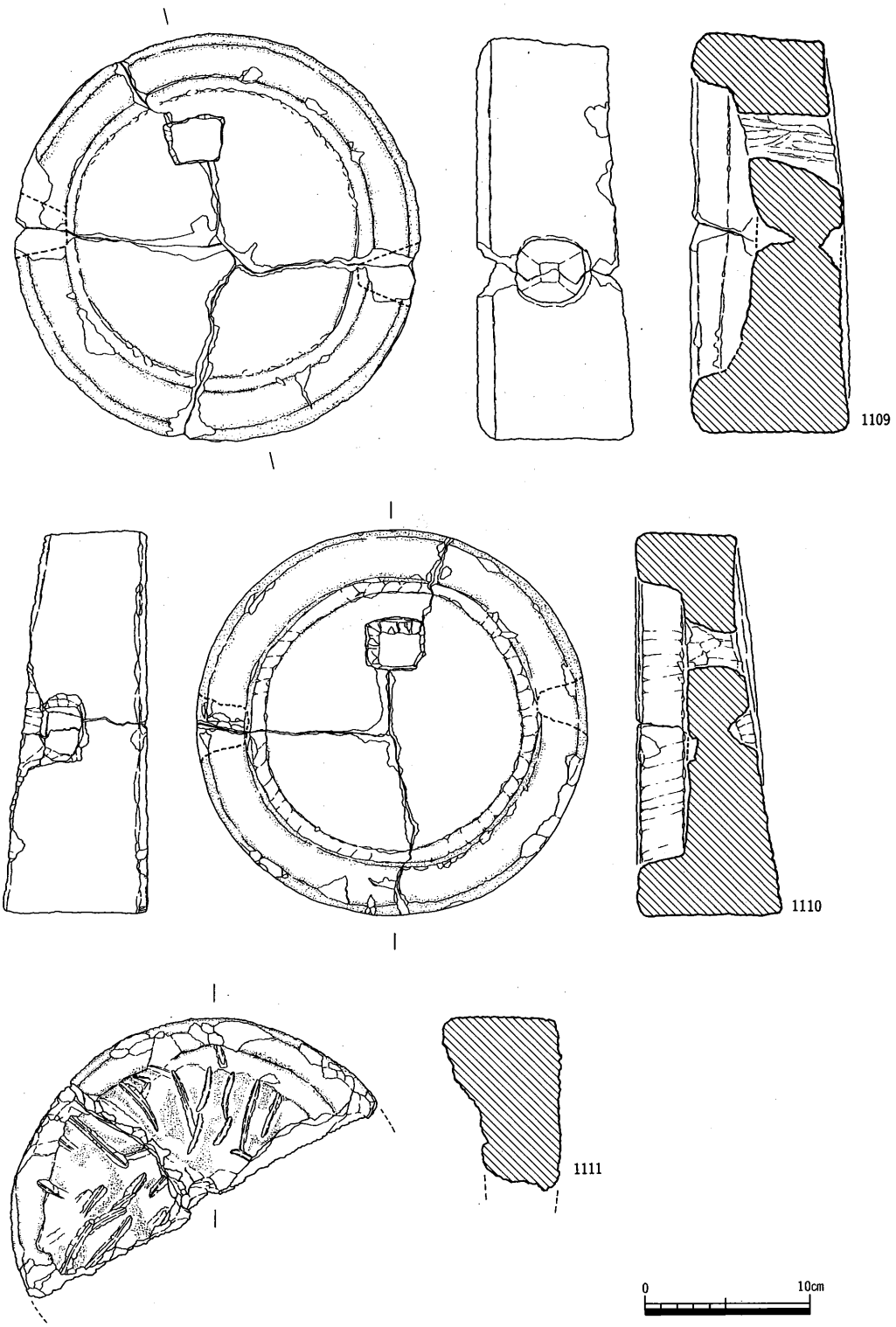


1．濃灰褐色粘質シルト（ベースブロック含む）
2．暗灰褐色粘質シルト（ベースブロック含む）
3．暗灰褐色粘土（砂混じり、ベースブロック含む）

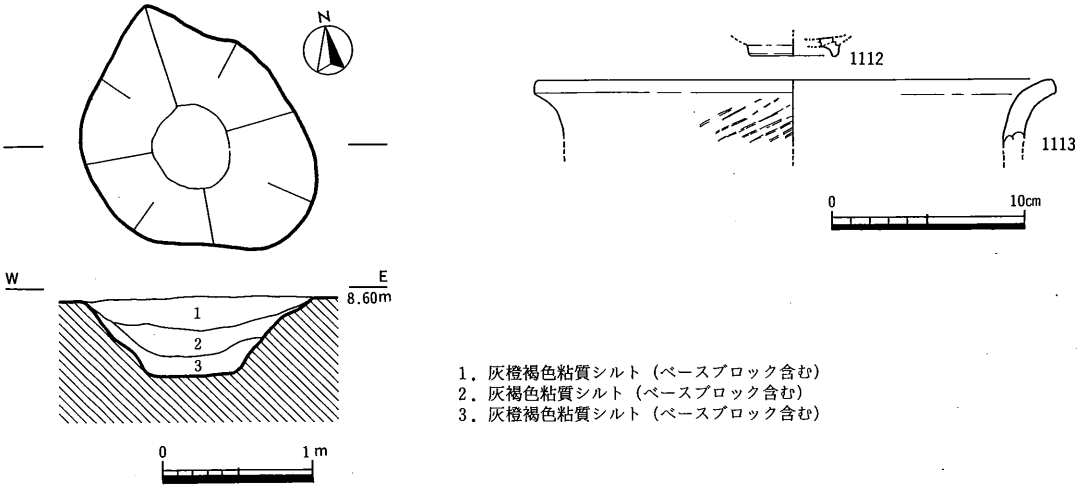
第305図　E地区第1面SK08平・断面図（1/30）



第306図　E地区第1面SK08出土遺物〔1〕(1/4)



第307図　Ｅ地区第１面ＳＫ08出土遺物〔２〕(1/4)



第308図　E地区第1面SK10平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

られた。また，自然礫の中にも被熱していたものもあった。埋土中に焼土や灰が含まれておらず，また床面に火を炊いた痕跡も認められなかった。

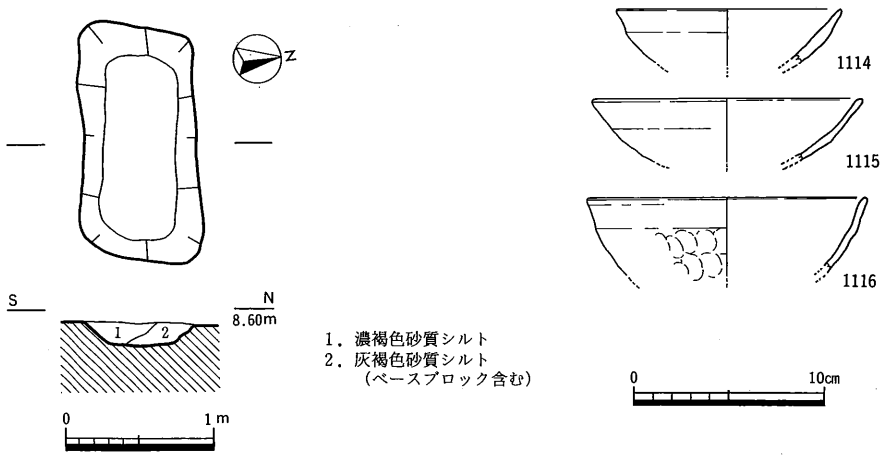
遺物は，上述した砥石（1108），石臼（1109～1111）の他，備前焼坏（1107）や同壺等の細片が極少量出土した。1107は底部回転糸切りである。時期は16世紀後半頃であろう。1108は細粒砂岩製の荒砥で，4面を使用している。石臼は全部で8個体分（上臼8点，下臼7点）出土している。個体差が乏しいため，上臼2点と下臼1点のみ図示した。全て角礫凝灰岩製である。1109・1110は上臼である。いずれも横打穴が一対認められる。また火熱を被っており，非常に脆くなっている。1111は下臼である。全形のほぼ半分で，僅かに軸受穴が認められる。溝は8分画・6溝と思われるが，全体に摩滅や剝離が著しく，また溝の彫り直しや混乱があって明確ではない。高さが直径に比して低いことから，長時間使用されていたと考えられる。

SK10（第308図）　E－1区東部で検出された土坑である。平面形は径1.5mの楕円形を呈し，北端に張り出しが付く。深さは0.6mを測る。断面形は緩やかに掘り込まれ逆台形状を呈し，底面はほぼ平坦であった。，埋土は灰褐色系粘質シルトで，3層に細分された。いずれもベースブロックを含んでおり，人為的に埋められた可能性がある。

遺物は，土師質土器埦（1112），瓦質土器甕（1113）の他，西村産瓦質土器埦，和泉型瓦器の埦等の細片が少量出土した。

SK11（第309図）　E－1区東部で検出された土坑である。長軸1.6m，短軸0.8m，深さ0.2mを測る。平面形は整った長方形を，断面形は浅い逆台形状を呈する。主軸の方向は区画溝の方向とほぼ一致する。埋土は灰褐色系砂質シルトで，2層に細分された。下位層はベースブロックを含んでおり，人為的に埋められた可能性がある。

遺物は乏しく，土師質土器埦（1114～1116）の他，和泉型瓦器埦等の細片が少量出土したのみ



第309図　Ｅ地区第１面ＳＫ11平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

である。

ＳＫ12　Ｅ－１区東端で検出された土坑で，東半部は調査区外に延びる。現状で，掘り方の平面形は略円形を呈し，径1.5m，深さ0.25mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は乏しく，土師質土器の細片が少量出土したのみである。

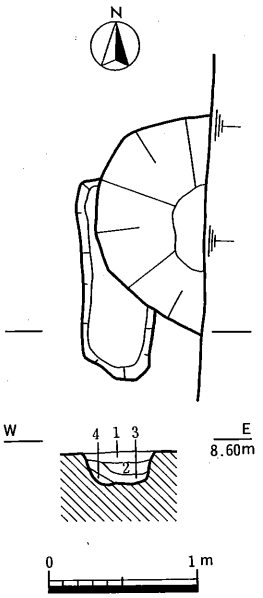
ＳＫ13（第310図）　Ｅ－１区東端で検出された土坑で，北半部をＳＫ12に切られる。検出部分で長軸1.4m，短軸0.5mを測る。主軸の方向は区画溝の方向とほぼ一致する。平面形は整った隅丸長方形，断面形は箱形を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトで，４層に細分された。最下位層はベースブロックを含む。

遺物は，土師質土器の細片が数点出土したのみである。

ＳＫ15（第311図）　Ｅ－２区北西部で検出された土坑で，ＳＤ16を切っている。掘り方の平面形はいびつな台形状を呈し，長軸1.1m，短軸0.8m，深さ0.2mを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトで，４層に細分された。

遺物は，土師質土器皿や羽釜等の細片が少量出土したのみである。

ＳＫ16（第312図）　Ｅ－２区北西部で検出された土坑



第310図　Ｅ地区第１面ＳＫ13平・断面図（1/50）

である。掘り方の平面形はややいびつな方形を呈し，一辺1.0m，深さ0.2mを測る。断面形は緩やかに掘り込まれ，擂鉢状を呈する。埋土は灰褐色形粘質シルトが主体を占め，埋土中位にベース砂層の流れ込みが認められた。

遺物は，土師質土器皿（1117），瓦器埦（1118），常滑焼甕（1119）の他，土師質土器羽釜等の細片が少量出土した。1118は和泉型である。1119は大甕の体部と思われ，外面に押印が認められる。

ＳＫ17　Ｅ－２区北部で検出された土坑である。掘り方の平面形は細長い溝状を呈し，長軸0.8m，深さ0.05mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰褐色粘質シルトの単層であった。

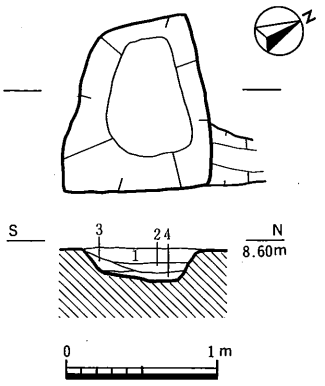
遺物は全く出土していない。

ＳＫ18　Ｅ－２区中央部で検出された土坑で，ＳＸ06を切っている。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.8m，深さ0.3mを測る。断面形は概ね逆台形を呈し，僅かに二段掘りとなる。埋土は灰褐色シルトの単層であった。

遺物は，土師質土器や瓦器の細片が少量出土したのみである。

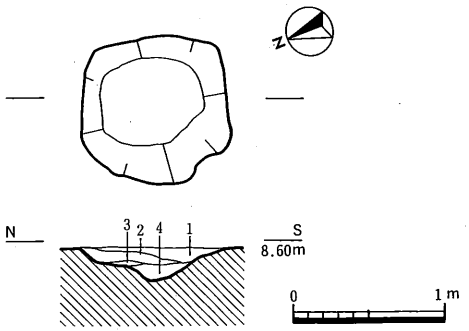
ＳＫ19（第313図）　Ｅ－２区中央部で検出された土坑である。平面形は長円形を呈し，長径1.9m，短径1.6m，深さ0.25mを測る。埋土は灰褐色系粘質シルトで，４層に細分された。中・下位層はベースブロックを含んでいることから，人為的に埋められた可能性が考えられる。

遺物は，土師質土器土鍋（1120）の他，土師質土器皿・甕・坏，和泉型瓦器埦等の細片が少量出土した。

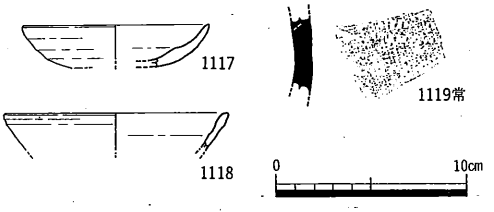


1．淡灰褐色粘質シルト
2．灰褐色粘質シルト
3．灰褐色粘質シルト（ベースブロック含む）
4．暗灰褐色粘質シルト

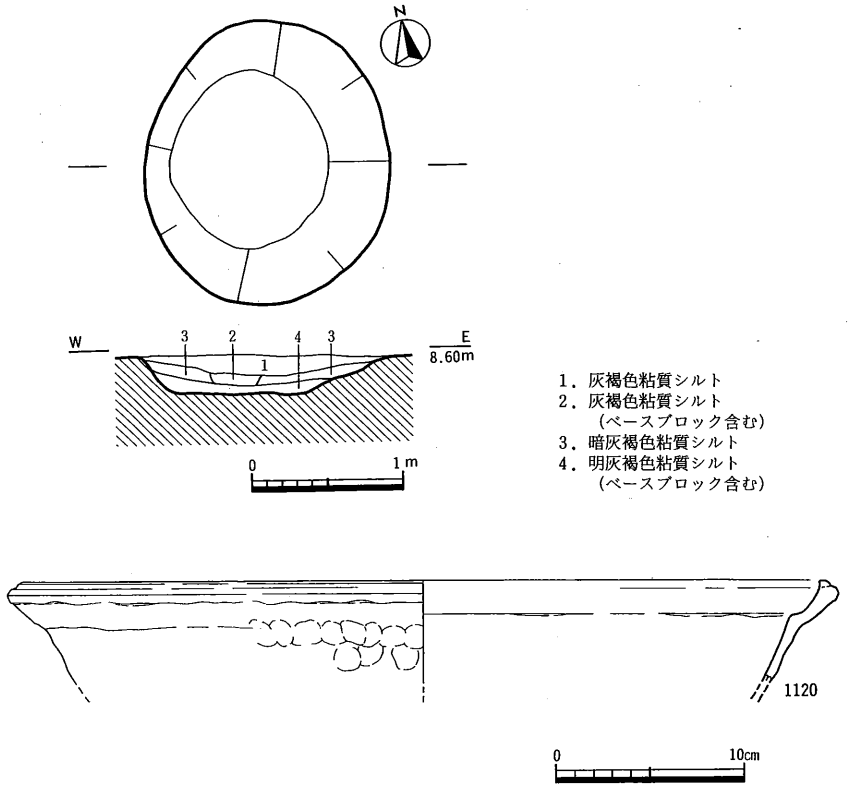
第311図　Ｅ地区第１面ＳＫ15平・断面図（1/50）



1．淡灰褐色粘質シルト（ベースブロック含む）
2．淡灰褐色粘質シルト
3．明黄褐色細砂
4．淡灰褐色粘質シルト（炭化物含む）



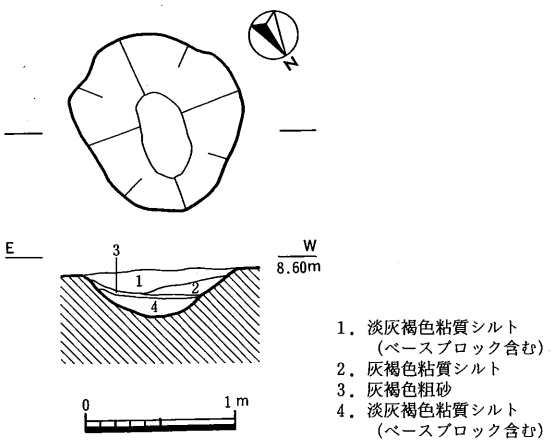
第312図　Ｅ地区第１面ＳＫ16平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）



第313図　Ｅ地区第１面ＳＫ19平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

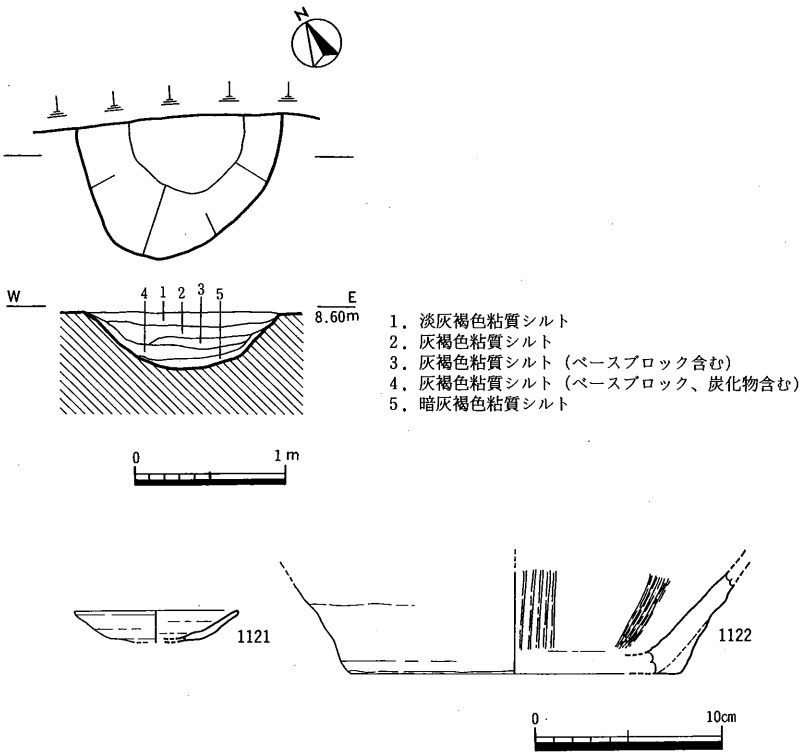
ＳＫ20（第314図）　Ｅ－２区西部で検出された土坑である。平面形はややいびつな楕円形を呈し，長径1.2m，短径1.1m，深さ0.3mを測る。断面形は緩やかに掘り込まれ，擂鉢状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルト及び粗砂からなり，最上位及び最下位層はベースブロックを含んでいることから，人為的に埋められた可能性がある。

遺物は，土師質土器土鍋等の細片が少量出土したのみである。



第314図　Ｅ地区第１面ＳＫ20平・断面図（1/50）

ＳＫ21（第315図）　Ｅ－２区東部で検出された土坑である。北半は大きく攪乱され，南半部のみ調査された。現状で掘り方の平面形は楕円形を呈し，長径1.4m，深さ0.4mを測る。断面形は緩やかに掘り込まれ，擂鉢状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトで，５層に細分された。中位層は炭化物やベースブロックを含んでおり，人為的に埋められた可能性がある。



第315図　Ｅ地区第１面ＳＫ21平・断面図（1/50），出土遺物（1/4）

遺物は，土師質土器皿（1121），同擂鉢（1122）の他，備前焼・土師質土器羽釜等の細片が少量出土した。1121は底部ヘラ切りである。

ＳＫ23　Ｅ－２区東南端で検出された土坑で，南半部は調査区外に延びる。掘り方の平面形は整った方形を呈し，長辺1.2m，短辺0.9m以上，深さ0.05mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，土師質土器皿や中国産青磁碗等の細片が少量出土したのみである。

５）柱穴

ＳＰ84（第316図）　Ｅ－１区西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.4m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（1124）が出土した。底部はヘラ切りである。

ＳＰ85（第316図）　Ｅ－１区西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.15mを測る。

遺物は，土師質土器皿（1123・1125）が出土した。1123は底部ヘラ切りである。

ＳＰ86（第316図）　Ｅ－１区西部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器皿（1127）が出土した。底部はヘラ切りである。

ＳＰ87（第316図）　Ｅ－１区西南部で検出された柱穴で，別の柱穴に切られる。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.7m，深さ0.2mを測る。

遺物は，中国産染付碗（1139）が出土した。外面に草花文を描く端反りの碗で，小野氏の分類のＢ群に属する（註13）。

ＳＰ88（第316図）　Ｅ－１区西南部で検出された柱穴で，ＳＤ04を切っている。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.15mを測る。

遺物は，土師質土器埦（1134）が出土した。

ＳＰ89（第316図）　Ｅ－１区西南部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.25m，深さ0.1mを測る。

遺物は，土師質土器坏（1131）が出土した。

ＳＰ90（第316図）　Ｅ－１区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.4m，深さ0.15mを測る。

遺物は，土師質土器皿（1126）と和泉型瓦器埦（1135・1136）が出土した。1126は底部ヘラ切りである。

ＳＰ91（第316図）　Ｅ－１区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.1mを測る。

遺物は，東播系こね鉢（1142）が出土した。

ＳＰ92（第316図）　Ｅ－１区北部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は長円形を呈し，長径0.35m，深さ0.15mを測る。

遺物は，土師質土器皿（1128）が出土した。底部ヘラ切りである。

ＳＰ93（第316図）　Ｅ－１区北東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.25m，深さ0.15mを測る。

遺物は，土師質土器坏（1130）が出土した。

ＳＰ94（第316図）　Ｅ－１区北東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

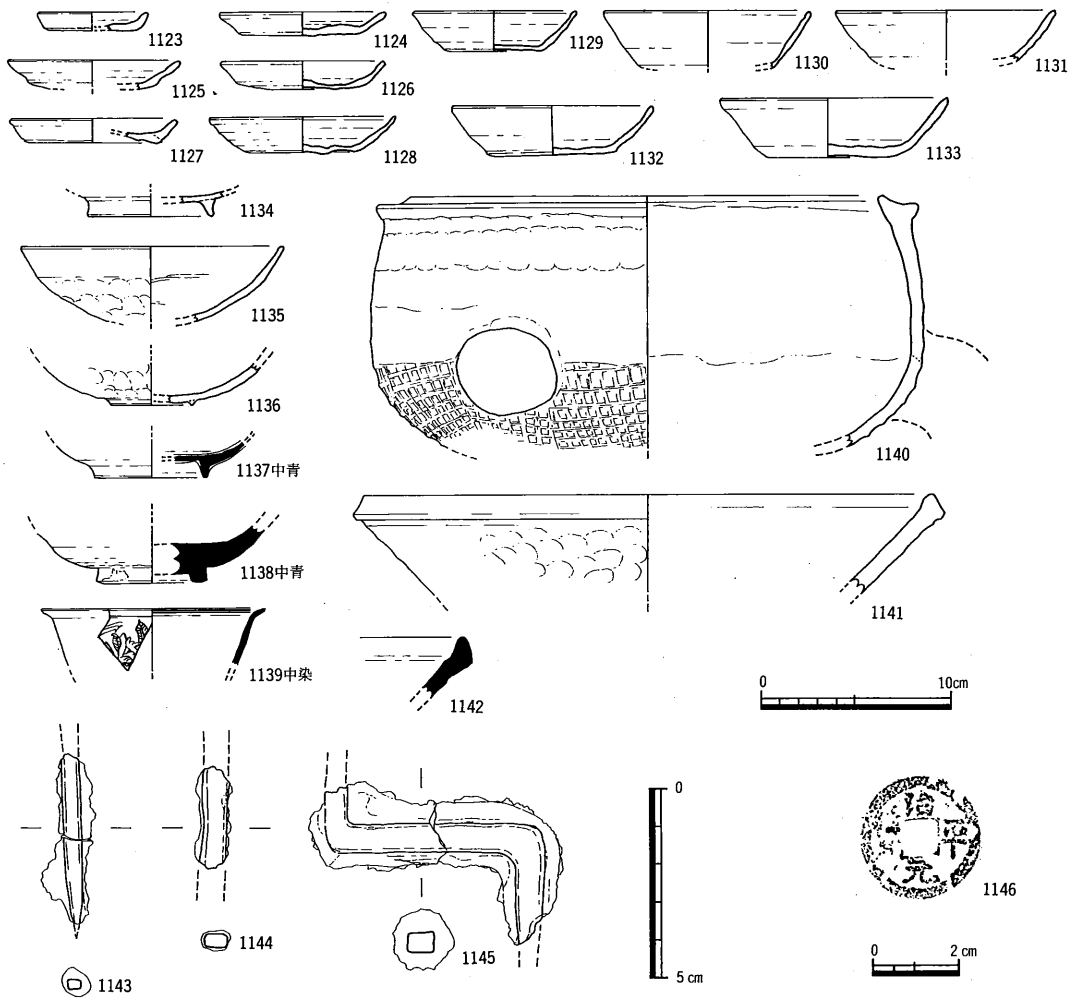
遺物は，銅銭（1146）が出土した。1064年初鋳の治平元寶である。

ＳＰ95（第316図）　Ｅ－１区北東端部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.3m，深さ0.25mを測る。

遺物は，土師質土器皿（1129）が出土した。底部回転糸切りである。

ＳＰ96（第316図）　Ｅ－１区北東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

遺物は，土師質土器羽釜（1140）が出土した。比較的大きな破片で拳大の礫２個と共に，柱の根固め用に据えられていた。



第316図　Ｅ地区第１面柱穴出土遺物（1/4，1/2，2/3）

ＳＰ97（第316図）　Ｅ－１区北東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.2m，深さ0.2mを測る。

遺物は，中国産青磁碗（1138）が出土した。高台は低く削り出，高台上位から無釉となる。龍泉窯系の碗である。

ＳＰ99（第316図）　Ｅ－１区東端で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.7m，深さ0.25mを測る。

遺物は，土師質土器坏（1132）が出土した。底部はヘラ切り後ナデを施す。

ＳＰ100（第316図）　Ｅ－２区北部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.45m，深さ0.2mを測る。

遺物は，鉄釘（1143）が出土した。頭部及び先端部を欠損する角釘である。

ＳＰ101（第316図）　Ｅ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈

し，径0.25m，深さ0.15mを測る。

遺物は，土師質土器こね鉢（1141）が出土した。

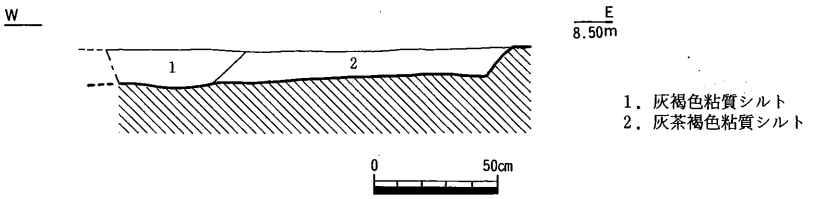
ＳＰ102（第316図）　Ｅ－２区中央部で検出された柱穴で北端部を別の柱穴に切られる。掘り方の平面形は楕円形を呈し，径0.5m，深さ0.25mを測る。

遺物は，鎹（1145）が出土した。

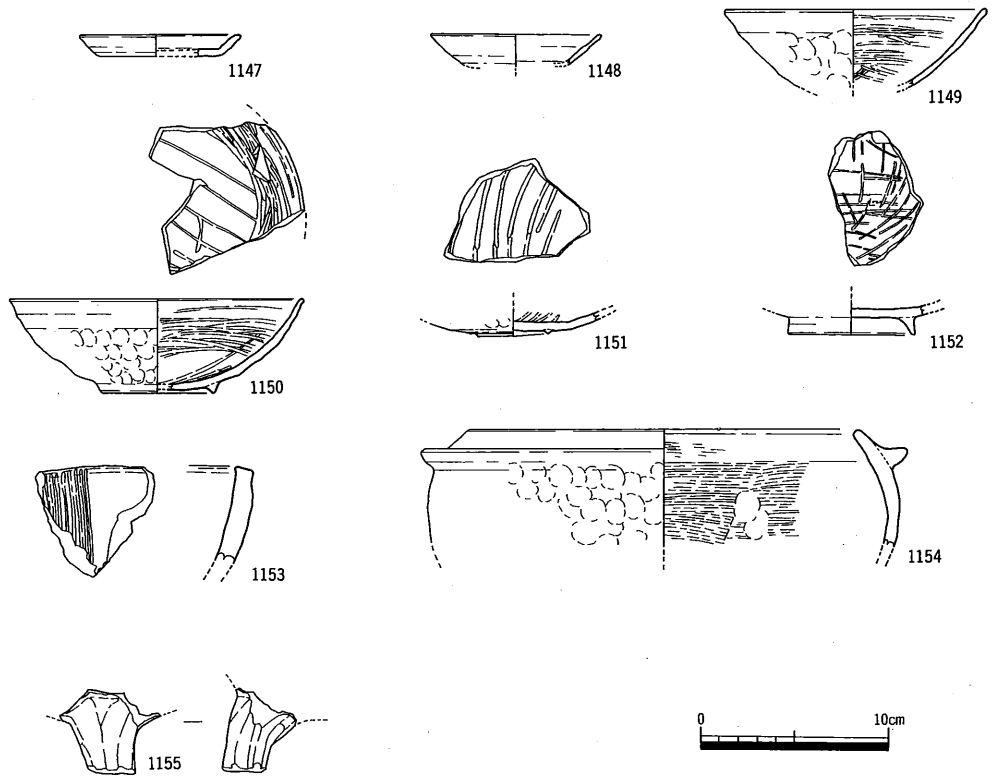
ＳＰ103（第316図）　Ｅ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.25m，深さ0.2mを測る。

遺物は，鉄釘（1144）が出土した。頭部及び先端部を欠損する角釘である。

ＳＰ104（第316図）　Ｅ－２区中央部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈



第317図　Ｅ地区第１面ＳＤ01断面図（1/30）



第318図　Ｅ地区第１面ＳＤ01出土遺物（1/4）

し，径0.3m，深さ0.1mを測る。

遺物は，土師質土器坏（1133）が出土した。底部はヘラ切りである。

ＳＰ105（第316図）　Ｅ－２区東部で検出された柱穴である。掘り方の平面形は円形を呈し，径0.15m，深さ0.1mを測る。

遺物は，中国産青磁小坏（1137）が出土した。太宰府の分類の龍泉窯系坏Ⅲ類に属する（註2）。

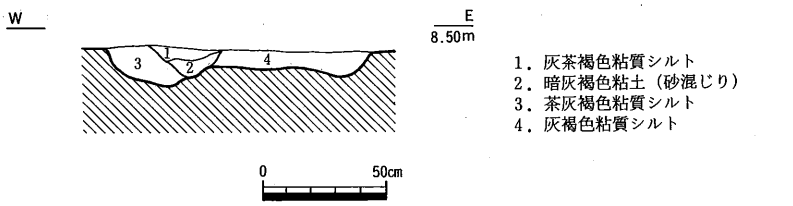
6）溝

ＳＤ01（第317・318図）　Ｅ－１区西端を直線的に南北に延びる溝である。西肩は調査区外に延びている。北端部でＳＥ01に切られる。現状で幅1.5m以上，深さ0.15m，主軸の方位Ｎ－14°－Ｅを測る。断面形は浅い逆台形を呈し，底面はほぼ平坦となる。埋土は主に灰褐色系粘質シルトが堆積し，２層に細分された。

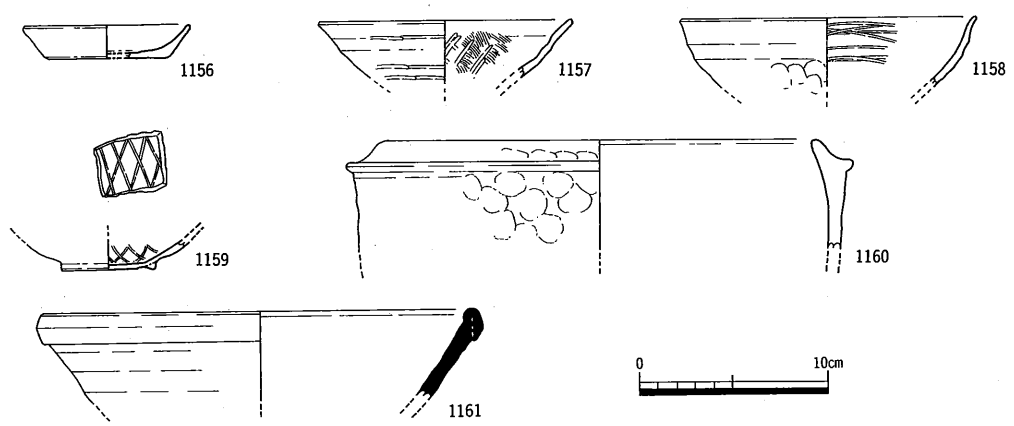
遺物は，土師質土器皿（1147・1148），同擂鉢（1153），同羽釜（1154），同火舎（1155），和泉型瓦器埦（1149～1151），西村産瓦質土器埦（1152）の他，東播系の甕，亀山焼の甕，備前焼等の細片が出土した。

この溝の時期は，瓦器埦に若干の時期差が認められるものの，ほぼ13世紀後半頃と考えられる。

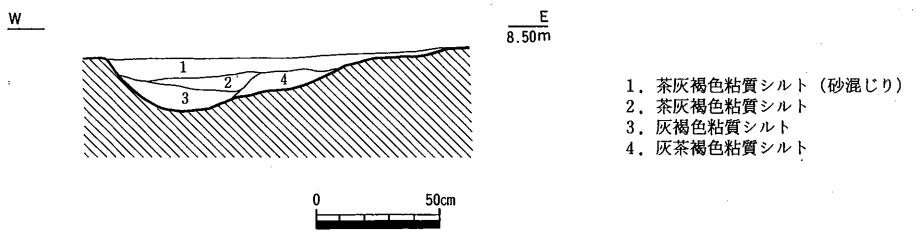
ＳＤ02（第319・320図）　Ｅ－２区西半部で，ＳＤ03の西に接してゆるく孤を描きながら南北



第319図　Ｅ地区第１面ＳＤ02断面図（1/30）



第320図　Ｅ地区第１面ＳＤ02出土遺物（1/4）



第321図　E地区第1面SD03断面図（1/30）

に延びる溝で，南端部でSE04に，北端部でSE01とSD03に切られる。幅1.0m，深さ0.2mを測る。断面形は概ね皿状を呈し，東肩部に幅0.5m程のテラスを有する。埋土は主に灰褐色系粘質シルトの堆積が認められた。

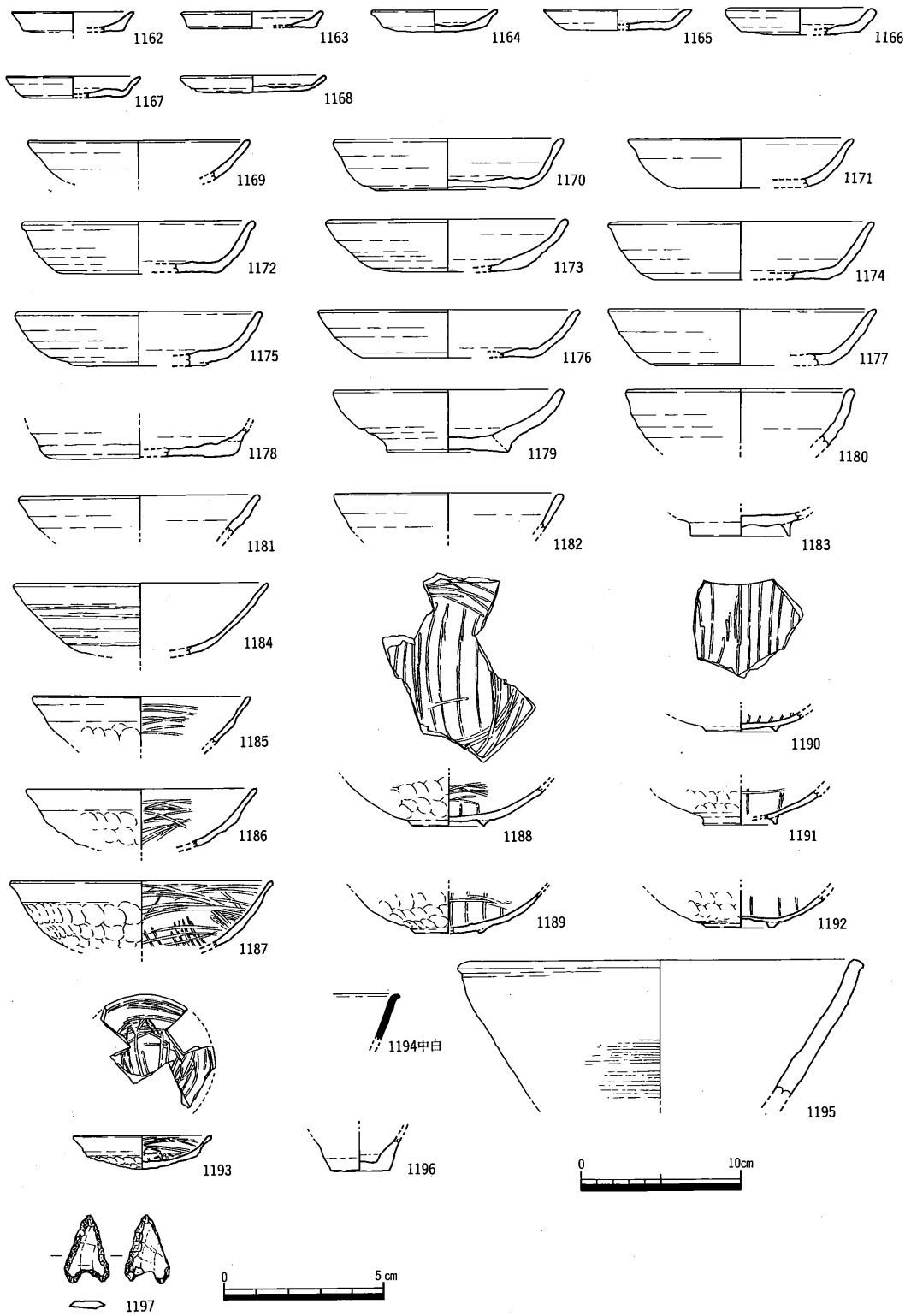
遺物は，土師質土器皿（1156），同埦（1157），同羽釜（1160），和泉型瓦器埦（1158・1159），東播系こね鉢（1161）の他，土師質土器坏・土鍋，東播系の甕等の細片が出土した。1156は底部ヘラ切りである。1161は口縁部の肥厚が大きく玉縁状を呈するもので，神出窯での分類のD類に属する（註22）。

出土遺物から本溝は，13世紀後半を中心とする時期と考えられる。

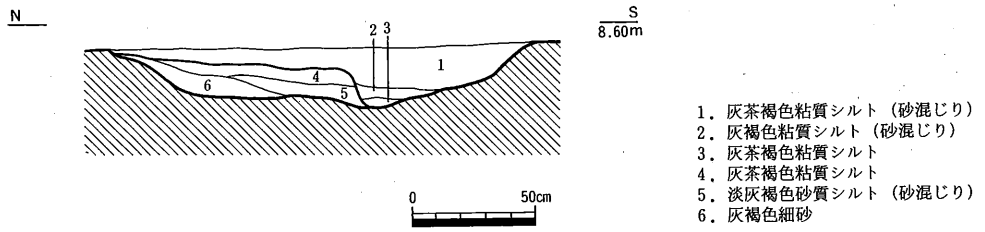
SD03（第321・322図）　E－1区SD02の東際を南北に延び，E地区北部屋敷地の西側縁部を区画する溝である。南端はL字状に屈曲してSD04に接続する。またその屈曲部付近は，SE04によって大きく攪乱を受けている。幅1.3m，深さ0.2m，主軸の方向N－9°－Eを測る。断面形は概ね皿状を呈し，西肩の掘り込みは東肩に比べてやや直に近く掘り込まれている。埋土は主に灰褐色粘質シルトが堆積し，4層に細分された。

遺物は，土師質土器皿（1162～1168），同坏（1169～1179），同埦（1180～1183），西村産瓦質土器埦（1184），和泉型瓦器埦（1185～1192），同皿（1193），中国産白磁碗（1194），瓦質土器こね鉢（1195），弥生土器底部（1196），サヌカイト製の凹基式石鏃（1197）の他，土師質土器羽釜・土鍋，東播系の甕等の細片が出土した。1162～1165・1167・1168・1172・1178は底部ヘラ切りである。1166は底部回転糸切り，1170・1174・1176・1179は底部静止糸切りである。瓦器は埦8点，皿1点を図示した。いずれも和泉型である。瓦器の細片を含めた組成の正確な数値は把握していないが，一見して圧倒的に埦が多い点は注意される。1194は口縁部が外反する白磁碗で，太宰府の分類の碗V類に属する（註2）。1197は両側縁側より緻密な調整剝離を施しているが，正面・裏面とも素材の剝離面を残しており，未製品の可能性がある。

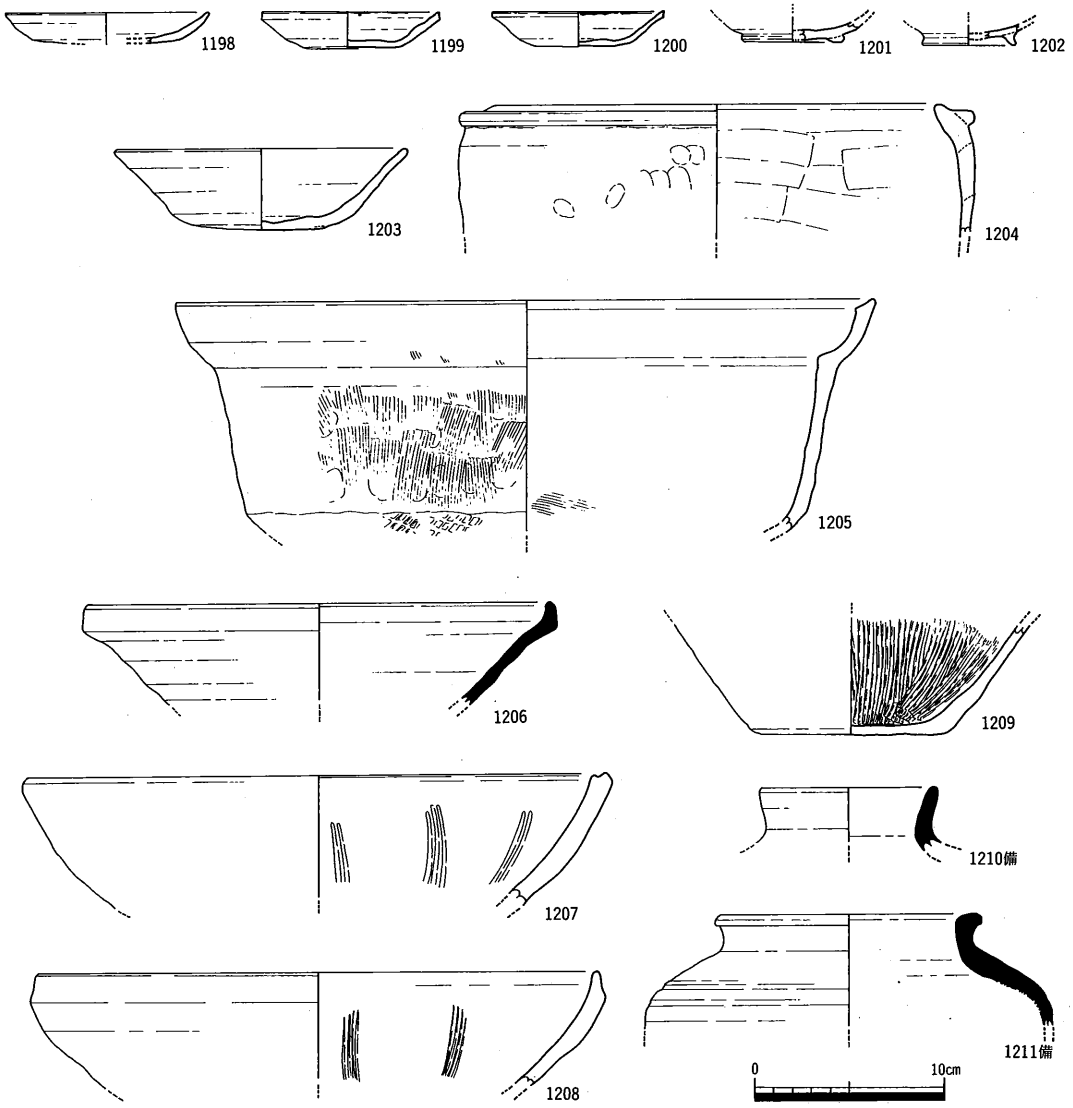
SD04（第323・324図）　E－1・2区をSD05と平行して東西に延び，E地区北部屋敷地の南側縁部を区画する溝である。東端はL字状に屈曲してSD06に接続し，西端は同様にSD03に接続する。幅0.9m，深さ0.15m，主軸の方向E－7°－Sを測る。掘り方の断面形は概ね皿状を呈し，埋土は主として灰褐色系粘質シルトからなり，最下位に灰褐色細砂が堆積する。なお溝南



第322図　E地区第1面SD03出土遺物（1/4，1/2）



第323図　Ｅ地区第１面ＳＤ04断面図（1/30）



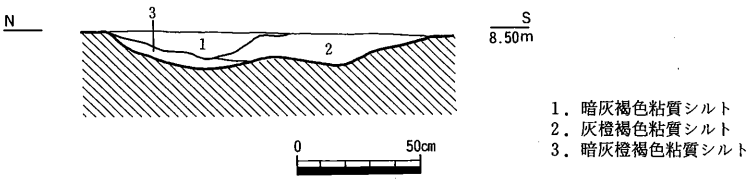
第324図　Ｅ地区第１面ＳＤ04出土遺物（1/4）

半を中心とした改修が認められ，上部溝（1～3層）と下部溝（4～6層）に分けられるが，検出状況から連続して使用された遺構と考えられる。

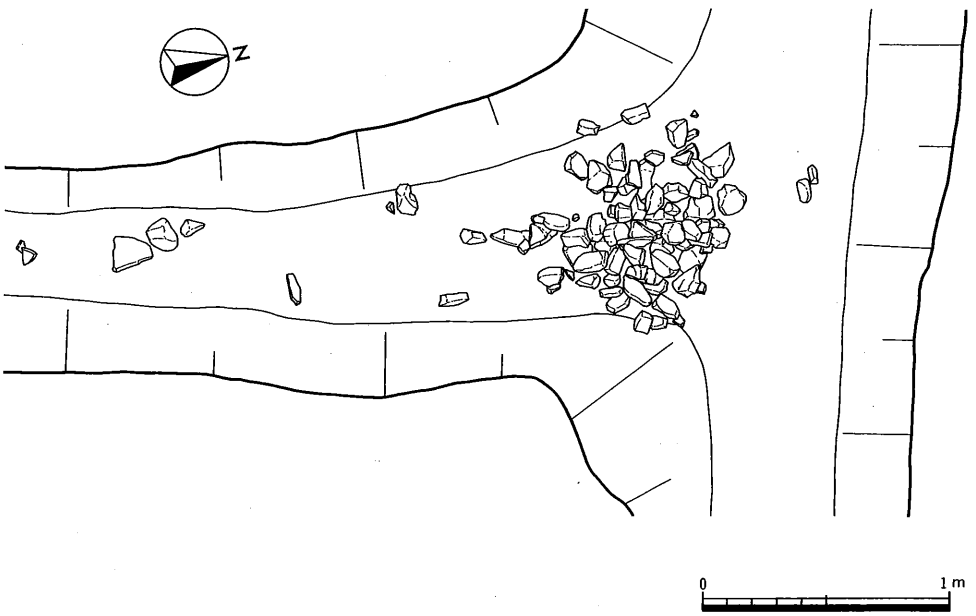
遺物は，土師質土器皿（1198～1200），同埦（1201～1202），同坏（1203），同羽釜（1204），同土鍋（1205），同擂鉢（1207・1209），東播系こね鉢（1206），瓦質土器擂鉢（1208），備前焼壺（1210・1211）の他，西村産の瓦質土器埦，和泉型瓦器埦等の細片が出土した。1199・1200は口縁部に煤が付着しており，灯明皿として使用されている。1203は底部ヘラ切りである。1206は口縁部を大きく肥厚させ玉縁状を呈するもので，神出窯の分類のD類に属する（註22）。1210・1211は備前焼第Ⅴ期に属し（註3・14），時期は16世紀頃であろう。

出土遺物及び周辺の遺構配置より，この溝の時期は13世紀後半から16世紀前半頃と推定される。

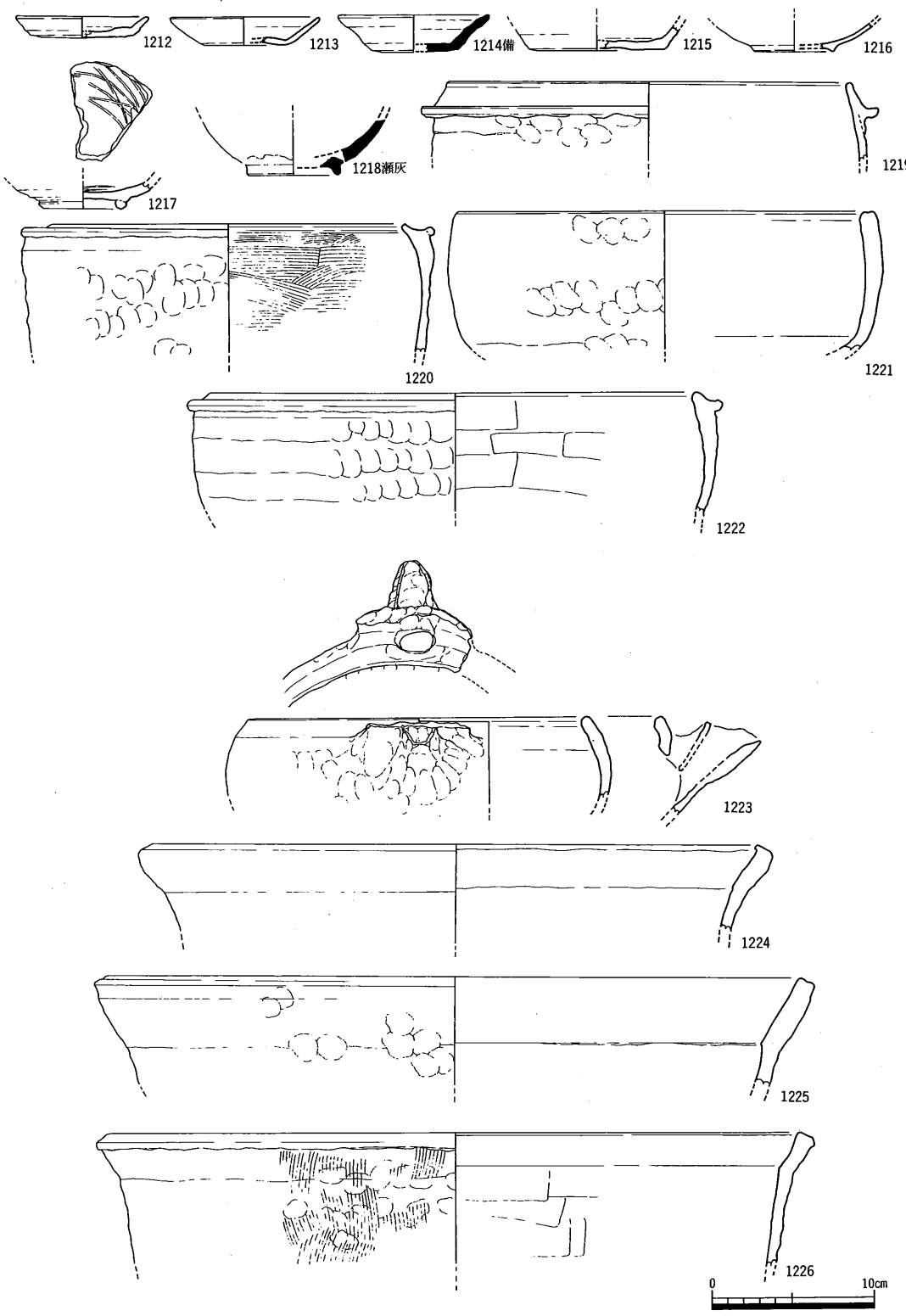
ＳＤ05（第325～330図，図版75）　Ｅ－１・２区で検出された溝で，Ｅ地区南部屋敷地の北側縁部を区画する区画溝である。西端はＳＥ03によって大きく攪乱されているものの，二股に分か



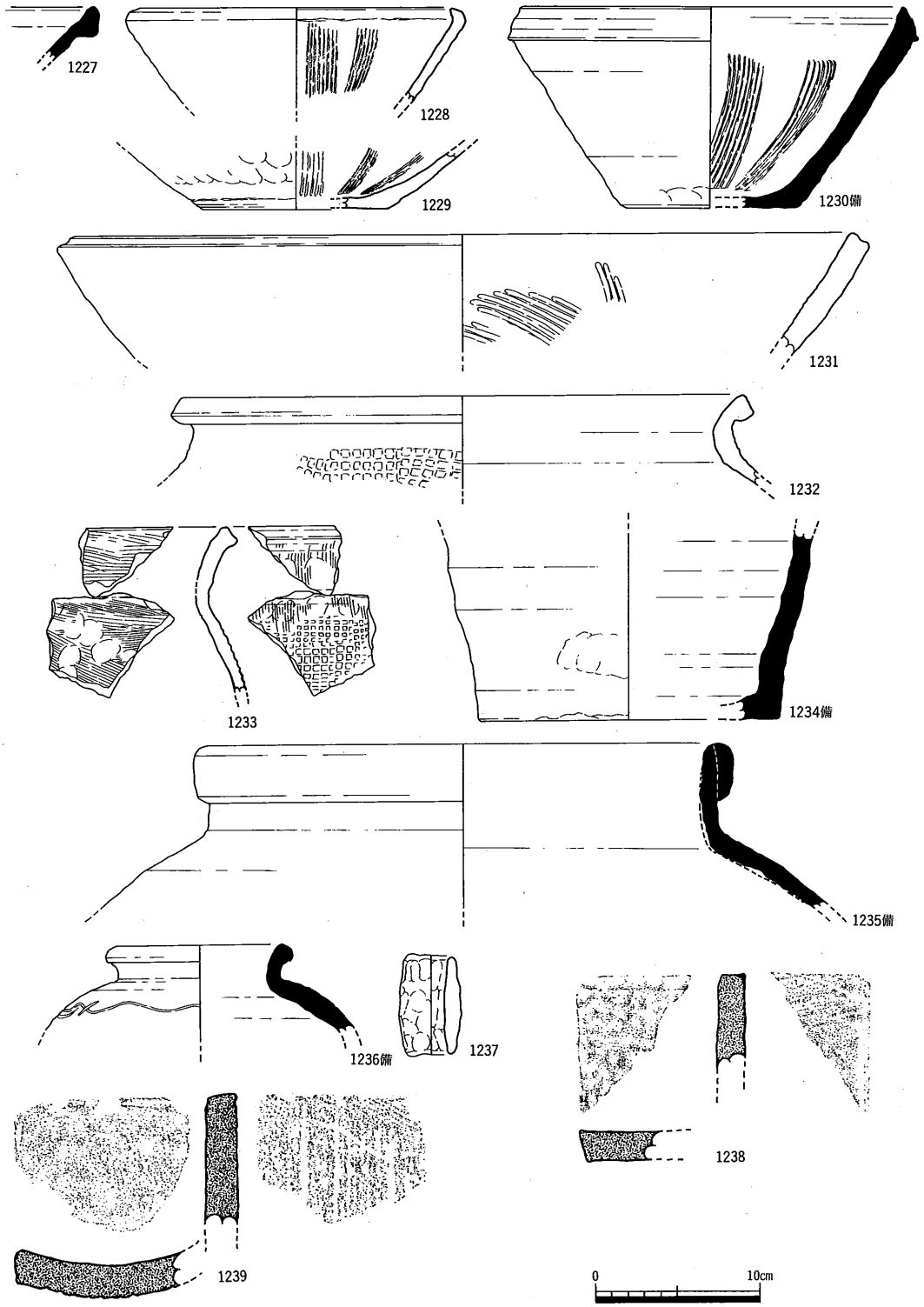
第325図　Ｅ地区第１面ＳＤ05断面図（1/30）



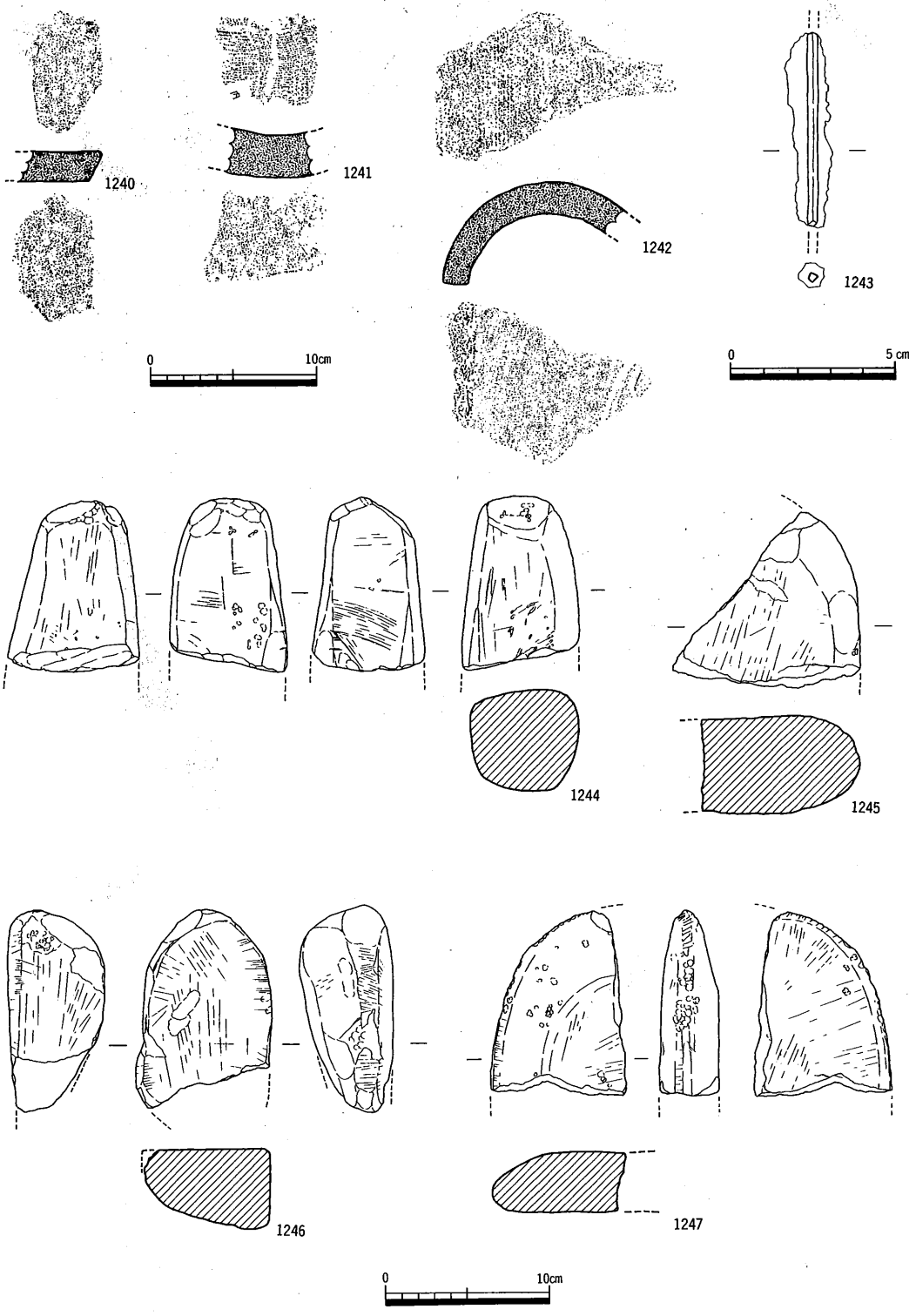
第326図　Ｅ地区第１面ＳＤ05集石遺構検出状況（1/30）



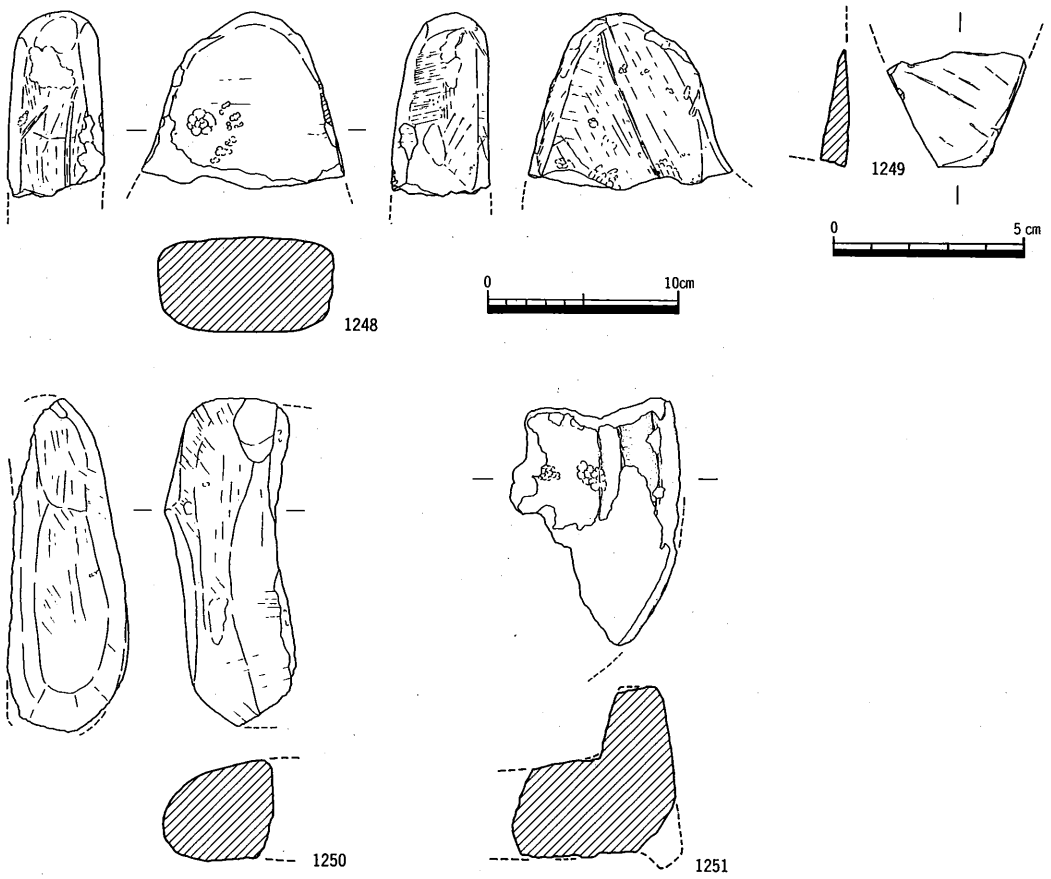
第327図　Ｅ地区第１面ＳＤ05出土遺物〔１〕(1/4)



第328図　Ｅ地区第１面ＳＤ05出土遺物〔２〕(1/4)



第329図　Ｅ地区第１面ＳＤ05出土遺物〔３〕(1/4, 1/2)

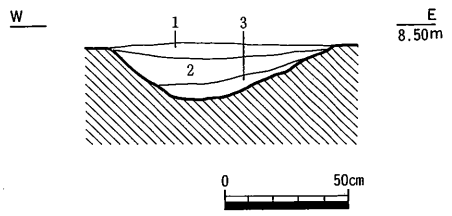


第330図　E地区第1面SD05出土遺物〔4〕(1/4, 1/2)

れて途切れるようである。また東端はL字状に屈曲してSD08が南に延びる。幅0.8m，深さ0.2m，主軸の方向E－7°－Sを測る。断面形は概ね皿状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトが主体を占め，埋土より溝北半を中心とした改修が認められた。なおSD13との合流部では，礫の集石遺構が検出された。集石遺構は20～40cm位の礫70個程からなり，SD13側へ散乱した状況がうかがわれた。なおこれらの礫の中には土器細片や砥石などの遺物が含まれていた。

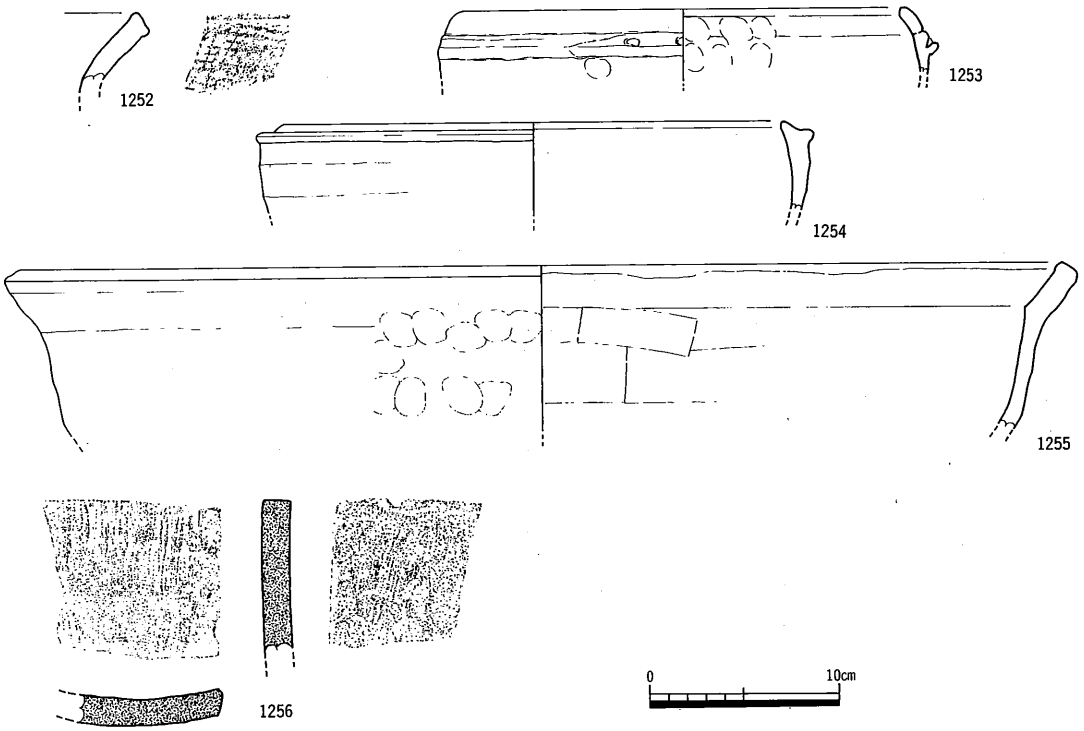
遺物は，土師質土器皿（1212・1213），同坏（1215），同羽釜（1219～1222），同土鍋（1223～1226），同擂鉢（1228・1231），同甕（1232），備前焼坏（1214），同擂鉢（1230），同底部（1234），同甕（1235），同壺（1236），和泉型瓦器埦（1216），西村産瓦質土器埦（1217），瀬戸・美濃灰釉碗（1218），東播系こね鉢（1227），瓦質土器擂鉢（1229），亀山焼甕（1233），瓦質土器土錘（1237），瓦類（1238～1242），鉄釘（1243），石製品（1244～1251）の他，東播系の甕，中国産青磁碗等の細片が出土した。1221は口縁端面を凹線状に凹ませるもので，羽釜の鍔が退化したものと考えられる。1223は一対の外耳を有する土鍋で，一方の外耳の下方に注口部を付けたものである。1214・1230・1236は備前焼第IV期後半（註3・14），1235は同第IV期前半に属し，時期は前半が15世紀頃，後半が14世紀頃である。1233はの亀山焼第四群に属し，時期は15世紀後半から16

世紀代である(註14)。1218は付高台の丸碗で，高台周辺を露胎とする。時期は16世紀前半頃であろう。瓦は５点を図示した。1238～1240は表面に炭素を吸着させたいわゆる瓦質の平瓦である。いずれも凸面には離れ砂が付着する。1241・1242は須恵質の丸瓦で，凹面には布目痕が明瞭に残る。1243は角釘である。頭部及び先端部を欠損する。1244は細粒砂岩製の砥石である。現状で５面を使用する。各面はよく使い込まれており，側面には溝状の擦痕が認められる。また破断面を含めて一部火熱を受けており，黒色化している。1245は中粒砂岩製の砥石である。現状で１面のみ使用している。これも火熱を受けており，煤が厚く付着する。1246は細粒砂岩製の砥石である。現状で４面を使用する。側面及び正面は面取りされ，側面には製作時の整形痕が認められる。また裏面は自然面を残している。1247は細～中粒砂岩製の砥石である。２面を使用しており，また側面も使用しようとしたのか，一部擦痕が認められる。また火熱を受けており，黒色化している。1248は細粒砂岩製の砥石である。現状で４面を使用する。各面ともよく使い込まれており，側面には溝状の擦痕が認め

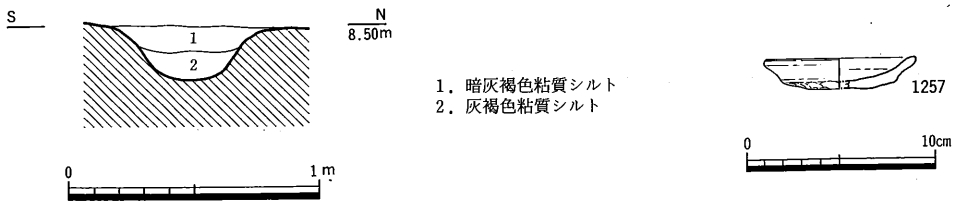


1．灰茶褐色粘質シルト（砂混じり）
2．茶褐色粘質シルト（砂混じり）
3．暗灰茶褐色粘質シルト（砂混じり）

第331図　E地区第１面ＳＤ06断面図（1/30）



第332図　E地区第１面ＳＤ06出土遺物（1/4）

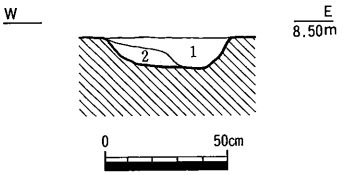


第333図　E地区第1面SD07断面図（1/30），出土遺物（1/4）

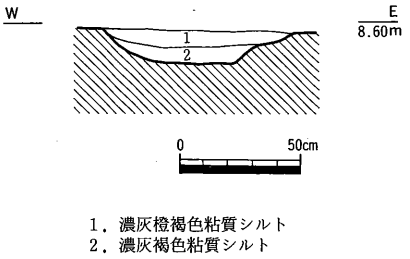
られる。1249は石材不明。小片のため，使用面は1面のみ確認される。1250は細～中粒砂岩製の砥石である。現状で4面を使用する。これも火熱を被っており，破断面を含めて全面が黒色化している。石質から1249は仕上げ砥，それ以外は全て荒砥と考えられる。1251は塩基性角礫凝灰岩製の上臼である。小片のため，条溝等は不明。底面外周は突帯状に肥厚する。

出土遺物及び周辺の遺構配置よりこの溝の時期は，13世紀後半から16世紀前半頃と推定される。

SD06（第331・332図）　E－2区中央部を直線的に南北に延びる溝で，南端はL字状に屈曲してSD04に接続し，また調査区北端近くでSD07が分岐して西に延びる。配置形態から，E区北部屋敷地の東側縁部を区画する区画溝となる。幅0.9m，深さ0.25m，主軸の方向N－32°－Eを測る。掘り方の断面形はU字状を呈し，埋土は灰褐色系粘質シルトが堆積し，3層に細分された。



第334図　E地区第1面SD08断面図（1/30）



第335図　E地区第1面SD09断面図（1/30）

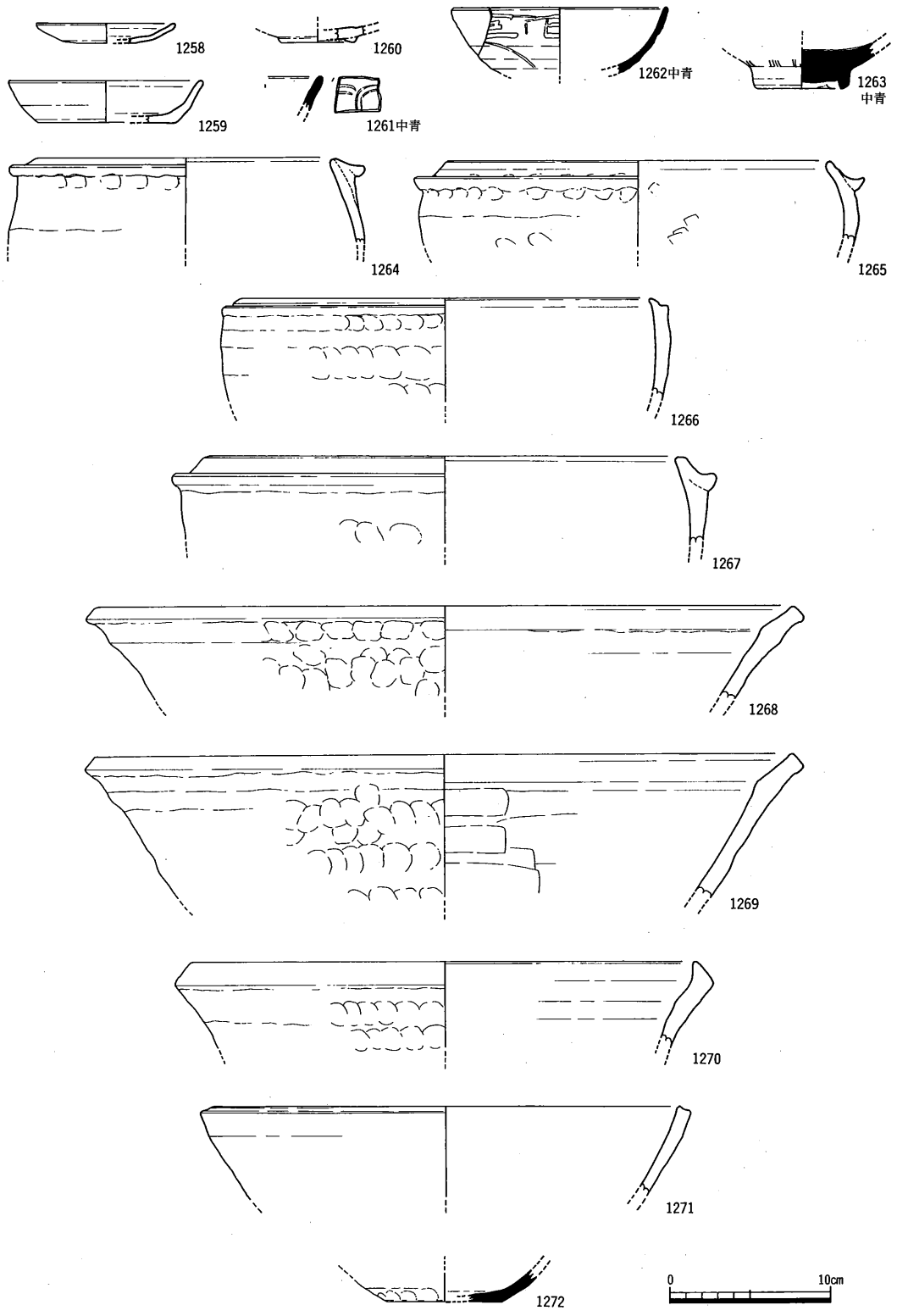
遺物は，瓦質土器甕（1252），同釜（1253），土師質土器羽釜（1254），同土鍋（1255），瓦質の平瓦（1256）が出土した。1252は口縁部外面に格子目叩きを施しており，亀山焼の可能性が考えられる。

出土遺物及び周辺の遺構配置より，この溝の時期は13世紀後半から16世紀前半頃と考えられる。

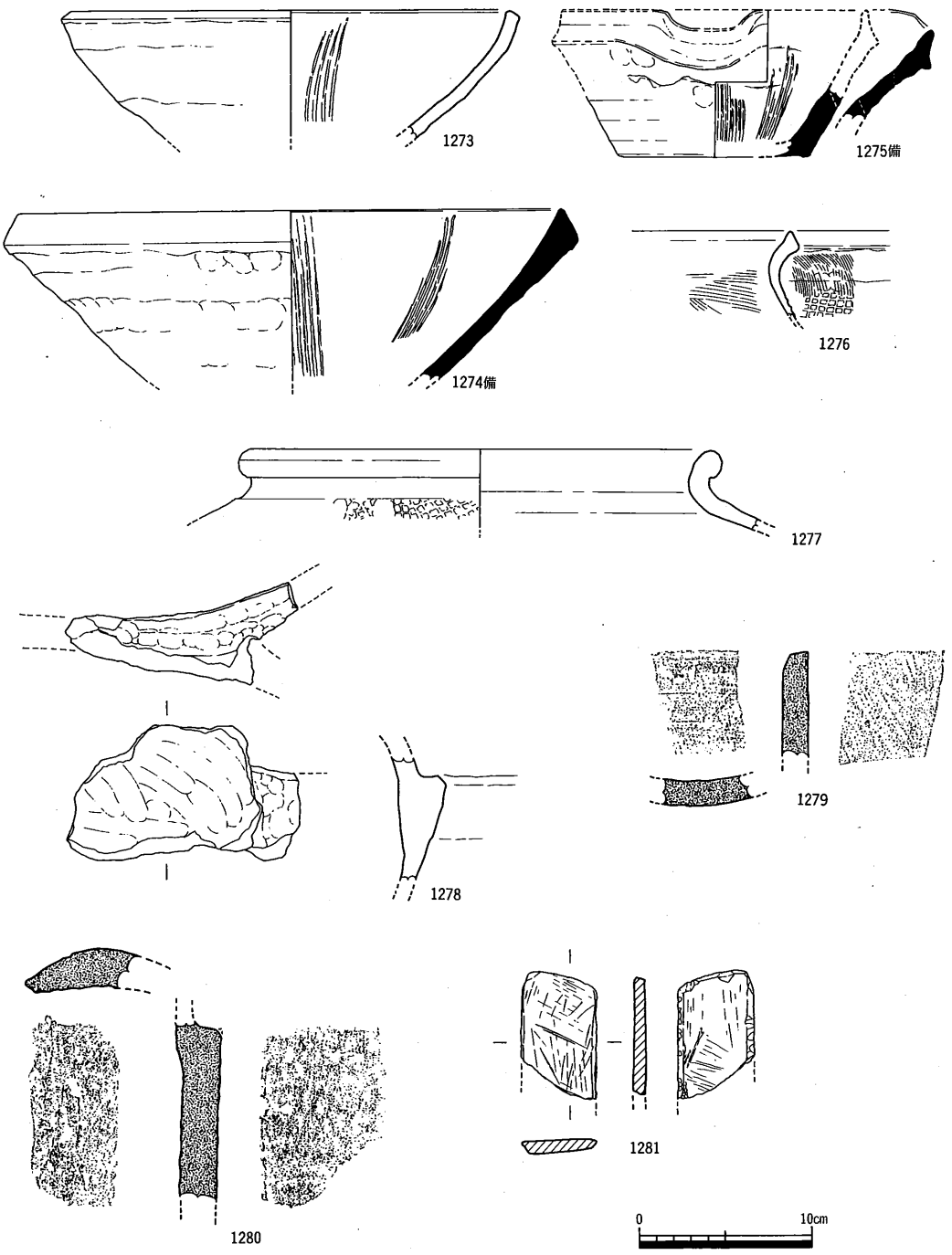
SD07（第333図）　E－2区北部で検出された溝で，SD06より派生して西へ延びる。検出長は3.3mと短いが，E区北部屋敷地の一部を区画する溝であろう。なお，SD06はさらに北へ延びるため，SD07北側に別の屋敷地が広がる可能性がある。幅0.6m，深さ0.2m，主軸の方向E－31°－Sを測る。掘り方の断面形は整った逆台形状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルト及び灰褐色粘質シルトからなる。

遺物は，和泉型瓦器皿（1257）が出土した。

SD06と明確な切り合い関係を有しないことから，この溝はSD06と併存していたものと考えられる。



第336図　Ｅ地区第１面ＳＤ09出土遺物〔１〕(1/4)



第337図　E地区第1面SD09出土遺物〔2〕(1/4)

ＳＤ08（第334図）　Ｅ－２区南部で検出された溝で，北端はやや鋭角に屈曲してＳＤ05に接続する。Ｅ区南部屋敷地の東側縁部を区画する溝である。掘り方の断面形は整った箱状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルト及び暗灰褐色粘質シルトよりなる。

遺物は，土師質土器等の細片が少量出土したのみである。出土遺物から明確な時期は判断できないが，ＳＤ05と切り合い関係を有しないことから，併存していたものと考えられる。

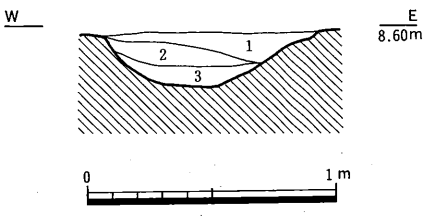
ＳＤ09（第335～337図）　Ｅ－２区東部で検出された溝で，北端部をＳＤ19に切られる。幅0.8m，深さ0.2m，主軸の方向Ｎ－34°－Ｅを測る。掘り方の断面形は皿状を呈し，埋土は濃灰橙褐色粘質シルト及び濃灰褐色粘質シルトからなる。

遺物は，土師質土器皿（1258），同坏（1259），同埦（1260），同羽釜（1264～1267），同土鍋（1268～1270），同擂鉢（1273），同甕（1277），同竈（1278），中国産青磁碗（1261～1263），瓦質土器こね鉢（1271），東播系こね鉢（1272），備前焼擂鉢（1274・1275），亀山焼甕（1276），平瓦（1279）・丸瓦（1280），ホルンフェルス製と考えられる砥石（1281）が出土した。1261は口縁部が輪花状になるもので，太宰府の分類の龍泉窯系碗Ⅰ－４・ｂ類に属する（註２）。1262は口縁部外面に雷文帯を施すもので，上田氏の分類のＣ－Ⅱ類に属する（註８）。1263は体部外面に蓮弁文を有するもので，太宰府の分類の龍泉窯系碗Ⅰ－５類に属する。1274は備前焼第Ⅳ期前半，1275は同第Ⅳ期後半に属し（註３・14），時期は前者が14世紀代，後者が15世紀代であろう。1276は亀山焼第四群に属し（註14），時期は15世紀後半から16世紀代であろう。1278は炊き口部の上部の破片である。裏面及び正面鍔部に煤が付着する。1279は瓦質の平瓦で，凸面に離れ砂が付着する。1280は瓦質の玉縁付丸瓦である。1281は現状で２面を使用しており，側面には製作時の整形痕と思われる直線状の切断痕が認められる。石質から仕上げ砥と考えられる。

出土遺物及び周辺の遺構配置より，この溝の時期は15世紀から16世紀前半頃と考えられる。

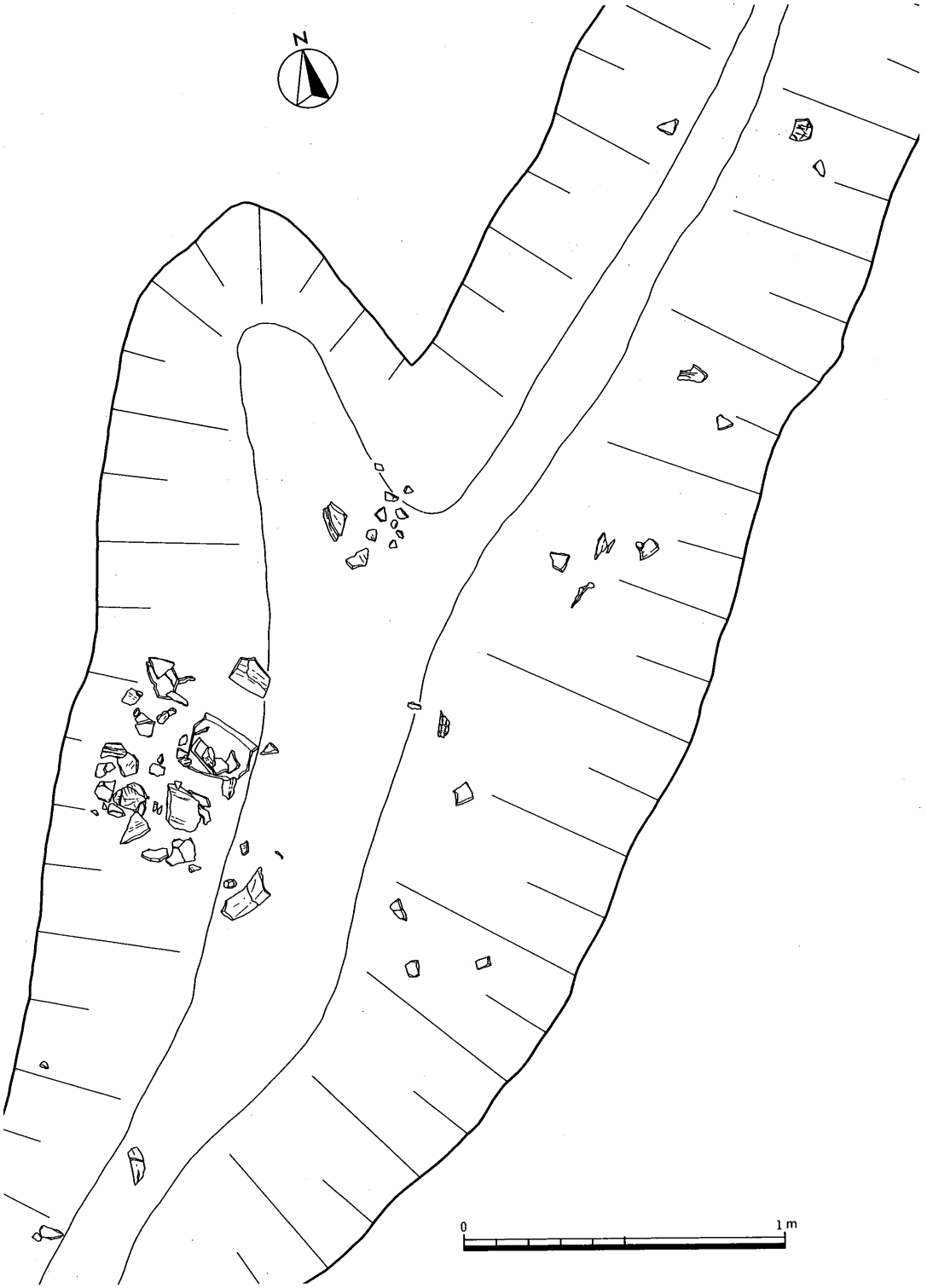
ＳＤ10（第338～341図，図版75）　Ｅ－２区東部で検出された溝で，北端部をＳＤ19に切られる。幅0.85m，深さ0.25m，主軸の方向Ｎ－34°－Ｅを測る。掘り方の断面形は概ね逆台形状を呈し，埋土は灰褐色系粘質シルトがレンズ状に堆積し，３層に細分された。なお，溝北半分の北西方向への突出部付近より，溝底よりやや浮いた位置で土師質土器の土鍋・羽釜・甕（1299・1302～1304）が一括投棄された状況で出土した。

遺物は，土師質土器皿（1282～1285），同坏（1286～1290），同埦（1291・1292），同羽釜（1297・1299～1300），同こね鉢（1298），同土鍋（1301～1303），同竈（1304），西村産瓦質土器埦（1293・1294），和泉型瓦

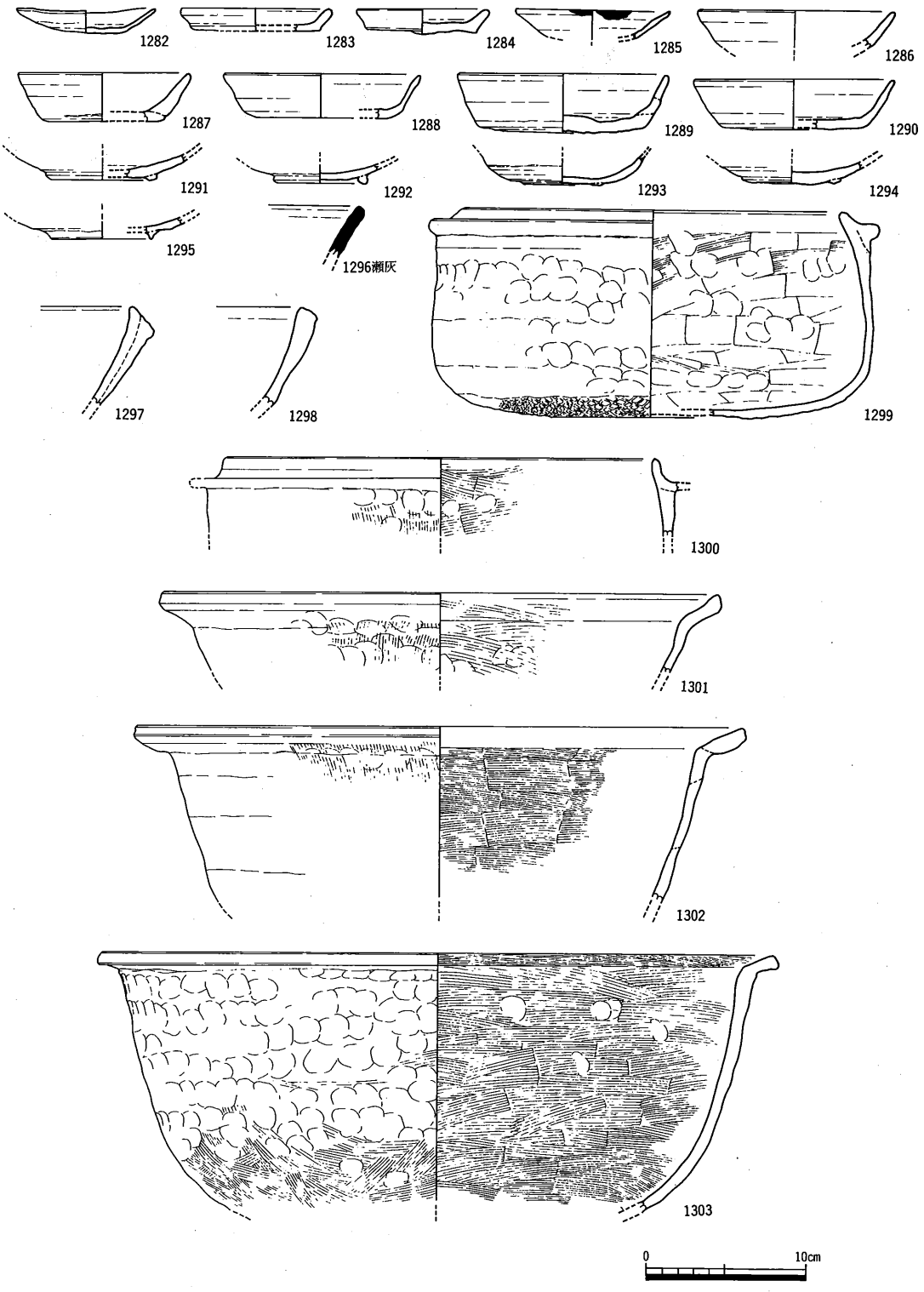


1．濃灰橙褐色粘質シルト
2．灰橙褐色粘質シルト
3．濃灰褐色粘質シルト

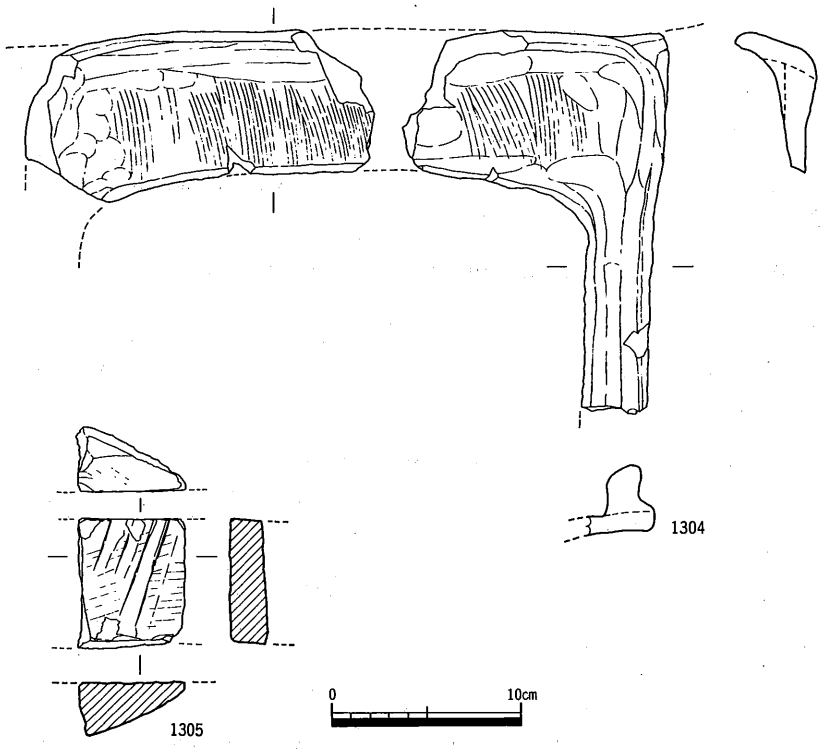
第338図　Ｅ地区第１面ＳＤ10断面図（1/30）



第339図　E地区第1面SD10平面図（1/20）



第340図　Ｅ地区第１面ＳＤ10出土遺物〔１〕(1/4)

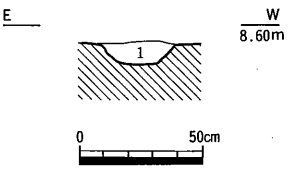


第341図　E地区第1面SD10出土遺物〔2〕(1/4)

器埦（1295），瀬戸・美濃三足付盤（1296），粘板岩製の砥石（1305）が出土した。1282～1284・1289・1290は底部ヘラ切りである。1285は口縁部に煤が付着しており，灯明皿として使用されている。1296の時期は15世紀前半頃であろう。1304は炊き口部のほぼ全形が推測できる竈の破片である。

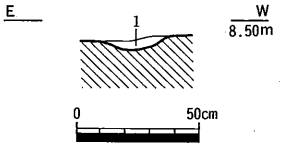
出土遺物よりこの溝は13世紀後半を中心とする時期と考えられる。さて，SD09とSD10は近接した位置で規模や方向を等しくして検出され，SD09が後出することが確認されたことから，SD10が廃棄された後にSD09に改修された可能性が高いと考えられる。さらに両溝の東南では，いずれかの溝と併存すると考えられる柱穴群が検出されており，別の屋敷地が展開する可能性も考えられる。しかし，調査範囲から断言する材料は得られなかったため，現状ではSD01と共にE地区屋敷地の東西両端を限る区画溝と考えておきたい。

なお，E地区屋敷地を区画する溝は以上のSD01～10が挙げられる。いずれも幅0.6～1.3m，深さ0.15～0.25mを測る



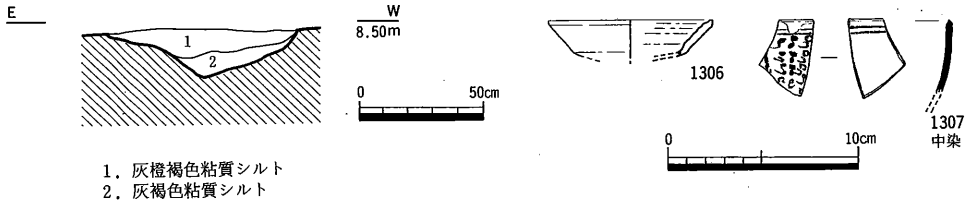
1．灰茶褐色砂質シルト

第342図　E地区第1面SD11断面図（1/30）



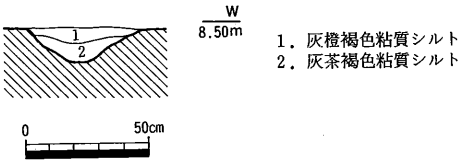
1．暗灰褐色粘質シルト

第343図　E地区第1面SD12断面図（1/30）

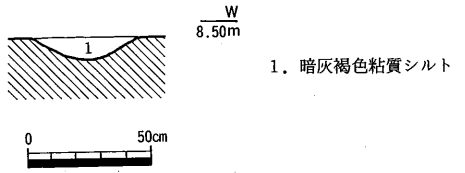


第344図　Ｅ地区第１面ＳＤ13断面図（1/30），出土遺物（1/4）

小規模な溝で，内部に復元される建物の遺存の悪さから削平による影響も考えられるが，建物群を区画する以上の機能は考え難い。またこれらの溝は13世紀後半から16世紀前半の時期が与えられ，15世紀代に一度改修されていると考えられる。しかし，次の段階の16世紀後半から17世紀中頃のＣ・Ｄ地区の屋敷地の区画溝は，幅２～５ｍ，深さ0.7～1.2mを測り，まさに濠といった性格を有するものとなっている。こうした区画溝の変化については，当時の社会情勢の変化が大きな要因として考えられ，特に後者の溝については，屋敷地の区画と同時に防御や用水としての機能も加味されていると言えるだろう。



第345図　Ｅ地区第１面ＳＤ14断面図（1/30）



第346図　Ｅ地区第１面ＳＤ15断面図（1/30）

ＳＤ11（第342図）　Ｅ－１区西部で検出された小溝である。遺構検出時にはＳＤ04から派生することが確認された。幅0.3m，深さ0.1m，主軸の方向Ｎ－10°－Ｅを測る。掘り方の断面形は整った逆台形状を呈し，埋土は灰茶褐色砂質シルトの単層であった。

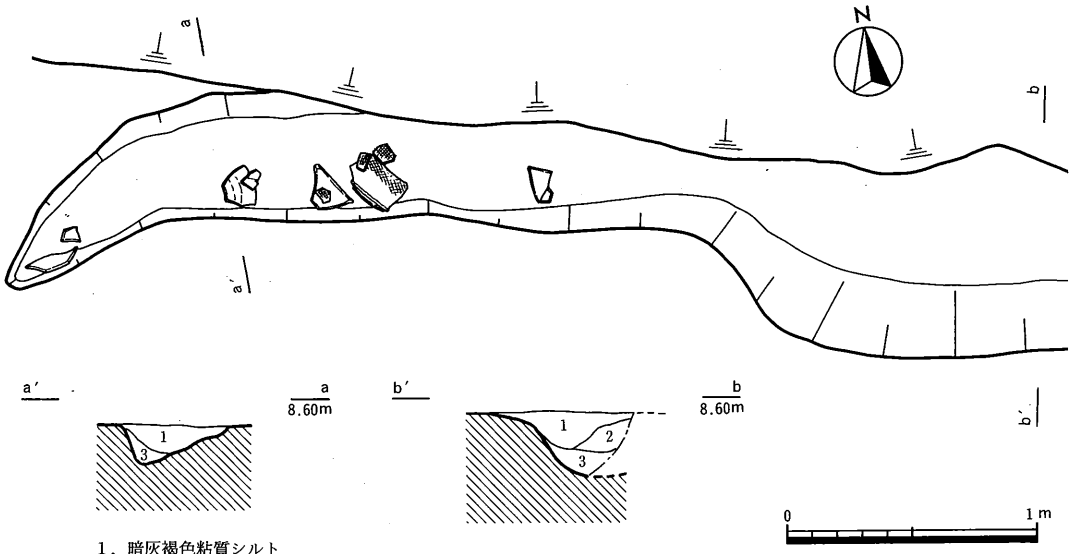
遺物は，土師質土器等の細片が少量出土したのみである。

ＳＤ12（第343図）　Ｅ－１区南西部で検出された小溝で，ＳＤ05より分岐して南に延びる。幅0.25m，深さ0.05m，主軸の方向Ｎ－５°－Ｅを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルトの単層であった。

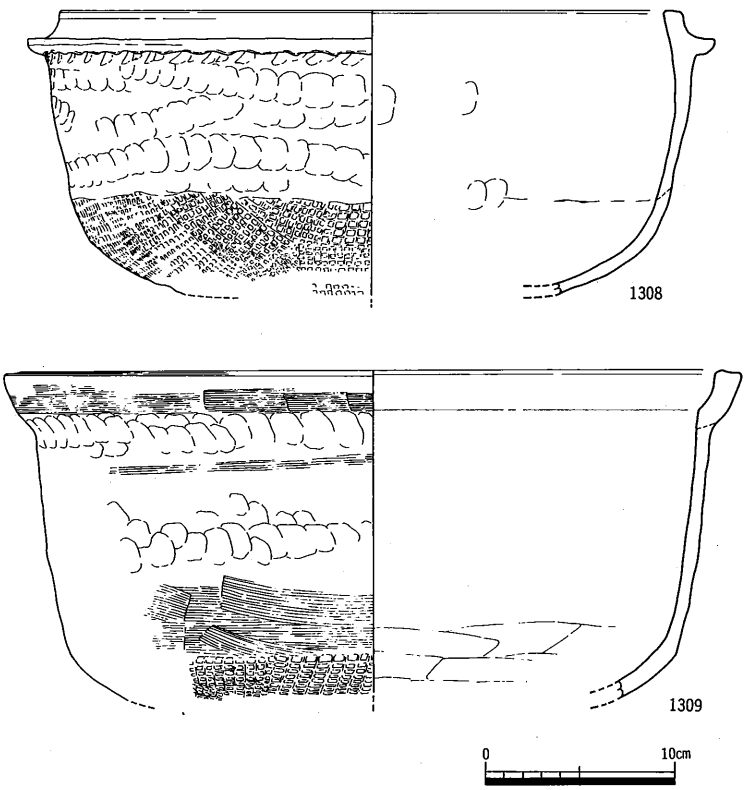
遺物は，土師質土器等の細片が少量出土したのみである。なお，本溝の東西両側には建物群（ＳＢ03～ＳＢ09）が展開することから，これら建物群を区画する目的があったと考えられる。

ＳＤ13（第344図）　Ｅ－１区南部で検出された溝で，ＳＤ05より分岐して南に延びる。幅0.75m，深さ0.2m，主軸の方向Ｎ－10°－Ｅを測る。掘り方の断面形は概ね皿状を呈し，埋土は灰橙褐色粘質シルト及び灰褐色粘質シルトよりなる。

遺物は，土師質土器皿（1306），中国産染付碗（1307）が出土した。1307はいわゆる連子碗と呼ばれる染付碗で，小野氏の分類のＣ群碗Ⅲ類に属する[註13]。出土遺物よりこの溝の時期は，15



1．暗灰褐色粘質シルト
2．灰褐色粘質シルト
3．褐灰色粘質シルト（砂混じり）



第347図　Ｅ地区第１面ＳＤ17平・断面図（1/30），出土遺物（1/4）

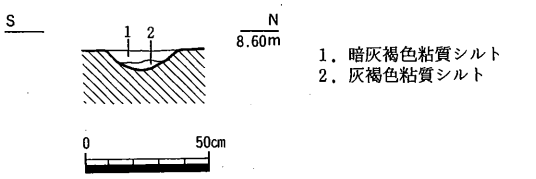
世紀後半から16世紀前半と考えられ，ＳＤ05の改修に伴って掘削された可能性がある。

ＳＤ14（第345図）　Ｅ－１区南部で検出された溝で，ＳＤ05より分岐して南に4.5m延びる。幅0.45m，深さ0.15m，主軸の方向Ｎ－10°－Ｅを測る。掘り方の断面形は皿状を呈し，埋土は灰橙褐色粘質シルト及び灰茶褐色粘質シルトよりなる。

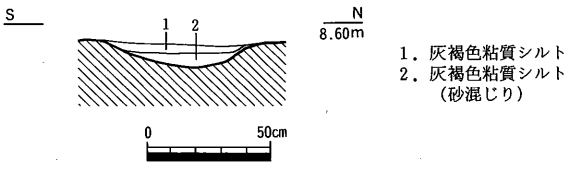
遺物は，土師質土器等の細片が少量出土したのみである。

ＳＤ15（第346図）　Ｅ－２区西端で検出された溝で，南端は攪乱溝に切られ判然としない。幅0.25m，深さ0.05m，主軸の方向Ｎ－25°－Ｅを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルトの単層であった。

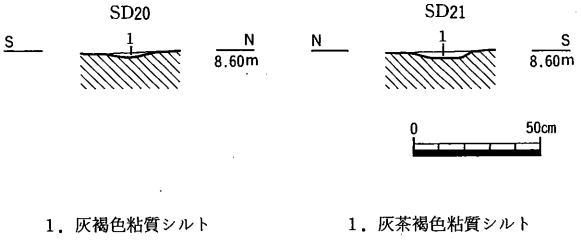
遺物は，土師質土器等の細片が少量出土したのみである。



第348図　Ｅ地区第１面ＳＤ18断面図（1/30）



第349図　Ｅ地区第１面ＳＤ19断面図（1/30）



第350図　Ｅ地区第１面ＳＤ20，ＳＤ21断面図（1/30）

ＳＤ16　Ｅ－２区北西部で検出された溝で，南端はＳＫ15に切られる。幅0.25m，深さ0.05m，主軸の方向Ｎ－22°－Ｅを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰黄褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，土師質土器等の細片が出土したのみである。

ＳＤ17（第347図・図版76）　Ｅ－２区西部で検出された溝で，北半部は攪乱溝によって大きく削られている。現状で，幅0.05m以上，深さ0.25m以上を測る。掘り方の断面形は概ね皿状を呈し，埋土は灰褐色系粘質シルトがレンズ状に堆積し，２～３層に細分された。なお溝西端部より，土師質土器羽釜（1308）と土鍋（1309）が一括して出土した。

出土遺物より，この溝の時期は13世紀を中心とすると考えられる。

ＳＤ18（第348図）　Ｅ－２区中央部で検出された小溝で，ＳＥ06の東西両側に延び，東端はＳＤ06に切られる。配置形態より，ＳＥ06の排水溝と考えられる。幅0.3m，深さ0.1m，主軸の方向Ｅ－15°－Ｓを測る。掘り方の断面形は皿状を呈し，埋土は暗灰褐色粘質シルト及び灰褐色粘

質シルトよりなる。

遺物は，土師質土器等の細片が少量出土したのみである。

ＳＤ19（第349図）　Ｅ－２区北東隅で検出された溝で，ＳＤ09・10を切っている。幅0.6m，深さ0.1m，主軸の方向Ｅ－38°－Ｓ，検出長5.0mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトよりなる。

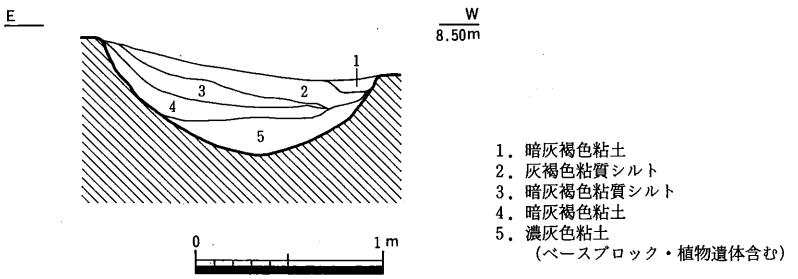
遺物は，土師質土器等の細片が少量出土したのみである。

ＳＤ20・21（第350図）　いずれもＥ－２区南東部で検出された小溝である。ＳＤ20は，幅0.2m，深さ0.02m，主軸の方向Ｅ－27°－Ｓ，検出長5.9mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。またＳＤ21は，幅0.25m，深さ0.03m，主軸の方向Ｅ－25°－Ｓ，検出長4.6mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰茶褐色粘質シルトの単層であった。両溝ともＳＡ02東西列と整った配置関係を有し，有機的な関連が窺える。

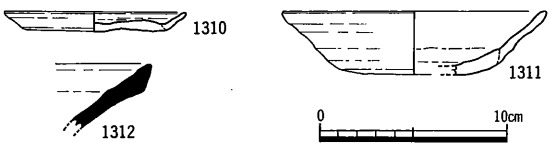
7）不明遺構

ＳＸ01（第351・352図）　Ｅ－１区北西部，ＳＤ03の底面で検出した遺構である。平面形は不整形な長円形を呈し，長軸2.3m，短軸1.5m，深さ0.6mを測る。掘り方の断面形は緩やかに掘り込まれU字状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトを主体とする上位層（１～３層）と，ベースブロックや植物遺体を含む濃灰色粘土を主体とする下位層（４・５層）に大別され，レンズ状に堆積していた。

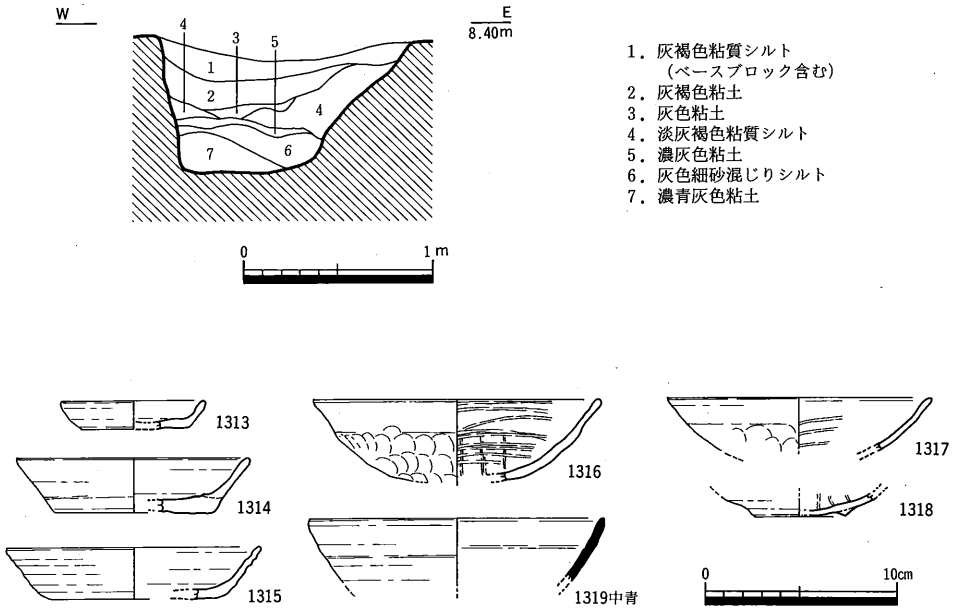
遺物は，土師質土器皿（1310），同坏（1311），東播系こね鉢（1312）が出土した。1310及び1311は底部ヘラ切りである。1312の口縁部は上下にやや肥厚するもので，神出窯での分類でＣ類に属し(註22)，時期は13世紀後半を中心とする。



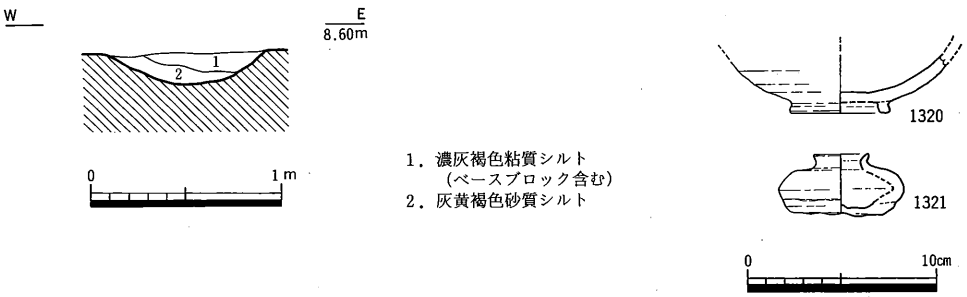
第351図　Ｅ地区第１面ＳＸ01断面図（1/40）



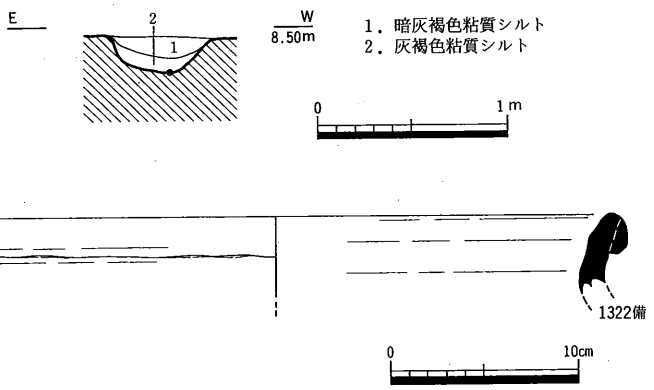
第352図　Ｅ地区第１面ＳＸ01出土遺物（1/4）



第353図　E地区第１面ＳＸ02断面図（1/40），出土遺物（1/4）



第354図　E地区第１面ＳＸ03断面図（1/40），出土遺物（1/4）



第355図　E地区第１面ＳＸ05断面図（1/40），出土遺物（1/4）

ＳＸ02（第353図）　Ｅ－１区北西部，ＳＤ03の底面で検出した遺構である。平面形は略円形を呈し，径1.3m，深さ0.7mを測る。掘り方の西壁はほぼ垂直に掘り下げられ，東肩は緩やかに立ち上がる。また底面はほぼ平坦で，断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土はやや複雑な堆積状況を示すが，大きく上層（１～４層）と下層（５～７層）に大別される。上層は灰褐色粘質シルト及び灰色系粘土からなり，下位に壁面の崩落によると思われるベースブロックを含む淡灰褐色粘質シルトの流れ込みが認められた。また下層は灰色系粘土及び灰色系細砂からなる。埋土の状況から下位層は滞水状態にあったことが伺われた。

遺物は，土師質土器皿（1313），同坏（1314・1315），和泉型瓦器埦（1316～1318），中国産青磁碗（1319）が出土した。1313・1314は底部ヘラ切りである。1319はオリーブ灰色の釉が掛けられた龍泉窯系の碗で，12～13世紀代に多く出土する。

時期は出土遺物から，13世紀後半を中心とすると考えられる。

ＳＸ03（第354図）　Ｅ－１区東部で検出された遺構で，東半の一部は攪乱され判然としない。平面形は不定形な溝状を呈し，南端部はやや広がる。幅0.85m，深さ0.2mを測る。掘り方の断面形は緩やかに掘り込まれた皿状を呈する。埋土はベースブロックを含む灰褐色粘質シルト及び灰黄色砂質シルトからなる。

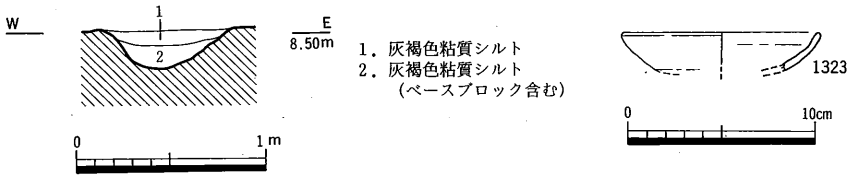
遺物は，土師質土器皿（1320），瓦質土器油壺（1321）が出土した。1320の内面には漆状の付着物が認められた。1321は底部ヘラ切りである。

ＳＸ05（第355図）　Ｅ－２区西端で検出された遺構である。掘り方の平面形は南端部が隅丸となった長方形を呈し，長辺2.8m，短辺0.7m，深さ0.2mを測る。断面形は逆台形状を呈し，底面はほぼ平坦であった。埋土は灰褐色系粘質シルトで，２層に細分された。

遺物は，備前焼甕（1322）が出土した。口縁部は玉縁状を呈するもので，備前焼IV期に属し[(註3・14)]，時期は15世紀代であろう。

ＳＸ06（第356図）　Ｅ－２区中央部で検出された遺構で，北端部をＳＫ18に切られる。平面形は不整形な溝状を呈し，長軸2.7m，短軸0.8m，深さ0.2mを測る。断面形は緩やかに掘り込まれ皿状を呈する。埋土は灰褐色系粘質シルトが堆積し，２層に細分された。なお下位層はベースブロックを含んでおり，人為的に埋め戻された可能性がある。

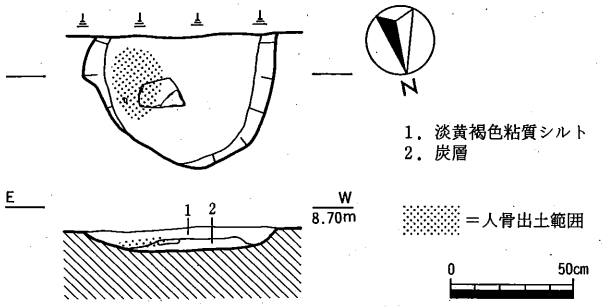
遺物は，土師質土器皿（1323）が出土した。



第356図　Ｅ地区第１面ＳＸ06断面図（1/40），出土遺物（1/4）

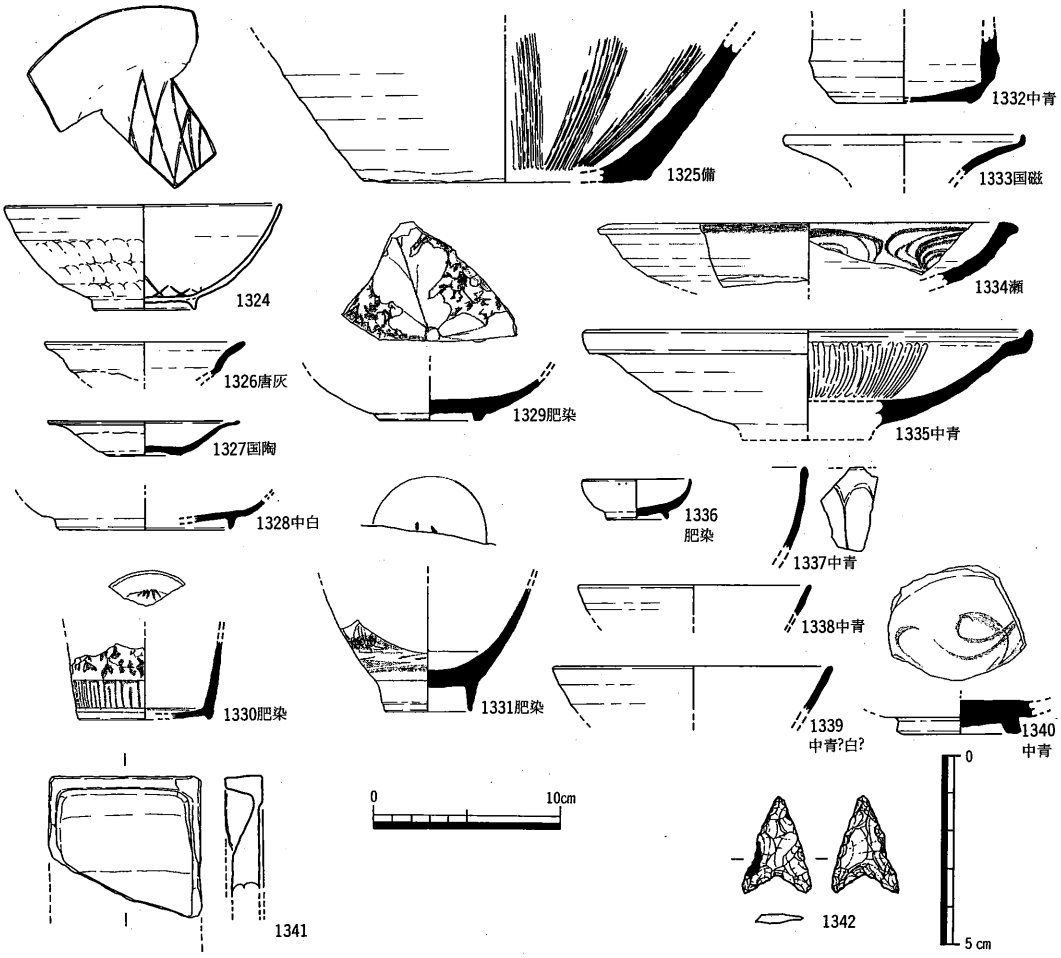
８）墓

ＳＴ01（第357図）　Ｅ－２区中央部で検出された遺構で，南半分を大きく攪乱される。掘り方の平面形は現状で楕円形を呈し，径0.75m，深さ0.1mを測る。断面形は緩やかに掘り込まれて皿状を呈する。埋土は淡黄褐色粘質シルトと炭層に分けられた。炭層は厚さ約５cmを測る。この炭層上面で，一辺0.15m，厚さ0.02m程の板石が検出され，この板石の東側より，頭骨を主体とした人骨の細片が出土した。また棺材等は全く確認できなかった。



第357図　Ｅ地区第１面ＳＴ01平・断面図（1/30）

以上の検出状況より火葬墓と推定されるが，副葬品等の遺物が出土していないため，時期は特定できない。ただし，埋土に締まりのないことなどから，近世以降の比較的新しい時期と推定さ



第358図　Ｅ地区第１面上位包含層出土遺物（1/4，1/2）

第359図　E地区第２面遺構配置図（1/200）

れる。

9）包含層（第358図）

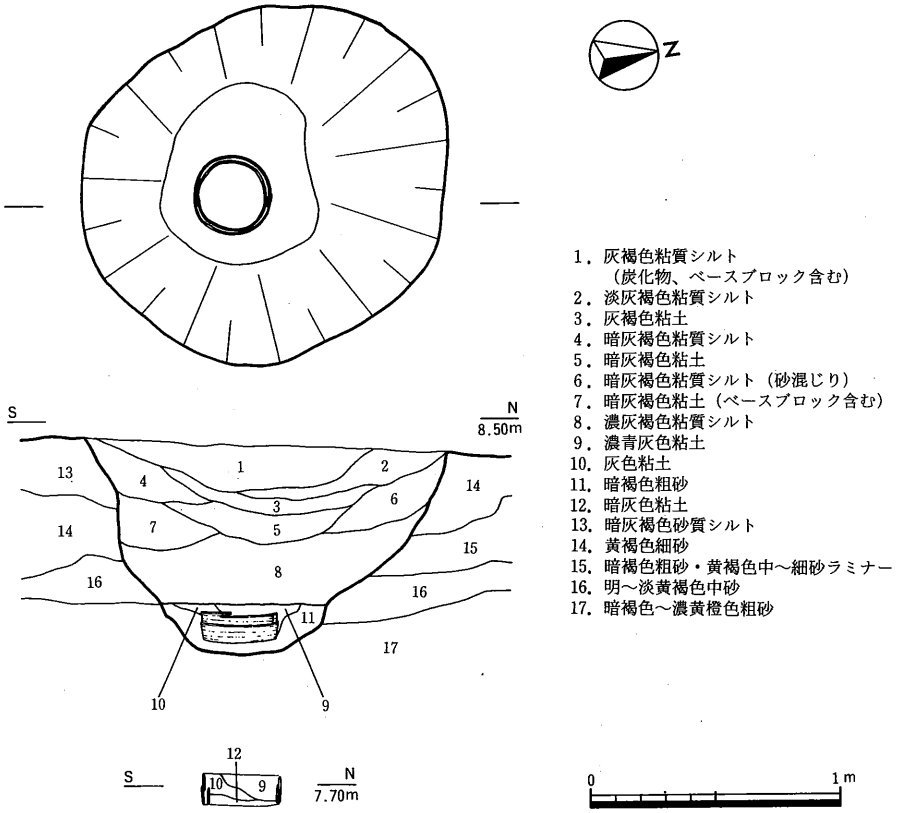
本地区の第1面上位包含層として報告する遺物も，重機による表土掘削中及び遺構面精査中に出土した遺物を含んでいる。

遺物はコンテナ9箱分出土しており，その中より19点図示した。1324は和泉型瓦器埦である。1325は備前焼擂鉢である。卸目の間隔が広いことから，備前焼第IV期に属し(註3・14)，時期は14～15世紀代である。1326は唐津灰釉皿である。時期は1600～1630年代である。1327は陶器蓋である。生産地は特定できないが，胎土・釉調より国内地方窯産と思われる。1328は中国産白磁皿である。口縁部が外反する端反り皿の底部で，森田氏の分類の皿E群2 b類に属する(註7)。1329は肥前染付皿である。内面見込み中央に花文様を描き，隙間を葡萄唐草で埋めている。時期は1610～1630年代である。1330は肥前の猪口である。1331は肥前染付碗である。1332は中国産青磁香炉である。碁笥底状を呈し，底部無釉である。1333は磁器の壺または皿の口縁部である。これも生産地は特定できないが，胎土・釉調より国内地方窯産と推定される。1334は瀬戸・美濃の馬の目皿である。1335は中国産青磁盤である。体部内面に丸彫りによる蓮弁文を施す。1336は肥前染付小坏である。時期は17世紀後半から18世紀代である。1337～1340は中国産青磁碗である。1337は外面に丸彫りによって蓮弁文を表現するもので，上田氏の分類の碗B－III類に属する(註8)。1338は体部外面に櫛状の器具で放射状に縦線を刻んでいる。太宰府の分類の同安窯系碗I－1・b類に属する(註2)。1339は無文の碗で，内外面の貫入が著しい。1340は太宰府の分類の龍泉窯系碗I－2類に属する。1341は瓦質の長方硯である。硯背は上げ底状になっている。1342はサヌカイト製の凹基式石鏃である。両側縁側より緻密な剝離調整を施しているが，裏面は素材の剝離面を残している。

第2面

1）井戸

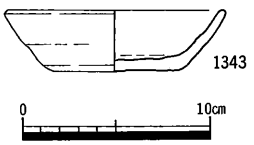
SE08（第360・361図，図版80）　E－2区東端で検出された井戸で，SD25を切っている。掘り方の平面形は楕円形を呈し，長径1.5m，短径1.3m，深さ0.8mを測る。断面形は，検出面より0.6m下までは緩やかに掘り込まれて擂鉢状を呈し，それより下位はやや垂直に近く掘り込まれて二段掘りとなる。埋土はこの掘り方の断面形に対応して，上層（1～8層）と下層（9～11層）に大別される。上層は灰褐色系の粘質シルト及び粘土からなり，ベースブロックを含みながらレンズ状に堆積している下層は灰色系粘土及び暗褐色粗砂からなり，後者は井戸枠埋置時の裏込め土であると同時に，湧水を清浄に保つため底面に敷かれた可能性がある。また，掘り方下段に対応して，井戸枠である2段に重ねられた曲物を検出した。曲物は径0.3m，高さ0.1mを測る。



1．灰褐色粘質シルト
（炭化物、ベースブロック含む）
2．淡灰褐色粘質シルト
3．灰褐色粘土
4．暗灰褐色粘質シルト
5．暗灰褐色粘土
6．暗灰褐色粘質シルト（砂混じり）
7．暗灰褐色粘土（ベースブロック含む）
8．濃灰褐色粘質シルト
9．濃青灰色粘土
10．灰色粘土
11．暗褐色粗砂
12．暗灰色粘土
13．暗灰褐色砂質シルト
14．黄褐色細砂
15．暗褐色粗砂・黄褐色中～細砂ラミナー
16．明～淡黄褐色中砂
17．暗褐色～濃黄橙色粗砂

第360図　Ｅ地区第２面ＳＥ08平・断面図（1/30）

遺物は非常に乏しく，僅かに土師質土器坏（1343）の他，西村産瓦質土器埦等の細片が上層中より少量出土したのみである。1343は底部ヘラ切りである。

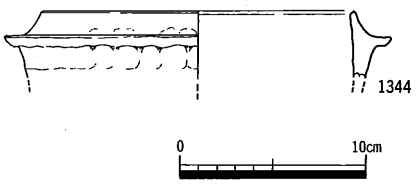


第361図　Ｅ地区第２面ＳＥ08
出土遺物（1/4）

２）柱穴

ＳＰ106（第362図）　Ｅ－２区北西部で検出された柱穴である。平面形は楕円形を呈し，径0.3m，深さ0.2mを測る。

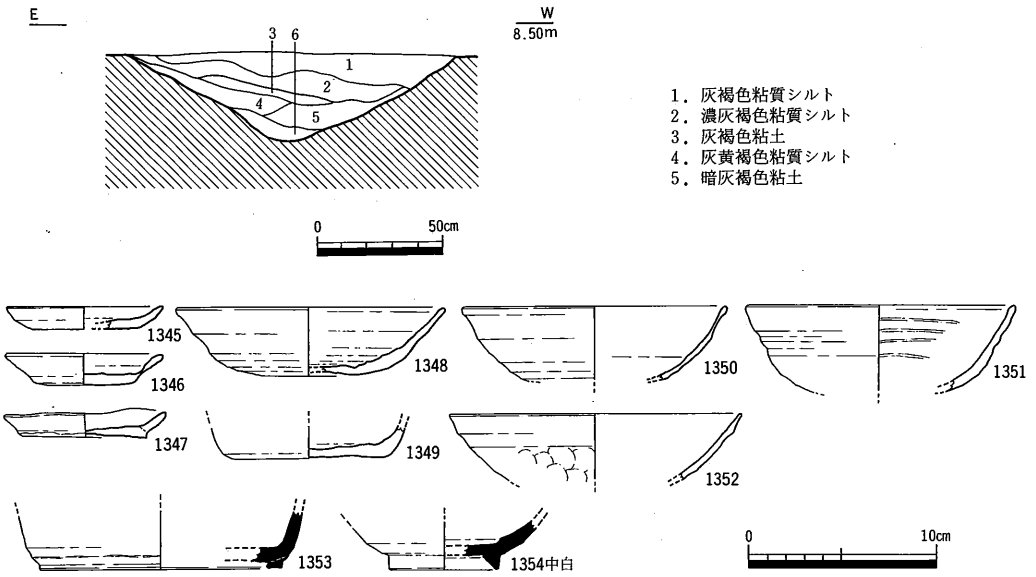
遺物は，土師質土器羽釜（1344）が出土した。



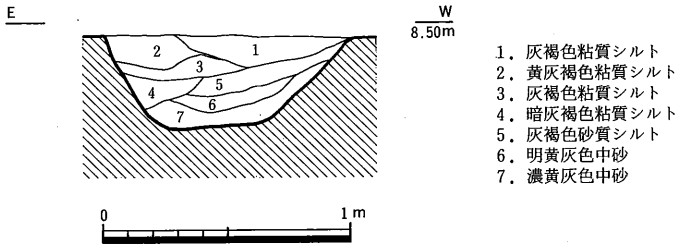
第362図　Ｅ地区第２面ＳＰ106
出土遺物（1/4）

３）溝

ＳＤ24・25（第363図）　Ｅ－２区東部で検出した溝である。ＳＤ25はやや屈曲しながら北東方向に延び，調査区北端近くでＳＤ24が東に分岐する。また中央部でＳＤ27が派生して東に延び，南半部ではＳＤ28と一部合流する。ＳＤ24は，幅0.35m，深さ0.1m，主軸の方向Ｅ－12°－Ｓ，検出長2.0mを測る。掘り方の断面形は皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。ＳＤ25は幅



第363図　E地区第2面SD25断面図（1/30），出土遺物（1/4）



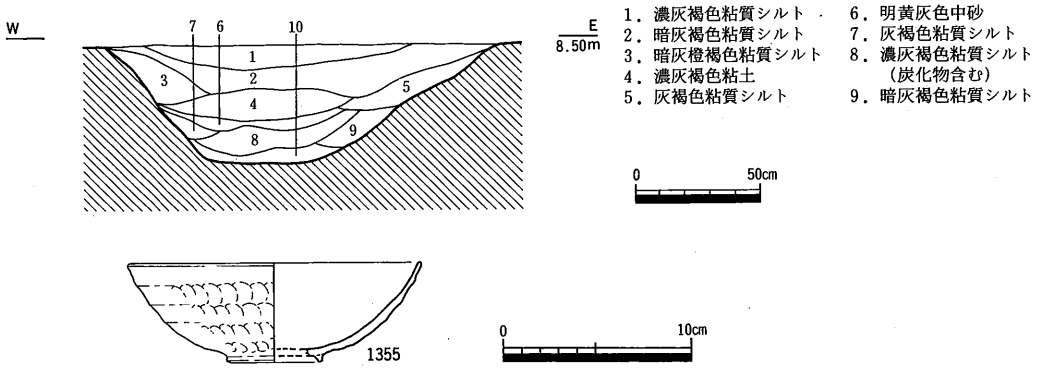
第364図　E地区第2面SD26断面図（1/30）

1.3m，深さ0.35m，北半部の主軸の方向N－21°－E，南半部の主軸の方向N－24°－E，検出長28mを測る。掘り方の断面形はU字状を呈し，埋土は灰褐色系粘質シルト及び粘土等がレンズ状に堆積しており，6層に細分された。SD25の東側では比較的まとまった柱穴群を検出しており，建物群の西端を区画する可能性が考えられる。

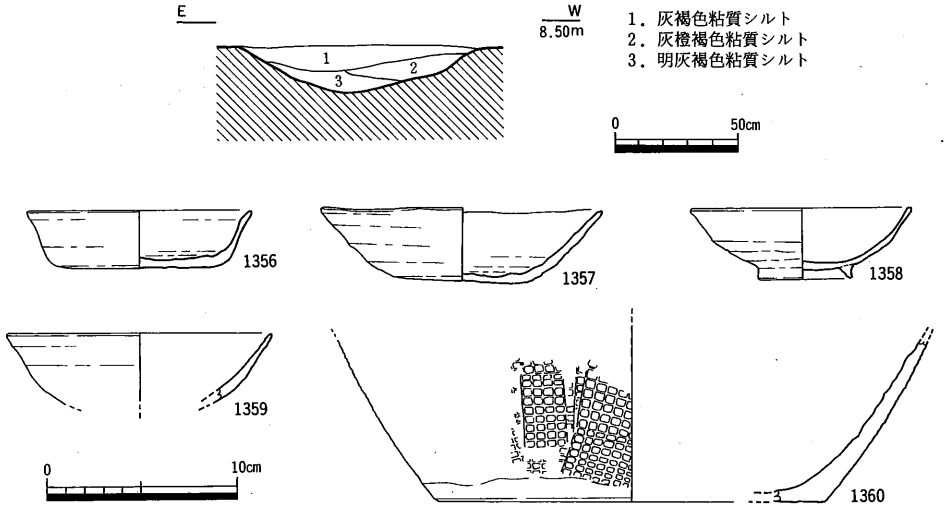
遺物は，SD24よりは土師質土器坏等の細片が少量出土したのみである。SD25よりは土師質土器皿（1345～1347），同坏（1348・1349），同椀（1350），和泉型瓦器椀（1351・1352），須恵器坏（1353），中国産白磁碗（1354）の他，土師質土器甕・羽釜等の細片が出土した。1347は底部回転糸切りである。1354は太宰府の分類の白磁碗V類に属する（註2）。

出土遺物より本溝の時期は13世紀前半頃に比定できる。

SD26・27（第364・365図）　SD27はE－2区東端で検出された溝で，SD25より派生して東に延び，調査区東端付近で不整形に屈曲してSD26が北に延びる。SD27は幅1.0m，深さ0.35m，主軸の方向N－57°－E，検出長6.0mを測る。掘り方の断面形は整った逆台形状を呈し，底面は平坦に近い。埋土は灰褐色系粘質シルトを主体とする上位層（1～4層）と，黄褐色



第365図　E地区第２面ＳＤ27断面図（1/30），出土遺物（1/4）



第366図　E地区第２面ＳＤ28断面図（1/30），出土遺物（1/4）

中砂を主体とする下位層（５～７層）に大別される。遺物は下位層より主に出土した。ＳＤ26は，幅1.0m，深さ0.4m，主軸の方向Ｎ－14°－Ｅ，検出長3.5mを測る。掘り方の断面形は，東肩がやや緩やかに掘り込まれているものの比較的整った逆台形状を呈し，底面は平坦に近い。埋土は中位層に濃灰褐色粘土を挟んで３層に大別されるが，顕著な差異は認められなかった。

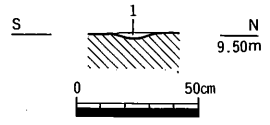
ＳＤ26からは遺物は全く出土していない。ＳＤ27からは和泉型瓦器椀（1355）の他，土師質土器坏，弥生土器等の細片が少量出土した。

出土遺物より本溝の時期は，13世紀前半頃と考えられる。

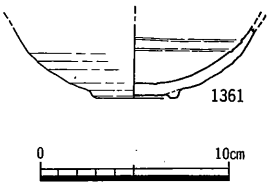
ＳＤ28（第366図）　Ｅ－２区東部，ＳＤ25の西側で検出した溝である。やや不整形に屈曲しながら北に延び，南端部で島状高まりを残して一部ＳＤ25と合流する。幅1.0m，深さ0.2m，主軸の方向Ｎ－30°－Ｅ，検出長24.5mを測る。掘り方の断面形は概ね皿状を呈し，埋土は灰褐色系

粘質シルトがレンズ状に堆積し，3層に細分された。

遺物は，土師質土器坏（1356・1357），同甕（1360），早島式土器椀（1358），和泉型瓦器椀（1359）のほか，土師質土器椀・土鍋，黒色土器B類椀等の細片が出土した。1357は底部ヘラ切りである。1358は口径・器高とも縮小化が進み，内外面の調整手法も簡略化されていることから，13世紀前半頃と考えられる。



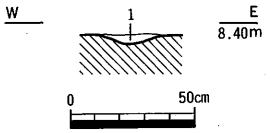
1．灰褐色粘質シルト



第367図　E地区第2面SD29断面図（1/30）出土遺物（1/4）

SD29（第367図）　E－2区東端で検出したほぼ直線状に延びる小溝である。幅0.2m，深さ0.03m，主軸の方向E－15°－S，検出長2.5mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，西村産瓦質土器椀（1361）の他，土師質土器細片が少量出土したのみである。



1．明灰褐色粘質シルト

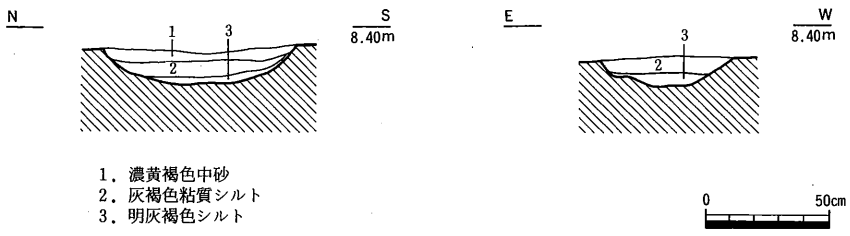
第368図　E地区第2面SD30断面図（1/30）

SD30（第368図）　E－2区東部で検出された小溝である。幅0.25m，深さ0.03m，主軸の方向N－39°－E，検出長8.1mを測る。掘り方の断面形は浅い皿状を呈し，埋土は明灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は，土師質土器細片が数点出土したのみである。

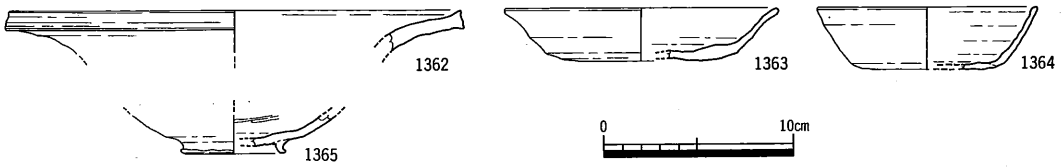
SD31（第369図）　E－2区北部で検出された平面L字状を呈する溝である。東西溝西端は，第1面SE05に攪乱されて判然としない。東西溝の幅0.85m，深さ0.2m，主軸の方向E－15°－S，検出長16mを測る。掘り方の断面形は概ね皿状を呈し，埋土は濃黄褐色中砂及び灰褐色粘質シルトからなる。

遺物は，土師質土器坏・甕，和泉型瓦器椀，西村産瓦質土器椀等の細片が少量出土したのみである。



1．濃黄褐色中砂
2．灰褐色粘質シルト
3．明灰褐色シルト

第369図　E地区第2面SD31断面図（1/30）



第370図　Ｅ地区遺構面下位層出土遺物（1/4）

遺構面下位層（第370図）

ここで報告する遺物は，Ｅ－１区第１面及びＥ－２区第２面下位のトレンチ調査によって出土した遺物である。遺構面下位は粘質シルト・細砂・粘土がラミナー状に堆積しており，第３章で詳述しているように，遺構面形成前は氾濫原（河道域）であったと推定される。Ｅ地区の氾濫堆積もＤ地区同様，複数の流路の集合として存在しているが，調査時においてその一単位を平面的に把握できなかったため，下位層出土遺物として遺物の取り上げを行なった。従って結果的には第２面の形成時期の下限が捉えられたに過ぎない。

1362は弥生土器の壺である。1363・1364は土師質土器坏である。いずれも底部はヘラ切りである。1365は黒色土器埦で，内面にのみ炭素を吸着させたいわゆるＡ類埦と呼ばれているものである。

出土遺物より下位層の下限については13世紀初頭頃と推定され，第２面の形成時期の13世紀前半と矛盾しない。逆に，第２面の遺構は氾濫堆積が落ち着いた直後に掘削されていると言える。

註１　『土地条件図』国土地理院（1986）
２　横田賢二郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心に－」『九州歴史資料館研究論集４』（1978）
３　間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート」『倉敷考古館研究集報１・２・５』（1966～1968）
伊藤晃「15世紀から17世紀の備前焼」『中近世土器の基礎研究』（1985）
４　『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館（1984）
５　大橋康二『肥前陶磁』（1989）
６　藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』（1986）
７　森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究№２』（1982）
８　上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究№２』（1982）
９　上田秀夫「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究Ⅰ』（1991）
10　藤澤良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁８』（1982）
11　藤澤良祐「古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』（1991）
12　藤澤良祐「本業焼の変遷（３）－赤津村・窯跡の編年的研究－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ』

（1988）

13　小野正敏「15，16世紀の染付碗，皿の分類とその編年」『貿易陶磁研究№2』（1982）

14　伊藤晃「窯業」『岡山県の考古学』（1987）

15　成田寿一郎『木の匠－木工の技術史』（1983）

16　古泉弘『江戸の考古学』（1987）

17　『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団（1990）

18　『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（1988）

19　「菰池遺跡の調査」『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ』岡山県教育委員会（1988）

20　『尾道－市街地発掘調査概要－』尾道市教育委員会（1978）

21　『草戸千軒町遺跡－第28・29次発掘調査概要』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所（1980）

22　『神出　神出古窯址群に関連する遺跡群の調査』妙見山麓遺跡調査会（1986）

第4章　自然科学調査の成果

第1節　動物遺存体

奈良国立文化財研究所
松井　章

出土動物種名表

軟体類	
腹足類	Class Gastropoda
アカニシ	*Rapana thomasiana* CROSSE
斧足類	Class Pelecydopa
イシガイ科の一種	Fam. Unionidae gen. et sp. indet.
哺乳類	Class Mammalia
イヌ	*Canis familiaris* Linneus
イノシシ	*Sus scrofa* Linneus
ウシ	*Bos taurus* var.domesticus Gmelin
ニホンジカ	*Cervus nippon TEMMINCK*
ウマ	*Equus caballus Linneus*
ヒト	*Homo sapience*

1．概要

出土した動物依存体は，貝類2種と哺乳類6種とであった。とりあげた資料番号は75にのぼるが，細片や四肢骨の体部が多く，不明のものが約半数を占めた。貝類はアカニシが5点出土しているている。いずれも白く灰化するまで焼けたもので，そのために残ったものであろう。アカニシは大きな巻貝で，従来から中世の遺跡での出土が多い。イシガイ科の一種は，黒い殻皮が残存したものである。同定できた哺乳類の中では，ウシが16点で最も多い。哺乳類は，ヒトも含めると6種出土している。以下，哺乳類の概略を述べる。

ヒト

ヒトは火葬骨一体分と散乱骨とがある。火葬骨で，確認できる部位は，頭蓋骨，下顎骨，椎骨長管骨などがあり，下顎骨では犬歯と切歯の歯根部分が観察できる。骨がまだ筋肉のついた状態で火をうけると収縮，変形が著しく，性別，年齢はよくわからない。しかし，頭蓋骨の縫合部がほぼ，癒着を終えつつある段階であることから，成年であったことは間違い無いだろう（註1）。

ウマ

上腕骨と踵骨が出土している。上腕骨は断片であるが踵骨はほぼ完形である。形質については計測値が得られないが，上腕骨の肉眼観察では在来の在来中型馬と体部の径は一致する。

ウシ

中手骨，中足骨，踵骨，上顎および下顎臼歯が出土している。歯を見ると，若いものと，エナメル質をほとんど磨耗しつくした老齢のものと，少なくとも2個体がある。

イヌ

上腕骨の破片が1点，出土している。磨耗が著しく，計測は不可能である。肉眼観察では，ほぼ現生のシバイヌ大である。

イノシシ

上腕骨の遠位置（胴部から遠い方）が出土している。斧様の傷が見え，解体時につけられたものであろう（註2）。

ニホンジカ

鹿角の加工品がある。一端をノコギリ様の刃物で曳いて整形し，そこに穴を穿ち，工具を差し込むようになっている。整形面が粗雑であることから，製作時に破損して廃棄されたものかも知れない。

その他不明の骨は，大きさからみてウシやウマのものが大部分であろう。

2．骨の表面に見られる傷

摩滅が少なく，表面の観察の可能な骨には多くの傷が見える。その中には自然についたものもあるが，人間が解体のため，肉を取りはずすために付けた傷も多い。まず，ウシ，ウマ，イノシシなどの解体は斧様の鈍器で四肢を切断したようである。イノシシの上腕骨は肘の部分で少なくとも2度の加撃を受けて切断されている（註3）。資料番号37のウマの上腕骨にも同様の痕跡が見られる（註4）。四肢の分離が終った後，やや小さな刃物で肉をはずしたようである。こうした痕跡が肉の採取を目的としたことは明らかである。これらの骨が出土したのは，16世紀から17世紀にかけての堆積土であるが，その頃は肉食をほとんど行なっていなかったというのが，従来の考えであった。しかし考古学の発掘がこうした中・近世の遺跡にまで及ぶにしたがって，文献の上では肉食を忌避したと考えられた日本人が，それぞれの時代において，肉食を含めて実に多様な

動物利用を行なっていたという事が明らかになりつつある(註5)。それも，当時の社会階層や地域を問わず，農村から都市，大名屋敷にいたるまでの階層で，さまざまな動物を解体，摂食していたのである。本例もこうした日本人の動物利用の実相を明らかにするひとつとなろう。

3．人骨について

火葬墓の年代については，発掘時の所見からみて近～現代ということで問題はない。しかし，17世紀D地区ＳＤ01下層出土の大腿骨，上腕骨には埋葬された痕跡は無い。いずれもイヌの噛み跡が見られ，破損してから溝に埋没したようである。中世においては『地獄草紙』『餓鬼草紙』『九相詩絵巻』などでは，集落から離れたところに五輪塔や塚を築いた場所があって，そこに死者を埋める場合と，棺桶が埋められずに放置され，それを犬や鳥が食べている情景が描かれる。源信の『往生要集』にも同様の情景が記されている(註6)。そのような情景がこの溝の年代，17世紀まで続いていたかどうかは，現時点では疑問であるが，今後，こうした中近世の溝からの動物骨，人骨の出土例が増加していけば，実態を明らかにできるであろう。

4．まとめ

中近世の発掘が増加し，また有機遺物の取り上げ技術が進歩するにつれて，全国的に動物遺存体の出土例が増加しつつある。従来，日本人の食生活は文献史をもとに考えられ，日本人は仏教伝来以来，明治になるまで，陸生の哺乳類の肉を食べることは少なかったということであった。しかし，近年の考古学の成果は，中近世においても肉食がさまざまな階層，地域で行なわれていたことを明らかにしつつある。本遺跡においても，16世紀から17世紀にかけての，日本人の多様な動物利用の一端をうかがうことが出来たといえよう。ウシ，ウマは当然，農耕の役畜として飼われていたものであろうが，死した後は皮革は衣類，履物，武具に多用され，肉は食用となった。イノシシ，ニホンジカなども狩猟の獲物として解体，処理され，鹿角を工具の柄に利用した。今後，こうした中近世の遺跡からの動物依存体の出土例を増加させることによって，全国的な視野のもとで日本人の動物文化史を描くことが出来るであろう。

註1　片山一道氏のご教示による

2　写真図版参照

3　写真図版参照

4　写真図版参照

5　松井　章「養老厩牧令の考古学的考察－斃れ馬牛の処理をめぐって」『信濃』39-4;231-256(1987)

6　松井　章「中世「人肉犬食考」－生ゴミからみた草戸千軒町遺跡(4)」『草戸千軒』184号;52-53(1988)

第4表　東山崎・水田遺跡出土動物遺存体

番号	出土位置	種　類	部　位	左右	加　工	火　熱	風化	その他	資料番号
1366	C地区第1面S E06	アカニシ							44
1367	C地区第1面S D21	アカニシ				灰化			39
1368	C地区第1面S D21	アカニシ				灰化			40
1369	C地区第1面S D21	アカニシ				灰化			38
1370	E地区第1面S D06	アカニシ				灰化			74
1371	C地区第1面S D05	イシガイ科	穀皮						16
1372	C地区第1面S D21	イヌ	上腕骨	右				遠位端	30
1373	C地区第1面S D01	イノシシ	上腕骨	右	斧様の傷			体部～遠位	64
1374	D地区第1面S D01	ウシ	臼歯					未磨耗	57
1375	D地区第1面S D01	ウシ	臼歯上					老齢	65
1376	E地区第1面S E02	ウシ	臼歯上						70
1377	C地区第1面S D20	ウシ	尺骨	右			風化		26
1378	C地区第1面S D21	ウシ	大腿骨	右				大転子	42
1379	D地区第1面S D01	ウシ	第1後臼歯下	右					46
1380	D地区第1面S D01	ウシ	第2後臼歯下	右					48
1381	D地区第1面S D01	ウシ	第2後臼歯下	右				未萌出	45
1382	D地区第1面S D01	ウシ	第2後臼歯下	左				若い	49
1383	D地区第1面S D01	ウシ	第3後臼歯上					磨耗始まる	47
1384	C地区第1面S D20	ウシ	中手骨	左	打痕	白色		体部	20
1385	C地区第1面S D21	ウシ	中足骨	左				近位～体部	41
1386	C地区第1面S D21	ウシ	中足骨	右				体部	33
1387	D地区第1面S D01	ウシ	踵骨	左					60
1388	D地区第1面S D01	ウシ	踵骨	右					65
1389	C地区第1面S D03	ウシ／ウマ	上腕骨	右	筋状切傷あり				1
1390	C地区第1面S D20	ウシ／ウマ	踵骨	不明	斧様の傷				27
1391	C地区第1面S D21	ウマ	上腕骨	右	斧様の傷				37
1392	D地区第1面S D01	ウマ	踵骨	右					59
1393	D地区第1面S D01	シカ／イノシシ	四肢骨						52
1394	D地区第1面S D01	シカ／イノシシ	上腕骨	左				体部	67
1395	C地区第1面S D20	ニホンジカ	角	不明	穿孔、切傷			工具の柄	23
1396	C地区第1面S D03	ニホンジカ	脛骨	右				体部、接合	3
1397	C地区第1面S D05	ニホンジカ	踵骨	左		白色灰化			15
1398	C地区第1面S D20	ヒト	下顎	右		白色		成人	19
1399	D地区第1面S D01	ヒト	上腕骨	右	傷			イヌの噛み跡	62
1400	D地区第1面S D01	ヒト	大腿骨	右	傷				61

番号	出土位置	種　類	部　位	左右	加　工	火　熱	風化	その他	資料番号
1401	D地区第1面SD01	ヒト	大腿骨	左	傷		磨耗	遠位	63
1402	E地区第1面ST01	ヒト	頭骨他一括			白色		火葬	75
1403	C地区第1面SD05	不明				灰化			12
1404	C地区第1面SD21	不明							35
1405	C地区第1面SD05	不明							14
1406	C地区第1面SD20	不明							17
1407	C地区第1面SE03	不明			斧様の傷				43
1408	C地区第1面SD21	不明							36
1409	C地区第1面SD04	不明							6
1410	C地区第1面SD03	不明							4
1411	C地区第1面SD21	不明				白色灰化			28
1412	C地区第1面SD05	不明				灰化			11
1413	E地区第1面SD05	不明						破片多数	69
1414	C地区第1面SD03	不明							2
1415	D地区第1面SD01	不明							51
1416	C地区第1面SD05	不明				灰化			13
1417	C地区第1面SD04	不明							5
1418	D地区第1面SD01	不明				灰化			54
1419	D地区第1面SD01	不明							55
1420	D地区第1面SD01	不明							56
1421	C地区第1面SD04	不明							9
1422	C地区第1面SD05	不明							10
1423	D地区第1面SD01	不明							50
1424	D地区第1面上位包含層	不明							68
1425	C地区第1面SD04	不明							7
1426	C地区第1面SD21	不明				白色灰化			32
1427	D地区第1面SD01	不明				白色灰化			53
1428	E地区第1面SE02	不明							71
1429	D地区第1面SD01	不明							58
1430	C地区第1面SD04	不明							8
1431	D地区第1面SD01	不明							66
1432	C地区第1面SD21	不明							29
1433	E地区第1面上位包含層	不明							73
1434	E地区第1面SE04	不明							72
1435	C地区第1面SD20	不明							18

番号	出土位置	種　類	部　　位	左右	加　　工	火　熱	風化	その他	資料番号
1436	C地区第１面S D21	不明				白色灰化			34
1437	C地区第１面S D21	不明	頭蓋						31
1438	C地区第１面S D20	不明	頭骨	不明					25
1439	C地区第１面S D20	不明	不明			白色灰化			22
1440	C地区第１面S D20	不明	不明						24
1441	C地区第１面S D20	不明	不明						21

第2節　木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．はじめに

東山崎・水田遺跡は，高松市東山崎町八反地・水田に所在し，高松平野中央部の氾濫平野に位置する。本遺跡では，縄文時代晩期から近世にわたる遺構・遺物が検出されている。特に，中世末から近世前半と考えられる溝状遺構，掘立柱建物跡などからは，備前焼など陶磁器や，漆塗椀・下駄などの木製品が多く出土した。

今回の自然科学分析調査では，発掘調査担当者と協議の上，本遺跡から出土した木製品の樹種同定を行い，樹種名を知ると共に各木製品の用途の樹種構成を明らかにすることにした。

2．試料

試料は，発掘調査担当者により選択された漆塗椀・下駄・井戸材・柱材などの木製品である。時期はいずれも16～17世紀に相当すると考えられている。試料採取については当社技師が行った。同定試料の点数は合計82点（試料番号1～82）である。

なお，試料番号は当社にて作業の便宜上付し，木製品の検出した遺構や用途を表1に示した。

3．方法

剃刀の刃を用いて，試料の木口・柾目・板目の3断面の徒手切片を作成，ガム・クロラールで封入し，生物顕微鏡で観察をした。また，生物顕微鏡による同定が困難な試料については，落射蛍光顕微鏡により観察した。

4．結果

同定結果を表1に示す。試料中には，劣化が激しく樹種名まで同定が困難なもの（試料番号7，20，44，45，71，72）や類似種としたものもあるが，16種類の樹種に同定することができた。試料の細胞学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお，一般的な性質については『木の辞典第1巻～第17巻』(註1)を参考にした。

・マツ属複維管束亜属の一種（*Pinus* subgen.*Diploxylon* sp.）マツ科

（試料番号18，34～36，41，51，52，64，65，75）

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで，晩材部の幅は広く，年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく，樹脂道が認められる。放射組織は仮道管，柔細胞とエピセリウム細胞よりなり，仮道管

内壁には鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状，単列，1～15細胞高。

複維管束亜属（いわゆる二葉松類）には，アカマツ（*Pinus densiflora*），クロマツ（*P.thunbergii*），リュウキュウマツ（*P.luchuensis*）の3種類がある。このうちアカマツ，クロマツについては鋸歯状突起の形態で分けられるとの見解もあるが，今回の同定では中間型ととれるものもあったため，一括して複維管束亜属とした。

アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布するが，クロマツは暖地の海沿いに多く生育しまた古くから砂防林として植栽されてきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。材は重硬で強度が大きく，保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

・マツ属単維管束亜属類似種（cf. *Pinus* subgen. *Haploxylon* sp.）マツ科　（試料番号38～40）

早材部から晩材部への移行は緩やかで，晩材部の幅は広く，年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく，樹指道が認められる。放射組織は仮道管，柔細胞とエピセリュウム細胞よりな，分野壁孔は窓状単列，1～15細胞高。放射仮道管内壁は滑らかに見えるが，試料はいずれも劣化が激しく，確実に滑らかであると断言できないため，類似種とした。

単維管束亜属（いわゆる五葉松類）には，ハイマツ（*Pinus pumila*）チョウセンゴヨウ（P.*Koraiensis*），アマミゴヨウ（*P.armandii* var. *amanmiana*），ヒメコマツ（*P.parviflora*）がある。ハイマツは，本州（中部地方以北）・北海道の高山・寒冷地に，チョウセンゴヨウは関東・中部地方および愛媛県（東赤石山）の亜高山帯に，アマミゴヨウ（ヤクタネゴヨウ）は種子島・屋久島に特産し，ヒメコマツは北海道（日高・渡島・奥尻島）・本州・四国・九州の尾根筋や斜面に生育する常緑高木で，稀され植栽される。材の硬さは中程度で，加工や乾燥は容易，保存性は中程度である。建築・建具・器具・家具材などの用途がある。

・モミ属の一種（*Abies* sp.）マツ科　（試料番号16，37，66～69）

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで，晩材部の幅は薄く，年輪界は明瞭。樹脂細胞はないが，傷害樹脂道が認められることがある。放射仮道管はなく，放射柔細胞の壁は粗く，末端壁には，じゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は単列，1～20細胞高。試料中には劣化が激しく，的確にモミ属と同定できないものもあり，これらについてはモミ属類似種とした。

モミ属には，モミ（*Abies firma*），ウラジロモミ（*A.homolepis*），アオモリトドマツ（*A.mariesii*），シラベ（*A.veitchii*），アカトドマツ（*A.sachalinensis*）の5種があり，アカトドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州（秋田・岩手県以南）・四国・九州の低地～山地に，ウラジロモミは本州中部（福島県以南）・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯，アオモリ

トドマツは本州（福島県以北）の亜高山～高山帯に，シラベは本州中部（福島県以南）・奈良県・四国に，アカトドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に生息する。モミの材はやや軽軟で，強度は小さく，割裂性は大きい。加工は容易で保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか，建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

・スギ（*Cryptomeria japonica*）スギ科

（試料番号1，2，9，11，14，15，17，19，24，25，28，28～33，49，61，77，79）

早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は比較的広く，年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ，樹脂道はない。放射仮道管はなく，放射柔細胞の壁は滑らか，分野壁孔はスギ型で2～4個。放射組織は単列，1～15細胞高。試料中には劣化が激しく，確実にスギと同定できないものもあり，これらについてはスギ類似種とした。

スギは，本州・四国・九州に自生する常緑高木で，また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり，長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく，加工は容易，保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ，葉は線香・抹香の原料にもなる。

・コウヤマキ（*Sciadopitys vertillata*）スギ（コウヤマキ）科　（試料番号62，63）

早材部から晩材部への移行は緩やかで，年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射仮道管はなく，放射柔細胞の壁は滑らか，分野壁孔は窓状。放射組織は単列，1～5（10）細胞高。

コウヤマキは，通常コウヤマキ科に独立させる（1科）1属1種の日本特産の常緑高木である自生地は本州（福島県以南）・四国・九州に点在し，また植栽される。材はやや軽軟で割裂性は大きく，加工は容易，保存性は中程度であるが耐水性がある。各種樽桶類・土木・舟材・棺材などの用途がある。

・ヒノキ属の一種（*Chamaecyparis* sp.）ヒノキ科

（試料番号10，21，26，27，48，50，56～60，78，80～82）

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で，晩材部の幅は狭く，年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ，樹脂道はない。放射仮道管はなく，放射柔細胞の壁は滑らか，分野壁孔はヒノキ型で，1～4個。放射組織は単列，1～15細胞高。試料中には劣化が激しく，確実にヒノキ属と同定できないものもあり，これらについてはヒノキ属類似種とした。

ヒノキ属には，ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*）とサワラ（*C.pisifera*）の2種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し，また各地で植栽される常緑高木で，国内ではス

ギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軟質で加工は容易，割裂性は大きいが，強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し，また植林される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂度は大きく，加工も容易，強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため，樽や桶にするほか各種の用途がある。

・カヤ（*Torreya nucifera*）イチイ科　（試料番号74）

早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は薄く，年輪界は明瞭。樹脂細胞，樹脂道はない。放射仮道管はなく，放射柔細胞の壁は滑らか，分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1～4個。放射組織は単列，1～10細胞高。仮道管壁には対をなした螺旋肥厚が認められる。

カヤは，本州（岩手・山形県以南）・四国・九州の常緑広葉樹林中に点生する常緑高木で，樹高25～30mにもなるが生長は極めて遅い。庭木として植栽されることも多く，いくつかの変・品種がある。その材は針葉樹としては重い方で，強度は中程度，割裂性は大きく，加工は容易，保存性特に耐水性に優れる。建築・各種桶類・木地・器具・家具材など各種の用途が知られ，碁盤としては最高級品とされる。種子は食用となるほか，搾油（食用・燈用・頭髪用）されたり，駆虫薬としても使われた。

・オニグルミ類似種（Cf.*Juglans ailanthifolia*）クルミ科　（試料番号70）

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2～4個が複合，横断面では楕円形，管壁は薄い。道管は単穿孔を有している。放射組織は同性～異性III型，1～4細胞幅，1～40細胞高。柔組織は短接線状，周囲状および散在状。年輪界は明瞭。試料は劣化しており，良好な切片を作製することができなかったため，道管壁などの観察ができず，確実な同定ができなかった。

オニグルミは，北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度，加工は容易で狂いが少なく，保存性は低い。銃床として，洋の東西を通じて広く用いられるが，現在では材積が少なくなっていると思われる。この他に各種器具・家具材などの用途も知られている。種子は食用となり，栄養価に富む。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種　（*Quercus* subgen.*Lepidobalanus* sect.*Prinus* sp.）ブナ科
（試料番号23，42，46）

環孔材で孔圏部は1～2列，孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く，横断面では円形～楕円形，小道管は管壁は中庸～薄く，横断面では多角形，ともに単独。短穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性，単列，1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線

状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ節は，コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で，果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで，モンゴリナラ（*Quercus mongolica*）とその変種ミズナラ（Q.*mongolica* var. *grosseserrata*），コナラ（Q. *serrat*），ナラガシワ（Q. *alien*），カシワ（Q.*dentata*）といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に，ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に，ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で，古くから薪炭材として利用され，植栽されることも多かった。材は重硬で，加工は困難，器具・機械・樽材などの用途が知られ，薪炭材としてはクヌギ（Q. acutissima）に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり，虫えいを染料とすることもある。

・コナラ属アカガシ亜属の一種（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.）ブナ科

（試料番号13，47）

放射孔材で，管壁厚は中庸～厚く，横断面では楕円形，単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性，単列，1～15細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は短接線状および散在状。柔細胞はしばしば結晶を含む年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属（カシ類）には，アカガシ（*Quercus acuta*），イチイガシ（*Q.gilva*），アラカシ（*Q.glauca*）など7種があるが，果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木～小高木のウバメガシ（*Q.phyllyraeoides*）も，材構造上はカシ類と類似する。カシ類は，温暖帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要な構成種であり，主として西南日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで，宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強靱で，器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。また種子は食用となる。

・クリ（*Castanea crenata*）ブナ科　（試料番号3，6，8，73，76）

環孔材で孔圏部は1～4列，孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独，横断面では円形～楕円形，小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合，横断面では角張った楕円形～多角形，ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性，単列，1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し，また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で，強度は大きく，加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材，椙木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ，果実は食用となる。各地の遺跡からの出土する例の多い樹種である。

・ニレ属の一種（*Ulmus* sp.）ニレ科　（試料番号22）

環孔材で孔圏部は1～3列，孔圏外で急激に管径を減じのち漸減，塊状に複合し接線・斜方向の文様をなす。大道管は管壁厚は中庸，横断面では円形～楕円形，単独，小道管は管壁厚は中庸～薄く，横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，小道管内壁には螺旋肥厚が認められる。放射組織は同性，1～6細胞幅，1～40細胞高。柔組織はターミナル状および周囲状。年輪界は明瞭。

ニレ属にはアキニレ（*Ulmus parvifolia*），ハルニレ（*U.japonica*），オヒョウ（*U.lacin－iata*）の3種がある。アキニレは本州（長野・静岡県以西）・四国・九州に，ハルニレ・オヒョウは北海道・本州・四国・九州に生育するが，ハルニレは北海道・本州北部に多く，オヒョウは北海道に多いが，他の地域では少ない。ハルニレの材は中程度～やや重硬で，割裂性は小さく，加工はやや困難，保存性は低い。器具・家具・建築材などに用いられるほか，樹皮は布・縄・紙の原料となる。

・サクラ属類似種（cf. *Prunus* sp.）バラ科　（試料番号43）

環孔性を帯びた散孔材で管壁厚は中庸，横断面では角張った楕円形，単独または2～8個が複合，晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，内壁には螺旋肥厚が認められる。放射組織は異性III型，1～4細胞幅，1～30細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界はやや不明瞭。試料は劣化しており，特に柾目面の観察が十分に行えなかったため，類似種とした。

サクラ属には，ヤマザクラ（*Prunus janasakura*）やウワミズザクラ（*P.grayana*）など15種が自生し，多くの変・品種がある。また，モモ（*P. persica*）やスモモ（*P.salicina*）など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。多くは落葉性の高木～低木であるが，バクチノキ（*P.zippeliana*）リンボク（*P.spinulosa*）の常緑樹も含まれる。このうちヤマザクラは，本州（宮城・新潟県以南）・四国・九州の山野に分布する落葉高木で，材は中程度～やや重硬・強靱で，加工は容易，保存性は高い。各種器具材をはじめ，機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。また樹皮は樺皮細工に用いられる。

・トチノキ（*Aesculus turbinata*）トチノキ科　（試料番号53，54）

散孔材で管壁は厚く，横断面では角張った楕円形，単独または2～3（5）個が複合する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，放射組織との間では網目状～篩状となり，内壁には螺旋肥厚が認められる。放射組織は同性，単列，1～15細胞高で階層状に配列し，肉眼ではリップル・マークとして認められる。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

トチノキは北海道（南西部）・本州・四国・九州の主として谷沿いの肥沃地に生育する落葉高木で，東北地方に多く，九州には少ない。材は軽軟で，加工・乾燥が容易で，耐朽性は小さい。器具・家具材や旋作材・木地などに用いられる。種子は澱粉を多く含み食用となるほか，タンニン原料ともなる。

・トネリコ属の一種（*Fraxinus* sp.）モクセイ科　（試料番号12）

環孔材で孔圏部は2～3列，孔圏外で急激に管径を減じのち漸減する。道管壁は厚く，横断面では円形～楕円形，単独または2個が複合，複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し，壁孔は小型で蜜に交互状に配列，放射組織との間では網目状～篩状となる。放射組織は同性（～異性III型），1～3（5）細胞幅，1～40細胞高であるが，時に20細胞高前後のものが多い。柔組織は周囲状およびターミナル状，時に階層状の配列を示す。年輪界は明瞭。

トネリコ属には，シオジ（*Fraxinus platypoda*），トネリコ（*F.japonica*），アオダモ（*F.langinosa*）など約8種が自生する。このうちヤマトアオダモ（*F.longicuspis*）・マルバアオダモ（*F.sieboldiana*）・アオダモは北海道・本州・四国・九州に，ヤチダモ（*F.mandshurica var.japonica*）は北海道・本州（中部地方以北）に，トネリコは本州（中部地方以北）に，シオジは本州（関東地方以西）・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である材の性質は種によって異なるが，一般的には中庸～やや重硬で，靱性があり，加工は容易で，建築・器具・家具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。

・キリ類似種（cf.*Paulownia tomentosa*）ゴマノハグサ科　（試料番号55）

環孔材であるが，孔圏部はやや不明瞭であり，孔圏外で管径を漸減させる。横断面は角張った円形～楕円形であり，単独または2～3個が複合する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，1～3細胞幅，1～15細胞高。柔組織は翼状～連合翼状となる。年輪界は明瞭。試料はかなり脆く，板目の良好な切片が作製できず，観察が十分行えなかったため類似種とした。

キリは中国中部地域原産とされる（九州に自生するという見解もある）落葉高木で，各地に植栽されるが東北・関東地方北部などで良好に生育する。材は国産有用材中最も軽軟で，加工は容易，狂いや割れが少ない，箪笥をはじめとする家具材，各種器具・建具・建築・下駄材など多様な用途が知られている。

5．考察

同定の結果，今回の木製品の樹種はスギやヒノキ属など針葉樹が多い。また，広葉樹は12種類の樹種に同定されたが，クリを除いて，特に多様されている樹種はない。今回同定された樹種の

多くは，香川県下川津遺跡の木製品の樹種構成（註7・8）とほぼ共通する。ヒノキ属は能城・鈴木（註8）でも指摘しているように，現在の香川県内において天然に分布するところはほとんど見られない。古墳時代以降において畿内周辺でヒノキ・コウヤマキなどが選択的に伐採され，その量が極端に減っていることなどの植生への干渉が考えられている（註6）。善通寺市永井遺跡の調査結果から，縄文時代の県内にはヒノキ属が多少なりとも生育していたとされる調査例（註3）があり，現在の植生から考えて，近世までにヒノキ属の伐採が行われたことは充分考えられる。また，ヒノキは近世以降にスギとともに植林されていた可能性もあるが，本地域では花粉分析などを応用した古環境に関する分析調査・解析例がないために断定はできない。したがって，今回同定したヒノキ属が，本遺跡周辺地域に自生もしくは植林したものを利用したのか，他地域からの搬入によるものなのか判断することは難しい。また，スギ・マツ属複維管束亜属の一種・モミ属の一種は，現在の植生においていずれも香川県内に見られる種である。

一方，広葉樹については同定された樹種が多いものの，そのほとんどは現在の植生において見ることができる。しかし，トチノキ・キリについては，能城・鈴木（註8）により他地域からの搬入が指摘されている。キリはいつ頃から高級材として使用されるようになったのかは現在のところ不明であるが，もともと日本固有種ではないとされていることから，製品または原木の搬入地周辺での植栽の可能性が考えられる。

次に主な木製品の用材について検討する。用途別樹種構成を表2に示した。全体の約半数を占めるスギ・ヒノキ属は様々な用途として用いられている。その中でもスギは折敷に，ヒノキ属の一種は井戸材や曲物に多く用いられている。スギは現在でも幅広く利用されるが，当時でも様々な用途に用いられていたことがわかる。ヒノキ属（特にヒノキ）は，現在では高級材として扱われているが，中世～近世初頭頃にはスギと同じように様々な用途に用いられていたことが，愛知県の清洲城下町遺跡から出土した木製品の樹種同定（註4）で指摘している。しかし，ヒノキ属の曲物は，下川津遺跡でも多く出土している（註8）ことや，島地・伊東（註6），伊東（註2）の研究で曲物や井戸材の樹種にヒノキ属が多用されていることを考えると，材の性質上，曲物や井戸材に適していたと考えられよう。

柱材にはマツ属複維管束亜属がもっとも多く，他に単維管束亜属類似種，モミ属，コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種，サクラ属類似種がある。これらの樹種は強度があり，柱材として用いられる例も多い。

漆塗椀ではクリが最も多く，他にコナラ節，ニレ属，トチノキ，トネリコ属がある。これらはいずれも椀の樹種として普遍的に見られる。特にクリは島地・伊東（註6）や伊東（註2）でケヤキとともに最も多く使用されている樹種である。同定されたクリ7点のうち6点が漆塗椀であった。また，トチノキの漆塗椀は，清洲城下町（註4）や白鷗高校遺跡（註9）から大量に出土している。これらのことから漆塗椀の樹種は，選択的に用いられたと考えられる。トチノキは能城・鈴木

(註8)により他地域からの搬入の可能性が指摘されているが，材同定の結果だけでなく椀の形態的な特徴などから考えていく必要がある。

下駄材では，マツ属複維管束亜属が最も多く，他にカヤ，アカガシ亜属，キリ類似種がある。鈴木・能代(註9)によれば，マツ属複維管束亜属の下駄は，近世以降の関東地方では最も廉価で庶民的なものであったと考えられている。また，今回の同定結果ではキリ類似種が1点出土している。キリの下駄は現在では最高級品とされている。キリの下駄が出土した例は，いわき市戸田条里遺跡（江戸時代後期に相当する）から出土した1点のみであり(註5)，きわめて類例の少ない樹種である。

以上のように，今回の樹種同定では針葉樹が主に用いられている傾向が窺われた。木製品に対する樹種構成を検討する際には，在地性か搬入されたものなのかが問題となる。今後は木製品の樹種の類例を増やし，データの蓄積を行い検討することに加え，花粉分析・種子同定などを応用し，周辺地域の古植生を明らかにすることも望まれる。

註1　平井信二『木の事典　第1巻～第17巻』かなえ書房（1979～1982）

2　伊東隆夫「日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II」『木材研究・資料，№26』p．91－189（1990）

3　能城修一・鈴木三男「善通寺市永井遺跡の木材化石群集」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第九冊　永井遺跡』p．823－864，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団（1990）

4　パリノ・サーヴェイ株式会社「材質（樹種）同定」『(財) 愛知県埋蔵文化財調査センター調査報告　第17集　清洲城下町遺跡』p．98－101，財団法人愛知県埋蔵文化財センター（1990）

5　パリノ・サーヴェイ株式会社「江戸時代木製品の材同定」『いわき市埋蔵文化財調査報告第29冊　戸田条里遺跡』p．178－180，福島県いわき市農地事務所・福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団（1991）

6　島地　謙・伊東隆夫　編『日本の遺跡出土木製品総覧』p．296，雄山閣（1988）

7　島地　謙・林　昭三「下川津遺跡出土木製品の樹種分析委託報告　報告1　昭和61年度調査の分析委託結果」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII　下川津遺跡』第2分冊p．520－532，香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団（1990）

8　能城修一・鈴木三男「下川津遺跡出土木製品の樹種分析委託報告　報告2　昭和63年度調査の分析委託結果」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII　下川津遺跡』第2分冊p．533－567，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団（1990）

9　鈴木三男・能城修一「木製品の樹種」『白鷗』p．208－228，都立学校遺跡調査会（1990）

第5表　東山崎・水田遺跡出土木製品の樹種

試料番号	報告番号	出土位置	種類	樹種
1	316	C地区第1面SD05	形式	スギ類似種
2	317	C地区第1面SD05	部材	スギ類似種
3	313	C地区第1面SD05	漆塗椀	クリ
4	315	C地区第1面SD05	漆塗椀	クリ類似種
5	311	C地区第1面SD05	下駄	クリ
6	312	C地区第1面SD05	漆塗椀	クリ
7	310	C地区第1面SD05	下駄	広葉樹（環孔材）
8	314	C地区第1面SD05	漆塗椀	クリ
9	318	C地区第1面SD05	楔	スギ
10	377	C地区第1面SD20	部材	ヒノキ属の一種
11	458	C地区第1面SD21	折敷	スギ
12	475	C地区第1面SD21	漆塗椀	トネリコ属の一種
13	487	C地区第1面SD21	部材	コナラ属アカガシ亜属の一種
14	470	C地区第1面SD21	底板	スギ
15	480	C地区第1面SD21	木簡	スギ
16	479	C地区第1面SD21	呪符木簡	モミ属の一種
17	477	C地区第1面SD21	呪符木簡	スギ類似種
18	457	C地区第1面SD21	下駄	マツ属複維管束亜属の一種
19	467	C地区第1面SD21	不明	スギ類似種
20	469	C地区第1面SD21	底板	針葉樹
21	468	C地区第1面SD21	底板	ヒノキ属の一種
22	473	C地区第1面SD21	漆塗椀	ニレ属の一種
23	474	C地区第1面SD21	漆塗椀	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
24	460	C地区第1面SD21	折敷	スギ
25	471	C地区第1面SD21	底板	スギ
26	465	C地区第1面SD21	折敷	ヒノキ属類似種
27	466	C地区第1面SD21	折敷	ヒノキ属類似種
28	461	C地区第1面SD21	折敷	スギ
29	462	C地区第1面SD21	折敷	スギ類似種
30	463	C地区第1面SD21	折敷	スギ
31	481	C地区第1面SD21	札	スギ類似種
32	459	C地区第1面SD21	折敷	スギ類似種
33	464	C地区第1面SD21	折敷	スギ
34	58	C地区第1面SB07-SP68	柱	マツ属複維管束亜属の一種
35	53	C地区第1面SB04-SP32	柱	マツ属複維管束亜属の一種
36	193	C地区第1面SP276	柱	マツ属複維管束亜属の一種
37	165	C地区第1面SP250	柱	モミ属の一種
38	—	C地区第1面SB07-SP18	柱	マツ属単維管束亜属類似種
39	—	C地区第1面SP254	柱	マツ属単維管束亜属類似種
40	—	C地区第1面SP270	柱	マツ属単維管束亜属類似種
41	—	C地区第1面SP250	柱	マツ属複維管束亜属の一種

試料番号	報告番号	出　土　位　置	種　類	樹　　種
42	－	C地区第1面S P284	柱	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
43	－	C地区第1面S P283	柱	サクラ属類似種
44	－	C地区第1面S B15-S P176	柱	広葉樹（散孔材）
45	－	C地区第1面S P288	柱	広葉樹（環孔材）
46	900	D地区第1面S D01	漆塗椀	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
47	880	D地区第1面S D01	手斧の柄	コナラ属アカガシ亜属の一種
48	888	D地区第1面S D01	容器蓋板？	ヒノキ属類似種
49	891	D地区第1面S D01	容器蓋板？	スギ
50	895	D地区第1面S D01	桶側板	ヒノキ属類似種
51	883	D地区第1面S D01	下駄	マツ属複維管束亜属の一種
52	884	D地区第1面S D01	下駄	マツ属複維管束亜属の一種
53	899	D地区第1面S D01	漆塗椀	トチノキ
54	897	D地区第1面S D01	漆塗椀	トチノキ
55	882	D地区第1面S D01	下駄	キリ類似種
56	889	D地区第1面S D01	容器蓋板？	ヒノキ類似種
57	881	D地区第1面S D01	下駄歯	ヒノキ属類似種
58	583	D地区第1面S E01	底板	ヒノキ属の一種
59	887	D地区第1面S D01	蓋板？	ヒノキ属類似種
60	886	D地区第1面S D01	蓋板？	ヒノキ属類似種
61	892	D地区第1面S D01	桶側板	スギ
62	893	D地区第1面S D01	桶側板	コウヤマキ
63	894	D地区第1面S D01	桶側板	コウヤマキ
64	1054	E地区第1面S E02	下駄	マツ属複維管束亜属の一種
65	1053	E地区第1面S E02	下駄	マツ属複維管束亜属の一種
66	1069	E地区第1面S E03	底板	モミ属類似種
67	1072	E地区第1面S E03	底板	モミ属の一種
68	1071	E地区第1面S E03	不明	モミ属の一種
69	1070	E地区第1面S E03	底板	モミ属の一種
70	885	D地区第1面S D01	下駄	オニグルミ類似種
71	879	D地区第1面S D01	横櫛	広葉樹（散孔材）
72	878	D地区第1面S D01	横櫛	広葉樹（散孔材）
73	898	D地区第1面S D01	漆塗椀	クリ
74	907	D地区第1面S D01	木栓	カヤ
75	908	D地区第1面S D01	独楽	マツ属複維管束亜属の一種
76	896	D地区第1面S D01	漆塗椀	クリ
77	1100	E地区第1面S E07	曲物	スギ類似種
78	1099	E地区第1面S E07	曲物	ヒノキ属類似種
79	1095	E地区第1面S E05	曲物	スギ類似種
80	1094	E地区第1面S E05	曲物	ヒノキ属の一種
81	1093	E地区第1面S E05	曲物	ヒノキ属類似種
82	1101	E地区第1面S E07	曲物	ヒノキ属類似種

第5章　まとめ

第1節　遺構

1．遺構の廃絶時期

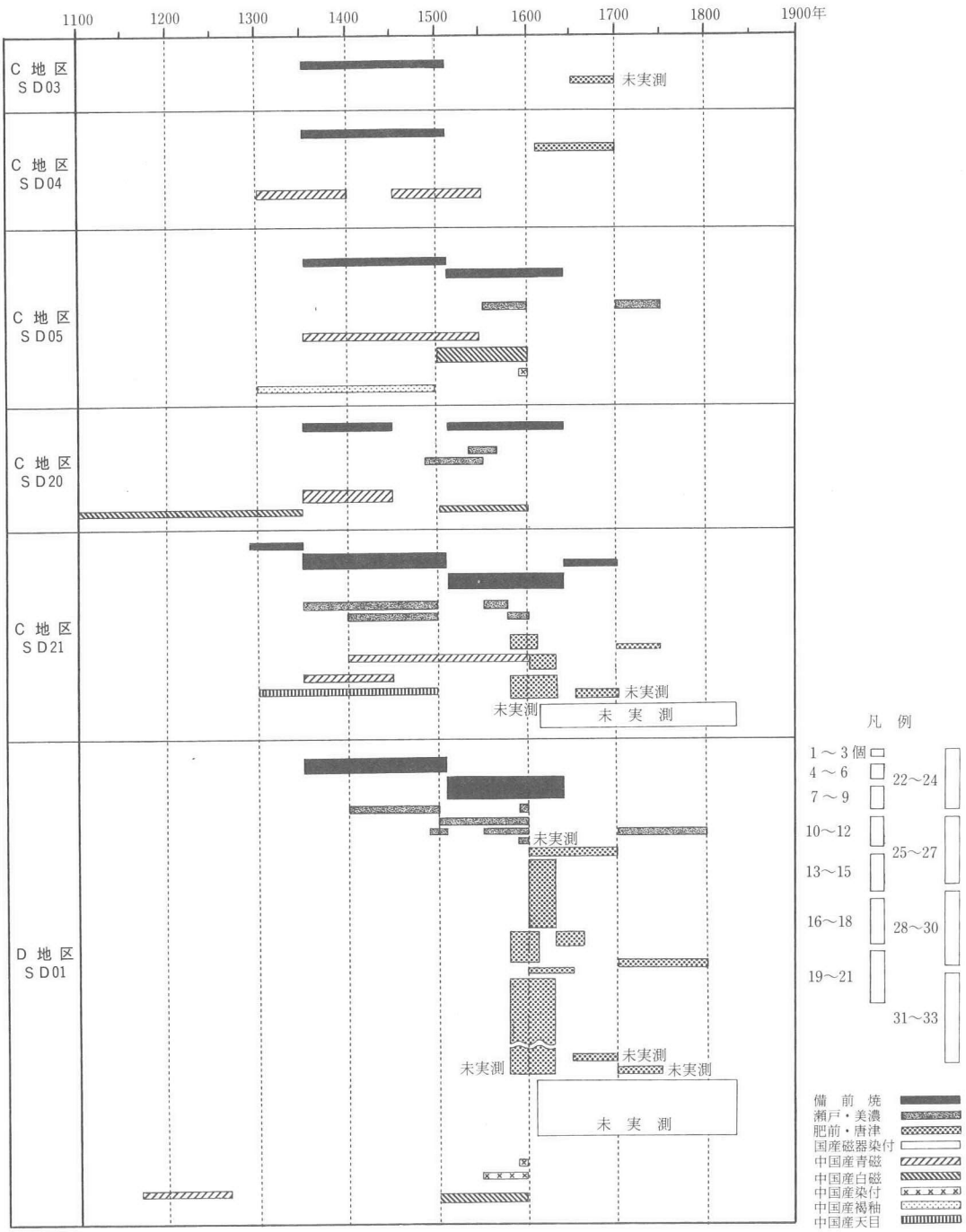
本遺跡ではA・B地区においては中・近世の田畑，C～E地区においては中・近世の屋敷地が検出された。このうち，A・B地区で検出された田畑については少量の遺物が出土しただけで，詳細な時期は不明であるが，13世紀から18世紀代までのものであると考えることができる。（第7表）。

また，A・B地区の東部に位置するC～E地区では屋敷地を構成する掘立柱建物からはほとんど遺物は出土しなかった。屋敷に付随する井戸からの出土遺物もあまり多くはなく，時期のわかるものとしては陶磁器が少量みられる程度であった。陶磁器は土器に比べて割れにくく，かなり長期間使用に耐え得るので，伝世されているものが多い。このため出土した遺物の生産地での時期が遺構の廃絶時期を示すものとは限らないので，各地区で検出された屋敷の時期については井戸・掘立柱建物の出土遺物からは明確にしがたいと考えられる。なお，これらの屋敷の周辺には土器・陶磁器を多量に含む幅3～5m程度の溝が数本検出された。これらの溝は屋敷地が検出された第1面よりも下層から掘り込まれており，屋敷地形成以前からみられたものである。おそらく周辺の田畑に潅漑するために掘られたものであると思われるが，屋敷が存在した時期においてはこれらの溝によって屋敷地の区画がなされたものと考えられる。これらの溝からはかなりまとまった量の遺物が出土していることから，遺物の時期検討により溝の機能した時期や廃絶時期を推定することが可能である。これらの溝に遺物を多量に廃棄したのは付近に集落が存在した時期であると考えられるので，屋敷の存在する時期は溝の埋土に含まれる遺物の中で，最も量の多い遺物の年代であると考えることができる。なお，比較的短時間で廃棄されたと考えられる土師質土器については本遺跡周辺の遺跡のまとまった資料がないため，比較検討ができにくい。そこで，生産地での編年研究が行なわれている陶磁器を中心に各遺構の時期を考えたい。なお，第6表は各遺構出土の陶磁器を産地別に分けて，その生産地での時期を示した表である。ここでは本書に掲載した遺物と，未実測遺物のうち時期が大まかにわかるものを表に示した。以下，この表をもとにして各遺構の廃絶時期について検討する。

C地区第1面SD03

C地区の屋敷地の西寄りを南北に走る幅3.5m，深さ0.6mの溝である。コンテナ2箱程度の遺

第6表　C・D地区溝出土陶磁器



物が出土した。陶磁器は備前焼が数点みられる。擂鉢の形態から14世紀後半から16世紀初頭の備前焼第IV期のものと考えられる。このほかに未実測ではあるが，17世紀後半の唐津鉄釉の小片が１点，中国産白磁２点，中国産青磁１点がみられる。これらの遺物から，本遺構出土の陶磁器の下限は17～18世紀までであると考えられる。

Ｃ地区第１面ＳＤ04

Ｃ地区の屋敷地の西側を南北に走り，屋敷の西側を区切る溝である。幅2.5m，深さ0.7mを測る。コンテナ２箱の遺物が出土した。陶磁器は備前焼，肥前白磁，中国産青磁がみられる。備前焼は甕の時期から14世紀後半から16世紀初頭の備前焼第IV期のものと考えられる。肥前白磁は皿で，17世紀代のものである。中国産青磁は線描き蓮弁文が施される碗，口縁部が端反りする鉢がみられる。前者は15世紀後半から16世紀前半，後者は14世紀代のものである。このほか未実測のものとして中国産白磁が１点みられる。これらの遺物の時期から，ＳＤ04は17世紀代までは機能していたことが考えられる。

Ｃ地区第１面ＳＤ05

Ｃ地区の屋敷地の中央をクランク状に南北から東西に走る溝である。幅２～３ｍ，深さ0.4～0.5mを測る。コンテナ10箱の遺物が出土した。陶磁器は備前焼，瀬戸・美濃，中国産陶磁器が出土した。備前焼は擂鉢・壺・徳利・甕がみられる。擂鉢は14世紀後半から16世紀初頭の備前焼第IV期と16世紀前半から17世紀前半の第Ｖ期，壺・甕は第IV期のものである。瀬戸・美濃は鉄釉皿，灰釉碗がみられる。鉄釉皿は口縁部が折縁であることから大窯４段階，16世紀中葉から後半のものである。灰釉碗は溝の埋土下層から出土しており，18世紀前半のものである。中国産陶磁器は青磁皿・碗，白磁皿・碗，染付皿・碗，褐釉壺が出土した。青磁皿・碗は14世紀後半から16世紀前半，白磁皿・碗は16世紀代，染付皿・碗は16世紀末のものである。また，褐釉壺は14世紀から15世紀代のものである。これらの遺物の時期からＳＤ05は16世紀後半の遺物を最も多く含むことがわかった。なお，唐津はみられないが，１点だけ18世紀前半の瀬戸・美濃を含む。未実測のものについては16世紀代までの中国産白磁・青磁が数点みられる。以上のことから，本遺構からの出土遺物の中で16世紀後半の遺物が最も多いが，溝は18世紀頃まで機能したものと考えられる。

Ｃ地区第１面ＳＤ20

Ｃ地区の屋敷地の東側を走る溝である。幅4.5m，深さ1.0mを測る。コンテナ15箱の遺物が出土した。陶磁器は備前焼，瀬戸・美濃，中国産陶磁器が出土した。備前焼は擂鉢・壺がみられる。擂鉢は14世紀後半から15世紀前半の備前焼第IV期前半，16世紀前半から17世紀前半の第Ｖ期のものである。瀬戸・美濃は灰釉皿・卸目付灰釉皿がみられる。灰釉皿は16世紀中葉と15世紀末から16世紀中葉のものである。卸目付灰釉皿は時期不明である。中国産陶磁器は青磁碗・盤・鉢，白磁碗・盤がみられる。青磁碗は14世紀後半から15世紀中葉のものが３点みられる。また，青磁盤

・鉢は14世紀後半から15世紀中葉のものである。白磁碗は12世紀から14世紀前半のものと，16世紀代のものがみられる。白磁盤は12世紀から14世紀前半のものである。未実測の遺物は瀬戸・美濃鉄釉陶器，中国産白磁の破片が1点ずつみられる。本遺構からも唐津は1点も出土しておらず，出土した陶磁器の中で最も新しい遺物は備前焼第Ⅴ期の16世紀前半から17世紀初頭のものと，16世紀中葉の瀬戸・美濃であることから，遺構の廃絶時期は少なくとも16世紀中葉以降であると考えられる。また，土層断面の観察からＳＤ20の埋没は，明らかに第1面よりも上位であること（第143図）から，もう少し後の時期まで機能していた可能性も考えられる。

C地区第1面ＳＤ21

C地区の屋敷地の東，ＳＤ20の東側を南北に走る溝である。幅2.4～4.3m，深さ1.2mを測る。コンテナ20箱の遺物が出土した。陶磁器は備前焼，瀬戸・美濃，唐津，肥前，国産磁器，中国産陶磁器が出土した。備前焼は擂鉢・甕・壺・灯明皿がみられる。擂鉢は13世紀末から14世紀中葉の備前焼第Ⅲ期のものが1点，14世紀後半から16世紀初頭の第Ⅳ期のものが2点，16世紀前半から17世紀前半の第Ⅴ期のものが3点である。甕は第Ⅲ期・第Ⅳ期・第Ⅴ期のものがそれぞれ1点ずつ，壺は第Ⅳ期・第Ⅴ期のものが1点ずつみられる。灯明皿は17世紀代のものである。瀬戸・美濃は皿または香炉と考えられるもの，灰釉皿，天目碗がみられる。皿または香炉と考えられるものは14世紀後半から15世紀末のものである。灰釉皿は折縁皿1点と丸皿が1点がみられる。折縁皿は16世紀末のもので，丸皿は16世紀第3四半期のものである。天目碗は15世紀代のものである。唐津は鉄絵皿，灰釉皿・碗がみられる。16世紀末の鉄絵皿は1点，同じく16世紀末の口縁部が丸く終わり，胎土目をもつ皿・碗は4点みられる。また，口縁部が溝縁で，砂目をもつものは6点みられる。京焼風陶器は18世紀代のものである。中国産陶磁器は青磁碗・盤，天目碗がみられる。青磁碗は2点みられる。14世紀後半から15世紀中葉のものと15～16世紀のものである。青磁盤は2点みられるが，いずれも14世紀後半から15世紀中葉のものである。天目碗は14～15世紀のものである。また，このほかに未実測であるが，17世紀前半から18世紀，あるいは19世紀に及ぶ可能性のある国産磁器染付の体部破片が8点，また，京焼風陶器の破片1点，唐津の破片7点，瀬戸・美濃の灰釉皿あるいは碗の破片1点，瀬戸・美濃鉄釉皿あるいは天目碗の破片2点，中国産青磁の破片2点，白磁1点，産地不明の白磁1点がみられる。この中で，国産磁器染付，唐津，京焼風陶器は確実に16世紀末以降のものである。また，出土した陶磁器の中で最も新しいものは17世紀前半から19世紀に及ぶ可能性のある国産磁器染付である。これらは溝の埋土の上面から深さ0.5mの粗砂層から出土した。国産染付が入り込んだ時期に溝は機能していた可能性が高い。このことから，ＳＤ21の廃絶は18世紀から19世紀の間であると考えられる。

D地区第1面ＳＤ01

D地区の屋敷地の西側を走る溝である。幅1.6～3.2m，深さ0.7～0.8mを測る。陶磁器は備前焼，瀬戸・美濃，唐津，肥前，中国産陶磁器が出土した。備前焼は皿・壺・擂鉢がみられる。皿

は備前焼第Ⅴ期のものが１点，壺は第Ⅳ期のものが１点，第Ⅴ期のものが２点ある。擂鉢は第Ⅳ期のものが３点，第Ⅴ期のものが２点ある。甕は第Ⅳ期のものが１点，第Ⅴ期の水屋甕が２点ある。瀬戸・美濃は灰釉皿，灰釉卸皿，天目碗，鉄釉小瓶がみられる。灰釉皿は15世紀末から16世紀初頭のもの１点，16世紀末のもの１点，16世紀後半のもの１点，灰釉卸皿は15世紀代，天目碗は18世紀代，鉄釉小瓶は16世紀代である。唐津は16世紀末のもので，口縁部が丸く終わる胎土目あるいは鉄絵の灰釉皿あるいは碗，鉢が10点，17世紀前半のもので，口縁部が溝縁に終わるものや砂目をもつものが25点，17世紀代の鉢が１点，17世紀前半の天目碗が１点ある。また，17世紀前半の肥前染付皿・碗は６点，17世紀前半の染付瓶１点，17世紀第２四半期の染付または白磁碗，染付碗，青磁碗，天目型掛分碗は６点，18世紀代の陶胎染付碗は１点ある。中国産陶磁器は12世紀後半から13世紀中葉の青磁碗３点，16世紀代の白磁皿３点，16世紀後半以降の染付碗・皿２点，16世紀末の染付皿１点がある。このほか，未実測のものとして，瀬戸・美濃志野皿１点，唐津134点，唐津天目碗１点，唐津刷毛目１点，国産磁器染付20点前後，京焼風陶器３点前後，中国産白磁５点前後，中国産青磁６点前後，中国産染付６点前後がみられる。唐津は鉄絵のものが少量含まれるが，圧倒的に多いのは砂目をもつものである。国産磁器染付は小片のため時期産地は不明である。以上のように，出土遺物中には唐津が多量に含まれており，染付も少量みられるが唐津に比べると量がかなり少ない。このように出土した陶磁器の中で16世紀末から17世紀前半頃のものが最も多く，その殆どを占めることから，隣接地には16世紀末から17世紀前半頃に屋敷が営まれたものと考えられる。また，18世紀代の陶胎染付碗，瀬戸・美濃天目碗を含むことから，ＳＤ01は18世紀頃までは機能していたものと考えられる。

以上のようにＣ・Ｄ地区の集落を取り巻く溝の廃絶時期を検討したが，これらの溝は唐津・肥前陶磁器を多量に含んでおり，18～19世紀頃までは機能したと考えられるＣ地区ＳＤ21・Ｄ地区ＳＤ01と17世紀代頃までは機能したと考えられるＣ地区ＳＤ03・ＳＤ04・ＳＤ05・ＳＤ20に分けられる。また，Ｃ地区を走る溝の中でＳＤ03・ＳＤ04・ＳＤ05・ＳＤ20については16世紀末以後に生産された唐津などの陶磁器は少量出土しているものの，唐津・肥前を多量に含む溝は集落の東側を走るＳＤ21だけである。ＳＤ03・04・05・20には16世紀末以後の陶磁器はほとんどみられないことから，唐津・肥前がもたらされる以前の16世紀末頃，Ｃ地区の屋敷地は廃絶したものと考えられる。屋敷地形成の上限についてはＣ－２区の第１面下位層から15世紀代の中国産白磁皿が出土していることから，少なくとも15世紀以降であることは確実である。また，屋敷地内で第Ⅴ期の備前焼が出土した遺構は多く，16世紀代の瀬戸・美濃も多く含むことから屋敷地の上限は16世紀前半以降におさえられるものと考えられる。したがって，Ｃ地区の屋敷地については16世紀前半以降から末にかけてのものであると考えられる。

Ｄ地区ＳＤ01については出土した陶磁器の中で，16世紀末から17世紀前半の唐津・肥前がその大部分を占めることから，Ｄ地区の屋敷地はＣ地区よりも後まで残り，16世紀末から17世紀前半

まで営まれたものと考えられる。

2．遺構の変遷

本遺跡はB地区を中心とする微高地と，D地区からE地区にかけて存在する微高地と，この微高地に挟まれた低位部から成り立つ。本遺跡は集落が形成される以前は氾濫原であったが，この氾濫原はB地区を中心とする流れとD地区とE地区の間を中心とする流れによって形成されたものである。

本遺跡の遺構は中・近世の集落と，田畑に分けられる。本遺跡においては中世頃までは氾濫原であったが，まず13世紀前半から15世紀初頭にD地区からE地区において掘立柱建物によって構成される集落が営まれた。この集落は100年程で廃絶するが，16世紀に入ると再びE地区に集落が営まれ，新たにC地区にも集落が営まれる。C・E地区の集落は16世紀末頃には廃絶するが，16世紀末にはD地区にも集落が営まれる。これらの集落廃絶後は遺構は希薄になり，C・D地区において井戸が数基みられるだけである。また，これらの集落の西側に位置するA・B地区においては中世あるいは近世において水田・畑が営まれる（第7表）。

以上のように本遺跡においては数時期にわたる中・近世の集落と田畑が営まれたが，C～E地区の集落部分についてはまとまりのある各期を次のように設定して，集落の推移について詳細に検討を行う。

第1期　13世紀前半から15世紀初頭

第2期　16世紀前半から末

第3期　16世紀末から17世紀代

第4期　18世紀代

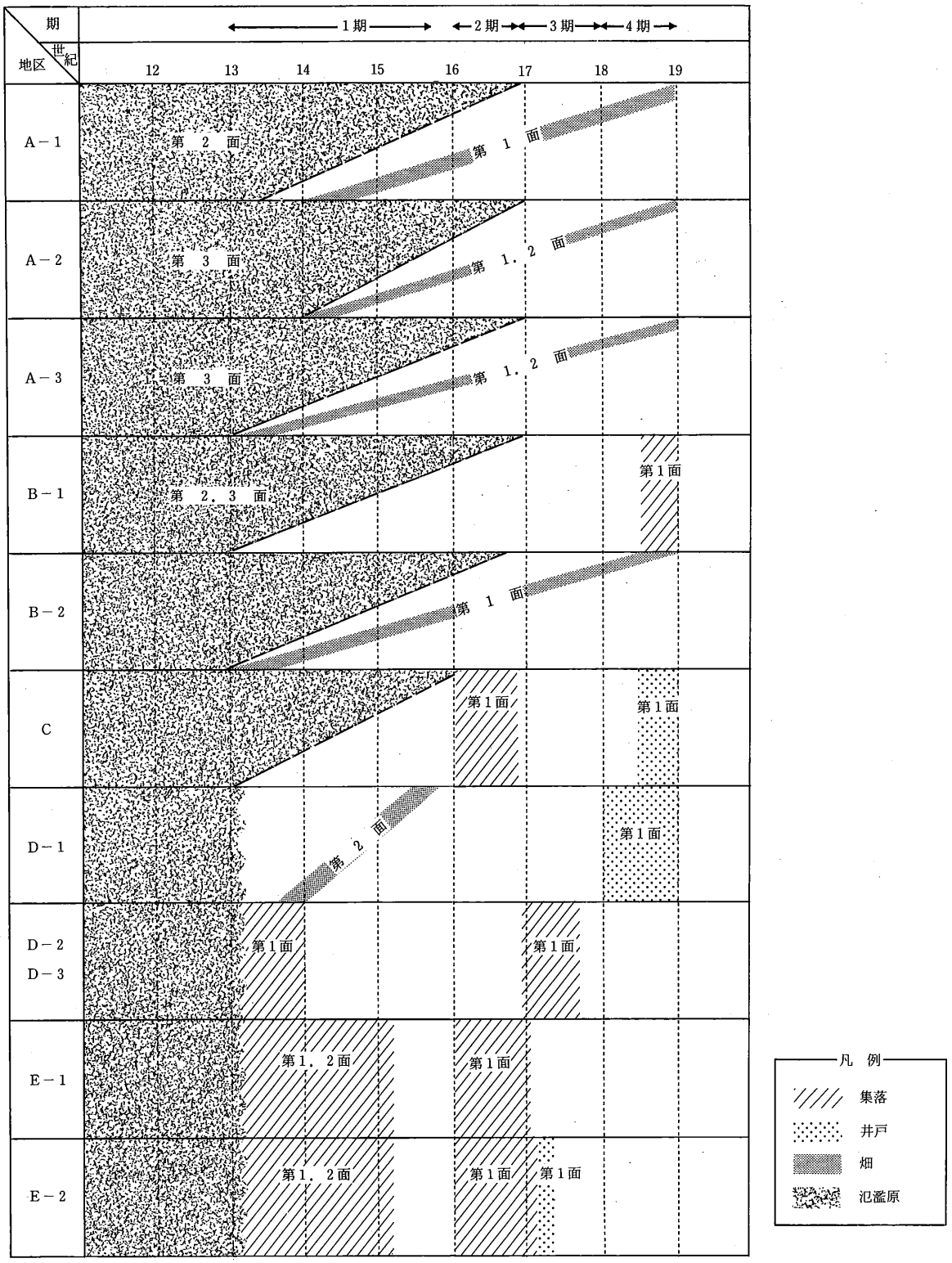
第1期　13世紀前半から15世紀初頭

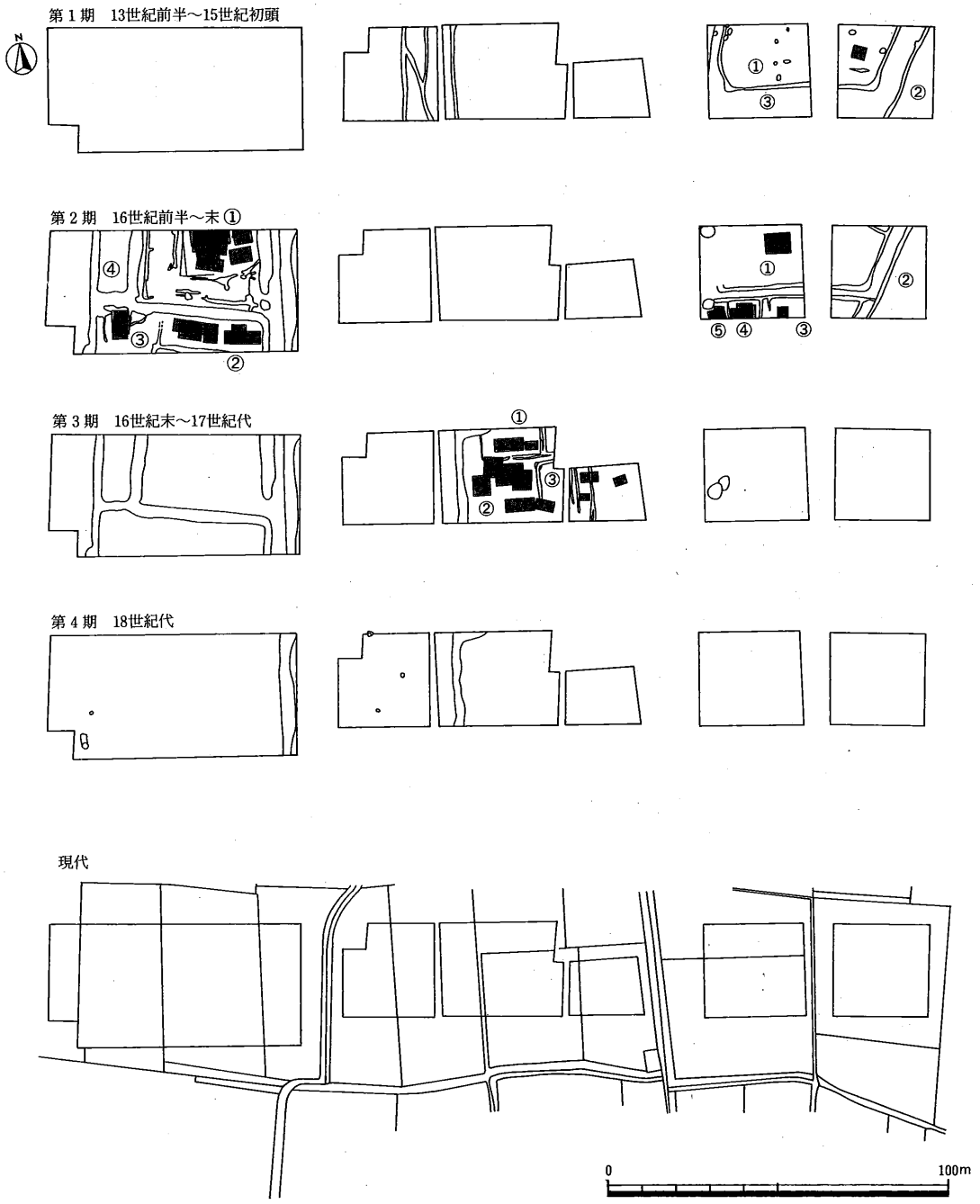
この期においてはすでに河川の流れが安定し，E地区に集落が営まれる。また，D地区の中でも低位部であるD－1区に田畑の潅漑に関係すると考えられる浅い溝が掘られ，D－2・3区では土坑がみられる。E地区の集落は溝に囲まれており，掘立柱建物により構成されている。

E地区　E－2区では遺構面は2面存在するが，E－1区においては上層からの攪乱のため，かなり削平を受けており，第1面と第2面を同じ遺構面で検出した。E－2区では第1面において13世紀前半から15世紀初頭と，16世紀代，第2面では13世紀前半から15世紀初頭の遺構が検出された。出土遺物などからSD01・02・04・06・10・17，SK02・04・05・07・11・18・19，SE05・06・07，SB11がこの期に属する遺構であると考えられる。なお，SD04・06は13世紀前半から15世紀初頭に掘られたのち，16世紀にも再び掘り直されて使用されている。

この期においてはコの字状にSD02・04・06が廻り，東・南・西を画し，この東側には南北にSD10が走り，東西を画している。これらの溝は幅1m前後，深さ0.2m前後を測る。これらの溝

第７表　東山崎・水田遺跡の変遷





第371図　東山崎・水田遺跡C～E地区の変遷（1/2,000）

で区切られた地区を北部中央から右回りに①地区，②地区，③地区とする。①地区には３間×４間の建物であるＳＢ11がみられる。ＳＢ11は床はもたない。建物の北西側と南側には２基の井戸ＳＥ05・ＳＥ06がある。また，掘立柱建物の西部には土坑が数基みられる。このうち，平面形が長方形のものが３基みられる。これらの土坑は底面が平坦なことから，墓である可能性も考えられる。また，②・③地区においては多数の柱穴が検出されているが，この期の掘立柱建物の復元は不可能であった。

第２期　16世紀前半から末

この期においてはＥ地区とＣ地区において集落が営まれる。

Ｅ地区　Ｅ地区の第１面で検出された16世紀の遺構はＳＤ04・05・06・08・09・13，ＳＥ01・03，ＳＢ02～10がみられる。備前焼第Ⅴ期を含み，唐津をほとんど含まないことから，16世紀前半から末の遺構であると考えられる。この期の集落は第１期と同様，幅１ｍ程度の溝に囲まれている。ＳＤ04・06はＬの字に廻り，東・南を区切っている。また，南部にはＳＤ04に平行して，ＳＤ05が走り，ＳＤ05からは南にＳＤ13・08がのびて，南部を東西に区画する。これらの東側にはＳＤ06に平行してＳＤ09・10が走り，東西を区切っている。平行して走る溝ＳＤ04とＳＤ05の間，ＳＤ06とＳＤ09の間は幅1.0～1.5ｍを測るが，ここは道として使用されたものと考えられる。集落の区割りはほぼ第１期と同様であるが，第１期で③地区とされた南部の地区がＳＤ13とＳＤ12によって画され，３地区に分かれる。東から③地区，④地区，⑤地区とする。①地区においてはＳＢ02がみられる。ＳＢ02は４間×３間で，床はもたない。②地区においては掘立柱建物は復元できなかったが，南部に多数の柱穴が検出されたことから，ここにも建物があったものと考えられる。また，③地区においては１間×１間以上のＳＢ10がみられる。④地区においては３棟の掘立柱建物，⑤地区においては４棟の掘立柱建物がみられる。これらの建物は重複するが，前後関係は不明である。また，建物の南部は調査区外に及ぶため，建物の構造も不明である。なお，２基の井戸がみられるが，これらはいずれも①・⑤地区の西部で，屋敷を区画する溝の西側に掘られている。

Ｃ地区　この期には屋敷地が検出されたが，屋敷地の営まれる以前のＣ地区は畑として利用されていた。この畑の時期については不明である。畝の方向はＳＤ05に直交し，ＳＤ03・04に平行する。また，ＳＤ05は第１面よりも下層からの掘り込みであることから，ＳＤ03・04・05は畑と同時併存していたものと考えられる。このことから，ＳＤ03・04・05は屋敷地形成以前から機能していたもので，ＳＤ03・04・05は屋敷地を囲むためだけのものではなく，畑を潤すための灌漑用水路として掘られたものであることがうかがわれる。また，屋敷地の東を区切るＳＤ20もその掘り込みは第１面よりも下層からで，畑の存在した時期にはすでに掘り込みがみられたことが土層断面から確認された（第143図）。なお，この畑は洪水により数回廃絶しており，その度ごとに作り直されていたことが確認されたが，畑形成の上限の時期については不明である。

第2期に営まれた屋敷地の東部はＳＤ20とＳＤ05によって区切られ，西部はＳＤ04によって区切られる。また，屋敷地の中央をＳＤ05がＬ字形に南北から東西方向に走り，屋敷地内を南北に分ける。また，ＳＤ05からはＳＤ03・04が南北方向に走り，Ｃ地区の北部は2つに分けられる。また，南部においてもＣ－1区とＣ－2区との境界付近を走るＳＤ76によって区切られており，Ｃ地区は合計4つに区切られている。溝で区切られた屋敷地内の中で，北東部にあたる地区を①地区とし，右回りに②，③，④地区とする。④地区においては掘立柱建物の復元は不可能であったが，多数の柱穴・小穴が検出されていることから，建物があったものと考えられる。①地区においてはＳＢ03～09の7棟の掘立柱建物が検出された。②地区においてはＳＢ10～15の6棟の掘立柱建物，③地区においてはＳＢ01・02の2棟の掘立柱建物が検出された。

①地区の7棟の掘立柱建物の主軸方位は2方向に分かれ，それぞれＮ－1°－Ｅ，Ｎ－13°～16°－Ｅを測る。同じ主軸方向の建物の配置は重複してしないことから，同時期に併存したものと考えられるので2時期の建物であると想定され，それぞれ4棟，3棟ずつ並んで建てられたものと考えられる。この2方向の建物群の新旧関係については先述したとおり，下層の畝溝の方向と主軸方位を同じくするＳＢ03～05がＳＢ06～09よりも古いものと考えられる。なお，この建物の存続時期については時期の古いＳＢ03～05を第2期－1，新しいＳＢ06～09を第2期－2とする。

第2期－1において①地区では北西部に，最も規模が大きく床をもつ建物でＳＢ03があり，その南側には1.2m離れて西側に廂をもつ3間×2間のＳＢ04がある。また，ＳＢ03の東隣には3間×2間以上のＳＢ05がある。ＳＢ05の南側には雨落ち溝と考えられる幅が狭く，浅い溝が数本ロの字状に廻っていることから，この場所にもＳＢ03～05と同時期に併存した建物が存在した可能性も考えられるが，建物の復元は不可能であった。これら4棟の掘立柱建物の中で床をもつのはＳＢ03だけであることから，この建物は居住用で，3棟の中で最も中心となる建物であると考えられる。ほかの2棟についてはその性格は不明であるが，2棟のうち1棟は納屋である可能性も考えられる。なお，建物群の西南部には柵ＳＡ03が廻り，柵の外側には幅が狭く，浅い溝であるＳＤ25，ＳＤ35がみられる。また，建物の東側を流れるＳＤ20の西岸には建物との間に柵がみられる。

第2期－2においてもほぼ同様で，北西部には床をもつ5間×2間以上の掘立柱建物ＳＢ06がみられ，その南には3間×3間のＳＢ07があり，北東部には3間×2間のＳＢ08，その南にはいびつな建物ＳＢ09がみられる。柵も第2期－1とほぼ同様Ｌ字形に廻る。また，建物の東側を流れるＳＤ20の西岸には建物との間にＳＡ06～08の3本の柵がみられる。

また，①地区においては3基の井戸がみられるが，出土遺物が少量であるため井戸と掘立柱建物の併存関係については不明である。なお，3基の井戸は建物群に対して南から南東の方向に位置する。また，①地区の集落域は1つのまとまりをもつ建物群であるが，この建物に関する土地の領分はＳＡ03・04，ＳＤ25・35によって区切られた部分で，南側と西側に関しては道などとし

第２期－１（ＳＢ02，ＳＢ03～05，ＳＡ03以外の建物，井戸，小溝の併存関係は不明）

第２期－２（ＳＢ01，ＳＢ06～09，ＳＡ04以外の建物，井戸，小溝の併存関係は不明）

第372図　Ｃ地区第１面　集落の変遷（1/600）

て利用されていたものと考えられる。

②地区においては６棟の掘立柱建物が検出されている。建物の重複より少なくとも３時期にわたる建物であることがわかるが，そのセット関係や①地区の掘立柱建物との併存関係については不明である。建物規模は５間×２間，３間×２間，２間×２間，２間×１間で，①地区の建物よりも規模は小さい。また，積極的に束柱と考えられる柱が見当らないことから，おそらく床をもたない建物であると考えられる。建物は居住用であるか，納屋であるかは不明であるが，ＳＢ15は５間×２間の細長い建物であることから，家畜小屋の可能性もあると考えられる。

③地区においては２棟の掘立柱建物が検出されている。この２棟の建物は重複する。先述のよ

うに排水溝の新旧関係からＳＢ02よりＳＢ01のほうが新しいことがわかる。この２棟はいずれも２間×２間である。建物の中心には束柱と考えてもよい柱が存在することから，床をもつ可能性もある。水汲み場の可能性があるＳＸ01は建物の北西の方向にあたる。なお，この２時期の掘立柱建物の新旧の建て替え時期が①地区の第２期－１と第２期－２の建て替え時期と全く一致するとは考えられないが，掘立柱建物の方向が①地区の建物とほぼ一致することより，③地区における新旧の２時期の建物はそれぞれ①地区の第２期－１，第２期－２の建物とおおよそ併存していたものと考えられる。

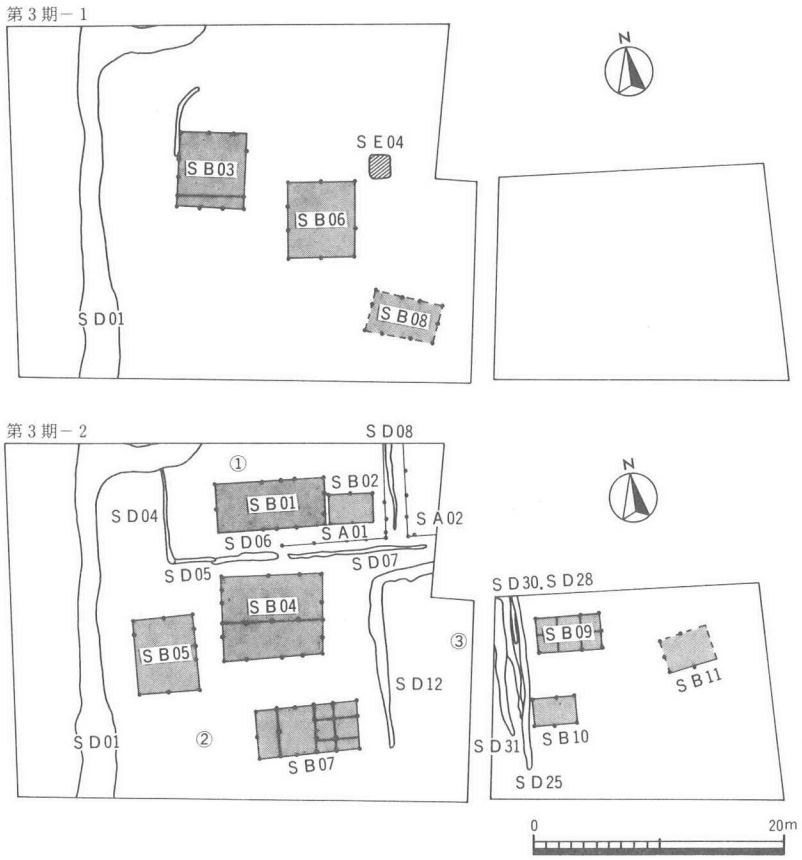
また，生活水を得るための井戸は①地区にはＳＥ04・05・06と３基みられる。③地区においてはＳＤ04の南東部にコの字状に膨らむＳＸ01がみられる。ＳＸ01は深さ0.2mを測るが，おそらく用水路で運ばれてきた水を汲むための遊水池であったものと推定される。したがって，Ｃ地区の屋敷地内で井戸は①地区と③地区にあり，この２地区が最も居住に便利であったものと考えられる。

以上のように第２期－１・２においてＣ地区内の集落の４地区の中で最も中心になるのは，規模の大きな３～４棟の建物がまとまり，井戸をもつ①地区で，③地区の建物も居住用の可能性が高いものと考えられる。

第３期　16世紀末から17世紀代

Ｄ地区　Ｄ地区の第１面においては遺構の主軸方向は４つに分かれる。ＳＢ01・02・04・05・07・09・10とＳＢ03・06，ＳＢ08，ＳＢ11の４方向である。おそらく建物の主軸方向が併存関係を示すものと考えられるが，ＳＢ08・11についてはそれぞれ同じ方向の遺構がほかには認められないことから，少し方向は異なるが，ＳＢ01・02・04・05・07・09・10とＳＢ03・06のいずれかの時期に併存するものかもしれない。ただし，ＳＢ08の西端の一部はＳＢ07と重複することから，この２棟の同時併存はありえないので，ＳＢ08はＳＢ03・06と併存した可能性のほうが強い。また，少し東に外れた掘立柱建物ＳＢ11の主軸方向はＳＢ01・02・04・05・07・09・10と似ることから，これらの建物と同時期に併存した可能性も考えられる。なお，第１面の中でもＳＢ01・02・04・05・07・09・10の主軸方向は溝ＳＤ04～08の方向と一致することから，これらは同時期のものであろう。ＳＢ03の北西より小溝が北東方向に湾曲して伸びるが，この溝は位置からＳＢ03の排水溝であると思われる。この溝はＳＤ04・05に切られている。ＳＤ04・05はＳＢ01・02と同時期のものであると考えられることから，ＳＢ01・02・04・05・07・09は，ＳＢ03・06よりも新しいと考えられる。

このようにＤ地区においては２時期の掘立柱建物のまとまりがみられる。このまとまりをそれぞれ，第３期－１，第３期－２とする。なお，集落内では井戸はＳＥ04の１基がみられる。ＳＥ04はＤ－２区からＤ－３区にかけてコの字状に廻るＳＤ12と重複し，その切り合い関係からＳＤ12はＳＥ04よりも新しいことが確認されている。ＳＤ12はＳＢ01・02・04・05・07・09・10と平



第373図　Ｄ地区第１面　集落の変遷（1/600）

行に走り，同時期に併存したものと考えられるので，ＳＥ04は第３期－２のＳＢ01・02・04・05・07・09・10と併存せず，第３期－２のＳＢ01・02・04・05・07・09・10築造以前に埋没したものと考えられる。おそらくＳＥ04は第３期－１のＳＢ03・06と併存したものと考えられる。

第３期－１はＳＢ03・06とＳＥ04，及びＳＢ08が含まれる可能性がある。２ないし３棟の掘立柱建物と井戸によって構成される。柱穴は多数検出されていることから，実際にはもう何棟か建物が存在した可能性が強い。ＳＢ03は３間×３間で，南に廂をもち，土間と考えられる建物である。ＳＢ06は３間×２間で，これも土間の建物であると考えられる。井戸は建物の北東側に掘られている。

また，第３期－２においてはＳＢ01・02・04・05・07・09・10とＳＤ04～08・12，及びＳＢ11が含まれる可能性がある。７ないし８棟の掘立柱建物と溝によって構成される。掘立柱建物は溝によって区切られており，いくつかの地区に分けることができる。ＳＢ01・02はＳＤ04～08にコの字状に取り囲まれており，１つのまとまりをもつ。ここを①地区とする。また，ＳＤ05・06・07で南北を区切られ，東西をＳＤ12で区切られる位置に３棟の建物がみられる。ここを②地区と